

バイオハザード～破滅 へのタイムリミット～

遊妙精進

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラクーンシティでバイオハザードが発生した。そこに一人の少年が訪れる。

彼には一人で背負うには重すぎる運命が課せられていた。

仲間を、身体を喪っても、彼は戦い続けていく。

目次

プロローグ

0 話	S・T・A・R・S	1
1 章	ラクーンシティ	
1 話	ラクーンシティ	13
2 話	タイラント	20
3 話	目的	31
4 話	決意	40
5 話	アンブレラ	49
6 話	脱出	60
2 章	CODE:Veronica	
7 話	ロックフォート	74
8 話	T-Veronica	86

3 章 黙示録

9 話	救出	100
1 0 話	学園	108
1 1 話	仲間	117
1 2 話	分断	126
1 3 話	再会	140
1 4 話	銃	147
1 5 話	油断	157
1 6 話	S・T・A・R・Sの才女	170
1 7 話	別れ	179
1 8 話	帰宅	192
1 9 話	研究所	203

20話	真実	217
21話	絶望	226
22話	親友	240
番外編		
	みんなで海水浴!	256
266	クレアと買い物! / 小室の悩み!?	
	学年順位! / 記者の仕事!	277
	正月 / リツカーさんの不運	287
4章 GAIDEN		
23話	スターライト号	297
24話	大男	305
25話	ルシア	314

26話	微かな疑問	325
27話	ナイフと銃弾	334
28話	沈没	349
5章 オペレーション・ハワイエ		
29話	情報屋	364
30話	放水施設	375
31話	末路	385
6章 アンブレラ終焉		
32話	コーカサス研究所	400
33話	アリスとエージェント	408
34話	イワン	417
35話	取り残された二人	427

36話 終焉

436

7章

番外編2

演奏／B・S・A・A・新メンバー

37話 墜落

539

447

ショッピングモールでの戦い 前編

38話 ガナード

546

456

ショッピングモールでの戦い 後編

39話 古城

555

463

バイオテロをふせげ!

564

40話 チャイナドレスの女性

572

登場人物紹介

581

8章 リベレーションズ

嫌な取材／大学の先生

バレンタインデー 前編

バレンタインデー 後編

43話 テラグリジア・パニック 前

編 44話 テラグリジア・パニック 後

531

602

前

45話	雪山	609
46話	グロブスター	629
47話	ウーズ	640
48話	六年前	649
49話	子供たち	661
50話	紫藤	671
51話	成長	681
9章	ダイジェネレーション	
52話	空港	696
53話	発見	704
54話	ウィルファーマへ	717
55話	利用	725

10章	戦う意味	
56話	傭兵部隊	741
57話	敗北	751
58話	シカゴ	763
59話	それぞれの想い	774
60話	“普通”	783
61話	諦めない	792
62話	自分で決めた	802
番外編3		
結婚式		818
B・O・W・オークション		825
スペンサー邸／仲間の墓		835
希里ありすの今		843

1
3
章

9 7 話	再起	9 6 話	妹	9 5 話	復讐	9 4 話	ヒーロー	9 3 話	両親の死	9 2 話	思い出話	9 1 話	“皆”で	9 0 話	裏切り者	8 9 話	特殊部隊	8 8 話	邪魔	8 7 話	ヒーローじゃない	8 6 話	終わらない地獄

124612341223120811991187117711611145113211161110

1269	9	1258	9
	9		8
	話		話
	イド		イド
	ニア		ニア
	共和国		共和国
	後編		前編

プロローグ

0話 S・T・A・R・S.

「いや、すごいねえ。本当に優勝しちゃうなんて」

俺は、茶髪の新セミロングの頭にサングラスを掛けた女性から褒められた。この女性の名前は聞いていない。随分と長い付き合いになるが、別に知っても知らなくてもどうでもいいからだ。

「はは、まあこれでも三回優勝していますからね」

使い慣れない敬語を何とか使う。歳上の人と話すときは普通敬語だが、いざ話すとなると、案外難しいものだ。

一体何で優勝したかという、アメリカの射撃大会である。俺は射撃が大の得意なのだ。

長い休暇があると、いつもアメリカのどこかの町で射撃大会に参加する。今回はゴールデンウィーク、アメリカに射撃大会と観光目的で来た。メインは射撃大会である。

「それより早くラクーンシティに行った方が良いんじゃないですか？」

「そうね。君のバイクで送ってくれる？」

「嫌ですわね」

あからまきに嫌な表情をして言ったはずだが、彼女はものともしていない。

彼女は日本の記者であり、雑誌の『アメリカ警察特殊部隊特集』の取材でわざわざアメリカまでやってきたのだ。ゴールデンウィークも仕事とは……大人つて大変なんだな。

「もう！ リョウくんのケチ」

「はいはい」

リョウ、というのは俺の名前で、フルネームは黒瀬 涼（くろせ りょう）。日本の高校一年生だ。自分で言うのもアレなんだが、不良生徒である。

「それにしても、剣道、柔道、空手、合気道に加えてまさか射撃まで上手いとはね。これは特大スクープものですよ」

はあ、うざい。

いや、まあ、俺の運が悪いのがいけないんだよ。まさかアメリカ行きの飛行機で隣同士になるとは……。前から知り合いだったせいで絡まれて射撃大会にまで付いてくるし。

「あの、早く行ってください。何でしたっけ？ そうそうS. T. A. R. S. の方を待たせてしまいますよ」

ラクーンシティの警察の特殊部隊の名前がS・T・A・R・S・というらしい。ラクーンシティはここから近くにある街だ。薬品製造企業アンブレラ社の工場が発展したらしく、郊外にあるアークレイ山地で有名だったな。今度暇があったら行ってみるか。

「ふふん、大丈夫よ。こちとら何年記者をやっていると思うのよ。遅刻なんて絶対にしないわ」

「そうですか」

こちらとしては今すぐにでもどこかに行ってほしいんですけどね。

「なあ君、クロセ」

背後から誰かに話しかけられた。

見ると、この大会準優勝のクリス・レッドフィールドさんが立っていた。

「はい？」

「クロセはここら辺に住んでいるのか？」

「いえいえ、日本ですよ」

日本の東京ですよ。

「そうか。日本にも凄い子供がいたもんだな」

「はあ」

「俺はクリス・レッドフィールド。ラクーンシティで警察の特殊部隊をやっている」

あちら、警察の方でしたか。て、ラクーンシティ？

「本当!？」

記者さんがレッドフィールドさんに飛び付いた。

「S. T. A. R. S. のクリス・レッドフィールド!？」

「ああ、そうだが。……まさか日本から取材に来るっていう記者は……」

「もちろん私よ!!」

「ほうほう。なるほどねえ」

レッドフィールドさんは記者さんに猛烈な取材を受けている。場所は近くのファーストフード店。何故か俺まで付き合わされる始末である。俺の折角の予定が大狂いだ。

レッドフィールドさん曰く、『取材と射撃大会が被っていたし取材が面倒だったのでほとぼりが冷めるまでこの街で時間を潰そう』と思っていたらしい。そこを運悪く記者さんに見つかってしまったというわけだ。うん、半分俺のせいだな。

「これで取材は終わりです！　ありがとうございますー!」

「はあ、疲れた」

レッドフィールドさんは背もたれに背を預け、頼んだコーラを一気に飲み干した。よっぽど取材が嫌いなのか？

「それにしても空軍に所属していたなんて」

取材中にわかつた出来事だ。

「ああ。軍でも一般の大会でも射撃の腕は良い方だと思っていたんだがな。まさか日本の高校生に負けるとは思っていなかった。それで少し話を聞こうとしたらこの様だ」

「そりゃ残念」

半分じゃない、完全に俺のせいだな。取材から逃げようとしたこの人が悪いんだが。

「ふふふ、私は運が良いわ。ラクーンシティまで行かなくても取材が済むだなんて。後は観光を楽しむだけね」

本人の前でなんつーことを言いやがるんだ。

俺は残っていたコーラを一気飲みする。飲み終わると、突如ババババ!! と何発もの銃声が店内に響いた。

「キヤー!!」

「ウワー!!」

店にいる店員や客が叫ぶ。

特に驚いていない俺は上着の中に手を入れ、黒塗りのサバイバルナイフを取り出す。えっ？何で持っているかって？ そりゃアメリカは危険だからね。今まで何回撃たれたことやら。

「てめえら!! 静かにしろ!!」

銃声を響かせた犯人たちが姿を見せた。

全員で五人。五人とも覆面を被っており、その手にはマシンガン、胸にはナイフ、腰には手榴弾をつけている。

「てめえら、金を出せ! 抵抗すると撃つぞ!」

ああ、怖い怖い。これだからアメリカは……日本でも同じことあるな。違うところと例えば、銃が全部本物なことか。日本はナイフとか本物だとしてもハンドガン程度だが、こちらは簡単に手が出せないような武器となっている。

どうやら強盗は二人がレジ担当。他二人が客担当、もう一人が見張りのようである。客担当の二人は、客のバッグごと取り、黒い袋の中に入れていく。客からも金を取るなんて何て奴等だ。

まあ、流石に銃持ち五人が相手だと俺だけじゃ無理だ。日本だったら銃が偽物とかあるけど、アメリカじゃ銃を手に入れるのは簡単だからな。全部本物だろう。

俺は強盗たちを威嚇させないようにナイフを上着の中に戻した。

(あいつらは巷で有名の強盗団だ。店と客両方から金を奪い取り、最後は店内に手榴弾を投げるくそ野郎共だよ)

レッドフィールドさんが小声で話す。

(じゃあ私たちは金を取られる挙げ句、殺されるかもしれないってこと?)

(まあそうだな)

……もう馴れたが毎度毎度、運が悪いな。つい最近日本で銀行強盗に襲われたばかりだぞ。俺の運の悪さは世界一位なんじゃないかと本気で思う。

(リヨウくん、何とか出来ないの?)

(無理。銀行強盗のときは銃が本物じゃないってわかったから良いけど、こっちは全部本物だ)

しかも俺の武器はナイフだけ。ナイフが五本もあれば良かったんだけど。

(クロセ、戦えるか?)

(ええ。それなりにね)

そういうえば、こっちには元空軍で今は警察の特殊部隊の男がいるじゃないか。

(今から言う作戦、危険度は大だが、手榴弾で死ぬよりはマシだろ)

(従いますよ。こっちも日本でやり残したことがたくさんあるので死ぬませんからね)

作戦その一、俺たちの金を奪いにくる二人を俺が相手をする。

作戦その二、その間にレッドフィールドさんが自分の銃でレジにいる二人を撃つ。

作戦その三、見張りを撃つ。

うん、良い作戦だ。大分ざっくりしてるけど。

こつちは日本で何度も死闘をしているんだ。相手が軍人じゃなければ接近戦で負けなし、強盗さんも軍の訓練を受けているとも思えない。

「おい、バッグか財布を出せ」

男二人が俺たちのテーブルまで来た。一人の男は袋を俺たちに突きだし、もう一人は、俺たちがていこうできないように銃を構えている。

記者さんはバッグを黒い袋の中に入れる。

「お前らもだ」

その瞬間、レッドフィールドさんから膝をつつかれた。

よし、ボコるぞー。手加減は無しで。

俺は財布を渡す動作をしながら、上着の中に手を入れる。

そして、黒い袋を持っている男の顔に財布をヒュツと投げ、上着から取り出したナイ

フで銃持ちの男の利き手を斬り上げる。

「ぐっ」

「げっ!？」

背後から椅子が倒れる音。レッドフィールドさんが立ち上がったんだらう。

銃持ちは利き腕を斬られたせいで銃を手から放し、床に落とす。俺はナイフをバッグの男の太ももに刺し、ナイフから手を離して、銃を落とした男の胴体に両手のラッシユを加える。

ナイフを刺された男の叫び声とともに、乾いた二発の銃声がすぐそこから聞こえた。レッドフィールドさんの射撃の腕ならたかが十数メートル、外すことはない。実際に射撃大会でその腕を見せてもらった。確信している。

男にラッシユを加え終え、胸ぐらと腕を掴み、足を押さえている男の方へと背負い投げ。足を押さえている男は八十キロほどの体重に押し潰され、意識が飛んでいった。

ちようどその時、またもや背後から銃声が一発。見張りを撃つたのだろう。男の短い悲鳴が聞こえた。

「ふう、これで終わり? 増援とか来ないよね?」

「ああ。こいつらは五人グループだからな。被害者を出さずに良かったよ」

安堵の息を吐く。レジの方を見ると、呆然とした店員と、床には強盗三人が仲良く

呻き声をあげながら痛みで苦しんでいた。

「アメリカの警察はよく殺すと思ってたけど」

「確実に皆を救うためなら殺した方が良かったんだがな。君もいるから大丈夫かと思つた。結局は死刑だろうが」

「いやー、やつぱりリヨウくんはすごい！ ヒーロー！」

記者さんは笑いながら肩を叩いてきた。……この人本当に日本人か？ 普通ならキヤーキヤーギヤーだろ。まあ、叫ばない方が、うるさくなくていいけど。

あれから数分で、警察の車が何十台も集まり、俺たちは保護された。もちろん長い事情聴取付きだ。強盗と体調不良を訴えた客の何人かは病院に運ばれていった。多分、死にはしないだろう。多分だがな。

「ああー、長かったな。事情聴取」

俺はぐつと背を伸ばす。今まで何回事情聴取を受けたことやら。しかし、日本以外で事情聴取を受けるのは新鮮だ。

ロビーまで行くと、レッドフィールドさんと青い帽子を被ったシヨートヘアの女性が

話していた。女性の服の左肩にはS・T・A・R・S.と書かれている。

「お、リヨウ、終わったか」

レッドフィールドさんは俺に気付き、駆け寄ってきた。

「はい。色々と聞かれましたよ」

警察官にはこつてり怒られ、そして若干褒められた。

「ちよつと、クリス！ まだ話は終わってないわよ」

「紹介しよう。ジル・バレンタインだ。こいつもS・T・A・R・S.のメンバーだ」

S・T・A・R・S. って若いメンバーもいるんだな。

「どうも、クロセ・リヨウです。今回はレッドフィールドさんのお陰で助かりました」

「そう……こんな子がクリスと一緒に強盗を撃退したのね」

バレンタインさんは信じられないという表情をしている。

「射撃大会では俺を抜いて一位だからな。将来は有望そうだよ」

いやー、それほども。

「クリス、そろそろ行くわよ。仕事をサボってまで射撃大会まで行って。サボった分はしつかり働いてもらおうわ」

この人、仕事をサボってたのか。あ、そもそも取材の日だったな。

レッドフィールドさんはバレンタインさんに引つ張られていく。

「リヨ、リヨウ、九月二十九日にまた別主催の射撃大会がこの街であるんだ。出場しないか？」

「ええ。俺の優勝ですけど。レッドフィールドさん、それまでお元気で、バレンタインさんも」

「俺の事はクリスマスでいいぞ。それに次は負けなからな」

「クリスマスさん、さよならー」

クリスマスさんはバレンタインさんに引つ張られ、車に乗せられ、去っていった。女には勝てないとはこういうことだな。

「いやー、クリスマスさんとジルさん、良い写真を撮らせてもらったよ。この写真は雑誌の表紙で決定かな」

何処からともなく記者さんが現れた。

「九月二十九日か。よーし」

学校があつたらサボって行こう。そしてラクーンシティにも行ってみるか。

1章 ラクーンシティ

1話 ラクーンシティ

「いやー、星が綺麗だなー」

アメリカの中西部にあるラクーンシティまでの一本道。その途中で見つけた休憩所で俺はバイクを止め、自動販売機で買ったコーヒーをすすりながら空を見る。

既に時間は夜、空にはいくつもの星が輝いている。都会じゃ観れないほど綺麗な星だ。

「……はあ」

ついため息を漏らしてしまった。今日は九月二十九日、クリスさんとの約束の射撃大会の日であったが、射撃大会にクリスさんは訪れなかった。結局俺の優勝である。

折角三連休を使ってまでアメリカに来たというのに、誘った本人が姿を現さないというのはちよつとひどい。もしかしたら、クリスさんも本気で来るとは思っていなかっただけかもしれないが。

というわけで、ラクーンシティまで行って、クリスさんに一言文句を言うのだ。それだけで俺の不満は解消されるだろう。多分。

コーヒーをすすっていると、俺が来た方からバイクが来るのが見えた。そのバイクは俺のすぐ隣に停まった。

「あなたもラクーンシティに？」

運転手は、まだ二十歳いかいかかないかくらいのポニーテールの女性で、赤を強調とした服を着ており、左肩には鞆に入れたナイフを付けている。

「はい。知り合いの男性に文句を言おうと思つてまして」

「私もそんなところよ。兄さんを探してるの」

「そりゃごくろうさんですね。俺の名前はクロセ・リョウです」

ま、自己紹介は基本だ。

「私はクレア・レッドフィールドよ」

「……………」

レッドフィールドねえ。まあ同じ名字の人なんかたくさんいるしな。

そう思っていると、クレアさんの肩のナイフが目がついた。

「あの、クレアさん……そのナイフ……」

俺はクレアさんのナイフに指を差す。

「ああ、これ？ 護身用よ。兄さんがくれたの」

ナイフの鞘にははつきりとS・T・A・R・Sと書かれてあった。

「もしかして、探している兄さんって、クリスマス・レッドフィールド?」

「え!? そうだけど、兄さんの知り合い?」

「やっぱりか。というか、警察の支給品をあげるなよ、クリスマスさん……」

「はい、俺の目的もクリスマスさんに会うことなんですよ」

「会うというか文句を言うのだが。」

それにしてもまさか、妹さんとも会うとは……妙な出会いだなあ。

よくわからんが、すっかり意気投合した俺とクレアは、バイクを走らせラクーンシティまで向かった。

ちなみに、俺は前回の反省を活かし、今回は色々と準備をしてきたのだ。

何があってもいいように、リュックの中に無線機や非常食やらのサブバイバルセットが入っている。そして、上着の内側には、前回はナイフ一本だけだったが、今回は増やして増やして八本だ。

いや、まあ、強盗に巻き込まれるなんてそうそうない、と思うだろうが、俺はそうそうあるんで、こんな準備が必要なのだ。これで強盗やらテロリストと戦う際もナイフを

投げて終了である。欠点としてナイフが八本しかないの、遠距離の相手はナイフを投げて八人しか対処が出来ないところだ。まあ、しょうがない。服がこれ以上重たくなっちゃうの嫌だもん。

ラクーンシティに入ると、意外と周りは静かだった。灯りは付いているのに、人の気配がない。不気味だ。栄えている街だと聞いていたんだが……

「そこで飯を食べましょ」

そこにはちようどレストラン。俺も飯を食べていなかったんだ。

クレアはバイクを停める。俺も同じようにしてバイクを停め、クレアと共にレストランの中に入る。

「こんばんはー」

店内には誰もおらず、しかも椅子やゴミが散らかっていた。元からこうなのか、それとも誰かに荒らされたのか。だが、埃が積もっていないので、店内が散らかったのはつい最近だ。

「誰かいなの?」

クレアは呼び掛け、奥の方へと行く。

俺は店内を見回すと、ちようど真下の床に赤い液体が付着しているのに気が付いた。

「これは……」

しやがんで、赤い液体に触れて匂いを嗅ぐ。微かに鉄の匂い。

「きやあ！」

と、クレアの声。

「クレア!?!」

俺は立ち上がり、クレアを見ると、クレアは後退りをしていた。

服が血だらけで白目を剥いており、顔が真っ青な男がクレアにゆっくりと近づいていく。

「クレア！ 下がれ！」

俺はクレアを後ろに下がらせ、両手を構えた。

男は呻き声をあげており、両手で掴み掛かろうとしてくる。

「何だ？ 薬物中毒者か？ とりあえず止まってくれ」

そう注意するが、男は止まる素振りを見せない。

しようがない。この店の散らかりようと、この男の服の血のこともあるし、何かの事件が起こっていることは確かなようだ。気絶させて警察に突きだそう。

俺は、男の胴体を一、二と殴り、体をよろめかせる。男の爪先がほんのすこし上がったのを見計らい、足を払うように蹴る。それだけで、男の体はくるんと宙を回り、その体を床に叩きつけた。

まあ、こんなもんである。

「倒したの?」

「ああ」

俺は警察に電話しようとポケットから携帯を取り出す。

「リョウ、見て!」

なんと、先ほど倒したはずの男が立ち上がろうとしていた。

「なっ!?!」

確かに殺さないように手加減はしたが、それでも気絶させるほどの威力はあったはずだ。それなのに何故?

「後ろ!」

クレアに肩を叩かれドアの方を見ると、顔を真っ青にして白目を剥いている人間が何人もドアに張り付いていた。

「ここは薬中の町か!?!」

「裏口から逃げるわよ!」

前と後ろで囲まれては分が悪い。俺は裏口のドアを思い切り開ける。

「あっ」

目の前には、銃を構えた男が立っていた。

「ま——」

「しゃがめ！」

待て、撃つなど言おうとしたが、銃を持った男の命令に従い俺とクレアはしゃがんだ。パン！ と一発の銃声。俺は立ち上がり後ろを見ると、先ほど男の頭が銃弾で貫かれていた。

銃を持った男をよく見ると、金髪で警官の格好をしており年齢も若い。

「こつちだ！」

警官の声は緊迫している。どうやらヤバいことになっているようだ。

俺たち三人は路地裏を駆ける。

2話 タイラント

俺たち三人は、薬物中毒者の大群をくぐり抜ける。

「どこに向かうんだ!？」

「警察署だ! あの車に乗ろう」

警察官がパトカーを指差す。

中毒者は、いつの間にかどんどん数が増え、このままじゃ囲まれる勢いだ。

「迷っている場合じゃなさそうだ」

警察官とクレアは前の席へ、俺はクレアの後ろの後部座席に乗る。

警察官は、大急ぎで車を発進させた。

俺はふと左を見ると、顔を真っ青にした人間が乗っていた。しかし、服は血だらけで

ピクリとも動かない。死んでいるのだろうか。

「どうなっているの?」

「さあな。たった今着任した所さ」

そりゃ不幸なことだ。

窓から外を見るが、さっきのような奴等が外を彷徨っていた。これじゃまるで映画の

あいつらのようだ。

「俺はレオン、レオン・S・ケネディだ」

「私はクレア・レッドフィールドよ」

「クロセ・リヨウだ」

簡単な自己紹介を済ませる。

「クレア、ダツシユボードの中を」

クレアはダツシユボード開ける。

「……銃があるわ」

「それが君の武器だ。リヨウは銃を持っているか？」

「いいや。でも大丈夫だ。ナイフならたくさん持つてる。これを投げればいいさ」

まあ、銃を人に撃つのは抵抗があるしな。今はそれを言っている場合じゃないが。何

故かテロリスト相手にも引き金を引くことを躊躇してしまう。

その代わりナイフなら全然大丈夫だ。斬ったり刺したりなんて迷わずやれる。ほん

と、何でだろうな。

「警察署までもう少しだ」

レオンさんがそう言った直後、

「アア〜」

さっきの死んでいたと思っていた奴がいきなり動き出してレオンさんにしがみついた。

「ぐ、くそー！」

男をレオンさんから引き剥がそうとするが、すごい力だ。

ついには、車がスリップして電柱にぶつかり止まってしまった。男は車が電柱にぶつかった衝撃で後部ガラスを割り、外に飛んでいった。

「だ、大丈夫か？」

「ええ。何とか」

「ひでえ痛みだ」

車は動かなくなってしまった。ここからは徒歩か。

「まずいわ！ トラックがこっちに来る！」

後ろを見ると、大型トラックが車を突き飛ばしながら俺たちのもとへと一直線で向かってきていた。

「逃げろ!!」

俺たちはすぐさま車のドアを開け、脱出する。その直後、トラックが俺たちがさっきまで乗っていたパトカーを踏み潰し横転。しかもそれだけではなく、ガソリンに火が引火し、トラックが大爆発を引き起こした。

「がア、くそ！」

咄嗟に伏せたお陰で爆発には巻き込まれなかったが、ひどい耳鳴りだ。今すぐ耳を引きちぎりたい。

「リヨウ！ 大丈夫?!」

クレアが俺に近寄ってきた。

「ああ。何とか」

俺はクレアの手を借りて立ち上がる。

「クレア！ リヨウ！ 聞こえるか!?!」

レオンさんの声が、炎で燃えているトラックの向こうから聞こえてきた。

「こっちは無事よ！」

「警察署へ逃げ！ 俺も行く！」

「わかったわ。気を付けて！」

そう言って、俺はナイフを、クレアは銃を構える。

目の前にはあれだ、その、ゾンビがたくさんいるよ。もうゾンビでいいや。似てるしね。

「警察署の裏口よ。一気に駆け抜けるわ」

「おう！」

俺は、進行に障害があるゾンビを投げ飛ばしながら走る。クレアはゾンビの頭を正確に撃ち抜いていく。

「上手いね。クリスさんから？」

「ええ。兄さんに色々教わったわ」

兄の方も頼もしかったが、妹の方も頼もしい。しっかりした兄妹のようだ。

俺たちは警察署の裏口を開け、中に入る。

「アアアアア」

「ウアアアアア」

ゾンビの呻き声があちらこちらからする。どうやら警察署も安全ではないみたい。

「ガアアアア」

警察官ゾンビが襲い掛かるが、腕をひよいと掴んで投げ、壁にぶつける。

「……………」

こいつらはゾンビのような行動をしているが、触れてみると、しっかり熱がある。熱いぐらいだ。映画のように死体が動く、というわけではなさそうだ。死体が動く時点でおかしいわけだが。

「リョウ、こつちよー！」

クレアが開けたドアから進み、警察署の中へと入る。

細い通路だ。ゾンビが正面から来ても通り抜けは出来ない。

「クレア、懐中電灯だ。それに栄養食品」

周りにゾンビがないことを確認し、リュックから道具を出してクレアに渡す。

「ありがとう」

残念ながら無線機は一個しかない。リュックでは身動きが取りにくいので、死体になった警察官のサイドバックを取って必要な分だけを入れる。

そうこう作業をしていると、パラパラとヘリのプロペラ音がしてきた。

「近くにヘリが!？」

その直後、この通路の天井を何かが突き破った。

辺りに砂ぼこりが舞う。

「ゲホゲホッ、一体何!？」

「あれは……」

俺たちの前には、人がいた。

いや、違う。

スキンヘッドで灰色の肌、身長は二メートルを越えており、全身をコートで包み込んでいる。

「人間じゃねえ!!」

スキンヘッドは俺たちにダツシユで近づいてくる。

「なっ!!」

咄嗟のことで、俺は反応できず、スキンヘッドのタツクルをもろに喰らい、数メートル吹き飛んだ。

「リョウ!!? この!!」

クレアは、スキンヘッドに銃弾を撃ち込むが、全然効いていない。あのコートは防弾チヨツキの役割もしているようだ。

「くそ! このタイラントが!!」

俺は立ち上がりスキンヘッドの胴体にナイフを投げる。ナイフはコートに刺さるが、コートが厚く、肌には届いていないようだ。ちなみにタイラントとは日本語で『暴君』と言う意味だ。こいつにぴったり。

タイラントは一言も発さず、ゆっくりと近づいてくる。

後ろに逃げても外に出ればゾンビ、正面にはタイラント。

「クレア、俺が隙を作る。一気に向こう側まで走り抜けてくれ」

「そんな、無理よ。一緒に逃げましょう」

クレアはそう言うが、二人一緒に駆け抜けられるほどのスペースはこの通路にはない。

「大丈夫だ。すぐに追い付く。……絶対だ」

「……絶対だからね」

その言葉を聞き、俺はタイラントに殴りかかる。

「絶対よ！」

その隙にクレアは狭いスペースをくぐり抜けて走っていった。

「よっし」

これで一対一だ。こいつをここで倒す。

いや、逃げてもいいのよ？ でもさ、こいつをほつたらかしくと何処までも追い掛けてきそうなんだよ。そうなれば警察署にいるクレアやレオンさん、その他に生き残っている人も危険に晒されるかもしれない。そんな奴をほつたらかしに出来ないだろ。

タイラントは素手で殴りかかるが、それをひよいと避ける。こいつはちよつとでかすぎるので投げ技は出来ないな。

とりあえず隙ができたので、腹に何発もパンチを打ち込む。

「くろう」

手がジンジンする。そういえば防弾チョッキだったな。

蹴りを避け、俺は走って壁を蹴り、タイラントの頭に膝をぶちこむ。

「痛い」

皮膚もそれなりに硬い。

着地して、振り向こうとするが、その前にタイラントに足を掴まれた。

「なに!？」

持ち上げられ、壁と床に叩き付けられる。

「いッてェ」

今ので骨が折れたかも。

しかし、俺は立ち上がる。

「まだまだやれるよ」

☆

「ああ、くそー!」

タイラントはやつと膝を着いた。こっちはもうボロボロだ。動きは単調だが、無表情で無口なので行動が読みづらく何発もパンチを貰ってしまった。

「あととはどめをささないとな」

上着からナイフを取り出す。頭は硬そうだから首に刺せばいいのか？

そんなことを考え、タイラントの真正面に立つ。

「これで終わりだよ」

俺はナイフを大きく振りかざすが、

「……………」

タイラントが無言で立ち上がり 俺に助走なしタックルを喰らわせた。

「いつ!?!」

俺は盛大に尻餅をついた。

すぐに立ち上がろうとするが、タイラントに首を掴まれ持ち上げられる。

「うぐぎ……………」

息が出来ない。手を放させようとするが、力が強い。

このまま、窒息死か首の骨が折れて死ぬかかと思つたが、窓の外に投げられてしまった。

「うおー!」

受け身を取つて着地する。奴がバカなお陰で何とか助かった。

レオンさんとクレアに合流しないといけないが、ドアの前には二十体以上のゾンビが群がっており警察署の中に入れない。さすがの俺でもあの大群をナイフ残り六本で倒せそうにないし、わざわざ大量のゾンビの中に突っ込みたくはない。

ここまでのようだ。俺は無線機をつける。

「レオンさん、いますか？」

〈リヨウか!? 今どこにいる? クレアと合流したぞ〉

〈リヨウ、何処なの!?!〉

「すみません、合流出来なくなりました。俺は自分で脱出の方法を考えます。レオンさん、クレア、幸運を祈ります。運が良かったら街の外で会いましょう」

〈リヨウ——〉

俺は無線を切る。

もう警察署の中には入れなくなつた。あとは街に繰り出すしかない。生存者を助けてこの街からさつさと脱出しよう。

明日には日本に帰らないといけないんでね。

3話 目的

「オラッ！」

バキッと、ゾンビの顔面にグーパンチを叩き込む。

「アアアア……」

ゾンビは何事もなかったかのように立ち上がり、腕を前に伸ばしてゆっくりと近づいてくる。

これで三回目だ。どうやらゾンビは気絶しないみたいだ。映画のように本当に死んでいるわけじゃないから、何度も殴れば気絶すると思ったが。

『アアアアア』

そうこうしている内に、ゾンビが何体も近寄ってきた。

俺はそいつらを見殺し、走る。

警察署から離れて、二時間ほどが経った。

無線や声で呼び掛けるが、人間の反応は一切ない。この街の住民は、全員ゾンビになっただろうか？

「キヤー」

曲がり角の先から、女性の悲鳴が聞こえた。

俺はダツシユで角を曲がる。

「アアアア」

「オオオオオ」

ゾンビが十体ほど何かに群がっていた。隙間から女性の体が貪り喰われているのが見え、俺は数歩後退する。

「オオオ」

後ろからゾンビの声聞こえ、振り向くと、ゾンビが後ろからも十体ほど現れた。

「くそー！ いきなり出てきやがって！」

ゾンビは、動きも鈍いし単調だ。一対一なら負ける要素がない。しかし、それを補うためか、こうやって大群で現れる。

「うらア!!」

ゾンビを掴んでは投げ、掴んでは投げる。投げられたゾンビは周囲のゾンビを巻き込み、ドミノ倒しのように連鎖して倒れていく。

しかし、どこからともなくゾンビはわらわらと出てくる。

「くそー！」

ゾンビに囲まれてしまった。それでも俺は抵抗を止めず、殴り、そして蹴る。ここで死ぬわけにはいかない。明後日には学校に行かないと駄目なんだ！

おっさんゾンビに回し蹴り。吹っ飛び、三体のゾンビを巻き込んで倒れるが、次から次へとゾンビが。

「諦めるわけにはいかないんだよ!!」

そう言った次の瞬間、いくつもの銃声と共にゾンビたちがバタバタと倒れていった。「なっ!!」

前方のゾンビは瞬く間に一掃された。

「こっちよー！」

三人の人間が立っていた。

後ろを見ると、ゾンビが近寄ってきていた。迷っている場合じゃなさそうだ。

俺は前の三人とともに走る。

「あなた、クロセ・リヨウ?」

「ジルさん!」

雰囲気が変わって気が付かなかったが、S・T・R・A・Sのメンバー、ジル・バレンタインさんも一緒だった。

「ジル、知り合いか？」

武装した若い男が言った。背中にはU・B・C・S. とアンブレラ社の傘のマークが書かれてある。アンブレラ社の私設部隊だろうか。

「その話は後にした方が良さそうね」

金髪でウェーブのかかった女性が言った。

正面には、人間と爬虫類の間のような全身緑色の生物が三体、ゆっくりと近づいてきた。爪は発達し、頭から肩にかけて肉腫で覆われている。

「何だ!?! あの化け物は!?!」

と若い男。

あんな生物まで出るとは……。

「ハンターね。前に私が見たのとはちよつと違うけど」

「ハンターβよ。初期とは違って色々と改良されているわ」

ハンターは、同時にジャンプし俺たちを爪で切り裂こうとしてくる。

「喰らいやがれ!!」

若い男は、アサルトライフルをハンターに向かって連射するが、かわされる。

「なんて俊敏性だ!」

それでも男は撃ち続けるが、ハンターは四方八方に飛び回る。

「私に任せて！」

女性はハンドガンを二丁取りだし、左のハンドガンでハンターを狙い、一発撃った。それも避けられるが、彼女は、右手で持っているハンドガンでハンターが避けた先を撃つてハンターの頭に命中させた。

すごいテクニックだ。どこかのエージェントか？

「あと二体よ！」

ハンターの一体が俺の目の前に降りてきて、腕を突き伸ばす。

「よっ」

それを難なくかわし、ハンターが伸ばした腕を両手で掴んで地面に投げる。

「離れて！」

俺はバックステップでハンターから離れ、ジルさんがハンドガンでハンターに弾丸を

喰らわせる。

「お前やるな」

若い男から肩をポンと叩かれた。

「俺だつてただの子供じゃないですよ」

俺はナイフを一本出す。若い男の攻撃をかわしたハンターにナイフを投げる。ナイフはくるくると回転し、ハンターの頭に突き刺さった。

「終わったようね」

俺はピクピク痙攣するハンターに近付き、頭に刺さったナイフを引き抜く。使い捨てなんてもったいない。

「歩きながら話しましよ」

俺たちは、はや歩きで進む。

「私はアリスよ。あなたは？」

「クロセ・リヨウだ」

「カルロス・オリヴェイラだ。ま、宜しくな」

「知っているとは思うけど、ジル・バレンタインよ」

なんか、すごいメンバーだな。全員強そうだ。

「この街は一体どうなっているんですか？」

「アンブレラのせいよ」

アリスさんが答える。

「アンブレラがウィルスの研究をしていたのよ。それが漏れちゃってこんな事態」

「マジか……」

簡単に言われたけど、結構衝撃的な話だ。

だってあのアンブレラだよ？ 世界で知らない人はいなくらいの製薬会社だ。俺

だってアンブレラの製品を何度も使ったことがある。

「残念ながら事実よ。アンブレラのせいでS・T・R・A・S.のメンバーもほとんど死んだわ」

「またもや衝撃的なことをジルさんが言った。」

「え？　じゃあ、クリスさんは?!」

「彼なら大丈夫。アンブレラの調査をしにヨーロッパまで行っているわ」

「それなら、一安心だ。俺もクレアも無事に脱出出来たら教えてあげないと。レオンさんとクレア、無事だよな？」

「今からは何をするんですか？」

「もちろんラクーンシティからの脱出よ。一番はヘリを見つければいいんだけど……」

「あのストーカーがいなければ私とカルロスは今頃……」

「ストーカー？」

「昨日、俺とジルは、ヘリを呼んで脱出するつもりだったんだが、化け物に落とされたのさ」

「昨日もゾンビがいたのかよ。何も知らなかったんですけど。ラクーンシティ封鎖しとけよ。」

「じゃあ、後は自力でヘリを見つけるか、ラクーンシティの入り口を正面突破か」とアリスさん。

「ヘリに賛成だね。正面突破出来るほどの弾は残ってない」

カルロスさんはマガジンの残量を見て言った。

「私もよ。この四人でも正面突破をすれば誰かが犠牲になるわ」

ジルさんがそう言うと、みんなが俺の方を見た。

「俺は着いてくだけ。一人じゃ何も出来ないからね」

一人で行動して、さっきは死にかけてんだ。もう一人なんて嫌だね。

「決定ね。ヘリを探しましょう。少しかかるけど、ヘリがある場所なら知ってるわ」

とアリスさん。

よし！ そこにたどり着いてさっさと脱出！

俺たちの目的が決まってその場所へ向かおうとすると、プルルル！ と公衆電話が鳴った。公衆電話が鳴るなんて初めて見た。

「行くわよ。すぐに奴等が来るわ」

俺たちは無視して進む。

しかし、少し進んだ先の公衆電話が鳴った。誰かが狙って掛けてきているとしか思えない。

「もしもし?」

アリスさんもそれに気付き、電話を取った。

アリスさんと電話を掛けてきた人物がしばらく話し、アリスさんは電話を切った。

「誰?」

「チャールズ・アシユフォード。アネット・バーキンたちと共にトールウイルスを開発した

人物よ」

「そんな奴が俺たちに何て言ってるんだ?」

「娘を助けて欲しいそうよ。ヘリもあるみたい。私たち用じゃないみたいけどね」

俺たち用じゃないとしても、

「奪うまでだろ」

4話 決意

俺たち四人は、その娘さんとやらがいる場所へ向かっている。学校のどこか、それしかわからないようだ。

「本当に信じていいのかわかるか？」

「今はそれしかないわ。私が知っているヘリも使えるかどうかわからないし」

「おいおい、それよりストーカーのお出まじだぞ」

カルロスさんが前方に銃を向けた。

「あれは……」

人間よりも大きく、歯茎が剥き出し、眼は潰れ、黒いコートを着ている。そして、その腕にはガトリングガン。

「あら、あなたのストーカーだったの？ てっきり私のストーカーかと」とアリスさん。

「あなたもあいつにストーカーされてたの？」

そう言っていると、後ろからズシズシと重たい足音が聞こえてきた。

見ると、さっきのやつと同じだが、黒いコートは着ておらず、右腕は触手で覆われて

いる。

「おいおい、どういうことだよ」

「ストーカーは二体いた？」

「あつちの新品っぽいのが私のストーカーさんね」

「スターズ……」

ボロボロの方は低い声で言った。

「二体同時は流石に無理ね。分かれて逃げて、学校で落ち合いましょう」

「オーケー」

「じゃあ俺はアリスさんに行くとするか」

「え？ 一人で十分よ」

「アリス、今はそんなこと行っている場合じゃないぜ」

二体がゆっくりと近づいてくる。

「じゃあ学校で！」

チームは、俺とアリスさん、ジルさんとカルロスさんに分かれ、別方向の道を走る。

「来たわ」

化け物がガトリングガンを持ったまま、走ってきた。重たそうなのによく頑張るな。

「リヨウは隠れてて、あいつは私が相手をするわ」

「え？ このまま逃げた方が良くないんじや？」

「あいつは私を追っている。ここではどこにいても狙われるわ。あなたじゃ足手まといなる」

ひどいな。

「まあ、確かにあいつのガトリングガンは避けられないけど、タイマンだったら勝てるぐらいの力はあるね」

「そう、なら頼りにするとしましょう。私が引き付けるから後ろから攻撃して。はいこれ」

アリスさんがマシンガンを渡してきた。

「使うかわからないけどもらっておきます」

「来るわ」

アリスさんがそう言うと、すぐ隣をガトリングの弾が流れていった。

俺はすぐさま車の陰に隠れる。

アリスさんはそれに応戦。

俺は物陰を伝いながら化け物に近付き、ついには後ろに回った。

懐からナイフを二本取り出し、化け物の背中を刺す。

「オオオ……」

刺したナイフを蹴ってさらにダメージを与える。

化け物は振り向き、ガトリングガンで殴りかかるが、俺はそれを避け、マシンガンをガトリングガンに連射する。

化け物はガトリングガンが壊れて使えないとわかったのか、腕から外し、タイマンを仕掛けてきた。

「せいっやー！」

化け物の胸に上段蹴り、化け物は少し後ろによろめく。俺は体勢を整えてジャンプし、両足で化け物を蹴る。ドロップキックだ。

それでも化け物はよろめくだけ。倒れそうにはない。

「はあー！」

アリスさんも参入し化け物を殴る。

俺とアリスさんは連携で格闘を仕掛け、化け物を追い詰めていく。

「リヨウ、マシンガン！」

俺はアリスさんにマシンガンを渡し、受け取ったアリスさんは化け物に向かって至近距離で連射した。

「オオ……」

化け物は相当なダメージを喰らい、膝をつく。

「終わりね」

アリスさんは化け物の頭に銃口を突き付ける。引き金を引こうとしたその瞬間、アリスさんの腕が何かに貫かれた。

「何だ!?! こいつら!」

俺たちはいつの間にか脳や皮膚が剥き出しの四足歩行の化け物に囲まれていた。

一匹が飛び掛かってきたが、受け流し、ナイフを首元に刺す。

「いっ!?!」

横腹が何かに貫通された。見ると、それは化け物の舌で、舌を硬くして突き刺しているようだ。

「うっ、う……」

今まで喰らったことのない痛みで、今にも倒れそうな勢いだが、まだ死ぬわけにはいかない。

「リヨウ、行くわよ」

アリスさんは腕が貫通されたのにも関わらず、銃で正確に化け物の頭を撃ち抜いている。く。

視界がぐらついた。死んじやうかも。

俺の体は地面へと倒れた。



「ん?」

目が覚め、俺は身体を起こす。

「痛っ!」

腹に激痛が襲う。服を捲ると、包帯が巻かれてあった。

俺は車の中にいた。外を見てみると、学校が見える。ここが女の子がいる学校だろうか。

車の窓ガラスには、紙が貼られてあった。『すぐに戻る』と一言だけ書かれている。アリスさんが書いたのだろう。

車のドアを開け、外に出ると学校の中から微かに銃声が聞こえてきた。

「いてて」

腹が痛い。でもここでじつとしくわけにもいかない。

「グルルルル……」

俺の足元に犬が駆け寄ってきた。犬は大怪我をしていて、肋骨が見えている。

うん、もうこれワンちゃんじゃないね。

「グワッ！」

犬が飛び掛かってきたが、何とか避ける。

「いてーな」

やっぱ急に動くと傷が痛いな。

ゾンビ犬はまたもや飛び掛かってきたが、それを左に避け、ゾンビ犬の顔にフックを決める。

「グルル……」

それでもゾンビ犬はすぐに立ち上がり、唸り声をあげる。

「もう諦めてくれよ」

ハンターやさっきの化け物は、殺そうという感情はあるが、犬や人間がゾンビになったものは、何故か殺せなくなる。

もう奴らが人間に戻れないことは見ていてわかるが、俺の手が抵抗してしまう。ゾンビになったからって、そう簡単に割り切れない。いや、俺が甘いだけだ。俺は自分の手を汚したくないと思っただけ。

「グルルルル……」

「……わかったよ」

殺さないと俺が殺される。俺が取り逃がした奴が他の人間を喰うかもしれない。

アリスさんもジルさんもカルロスさんもそれをわかつているはずだ。殺し楽しむためではなく、生きるために戦っている。

「ふう」

俺は心を落ち着かせ、服からナイフを取り出した。ナイフはいつの間にか残り三本になつていた。

「ワン！」

ゾンビ犬は飛びかかってきたが、犬の口の中にナイフを刺し込む。

ゾンビ犬は声をあげず、倒れた。

「アンブレラ……」

アリスさんが言っていた。こんな事態になつたのはアンブレラのせいだと。

ジルさんが言っていた。アンブレラのせいで仲間がたくさん死んだと。

ラクーンシティの人口は十万人ほどだ。その中で何人生き残っているだろうか。ほとんどゾンビになつてしまったのだろうか。

「アアア……」

ゾンビが一匹、近付いてきた。顔は歪み、右腕がない。

こいつは家庭を持っていたかもしれない。良い職に就いていたかもしれない。明日の予定も来週の予定もあつただろう。

「ごめんな……」

俺を掴み掛かろうとしてくるゾンビの首を刺した。ゾンビは膝をつき、ゆっくりと倒れた。

「アンブレラさえいなければ……」

アンブレラさえいなければこいつらは……。

首に刺さっているナイフを抜いた。

「仇は取る。だから眠れ……」

俺は子供だ。一人じゃ何も出来ない。でも、ラクーンシティの惨劇を知る者は他にもいるはずだ。他にも仲間がいる。アリスさんもジルさんもカルロスさんもレオンさんもクレアもクリスさんも。

「俺はアンブレラを討つ」

俺は一つの決意を固めた。

5話 アンブレラ

「リヨウ！ 大丈夫なの?!」

学校の中から、アリスさん、カルロスさん、ジルさんと、女の子が出てきた。ジルさんとカルロスさんは、無事化け物を追い払えたようだ。この女の子が娘さんとやらだろうか。

「ああ。大丈夫。まだ少し痛むけど」

腹の傷は大分血が止まっていた。

「体が痒いとか熱があるとかはない？」

アリスさんが駆け寄る。

「特にないですけど」

「運が良いわね。感染してないみたい。あなたにはトウウイルスへの抗体あるのよ」

感染……あの化け物に刺されたときか。じゃあ俺に抗体がなかったら今頃ゾンビになっただろうか。

「あれ？ アリスさん、傷は？」

アリスさんの腕も、あの化け物に貫かれたはずだが、傷が残っていない。

「もう治ったわ。私の身体、ちょっと特殊だね。アンブレラのせいなんだけど。リヨウも傷が治ってるじゃない」

「俺は人よりほんの少し回復が速いだけですよ」

腹の傷はあと一時間もすれば完全に治るだろう。俺も何で傷が速く治るかは知らないが。

「それで、その子が目的の?」

女の子はジルさんの後ろに隠れている。

「ええ。ほらアンジー、自己紹介」

「アンジェラ・アシユフオード、アンジーて呼んで」

「クロセ・リヨウだ。よろしく、アンジー」

☆

アリスさんは公衆電話でチャールズ・アシユフオードに連絡し、伝えられた場所へ俺たちは向かっている。

「それにしてもまさか核を撃つとは」

チャールズさんの話に寄ると、夜明けに滅菌作戦と称してこのラクーンシティに核ミ

サイルが発射されるらしい。

「全くよ。何の避難命令もしないままなんて」

それもそうだ。空からヘリで呼び掛けをすればいいのに。

「生存者がいたとしても外に出したくないんじゃない？ 感染している可能性もあるしね。それに外にゾンビがたくさんいるから、他に生存者がいたとしても私たちみたいに武器を持ってないと行動できないわ」

まあ確かに。

「クソツ、死んでいった仲間たちは犬死にかよ」

「話はそこまでにした方が良さそうね」

前からゾンビが二十体ほど歩いてきていた。

「こっちの弾はほとんど残ってないぜ」

「私もよ」

「無駄撃ちは出来ないわね。正確に頭を狙いましょう」

俺は先頭にいたゾンビを掴んで投げる。

アリスさんたちも進みだし、アンジーを守りながら戦う。

俺はナイフを二本取り出し、正確にゾンビの喉を切りつけていく。

「ガアアアア」

一匹のゾンビが近づいてきたが、カルロスさんが頭を撃つて倒してくれた。

「ありがとう！」

「背後にも気を付けろよ！」

「ハンターが来たわよ」

見ると、ハンターが三体、しかも全部俺の方に走ってきた。

「このー！」

ハンターの爪攻撃をナイフで抑え、もう一本のナイフで頭を刺す。

二体、俺の両脇から腕を突き伸ばして攻撃しようとしたが、俺は後ろに飛び退き、ナイフを両方ともハンターに投げた。

「キシャアア」

一匹は頭に刺さり死んだが、もう一匹は肩に刺さった。

ハンターは怒ったような表情で、腕を突き伸ばした。

「よっ」

俺はハンターの攻撃を避け、肩に刺さっているナイフを掴み、ハンターを蹴った。

ナイフは、ハンターが後ろに下がる勢いで抜けた。

「シャアア！」

叫ぶハンターの頭にナイフを刺す。ハンターは絶命した。

「やるじゃない」

アリスさんが、俺に近寄ってきていたゾンビたちを殴り飛ばす。

「道は開けたわ！ 行きましよう」

俺たちは走り抜ける。



「ジルさん、カルロスさん、そういうえばあのストーカーはどうなったんですか？」

もうそろそろで目的地に着く頃、俺は思い出し、二人に尋ねた。

「撒いたわ。でもきつと生きてる」

「ったく、何であの化け物はジルを狙うんだ？」

「多分、私が知っている情報を外に漏らさせないようにするためよ。色々とアンブレラの秘密を知っちゃったから」

ジルさんも色々とあったんだな。その色々で、こんなに雰囲気が変わったんだろうか。前に会ったときよりも大人っぽくなってる気がする。

「パパに早く会いたいよう」

アンジーは心配の声をあげた。

「ええ、きつと大丈夫よ。早くこんなところ脱出して、パパに会いましょう」

アリスさんは、アンジーの頭を撫でた。

「リヨウもお母さんやお父さんに会いたくなかった？」

とジルさん。

「いや。父も母も既に死んじゃってますからね」

「ごめんなさい……。嫌なことを聞いて」

「いやいや。俺も気にしてないし。死んだのが結構昔のことだから」

父と母は、俺が中学一年生の頃に交通事故で死んだ。まあ、死んですぐの時は何が何だかだったが、今はそれが全然ない。

「んじや、リヨウは今親戚の家にいるのか？」

カルロスさんが辺りを警戒しながら言う。

「いいや。もともと住んでたマンションに一人暮らし」

「へえ。バイトでもしてんのか？」

「何も。金は、夜に外に出て、不良から巻き上げてるよ」

夜、俺に絡んでくる不良を逆にボコして金を取る。それとか、不良に絡まれてる人を助けて不良から金を取る。要は、不良は俺の収入源なのだ。

「リヨウ……そんなことしてたの？」

あ、やべ。ジルさん、警察だった。

「ここから脱出したらお説教が必要のようね」

「アハハ、お手柔らかに……」

「皆、見えてきたわよ」

アリスさんが指を差す。とても大きいビルの広場にヘリが止まっているらしい。ここからでもヘリのプロペラが見える。

「あれを奪うのか」

俺たちは車の陰に身を隠す。完全武装した兵士が二人。フルフェイスヘルメットを
していて顔は見えない。

「敵はアンブレラの兵士よ」

「へ、味方を倒すハメになるとはな」

そういえば、カルロスさんはアンブレラの部隊の一員だったな。

「私がああのビルに昇って敵を倒していくわ。あなたたちは正面から移動して。もちろん銃は使わないでね」

スニーキングか。

俺はサイドバックから双眼鏡を取り出し、ビルの屋上を見る。

「スナイパーがいる」

ライフルを持った兵士が伏せていた。

俺はアリスさんに双眼鏡を渡す。

「そうね。私があのスナイパーを倒したら、ライトを照らして合図を送るわ。それで動き出して」

「了解」

そして十五分ほどが経つと、ビルの屋上から、光が三回点滅した。

「合図だ。行こう」

俺とカルロスさんは先行する。ジルさんは、アンジーを守りながら後ろから着いてきている。

「リヨウ、俺が右をやる。お前は左だ」

「オーケー」

俺とカルロスさんは兵士二人の前に飛び出す。

「な!？」

兵士の顎をアッパーするが、顎をきちんと守られていて、手が痛い。

「こんなにやる!」

俺は一回転し、兵士に蹴りを喰らわせる。兵士は吹っ飛んで、壁にぶつかった。

「き、貴様……」

兵士は直ぐに立ち上がる。兵士は銃を落としてしまったので、ナイフを出した。

「喰らえ!」

斬りかかってきたが、避けてその腕を掴まえ、背負い投げで制する。

「やるな」

カルロスさんも兵士を倒し終わった。

俺は倒した兵士からアサルトライフルを盗った。

「よし、武器もゲットしたことだし、行くとするか」

広場の方から銃声が聞こえてきた。アリスさんが戦っているんだろう。

カルロスさんは敵から奪った銃を構え、走っていく。俺も使わないだろうが、取り敢えずアサルトライフルを持って走る。

広場に出ると、アリスさんが戦っていた。

「貴様らも仲間か!？」

兵士が二人、銃を撃ってきたが、俺は走りながら避け、手に持っている銃を敵に投げた。

「ぎゃ!?!」

「うげ!」

銃は跳ね返り、もう一人の敵にも当たった。

「よし!」

相手が怯むその短い間に、俺は距離を詰め、兵士に飛び蹴りを喰らわせる。そしてすぐに立ち上がり、もう一人の兵士と格闘。

「ガキのくせに舐めるなよ!」

アサルトライフルは不利と思ったのか、ハンドガンを取り出し、俺に撃つが、横にステップして避ける。

「お前……弾丸を普通に避けるなよ!」

兵士は銃を撃ち続けるが、俺はそれを全弾避ける。

「くそが!」

弾がなくなり、ナイフで攻撃してくるが、スライディングで相手の後ろに回り、兵士の胴に両腕を回して持ち上げ、俺の体を後方に反り返る。兵士は頭を地面にぶつけた。バックドロップとかベリー・トゥー・ベリーなどと呼ばれる技である。もちろん死なな

い程度に殺ったよ。

「死ね」

背後から敵が俺をナイフで刺そうとしたが、前にジャンプして避ける。

「痛ッ！」

完全に避けきれなく、降り下ろしたナイフが、背中をかすってしまった。

俺は距離を詰め、敵のナイフ攻撃を避けてから、顎に上段蹴りを喰らわせる。その反動で敵は後ろによるめき、その隙を狙って回し蹴り。これも死なないように殺ったよ。

「今すぐ膝をつけ！」

俺は全方位から囲まれてしまった。一人一人に時間をかけてしまったのが失敗だったようだ。

周りを見ると、カルロスさんもジルさんも手をあげて降参していた。

「クソ……」

ここまでのようだ。

俺は手をあげて膝を着いた。

6話 脱出

俺たちはアンブレラの兵士に捕まり、結束バンドで手首を結ばれ、並ばせられた。

「アリスさん……」

アリスさんだけは結ばれず、スーツを着た偉そうな男と話している。

「パ。パ……」

「アンジー……」

車椅子に乗った男が急いでヘリの中から出てきた。アンジーのお父さん、チャールズ・アシユフォードのようだ。

「おっと、動かないでくれ。博士も人質ですからね」

「人質？」

ズシンズシンと重たい足音と共に、あの黒いコートの化け物がやって来た。しかし、こちらを攻撃する気はないらしく、アンブレラの言うことを聞くようだ。

「君もただの人間なのにネメシスと良く戦ってくれたよ。しかも素手で」

偉そうな男は俺に近付いて言った。

あの化け物の名前はネメシスと言うようだ。それに、この男は俺たちの戦いを見てた

らしい。

「武道を習っていたんでね。あなたも喰らってみます?」

「はは、止めておくよ。私はティモシー・ケイン。君は?」

「……クロセ・リヨウだ」

「クロセ・リヨウ……良い名だ。それにしても、まさか君までいるとはな、S. T. R.

A. S. のメンバー、ジル・バレンタイン君」

「私の名前を知ってくれてありがとうございます」

ジルさんは素っ気なく答えた。

「君みたいにあの洋館から脱出した人材を殺すのもおしいが命令なんでね」

俺たちは殺されるのか……嫌だなあ。

「アリス、最後の試練だ。ネメシスと戦え」

「嫌よ」

「ほう? それなら」

パン!と乾いた音。弾丸に貫かれたのは、アンジーの父、チャールズ博士だった。

「パパ、パパ!!」

アンジーはチャールズ博士に近付こうとするが、兵士に止められる。

「私だってその気になれば、優秀な人材も殺せる。ましてや、日本のガキやアンブレラの

兵士なんて造作もない！」

「……わかったわ」

アリスさんはネメシスにゆっくり近づき、素手で戦いだした。

「リヨウ、これを」

カルロスさんから渡されたものは、ちっちゃいナイフだった。よく見ると、カルロスさん結束バンドは切られている。

「……オーケイ」

俺もすぐに結束バンドを切る。カルロスさんは立ち上がり、近くにいた兵士と戦いだした。俺は即時に、ジルさんとアンジーのバンドも切る。

「な、なんだ!？」

「人質が逃げるぞ!」

俺は近くにいた兵士とティモシーを投げ飛ばし、倒す。

「死にやがれ!」

敵がアサルトライフルを連射してきたが、しゃがんで数発を回避する。

「ぎゃー!」

後ろで短い悲鳴が聞こえた。俺の後ろにアンブレラの兵士がいたのだろう。フレンドリーファイアをしてしまったようすな。

「貴様！」

俺に撃ってきた奴は何故か怒ったような声をあげた。

「悪いのはお前だろ！」

俺はナイフを取り出し投げけるが、距離が十五メートル以上は離れているので、簡単に避けられてしまった。

「はは、残念だったな！」

しょうがない。俺はもう一本、ナイフを出した。

「そんなもので何が出来る!!」

敵はまたもや銃を連射した。オレンジ色のマズルフラッシュ、何発もの弾丸が銃口から飛び出てくる。

これ以上の回避は不可能だ。

銃から飛び出した弾丸が、ほんの一瞬だけ見える。頭の中で銃弾よりも早く、発射された弾丸が俺の体のどこに当たるかを計算し、一番早く俺の体に当たる部位、左肩の直線上にナイフを構える。

「うおおおお!!」

俺は咆哮をあげ、銃弾がナイフに当たる直前に縦に振る。手に弾丸の重みが伝わり、少しの痛み。銃弾は真つ二つになり、俺のすぐ横を飛翔していった。

しかし、一発だけではまだ終わらない。残り何十発もの弾丸が、俺の体を貫こうと空気を切り裂きながら飛んでくる。

俺は走り出した。走ると同時にナイフを、弾丸が到着予想の場所に構え、俺は次々と襲いかかる弾丸を弾いていく。

反動で手首が悲鳴をあげて痺れるが、それでもナイフをがっちり掴み、弾丸を弾きながら兵士に接近する。

「じゅ、銃弾を斬ってんじゃねえ!!」

おっしゃる通りです。

兵士は弾が無くなり、空のマガジンを捨てて新しいマガジンを入れようとするが、俺はその隙を狙い、ナイフを投げる。

「痛ッー」

手首が予想以上にダメージを喰らっており、ナイフの軌道がずれ、兵士の左肘のプロテクターに当たり、弾かれた。

「アハハ、残念だったな!」

兵士はアサルトライフルにマガジンを叩き込み、再び俺を狙う。

距離はもうすぐそこだ。最後に残っていたナイフを取り出し、痺れで使えない右手代わりに左手でナイフを構え、再び飛んでくる銃弾を斬りさばいていく。神経がすり減る

のを実感するが、それでも尚、抵抗を続け、距離を詰める。

「だああああ!!」

ついにゼロ距離に入り、兵士に渾身のタツクルを喰らわせた。

「ぐわッ!?!」

兵士は地面をゴロゴロと縦に転がり、止まっているへりに頭をぶつけて動かなくなった。

「はあはあ……」

心臓が張り裂けそうなほどの心拍数だ。実際、死んでいてもおかしくはなかった。

しかし、まだ敵はいる。

戦闘へりが二機、低空飛行でアリスさんを狙いガトリングガンを撃ち続けていた。

俺は、さっき倒した兵士から手榴弾とハンドガンを取って、へりの下まで行く。その場所得手榴弾のピンを外し、へりのプロペラ近くに思いつきりぶん投げて、投げた手榴弾をハンドガンで続けて二発撃った。

手榴弾は起爆し、へりはバランスを崩して地面に落下、プロペラはガリガリと音を起てる。ついには折れ、俺の方へプロペラの一部が飛んできたが、しゃがんで回避した。

もう一機はネメシスが放ったロケットランチャーを真正面から喰らい、爆破、炎上した。

「リヨウ、大丈夫か!？」

カルロスさんが俺に駆け寄ってきた。

「一体何が？」

「よくわからんが、あの化け物が力を貸してくれたんだよ」

カルロスさんは俺を抱え、止まっていたヘリに運ぼうとするが、ヘリは別の場所からロケットランチャーで撃たれ、爆発した。

「くそ！ 何だつてんだ！」

撃つた方を見ると、ボロボロのネメシスが歩いてきていた。あいつはジルさんをストーカーしていたネメシスだ。ここまで追ってきたらしい。

「折角のヘリが……」

アリスさんを背負ったジルさんとアンジーがやってきた。

「それだけじゃないあの化け物まで相手にしなくちゃなんねえ」

みんなは絶望するが、ヘリのプロペラ音が近づいてきた。

「アンブレラのヘリか!？」

しかし、予想は外れ、民間のヘリのようなだった。

『そこにいるのはジルか!？』

ヘリの運転手らしき男は外部スピーカーを使った。

「ジル、おまえの知り合いか？」

「この声、多分バリーだわ」

そうこうしている内に、ネメシスはロケットランチャーを捨て、俺たちの方に向かって走ってくる。

「バリー！ 何か武器はない!？」

『こいつを受け取れ!』

ヘリの運転手はヘリを傾け、何かを落とした。

「ロケットランチャーだわ」

『ジル、使え!』

ジルさんはアリスさんを俺に渡し、ロケットランチャーを構え、ネメシスに撃った。発射されたロケット弾は、ネメシスに撃ち込まれ、爆発した。

「終わったのか……?」

「まだだ!」

それでもかと思えばネメシスは下半身が吹き飛んでも、腕で這いずり俺たちに近づく。

「スターズ……」

ネメシスは低い声をあげる。

『ジル! ここれでトドメをさしてやれ!』

」
次にヘリから落ちてきたのは、マグナムだった。

ジルさんは、直ぐ様マグナムを拾い、ネメシスに近付いて何発も撃つ。

「あんたみたいなバケモノは消えてなくなればいい！」

ジルさんがそう言い終わると同時にマグナムの弾は無くなり、そしてネメシスも動かなくなった。

『ヘリを降ろす。下がっていてくれ』

やつと脱出か。俺は安堵の息を吐く。

ヘリにアンジーとジルさんが先に乗る。俺たちも乗ろうとするが、

「待てー！」

後ろを向くと、銃を構えたティモシーが俺たちを狙っていた。

「私も乗せろ、さもなれば、おまえらを撃つ」

ティモシーは、ヘリに発砲し威嚇した。

「本気だぞー！」

こちらはもう銃を持っていない。しかも、俺はアリスさんを抱えているから、攻撃が出来ない。

「……………！」

テイモシーに近づく影があつた。それは、チャールズ博士だつた。顔は青くなつており、既にゾンビ化している。他にもテイモシーの背後からはゾンビの群れ、その数、百体以上が近付いてきていた。

「アアア」

チャールズ博士はテイモシーの足を噛む。テイモシーは倒れ、後ろを見て自分がどんな状況に立たされているのかを悟つた。

「早く乗れ、来るぞ」

俺はアリスさんをへりに乗せ、最後に俺も乗つた。

「くそ、くそ!!」

テイモシーは、近付いてきたゾンビたちの頭を撃ち抜いてくが、もう逃げられないと分かり、自分の頭に銃口を突き付け、引き金を引いた。

しかし、そこから銃弾が飛び出すことはなかった。弾切れだ。

「ぎゃあああ!!」

テイモシーはゾンビに噛まれ、最後にはゾンビに覆い尽くされて見えなくなつた。

「これが私たちの反撃よ」

へりは飛び立ち、街の外へと向かう。

「ありがとう、バリー」

「なんてことないさ。仲間もいっぱいだな」

「ええ」

「夜明けだ」

ラクーンシティを出ると同時に、核ミサイルとすれ違った。数秒後、ミサイルは起爆し、爆風で機体がぐらぐらと揺れる。

「ラクーンシティ……さようなら」

俺たちは地獄の街から脱出したのだった。

「あれは……」

下を見ると、人影が三人あった。一人は警察官の格好をしている。

「バリーさん、ここで止めてください。下の人は俺の仲間なんです」

「分かった」

へりは着陸し、俺は直ぐにへりから出て、レオンさんとクレアの元へ駆け寄る。

「レオンさん、クレア！」

「リヨウ！」

「良かった、生きててくれて」

「ああ。本当に良かったよ」

二人はボロボロで、しかもレオンは怪我をしている。

女の子がクレアの後ろに隠れた。

「その女の子は？」

「シエリーよ。警察署で保護したの」

シエリーは、衰弱している。

「リヨウ、シエリーの具合が悪そうなんだ。あのへりに乗せてくれないか？」

「ああ。頼んでみる」

俺はバリーさんの元へ行って、乗せられるかを聞く。

「乗せるには誰か一人は降りないとな」

そうだ。元々、定員オーバーなのだ。

「じゃあ俺が降りる」

俺は志願した。

「良いのか？」

「ああ。俺は歩いても帰れるよ。シエリーとレオンに比べたらマシだ」

「ま、大人一人と子供は乗せれる。早く伝えてこい」

俺はレオンとクレアにその事を伝えた。

「レオン、シエリー、お別れね」

「ああ。クレア、無事に兄貴を見つけれられるといいな」

「ええ」

「リヨウ、説教はまた今度ね」

とジルさん。

ああ、そういえばそんなことが……

「何かあったら俺たちを頼れよ」

へりにレオンとシエリーは乗り、飛びたって行った。

「リヨウ、良かったの?」

クレアが尋ねる。

「そりゃ俺は怪我なんて捻挫くらいだし」

「お腹の包帯は?」

「もう治った」

お腹をさする。痛みはすっかりなくなっていた。

「兄貴の手がかりは？」

「ええ、あつたわ。直ぐに探しに行くわ」

「そうか……。何かあつたら俺も力になるから。仲間だろ？」

「そうね。その時は頼りにさせてもらおうわ」

日が昇る。

あの街では色々な事があつた。説明出来ないほど無茶苦茶なことが。

今は……日本へ帰ろう。早くベッドで体を休めたい。

だが、俺は危惧していた。

今回の事件で、世界の破滅へのタイムリミットが始まったのではないかと。

2章 CODE:Veronica

7話 ロックフォート

あの事件から三ヶ月が経った。

あの事件の後、日本に帰ってからテレビを付けると、ラクーンシティのニュースで持ちきりだった。

そりやそうだろう。第二次世界大戦以降、使われなかった核兵器を自国に放つたのだ。その事件の被害者は十万人。そして、その事件を起こしたのは、世界で知らぬ者などいないほど有名なアンブレラだ。

事件の全貌が明るみになり、アンブレラ社の株は暴落、政府から業務停止命令が下されるが、アンブレラは反抗し、裁判になるまでに至った。

ラクーンシティの生き残りの人たちは予想以上に少なかったが、その人々はラクーンシティで起こった地獄を世界に語った。

世間の人たちは、核兵器を使うこともなかったなどと政府に批判しているが、あの地獄を味わった者としては、核兵器を使う判断は懸命だったのかもしれない。

十二月、季節は冬だ。すっかり冷え込み、防寒具が欠かせない。東京でも雪が降って俺たちの交通手段を無くし、学生や出勤の人々を困らせることも少なくない。

あれから俺は日本へ帰り、クリスマスやクレアのようにヨーロッパに渡ることもなく、高校生活を送っている。

「〜であるからして——」

教師の授業が続くが、俺は聞く気はない。既に高校で習うことは、網羅している。学年一位を保ち続けているので、俺が寝ていても、教師が口出しすることは少ない。

「ん?」

授業中、ポケットにある携帯電話が震えた。メールを受信したようだ。

「誰だ?」

俺のメールアドレスを知っている人物は限られている。大方、クレアの定期報告だろう。

ポケットから携帯を出してメールを開くと、予想とは違い、『レオン』と書かれてあった。

「……………」

レオンさんからは前に一通だけメールが着たことがあった。内容は、何か脅され

ちやっつたんでアメリカ政府のエージェントになります。心配しないで、的なメールだったと思う。

取り敢えず、下にスクロールする。

『クレアがアンブレラに捕まった。囚われている場所の地図も送る。行かなくても良い。クリスも向かうらしいから。それとお前、アンブレラから監視されてるんだって。気を付けろ』

「……………」

ちよ、理解が追い付いてないんですけど。クレアが囚われた？ これは分かる。クレアの事だから兄のクリスさんを探すために直接、ヨーロッパのアンブレラ社に潜入したんだろう。でも俺がアンブレラから監視されているってのはなんだよ。あれか？ ラクーンシティでアンブレラの兵士を倒しすぎたから、俺を捕まえるチャンスを狙ってんの？

一番下までスクロールすると、クレアが囚われている場所があった。ロックフォートという孤島のようなようだ。

「ん〜」

少し考える。

行かなくても良いと書かれてあるが、クレアは大事な仲間だ。仲間のためなら例え火

の中、海の中、どこへでも行つてやる。

「先生！ 腹が痛いんで早退します！」

俺は荷物をまとめ、教室を飛び出た。

「ここがロックフォート島か」

俺はヘリをチャーター、もとい盗んでロックフォート島まで来た。ヘリの持ち主、ごめんなさい。

上空から見ると、ロックフォート島の施設は爆破されたようにボロボロだ。クレアは無事なのか？

それにしても、本当にヘリで来て良かった。ロックフォート島は、断崖絶壁の島だ。船で来ていたら、あの崖をロッククライミングしなければいけなかった。流石にそんな奴はないだろう。

俺はヘリを広場に着陸させ、降りる。

「さーて」

ゾンビ一匹、俺の方に近づいてきた。背中にクロスさせて掛けてある木刀二本の内、

一本を取る。

「アー」

ゾンビは俺を掴もうとするが、俺は木刀を振って頭を叩き潰した。

どうやらここもバイオハザードが発生しているようだ。ゾンビを相手をするのは、約三ヶ月振りだが、その間に準備をたくさんしておいた。

刃渡り三センチメートルのダガーナイフを上着の内側に三十本、右腰と左腰に短刀二本とサバイバルナイフ二本、後ろ腰には手榴弾四個、両太もものホルスターにハンドガン二丁、背中には木刀二本。

いや、まあ、こんな装備を持っているのは、冬休みにヨーロッパに行つて、クリスマスと合流する予定だったんだよ。ま、日本で簡単に銃が手に入るとは思つてなかったが。

「アアアアア」

「グオオオオオオ」

そうこうしている内にゾンビが十体ほど歩いてきた。

「よし！ やつてやるよ！」

背中からもう一本、木刀を出し、ゾンビたちに向ける。

「だああ！」

ゾンビの群れに突っ込み、頭を次々と叩き潰していく。ゾンビはゾンビ。鈍い奴らに負けていられない。

一分もしないでゾンビの死体の山が出来た。ゾンビの死体っておかしいけど、俺がゾンビって呼ぶのはただの仮称だしな。こいつら本当は死んでないし。

歩きながら無線機で呼び掛けるが誰も反応しない。クリスさんも来ているはずだが……

俺は、ゾンビを倒しながら建物の中に入る。外のあの惨状だと、化け物以外は生きていないだろう。建物の中にはクレアを含め、生き残りがいるかもしれない。

建物の中をしばらく探索を続けていると、近くから男の声が聞こえてきた。

「もうここから脱出してもいいんじゃないか?」

「隊長の命令だからな。ここに残ってるのは俺たちと隊長だけか」

俺は壁に身を隠す。そつと確認すると、武装をしている金髪と黒髪の男が二人、手にはアサルトライフルが握られている。服にはアンブレラのマークはなく、別の部隊かも

しれない。もしかしたら、この島のバイオハザードを起こした人物かも。

俺は二人に後ろからこっさり近付き、ホルスターから銃を取って銃口を金髪の男の頭に突き付けた。

「銃を置け」

男二人は床に銃を置き、両手をあげた。

「あんたら何者だ」

「へ、まだ生き残りがいたとはな……」

「答えろ!!」

まあ、答えなくても撃つ気はないが。その代わり殴るけど。

「それより後ろを見た方がいいぜ」

男にそう言われ、後ろに殺気を感じた。

「クソ!」

腰の短刀を抜き、振り向き際に後ろにいる奴を斬ろうとするが、ナイフでガードされた。

「初めましてだな。クロセ・リョウ」

金髪オールバックで、サングラスを掛けている男は、何故か俺の名前を知っていた。

「武器を置け!」

男二人は、この隙に銃を拾い、俺に向けた。

「はあ……」

俺は溜め息をつき、覚悟を決め、後ろに振り返る。金髪の男のアサルトライフルの銃身を真つ二つに斬り、一步踏み込んで黒髪の男の顎に掌底を喰らわせる。金髪の男は銃を捨て、ナイフで斬りかかってくるが、俺は避け、短刀で男の親指を斬った。

「ぎゃああああ!!」

金髪の男はナイフを床に落とし、親指を抑える。俺は回し蹴りで男を気絶させた。

「やるな」

このオールバックの男、何故か戦いに介入してこなかった。仲間などどうでもいいのか？

「それで、何で俺の名前を？」

「私だけじゃない。他の人物も知っているさ。ラクーンシティをアリス、ジル、その他と共に脱出した。君の戦闘データはアンブレラにあったよ」

戦闘データ……

「ネメシスか」

ネメシスとは、アリスさんをストーカーしていた化け物だ。最後は何故か俺たちの味方になってくれたが、へりに潰され死んでしまった。

「ああ。本来ならネメシスをアリスと戦わせて戦闘データを取るつもりだったらしいが、思わぬ介入者がいてね。それが君だ」

「あの時戦ったせいでアンブレラに興味を持たれたということか」

「アンブレラ以外にもな」

「アンタ、名前は？」

「アルバート・ウエスカー。君の友達のクリスの元上司だ」

クリスさんの元上司といえ、S・T・R・A・S・Sの人間か。

「あんたがS・T・R・A・S・Sを壊滅させたのか……」

「そうだ……と言えはどうする？」

「倒す！」

俺はウエスカーに一步前身し、短刀でウエスカーの腹を斬ろうとする。

「遅いな」

ウエスカーは首を鳴らした。といつの間にか背後に回っていた。

「な!？」

速い!?

俺は振り向きこうとするが、背中を殴られて吹っ飛び、壁にぶつかった。

「がはっ! げほげほ!」

まるで車に跳ねられたかのような衝撃だ。

すぐに立ち上がろうとするが、またもやいつの間にかウエスカーは接近し、俺の頭を掴んで壁に叩きつけた。

「その程度か？」

「くそー！」

俺は服からダガーナイフを取り出し、ウエスカーの太股に刺す。ウエスカーは俺の頭から手を離れた。その隙を狙い、ウエスカーの頭に回し蹴りを食らわせた。

それでもウエスカーは倒れず、体操選手のように縦回転して体勢を立て直した。

「やるな」

ウエスカーは足に刺さったナイフを抜き、俺の頭目掛けて投げた。

「うおっ！」

首を傾け避けるが、頬から血が少し出てきた。かすったようだ。

「お返しだ!!」

俺はウエスカーに短刀を投げる。投げると同時に、服から五本のダガーナイフを出して、続けて投げた。

「ふっ」

ウエスカーは少し笑うと、飛んでくる刃物を全て軽々と避ける。

「めんどくさくなりそうだな」

背中から木刀二本を取り出し、ウエスカーに向かって走る。

「らああー！」

木刀をウエスカーに振りかざすが、俺の行動を読んでいたかのように避け、脇腹を殴った。

「ぐっ!?!」

またもや吹っ飛ぶが、すぐに体勢を立て直し、木刀を回転させて投げる。ウエスカーは体をのけ反らせて避けるが、俺はその瞬間に近付き、体を横に回転して勢いをつけて、木刀をウエスカーの頭に叩きつけた。

「ガキが……」

サンングラスが外れ、ウエスカーの目が見えた。まるで、爬虫類のような目だ。ウィルスの影響か？

「このー！」

木刀をウエスカーの頭の上に降り下ろそうとするが、腕でガードされた。木刀は折れ、使い物にならなくなった。お土産屋で買った物だからしょうがないか。

「あんたの強度が高いことはよくわかったよ」

俺は木刀を捨て、サバイバルナイフを取って構える。

「ガアアア」

「ウアアアアア」

「オオオオ」

俺たちがいる部屋にゾンビの大群が突っ込んできた。その数、三十体以上。人間の匂いに釣られてやって来たのだろう。

「ふっ、ではこいつらの相手はお前に譲るとしよう」

ウエスカーはそう言い、走って逃げていった。

「あんにやろー!」

俺もすぐこの部屋から離れたいが、ウエスカーの部下が足元で気絶している。見捨てるわけにはいかない。

「来い!」

ゾンビの大群は、真っ直ぐ俺に向かってくる。

8話 T—Veronica

「はあ……はあ……」

床には、ゾンビが何十体も倒れている。殺つたのは俺だ。

ウエスカーの部下二人はまだ気絶している。だが、起きるまで面倒を看とくわけにもいかない。仲間になってくれるなら別だが、どうせ裏切るよ。助けたのは、俺の目の前で死んでほしくなかったただけだ。後は勝手にしろ。

俺は部屋を出て、探索を再開する。

道中、ゾンビがいたが数体ずつなので、手間取ることなく倒していく。

しかし、武器も大分減った。これからは節約するために素手で戦おう。

「シャアア！」

そんなことを考えていると、ハンターが出てきた。

「言つたそばから！」

ダガーナイフを二本出し、一本をハンターに投げる。もちろん軽々と避けられるが、避けた先にもう一本投げた。

「グギャー！」

ダガーナイフはハンターの頭に刺さり、ハンターは絶命した。
「もう慣れてんだよ」

今頃、ハンター程度に負けるわけにはいかない。銃弾を避けるほどの反射神経だが、頭はそれほど良くないのだ。

一時間ほど探索すると、戦闘機がある部屋を見つけた。しかし、その戦闘機は今にも飛び立とうとしている。

「ウエスカーか!？」

俺はコックピットのガラスにダガーナイフを投げる。当然ながら弾かれるが……

「リヨウウか!？」

その声には聞き覚えがあった。

「クリスさん!？」

クリスさんはフロントガラスを開け、その姿を見せた。何か月振りに会っただろうか。
か。

「クレアは!？」

「南極だ。乗れ」

俺は戦闘機の後部席に乗る。すぐに戦闘機は飛び立ち、南へ向かう。クリスさんは元空軍なので、戦闘機の運転などへっっちゃらだろう。

「何故、クレアは南極に？」

「さあな。俺も聞いただけだ」

「誰に？」

「ウエスカーという男だ。俺の敵だよ」

「クリスさんもウエスカーに会ったのか？」

「リヨウもか。ウエスカーも南極へ向かっているだろう」

ウエスカー、まだ勝負が決まってない。次こそは倒す。

俺たちは、ロックフォート島を後にした。

「()か」

南極の基地が見えてきた。

ここに来るまでの間、クリスさんから色んなことを聞いた。ウエスカーが、S. T.

R. A. S. を誘い出して、チームを壊滅させたことやT-Vernicaウイルスのことも。アレクシアという奴は、そのT-Vernicaウイルスを使って世界征服をしようと企んでいるらしい。

「ここにクレアが……」

どうでもいいが、南極には初めて来た。いや、当然か。

着陸し、戦闘機から出る

「寒っ!!」

さすが南極だ。すでに凍死しそう。

「早く中に入るぞ」

俺とクリスさんは走って基地の建物の中に入った。

「ふう。温かい」

暖房がついている。しかし、人の気配はしない。

「どうする?」

「手分けして探そう。ウエスカーには気を付けろ」

「オーケイ」

クリスさんと分かれて行動する。ま、そっちの方が効率が良い。

進むが、困ったことにドアが開かない。

「鍵を探すか?」

とも思ったが、めんどくさいので蹴り破る。ドアは一撃で開いた。てか、この状況で鍵を探すなんて嫌だよ。蹴り破った方が十倍早い。

「アアアアア」

「オオオオ」

部屋の中にはゾンビが五体。この基地でもバイオハザードが発生しているようだ。

「全く、バイオハザードばかりだな」

俺はすぐ近くにいたゾンビの顔にパンチする。ゾンビは怯み、俺はその隙に後ろに回ってゾンビの頭を両手で掴み、横に捻る。ボキッ!!と爽快な音が首からし、ゾンビは倒れた。次に、作業服に身を包んだゾンビの腕を掴み、捻って床に倒す。倒れた作業服ゾンビの頭を踏みつけ、近づいてくる戦闘服ゾンビに上段蹴り。戦闘服ゾンビは壁にぶつかるが、すぐに俺の方へ再び来ようとする。俺は戦闘服ゾンビの頭を掴んで壁に叩きつけた。

「アアアアア」

残るは二体。俺はダガーナイフを投げ、頭に刺さってゾンビは倒れた。

「ふう……」

今頃だが、高校生がこんなこととして良いのだろうか。普通なら、ギャーと叫んで一目

散に逃げ、いつの間にか死んでるのがオチじゃないか？ やっぱ俺もイカれてるんだろ
うな。

「泣けるぜ」

探索し続けると、クリスと再び合流した。

「何か手掛かりは？」

「何も。あのドアの先は？」

俺は近くにあるドアを指差す。

「いや、まだ行つてない」

俺はドアを蹴り破り、その先へと入る。

「なんだここの？」

俺たちが入った部屋は、まるで洋館の玄関だ。

「(ト)は……」

クリスさんは嫌な顔をした。

「知っているのか？」

「ああ。嫌な思い出だ。多分、設計士が同じなのだろう」

そういえば、ラクーンシティでティモシーが、ジルさんに向かって洋館事件がどうか言っていた。その洋館に似ているのだろう。

「う、うう」

誰かの呻き声が聞こえた。

「クレアか!？」

クリスさんは走って声の聞こえた方に向かう。俺も続くと、クレアが柱に謎の緑の物体で身動きが取れないようになっていた。

「リヨウ、ナイフを」

俺はクリスさんにナイフを一本渡し、謎のヌメヌメした物体を一緒に切った。

「クレア、大丈夫か!？」

クレアを開放し、横にする。

「兄さん……?？」

「ああ。俺だ。リヨウも一緒だぞ」

クレアは俺の方を見た。

「頼りになるわね。うっ!」

クレアは苦しみだした。

「クレア!？」

「毒に……化け物にやられたの」

「分かった。リヨウ、クレアを見といてくれ。俺は血清を取りに行く」

「気を付けろよ」

しばらくすると、クリスさんは血清を手に戻ってきた。

血清をクレアに刺すとみるみる顔の色が良くなっていた。

「ありがとう、兄さん、リヨウ」

「よし、早くこんなところから脱出するぞ」

クリスさんは、クレアを立ち上がらせる。

「待つて、まだステイプがいるわ」

「ステイプ?」

「ええ。一緒に孤島から逃げてきたの。怪物に襲われたときに離れ離れになったの」

「なら探さないとな」

ステイプ君とやらがこの基地のどこかに。探さないわけにはいかない。クレアの

仲間だ。

「ハハハハハハハ」

上の方から下品で甲高い笑い声が聞こえてきた。

「アレクシア！」

「あいつが!?!」

金髪で黒いドレスの女。どこからか怪しさを感じさせる。

「虫けらに相應しい死に場所へ今から案内してあげるわ」

アレクシアは意味深な発言をし、去っていった。

「もしかしたら彼女がステイプを！」

「追いましょう！」

俺たちは二階に昇り、アレクシアを追おうとするが、壁から大きな触手が突きだし、俺たちの足場を崩した。

「どわっ!?!」

俺とクリスさんは一階に落ちた。

「いて〜」

腰を打ち付けてしまった。

「クリスさん、大丈夫か!?!」

「くそ！ 足が……。クレア、アレクシアを追うんだ！」

「で、でも……」

「大丈夫だ。クレア、俺がクリスさんに付いてる」

「……頼んだわ」

クレアは走ってアレクシアを追った。

「あー、痛ー」

腰が……。痛い。

「何が大丈夫だよ」

「全くだな」

俺は床に寝っ転がった。

「とうとう見つけたぞ。アレクシア、一緒に来るんだ」

俺たちは、しばらく休んでいると、この場所にウエスカーとアレクシアが現れた。アレクシアは、隠し扉から出てきたのだ。

俺とクリスさんは柱に身を隠す。

ウエスカーは階段を昇る。

「お前は素晴らしいウィルス、T-Veronicaウィルスを作った。そして、そのサンプルは、お前の体内にしかない。それが欲しいんだ。さあ！」

「私が欲しいですって？ できるもんならやってみなさい」

アレクシアは階段を下りると同時に体が発火し始めた。そして、炎が消えると、アレクシアの肌は灰色になった。

やはり、アレクシアも感染者だったようだ。しかし、その力をコントロールしているように見える。

「力づくでも連れていくぜ」

ウエスカーとアレクシアは戦いだした。アレクシアは、ウエスカーに血を飛ばし攻撃する。アレクシアの血は空気に触れると発火し、周りには炎の渦が出来始めた。

ウエスカーも人間業ではない攻撃を繰り返し、アレクシアを倒そうとする。

「リヨウ、避ける！」

アレクシアの血が、俺たちが隠れている柱の方に飛んできた。

「うおっ！」

柱から飛び出して血を避けるが、ウエスカーとアレクシアに隠れていた事がバレてしまった。

「クリス！ リヨウ！」

「ウエスカー！」

ウエスカーは俺たちに襲いかかろうとするが、アレクシアの攻撃で止められる。

「クリス！ 優秀な部下だったお前に、ここは任せよう」

ウエスカーはそう言つて扉から出ていった。

「自分で相手をしろよ！」

まさか、こんな化け物を相手しなくちゃならないとは……

「リヨウ！ ウエスカーを追つてくれ。アレクシアの相手は俺がする」

「……分かった！」

「深追いだけはするなよ！」

俺はアレクシアがクリスさんに攻撃している最中に部屋を出た。

「待て！」

俺は逃げるウエスカーの背中にナイフを投げる。しかし、簡単に避けられた。

「リヨウ、この俺に敵うと思うか？」

「思うね。アンタを倒してくっさい牢屋の中に入れてやるよ」

「やれるもんならな」

ウエスカーは一瞬で、俺の懐に入る。胸を殴ろうとするが、腕をクロスさせてガード。

しかし、威力が高く腕の骨が悲鳴をあげる。

「このー！」

俺はウエスカーの足の甲を思い切り踏み抜いた。さすがに効いたようで、その顔を歪ませる。そして、顎に掌底、ウエスカーは後ろによろめく。直ぐ様タツクルをして、よろけを継続させる。上段蹴り、ローキックと蹴り技を続け、ついには、胸ぐらと腕を掴んで投げ、床に叩きつけた。

「まさかこのーまでやるとはな……」

しかし、ウエスカーは何事もなかったのかのように起き上がった。

「頑丈な奴……」

このーまで効かないとすると、生身の人間では倒せないということか？

「次は俺の番だ」

ウエスカーは構えた。

俺はガードするが、ウエスカーの目にも止まらないラツシユで体全体が悲鳴をあげる。素手のはずなのに、金属バットで叩かれているような痛みだ。

反撃の隙を伺うが、速すぎて止められそうにない。

「クソー！」

俺は右手を後ろ腰に伸ばし、手榴弾を取る。ピンを抜いて、床に落とした。

「ちっ！」

ウエスカーは直ぐ様、俺から飛び退いた。

「それを待ってた！」

俺は落とした手榴弾を取って、ウエスカーに投げつけた。俺は近くのドアを開け、身を隠す。すぐに爆発が起こり、身を隠していたドアが外れ、爆風で吹き飛んだ。

「いって……」

すぐに立ち上がり、周りを見るが、ウエスカーの姿はなかった。起爆する前に、超人的なスピードで逃げたのだろう。

「次は決着を付けてやる！……ありや？」

俺はぐらつき、床に倒れた。体がまだ痛い。少し休もう。そしたら……

「うっ」

俺の意識は途絶えた。

9話 救出

「はっ!?!」

気が付くと、アナウンスが流れていた。

『爆発まであと四分です。避難してください。繰り返します——』

何かよくわからんが、この基地はあと四分で爆発するようだ。

だが、クリスとクレアを探さないといけない。一人だけ逃げるわけにはいかないからな。

基地中を走り回ると、クレアが走ってきた。

「クリスさんは!?!」

「ウエスカーと戦っているわ」

「そうか……クレア、戦闘機はすぐそこだ。待機しといてくれ」

「リヨウはどうするつもりなの!?!」

「ウエスカーをぶん殴る!」

俺はクレアが来た方向を進み、外に出た。

「クリスさん！」

そこには、クリスさんとウエスカーの姿があった。外は炎に包まれており、炎の向こう側にウエスカーの姿が見える。ウエスカーは、顔を抑えている。火傷したようだ。

「リヨウ、行こう。もうそろそろ爆発する」

「でもウエスカーは？」

「あの炎じゃ近付けない。決着は今度着けるさ」

ウエスカーは俺を見て、にやりと笑う。

「リヨウ、良い事を教えてやろう」

「なんだ？」

「お前の友人、クレアとレオンが助け出したシエリーという小娘……」

シエリー、ラクーンシティの外で会った少女か。クレアに聞いた話によると、Gーウイルスの影響で衰弱していったと聞いている。だが、レオンさんと一緒に政府に保護されたはずだ。

「まさか……」

「そうだ、既に我々の手の中にある」

政府の目を潜り抜けたのか……

「……取り返してやるよ。そしてアンタを倒す」

「やれるもんならな」

「行くぞ、リヨウ」

もう爆発するまで時間がない。俺とクリスさんは急いで、この基地まで乗ってきた戦闘機の元へと向かう。

「兄さん、リヨウ！」

俺とクリスさんは戦闘機に飛び乗った。

「ちよ、リヨウ、狭いじゃない」

「しょうがないだろ、二人乗りなんだしさ」

俺は戦闘機の席をクレアと半分個にして使う。

「さあ、急ぐぞ」

戦闘機は、爆発ギリギリで飛び、俺たちがいた基地は吹き飛んだ。

戦闘機は北へと向かう。

「兄さん、もう危険な事をしないって約束して……」

「それは出来ない。俺にはアンブレラをぶっ潰す使命がある」

クリスさんはとつくに覚悟は決まっている。

「クレア、話さないといけないことがあるんだ」

「何？」

俺は、ウエスカーから聞いたシエリーの件を話した。

「そんな……まさかシエリーが……」

「俺は直ぐに探すよ。そこにウエスカーがいる可能性も高いからな」

学校をサボることになるが、それよりもウエスカーを倒すことが重要だ。ほつといたら、今回みたいにもたまたまバイオハザードを起こすかもしれない。

「俺も行こう。クレア、シエリーはお前の友達なんだろう？」

「ええ。私も行くわ。兄さん、良いでしょ？ シエリーは私の大事な友人よ」

「しようがないな。止めても行くんだろ？」

「ええ」

メンバーは三人か。少ないな。

「クリスさん、クレア、どうせならもつと増やそうぜ」

一週間後、ある廃施設が爆発した。

その場から出てくるのは、男女六人の影。

「きつかったわね。人間だけなら良いけど、まさかB. O. W. までいるだなんて」

B. O. W. とは、ネメシスやハンター、タイラントなどの人為的に作られたクリチャーを指す。その中にゾンビは入らない。

「結局、ウエスカーには逃げられたな」

「クソ！ ウエスカーめ」

このメンバーは、全員俺が知っている人物だけだ。

クリスさん、クレアを始め、レオンさん、ジルさん、バリーさん、俺を含め六人だ。

クレアを救出した後、レオンさんに連絡を取って、アメリカ政府の力を借り、シエリーと、このメンバーの居場所がわかった。このメンバーのほとんどはウエスカーに恨みを持っていてるので直ぐに参加すると伝えられた。アリスさんとカルロスさんの協力も願わなかったが、残念ながら居場所がわからなかった。

そして、今回の作戦の要であるシエリーは、クレアに抱えられて眠っている。

「それにしてもよく参加できたな、レオンさん」

「かなり無茶を言ったんだ。政府は部隊を派遣すると言ったが、それじゃそのウエスカーって野郎には歯が立たないと思ってるな」

「確かに」

ただの部隊がウエスカーに勝てるわけがない。それに、このメンバーだからこそ、

シエリーを救えたんだと思う。

「だが……あの女はやはり……」

「レオンさん？」

「あ、いや、こつちの話だ」

レオンさんは今回の戦いで何か気になることがあつたようだ。

「リヨウ、そういうえばまだ礼を言つてなかつたわ」

クレアが駆け寄つてきた。その手にはシエリーが抱き抱えられている。

「礼？」

何か礼を言われるようなことしたっけ？

「私を助けに来てくれたでしょ？」

「あ、ああ」

まあ、結局何も出来なかつたが。

「リヨウが危険な目にあつたらどこにいても必ず助けに行くわ。それが私の恩返しよ」

「出来れば危険な目には会いたくないけどな」

「リヨウ！」

クリスが俺とクレアの間に入つてきた。

（クレアに手を出すなよ）

「わ、分かってるよ」

全く……クレアはブラコンだし、クリスはシスコンだし、兄妹仲がよろしいことで。

「やるな、ボウズ」

バリーさんが俺の背中を叩いた。

バリー・バートンさんは、元S・T・R・A・Sのメンバーだ。家族と幸せに暮らしているらしい。

「鍛えてますしね。傭兵やハンター程度に負けてはいられません」

「良い根性だ」

根性があれば、銃弾ぐらい斬れるもんな。

「リヨウ、やったわね」

ジルさんだ。ジルさんもヨーロッパでアンブレラの行動を探っていたらしい。

「ええ。でもウエスカーは……」

「大丈夫よ。私たちが決着をつける」

「任せます」

俺ではウエスカーに遠く及ばない。でも、クリスさんやジルさんなら……

「ところでリヨウ、説教の事、覚えているかしら？」

「え……」

そういうえば、次に会った時に説教されるんだった。

「俺、直ぐに日本に帰って冬休みの宿題をしないとイケないんで、また今度！」

「ちよ、リヨウ！」

俺はクリスさんの元へ駆け寄る。

「クリスさん、まだ戦い続けるんだよな？」

「ああ。アンブレラをぶっ潰して、ウエスカーを倒すまではな……」

俺も参加したいが、残念ながら学校がある。高校を中退するわけにもいかない。

「クリスさん、高校を卒業したら必ず合流します」

「期待してるよ。クロセ・リヨウ」

この後、俺たちはバラバラになった。

クリスさんとジルさんはヨーロッパに残り、バリーさんは家族の元へ、クレアとレオさんはシエリーを届けにアメリカまで、そして俺は日本へ。

誰も知るよしは無かった。

戻った日本で、ラクーンシティの再来が起こるなんて……

3章 黙示録

10話 学園

あれから四ヶ月が経った。

ロックフォート島や南極の基地の事件は、世間に報道されることはなかった。アンブレラが揉み消したのだろう。

今もなお、アンブレラはアメリカ政府と裁判を続けている。

ああ、そういえば、俺がアンブレラに監視されている件。監視している奴を突き止め、牢屋行きにしてやった。銃を持っていたからね。仕方ないね。

季節は春、もう四月だ。時間が経つのは早く、あと何日か経てば、クリスマスとジルさんに会って一年ということになる。

春休みは、ヨーロッパに行き、アンブレラが飼っているハンター共を殺したぐらいだ。あんな殺人兵器をほったらかしにしとくわけにはいかないでね。

まあ、そんなこともあり、俺は進級、二年生になったわけだ。十二月はほとんど無断欠席をしていたが、留年にならずにすんだ。

で、俺はいつもの通り、授業を寝て過ごしているわけだが……

『全校生徒に連絡します。只今、校内で暴力事件が発生中です。全校生徒の皆さんは、先生の指示に従い、速やかに避難してください』

と何とも物騒な放送が流れてきた。

校内で暴力事件？ 不審者が校内で暴れまわってんの？ なにそれ怖い。

皆の様子も俺と同じ感じで、緊張感というものは何もない。そりやそうだ。教師がいる。体育教師は決まってムキムキだ。そいつの迫力で何とかなるだろう。

だが、その次がいけなかった。

キインと、耳につんざく音。

『や、やめてくれ!! 痛い!! 助けてくれ! ギャアアアア!!』

と、マイクから教師の断末魔。どうやらただの不審者というわけじゃなさそうだ。

「う、うわあああああああ」

同じクラスの生徒の一人が叫び、教室を飛び出すように出ていった。

「きゃあああああ!」

「にげろおおおおお!」

他の生徒も、先に飛び出した生徒に続き、濁流のような勢いで、教室を叫びながら出ていった。

「何故そうなる!?!」

教室には俺一人がポツンと残された。いや、確かに放送室にいた教師が何者かに襲われた事実はあるわけだが、それでも今のようにならぬ全員がパニックになるだなんて……

あ、俺がおかしいだけか。異常者だしな。

俺は机に掛けているバッグを取り、その中からハンドガン、サバイバルナイフ、ダガーナイフ五本を取り出す。この装備は、いつでもアンブレラの奴らと戦えるようにするためのものだ。俺にまた監視者を送るかもしれないしな。

「用意周到だね」

自画自賛を挟みつつ、教室を出る。

「リョウ！」

俺に駆け寄ってくる人物がいた。俺の友人であり、マンションの部屋が隣同士の女。

「よお、香月」

彼女の名前は、香月 彩（かつき あや）。流れるような黒髪ロングの高校二年生。同級生だがクラスが違う。

「て、その銃なに!?!」

驚くのも無理はない。俺の右手にはハンドガン、左手にはナイフが逆手で構えられている。

「さっさと移動しよう。不審者さんがここに来るかもしれない」

「いや、その銃を説明してよ……」

「安全を確保したらな」

俺は警戒しながら進む。俺の手に握られている銃だが、もちろん俺は生きている生物には使えない。脅し用だ。

銃が生物に使えない理由だが、俺にも分からん。撃とうという気はあるのだが、いざ、となると俺の指が拒否してしまう。物には撃てるんだがなあ。

階段まで行くと、信じられない光景が俺の目に写った。

「何よ、これ……」

香月の声は震えている。

階段の下には、五人の男女が倒れ込んでいた。頭から血を流して……

「皆が一斉に逃げ出した時に階段で押されたり、転んだりしたんだろうな……」

「そんな……」

これ、全国で放送されるわ。多分、他の階段でもこんな目にあっている奴がいるんだろうな。

俺は香月に待機の指示を出し、ゆっくりと階段を降り始める。

倒れている生徒たちのところまで行き、生徒たちの様子を確認するが、ピクリとも動

かない。五人全員死んでいるようだ。

「クソ！」

こんなところで死人が出るとは……

「香月、いいぞ、降りてこ——」

「リョウ、後ろ!!」

香月の声により、俺は反射的に前に飛ぶ。

「おいおい、マジかよ……」

後ろを見ると、死んだはずの五人が立ち上がっていた。

「アアアアア」

「オオオ」

と、呻き声にも似た声を発し、俺を掴もうとする。

俺の頭は、一瞬思考が停止した。

何でゾンビが……この日本に……

「リョウ！」

香月の呼び掛けによって、俺は思考を再開する。

「本当に、ドッキリとかじゃねえんだな？ 手加減はしないで……」

ゾンビに反応はない。俺を食らおうとしてくるだけだ。

「ならー！」

俺は一番前にいたゾンビの腕を掴み、引っ張って階段から落とす。

「アアアアア」

「ほんと、何でこうなったんだよ……」

俺はゾンビの顔に回し蹴りを喰らわす。二体のゾンビにヒットし、首の骨が折れる音が聞こえた。

次に、ゾンビの首にナイフを刺して捻る。その間に近づいてくるゾンビを蹴り、怯んだところにダガーナイフを投げる。ナイフはゾンビの頭に刺さり、ゾンビは倒れた。

「香月、降りてこい」

香月は俺の傍に近寄る。

「どういうことなの？」

「さあな」

俺は、倒したゾンビからナイフを抜き取る。

「香月、これはお前が持て」

ハンドガンを香月に差し出した。

「え？　でもリョウは……」

「ナイフがあるから大丈夫だ」

ゾンビに脅しは通じないしな。ゾンビを撃てない俺が持つていても意味はない。銃を香月の手に乗せる。

「わ、けっこう重たいのね。でも使い方が……」

「そうだったな。んー、まあ、コイツらが至近距離に来るまでは使わなくていいよ。俺が守るから」

「リヨウなら信用しても良いわね。何か慣れてるし」

「そうかな」

香月の方がよっぽど慣れてないか？ 俺なんかラクーンシティでは、慌てふためいたのに。生徒が死んだんだぞ？ しかも俺の手によって。

いや、それよりも何でゾンビが……

もしかしたら、アンブレラが俺を殺すためにと一瞬思ったが、さすがにここまでの規模のことはやらないだろう。それなら、遠くからライフルで撃った方が簡単だ。

そういえば、日本にはアンブレラ・ジャパンがあった。大きな研究所もあったはずだ。もしかしたらそいつらが——!?

いや、待て。まずはこの学校から脱出するのが優先だ。余計なことは考えないようにしよう。

「香月、行くぞ」

「うん」

ゾンビは神出鬼没だ。香月から目を離さないようにしないと。

この学校の生徒は六百人以上。今は、その半数以上がゾンビになっていると考えても良いだろう。

さすがにそいつらを潜り抜けて、学校から抜け出すのは不可能だ。街もこのこと同じになっっている可能性が高い。

「リヨウ、どこに行くの？」

「職員室だ。誰かの車の鍵を取って、学校から脱出する」

動きやすさを考えればバイクがいいか。だが、うちの学校にはバイクに乗って通勤する奴なんていないし、普通に考えれば、遠征用のマイクロバスか。あれなら人をたくさん乗せれる。

「目的は決まったことだし、職員室に直行するぞ」

この校舎からじゃ遠いな……

俺は、心からこみ上がる心配を隠しきれなかった。

ラクーンシティは、町と町が離れていたから、十万人という多大な被害者で……いや、その程度で済んだんだ。だが……俺たちが住んでいる町は違う。この市の人口は百万

人、ラクーンシティの十倍だ。

それに、市と市の間は、ラクーンシティのように離れていない。

関東地方全部でバイオハザードが発生しているかもしれない。いや、そう考えて妥当だ。

そんな地獄を……俺は香月を守り抜いて脱出するなど……

11話 仲間

さてさてどうした事か。

突如として、この学校にゾンビが現れ、瞬く間に生徒や教師たちもゾンビにさせ、どんどん量産させていったわけだ。

香月が警察に電話を掛けたが、当然のように繋がらなかった。町で……いや、関東中でこのこと同じ事が起こっているのだ。

俺と、友人の香月は、依然として職員室に向かっているのだが、廊下は酷い有り様だった。生徒や教師の死体がそこら中にある。

「香月、怖いんなら、目を瞑ってても良いんだぜ？」

「余計に怖くなるわ」

「そりゃ失礼」

香月だけには、絶対に危害を加えさせない。香月は俺の大切な友人だ。守り抜いてみせる。

「リヨウ……」

前にある死体が動き出した。

「あー、めんどくせえ」

出来るだけゾンビとの戦闘は避けたいのだ。ラクーンシティでは、全員戦えるメンバーだった。しかし、今は違う。香月は戦えないのだ。

「アアアアア！」

ゾンビは俺に突っ込んで来るが、しゃがみ、ゾンビの足の腱を斬る。ゾンビは倒れて込み、立てなくなった。

「よー」

俺は、ゾンビの頭をサッカーのフリーキックの如く蹴った。

「し、死んだ……？」

「ああ、殺したよ。行こう」

既に生き残りは少ないだろう。窓から外を見るが、グラウンドにもゾンビが溢れている。

「ねえ、リヨウ……」

「何だよ？」

「こいつらって、映画に出てくる〈アレ〉だよね？」

「ああ、そうだな」

「去年、嘘か本当か分からないけど、ラクーンシティでも似たようなのが出たんだった」

「本当だよ。本当の事だ」

もちろん、tーウイルスの事も世間に知らされたが、ラクーン市民がゾンビ化された事実は、それほど広まっただけではない。死体が起き上がるなんて話は、空想の中だけだ。まあ、本当は死んでいないわけだが。

「リヨウつてき、去年の秋の三連休さ。アメリカに行つてたよね」

「……ああ」

「リヨウが帰つてきた日つてき。ラクーンシティはミサイルで消滅した日よね」

香月が何を言いたいのかが分かつてきた。

「……そうだな」

その日は凄かった。テレビを付けても全部ラクーンシティの話だったしな。

「ねえ、リヨウ、私に何か隠してない？ この銃だつてどこで手に入れたの？」

香月は真剣な表情で問いたです。

「言つたら。ここから無事に脱出したら——」

「嫌よ!!」

香月は、今までは聞いたこともないくらい声を荒げた。

「お、おい、香月？」

「私、リヨウが怖い。無表情でどんどんこいつらを殺すし、何か知ってくる癖にその事を

話さないし！何かあったんでしょ!? 去年の十二月はずっと学校を無断で休むし、春休みだつて観光とか言いながらヨーロッパに行つたわ。でも私にはあれが嘘だつてこ
と分かつてたわ」

そうだ……何かを隠している奴と行動するなんて俺だつて無理だ。

「分かつたよ。……話す。でも歩きながらだ」

俺は香月の頭を撫でる。

「行くう」

さっきの香月の声でゾンビが集まってくるはずだ。

☆

「で、分かつたか?」

俺は、ラクーンシティの事や、十二月の事、春休みの事を香月に語つた。だが、簡単
にだ。ウエスカラの事は話してないし、十二月は、ラクーンシティと一緒に脱出した仲
間を助けに行つた程度の事だ。

「でも……本当にリョウが……ごめん、思い出したくないこと思い出させて……」

「いや、良いよ。それに俺は一生あの事件を忘れないさ」

俺はアンブレラを潰すと、今はなきラクーンシティで誓ったのだ。例え何年掛かろうともな。

「それで、学校から脱出したらどうする気なの？」

「出来ることなら一旦家に帰る。そして、安全な所まで行くさ。それが外国になろうともな」

家には、一通りの武器は揃っている。ここにはハンドガンとナイフしかないが、家に帰れば、アンブレラの監視者から大量に奪った銃がタンスの中で眠っている。それに幸いな事に香月の母は外国に一ヶ月の間、出張中だ。父は離婚して今はどこにいるかわからない。俺の両親はとっくに死んでいるしな。つまり、へりさえ捕まえれば、今すぐにこの町から脱出出来るのだ。

俺と香月は進み続ける。ゾンビも極力相手にしないようにして。ゾンビは音に敏感なんだ。

職員室の前の廊下に着くと、床には複数のゾンビの死体があった。

「う、動き出さないわよね？」

「ああ。全員頭をカチ割られてる」

「これをやった奴がいるわけだ。」

俺は職員室のドアに近付き、ドアに耳を当てる。

「……………」

中から男女の話し声が聞こえてきた。

「誰かいるの？」

「ああ、でも味方とも限らない」

相手は、ゾンビと戦える男女だ。当然武器を持っている。ゾンビの中には、頭を釘で刺されて倒された奴もいる。改造したネイルガンを持っているはずだ。まあ、釘くらい銃弾に比べれば簡単に避けれる。

中にいる奴らが友好的ではなかったら、気絶させて車の鍵を持っていくだけだ。

俺はそつとドアに手を掛ける。しかし、当然ながら鍵が掛けられていた。

「香月、銃を。下がってろ」

「う、うん」

香月に銃を受け取り、スーハーと深呼吸。

「すみません、開けてくれませんか？」

と、優しいな声で呼び掛ける。

「僕が行こう」

「ちよ、気を付けなさいよ。外に〈奴ら〉を引き付けてるかもしれないわ」

……聞いた事がある声だ。

ガラガラとドアが開き、男の姿が見える。

「小室か！」

「黒瀬!?! それに香月も！」

「ど、どうも、小室くん」

この目つきが悪い男は、小室 孝。同級生であり、友人に近い人物だ。

「へ奴らへはいないみたいだな。入ってくれ」

「じゃまーす」

「失礼します」

俺と香月は職員室に入る。

中にいた他の人間は、全員知っている人物だった。

「な!?! アンタ生き残ってたの!?!」

「よう、学年二位」

「誰が学年二位よ！」

このやけに嘯み付いてくるツインテールは、高城 沙耶。自称天才でお金持ち。テストではいつも俺に一位を取られて悔しがっている女だ。いつもと違い、眼鏡を掛けている。イメチェンでもしたのか？

「君たちは黒瀬君に香月さんだな？」

「へえ、良く知ってますね」

ロングヘアで、その手に木刀を持っている彼女は、毒島 冴子。学年は俺より一つ上の三年生で、剣道部の主将だ。去年、全国大会で優勝し、その名前を学校中に広ませた。

「君たちは有名だからな。君も剣道で全国優勝しているじゃないか」

ありや知ってましたか。

「そうなのか、黒瀬!？」

「まあな」

それ以外にも色々と優勝しているが。

「き、君のその手にあるのはグロック19かあー!？」

眼鏡を掛けた肥満体質の男の目が輝く。名前は平野 コータ。軍才タダ。なるほど、あの釘は、こいつがネイルガンを改造した物だったのか。

「そうだ。ほれ」

俺は平野に銃を投げた。

「うおおお!! 本物だあ! グロック19は警察のSATでも使われている銃だ!」

ほう、知らんかった。

「どこでこれを!？」

「……買ったんだよ。闇市場でな」

もちろん違法です。国連の最難関の試験の合格したこの俺でも銃の所持は国連からは許されていません。

「あらあら、彩ちゃんにリョウくん」

この無駄に胸の大きい金髪ロングヘアは、鞠川 静香。この学校の校医だ。大学病院から臨時に派遣されている。俺が良く保健室にサボリに行っているので、名前を知られてしまった。香月はそのついでだな。保健室に行った俺の様子を毎回見に来るのだ。

「みんな、これを見て……」

声を震わせる茶髪ロングの女は、宮本 麗。小室の告白を振った人物だ。話したことはない。

「なんだ?」

俺たちはテレビに近付く。

ニュースキャスターが今回の事件について語っていた。

12話 分断

ニュースで報道されたのは、市民が暴動を起こし、死者が出たとのことだ。まあ、当然だ。本当の事を言えば、市民がパニックを起こす。しようがないね。

だが、幸運かどうかは知らんが、ゾンビが大量発生しているのはこの関東だけだそう。つまり、関東を抜け出せば安全。北海道とか九州に逃げちゃえば良いね。

この関東だけでゾンビが発生しているのには理由があるんだろう。そう、アンブレラ・ジャパンとかね。

「ラクーンシティ……」

高城が口を開いた。

「ラクーンシティって、ミサイルで消滅した？」

「そう。そのラクーンシティでもへ奴ら」が出たって噂を聞いたわ」

それ、噂じゃないよ。事実だよ。と言いたいが、何故知っているという理由も説明しなくちゃならんので暇が出来たら話すことにしよう。

「ま、これで目的は決まったろ？ 関東からの脱出だ」

電車や飛行機は使えないだろうから、車を使うことになるが……結構掛かるな。

「いや、先に家族の安否を確かめない」と

小室が言った。

なるほど。小室たちには家族がいる。それを見捨てて逃げるわけにはいかないか。だが――

俺は香月をチラツツと見る。その表情は強ばっていた。

俺と香月は今すぐにでも脱出していい人間だ。家族はいない。でも、知り合いであるコイツらをほっとくわけにもいかない。

「香月、すまん。少しの間、小室たちと一緒に行動する」

「うん」

「へ奴ら」には気を付けて。腕力が強いわ。捕まったらひとたまりもないわ」

コイツらは、ゾンビの事を「奴ら」と呼んでいるようだ。俺もこの場ではそうするか。

まあ、どの道、俺は小室たちの元を離れるだろう。香月を脱出させた後はアンブレラ・ジャパンに行く予定だ。そこで真実を突き止める。

「では行くとするか。生き残りも出来るだけ拾っていこう」

「はい」

「駐車場には、正面玄関からが一番広いわ」

俺たちのチームは……

前衛 小室（バット）、毒島先輩（木刀）、宮本（箒を折って槍のようにしたやつ）、俺（ナイフ）

後衛 平野（改造ネイルガン）、香月（ハンドガン）、鞠川先生、高城

戦える奴は、五人だ。香月の銃は持つとくだけだしな。

て、あれ？ 一番リーチが低いのって俺じゃん。

「さあ、行くわよー！」

☆

「いや〜お前ら凄いな」

テキパキと〈奴ら〉を始末し、そして生き残りまで救っちゃまった。

俺なんか、殺すのにも凄いな。殺すのに必要だったのにコイツら普通に〈奴ら〉の頭を叩き潰すんだもん。俺よりコイツらの方がヤバイな。

「で、どうする。正面玄関は〈奴ら〉で溢れかえってるぞ」

それが問題だ。数は二十体以上だ。

それで、俺たちは〈奴ら〉から見えないように階段の上で身を隠している。

「〈奴ら〉は音に敏感よ。見えないから隠れる必要もないのに」

と、高城が衝撃的な事を言った。

「それ、マジ？」

「ええ。私と平野で実験したわ」

ええー？　じゃあへ奴らゝはtーウイルスとは違うのか？　ラクーンシティやロックフォートのゾンビは、目も鼻も耳も使えた。新種のウイルスか？　いや、でも耳しか使えないなんて明らかにtーウイルスの劣化だよな？

「何よ、気になることがあるの？」

「いいえ、ありません」

tーウイルスじゃないとしたら、俺も噛まれたらヤバいということだ。そのウイルスの抗体は持ってない可能性がある。前みたいに三十体を一齐に相手することが出来ない。前は、噛まれても良いという微妙な安心感があったわけだが、別のウイルスとなると、噛まれるまで分からん。噛まれて抗体を持っているかの実験もやりたくない。

つまり、正面玄関にいる二十体の相手をする事が出来ない。しかもこつちには戦えない人間がいるわけだし。途中救った生徒もそれほど力にならないだろう。

「僕がそれを試してみるよ」

小室が立候補した。

「じゃ、俺も行くとするかね」

俺は立ち上がる。

「黒瀬、良いのか？」

「もちろん、一人より二人だ」

襲われたときにはカバーに入れるしな。今は、戦える人物を死なせたくない。

「平野、カバーを頼む」

「了解！」

「リヨウ、気をつけて……」

「……ああ」

俺と小室は足音を立てないようにゆっくりと階段を下りる。正面玄関前まで着くと、辺りに〈奴ら〉が大量にいるが、こちらには目もくれない。

高城の言った事は本当のようだ。

床に、誰かのシューズが落ちていた。俺は小室に目配せを送る。

小室は了解し、シューズを奥にあるロッカーに投げつけた。

〈奴ら〉は、音に釣られ、ロッカーへと向かう。

俺と小室は、玄関扉を開けて後から来た皆を外に出させる。

カアアアン！ と不意に金属同士が触れ合う音が響いた。

さつき助けた生徒の刺又が、手すりに当たったのだった。

「走れ!!」

小室は大声を出して皆を急がせる。

「何で声を出したのよ!?! 近くにいるのを倒すだけで済んだじゃない!」

「ッ!」

俺は、高城に襲い掛かる化け物の首にナイフを刺す。

「きゃ!?!」

「さっさと逃げろ。へ奴らへが集まってくるぞ」

俺はナイフを抜き、走り出す。香月が俺の傍に近付いてきた。

「りよ、リヨウ……」

「今は喋るな。息があがる」

俺は、行く手を阻むへ奴らへを、蹴って倒していく。

「くそ、数が多すぎる!」

全校生徒の半分、いや、ほとんどと言っていいほど、大量のへ奴らへが集まってきている。

「黒瀬、危ない!」

平野が、俺の背後にいたへ奴らへを撃ってくれた。

「サンキュー、平野。しゃがめ!!」

俺はサバイバルナイフを平野に刺す勢いで投げた。

「うわああ!？」

平野はギリギリでしゃがみ、ナイフは、平野の後ろにいた一体の頭に刺さった。

「ちよ、死ぬかと思つたよ!？」

「死んでないだけマシだな」

俺はナイフを抜き取り、再び走り出す。

「リヨウ、他の生徒が……」

香月の呼び掛けで気付いたが、途中で救つた生徒は、いなくなっていた。へ奴らへに捕まつたのだ。

「行く……もう救えない」

マイクロバスがもう目前に見えてきた。

「香月、平野、先の乗ってくれ。平野は俺と小室の援護を頼む」

「イエツサー!」

俺の近くにいるへ奴らは五体。毒島先輩と小室も他を相手しているから、俺だけで相手をしなくちゃいけないようだ。

「だあああ!」

俺は、目の前にいた一体に飛び蹴りを喰らわせ、すぐに立ち上がり、頭を踏みつける。

ダガーナイフを二本出し、二体に投擲。もちろん頭に命中だ。

残りは二体だが、バスに乗った平野がネイルガンで援護し、すぐに倒してもらった。ダガーナイフを回収し、バスに入る。

「全員乗ったね。出すわよ！」

「待つてください。まだ人が来ます！」

小室の言う通り、生徒と教師が、こちらに走ってきていた。

「あいつ誰？」

「三年A組の紫藤だな」

知らん。学年違うからそりやそうだけど。

「前にもいっぱい集まって来てるわ！」

「この車じゃ何人も轢いたら横倒しになるわ！」

「黒瀬、行くぞ」

「ああ！」

俺と小室はバスから飛び出そうとするが、

「ダメよ！」

宮本から止められる。

「何でだよ!?!」

「あんな奴、死んじやえば良いのよ!!」

宮本の顔は、嫌悪の表情でいっぱいだった。前に紫藤に何かされたのだろうか？

だが、小室はドアを閉めない。小室も生き残りを見捨てるような真似はしたくないのだ。そして、生き残りが乗り込んでくる。

「先生、出して!」

「うん!」

最終的に、バスに後から乗ったのは八人。教師が一人に生徒が七人。

バスは校門へと向かい、閉じられていた門を突き破って学校から脱出した。

「リヨウ、やったのね」

「そうだな……」

だが……俺たちの戦いはこれからだと言っておこう。町には〈奴ら〉が――

「助かりました。リーダーは毒島さんですか?」

紫藤が、毒島先輩の傍に寄る。

「そんなものはいない。生き残るために協力しただけだ」

「それはいけませんねえ。生き残るにはリーダーが必要です。全てを担うリーダーが

……」

あーあ。今さらだけど、こいつ助けられない方が良かったわ。めちやくちや嫌だな。



「だからよお！ このまま進んでも危険なだけだつてば！」

コンビニを過ぎた辺りから、先ほど助けた不良が何やら吠え出した。

「大体よお。何で俺らまで小室たちに付き合わなきゃならねえんだよ。お前ら勝手に町に戻るつて決めただけじゃねえか。学校で安全な場所を探せば良かったんじゃねえのか!？」

……お前、何故バスに乗った？

「そ、そうだよ。どこかに立て籠るとか、ほら、さっきのコンビニとか」

他の奴も反論する。

当然、俺たちサイドはイライラだ。

「ならば君はどうしたいのだ？」

毒島先輩は不良に問いただす。

「ツ！……いつとこいつが気に入らねえ！」

不良は、俺と小室に指を差した。

「俺もっ？」

何かしたっけ？　そもそもお前の顔を見るのも初めてなんだけど。

「んだよ。僕がいつお前に何かしたよ」

小室は立ち上がる。いいぞ、小室。言ってやれ。

「て、テメェ!!」

と、びつくり行動。不良は小室に殴りかかろうとした。が、宮本に棒で殴られ、その行動は阻止された。

不良は床に倒れ、咳き込む。

「いや、お見事です。小室君、宮本さん」

紫藤が、拍手をしながら俺たちに近付く。

「が、こういうことが起こるのは、私の意見の証明にもなってますねえ。やはりリーダーが必要なのですよ、リーダーが！」

「で、立候補は一人つきりてわけ？」

「私は教師ですよ？　高城さん、あなたたちは生徒だ。私なら、問題がないように手が打てますよ。どうですか皆さん？」

うへえ、それなら鞠川先生の方がよっぽどマシだ。てか、リーダーっていらなくない？　俺だって今までリーダー不在のまま、脱出出来たぞ。てか、リーダー自体、自然に決まるもんだろ。

そんな思いも束の間、後から乗ってきた生徒たちの賛成よって、リーダーは紫藤に決まった。

「リヨウ、私、あの人嫌い」

「俺も」

後悔してるよ。何でこんな奴を乗せたのかを。

「私、降りるわ!」

宮本が、バスのドアを開け、バスから降りた。

「待てよ、麗!」

「そんな奴と何かと一緒にいたくない!」

俺もそうだが……やはり宮本には、過去に何か紫藤にされたのだろうか。

「おやおや、行動が共に出来ないと言うなら仕方ありませんねえ」

「何言ってるんだ、アンタ!」

宮本はトンネルの中に入ろうとするが、小室もバスを出て、宮本を止める。

「鞠川校医!」

右を見ると、時速八十キロメートルは出ているバスが、トンネルの方に突っ込んでいく。

バスの中には大量の〈奴ら〉が溜まっていた。

「小室、宮本！」

バスは止まっていた車に当たり、横転する。

「逃げる！」

小室と宮本はトンネルの中に走り、横転したバスはトンネルの入り口を防ぐ形で止まった。

バスは燃え盛り、小室たちは戻ってこれそうにない。

……こういう展開、ラクーンシティでもあつたんですけど。

俺と毒島先輩は、外に出て、トンネルの側に駆け寄る。

「小室君！」

「警察で、東署で落ち合いましょう」

トンネルから、小室の声だけが聞こえる。

てか、また警察署かよ。

あの時はすぐに警察署に辿り着けたが、一時間もしないで出ていくことになったな。俺だけ。

「時間は!?!」

「今日の午後七時で、今日が無理なら明日のその時間で！」

バスの中からは、炎に包まれた〈奴ら〉が出てくるが、何もせずにバタバタと倒れる。

「毒島先輩、行きましょう。ここは危険です」

バスが爆発する可能性がある。

俺と毒島先輩はバスに乗った。

「先生、出してくれ」

バスは進み出す。

「小室は何て？」

「今日の七時に東署だ」

だが、今日は距離的に無理だ。

小室、宮本、無事でいてくれ……

13話 再会

「リヨウ、リヨウ！」

「んあ？」

香月に起こされた。どうやら俺はいつの間にか眠っていたようだ。

外を見ると、俺たちが乗っているマイクロバスは渋滞で中々進めなくなっており、歩道には歩いて避難する人たちがたくさんいる。

「良く、この状況で寝られるわね」

眠たいからだよ。

「私たち、どうすればいいの？」

「小室たちと行動を共にするさ。町まで出ると、〈奴ら〉の数も桁違いだからな。小室たちの家族を助け終わったらすぐに逃げよう」

この地獄と化した町で戦えない女を一人で守り抜くことなど不可能だ。小室たちとの協力が必要である。

俺は携帯を見ると、圏外のままだった。この事は世界に報道されているのだろうか。もしされていたら、この圏外の携帯にはクリスさんやクレアから連絡が沢山あっている

だろう。

……あいつら、日本まで来ないよな？

流星に付き合わせたくはないな。リスクが高すぎる。でもクレアが来そうだ。俺が危険な時に助けに来るといふ約束をしちまったからな。

「香月、俺、もうちよつと寝るから何かあつたら起こしてくれ」

「ええ!!? ちよつ」

俺は意識を遮断させる。少し、寝たいんだよ。それと腹が減った。

あー、小室と宮本、無事だろうか。

☆

「コラ！ 起きなさい！」

頭に鉄球が落ちてきた。と思つたら、高城の拳骨だった。

「え？ なに？」

何故俺は殴られた？

「行くわよ。バスを降りるの」

「……オーケイ」

何やら俺が眠っている間に話が進んでいたようだ。

俺たちはバスを降りる。

だが、メンバーは少ない。紫藤組の奴らは付いてこないようだ。

ま、戦闘能力皆無な奴が多いし。それに紫藤、嫌だから別に良いんだけどな。

俺たちは今、小室と宮本がいないから、

前衛 毒島先輩、俺

後衛 平野、鞠川先生、高城、香月

まあびつくり。戦える奴が三人しかいない。

「で、これからどうすんだ？」

「アンタ、どこまで聞いてたの？」

「何にも聞いてなかったです」

「御別橋を渡って東署で小室たちと落ち合うのよ」

「なるほど」

でも、遠くね？

俺たちは東署がある方向へ進む。

「そういえば、何で黒瀬はグロツク19を買ったんだ？」

平野が聞いてきた。

「そうだな……命が狙われてるから？」

「誰に？」

「……アンブレラ」

「はあ？ アンタ、寝言もそこら辺にしときなさいよ」

まあ、信じないだろうな。

「こつちも色々とあつたんだよ。アンブレラに命を狙われるくらいなのな」

その事は、香月にしか話してないな。コイツらにもいつかは話さないと。

☆

「結局こうなるんだな！」

「文句も言つてられんさ！」

俺たちは、東署へ向かおうと行動したわけだが、ほとんどの橋は封鎖去れており、通る事ができなかつた。何とか封鎖されていない橋を見つけ、渡ろうとしたのだが、〈奴ら〉に囲まれてしまった。

俺はナイフで〈奴ら〉の首を正確に斬っていくが、それでも数は減らない。増えていくばかりだ。

「きゃあー！」

俺は香月に近付く屍を蹴り、倒れたところで頭を踏みつける。

「戦えない奴は一ヶ所に固まっててくれ！」

女三人は戦えない。香月の銃もレクチャーしてなかったし。

「こんのー！」

〈奴ら〉の顔を殴り、倒れたところで頭を次々と踏み潰していくが……

「クソ！ これじゃ消耗戦だ！」

「弾が切れます！」

放棄された車の奥から〈奴ら〉が次々と現れる。

「このー！」

ダガーナイフを五本全部投げて五体の活動を停止させるが、それでも足りない。

「小室たちがいてくれたら……」

つい、言ってもどうしようもないことが口から漏れてしまった。

ブロロロロ!!

どこかから、バイクのエンジン音が聞こえてきた。

「この音は!!？」

「バイクだ！」

バイクが俺たちの元に突っ込んできた。それに乗っている男女。

「小室、宮本！」

宮本はバイクから飛び降り、〈奴ら〉をリーチのある棒でなぎ倒す。小室は、バイクに乗ったまま、〈奴ら〉を轢き、行動不能にさせていく。

「平野、これを！」

小室は平野に回転式拳銃を投げ、平野はキャッチした。

「これなら！」

平野は次々と〈奴ら〉を撃つ倒す。

「奥からも来ているぞ！」

車が何台も止まっている奥から〈奴ら〉が溢れ出す。

「香月、俺に銃を！」

「分かったわ！」

俺は香月が投げた銃をキャッチし、狙って狙って、車の給油口に二発、撃った。

銃口から放たれた弾丸は、吸い込まれるように給油口へ飛翔し、鉄の蓋を貫いた。直後、車が爆発し、他の車にも引火して、大爆発を引き起こした。

「〈奴ら〉は全部倒したか……」

いや、まさか本当に爆発するだなんて。映画とかの演出だけかと思ってたぜ。

「ちよつと、黒瀬、危ないじゃない！」

高城がズンズンと近付いてきた。

「一気に倒せたからいいじゃないか。それよりもだ……」

小室にも宮本にも怪我はない。全員、無事に集まった。

「で、どうするんだ。もうそろそろ日が沈む。この辺で休める場所あるか？」

「あゝ！ それなら私の友達の家がこの近くにあるわ！ 大きい車もあるのゝ」

「そうね。私ももうクタクタだわ。電気が通っている内にシャワーも浴びたいし」

俺も腹減ったしな。昨日から何も食べてないし。

「じゃあ、僕と先生でその家を確認してくるよ」

小室と鞠川先生はバイクに乗って、その友達の家とやらのマンションを確認に行くた。

俺たちは、〈奴ら〉に見つからないように身を隠して、小室たちが戻るのを待った。

14話 銃

「もう無理……」

俺は、部屋に用意されているベッドにダイブした。

「はは、そんなに疲れてたのか？」

「そりやな。走って戦って……そんな事してたら疲れるさ」

俺たちは、何とか無事に、鞠川先生の友達のマンションに着く事が出来た。マンション内にも〈奴ら〉が大勢いたが、俺たちに除去された。小室と宮本もいたので、もの十分程度で終わった。やっぱり、戦える人が多いと楽だな。

そこで、俺たちは今、鞠川先生の友達の部屋で一休みつてわけだ。女性陣は只今、皆仲良くお風呂に入っています。

「せーのだぞ、平野」

「うん。せーの」

小室と平野は、バールで鍵が掛かっているロッカーを開けた。

「お、本当に銃があったぞ」

ロッカーの中には、三つの銃が入っていた。先に開けた右のロッカーには、クロスボ

ウと大量の弾薬が置いてある。

「うおおおお!!」

平野はロツカーの中にある銃を手に取り、何やら説明し出した。寝たいので聞かないが。

☆

「黒瀬も弾を入れるの手伝ってよ」

「めんどくさいなあ……」

文句を言うが、俺は渋々手伝う。

「エアソフトガンで勉強したのか？」

「いや、本物だよ、本物。ブラックウオーターで習ったんだよ」

「へえ、そりやすげえ」

ブラックウオーターといえば、アメリカで超有名な軍事サービスの会社だ。

「それにしても、何者なんだよ、静香先生の友人ってのは」

「SATの隊員って言ってたけど」

「警察なら何でもアリかよ……」

一体どうやって手に入れたんだろうな。俺はアンブレラの監視者から奪ったが、友達さんはやっぱり買ったんだろうな。俺が買ったのは、ハンドガン二丁とショットガンと手榴弾だけだ。思つたよりも高いんだもん。

とまあ、俺たちはごく自然に、他人の銃を借りパクしようとしているわけだ。銃を持つていくことには俺も賛成だがな。全員の火力が上がるし。……俺は上がらんけど。

俺は弾を詰めるのに飽き、バルコニーに出て、双眼鏡で人が大勢避難している橋の上を確認する。

「ひでえな……」

人であつたものが、人を食らい続けている。そして、食われた人も人ではなくなつていく。人が大勢いるので、〈奴ら〉も大量に集まるのだ。

橋では、そのような事が起きていた。しかし、橋の真ん中には警察官や避難した一般人が大勢いる。

「突破されんのは時間の問題か？」

日本の警察に〈奴ら〉を抑え込めるとは思えない。警察だけならまだマシだろうが、一般人がいるからな。〈奴ら〉に危害を加えると文句を言う奴が現れそうだ。

橋の上の双眼鏡で見て回ると、気になるものを見つけた。

大勢の一般人が集まり、旗や紙を掲げて何やら抗議をしているように見える。

「小室、テレビを付けてくれ」

近くにカメラとニュースキャスターらしき人がいるから、多分テレビで流れているとは思うが。

「付けたぞ」

俺は部屋に戻り、テレビを見る。橋の上の状況が中継されていた。

ふむふむ。なるほど。

「どうやら、一般人が集まり、警察に向かって〈奴ら〉を傷付けるなど言っているようだ。この事態の仕業は政府とアメリカが共同開発したウイルスだつて。」

「ほう、中々の射ているじゃないか。〈奴ら〉を傷付け無いことには賛同できないが。もう治せないし。」

「何言つてんだよ！ 死体が動いて人を襲うなんて、そんなの科学で出来るもんじゃないだろ……」

小室が呟いた。

「いや、〈奴ら〉は死んでないよ。前頭葉が破壊され、食欲に飢えてるだけさ」

「どういう事だ？」

「あの姿のなると、胃の中の消化が急激に早くなって、常に強い空腹感があるんだ。前頭

葉が破壊されてるから、物事の判断も出来なくなり、その強い空腹感を抑えようと人を食らうようになる」

と、一通り説明した。全部クリスさんとジルさんから聞いたことだが。

「それって、黒瀬の妄想？」

「断じて違う。俺はこの一年間、〈奴ら〉を相手にしてきたんだ。高城が言ってたろ？」

ラクーン事件の事を」

「じゃあ黒瀬は、ラクーンシティに？」

「ああ。いたよ。仲間と共に脱出した」

あの日の出来事は、一日足りとも忘れはしないし、忘れる気もない。

「〈奴ら〉を治す方法は？」

「ない。脳が破壊されてるんだ。脳ミソを取っ替えるってんなら治せそうだけどな。現

状無理だ」

死体が動くんなんて事があったてたまるか。

「……………」

「……………」

「……………」

……………黙らないでよ。

「いや、何かビツクリだ。とんでもないことも打ち明けられてさ……」

「嘘を言ってるようにも見えないしね」

「ま、別に信じなくてもいいよ」

信じてても信じなくても（奴ら）を殺すことに代わりはない。（奴ら）が生きてようが死んでようが、俺は生きるために殺すし、戦う。

「腹が減った。下で何かを食べてくるよ」

俺が階段を降りようとすると、ちょうど、バスタオル一枚だけの鞠川先生とすれ違った。俺には気付いていなかったようだ。

キッチンでは、裸エプロンの毒島先輩が料理を作っていた。

「あ、黒瀬君、お風呂上がったから入ってもいいぞ」

「はい、後で入ります」

俺は冷蔵庫からプリンを取り出す。

「あ、リヨウ……」

香月の声がし、振り向くと、下着姿の香月が立っていた。

「香月もプリン食べるか？」

「あなた……男としてそれはどうなの……？」

「え？ 何が？」

プリンって女は食べないの？

「女の子の下着姿よ!! 普通なら『うわああ、すみません!』て顔を真っ赤にさせながら言うでしょ!」

「そうなの?」

何で謝らないといけないんだ? 故意で見たのなら謝るけど、その姿で歩き回ってる

わけだから、俺のせいじゃないと思うのだが。

「リヨウ……あなたはいつか女に刺されるわよ」

「んーまあ、あるかもなあ」

男になら刺されたことが何度もあるし。

俺はその場で。パパッとプリンを食べ、容器をゴミ箱に捨てた。

「じゃあ俺は使える武器探しでもするよ」

「銃はあつたんでしょ?」

「あつたけど……ほら、俺は生きてる生物には使えないんだ」

ほんと、何でだろうな。そこらに、撃つたら爆発するドラム缶でもあれば、俺だって銃を使えるんだけどな。

「そういえば、自衛隊の人たちは何をやってるんだろうね。ヘリならたくさん見るけど」
「関東中でこんなことが起きてんだ。最優先なのは要人の救出だろうな。それが終わっ

たら一般人の救出も始まると思うが……」

だが、東京だけでも要人はわんさかいる。救出作戦が始まるとしても、あと三日以上は掛かるだろう。関東の人口は四千万人だが、その三日の間でほとんどの人間は〈奴ら〉になつてゐるんじゃないかな。

☆

風呂にも入り、家中で使える武器を探していると、二階の方から銃声が聞こえてきた。

「小室、どうしたんだ？」

小室が、学ランを着て、降りてきた。毒島先輩と宮本も集まる

「女の子を助けに行く」

「なら、私たち三人は門の方で見張っておこう」

俺たちは外に出て、門を開ける。

小室は、バイクに乗って門から出ていった。

平野がライフルを撃っているの、銃声で〈奴ら〉が何体か集まつてきた。

「よし、やるぞー」

小室が帰ってくるまで、ここは死守しなければならない。

俺は飛び出し、ボールで〈奴ら〉の頭を叩き潰していく。

あ、そういうえば、使える武器はサバイバルナイフ二本、あとはアイスピックとかレンチとかを見つけた。

「不味いな……」

小室が乗っていたバイクのエンジン音で、〈奴ら〉が大量に小室の元へと集まってきている。

「ちよつと、何の騒ぎよ」

高城が降りてきた。

「小室が女の子を助けに行くって、飛び出していったよ」

「うわ、すごい数ね。アイツ、戻ってこれるの？」

流石に……無理か。

「俺にここは任せて、逃げる準備をしてくれ」

「ま、確かにこんな騒ぎを起こしといて、ここに居れるはずもないわ」

女性たちは戻り、準備をしにいった。

俺の傍らには、鞠川先生の友達の軍用車両、ハンヴィーがある。これなら〈奴ら〉の大軍にも突っ込める。小室を救い出せる。

俺は近付いてきたゾンビを尻ぎ払い、頭を踏みつける。

「平野！ 一通り終わったら、銃と弾をバツクの中に詰め込んでくれ！」

「了解！」

バールを振って〈奴ら〉の頭を叩き潰していくと、手の汗で、バールが滑ってどこかに飛んでいってしまった。

「やべっ！」

武器がなくなってしまった。しかし、〈奴ら〉はそんなこと構わずに襲い掛かってくる。

「この！」

〈奴ら〉を蹴って、塀を追いやる。

「黒瀬、援護は!？」

「いらん！」

〈奴ら〉を塀へと追いやる、頭を掴んで塀に叩きつけた。

〈奴ら〉はあと五体。

「お願いだから噛まないでね！」

俺は〈奴ら〉に殴りかかった。

15話 油断

「全員乗ったか!？」

「先生、出して!」

「分かったわ」

ハンヴィーに小室以外と、食料、銃を乗せ、マンションを出発した。

「前に沢山いるわ!」

「ハンヴィーなら耐えきれるはずです。そのまま行ってください!」

ハンヴィーで〈奴ら〉を次々と轢き、小室がいる場所へ向かう。流石はハンヴィー、人を轢いたぐらいじゃビクともしない。

「いました、小室です!」

小室は、女の子と、何故かワンちゃんを背負い、塀の上を歩いてきていた。

「援護するぞ!」

俺と毒島先輩はハンヴィーから飛び降り、〈奴ら〉を倒していく。

「早くしないと囲まれちゃうわ」

「小室、急げ!」

俺はナイフを二本取り出して使い、〈奴ら〉の頭を次々と刺していく。

「そろそろ限界か……」

俺はゾンビを蹴飛ばし、ハンヴィーへと戻る。

「よっー！」

小室がハンヴィーに飛び乗った。

「先生、出してー！」

直ぐ様、急発進し、〈奴ら〉の群れを脱出した。

☆

「リョウ、起きて」

目を覚ますと、俺の目の前には、下着姿の香月がいた。

「ふああああ」

背筋を伸ばし、辺りを確認する。俺がいるのは、ハンヴィーのトランクの上。このハンヴィーは六人乗りなので、何人かは外に出ないと中には入りきらないのだ。

静かな水の音。今は御別川を横断中のようにだ。

小室が助け出した子供は、希里 ありす。小室の話だと辿り着いたときには、お父さんは死んでいたらしい。今は元氣よく、平野と歌を歌っている。

「みんな、そろそろ起きて〜。川を渡りきるわよ〜」

俺は武器の確認をする。

ズボンとベルトの間にサバイバルナイフ三本、アイスピック二本、学ランの内側にはダガーナイフ五本だ。

これだけあれば、〈奴ら〉に負ける事はない。と思いたいね。まあ、銃を三つ、クロスボウを一つを手に入れたわけだから、無理に接近戦をしなくても良いんだ。

対岸に到着し、俺はハンヴィーから降りた。

「着替えるからどっか行つて」

と言われ、女子の着替えを見ないようにする。

「ワン！」

犬が吠えた。小室が、女の子と一緒に連れてきた小さな犬だ。

「こいつの名前は決めたのか？」

しゃがんで犬の頭を撫でる。

「ジークだよ」

「由来はどうせ零戦のコードネームだろ？」

「良く分かったね」

「黒瀬、お前も何だかんだで凄いやな……」

「そうか？」

まあ、自慢じゃないが、俺は頭良いし。

「あ、小室はこれを使つて」

平野が小室に渡したのは、ポンプアクションのショットガン、イサカM37だ。

「黒瀬はこれを」

平野が俺に渡したのは、狩猟用のクロスボウ。ロビン・フットが使っていた奴の子孫だ。

「一応受け取つとくが、使えるかは分からんぞ」

「使い方なら教えるよ」

「いや、そうじゃなくて、俺は銃が使えないんだよ。〈奴ら〉にも人間にもな。生物には撃てない」

クロスボウも使えないと思うんだよなあ。

「静かだなあ……」

〈奴ら〉の姿を、御別川を渡ってから見なくなつた。日が昇っているからとかじやなくて、どっかに集まっているのだろう。近くに、多くの人間が避難している場所があるはずだ。

俺たちは、ここから一番近い高城の家に向かう事になつた。金持ちだとは聞いているが、一体どんな家に住んでいることやら。非常に気になる次第であります。

「リヨウ……綺麗ね」

「ああ」

桜が散つていく。春もそろそろ終わりに近づいている。

「〈奴ら〉です！」

平野の声で、一気に俺たちは緊張し始めた。

「黒瀬と香月は中に入れてくれ！」

「どうも」

ハンヴィーの中に入る。小室と宮本は入りきれないので、ルーフで伏せておくしかない。い。

〈奴ら〉に会わないように、器用に避けていくが、正面には大量の〈奴ら〉が……

「そのまま押し退けて！」

〈奴ら〉を撥ね飛ばしていくが数は増えるばかりだ。

「何でこんなに集まってるんだ!？」

さつきまで全然いなかったのに。

「ダメ、止まって!!」

宮本が叫んだ。奥を見ると、道路を遮るようにワイヤーが張られてあった。

「ワイヤーだ!」

鞠川先生もワイヤーに気付き、車体を横のする。ハンヴィーは〈奴ら〉を押し退け、車体とワイヤーで〈奴ら〉の体を潰した。

「ブレーキが効かないわ!」

「タイヤがロックしています! ブレーキ離して、少しだけアクセル踏んで!」

ハンヴィーは急停車した。しかし、その勢いで、宮本がボンネットに体を打ち付け、道に飛ばされる。

「麗!」

小室は飛び出し、宮本に近づく〈奴ら〉をショットガンで撃ち倒してく。

「行くぞ、黒瀬君!」

「オーケー!」

俺と毒島先輩はハンヴィーから飛び降り、〈奴ら〉の相手をし始める。平野もルーフから体を出し、ライフルで〈奴ら〉の頭を撃っていく。

「平野、宮本に近付く奴を最優先頼む！」

「分かってる！」

俺は、クロスボウで〈奴ら〉の頭を狙い、引き金を引こうとするが、

「くそっ！ 指が動かねえ！」

〈奴ら〉を撃つという気はあるのに、指が固まったかのように動かない。こんな肝心な時に!!

「アアアアア」

「ちっっ！」

俺は、クロスボウから矢を取り出し、近付いてきたゾンビの頭に刺した。

「平野、すまん。中に入れといてくれ！」

俺は平野にクロスボウを投げ、腰からナイフを取り出した。

「喰らえよ！」

ナイフをゾンビの喉に刺し、胸を蹴る。ゾンビは他の〈奴ら〉も巻き込みながら吹っ飛ぶ。吹っ飛んだ勢いでナイフは抜けた。ナイフをもう一本出し、体を回転させながら〈奴ら〉の首を削いでいくが、一向に数は減らない。

「数が多すぎる。先生、車は!？」

「ダメー! エンジンがかからないわ!」

逃げ道は、後ろのワイヤーの向こう。しかし、宮本は体を打ち付けたせいで、身動きが取れそうにない。

「あつ、ぐ!?!」

足に激痛が襲い掛かる。見ると、倒れていたゾンビが俺の足を掴み、噛んでいた。すぐに振りほどき、頭を踏み潰す。

「クソ!」

正面ばかりに気をとられていた。一生の不覚だな。

「黒瀬君!」

「黒瀬!」

先輩が、俺の回りの〈奴ら〉を倒していく。

「ここまでか……」

〈奴ら〉は、t—ウイルスとは違う症状だ。別物のウイルスである可能性が高い。そして、俺がそのウイルスの抗体を持っていない可能性も……

「クソ!」

ダガーナイフを出し、全本投げる。命中し、五人を倒すことに成功した。

「リョウウ！」

香月が車から飛び降り、俺に駆け寄ってきた。

「危ないから中に入つてろ！」

「嫌よ！」

「俺は噛まれた。〈奴ら〉になるかも……」

皆を逃がしたら俺も去るとするか。心名残はあるが。

「俺は最後まで戦うよ。俺が〈奴ら〉になったときは誰か介錯を頼む！」

「黒瀬君……その仕事、私が引き受けた」

先輩は戦いながら言った。

「すみません、俺のドジのせいで」

今まで運が良かったんだ。普通ならもっと早く死んでるよ。

「ッ！」

香月に近づくゾンビに肘を喰らわせ、アイスピックを出して、目に刺し込む。

「頼む。車の中に乗ってくれ。お前を死なせたくない」

「リョウウ……」

「頼むから！」

香月の目には涙が潤い、歯を食いしばってハンヴィーの中に戻った。

「さあ、最期の戦いだ」

囁まれたせいで、走れない。近づいてきた奴を倒していくしかない。

近づいてきた（奴ら）を合気道で転倒させ、頭を踏み潰していく。最期の戦いならもつと派手にやりたかったな。

「黒瀬君、後ろだ！」

「なっ!?!」

またもや油断していた。背後には一匹、俺に組み付こうとするが、

「死なせないわ！」

ハンヴィーから降りてきた高城が、ショットガンを使い、背後のゾンビを撃つてくれた。

「礼は言うけど、少しでもズレてたら俺も巻き添え喰らってたよね!？」

「私は天才よ。そんなことはしないわ」

うーん、妙な説得感。

「じゃあ背後は任せた！」

「任されたわ！」

あれから何分が経過しただろうか。俺は、〈奴ら〉を何体倒しただろうか。そんなことが分からなくなるくらい、無我夢中で戦った。だが、〈奴ら〉の数は増えるばかりだ。絶体絶命か……

「ちよ、小室、何をする気なのよ!」

小室は、高城が使っていたショットガンを取った。

「〈奴ら〉を引き付ける!」

小室は走り出し、ショットガンをバット代わりにして〈奴ら〉の頭を潰しながら、俺たちから離れていく。

「小室君、私も付き合おう」

先輩も小室と共に走り、大きな音を出しながら俺たちから離れていく。音で〈奴ら〉を惹き付けるようだ。

「だが……」

小室たちに大半は惹き付けられたが、まだ五十体は俺たちの方へ向かってきている。

「はあ……」

死ぬんならせめて皆を救って死にたかつたな。人生そう上手くいかないか。

「全員伏せろ!!」

誰かの怒号の声を聞き、俺は反射的にその場に伏せた。〈奴ら〉が吹き飛んでいく様子が見え、ワイヤーの向こう側を見ると、消防服を着た人間が何人もいた。その手には、暴動鎮圧用のインパル消火システムの放水砲が装備されている。

「今のうちにこつちへ！」

「黒瀬、肩を……」

高城は俺に近づく。

「いや、いかないよ。俺を助けても特はない。もうじき〈奴ら〉になるはずだ」

「ダメよ！ アンタが死のうが生きようが連れていくことには代わりはないわ。アンタが〈奴ら〉になったら、その頭を吹き飛ばしてやるんだから」

「そりゃ、ありがたいね」

俺は高城の肩を借り、ワイヤーの向こう側へと行った。

「沙耶、無事で良かったわ」

消防士のような格好をした人の一人がヘルメットを脱いだ。女の人のように、誰かに面影があるような……

「ママ……」

高城が、女の人に抱きついた。なるほど、高城のお母さんのようだ。

小室たちの方を見ると、一安心した様子だった。しかし、戻ってこれそうにはない。

小室たちは、走って去っていった。迂回するのだろう。

「待ってるから！ 私の家で待ってるからー!!」

小室たちが帰る頃には俺は……もう……

16話 S. T. A. R. S. の才女

夢を見た。

俺は中学生一年生だった。中学の授業でも、いつも寝ていた俺の前に、事務員やつてきた。

両親の死が知らされた。母のお腹の中には子供がいた。生まれたら俺の妹になる存在だった。生まれるのは三ヶ月も先の事だったが、両親は楽しみで仕方なく、シヨツピンモールへ育児用品を買いに出掛けた帰りの事だった。

トラックの運転手の男は、時速八十キロメートルで赤信号の時に、両親が乗っていた車に突っ込んだ。それでも止まらず、横断歩道を渡っていた小学生五人を轢き、郵便局に突っ込んでやつと止まった。死傷者は二十人以上だった。

両親の体は見るも無惨にぐちゃぐちゃになっており、即死だったようだ。この事件は全国に報道された。トラックの運転手は麻薬を使用していた。

俺の心は空っぽになった。何も考えなかった。いや、考えないようにしていたのだ。別に悲しいとか、両親を殺した奴を恨んだりとかはしなかった。怖かったんだ。

両親の葬儀が終わると、俺は家に引きこもり、毎日寝て過ごした。今思えば、バカな

行動だったと思う。

そんな俺を元に戻してくれたのは、隣に住んでいた香月彩だった。毎日俺の面倒を看てくれた。そんな彼女を見て、俺は元に戻った。香月の泣いている顔はもう見たくなかったのだ。それだけの事だった。

「で、何でアンタが生きてんのよ」

「生きてて悪かったな……」

朝、俺は高城の家の部屋で目を覚ますと、特に何もなく、体はピンピンしていた。

「てか、何で嘯まれた所の傷まで治ってるわけよ!?!」

「俺にも分からん」

昔からだ。俺はいつも傷の治りが早い。ラクーンでリツカーに腹を貫かれた時も、一日も経たずに傷は治った。

「ほんど、良かった」

香月は泣きすぎて、顔がくしゃくしゃだ。

「香月は昨日の夜、ずっと泣いてたのよ」

「そりやすまんかった。でもまあ、生きてたんだから、泣くのを止めてくれよ」

「バガアアア!」

いや、こんなに泣かれるとはな。俺まで泣きそうになっちゃう。

「あれ、涙が……」

本当に涙が出てきた。涙が目から溢れ出てきたのだ。

「黒瀬の泣き顔、レアだなあ」

「ブツ飛ばすぞ、平野」

「ごめんなさい」

「でも、何で黒瀬君は〈奴ら〉にならなかったのかしら?」

いつもポワワンとしている鞠川先生が、真剣な表情で言う。

「そうね。なぜアンタだけが……」

「抗体を持ってたからとしか言い様がないな」

俺は涙を拭き取り答える。

「抗体?」

「ああ」

だが、t-ウイルス以外にも別のウイルスの抗体を持っているなど、運が良すぎだ。多分、〈奴ら〉のゾンビ化は、t-ウイルス系統のものだと思う。それなら俺が〈奴ら〉にならなかった理由も頷ける。

「俺、ちよつと外の空気を吸ってきます」

俺は立ち上がり、学ランを着て外を出た。

「ほんと、高城ん家はでけえな」

昨日は全然見れなかったが、改めて見ると、そのすごさが伺える。

大きな鉄の門から、玄関まで百メートルは離れており、その間にも噴水やガレージなど、もうわけが分からんくらい凄い。やっぱ、高城はお金持ちなんだなと実感出来た。

「お、リヨウくんじゃん」

聞き覚えのある声があった。

「記者さん!？」

茶髪に、頭にサングラスを掛けた女性。その手にはカメラが持たれてある。

その人物は、何度も会った事がある記者さんだった。

「いやー、奇遇だねー。君なら生きてると分かってたけどね」

「ほんと、奇遇ですね」

俺に至っては、記者さんの存在自体忘れてたけど。てか、いい加減、名前を聞かないとな。自分の中でもすつかり記者さんで定着しているが。

「リヨウくんは、昨日助けられたというこのお嬢様と一緒に来たの?」

「はい。学校が同じだったんでね。記者さんは?」

「私は記者だから、ちょうど取材に出掛けてたのよ。で、会社に帰ってきたら既にゾンビたちで溢れかえってたわ。で、逃げる途中で、この家の人たちに救われたのよ」

この人も色々と苦勞したんだなあ。

「あ!!」

記者さんが何かを思い出したかのように、手のひらを合わせた。

「君に会わせたい人がいるのよ!」

「俺に?」

俺は記者さんに引つ張られ、他の避難民がいるキャンプへと向かった。

「レベツカちゃん!」

「レベツカ?」

知らない名前だ。見ると、アメリカ人で、短髪の顔が幼い女がいた。俺と同年か、年下だろう。

「あなたがクロセ・リヨウね」

「そうですけど、あなたは?」

「レベツカ・チェンバース、S. T. A. R. S. のメンバーだったの」

「ええ!!」

いや、マジか。S. T. A. R. S. の生き残りって、クリスさん、ジルさん、バリー

さんの三人しかいないかと思つてたよ。ていうか、S. T. R. A. S. に入つていた
ということは、俺よりも年上じゃないか！

「クロセ君の話はクリスから良く聞いているわ」

「レベツカさんもあの洋館事件に？」

ウエスカアのせいで、S. T. A. R. S. が壊滅した事件。タイラントを倒し、へ
りで脱出したと聞いている。

「ええ。それと、私の事は呼び捨てで良いわ。それほど歳も離れてないし」

「レベツカ、これで良いか？」

「宜しくね。リヨウ」

俺とレベツカは固い握手を交わす。

「それで、何故レベツカは日本に？」

観光旅行、というわけではなさそうだ。

「ここじゃ話し難いわ。場所を移動しましょう」

俺とレベツカと何故か記者さんまで、人気のない場所に移動した。

「何で、あんたまで来てるんですか？」

「別に良いじゃない。レベツカちゃんも許してくれてるみたいだしね」

それならしょうがないか。

「話し難いということは、それなりにヤバい話？」

「ええ。アンブレラ・ジャパン、当然知っているわよね」

「ああ」

まあ、予想通りというところか。

「私は、アンブレラ・ジャパンが生物兵器を造っているという情報を聞いて、日本まで来たのよ。でももう手遅れだった。空港を出た途端、ゾンビに襲われたわ」

なんという不運。

「関東中にゾンビが大量発生している理由は、アンブレラ・ジャパンのせい？」

「ウイルスが、何かのアクシデントで漏れたか、それとも故意なのか」

ラクーンが滅びたのは、イーウイルスに感染した一匹のネズミが、下水道で感染を広げ続けただからという。

「理由は研究所に行けば分かるわ」

「レベツカは、研究所に行く予定なのか？」

「ええ。残り時間があるうちにね」

「残り時間？」

「ラクーンのように、いつ滅菌作戦が開始されるか」

レベツカは、衝撃的な事を平然と言った。

「確かにな……」

政府がいつまでも、この事態をほっとくわけがない。政府関係者が全員脱出したら、すぐにも滅菌作戦が開始される可能性がある。今は、関東だけですんでいるが、いつ、別の場所に被害が及ぶか……。

「その前に研究所まで行き、真実を突き止めて、関東から脱出するわ」

善は急げ……か。

「レベッカ、俺も付き合わせてくれ」

「でも仲間は？」

「ここは安全だ。俺とレベッカで、研究所まで行こう」

レベッカも元S・T・A・R・S、俺以上か同等の戦闘力はあるはずだ。

「私も行くわ」

記者さんも何故か名乗りを上げた。

「私も記者よ。アンブレラの実態とやらを、このカメラで撮るわ」

記者さんは、胸にぶら下げている一眼レフカメラを見せ付ける。

頼もしい限りだな。

「リヨウ、小室さんと毒島先輩が帰ってきたわ！」

香月が駆け寄ってきた。

「すまん、ちょっと行つてきます」

俺は香月と駆け足で戻る。

「あの美人さん二人は誰？」

「友達……」

門の方まで行くと、動けない宮本以外が集まっていた。

「黒瀬!?!」

「黒瀬君!?!」

二人は俺を見て、仰天した様子だ。俺が「奴ら」になったと思つていたのだろう。当然の事だが。

皆は無事だ。俺たちは一人も欠けることもなく、また集まれたのだった。

17話 別れ

小室と毒島先輩が、高城の家に着いてから一日が経った。

「アンブレラ・ジャパンの研究所はここだから、車でも三時間は掛かる」

俺と記者さん、レベツカは、俺のために用意された部屋で、地図を広げて話し合う。

「でも、それなら市の中心部を突破しなきゃならないわ」

「それが問題だな」

中心部を避けて行っても、車では何時間掛かることやら。中心部に行くにしても、（奴ら）の数が多すぎるな。

「武器もないわ」

「それなら、ちよつと遠回りになるけど、俺の家に向かおう。銃が結構な量、置いてある」

ライフルにマシンガン、ショットガン、アサルトライフルなど、監視者から奪ったものだけではなく、俺が購入した物もある。

「あらあら、いけないんだぞ。日本で銃を所持しちゃ」

「ここにその台詞言います?」

この家の外の見張りも中の見張りも銃持ちだ。高城の家はヤクザの本拠地みたいなもんなのだ。

「行くしかないわね。ここの連中は銃を貸してくれなさそうだし」

「逆に欲しがってるかもな」

この家には、外のキャンプも合わせて、二百人以上は居る。へ奴らも生きている者を食おうとこの家に群がってくるはずが、一匹足りとも侵入してこない。どこかで食い止めているお陰だろう。そして、食い止めるためには、銃がいる。

「なにになに〜？ 何のお話〜？」

「ありすが、俺の部屋に入ってきた。」

「悪い奴らをやつつけにいく作戦を立ててるんだよ」

「皆は呼んでこなくていいの？」

「うん。大丈夫だよ。ありがとね」

「分かった！」

「ありすは、部屋から出ていった。」

「君ってロリコン？」

「記者さんが言った。」

「いや、全然」

でも確かに、ありす相手だと、言葉遣いがおかしくなるんだよな。俺にも妹がいたら……何て事を考えたりして。

「リヨウ、本当に良いの？ 友達は家族を探しに行くんでしょ？」

「あいつらの事だから、俺がいなくてもやっていける。全員強いからな」

「ふうん。で、決行は？」

「三日後にするわ。三日後にこの家を放棄して、隣家に移動する予定らしいから」

三日後か……それなら、小室たちの家族探しにギリギリ参加出来るか？

ザアアアと、雨の音。

「雨か……」

「私とレベツカちゃんは、テントに戻るとするよ。じゃーね♪」

「はあ……」

記者さんとレベツカは、部屋から出ていった。あ、どうでもいいことだが、記者さんの名前は、佐藤リコというらしい。本当にどうでもいいな。

「よっ」

俺はベッドに寝つ転がる。

「三日後か……」

日本はアメリカと違う。流石にいきなり関東にミサイルを撃ち込むことはないだろ

う。そうなるのは、自衛隊による一般人救出作戦後だ。関東には四千万人が住んでいるんだ。日本政府も日本の人口の三分の一を易々見殺しにはしないはずだ。

俺は起き上がり、部屋を出た。

香月にもさっきの作戦の事を話しておかないとな。当然連れてはいけませんが。

「あ、リヨウ……」

曲がり角を曲がったところで、ちょうど香月に会った。

「何かあったのか？」

「ええ。さっき、紫藤先生と生徒たちが来たんだけど、沙耶ちゃんのお父さんのおかげで、出ていったわ」

え、なにそれ、見たかった。

「宮本さんを留年にさせたのは、紫藤先生だったらしいの。宮本さんのお父さんが警察官で、紫藤先生の親の事を調べてたから、それが原因で……」

最低な野郎だな。ま、そんな奴は追い払われて当然だ。

☆

俺たちがそう話している頃、ある場所で、臨時首脳会議が行われていた。臨時、ということなので、各国の首脳全員が集まっているわけではない。代わりの人物を寄越している国もある。

「だから！ 今すぐトウキョウにミサイルを撃ち込むんだ！」

「トウキョウには千万人が住んでいます。それを我らの手で殺すなどと……」

「どうせ、ほとんど感染しているさ！ 今すぐにやらないと世界が終わるのだぞ!!」

各国の首脳は、怒涛の言い争いをしている。焦る理由は、ゾンビが大量発生したからではない。アンブレラ・ジャパン、いや、アンブレラからの犯行予告だった。

内容は、三日後に世界中にイーウィルスをばらまくとの事だった。要求は一切ない。

「そもそも、何故トウキョウの地下に大規模なアンブレラの研究施設があるのだ!？」

皆の目が、日本の首脳に向けられた。

「それは……私にも分かりません。その事実を知ったのは昨日ことですから」

「知らなかっただ?!? 隠し事もいい加減にしろよ!」

「それは、どの国でもやっていることでは? アメリカだつて、イーウィルスの研究を見逃していたわけですから」

「それはそうとして、どうやって世界中にウィルスを撒くのだ?」

「ウィルスを詰め込んだミサイルを発射するのでしょう。トウキョウの地下中に研究所

があるのです。ミサイルを造ることぐらい可能かと」

ウイルスが詰め込まれたミサイルを海上で撃ち落とすことは出来ない。ティーウイルスの資料は、首脳会議に出席している者全員が読んでいる。ミサイルを撃墜すれば、地球の海の半分以上はティーウイルスによって汚染されてしまう。

「トウキョウに核を撃ち込めば済む話だ！ それなら地下研究所も破壊できる！ 世界中の人間がゾンビになるよりは千倍マシだ!!」

「ゾンビという言葉は不適切です。正式名称は活性死者です」

「先ほども言った通りトウキョウの人口は千万人です。ラクーンの百倍ですよ？ それを我々の手で殺すとすると、他の国や国民からの信用が駄々下がりです」

「では、こうすればどうでしょうか？」

全員が、アメリカの大統領の代わりに来ている、政府高官のディレック・C・シモンズに注目した。彼の家系は、現在のアメリカをつくったと称されている。

「核を使って、高高度核爆発を起こさせるのですよ。それなら、例えば地下に研究所があるうが、全ての電子機器の活動を停止させられる。その後には救出作戦とやらをすれば良いでしょう」

俺たちは、全員玄関に集まっていた。

まだ、小室と宮本の親探しが済んでいない。

「で、結局皆で行くのかよ……」

「まあ、仲間だからな。部屋の中でウズウズしとくよりも着いていった方が良いし」

「ありすとジークも含め、俺たち全員で小室と宮本の親探しだ。やっぱり全員じゃないとな。」

「あー！」

鞠川先生が何かを思い出したかのように声をあげた。

「どうしたんですか、先生？」

「思い出したのよ、友達の電話番号！」

「あのマンションの？」

銃やハンヴィーの持ち主でもある。

「うん。小室くん、携帯貸して♪」

「どうぞで」

鞠川先生は、小室の携帯を受け取り、番号をうち始めるが……遅い……

「あの、俺が打ちましようか？」

「ダーメ♪ 忘れちゃうから」

番号が打ち終わり、先生は発信のボタンを押した。

「あ、もしもしリカ？ 良かった〜生きてたんだね〜」

繋がったようだ。先生の友達の無事も確認できた。時間次第では、リカさんとやらも助けに行ける。

と、次の瞬間、

「キャ!？」

先生が持っていた小室の携帯が、煙を吹き始めた。

「何だ!？」

「空が!」

空を見ると、眩い光で空が覆われていた。そして、その光は数十秒で消えてしまった。

「まさか……」

俺はポケットに入れていた携帯を出すと、小室と同じく煙を吹き上げていた。

「リヨウ、何か分かるの!？」

「それについては、高城の方が詳しいはずだ」

高城は説明を始める。

「EMP攻撃、HANE、高高度核爆発とも言うわ。大気圏で核を爆発させると、ガンマ線が大気分子から電子分子を弾き出すコンプトン効果が起きるわ。飛ばされた分子は地球の磁場に捕まって、広範囲に放射される電磁パルスを発生させる」

「つまりだな、俺たちは電子機器は使えない。車も携帯もだ。発電所も死んだはずだから、電気も水もガスも使えなくなった。対EMP処置をしとけば使えるが、そんなものは政府機関のごく一部だけだ」

「マジか……」

「直す方法はあるのか？」

高城のお父さんが階段から降りてきた。何とも強そうな人である。実際強いんだろ
うな。

「パパ……焼けた回路を取り換えればどうにかなるはずよ。偶然に影響を受けてない物もあるかも」

「香月、俺は武器を取りに部屋まで戻る。銃は持つてるよな？」

「ええ」

俺は部屋に戻り、サバイバルナイフ三本を取る。ダガーナイフは回収していなかった
ので、俺の武器はこれだけだ。

「ほんと、何で銃が使えないんだよ」

銃が使えれば俺も……

俺は玄関に戻ると、既に〈奴ら〉が、門を突き破り、攻めてきていた。

「おいおい、マジかよ……」

三百体以上いる。

「リョウウ！」

「黒瀬くん！」

レベツカと記者さんが駆け寄ってきた。

「ヤバい状況よね？」

「ヤバすぎますね」

話を聞くと、避難民を連れて、まだ〈奴ら〉が押し寄せていない隣家へ移動するようだ。

「リョウウ！」

「香月！」

「あのハンヴィーは無事みたいなの。ハンヴィーを使ってここから脱出するわ」

あの車、回収していたのか。

「それが……すまん」

「え？」

「俺は行けないよ」

「この二人とやることがあるんだ。」

「え？ どうして……？」

「真実を突き止めなくちゃならないんだ」

「真実？」

「ああ。この事件の真実だ。お前を連れていくわけにはいかない」

俺は、香月の首に手刀をいれた。香月は気絶する。マジで気絶するとは思ってなかったけど。

香月をおんぶする。

「香月を車まで届けに行く。ここの死守は頼んだ」

「いいけど……本当に離ればなれになっちゃっていいの？」

「ああ。こいつに付き合わせるわけにはいかないんだ」

俺は車庫までダッシュした。

「黒瀬、やっときたか！」

俺は車の中に香月を入れる。

「もうそろそろで動けるようになるわ！」

「皆！ 聞いてくれ！」

俺は拳を握り締める。

「俺はお前らに付いていくことは出来ない」

「何言つてんだよ、黒瀬」

「そうよ！ 寝言もそこら辺にしときなさい！」

「俺は行く場所があるんだ。お前らが強いことも知ってるし、信用も信頼もしている。でも、俺の行く場所は危険すぎるんだよ。〈奴ら〉だけではなく、本当の化け物がいるかもしれない」

皆は無言になった。

「黒瀬君、いや、黒瀬涼、君に命じる。必ず生きてまた会おうと！」

流石は先輩、物分かりが早い。

「ありがとう、毒島先輩！ 皆、また会おう！」

「リヨウちゃん！」

ありすが寄ってきた。

「ごめんね、ありす。俺は行かなきゃならないんだ。でもまた会えるからさ」

「約束、指切り」

俺とありすは固い指切りを交わした。

俺は走って戻り、レベツカと記者さんに合流した。

「別れは済ませてきた？」

「ちよつと雑でしたけど!!」

俺はゾンビを殴り飛ばす。

「で、どうするの!?!」

「最初と変わらず、隣家への移動だ!」

ゾンビ共が集まっているところを見ると、高城のお父さんとお母さんが戦っていた。

「あの人たちの援護を! 受け取れ!」

記者さんとレベッカにナイフを投げた。

「やるぞー!」

俺たちは走り出す。

18話 帰宅

「生き残ったのはこれだけか……」

俺たちは、死に物狂いで戦い、気が付けば、隣家に到着していた。

生き残りは俺たちも含め、十六人だ。残っているのは、銃を手にしていた高城の家の部下がほとんど。

「何とか生き残れたわね……」

「流石に疲れたな」

俺もレベッカも記者さんもボロボロだ。

「それにしても……」

隣家は、前と比べると小さいものの、充分なでかさだった。

「君は確か……黒瀬君だったか？」

「あ、はい」

高城の父親が近づいてきた。やっぱり迫力がある。

「仲間と共に行かなくて良かったのか？」

「はい、俺は行くところがあるんです。アイツらは親探しがあるので、俺だけが無理を

言って別行動をさせてもらったんです」

「行くところとは？」

「……アンブレラの研究所です」

「ほう……君は、私の知らないことを色々知ってそうだ。それに、その赤い目」

「俺の目……？」

「今までいくつもの試練を乗り越えてきたのだろうか？ 君の目は闘志に燃えているよ」

「本当に凄いな、この人は。人の目を見ただけで……」

「ありがとうございます。では、俺たちは行きます」

「休んでいかないのか？」

「はい」

「では、生きていたらまたいつか会おうとしよう」

「はい！」

俺たちは歩き出した。



「それにしても、レベツカも記者さんも強いんだな」

レベツカは元S・T・R・A・Sだから、強いとは思っていたが、まさかナイフ無双をするとは……。記者さんも記者さんで、空手でゾンビを倒していた。

「私は空手の黒帯だからね」

二人とも強いと安心だ。いや、小室たちの時も安心だったよ？

「そういえば、カメラは？ やっぱ壊れちゃったんですか？」

「ふふ、これを見よ！」

記者さんがバッグから取り出したのは、フィルムカメラだった。

「よく持っていましたね……」

「記者だからね」

記者でも、フィルムカメラを持ち歩いている人は少ないと思う。

☆

「ここが俺の家だ」

「マンションね」

俺たちは、一日掛からず俺が住んでいたマンションに着くことが出来た。しかし、も

う夜だ。

マンションの自動ドアの隙間にナイフをこじいれ、開ける。

「真つ暗だな」

マンションの中は真つ暗だ。電気が使えないから仕方がない。つちやあ仕方がないが。

「はい、これライト」

俺は記者さんからライトを受け取り、目の前を照らす。

「ところで、君の家は何階？」

「……二十六階」

エレベーターは、当然使えない。階段を使って二十六階まで行く必要がある。

音を出さずに階段を昇っていく。

ゾンビの声は聞こえてこないが、突然現れてもおかしくないのだ。警戒はしとかなないと。

「いたわ……」

ゾンビが一体、階段を昇っていた。

俺はゾンビの後ろのゆっくり近付き、頭を掴んで首の骨を折った。活動を停止したゾンビをゆっくり床に倒す。

「行こう」

それから、ゾンビに会うことはなく、俺の部屋がある二十六階に着くことが出来た。俺は、自分の部屋の前で止まり、ポケットから鍵を出す。音を出さないようにドアを開けた。

いつものように、電気のスイッチを押したが、電気が使えないことを思い出し、落胆した。

「真っ暗ね……」

「大丈夫、電池式のガーデンがある」

俺は、壁に掛けられてある電池式のガーデンのボタンを次々と押していく。

「これで良いだろ」

薄暗いが、はるかに見えやすくなった。

「今日はここで休憩ね。ベッドある？」

「ああ。この部屋を使ってくれ」

案内したのは、両親が使っていた部屋だ。いつも綺麗にしてある。

「キングサイズのベッドだから、二人はここで寝てくれ」

☆

俺はベランダに出て、インスタントラーメンを食べる。

もちろん電気もガスも水も使えないので、ペットボトルの水だし、カセットコンロを使って温めた。

「リョウ……」

レベツカが、ベランダにやって来た。

「その……リョウの両親は？」

「死んだよ。四年前に」

「……ごめん」

「いや、いいよ。もう昔の事だし」

「両親は何の仕事をしていたの？」

「二人とも科学者だったよ」

あれ？ そういえば、何の科学者だったんだろうか？ 思い出せない。

「こんなときに聞くのもあれだけど、リョウは何になりたいの？」

「うーん、特には……アメリカのエージェントになろうかな」

レオンさんと同じ道でも辿ってみるか？ 冗談だが。

「私は、先生になりたいの。もちろん、アンブレラへの追及も続けるわ」

「そうか……」

☆

早朝、俺たちはアンブレラの研究所に行く準備をし始めた。

「必要な物は全部リュックに入れてくれ」

まあ、防災グッズがちょうど三つあるから、それほど手間は掛からない。四年前の物だが。賞味期限は過ぎていないだろう。水も乾パンも五年は持つと言うし。「通帳いる。中学の卒業アルバムいらない。ロレックスの腕時計……いる」

必要な物をリュックに入れ始める。

「リョウくん、この写真は？」

記者さんが持つてきたのは、死んだ両親と俺が一緒に写った写真だ。

「それも……持つていきます」

「これって、リョウ？」

レベッカが持つてきたのは、俺が知らない小さいアルバムだった。

「どこでこれを？」

「ベッドの近くに壁絵が飾ってあったでしょ？ その絵を外したら、これが落ちてきた

の

なんだそりや？

俺はアルバムを受け取り、中身を見る。

「これは!？」

そのアルバムの写真は、クセツ毛の赤ちゃんが、今は亡き両親に抱っこされていたり、おもちゃで遊んでいるものだった。

「これって、リヨウくんよね？」

「多分……」

確かに、この赤ちゃんの顔は、俺に面影がある。だが、瞳が黒なのだ。俺の瞳は赤色である。

「日付は……俺が生まれてから二年間のものか……」

日本人って、瞳の色が変わるもんなの？

「リヨウに兄弟は？」

「……いない」

実は双子がいたとか？ うーん、分かん。

「これって、リヨウくんが中学生の時のアルバムよね？」

記者さんは、俺がいらないと判断した中学生アルバムを取り、開いた。

「この時は目が赤ね。小学生の頃のアルバムは？」

「小学生の頃は……あれ？」

俺って、どこの小学校に通ってたっけ？　というか、小学生の頃の記憶が全くないな。今まで何で気にならなかったんだ？

「全然わからんのだけど、今は急ごう。早く準備を終わらせよう」

分かんらんものを考えても仕方がない。脱出出来たら、香月に聞くとするか。

俺は必要な物を全部入れた。

「さ、銃を拝見するとしますか」

俺は、タンズを開ける。中には、銃と弾薬、クレア救出の時に使っていた装備などが入っている。

「スゴいわね……これは短い警棒？」

記者さんは、短い棒を持った。

「それは、スタンバトン。改造しているんで、人も殺せます」

俺は学ランを脱ぎ捨て、ダガーナイフが三十本付けられている服を着る。

「好きなのを取ってくれ」

俺はハンドガンと改造スタンガンを取った。

記者さんはアサルトライフル、ショットガン、スタンバトン、レベツカはマシンガン

とスナイパーライフル、スタンガンを取る。そして、全員が手榴弾を一つずつ。

俺の装備は、クレア救出の時と大差はない。左太股には、香月に渡したハンドガンの代わりにスタンガンを装備している。

「いやー、ほんと、近接戦って感じね」

記者さんが俺の装備を見て言った。

「まあ、ナイフを投げて攻撃するんで、足手まといにはなりませんよ」

準備が整い、全員リュックを背負う。

「さて、行くとしますか」

と、そう言った直後、外からバラバラとヘリのプロペラ音がしてきた。

「ヘリ!?!」

「救助か!?!」

俺たちは急いでベランダに出る。

「すげえ……」

外には、今まで見たことないくらいのヘリの隊列があった。

「自衛隊ね」

そして、そのヘリから大量の自衛隊員が街へと降りていく。

「やっと救出作戦かよ……」

自衛隊の作戦は、人命の救出、ゾンビの排除だろう。

「どうする？ ヘリで研究所まで送って貰う？」

「それが一番良いだろうな」

俺たちは、その場から動こうとしたが、ベランダに一機のヘリが近づいてきた。

「乗ってくか？」

金髪のアメリカ人の男はヘリのドアを開け、俺たちに姿を見せた。

「久しぶりですね、レオンさん」

その男は、アメリカのエージェントになるため、修行中のレオン・S・ケネディだった。

19話 研究所

「で、アンブレラの研究所に行けばいいの？」

「はい、お願いします」

俺は、ヘリのパイロットにお願いした。

俺たちはヘリに乗って、アンブレラ研究所へと向かっている。

「それにしても、何でレオンさん日本に？」

自分の意思で俺を助けにきたというわけではないだろう。訓練中の見習いエージェントだしな。

「任務だよ。お前、国連の試験に合格してんだろ？ 未成年でも車の免許が取れるやつ」

「大体合ってるよ」

その試験は、世界でも百何人しか合格していない。それに合格すると未成年の俺でも、国家資格を取ることが出来る。俺が持っている国家資格は……数え切れないや。

「そんな優秀な存在を見殺しにするわけにはいかないってことで、リョウの元には俺が派遣されたんだ。知り合いだから、信用しやすいとかなんとか」

「政府は俺のことを知ってるのか？」

「ああ。ラクーンシティを脱出したことも、クレアの時にアンブレラの施設に行ったことも知ってるよ。流石はアメリカだな」

「ねえねえ。二人だけで話を進めるのは止めてよ」

記者さんが、俺の肩を叩いた。

「そうだな。自己紹介をしよう。俺はレオン・S・ケネディ、アメリカ合衆国の見習いエージェントだ」

「私はレベッカ・チェンバースよ」

「私は佐藤リコ、記者をやってましたー。というわけで一枚」

パシヤットと、記者さんはレオンさんをフィルムカメラで撮った。

「使うなよ。どうしてもって言うんなら、大金を払って貰うことになるぞ」

「んもー、わかってるわよ。見習いエージェントさん♪」

レオンさん……この人はこういう性格だ……

「そろそろ着くぞ」

「で？ 目的は？」

「この事件の真実。やっぱり、アンブレラが関係してんだよね？」

「さあな。俺は聞かされていない……が、その可能性が高いな」

「電磁パルスを起こさせた理由は？」

「それも聞かされていない」

まあ、見習いだしな。

「ほんと、それが謎よね。何のためにしたのか……検討もつかないわ」

「アンブレラが関わってるかもな」

「着いたぞ」

研究所が下に見えた。

「あれは……?」

研究所の駐車場には、他にもヘリが止まっていた。自衛隊のヘリだ。

「何故自衛隊がいるの?」

「さあな。直ぐに分かることさ」

俺たちはヘリから降り、自衛隊のヘリの中を確認する。

「誰もいないな」

「ああ。全員研究所に入ったのか?」

「こつちにもいないわ」

止まっているヘリは全部で五台。パイロットもいない。

『こつこで止まっておくからな。直ぐに戻ってこいよ。怖いから』

合衆国のヘリのパイロットは陽気そうに言った。

「じゃあ、行くとするか」

俺たちは武器を構え、既に開けられている研究所の扉へと入る。電気が使えないので、中は真つ暗だ。

「暗いな。全員これをつける」

レオンさんから貰ったのは、イヤークライトだった。

耳に付け、辺りを照らす。

「人の気配はないか……」

自衛隊員はどこに言ったんだ？

「一年前の事を思い出すわ」

「洋館事件？」

「ええ。その前にもトラウマがあるのよ。元軍人さんと一緒に乗り越えたけどね」

進んで行くと、二つの分かれ道があった。

「さて、チーム分けをするか」

話し合った結果、俺とレベツカ、レオンさんと記者さんで分かれることになった。

「じゃ、幸運を」

「そつちも」

俺とレベツカは右へと進む。

「ねえ、リヨウ。レオンとはどういう関係なの？」

「ラクーン事件の時の命の恩人？みたいなもの。直ぐに離ればなれになったけどな」

「レオンもリコも大丈夫かしら？」

「ラクーンシティを脱出したレオンさんだ。記者さんのこともバッチリ守ってくれるよ」

進み続けると、床に無線機が落ちていた。俺はそれを拾う。

「誰か誰かいないのか!? 助けてくれ!! 誰か!! あ、ああ、ギヤアアア!!」

「おい、大丈夫か!? どこにいる!?!」

通信は途絶えてしまった。

「ヤバそうね」

「非常にな」

進み続けると、開いているドアがあった。俺はその中に入る。

「あれ?」

入つてすぐ、足場がないことに気が付いた。

「う、うわああああ!?!」

俺は下へ落ちていく。よく考えてみれば、エレベーターのドアだったじゃないか!

何てまぬけなんだ。

俺は壁を蹴り、梯子へとしがみついた。

「ふう……」

九死に一生を得た。マジで怖かった。

「リヨウ!? 大丈夫!？」

「な、なんとか。地下に続いているようだ。レベッカも来てくれ」

俺は梯子を降りていく。無線機が落ちていたということは、こっちに誰か来たのはまちがいないはずだ。電磁パルスせいで、エレベーターが使えないのでドアをこじ開けて、下に降りていったのだろう。

☆

「はあ……はあ……」

何分経過しただろうか。梯子を降りても降りてもゴールが見えない。一体地下何階まであるんだ？

それでも降り続けると、やっとゴールが見えてきた。

「やっとね」

「……ああ」

やっぱりこのエレベーターのドアもこじ開けられていた。

「腕も足も痛いわ」

「俺もだ」

自衛隊員もここを降りてきたのか。帰るのもめんどくさそうだ。いや、絶対めんどくさい。

それにしても、ここは何故か電気が点いている。地下深くだから、電磁パルスを避けられたのだろうか。

「う、うう……」

誰かの呻き声が聞こえてきた。俺たちは走る。

その先には、自衛隊員が何人も倒れていた。

「おい、大丈夫か!？」

俺は生きている隊員に駆け寄る。酷い出血量だ。長くはもたないだろう。

「君たちは……?」

「俺の事はいい。ここで何があった!？」

「爬虫類のような緑の化け物が……」

爬虫類のような緑の化け物? ハンターの事か。

「う、……………」

隊員は、息を引き取った。

「レベツカ、他は？」

「ダメ、全員死んでるわ」

「そうか……」

ハンターがいるということは、この研究所でB・O・Wの研究をしていたことは間違いないさそうだ。

「ハンターがいるかも。気を付けて」

「シャアアア！」

「言った矢先かよ!!」

ハンターが二体、飛び出してきた。

「右は私が！」

「オーケー！」

俺は、ハンターの突きだし攻撃を避け、その腕を掴んで、肘を足に落とす。肘の骨が折れ、俺はその折れた腕を振り回して壁に叩きつける。そして、とどめに顔面にナイフを刺した。

「流石ね。クリスが誉めていただけことはあるわ」

「レベッカもな」

レベッカも既にハンターを倒していた。

進んで行くと、ハンターが何体も出てくるが、俺たちにはハンターは通用しない。出
ては殺られ、出ては殺られの繰り返しだった。

しばらく進むと、円形の白いホールが出た。

「ハイ！はっ！」

がしやんと、俺たちが入ってきたドアが閉められた。

『只今より、B・O・Wの戦闘実験を開始します』

アナウンスが流れる。

「戦闘実験って、ここでするの!？」

「そうみたいだな」

奥の扉から、ハンターが三十体以上出てくる。

「キツくなりそうね」

レベッカは、ハンターの群れに銃を向ける。

「全くだ」

俺は、ダガーナイフを出し、投げる。

「シャアアア!!」

何体かに刺さるが、致命傷というほどではない。

「レベッカ！ 援護を頼む！」

「分かった！」

俺は木刀を二本だし、構える。

次々と襲い掛かるハンターの体を、木刀で破壊していく。レベッカは、行動不能になったハンターの頭をマシンガンで撃ち抜く。

俺にもレベッカにも、ハンター程度今さらなんだというぐらいに、簡単に倒していく。残り十体ほどなると、俺は腰から手榴弾を取り出し、ピンを抜いてハンターの群れの真ん中に投げつけた。

「レベッカ、伏せろ！」

床に這いつくばり、手榴弾の爆風に耐える。起き上がり辺りを見回すと、ハンターは肉片となって全滅していた。

「やったな、レベッカ」

「ええ」

……
B. O. W. の実験は終わったよ。早くこの部屋から出してもらいたいところだが

『驚いたよ』

スピーカーから、男の声がした。

「リヨウ、あそこ！」

レベツカが指を差したところを見ると、上に長方形の鏡があつた。マジックミラーになつてゐるのだろう。声の主の顔は分からない。

『自衛隊十人でも、倒せたのは五体だ。それなのに、君たちは二人で三十五体も倒した。流石は元S・T・A・R・Sのメンバーに、ラクーンシティを脱出した者だけのことはある』

この男は俺たちの事を知つてゐる。アンブレラの幹部なのだろうか。

「アンタは何者だ？」

『ディルク・ミラー、と言つても分からんだろうな。君たちに因縁深い人物の部下だよ』
俺達に因縁深いといえば……

「アルバート・ウエスカー!!」

これは、ウエスカーの目的なのか？

「関東でバイオテロを起こしたのもウエスカーか!？」

『いいや、ウエスカーでも私でもない。アンブレラ・ジャパンの人間だよ。間接的には私たちが起こしたとも言えるがね』

「何でそんなことを……?」

『ラクーン事件、あれは致死性のウイルスがラクーン全体に広まったことにより、アメリカの手によって滅菌作戦が行われた。世間にはそう報道された。もちろん事實は違う。君たちが知っている通りだ。だが、ラクーンの生存者が、いくら世間に真実を伝えようとしても、ほとんどは信じない。死者が動き出すなんて、ファンタジーの世界だ。実際には死んではいないが』

「それで？ アンタは何が言いたいんだ？」

『これほどのバイオテロを起こすとどうなるかね？ ラクーンの生き残りは少なかったが、ここは日本の関東だ。四千万人が全員死ぬことなどありえない。そして、生還したものは世間に真実を語る。ラクーンのと看よりも桁違いの数の人間がな。そうするとどうなる？』

「ウイルスによって、ゾンビを作れるようになる。その事を知ったテロリストや反政府軍が、そのウイルスを購入する」

『そうだ。要は、tーウイルスのプレゼンテーションなのだよ。大規模のね』

「イカれてるわ」

「俺もそう思うね」

tーウイルスを売り出すために、こんなに人を殺したっていうのか……。

『生物兵器の効果は絶大だからな。テロリスト共がこぞって欲しがらう。しかも、

そのウイルスに感染したものは、動き出すという特典つきだ』

確かに、致死性のある細菌兵器をばらまくのと、tーウイルスをばらまくのでは、威力が全然違う。なんとって、感染者は動き出すんだからな。あれ？ でも……

「〈奴ら〉は、tーウイルスとは違う症状だぞ？ 視覚も嗅覚もない」

〈奴ら〉が反応するのは音だけだ。

『まあ、それは私も驚いたよ。日本人や中国人がtーウイルスに感染すると、そうなるようだな。しかも、感染率が百パーセントだ』

何だよ、新種のウイルスかと思ってたよ。て、それだと……

「俺も噛まれたんですけど……」

噛まれたのにゾンビになっていないんですけど。日本人は感染率百パーセントじゃないの？

「……………」

『……………』

いや、テメーまで黙んなよ。

『君、日本人じゃないんじゃない？』

「俺は純日本人だ。……多分だが」

目が赤色ってこと以外は日本人だよな？

祖父母も曾祖父母も知らないから、何とも

言えないんだけど。でも、両親は日本人だったしな。目は赤くなかったけど。

『……時間を使いすぎたな。では、この辺でお別れだ。最後にささやかなプレゼントあげよう』

扉が開いた。

「おいおい、マジかよ……」

「あんな化け物が……」

扉から出てきたのは、三体のネメシスだった。

20話 真実

リヨウSIDE

「あれは？ リヨウの友達？」

「ネメシスだ。知能も高いから気を付けろ」

「ラクーンではひどい目にあつた。そんな手強い奴が三体も……。いくらなんでも勝てそうにないな。」

「レベツカ、手榴弾あるよな？ それで時間を稼いで逃げよう」

「その方が良さそうね」

「レベツカは、足下に手榴弾を落とした。俺たちは扉まで走る。ネメシスたちも逃がさんと追ってくるが、レベツカが落とした手榴弾の爆発で倒れ込んだ。」

「急げ！」

「扉を出て、近くにあつたボタンを押す。扉はゆっくりと閉まり、ネメシスの姿は見えなくなった。」

「安心は出来ない。早くデイルク・ミラーを追おう」

「ええ」

☆

レオンSIDE

「いやー、まさか東京の地下にこんな大規模な研究所があつたとはねえ。大スクープですわ」

佐藤リコはフィルムカメラで、辺りを撮っている。

レオンたちは、梯子を使って地下まで下りてきた。明かりは薄暗いが付いており、電気は通っているようだ。

「リコ、行くぞ。まだ人がいるかもしれない」

「オーケー、オーケー」

レオンは銃を構え、辺りを警戒する。レオンにとって、地下研究所は苦い思い出だ。ラクーンシティでは、地下研究所で酷い目にあつた。

通路を進み続けると、レオンは何かの気配を察知した。

「あれは……」

「ゾンビね」

白衣を着た人間がゆっくりとレオンたちの方に近づいてくる。白衣は血で汚れている。

「止まれ！」

銃口を白衣の人間に向ける。しかし、白衣の人間は止まらない。

(ゾンビ……か)

レオンは銃口をゾンビの頭に向け、一発撃った。弾丸はゾンビの額に命中し、ゆっくりと床に倒れた。

「……も危険だ。銃から手を離すな」

「嫌よ。カメラが使えないじゃない」

「……………」

レオンは後悔している。厄介な女を押し付けられたと。チーム分けとしては当たり前だ。レベツカは元S・T・A・R・S、レオンは元警察官だ。一般人を守るのは当たり前である。レオンは一日で失職してしまったが。

「行くぞ」

音を極力出さないように進み続けると、前から防弾ベスト、フルフェイスヘルメットと、体の至るところを防御した人間が五人現れた。

「アアアアア」

「オオオオ」

五人は低いうなり声をあげている。

「ゾンビだよな？」

「ゾンビね。多分自衛隊だわ」

レオンは自衛隊ゾンビの頭に銃を撃つ。当然だが、銃弾は弾かれる。

「左の二体は私がやるわ。残りはヨロシク」

「やる気があつていいね！」

レオンは正面にいるゾンビの胸に右足で蹴りを入れ、続けて左足で蹴りを入れる。最後に頭に回し蹴りを喰らわせた。ゾンビは回し蹴りで吹っ飛び、背後にいるゾンビ二体を巻き込んで倒れた。レオンは倒れたゾンビに近づき、足を大きく振り上げて頭に落とす。

ヘルメットをしていますが、衝撃には耐えられないだろう。

「んー、やっぱり凄いわねえ」

その光景を見ていたリコはそう呟いた。

「私も負けていられないわ！」

リコは腰からスタンバトンを出し、くるつと一回転してゾンビの胴体にスタンバトンをぶつける。スタンバトンの電流がゾンビに流れ、痙攣しながら膝をついた。リコは電

流が流れていないヘルメットの後部を掴み、床に叩きつけた。

もう一体のゾンビはリコに掴みかかろうとするが、リコはしゃがみ、低空タツクルを決める。リコは直ぐに体勢を立て直し、ゾンビの腕を掴んで壁に叩きつけた。その首にスタンバトンを当て、電流を流す。しばらく痙攣し続けると、ゾンビは事切れた。

「やるね。君を見くびってたよ」

リコが戦っている姿を見たレオンは誉めの言葉を告げた。

「どうもどうも。見習いエージエントさんから褒められるなんて人生生きてて良いこともあるもんね」

レオンが関わる女は、厄介なのが多いようだ。

『オオオオオオオオ!!』

遠くから何かの叫びが聞こえてきた。

「何なの!?!」

「さあな。でも良いことじゃなさそうだ」

レオンたちは声のした方に走り出した。

リヨウSIDE

『オオオオオオオオ!!』

誰かの雄叫びが聞こえてきた。

「何!？」

「多分、ネメシスだ。急ごう」

俺たちは走り、目の前の扉に向かった。

ボタンを押し、中に入る。

「(ハ)は……」

中は、大量のパソコンや映像器具が机の上に並べられていた。ここで情報を管理しているのだろうか？

「リヨウ、これを見て」

レベツカがパソコンを起動させて、パソコンのファイルに入っていた文章を見せた。

『やあ、世界の首相たち諸君。私はアンブレラで務めるものだ。今回の事件はびつくりしたことだろう。ラクーンの地獄が再び蘇ったのだからな。だが、これだけでは終わらない。三日後、我々は世界中にここからトーウイルスをばらまく。世界中でラクーンの再現が起こるのだ。楽しみにしてくれたまえ』

と、書かれてあった。

「なるほど」

東京の上空に核が発射された理由は、世界中に t-u ウイルスをばらまくのを止めたかったのか。流石にそのまま核を東京にぶちこむのはやめたようだ。だが、その作戦は失敗に終わった。この地下研究所は、EMP攻撃の対策が出来ている。確認のため、自衛隊を派遣したわけだが、既に全滅状態……と。

「リョウ、行きましよう。これが本当だとしたら、世界中に核が発射されることになるわ」

「そうだな」

ミサイルにでも t-u ウイルスを乗せてばらまくのだろう。一度発射されたら終わるだ。撃ち落とすなどしてみる。ミサイルに乗せていた t-u ウイルスが海に流されることになる。海は、 t-u ウイルスに汚染された魚たちでいっぱいになってしまう。

「あれ？」

でも、デイルク・ミラーは t-u ウイルスをテロリストたちに売るために宣伝として、関東に t-u ウイルスをばらまいたと言った。これじゃ言っていることが違う。世界の人間がゾンビ化すれば、テロリストもテロなんて起こす意味はない。

ま、それは本人に聞いたですとするか。

『ほう、それを見たか』

天井のスピーカーからディルク・ミラーの声が聞こえてきた。壁に付けられている監視カメラが俺たちの方を向いている。

「これはどういうことだ？ お前が言っていたことと違う」

『そうだ。アンブレラは世界中にウイルスをばらまくなどしないよ』

「じゃあ、なぜ!？」

『言っただろう？ これはプレゼンテーションであり、宣伝だ。世界中に知られる必要がある。このウイルスを世界中にばらまくと言ったら、世界はそれを止めにかかるはずだ。だが、ここは東京の地下。兵士を送り込むとしても、相手を刺激してミサイルを発射するかもしれない。簡単なのはEMP攻撃だ。被害は広いが、この機能を停止させられる。『彼』が説得してくれたおかげで、日本の上空に核が撃たれたのだ。核を撃つだけで大ニュースだろ?』

「確かにな」

なんとも馬鹿げた話だな。

tーウイルスを世界中にばらまくのは嘘だったと。核を撃たせて、もっと宣伝したかったようだ。『彼』が気になるが。

『ま、私の仕事も終わった。後は証拠の隠滅だな』

「なんですって!？」

ビービービー!! ランプが赤くなり、警報がなる。

『コードXXXXXが発動されました。この施設はあと十分で焼却処理されます。職員の方々は至急避難してください。繰り返します——』

館内放送が繰り返される。

『君たちはここで死ぬのだ。丸焼きになつてな』

それは嫌だな。

「リヨウ、逃げましょう！」

「ああー！」

俺たちはエレベーターに向かって走り出した。

21話 絶望

レオンSIDE

『オオオオオ！』

「おいおい、何だこいつは？」

「完全に化け物ね」

レオンたちの前に現れたのは、黒いコートに身を包んだ大男。歯茎は剥き出しで、目は潰れている。肩や首には、大きな触手が巻き付いている。

「撃て!!」

レオンはハンドガンを二丁構え、化け物に向かって発砲する。リコモフィルムカメラでネメシスを撮ると、肩に掛けられているアサルトライフルで集中砲火をし始めた。

『オオオ……』

マガジンの中に入っている弾が二人とも尽きた。化け物はそれを待っていたかのよう、レオンに殴りかかった。

「クソ！」

レオンは右にローリングして避け、その隙にハンドガンの弾をリロードする。

「敵さんこっちよー！」

リコは腰に付けていたスタンバトンを化け物の背中に当て、電流を流し続ける。しかし、化け物には効いていないようで、振り向き際に腕が当たり、リコは壁に叩きつけられた。

「痛っ！」

「リコ!!」

レオンは立ち上がり、化け物の身体中にハンドガンを連射する。化け物は血飛沫をあげるが怯みもせず、レオンにゆっくりと近づく。

カチツカチツ

弾が両方とも切れた。残りの弾はもうない。

レオンは溜め息をつくくと、胸にあるナイフを鞘から取りだし、逆手にして構えた。

化け物の攻撃を側面に避け、ナイフで切っていく。背中に回転蹴りを喰らわせるが、化け物はびくともしない。

「ああ、そうかい！」

レオンはナイフを化け物の顔に向かって突き出すように投げた。ナイフは化け物の左目に刺さる。流石に効いたようで、膝をついた。

「これを使って！」

リコがレオンに向かって小さい球体を投げる。その小さい球体は手榴弾だ。

レオンは直ぐ様決断し、手榴弾のピンを抜いて、化け物の口の中に突っ込んだ。そして、飛び込むようにリコを自分の体で覆い隠す。

直ぐに爆発が起こり、喉が焼けるような臭いが漂ってきた。化け物の方を見ると、上半身は吹き飛んでおり、化け物の血肉があちらこちらに散らばっていた。

「あー!」

「どうした!?!」

「サングラスが……」

リコが頭に掛けていたサングラスは、レオンの足に潰され、レンズは粉々、フレームは変形していた。

「す、すまん」

「ハワイで買ったのにー!」

どうやらそれなりの値段だったようだ。

レオンはリコを立ち上がらせる。その直後、回りのランプが赤くなった。

『コードXXXが発動されました。この施設はあと十分で焼却処理されます。職員の方々は至急避難してください。繰り返します——』

館内放送が繰り返される。

「ヤバイわね」

「全くだな……泣けるぜ」

レオンたちは直ぐ様走り出した。

☆

リヨウSIDE

「なにこれ？」

通路を走っていると、上の方から霧状の液体が降ってきた。

「多分エタノールだ。焼却しやすいようにな」

走り続けると、いきなり通路が壁によって遮断された。ちょうど俺たちの間に落ちて

きたこともあり、レベッカと俺は分断された。

「リヨウ!？」

俺は壁を蹴り破ろうと二度三度蹴るが、びくともしない。

「大丈夫だ。でも扉は開きそうにない。別の道を探してみる」

「分かったわ。無事に会いましょう!」

レベッカの気配は無くなった。

「さて、俺もいかないな」

ただ気になることがあった。さつきまでは、エタノールが撒かれてたのに、ここは撒かれていない。

『侵入者排除システムを起動します』

そうアナウンスが流れ、三十メートル先から、網目状の青いレーザーが出現し、真っ直ぐ俺の方に向かってきていた。

「もしかしてこれって……」

俺は、その網目状のレーザーに木刀を投げつける。木刀は無惨にもレーザーによって消滅してしまった。

「やべえじゃん」

サイコロステーキになるのかと思ったが、レーザーは通路全体を遮断しておらず、下に二十センチメートルほど隙間があった。俺は勢いをつけて、スライディングでくぐり抜ける。鼻が若干熱かったが、ちゃんと感触はある。なくなっただけではない。

立ち上がり、いつでもレーザーが来てもいいように警戒しながら少し進むと、ネメシスが天井を突き破って降りてきた。

「おいおい、ちゃんと階段かエレベーターを使えよ」

後ろからブーンと、うなるような音が聞こえてきた。振り返ると、通路の下半分から

網目状のレーザーが出現し、俺に迫ってきた。ネメシスは気にせず俺に殴りかかるが、それを後ろにステップして避け、ネメシスの体を蹴って足場に使い、バク転した。俺の目の前には、青いレーザーがあつた。俺の身体は反転している。俺が見ているのは床の方だ。レーザーは俺の髪を焦がす。ターゲットである俺に避けられたが、それでもレーザーは止まらずに進み、ネメシスの下半身をサイコロステーキにした。

「オオオオオオ！」

下半身を切断されてもネメシスは生きており、床を這いつくばりながら俺に近づく。

だが、相手をしている暇はない。正面からは、通路全体を遮断したレーザーが接近してきていた。避ける隙間など何処にもない。

「万事休すつてやつ？」

ネメシスが俺の足を掴んだが、すぐに振りほどく。

「あつ！」

そういえば、ネメシスは天井を突き破ってきたんだつた。

上を見ると、ポツカリと穴が空いていた。考えている時間はない。俺は壁を蹴って穴によじ登つた。すぐにレーザーが通り、ネメシスはサイコロステーキになつた。

「危ねえー」

心臓バクバクだが、休んでいる暇はない。早くここから脱出しないと。



レベツカSIDE

レベツカはリヨウと分かれた後、元の道を見つけ出した。エレベーターまでもう少しだ。

だが、そのもうすぐとところ、通路を遮る巨体の化け物が現れた。右腕には、自衛隊員の頭を掴んでいる。自衛隊員は生きているようで、頭から手を離そうと必死にもがいている。しかし、抵抗虚しく、その頭はネメシスの触手によって貫かれた。

「化け物……！」

ネメシスは貫いた自衛隊員を投げ捨て、次のターゲットをレベツカに代えた。

レベツカは、辺りにエタノールが撒かれていないことを確認し、サブマシンガンを弾ある限り連射する。弾丸はネメシスの体に食い込むが、ネメシス自体にはそれほどダメージは通っていない。

弾は無くなり、レベツカは使えないマシンガンを捨て、背中のスナイパーライフルを取り出して構える。

トリガーを引く前に、ネメシスがそれを察知したかのように急接近して、レベツカを

殴り付けた。体重が軽いレベツカは、ネメシスに殴られたと同時に空に浮き、壁に叩きつけられた。その衝撃でライフルを離してしまう。

「う、うう……」

痛みを堪えて立ち上がろうとするが、力が入らない。ネメシスはその気も知らず、脳にプログラミングされた命令『人間を殺す』を守るため、レベツカの頭を触手で貫こうと、頭に腕を近づける。

絶対絶命か、そう思われたとき、上から男が降ってきた。

☆

リヨウSIDE

俺は通気孔から出ると、何故か目の前にはネメシスがいた。そして、後ろには倒れているレベツカがいた。

なるほど、理解した。

俺はレベツカの手を掴み、立ち上がらせる。

「ありがとう、リヨウ」

「そんなことよりもだ」

目の前にはネメシス、その先にエレベーター。

上のスプリングクラーからエタノールが降ってきた。もうそろそろ限界だ。

「レベツカ、俺がネメシスの注意を惹き付ける。その隙に梯子を昇っていてくれ」

エタノールは良く燃える。銃を使うと引火して、ここら一帯は大爆発だ。ここで今、こいつを倒すよりも、どれだけ時間を稼いで逃げるかだ。

「分かったわ」

俺はナイフをネメシスに投げ、注意をそらす。

思いの外、簡単にはネメシスは俺の方に寄ってきた。

「今だー」

レベツカはネメシスの後ろを通り抜けてエレベーターに向かった。

『施設の焼却処理まであと三分です』

やばいな……

俺はネメシスに向かってファイティングポーズをとった。ネメシスも俺と同じようにファイティングポーズをとる。どうやらこのネメシスには格闘技の心得があるようだ。その巨体からとは思えないほど軽やかなフットワークを披露する。

ネメシスの鋭い右フックを左前腕で受け止める。その重いフックは、俺の身体全体を痺らせるには充分だった。

「やるねえ……!」

ネメシスの側面に回り込み、腰に右手だけのジヤブを打ち付ける。ネメシスの身体は石のように硬く、殴るたびに骨が軋む。だが、それでも俺の手は止まらない。

ネメシスの反撃が来るが、壁を蹴って空に上がり回避する。空中にいる間に体を回転させ、伸ばした脚を顔面にヒットさせた。着地後、ネメシスの懐に入り、胴体に右フック、左フックを入れ、捻るように体を曲げ、蹴りを腹に決め込む。少しは効いたようで、数歩後ろに後退りした。

再び先程のコンビネーションを決め込もうとするが、二度目は通じず、左フックのときに腕を掴まれた。

凄まじい腕力で、俺を右、左と壁に叩きつける。常人なら、痛みで悶絶してそうなどころだが、不思議と痛みは感じなかった。

腰からサバイバルナイフを出し、ネメシスの腕を斬る。ネメシスはパツと手を離し、俺は直ぐに距離を取った。

「アアアアアア!」

ガブツと、何かが俺の右肩を咬んだ。振りほどき、見ると、顔の半分が何かに貫通されたかのように穴が空いている自衛隊員だった。顔は真っ青になっており、ゾンビ化している。

後ろからも殺気を感じ、前に飛び退いた。ズドン!! と重い音が狭い通路に響く。先程まで俺がいた場所には、ネメシスの鉄拳が降っていた。同位地にいた自衛隊ゾンビの頭は、ネメシスの鉄拳によって潰されていたのだった。

『爆発まであと二分です』

耳のどこかでそう聞こえた気がした。だが、それに気づかないほど、俺は全神経をネメシスへと集中していた。

「うおおおお!!」

咆哮をあげながら、ネメシスの懐を潜り抜け、渾身のタツクルを叩き込む。ネメシスは後ろによるめくが、直ぐに体勢を立て直そうと足を踏ん張る。俺も負けじと助走なしのタツクルを繰り返す。あとちよつとでネメシスが倒れるというところで、両腕で体を掴まれ、天井に投げられた。背中が硬い金属の天井に激突し、ミシミシと嫌な音を立てる。俺の体は自由落下で、床へと真つ逆さまだが、着地と同時に後転し、足への衝撃を減らす。それでも痛みは多少あるはずだが、まるで何も感じない。

ネメシスに向かって、パンチとキックを降り注がせる。まるで脳と身体が一体になったかのように、軽やかに腕や足が動いた。ネメシスも反撃として、俺に重いパンチを繰り返す。俺もネメシスも防御は一切しない。殴り殴られ、蹴り蹴られ……その繰り返しだ。途中で俺の呼吸が止まっていることに気づいたが、今の俺にはどうでも良かった。

た。負けるわけにはいかない。ただ、それだけで俺の身体は動いていた。『爆発まであと一分です』

ボロボロになった拳を握り締め、ネメシスのその顎に強烈なアッパーを喰らわせた。数秒、数十分間にも思えるほど、俺たちは停止した。ゆつくりとネメシスは後ろにドスンと倒れこんだ。

それを見て俺は、何も考えずにエレベーターに向かい、梯子を昇り始めた。深く息を吸ったところで、凄まじい熱気を感じた。下は炎が吹き荒れている。だが、扉で遮断されたのか炎は俺のところまで昇ってこなかった。

「痛ッ!?!」

安心したところで、痛覚が戻ったのか酷い痛みが全身を襲った。危うく梯子から手を離そうとしたところだ。

それは動きたくないほどの痛みだったが、梯子にずっとしがみついとくわけにもいかない。歯を食い縛りながら少しずつ梯子を昇っていく。

☆

気がつくくと、外だった。痛みを堪え、何も考えない内にも外に出ていたのだ。

「リヨウー！」

「リヨウくん！」

レオンさん、記者さん、レベッカが駆け寄ってくる。いつの間にか夕暮れになっていた。

俺は安堵のあまり、倒れそうになるが、レオンさんに受け止められた。

「良くやった！」

仲間の声を聞くだけで気絶しそうだった。

『さっさと乗れ。戻ってみんなで酒でも飲もうぜ』

へりのパイロットも逃げずに待っていたようだ。

俺、未成年なんですけど。

俺はレベッカとレオンさんに肩を貸してもらい、ゆっくりとへりに進む。直後、俺の真上を何かが通過していった。

「え？」

ズドオオオオンと、俺たちを乗せるはずだったへりは、パイロットごと爆発した。

「伏せて!!」

記者さんの怒号の音がすると同時に、目の前にはコンクリートがあった。瞬時に激しい轟音と金属音。駐車場に止めてあった自衛隊のへりが、ガトリングガンによって粉々

にされている。

ガトリングのカラカラ音が止み、俺たちは頭を上げる。

『オオオオオ』

倒し損ねていたのか。ネメシスは、黒いコートが破け、筋肉が肥大化している。その右腕にはガトリングガン、左腕はロケットランチャーが担がれていた。そして、その後ろ、研究所からは三十体を越えるハンターがぞろぞろと姿を現した。研究所で飼われていたハンターが逃げ出したのだ。

「……泣けるぜ」

レオンさんたちは銃を持っていない。

絶対絶命という言葉があるが、今の俺たちには相応しいと心底思った。

2 2話 親友

リヨウSIDE

俺たちの元にゆつくりとネメシス、ハンターが近づいてくる。

「どうする？ 神頼みでもするか？」

「あー、そういや、今年は初詣行つてなかったな」

香月からの誘いがあったが、シエリー救出のために日本に帰れなかったんだった。

「二人とも、冗談を言っている場合じゃないわよ。逃げる方法もない、武器もない」

へりは全てネメシスに破壊され、皆の銃の銃弾は全て尽きてしまったのだ。

「じゃあ、ナイフでも使う？」

「あんな奴と接近戦なんてしたくないわよ」

一匹のハンターが俺たちに走ってきた。そして、腕を振り上げ、空中高くジャンプした。

レオンさんが動けない俺の体を庇うが、いつまで経つてもハンターの攻撃は来ない。

『ポケットの中にビスケットが一つ……』

聞き覚えのある声が、空から聞こえてきた。

「へりよ!!」

プロペラ音と共に銃声が何発も轟く。ハンターを撃ち抜いていた。「おまえら!!?」

自衛隊のへりには、仲間が乗っていた。何度の死戦を共に潜り抜けた友人たち……

「黒瀬ー! 私たちが仲間を見捨てるわけがないでしょ!!」

ピンクのツインテール、自称天才の女。高城沙耶。

「黒瀬君、言っていたではないか! また会おうと」

剣道の達人、毒島冴子。

「シヤアア!」

そういう間にも俺たちにハンターが近づいてくるが、平野により、胴体を撃ち抜かれて倒される。

「的は外したことがなくてね」

「嘘つけ!」

軍オタ、平野コータ。

三機のへりから、自衛隊十五人と小室、毒島先輩、宮本が降りてきた。

「黒瀬、もうダウンか?」

小室が手を差しのべる。

「まだまだだよ」

俺はその手をガツチリと掴み、立ち上がった。

「リヨウの友達か？ 頼りになるな」

「ああ。自慢の仲間だ」

身体は痛むが、動けないというほどでもない。肩の噛まれた傷もすぐに回復するだろう。

「今から、化け物の掃討作戦を開始する。一匹も逃がすな！」

部隊の隊長らしき人物が、残りの十四人に命令する。

「ハンターにはツーマンセルで戦ってください。あのデカブツとは距離を取るように！」

「聞いたな!? では……てえええ!!」

自衛隊による一斉発砲が行われる。

「記者さんとレベツカはヘリに乗ってくれ！ レオンさん、これを」

俺はサバイバルナイフと太股のハンドガン、マガジンを取ってレオンさんに渡す。

「もう一戦、頑張るとするか」

ネメシスはどう頑張っても自衛隊には処理は出来ないだろう。俺とレオンさんで倒すしかない。

ネメシスがガトリングガンを俺たちに向けると、ガトリングガンの銃身は、空からの射撃により貫かれた。

平野がヘリから狙撃している。

「さて……やるか」

反撃が始まった。

小室SIDE

「コンのっ!!」

戦闘が始まった。

小室は、ギリギリまでハンターを惹き付け、その手に持っているショットガン、『イサカM37』の引き金を引いた。『イサカM37』から、散弾が発射される。小室は体全体にのし掛かる反動を抑えた。使いはじめて一週間も経っていないが、小室にとって、相棒のようなものだ。外すわけにはいかない。だが、ハンターにすんなりと避けられた。相必中距離のはずだが、小室はハンターの知能と敏捷性を甘くみていた。

「クソー」

次弾を装填するために、ハンドグリップを素早く引いた。ジャコン、と気持ちいい音

が鳴り、空薬莖を排出され、弾丸が薬室に装填される。

——次は外さない！

再びハンターを狙おうと、銃口を正面に向けるが、そこにはハンターの姿はなかった。

「孝！ 上よ！」

宮本の掛け声により、反射的に空に銃口を向ける。小室の目には、右腕を突きだし、空気を遮りながら真っ直ぐ小室の元へと落ちてくるハンターの姿をしっかりと捉えていた。引き金を引くよりも、体が防御の体勢になる。ショットガンを横にして上に突き出す。ハンターの攻撃をがっちりを受け止めるが、衝撃によって地面に叩きつけられた。

「かハッ！」

鈍い痛みが背中を襲う。だが、今の小室はハンターの腕を抑えるので精一杯だ。そして、ハンターの左腕が空高く振り上げられた。直ぐにでもその左腕は小室の首を刈ろうとする勢いだ、その腕は毒島の居合い斬りによつて切断され、地面に落ちた。ハンターの切り口からは、大量の血が噴き出す。

「小室君、無事か!？」

「何とか……!？」

小室は毒島の手を掴み、立ち上がった。

「——危ない!」

ハンターは右腕を切断されても尚、倒れずに残った右腕で毒島に襲い掛かる。だが、その手前でハンターの頭は、宮本の銃剣付き『M4A1』によって貫かれた。

「お二人さん、油断はしないことね」

「反省しときます」

「互いにカバーしよう。一人で戦わないことだ」

小室は十五メートルほど先にいるハンターに向かつて発砲した。命中するが、致命傷は負っていない。ハンターが怯んでいる隙に毒島と宮本は一気に駆け寄り、その緑の体を突き、そして斬った。

一体一体倒すのに手間がかかり、戦闘力が高い。小室は、リヨウが小室たちを連れていきたくなかった理由を納得した。

（こんなバケモノを今までリヨウは相手にしてたのか）

今は自衛隊が戦っているおかげで、ハンターの大部分は彼らによつて処理されているが、もし、小室たちだけで戦っていたとしたら、囲まれ、既に殺されていただろう。

「小室！」

リヨウの声がした。見ると、リヨウはハンターを蹴散らしながら駆け寄ってくる。木刀でハンターの攻撃を受け流し、頭を叩き割る。複数体がリヨウに襲い掛かるが、苦もせず五秒ほどで叩きのめした。

「香月とか先生はどこにいるんだ？」

「先に避難してもらったよ。高城のお父さんにアンブレラの研究所に向かったことを聞いたんだ」

そう話している間にもハンターは襲い掛かるが、リヨウは閃光のような斬撃をハンターの胴に喰らわせた。

「んじや、皆無事なんだな!？」

「ああ！ 僕と麗の親も無事だ。それと先生の友達とも合流したよ。今は上のへりで狙撃をしてくれてる！」

「それを聞いて安心したよ！」

リヨウは俊足の駆け足で、ハンターを倒しながら戻っていった。

「あいつ……人間か？」

小室の口から、ついそんな言葉が漏れた。

リヨウSIDE

「どうだった？ 友達全員無事だった？」

「ああ。ちゃんと親孝行も出来たんだってよ！」

俺とレオンさんは互いに背中を預けながら次々と襲い掛かるハンターを倒していく。体はまだ痛むが、ちゃんと動けるようになった。流石は俺の回復力だ。

襲い来るハンターの顔面をぶん殴って吹き飛ばす。レオンさんはハンターの頭を銃で撃ち抜く。

『オオオオ！』

ネメシスが吠える。

「バケモンは俺たちをお呼びのようだが？」

「じゃあ行くとするか」

ダガーナイフを出し、ネメシスに投げつける。深々と刺さるが、大して効いていない。レオンさんも銃で攻撃するが、これも効かない。

「レオンさん、どうすんの？」

「逃げるか？」

「それはない」

俺はネメシスにナイフを投げ続ける。ネメシスもやられっぱなしではいられないよ。うで、壊したヘリのドアを引きちぎり、投げつけてきた。

「しゃがめ！」

とつさにしゃがんで回避したが、後ろから短い悲鳴が聞こえた。背後に自衛隊員がい

たようだ。だが、俺たちは振り返らない。ナイフを投げながら少しずつ距離を詰める。ネメシスは焦れたいのか、俺たちの元に走ってきた。腕から飛び出している触手を使い、俺たちに振り回してくる。

「来たぞー！」

ローリングで回避し、肥大化した胴体を木刀で叩きつける。バキッ！ とネメシスの骨ではなく、木刀が折れた。レオンさんはナイフと蹴り技で同時攻撃するが、ネメシスはビクともしない。俺も回し蹴りを放つ。丸太を蹴ったような感触があった。

ネメシスが振り回した触手に当たり、レオンさんは吹き飛ばされ、壊されたへりに背中を激突させる。

「離れるんだー！」

自衛隊のへりが近づき、アサルトライフルでドアから援護が入る。ほとんど命中するが、それでもネメシスは動じない。

『オオオオ！』

ネメシスはへりのテールロータを引きちぎり、攻撃しているへりに投げる。テールロータは回転しながら操縦席へと突き刺さり、コントローलを失ったへりは落下、研究所に突っ込んで爆発した。

俺は周りの状況を確認した。小室たちは生き残っている。だが、地上に降りた自衛隊

は、十五人から六人に減っていた。そこらに、人間の首が落ちてゐる。ハンターに殺られたのだ。

「こんな奴を逃がすわけにもいかないし——」

その時、空から大量の弾丸がネメシスへと降り注いだ。

『待たせたな、リョウ！』

その声はクリスさん本人だった。ヘリを操縦している。そして、機関銃を撃っているのは——

「クレア!？」

「約束したでしょ!? 必ず助けにくるって!」

いや、嬉しいなあ。本当に助けに来てくれるなんて。

クレアはネメシスに集中砲火に、流石にヘリの機関銃には勝てず、ネメシスは倒れた。

「目標の殲滅を確認!」

どうやらハンターも倒し終わったみたいだ。

クリスのヘリが着陸する。

「怪我人はこっちに乗せてくれ!」

俺はレオンさんを担ぎ、自衛隊のヘリに乗せる。

「全く、それでも見習いエージェントか?」

「油断は禁物だな」

「こつちにはもう乗れない。君はあのへりに乗ってくれるか？」

「オーケー」

俺はクリスさんのへりに乗った。

「ありがとう、クリスさん、クレア。わざわざ日本に来てくれるなんてな」

「あなたなんて、私を助けに南極まで来たじゃない」

あ、そうだった。

「飛ぶぞ」

へりは飛び立つ。

研究所から五百メートルほど離れて、俺はポツリと言う。

「終わった……」

瞬間、弾丸の雨がへりに襲い掛かってきた。

「何だ!？」

「これを見て!」

双眼鏡を見ると、ネメシスがガトリングガンを自衛隊や俺たちのへりに撃ち続けている。

「あいつ、まだ生きていたのか……!」

しかも、ガトリングガンに予備があつたとは。五百メートル離れているといつても、数発は既にヘリに当たつている。

「あんな化け物野放しにしておくわけにもいかないな。リヨウ、そこにロケットランチャーがあるだろ？」

ロケットランチャーが立て掛けられている。

「いくらなんでも化け物と離れすぎよ！」

「いや、リヨウなら当てられる」

ネメシスとは五百メートルほどの距離が空いている。

俺はロケットランチャーを肩に担ぐ。初めて持ったが、結構重いもんだ。

ドアを開ける。

撃てるかどうかは分からない。銃もクロスボウも生物を狙って引き金が引けないん

だ。だが――

「やってやるよ」

風向や風速を肌で感じる。ヘリは空中で停止することなど出来ない。ネメシスとの距離を詰めることも出来ない。ガトリングガンを避けるために揺れる。こんな状態で五百メートル先にいる豆粒のような奴にロケット弾を当てることなど、普通なら不可能だ。

頭をフル回転させ、ネメシスに必中させるためにあらゆる計算を尽くす。

「……だー！」

俺は引き金を引こうとするが――

「ぐっ!?!」

激しい頭痛に襲われ、何かの映像が脳裏でフラッシュバックする。

見たことのない記憶だが、何故か懐かしいという感情もあった。誰かの体が真っ赤に染まる。誰かの体に注射が打たれ、その体はバケモノに変わる。

「あ、ああ……」

俺の目からは涙が出ていた。これがどういうものかは不明だが、涙が止まらない。

「リョウ……」

引き金を引こうとする指にそっと、クレアの手が重ねられる。温もりが俺の身体中を伝っていく。

「私が引き金を引くわ。リョウは狙って」

「……わかった」

俺は左腕で涙を拭い、再度計算を開始する。

「今！」

俺の指の上に置かれているクレアの指が動いた。シユコツと軽い音を出し、重い口

ケット弾が、計算された通りに空を駆け抜けていく。

「いつけえええ!!」

「豆粒ほどのネメシスは、ロケット弾が当たると思っていなかったのか、動かずにガトリングガンを撃ち続けていた。だが、俺の知能の方が上だ。俺が狙って、クレアが撃った弾丸だ。当たる！」

「豆粒ほどネメシスはロケット弾に命中し、爆散した。双眼鏡で確認するが、辺りにあるのは肉片だけだ。」

「やったのね……」

「ああ」

夕暮れの空に民間人を乗せた三機のヘリが、関東の外へと向かう。

「終わった……」

俺は倒れこむように座った。クレアも隣に座り、温かいその手で俺の手を軽く握る。

俺とクレアは沈み行く夕陽を、いつまでも眺めていた。

三章 エピローグ

「リヨウー！」

へりから降りたとたん、香月が俺に飛び付いてきた。

「香月……」

二日振りなのに、まるで何十年も会わなかったみたいなのに、懐かしい顔ぶれがそこにはあった。

小室、宮本、毒島先輩、鞆川先生、平野、高城、ありす、ジーク……そして香月。

「なんか、このメンバーが揃うのって、めっちゃくちや久しぶりに感じるな」

本当に、誰一人欠けないでよかった。

結局、デイルク・ミラーを逃がしてしまったが、俺は諦めない。アルバート・ウエスカー、デイルク・ミラー、利用されたアンブレラ……例え時間が掛かろうとも、必ず潰す。

そう、あの日の決意を胸に……

番外編

みんなで海水浴!

あの後の事をざっと説明すると、レオンさんは怪我を治療した後、帰国、クリスさんとクレア、レベツカも帰国した。記者さんのフィルムカメラは残念ながら政府に没収された。

俺たちは二日ほどの精密検査のあとに解放され、高城の家（巡ヶ丘市）に今も居座っている。

『今や自衛隊は殺人集団になってしまったからねえ』

『閉鎖された関東に無断で入り、行方不明となった者が今月で二万人を越えました』

『感染者愛護団体が福岡県で過激的なデモを行い、六百人以上が逮捕されました』

『感染者には愛を!』

「……………」

あれから三ヶ月、毎日こういった内容のニュースがあっている。

民間人の救出作戦で別の地方から、自衛隊、警察、消防含め、二十万人以上が関東に

投入されたが、その内、九万人が死亡又は行方不明となった。

あの地獄を経験していないものから見れば、tーウィルスの感染者はただの病人だ。ゾンビを保護しようという考えには賛成出来ないが。

「リヨウ、いる?」

高城のお父さんから借りている俺の部屋のドアがノックされた。

「ああ。入っていいぞ」

友人であり、あの地獄を一緒に駆け抜けた人物、香月彩が俺の部屋に入ってきた。

「沙耶ちゃんか明日、みんな海に行かないかって言ってるけどどうする?」

「そうだな……暇だし行くとするか」

季節は夏、海水浴なんてここ何年も行ってなかったし、久しぶりに泳ぎたいな。

「じゃ、早速明日の準備だ」

皆で行くだななんて、修学旅行みたいだな。めちやくちや楽しみだ。

「いやっほおお! 海だあああ!」

子供のように叫び、砂浜を駆け抜け海に飛び込む。付け加えると、この行動は俺では

なく、佐藤リコ、通称記者さんだ。

海に遊びにきたメンバーは、もちろんあのメンバー+記者さん。

海なので、当然皆は水着姿である。

「よしっ! 黒瀬、どっちが速く海に入れるか勝負しようぜ」

小室も子供のようにはいしゃいでいる。

「おっしや! よーい、スタート!」

俺と小室は走り出した。俺もまだ子供だからね。しょうがないね。

熱い砂浜を走り抜け、海に飛び込む。

心地よい冷たさが身体中に広がり、さっきまでの暑さが吹き飛んでいった。

「俺の勝ちだな」

「黒瀬は速すぎるんだよなあ」

「小室も鍛えろよ」

まあ、俺は鍛えてもそれほど筋肉がつかないんですけどね。

「一応鍛えてるけど、やっぱり黒瀬は凄いや。そんなに強そうにも見えないのにな」

「余計な一言だなあ。よし、次はあの離れ小島まで泳ぐぞ!」

「泳ぎなら負けないぞ!」

香月SIDE

香月彩は、周りにいる女たちを睨み付けていた。細かく言うと、首と腹の間に挟まれている脂肪のことである。

「どうしたのよ、アヤ。胸なんか隠して」

高城が香月に問い掛ける。

「だつてええ……」

「恥ずかしいの?」

「恥ずかしいよ! こんなおっぱいの大きい人たちに囲まれて!」

別に友達的女性陣に胸を見られて恥ずかしいというわけではない。毎日一緒に風呂に入っていることもあつて、その大きさにはもう慣れた。しかし、外で水着になり、友人たちだけではなく、他人にも見られ、比べられるのが嫌だったのだ。

「香月さん、ほら、小さな胸が好きな人だっているし!」

「フォローになつてないよ!」

香月は、平野の顔を殴る。

「ギャホ!」

平野は吹っ飛び、海に落ちた。

「全く、うちの男性陣はバカばかり！」

「言えてるわね」

不良二人と軍オタ一人、しかも全員性格がバカなのだ。

「でもそういうところが可愛いんじゃない」

鞠川が胸を揺らせながら、香月たちに近づいてきた。その胸はスイカ並みだ。

「おいおい、あの女の人の胸、でかいな」

「隣のピンクツインテールも結構な……」

「黒髪の方は？」

「良いけど、胸がなあ……」

男たちの話し声が香月の耳に飛び込んでくる。

「……………」

男は胸の大ききで女を決める。そんなことは香月も分かっているが、心のどこかで悔しい気持ちがあることは確かだ。

「はあ……」

憂鬱な気分だが、今を楽しむことにする香月だった。

リヨウSIDE

「リヨウちゃん、あーん」

「あーん」

ありすから、海の家で買った焼きそばを食わせてもらおう。

「いやー、ありすが食べさせてくれるだけで美味しき十倍だよ」

「えへへ、ありがとう！」

ありすもジークも高城の家で暮らしている。結局、小室たちはありすのお母さんを見つけることが出来なかったそうだ。一応、各避難所にありすの所在を書いているのだが、未だに何の連絡も来ていない。死んだ……というのが現実的だろう。

「ワン！」

ジークが吠える。

「ジークはダメ。今ご飯を用意してあげるからね」

いやー、ありすは可愛いなあ。可愛いってのはどんなもんか分からないけど、ありすみたいな子のことを言うんだらうなあ。

「ぶはあ、海に焼きそばにビール、超美味い！」

記者さんは買ったビールを一气飲みし、焼きそばをたらふく食べていく。

「って、何ビール飲んでるだよ！ 帰りの運転は!? 鞠川先生もビール飲んじゃった

じゃんー」

「リヨウくんが運転すれば良いのよ。出来るじゃない」

「そりやそうだけど……」

帰りは寝る気満々だったのに……

この記者も高城の家で世話になっており、巡ヶ丘市でも記者になることが出来た。話を聞くと、どうやらその道では有名な人みたいだ。

「今更だけど、遊んでいて良いの？ もうすぐで学校なんですよ？」

「ああ。まあ、良いんだよ」

俺たちは二学期から、巡ヶ丘市の高校へ転校という形で入ることになった。ありすは小学校へ、鞠川先生は大病院で働くことになった。先生の友達のリカさんや小室たちの親も職に就くことが出来た。こんなに事が早く進んだのも政府のおかげである。

四ヶ月前、俺たちは精密検査をされた後、俺だけが連行され、アメリカと日本政府の役人やらなんやらに会わされた。確か、アダム・ベンフォードという、アメリカ政府高官の人だったか。

その話を短く済ませるとすると、俺の数々の功績は認めているので、アメリカ政府の元につけ、という話だった。めんどいので断ったが。でも、レオンを助けて貰った礼をしたいということだったので、俺と俺の仲間の社会への早期復帰を頼んだのだ。

「私はリョウくんがアメリカのエージェントになってる姿を見たかったなあ」
「嫌だよ。俺はフリーで良いね」

俺はクリスさんとB・O・W・狩りをやっている方が性に合ってるからな。対バイオテロ部隊とかが出来たら入ってやるのにな。

ま、今を満喫するとしますか！

俺は腹の中にたつぷりと焼きそばを入れ、海に飛び込むのだった。

帰り、やつぱり俺が運転することになった。

鞠川先生も記者さんも酔いつぶれて、寝てしまっている。他の女性陣も、遊び疲れたのか、ぐっすりと寝ていた。

「黒瀬は何でも出来るんだね」

平野が唐突に言った。

「そうか？」

「車もへりも船も、色んな免許を持つてるじゃないか」

「暇だったからな」

「暇だからヘリの免許を取るのか……」

「つつても、将来のためだよな。どんな職に就いても良いように考えた末、国家資格をたくさん取ろうということになったんだよ。」

「んー」

助手席に座っている香月が、俺の肩にもたれ掛かってきた。

「おい、香月」

「ムニヤムニヤ」

ダメだ。寝ている。

「小室、こいつどかしてくれ」

「僕には難しいな。平野、やってくれ」

「無理ですね。殺されます」

「はあ? 寝てるから大丈夫だよ」

「すうーすうー」

香月は吐息を立てる。

「ほら、寝てる」

「黒瀬、世の中知らない方が良いときもあるんだよ」

ルームミラーを見ると、小室には毒島先輩と宮本が寄りかかり、平野には高城が寄り

かかっている。

なるほど、確かにその状態じゃ、香月を退かすことなんて出来ないな。ま、それほど負担じゃないし、無理に退かそうとすると起きちやうかもしれないもんな。このまんまでいるか。

香月の寝顔を見ると、その顔が一瞬、ニヤリと笑った気がした。

クレアと買い物! / 小室の悩み!?

クレアと買い物!

八月二十八日

俺は一人で、アメリカまでやって来ていた。そして、今の俺の両手は、紙袋でいっぱいだった。

「クレア、まだ買うのか?」

「ええ、もうそろそろ肌寒くなるから」

何を買っているかというところ、ラクーンシティをレオンさん、クレアと共に脱出したシエリー・バーキンの服やら何やらである。

シエリーはアメリカ政府による厳重な監視下のもと、軟禁状態にされている。アルバート・ウエスカに連れ去られた件で、その監視の目はもっと厳重になったという。

クレアに聞いた話に寄ると、シエリーの両親はアンブレラの研究員だったそう。父はG-ウイルスを自身に打ち、化け物に……。シエリーの体にはG-ウイルスの胚が植え付けられたが、レオンさんとクレア、そしてシエリーの母のおかげで何とか命は助かった。だが、母は死に、完全に化け物になった父は、レオンさんとクレアによって倒

されたらしい。

両親を失う……か。

ありすもシエリーも幼くして親を亡くしている。そしたら、俺もクレアも含まれるが、違いはアンブレラの造ったウイルスで失ったことか。

「ほら、荷物持って」

「あいよ」

今更だが、俺がアメリカに來た理由は、荷物持ちである。クレアから呼び出されたと思ったらこれだ。日本から遙々やって來て、目的が荷物持ちだぞ!? もうそろそろで学校だつていうのに……。

大型ショッピングセンターということもあり、一気に物が買えるのは良いことだが、俺の手が限界なのである。

「キヤアアアアアア!!」

いきなり、二階の方から女性の叫び声が聞こえてきた。

「なんなの!?!」

「良くないのは確かだな」

二階から緑の物体が俺たちの前に飛び降りてきた。

「シャアア!」

「……………」

「……………」

なんか……………もう……………見慣れた顔だわ。

「うああああ!!」

「バケモノだああ!」

周りはパニック状態で、ハンターから直ぐ様逃げていく。

「クレア、今両手がふさがってんだけど」

「床に置けばいいでしょ」

「その通りですね」

俺は荷物を床に置き、戦闘態勢を取る。

「クレア、武器は?」

「残念ながら持ってきてないわ」

「そりゃほんとに残念だな」

ハンターが俺たちを取り囲む。

「ねえ、どうしてハンターがこんなところにいるんだと思う?」

「知らん。どつかのテログループのペットかもな」

今は考えることよりも倒すことを優先するか。

ハンターは俊敏な動きで俺との距離を詰め、その鋭利な爪で、肉を引き裂こうとする。が、上にジャンプして回避し、着地と同時に手をグーの形にしてハンターの頭を叩き割った。

次から次へとハンターが襲い掛かってくるが、攻撃を全てかわし、柔道で叩き伏せる。もちろん、それで倒せるほど柔な相手じゃない。

「お、良いもんみつけ」

俺は観葉植物の幹を掴み、振り上げて陶器鉢をハンターの頭に叩きつけた。陶器鉢はバリんと割れ、使い物にならなくなる。

「あと三体だな」

二体はクレアが相手をしてきている。残りはぱぱつと倒すか。

先頭にいたハンターが、いつもと同じ単調な攻撃を繰り返してくるが、俺はその腕を掴み、ハンマー投げの様に体を回転させ、頃合いを見て手を放す。俺の手から離れたハンターはその勢いのまま、壁に背中を激突させた。次に、後方にいたハンターが襲い掛かってくるが、俺は気配を察知し、その場でバク転をしてハンターの背後に回る。足の上に振り上げ、ハンターが振り向いたところで、強く降り下ろした。俺の踵はハンターの頭蓋骨を割った。最後に、直ぐ近くにいたハンターの両肩を掴んで動けないようにし、その頭にヘッドバッドを喰らわせる。

「うん、終了!」

「こっちもよ」

クレアも素手だったので手こずったものの、無傷でハンターを倒していた。

「もう居ないみたいだな」

全部で七体か。多分、どっかのテロリストがハンターの性能実験ということで、ショッピングセンターに放ったのだろう。結果は失敗に終わったわけだが。

「大丈夫ですか!」

全てが終わってから、大量の警備員が駆け付ける。

「誰かに倒されたっぽいよ? 俺は見えないけど」

「私も見てないわ」

俺は床に置いた袋を取り、格好よくその場を去るのだった。

小室の悩み!?

八月三十一日

小室孝は悩んでいた。

その悩みとは、自身がリーダーに抜擢されているということである。

小室はリーダーに向いていると言われるが、小室自身は納得が出来なかった。

(どう考えても黒瀬の方が向いてるんだよなあ)

頭も良いし、戦闘力も黒瀬の方が上だ。それなのに何故自分がリーダーなのか？ 黒

瀬にも聞いたが、『お前の性格は皆に好かれるんだよ』と、よくわからない回答を貰った。

今確信した事は、今のままではダメだ、ということだった。

何かあったときのリーダーなのに、戦闘力は毒島や黒瀬の方が上だ。

(護身術とか習つとした方が良いな)

素手で戦う場合、小室は殴る蹴るの単純な攻撃しか出来ない。しかし、柔道や空手、合

気道などを習っておけばどうだ？ 殴る蹴るよりも、スマートに相手を倒すことが出来

る。それに合気道は、相手に怪我をさせることもなく、敵を無力化出来ると聞いている。

「よー」

小室は決意を固め、外に飛び出た。

高城の家は庭も含め、飛んでもない広さだが、黒瀬がいる場所は大体分かっていてた。

この四ヶ月間、ずっと同じ家で過ごしているのだ。あの場所にいるだろう。

庭の噴水の近くにある木の上に黒瀬はいた。木の太い枝の上に股がり、背中を木にもたれさせて寝ている。

小室たちから見れば、どう見ても寝ずらそうな格好だが、黒瀬曰く『この場所は俺の体格にフィットしてるんだよ』だそう。それなら仕方ない。

「黒瀬、起きてるか?」

黒瀬はパツと目を開け、ジャンプして木を下りた。

「なんだ?」

眠そうにあくびをしている。

「黒瀬って武道に長けてるだろ? 僕に教えてくれないか?」

「別に良いけど……俺よりも高城のお父さんに習ったらどうだ? 結構強いらしいし」

「それは……」

もちろん小室もその事を知っていた。理由は様々だが、一番は——

「まあ、高城のお父さんは怖いからな」

(言っちゃったよ!?)

誰も言えないことを黒瀬は普通に言った。もし、この場に本人がいたらどうなることか。

(でも、沙耶のお父さんなら笑って返しそうだな)

この前、高城の父が黒瀬に手合わせを願ひ出ているのを小室は見ている。結局は断つたらしいが。黒瀬にその事を聞くと、『闘つたら死ぬまでやめそうにないじゃん?』らしい。それもそうだな、と小室は思った。

「さて、じゃあ最初は何の練習する? 空手、合気道、柔道、剣道、ジークンドーでもボクシングでも良いぞ」

(バケモノか……?)

まさか、武道以外にもやっていたとは……小室には予想外の事だった。

「合気道……で良いかな」

「合気道か。技だけ覚えれば良いんだよな?」

小室は頷く。

「じゃ、まずは見本だ。小室、俺に攻撃してこい。全力で」

「良いのか?」

「ああ。全力で、だぞ?」

「……わかった」

と、その瞬間、小室は後ろから殺気を感じ、咄嗟に身構えた。当然、後ろには誰もいない。

(いや——!?)

その殺気は、後ろからではなく、四方八方から来ていた。直ぐにその状況を造り出している者も分かった。

(黒瀬か……)

黒瀬は少し微笑んでいる。その微笑みは、小室の全身を身震いさせるほど強烈なものだった。決して、変な微笑みをしているわけではない。だが、その笑顔の奥から恐怖を感じた。

(クソ!)

足がガクガク震え、齒はガチガチと鳴り、冷や汗が大量に出る。動き出そうにも、身体が拘束されているように動かない。

「どうした? 来ないのか?」

黒瀬の殺気が止まった。小室の身震いもなくなる。

(今がチャンス!)

殺気を当てられると動けなくなる。小室はその前に黒瀬に近づこうと走り出す。

「うおおおお!!」

その拳を握り締め、黒瀬との距離が間近になると、先ほど約束した通り、全力で黒瀬の顔に殴りかかった。

「え?」

小室には何が起こったのか分からなかった。現在分かっていることと言えば、自身の身体が宙を浮き、目の前に地面が見えることだろうか。

（合気道が護身術？ 良く言ったもんだ）

そんな事を考えながら、頭を地面に打ち付け、小室の意識は暗転した。

「ん？」

小室は、自分のベッドの上で目覚めた。

窓の外を見ると、既に日は落ちており、時間も十九時を過ぎていた。

「……夢か」

こんなに恐怖を感じたのは、四ヶ月振りだ。良く良く考えてみれば、人間があんな殺気を出せるはずがない。漫画の中だけだ。

「おかしな夢を見るもんだなあ」

別に黒瀬に怖いイメージを持ったことはない。ただ人間離れしてるなあと思ってるぐらいだ。

「おにーちゃん！ ご飯だよー！」

ありすの声だ。

「今行くよ」

小室はベッドから下り、立ち上がる。ズキズキと頭が痛む。

(寝すぎたか……?)

それほど痛みはしないので、小室は気にせず部屋を出て、夕食を食べに行くのだった。

学年順位！／記者の仕事！

学年順位！

「く、く、く、悔しいい！」

高城沙耶は、掲示板に張り出された順位を見て、その感情をあらわにした。

新しく通い始めた巡ヶ丘市の高校、この学校でも頭の良さなら誰にも負けない自信はあったが、忘れてしまった存在がいた。

張り出された順位表には、テストの学年トップ10が書かれているが、高城は二位、その上は黒瀬だった。

（あいつの存在を忘れるなんて、バカなの!?!）

黒瀬の存在自体を忘れていたわけではない。彼の頭脳の存在を忘れていたのだ。

あの四ヶ月、ずっと同じ家で過ごしてきたのが、今回の失敗に繋がったようである。家での黒瀬といえば、ロリコンのようにありすに優しく接し、鈍感さをフルパワーにして香月にいつも殴られている。そんな黒瀬の姿を毎日、見ていた高城の目には、ただのバカにしか写らなかつただろう。

「高城さん、落ち着いてください。良くあることじゃないですか」

「うっさい、デブチン!」

高城は平野の頭を小突く。

だが、平野の言う通り、良くあることなのだ。いや、よくではない。一年生の一学期から、黒瀬が学年一位、高城が学年二位という一回も変わったことのない順位のままだ。「はあ……」

それにしても、未だに分からないことがある。何故黒瀬は頭が良いのか、という疑問だ。黒瀬は授業を真面目に受けていない。それによくサボっている。それなのに、黒瀬は学年トップを別の高校でも保ち続けているのだ。その理由を昔に聞いたことがあるが、何故か勉強しないでも普通に分かると言う。

(んな、アホな……)

と、高城も思うが、黒瀬が嘘を言っているようにも思えない。

「よし、今日こそあいつの真実を突き止めてやるんだから!」

「え? 黒瀬の所に行くんですか?」

「ええ、そうよ。文句ある?」

「いえ、文句はないですけど、黒瀬なら中庭に……」

高城は窓から中庭を見る。中庭のベンチには小室と黒瀬が座り、昼食をとっていたが、その行為は十人にも及ぶ男子生徒によって遮られた。

「てめえが二年の黒瀬と小室か……。聞いてるぜえ？ 転校してきてから間もないつてのに調子にのつてんだろ？」

「え？ 別に調子にはのつてないけど」

二階にいる高城たちにはそんな会話が聞こえている。高城たちの周りにも、いつも間にか大勢の生徒たちが、窓から中庭を見ていた。これから起きることが気になるのだろう。

「高城さん、ヤバイんじゃないですか？ あいつらは学校で有名なヤンキー集団ですよ」

「アンタは今まで何を見てきたのよ」

黒瀬は武道の達人だ。小室も最近、黒瀬から武道を習っているらしい。黒瀬から習うということとは、既に小室も化け物レベルになっているかもしれない。

「やつぱり調子にのつてんなあ!! よつしやあ、こいつらの顔面をジャガイモにしてやれ！」

十人が一齐に小室と黒瀬に襲い掛かるが、その光景はまるで映画さながらで、黒瀬たちは十人の攻撃を全て避けている。黒瀬は武道の有段者ということもあり、目立った場所では手を出したくないのだろう。不良たちに怪我をさせたとなれば、悪となるのは黒瀬の方だ。何とも世知辛い世の中なのだろう。

「凄……」

平野の口から絶句の声が漏れる。いや、絶句をしているのは、この光景を見ている全員だ。ギャラリーは飛んでもない人数になっており、中庭の状況を静かに見守っている。

黒瀬と小室は、次から次へと襲い掛かる不良の鉄パイプやバッドの攻撃をかすりもしないで避ける。黒瀬ならそのくらい簡単だと高城は理解しているが、小室も中々のものだ。黒瀬に攻撃の避け方でも習ったのだろうか。

開始から五分も経つと、ギャラリーの数は三百人を越えており、四階、三階、二階、一階の窓から興奮気味にその光景を見ている。その中には教師の姿も見えるが、どうやら止めるはつもりはないようだ。

(どこの学校でも教師はクズなのね)

高城の脳裏に一瞬、あのメガネ教師が写ったが、すぐに振り払う。

七分も経つと、不良たちも殴りかかるのに疲れたようで、地面に倒れこむ。

「こいつら……化け物か?」

不良のリーダー格は、汗でダラダラになりながらも、黒瀬と小室に向かって疑問を口にする。

「もちろん人間だ」

『おおおおお!』

パチパチと、その光景を見ていたギャラリーから、惜しみ無い拍手が小室たちに贈られる。黒瀬と小室は、一切不良に手を出さず、勝利を収めたのだ。

「お前ら、早く散れ！」

先程までその光景を何もせず眺めていた大人たちが、教師面をして生徒たちを教室に戻す。

この神業とも言える光景を見せられても、高城の気持ちは燃え盛っていた。

「次こそは……」

「次こそは？」

「黒瀬を超えてやる！」

そう宣言したのであった。

記者の仕事！

記者の仕事も大変だ。

行きたくないところに行かされ、やりたくない仕事をやらされる。フリーという選択肢もあったが、フリーになるには、歳をとってからと佐藤は考えているので、普通の雑

誌出版会社に務めることにした。

そして、佐藤リコが今回取材で向かわせられた場所は、関東ギリギリにある臨時につくられた自衛隊の基地だ。この基地にいる自衛隊の仕事は、関東に誰も入らないように規制線を張ることと、その見張り。又、感染者が近づいてきた場合、感染者の排除だ。(全く、何でこんな場所に送られるんだか)

不満が積もるばかりだが、仕事をやらないわけにはいかない。

自衛隊の基地に近づくにつれ、人気が多くなってきた。その理由は分かっている。

感染者を殺さずに保護しようとする団体がデモを起こしているのだ。

(……バカらしいわ)

当事者からしてみれば、あんな化け物を保護するなんて馬鹿げている。ゾンビは人に噛みつき、傷口から感染させ、ゾンビを増やしていく。そんな光景を何度も目の当たりにされれば、デモを起こしている連中は何も知らない異常者でしかない。当然、佐藤もそのことは理解している。

「はあ……」

自衛隊の基地に近づけば近づくほど嫌気が刺してくる。取材の内容は、1 感染者にどのような処置を施しているか

2 関東の状況は? 3 何故感染者を保護しないのか

「……………」

3の質問は、1で殺す前提の質問だと思うが、それは置いておこう。今は、このデモ行進をどうにか潜り抜け、自衛隊の基地に入らなければならぬのだから。

「あゝ、終わった〜」

佐藤はだらりとした声を出し、背をぐっと伸ばす。

(後は基地から出て、福岡に帰れば終わり〜)

佐藤としては、こんなところから今すぐにでも離れたかった。

「突破されたぞ!!」

「撃てええええ!!」

タタン、タタンとアサルトライフルの銃声が鳴る。

何に突破されたというのか。ゾンビなら黒瀬に聞いた情報だと、栄養を取らなければ死んでしまうと聞いているので、ゾンビの可能性は有り得ない。リッカーだろうか？

落ちていて考えていると、その姿が見えた。体は緑色で人間と爬虫類を合わせたような生物、ハンターだ。あの研究所の生き残りがいたのだろう。

全部で五体、次々に自衛隊員の首を鋭い爪で刈っていく。

「これはヤバそう」

空手の黒帯を習得している佐藤にも、あんな化け物に素手相手で立ち向かう勇氣はない。というか、あんな化け物を素手で倒せる人間などいないだろう。

佐藤の目の前に、頭のない自衛隊の死体が飛んできた。それと同時に、一匹のハンターも。

「あの、狙うなら自衛隊にしてくれませんか?」

もちろんハンターにそんな言葉は通用しない。

ハンターは鋭い爪で襲い掛かる。

「いやー!」

佐藤は前方にローリングし、ハンターの後ろに回る。素早く背中にチョップを喰らわせ、少しよろけたところで回し蹴りを喰らわせた。ハンターは転倒するが、直ぐに立ち上がった。

「やっぱり素手じゃ無理ね」

佐藤は死んだ自衛隊に駆け寄り、ハンドガンとサバイバルナイフを拝借する。

「構えはこうでいいのよね?」

重心を低くし、ハンドガンを右手に、ナイフを逆手にして左手に持ってグリップに添

える。黒瀬に習った構え方だが、これがハンターに通用するかどうかは分からない。

腕を上げて近づいてくるハンターに佐藤は二発発砲した。肩に当たるが、ダメージはそれほど受けていない。

「ほんと、めんどくさいわねー！」

ハンターが至近距離に入る前、弾有る限り撃ち続ける。だが、それでも倒れない。銃を捨て、左手に持っているナイフを、黒瀬の真似をして投げつける。ナイフはハンターの頭上を通り越していった。

（こんなのを命中させるなんて……）

佐藤は改めて黒瀬の凄さを実感した。しかも、黒瀬は同時に八本投げて全て命中させることが出来るのだ。もう神業の域に達している。

ハンターは飛び掛かるが、ギリギリで避ける。

「あとはこれしかないわね」

佐藤が掴んだのは、首から下げているカメラ。記者としては、カメラは相棒のようなものだが、佐藤にはそういう思い入れはない。カメラはただのモノ、商売道具である。

ネットワークストラップをくるくる回し、遠心力でカメラの威力を高めていく。

「さあ、来なさいー！」

ハンターは腕の突き出し攻撃を行うが、それをステップで避け、鈍器と化したカメラ

を顎に喰らわせる。ハンターは数秒立ち止まった後、ゆっくりと膝をついて倒れた。残りの四体はもうそろそろで除去されるだろう。

「今のうちに退散退散!」

何とか命は助かったが、壊れた一眼レフカメラは高くつくだった。

正月／リツカーさんの不運

正月

『明けましておめでとう!!』

0時00分、年が明けた。俺たちは高城の家でどんちゃん騒ぎで飲んで食う。ありすは寝てしまっているが、他の全員起きており、暴れたり誘惑したり何が何だか。

「それにしてもギリギリだったな」

「ほんとよ!」

俺は昨日まで、ヨーロッパの方でB・O・W.の駆除をやっていたのだ。何とか間に合つてよかった。

「黒瀬く〜ん♪」

半裸になった鞆川先生が、胸を揺らしながら近づいてくるが、

「ダメです! 小室君の方に行ってください!」

香月に食い止められてしまう。

「え〜? でも小室くんの所はもう足りてるし〜」

見ると、小室の左右には毒島先輩と宮本が張り付いていた。

「じゃあ、平野君！」

平野は鼻血を出して倒れていた。

「あくもう、なんでこんなに男性陣が少ないのよ！」

んーまあ、香月の言う通り、俺たち男の人数に比べて女の人数が圧倒的に多いんだよな。えーと、男が俺、平野、小室で、女が香月、宮本、高城、毒島先輩、鞠川先生、ありす、リカさん、記者さん、3：8とその差は歴然だ。

「ま、別に良いんじゃないの？ 女が多くても楽しいじゃん」

「そういうことじゃない！」

なら、どうということなのか。分からん。

「黒瀬君、ダーツで勝負しない？」

小麦色の肌の女性が話しかけてきた。その人物は、射撃では警察官トップ5を誇る凄腕の女性、南リカさんだ。

彼女は鞠川先生の友人で、少しだけ休憩させてもらったメゾットのマンシヨンの持ち主だった。床主国際洋上空港でゾンビを殲滅した後、小室たちと合流して、最後に研究所の戦いで空から援護してくれた。

「良いぜ。ダーツは得意なんだ」

バーで良く金持ちのおっさんたちと勝負してたからな。

俺とリカさんの白熱した試合は続いたが、15ラウンドしても決着がつかなかったため、ドローとなった。

一月一日の正午、俺たちは巡ヶ丘市のとある神社に来ていた。大人組は仕事なので、俺の運転で。

「凄い人の多さだなあ」

「そりゃ正月だし」

人が賑わい過ぎてよう分からん。正月に神社に来る人つてたくさんいるんだなあ。

とりあえず五円玉を賽銭箱にぶちこみ、二礼、二拍手、一礼の後、心の中で願い事をする。

(……死にませんように)

これ以上の願い事なんかないな。とりあえず死ななければOK

「黒瀬は何を願った?」

小室が聞いてきた。

「死なないように、だな」

「なんだそれ？」

小室は鼻で笑う。これ以上の願い事なんてあるか？

「小室は？」

「僕は冴子が受験に受かりますように、ってお願いしたよ」

あ、そういうえば、毒島先輩は大学の受験を受けるんだったな。もうそろそろか。

「全く小室君、そんなことを願わんでも私は大丈夫だよ」

「念には念を、だろ？」

小室と毒島先輩は慎ましく笑っている。なるほど、こいつらが噂に聞くリア充というやつか。

「ありすちゃんは何をお願いしたの？」

「ありすはね、皆といつまでも一緒にいられますようにって、お願いしたんだ！」

ありすは良い子だなあ。俺もいつまでもありすと居たいよ。

俺たちは次におみくじを引いた。

「やった、大吉だ！」

「僕は吉だな」

「ありすも大吉！」

よし、俺も大吉だな。俺はこう見えて中々運が良いんだぞ？

おみくじを捲り、中身を見る。

「……………」

「黒瀬はどうだった？」

平野が聞いてくる。俺は皆におみくじを見せた。

「マジか……………」

まさかの大凶だった。そもそもおみくじに大凶なんてあったんだね。

「なにになに？ 『今年の夏ごろに死にかけるでしょう』『あなたは死ぬまで不幸が続くでしょう』『親しい友人が死にまくるかもしれない』……………悲惨すぎるだろ」

夏ごろに死にかけて、俺が死ぬまで不幸が続いて、親友が死にまくる？ どういうこったよ。俺ってこれからそんなに不幸な目に遭うの？

「リヨウちゃん、撫で撫でしてあげようか？」

「お願いします」

「ナデナデ」

俺はありすから撫で撫でしてもらったのだった。

リッカーさんの不運

「あく面倒くさかった」

「全くだ」

小室と黒瀬は、巡ヶ丘市にある大型の病院で検査を受け終わり、帰ろうとしていた。

小室たちは一ヶ月に一回、精神科に行くことを政府から義務付けられている。政府の人間は小室たちがどうやってあの地獄を切り抜けたのか知っているのだろう。人間の形をしたものを何度も殴り、何度も撃つたのだ。そんな人間を野放ししておくわけにはいかない。

今日は黒瀬以外は用事があり、二人で来ていたのだ。

「小室、このあとゲームセンター行かないか？」

「やだよ。黒瀬がいたら、僕まで出禁にされてしまう」

黒瀬はゲームが得意で、よくゲームセンターで遊んでいる。フィギュアやぬいぐるみなどをゴツソリと取っていくので、店から出禁にされることもしばしば。取ったフィギュアやぬいぐるみは、中古店に売ってお金にしているらしい。

「じゃあ、新しく出来た喫茶店ならどうだ？」

「それなら良いね。帰りにありますにお土産を買っていこう」

小室はありすへのお土産は何が良いのかを考える。先日、黒瀬が一メートル以上のク

マのぬいぐるみを渡していたので、お菓子が良いだろうか？

そんなことを考えながら、一階へ繋がる階段を降りようとする。

「ギャアアアアアアア!!」

三階の方から、この世のものとは思えないほどの絶叫が轟いた。

「黒瀬!」

「ああ」

小室と黒瀬は頷き合い、三階への階段を一気に昇った。

階段を駆け抜けた先の左側の通路には、見たくもない光景が広がっていた。人間の皮が剥がれたように全身の筋肉と脳が剥き出しの生物が、鋭い牙と爪で血だらけで倒れている男性を引き裂き、その肉を貪り食っていた。

「なんなんだよ……」

あまりに突然な事で、小室は唾然としていた。左にいる黒瀬の顔は至って冷静だ。まるで慣れていてるのかのようだ。いや、実際に慣れているのだろう。黒瀬は何度も外国に渡り、B・O・W. を倒しているのだ。

「小室」

黒瀬が口を開いた。

「なんだよ……?」

小室の声は震えていた。怖い。当たり前だ。目の前で人間が人間であった何かに食われているのだから。

「あいつの名前はリッカー。ゾンビの進化系だな。そんなやつがなんでこの病院にいるのかなんて知らんが、バイオテロの可能性が高い。お前は逃げる」

「嫌だと言ったら？」

バイオテロ、その言葉は何度も聞いた。最近、アメリカやロシアの公共施設に化物が送り込まれ、何十人にも及ぶ命が亡くなっている。だからこそ、小室は逃げたくなかった。逃げたとしても、黒瀬は一人で化物と戦うだろう。あの時からリーダーを任されている小室にとって、仲間を見捨てることなど出来なかった。

「んじゃ仕方ないね。手伝ってもらおうか」

予想とは違い、良い返事が戻ってきた。

小室と黒瀬は身構える。辺りに他の化物は見当たらないが、たがが一体だけ、ということはないだろう。

リッカーは小室たちに気付き、栄養補給を中断する。

「気を付けろ。抗体を持ってないお前には、攻撃を喰らうのは許されぬぞ」

「へ、へえ？」

t—ウィルスの抗体、黒瀬の話によると、日本人の場合は抗体を持ってない割合が多

いらしい。黒瀬はリッターから攻撃されても大丈夫だが、小室はそうもいかない。運良く抗体を持っていた、という可能性など0に等しい。

「来るぞー！」

リッターは、凄まじい跳躍力で小室に飛び付いてくる。

「うっ!？」

あまりの速さに驚いたが、黒瀬の特訓のおかげである程度は認識出来ていた。リッターが小室の身体を攻撃する手前、拳を作り、鍛えられた反射神経を存分に発揮して、リッターの顎にアッパーを喰らわせた。

リッターは目の前で倒れ、黒瀬は追い討ちをかけるように頭を踏みつけた。

「大丈夫か？」

「ああ」

手にヌメリとした感触が残り、少々の痛みを感じる。だが、外部損傷は一切ない。

「じゃ、次行くぞ」

下の階からいくつもの悲鳴が聞こえる。まだまだ化物は放たれているようだ。本当は心臓が破裂しそうなほどの勢いで鳴っているが、それも言ってもらえない。

「さっさとかたずけて喫茶店に行こう」

「こりや、誰がやったんだ？」

警察の一人がポツリと言った。

「分かりません。我々が突入した時は既に……」

病院を封鎖し、何十人も警察が調査をしているが、其処ら中に、頭の潰れた化物の死骸が広がっていた。

「福岡にも化物がいたもんだな」

テロリストによって投入された化物十体は、全て頭を潰され殺されていたのだった。

4章 G A I D E N

23話 スターライト号

季節は夏になった。俺たちは三年生に進級し、毒島先輩は大学へと通っている。

俺は、寮の自分の部屋で荷物をバッグの中に詰め込んでいた。

「黒瀬、また外国に行くの？」

同じ部屋の平野が聞いてきた。こんな質問をするのも無理はない。俺は暇さえあれば、何度もアメリカやヨーロッパに行っているのだ

「ああ。アメリカの豪華客船にな。こんな手紙が来たんだ」

平野に外国から届いた手紙を見せる。平野は手紙を手に取り、読み始める。

「なにになに？ 『初めまして、いや、久しぶりの方が良いかな？ 私の名前はジョン・スミスというものだ。君の両親と共に働いていた。親しい間柄だね。久しぶりに君の顔を見たくなった、と言ってもあの頃は君も赤ちゃんだったからね。私の顔を覚えてはいないだろう。チケットを付けておいた。船の名前はスターライト号。豪華客船だから、それなりの格好をしてきた方がいいと思う。君の都合もあるが、出来れば来てほしい。私の部屋は隣だ。ゆっくり話そうじゃないか。親愛なる黒瀬涼へ』……これでいくつも

りなの?」

平野が疑うのも仕方ない。

「まあな」

「でも、ジョン・スミスって」

「分かってる」

ジョン・スミスは、アメリカ人の偽名として良く使われている。日本でいう山田太郎のようなものだ。他にも色々怪しい部分があるが……

「黒瀬の両親って研究者だっけ?」

「ああ。何の研究をしていたかは分からないけどな」

ともかく、俺の両親を知っている人物かもしれないのだ。俺の両親は、いや、俺自身も謎が多い。その謎が少しでも解明できるなら、例え罫だろへ行つてやる。

「レオン、君に任務だ」

訓練中のレオンに、政府の上官の男性が話しかけてきた。

「はい。こういった内容ですか？」

レオンは訓練をやめ、上官に敬礼をする。

「スターライト号という豪華客船に新型B・O・W・が乗り込むという情報を嗅ぎ付けた。君には一人で船に行ってもらい、速やかに新型B・O・W・の排除をすることだ」

そこまで聞いたレオンには、一つの疑問が思い浮かんでいた。

「でもなぜ私ですか？」

レオンはまだ若手だ。他にも優れたエージェントならいるはずだが……

「君は他のエージェントよりもB・O・W・との戦闘が多い。君にしか頼めないことだ」

確かにそうそうB・O・W・と戦うエージェントなどそうもないだろう。

「分かりました。行かせてもらいます。作戦の決行日は？」

「……明日だ」

バリーの家に電話が掛かり、クリスから悪い知らせがあった。それは、アメリカの豪華客船に新型B・O・W・が乗り込むとのことだった。

「バリー、すまない。頼めるか？」

「もちろんだ、クリス。クリスも頑張ってくれ」

クリスもジルもヨーロッパの方でアンブレラと戦っている。こちらにはすぐには来れない。

バリーは電話を切り、すぐに出掛ける準備をする。

「パパ？ どこかに行くの？」

「ああ。悪者をやっつけに行く。モイラ、ポリー、いい子にしてるんだぞ」

「だるっ」

俺、黒瀬涼は、豪華客船スターライト号に乗り込み、用意された部屋のベッドでゆっくりと休んでいた。

流石は豪華客船、波の揺れは一切感じず、まるで陸にある豪華ホテルにいるような感覚だ。

まあ、来て早々無駄足ということが分かったが。俺の両親の友人と称するジョン・スミスさんは、隣の部屋に來ると書かれていたが、部屋から人の気配はなく、ノックして

も出てこない。船員に聞いたところ、誰も予約はしていないらしい。ますます謎が深まるばかりだ。なぜジョン・スミスは俺をこの船に乗せたのか。全然分からん。

考えても仕方がないので、大広間に行くことにした。有名なピアノ家が来ているらしい。何はともあれ、折角何百万と掛かる豪華客船に来たのだ。楽しんで帰ろう。俺としてはありすと有意義な夏休みを過ごしたかったが。

「すげえな」

それほど有名なのか、すごい人だからが出来ていた。周りにいる人たちは高そうなタキシードやドレスを着ていて、お金持ちということがわかる。……豪華客船なので当たり前だが。俺ももちろんタキシードを着ている。高城に選んでもらったやつだ。

二階から下の大広間を見下ろすと、ショートの黒髪で、黒いドレスを着た高校生ぐらいの女性がピアノを美しく奏でていた。一瞬、日本人かと思ったが、よく見ると中国人だ。

彼女が弾くピアノの美しい音色は、心をリラックスさせ、何とも言い難い気持ちにさせてくれる。これなら人気がでもおかしくないな。俺もピアノは弾けるが、こんなに美しい音色は出せない。

柱に貼ってあったポスターを見てみると、彼女の名前が判明した。ユーチェン・ハンというようだ。やはり中国人だった。

「ん？」

ふと、気になる人物が俺の目に写った。それは若い金髪の男で皮のボンバージャケットを着ている人物。

俺はその男に近づき、話し掛ける。

「何でレオンがここにいんだよ？」

「俺もびつくりだ。まさか知り合いと会うなんて思っていなかった」

俺たちは友人のように話す。彼の名前はレオン・S・ケネディ。エージェント見習いである。

「マジか……」

俺とレオンは人気のないところで話し、事情を聞いた。

どうやら、新型B・O・W.がこの船、スターライト号に忍び込んでいるらしい。レオンの任務は新型B・O・W.の排除だ。

「リヨウ、すまないが手伝ってくれないか？ 情報は新型B・O・W.としか……」

「それで面倒くさくなつて、ピアノを聞いてたのか？」

「それ、上には言うなよ……」

「分かってるよ」

だが、確かに情報が少なすぎるな。新型B・O・W。ね。ネズミくらいの大きさだったら流石に探すのは無理か……？

「それにしてもレオン」

「なんだ？」

「俺たち、もつと平和なところで会えないかな？　これで会うの四回目だけど、全てゾン

ビとかB・O・W。が絡んでんじゃん」

電話やメールでのやり取りはあるが、実際にはまだ四回しか会ってないのだ。

「じゃあ、俺に会いに来てくれよ。シエリーのところには行つたんだろ？」

「嫌だよ。エージェントになるの断つたし、気まずいじゃん？」

アダム・ベンフォードという人からお誘いはあつたが、丁重にお断りさせてもらった。

俺はまだ幸せに暮らしたいし。

「じゃ、早速、B・O・W。探しに行くとするか」

「リヨウ、これを」

レオンは胸ポケットに手を入れ、何かを取り出して俺の前に出す。それは黒塗りのサバイバルナイフで、新品のように刃が綺麗だ。

「ありがたく受け取っておこう」

正直、ナイフ一本じゃ心許ないな。十本はほしいところだが、文句も言っではいられない。

「グッドラック」

「そつちこそ」

内ポケットにナイフを入れ、俺とレオンは分かれてB・O・Wの探索に乗り出した。

24話 大男

リョウSIDE

「結局こうなるんだよ!!」

俺はゾンビ三体に囲まれていた。二時間ほど部屋でゆっくりして外に出てみたらこれだ。

豪華客船スターライト号には、大量のゾンビが発生してしまった。考えられる可能性は二つ。船に潜入していたテロリストがトウウィルスを撒いた、もうひとつは、レオンの言っていた新型B・O・Wがトウウィルスを保菌していたかのどちらかだろう。後者の方が圧倒的に可能性が高いな。

俺を囲んでいたゾンビの眉間にぱつとナイフを刺し、移動する。レオンと連絡を取りたいが、残念ながら無線機を持ってきていない。豪華客船だからと完全に油断していた。

とりあえず俺の目的は、1 生存者の救出 2 レオンと合流 3 可能なら新型B・O・Wを倒す 4 船から脱出 となる。船からの脱出は、レオンがアメリカ政府に頼んでヘリやらを送ってもらえるだろう。第一は、生存者の救出だ。レオンは訓練を受けてい

るし、ゾンビとの戦闘経験もある。だが、他の奴等はそうもいかない。しかもこの船に乗っている奴等は、戦闘のせの字も知らなそうな富裕層ばっかだ。

「誰かいるか!？」

俺は大声をあげながら船の中を回る。当然、ゾンビが寄ってくるリスクがあるが、生き残りをほつとくわけにはいかない。だが、誰からの返事も来ない。ゾンビに見つかるのを恐れて声をあげないのか、それとも全員ゾンビになってしまったのか。全員ということはないだろうが、ほとんど、言っていないほどの割合の人数がゾンビになっているだろう。スターライト号は全長330メートルの船、看板やホールは広いが、この狭い通路で囲まれたら終わりだ。

「誰もいないのか!？」

誰も呼び掛けに応じない。わざわざ一室ずつドアを開けて調べる時間もない。

「だあああ! めんどくせえ!」

辺りにいるゾンビを蹴散らしながら進む。この狭い通路の中での戦闘、時間を掛けたらすぐに囲まれてしまう。それに、会うたびに倒してもキリがない。この船には2500人が乗れる。それに近い人数が乗っているのは確かだ。

「生存者、出てこーい!!」

苛立ちを発散させるように声を出しながら、船内を駆け巡る。

レオン S I D E

「クソ！ 数が減らない！」

合衆国エージェント、レオン・S・ケネディは、正面にいるゾンビの眉間に銃弾を撃ち込む。撃ち抜かれたゾンビは本当の死を迎え、床に崩れる。

ゾンビの弱点は頭。頭を破壊すれば、その活動を停止させられる。逆に言えば、頭を破壊しないといつまでも動き続けるのだ。レオンの脳裏には地図から消滅した街のトラウマが甦るが、今はそれを気にしている場合じゃない。過去のトラウマを振り払い、ゾンビを撃ち続ける。

今やバイオテロの数が多くなり、B. O. W. も殺戮兵器として使われている。クーンシテイ、シーナ島、ロックフォード島や南極基地、トウキョウのような規模のバイオテロが再び起こるのも時間の問題だ。

マガジンの中の弾丸を全て使う頃、やっと人が通れる隙間が出来た。

「失礼するね」

レオンはゾンビの隙間を縫うように潜り抜け、通路を突破する。

「キヤー」

近くから子供の叫び声が聞こえてきた。レオンはゾンビを無視し、声のした方まで一気に駆け抜ける。

通路を曲がった先に、その声の主がゾンビに囲まれていた。

「伏せろ！」

声の主はレオンに気付き、床に伏せた。レオンはそれを確認し、囲んでいるゾンビの頭に撃つ。

五秒もすると、ゾンビは全員床に倒れ、頭から血を流していた。

「大丈夫か？」

レオンは声の主の女の子に近づく。彼女は黄色のコートを着ており、歳はまだ十二、十三歳といったところだろうか。どこにも傷はなく、感染の兆候もない。

「俺はレオン・S・ケネディ。君は？」

「ルシア……」

ルシアはレオンを警戒している。

「そうか、親はどこにいるんだ？」

「いないわ」

「いない……?」

いないとはどういうことだろうか。もう既にゾンビになってしまったのか？

「この船には一人で乗ったの」

「そうか……」

これ以上聞くのは止しておこう。だが、彼女は過去に何かがあったことは推測出来る。

「ここは危険だ。ルシア、俺に着いてきてくれ」

「分かったわ、レオン」

マガジンの中の残弾を確認し、狭い通路を進む。弾もそれほどない。節約をしたいところだが、ナイフはリヨウに渡してしまった。

(リヨウは無事なのだろうか……)

リヨウはまだ子供だ。彼の力は知っているが、それでもレオンにとっては子供に代わりはない。リヨウと早く合流しときたいが……

「レオン、怪物が来るわ!」

「怪物?」

辺りを注意深く確認するが、ゾンビもネズミも一匹たりともいない。

「本当よ! きつとあの怪物だわ」

レオンはトリガーから手を離さず、辺りを警戒する。

「その怪物って?」

「大男よ。私を追いかけてきたの。何とか逃げられたけど……」

大男といえば、レオンがラクーンシティで戦ったタイラントが思い浮かぶ。その大男が新型B・O・W。なのだろうか。人をゾンビにさせる新型のタイラントという可能性がある。

「もう近いわ!」

ルシアはそう言うが、姿も気配も何も無い。

「ウオオオオオオオ!」

突如、レオンの目の前の床に大きな穴が空き、ルシアの言った大男が床から飛び出してきた。

「何だ……こいつ」

大男は服を着ておらず、身長は二メートルを軽く越えている。腹部に大きな穴が空いており、そこから何本もの触手が出ている。

「こいつが新型B・O・W。か……!」

レオンは銃口を大男に向け、撃ち続ける。しかし、びくともしない。全くと言っていいほど効いていないのだ。

「ルシア、どこかに隠れろ!」

「レオンは!?!」

「デカブツの相手をする！」

ルシアは素直にレオンの言うことを聞き、走り去った。

「さあ、俺が相手だ」

残弾も残り少ない。何とか長く時間を稼がなければ……

大男はその大きな腕をレオンに降り下ろした。ギリギリのところでもバックステップで避ける。大男が殴った床を見ると、大きなへこみが出来ており、その威力が伺える。

だが、当たらなければどうということはない。

「喰らえ、デカブツ！」

レオンは大男の攻撃を避けながら、急所である頭に撃ち、何とか体力を減らそうとする。タイラントやネメシスと戦ってきたレオンなら分かるが、こういった化け物は並大抵の武器じゃ殺せない。例え、今持っている全弾を頭に命中させたところで倒せはしないだろう。しかも、この狭い通路での戦いだ。一瞬の油断も許されない。

マガジンの残弾が切れ、ポケットから新たなマガジンを出そうと手を入れるが、マガジンの感触はない。

「マジかよ……」

全ての弾を使い果たし、近接武器もない。

「アアアアア」

背後からゾンビがレオンに組み付く。レオンの肩を食らおうと必死に顎をガチガチ鳴らすが、レオンもそうはさせまいと、頭を押さえつける。

「いい加減に……」

だが、前方にいる大男も待つてはくれない。レオンの腹に鋭いパンチを入れようとする。

「させるか!」

くるつと、背後にいたゾンビと共に回り、ゾンビを盾にする。だが、威力が強く、盾にしたゾンビもろとも後ろに吹っ飛ぶ。

「クソ!」

すぐ立ち上がろうとするが、大男に足を捕まれた。そのまま投げられ、大男がさつき開けて出てきた穴の下にレオンは落とされる。

「ガハッ!」

レオンは大きく息を吐いた。受け身を取ることが出来ず、背中は床に衝突、痛みが襲う。それでもゾンビに襲われないように落ちた先を見渡すが、ゾンビの姿はない。

「……泣けるぜ!」

レオンは意識は暗転した。

25話 ルシア

リヨウSIDE

「ぎゃあああああああ!」

通路を歩いていると、透き通った女の声なのに下品な叫び声が聞こえてきた。

「生き残りか!」

俺はナイフを構え、走り出す。声が聞こえてきた通路を曲がろうとすると、

「うおっ!」

「痛ッ!」

同じタイミングで曲がってきたさっきの声の主であろう人物と激しく衝突した。二人とも全力疾走であったためか、その威力は俺が背後に飛ばされるほどだった。

「いてて……大丈夫か?」

声の主はしりもちをついており、痛そうにお尻を擦っていた。

「大丈夫じゃないよ! このアホチン!」

ひどい言い草だ。助けようと駆けつけたのに。

『アーアーアー』

女性の背後にゾンビが近づいてきていた。

「クソ！」

俺は直ぐ様立ち上がり、今にも女性に襲いかかろうとしているゾンビの顔面を殴る。ゾンビは思いつきり後ろに倒れ、その間に頭にナイフを突き刺した。

「全く……」

頬についた血を拭い、女に近寄る。

「ほら、立て」

俺は女に手を差し伸べる。俺の手を掴み、女は立ち上がった。

改めてその姿を見してみる。黒いドレスにショートの黒髪、中性的な顔立ちをしているその女性は、有名なピアノ演奏家、ユーチェン・ハンだ。

「なに!?! ボクの身体を舐め回すように見て……」

「ボク……?」

女がボク? 初めて聞いたよ。もしかして、本当は男だったたり?

「あの、性別は?」

「女だよ! 君もボクを男だって言うのか!?!」

「言わないけど……」

なるほど、女にも一人称が『ボク』の奴がいるんだな。覚えておこう。

「俺の名前はクロセ・リョウだ。見ての通り、ただの客だよ」

「ただの客がナイフを？」

痛いところを突かれるなあ。……ナイフだけに。

「君は？」

知ってはいるが、一応聞いてみた。

「ボクの名前はユーチェン・ハン。演奏家だよ」

演奏家、言うわりには子供だな。俺より二歳か三歳年下なだけだけど。まあ、あれほどのピアノが上手いんだ。実力は本物だろう。何より無事で良かった。

「ユーチェン、船内は非常に危険な状態だ。俺と行動してくれ。良いな？」

「やだ」

「……………」

「お父様が、知らない人には着いていくなかって」

なるほど、そう教育されたのか。確かに知らない人にはついて行ったら駄目だな。

「じゃ、頑張れ。生きて脱出できたらいいな」

俺が走り去ろうとすると、

「ちょ!?! 待ってよ!」

ユーチェンが俺の手を掴んだ。

「なんだ？」

「か弱い女の子を一人にする気か!？」

うわー、出たよ。こんな奴には注意しろって香月から言われてんだよなあ。助けたせいで自分も死ぬから。

ま、でも助けを求められたのに見捨てることなんて俺には出来ない。……ほんと、いつか人を助けて死ぬかもな。

俺たちは歩きながら話す。

「誰か知り合いは乗ってるのか？」

「いや、ボクだけだ。マネージャーも連れてきてない」

「それはそれは」

「そもそもお父様が悪いんだ。ボクは久々に休暇を取りたかったのに、お父様がこの船での仕事を入れるから。どうやら、他のお金持ちの人にも演奏を聞かせてやって、自分の地位を向上させたいんだってさ。ボクの演奏なのに、全てお父様の力になるんだ」

「……………」

何かよくわからんけど、語り始めたぞ。

「そもそもボクは趣味でピアノを始めたんだ。暇なときに弾いて楽しむ。でも、お父様はボクに才能があるとか言い出して、コンクールとかに出場させて……それでテレビに

出るようになって。終いには豪華客船で弾くようになった！」

「それって駄目なのか？」

人生としては成功しているように思えるんだけど。

「駄目だよ！ ボクは学校に通って、友達と話して、そして好きな人とか出来るような生活を送りたかったんだ。でも……今じゃそんなこと出来ない」

うわ、学校に通えないのは辛いな。俺も関東を脱出してからの四ヶ月、ずっと暇だったし。学校に行ってもサボるだけなんだけどな。

「んじゃ、お父様とやらにそれ言えば良かったんじゃないか？」

「嫌だよ。お父様が悲しむ」

「……………」

香月……女ってこんなやつもいるのか？

まあ、ユーチェンは結局、お父さんのことを嫌いにはなれないってやつだな。俺にはよくわからんけど。

バリーSIDE

「ありがとう。気をつけて帰ってくれ」

『バリーも気を付けろよ』

元S・T・A・R・Sのメンバー、バリー・バートンは、友人のヘリで送ってもらい、豪華客船スタースターライト号のサイドデッキに下り立った。

友人がヘリで帰るのを見送ると、肩に掛けていたアサルトライフルを掴み、トリガーに指を当てる。

ヘリの中で散々無線で応答を願ったが、何の返事もなかった。バリーの予想なら、既に船内で最悪な事が起こっているのだろう。

雨がポツポツと降ってきた。予報では嵐になるらしい。バリーは船内に入るドアを開け、音を出さずに中に入る。

「……サイアクだな」

バリーは船内の光景を見て、そう呟いた。

ロビーの床には血や肉が飛び散り、顔が青ざめた人間がかすれた声を出しながら辺りを徘徊している。死者たちは高級そうなドレスやスーツを血で汚し、食欲を満たすために食料である人間を探している。

バリーはゾンビに見つからないように、ソファアールの後ろに身を隠す。

「クソ、やはり遅かったか……」

船員や客がゾンビ化しているのを見る限り、新型B・O・Wはティーウィルス系統の化物のようだ。

バリーの武器は、アサルトライフル、ハンドガン、愛用のマグナム、ナイフといったところだ。これだけの武器でゾンビと新型B・O・Wの相手をしなければいけない。「味方がいてくれれば良いんだが……」

淡い期待を胸に、バリーは音を出さずにロビーを突破する。奴らと戦っている時間はない。早急に新型B・O・Wを倒し、生存者を連れて脱出しなければいけないのだ。こんなに大きな船である。救命ボートもたくさんあるだろう。

バリーは行く手を遮る邪魔なゾンビの背後に静かに近寄り、顎を掴んで固定させ、ナイフで首をかつさばいた。

倒れるゾンビの身体を支え、音を立てないように静かに床に倒す。

「これじゃ、生存者がいるなんて分からんな」

辺りの惨状を見れば分かる。生き残りがいたとしても数えられるほどだろう。

「キヤーー!」

バリーの耳に少女の叫び声が聞こえてきた。

「生存者か!?!」

バリーは前方にいるゾンビを無視し、生存者の方に向かう。目の前の扉を蹴り破り、奥へと進むとその姿が見えた。屈強な肉体の大男が、少女に襲いかかろうとしている。少女の腕には既に裂傷がある。

「クソ！」

アサルトライフルを構えて、大男の背中に向けて撃った。案の定、大男の目標はバリーに代わり、その屈強な肉体を活かした力任せの攻撃を仕掛けてくる。だが、バリーは元S・T・A・R・Sだ。攻撃を軽やかに避け、すぐに体勢を立て直す。

「こいつが噂の新型B・O・Wか……」

洋館で見たタイラントの改良型にも見える。

『ウオオオオオ！』

大男は雄叫びをあげながら、バリーに突進してくる。

(速い!?)

バリーは咄嗟に判断し、右に跳んで攻撃を避ける。

やはり外見で惑わされてはいけないようだ。知能はあまりないようだが、それ故に注意しなければいけない。

「バケモン、喰らいやがれ！」

バリーはアサルトライフルの引き金を絞る。タタタタタンと軽いリズムで、弾が銃口

から弾き出され、大男の身体に食い込んでいく。すぐにカチカチと音が鳴り、弾切れを知らせられ、マガジンを捨てて新たなマガジンを装填する。

流石に大男もダメージを負ったようで、動きが鈍くなっている。もう一押しだ。

「喰らえ！」

マガジンの弾を空っぽにする勢いでバリーは容赦なく、ありつただけの弾を喰らわせた。

『オオオ……』

大男は膝を崩し、ドスン！と床に倒れこむ。そして、アメーバのようにドロドロに溶け、その姿は見えなくなった。

「やったか……?」

手応えがない気のするが……。バリーはアサルトライフルのマガジンを交換し、少女に近づく。

「怪我は大丈夫か？」

「ええ……」

バリーは裂傷があるはずの少女の腕を見るが、何故か跡形もなく消えていた。

「傷が……なくなっている?」

「傷? 何の事?」

「どうということだろうか。バリーが見た腕の裂傷は見間違いだったのか？ いや、見間違いだっただろう。傷がすぐになくなるはずがない。」

「すまない、おかしなことを言った。俺はバリー・バートン、君は？」

「ルシアよ。バリーはレオンの友達？」

「レオン？」

「予想もしていない名前が出てきた。レオン・S・ケネディとは、一度顔を合わせている。」

「知り合いだが……なぜ？」

「銃を持っているし、レオンもバリーのように強かったわ。離ればなれなってしまったけど……」

「レオンもここにいるのか？」

「ええ。この船のどこかにいると思うわ」

「アメリカのエージェントが銃持ちでこの場所にいるということは、ただの休暇ではないみたいだ。合衆国も今回の新型B・O・Wの件を知っていたのだろう。目標はもう倒してしまったが。」

「ルシア、俺に付いてきてくれ。レオンを見つけた後、この船を脱出する」

「さて、もう一仕事だ。」

26話 微かな疑問

リヨウSIDE

「ぎゃあああー」

いきなりゾンビが現れ、ユーチエンが下品に叫ぶ。

「うるさい……」

ユーチエンはどうやら怖がりのようだ。ゾンビに会うたびにこうやって叫んでいる。

とりあえず、その諸悪の根源となっているゾンビを殴り飛ばし、頭を踏みつける。

「なんか……手慣れてるね」

その光景を見て、ユーチエンが言った。

「俺だつて手慣れたくないさ」

俺はゾンビの相手ではなく、B・O・Wの相手がしたいんだ。ゾンビは前も言った通り、死んではいけない。では、奴らは頭の中で何を思っているのだろうか。『助けてくれ』とか『殺してくれ』とか懇願しているかもしれない。それとも何の自我も残っておらず、ただ食欲のために動いているのだろうか。そんなのはゾンビになったやつしか分からないし、分かりたくもない。ただ、俺もゾンビを好きで殺している訳じゃない。

「でさ、こいつらって、映画とかで見るゾンビって奴だよな？」

「まあ……そうだな」

ラクーンシティや関東のように表立った事件があらながらも、本当にゾンビを信じている人は少ない。関東でのゾンビは、報道で未知のウィルス感染者と伝えられ、ウィルスに感染すると麻薬中毒者のように理性を失うようだ。そのウィルスを運んでいるのがその感染者なんだけどな。

「……ねえ、リヨウは何でこの船に？」

ユーチェンが不意に変な質問をしてきた。

「手紙を貰ったんだよ。俺の両親の知り合いらしくて、俺と話したいって。でも——」

俺は違和感を感じ、言葉を遮った。

「リヨウ……？」

「……………」

俺は、両親の知り合いに会いたいと伝えられ、この船に乗った。しかし、両親の知り合いは不在で、しかも船でバイオハザードが起こった。……出来すぎてないか？

推測できるのは、アンブレラが俺を殺そうとこの船に誘き寄せた。——いや、アンブレラなら街中でもどうどうと俺を殺せるだろう。こんなに回りくどいやり方をしなくてもすむはずだ。では何故？

「……………」

駄目だ、分からん。ただの偶然、というにもやっぱり出来すぎだよな。それに、今まで起こった規模が大きいバイオハザードは、レオンの親友が行ったシーナ島以外のラウンシテイ、ロックフオード、南極基地、関東と全て俺が関係している場所だ。もちろん、俺が知らないところでバイオハザードが起こっているのかもしれないが……。

やっぱりただ運が悪いだけなのか、それとも誰かに仕組まれているのか。今は分からないが、帰ってからじっくり考えるところ。

ドオオオオン！

突如、何かが壁を突き破り、空いた穴から大男が出てきた。

「ぎゃああああ!?!」

またもやユーチエンが下品な叫び声をあげる。

「うっさい」

その大男は、明らかに人間とは言いにくく、腹には穴が空いて触手がたくさん出ていた。タイラント系だろうか。

「こいつが新型B・O・W・!?!」

予想ではネズミくらいの小さいやつかと思っていた。てか、何でこんなバケモノがこの船に入れたんだ？ 警備が甘すぎるだろ！

「リヨウ、どうするの?」

ユーチェンの声は震えている。本当は今にも逃げ出したいのだろう。「そうだな……どうしようか」

ゾンビに会うたびの叫びまくっているユーチェンだ。一人にしたら絶対に死ぬから俺と行動してほしいが、こんなバケモノから足の遅いユーチェンを連れて逃げることは出来ない。リスクは伴うが、ここ狭い通路で戦った方が良さそうだ。

「ユーチェン、下がってろ」

巨大な人型B・O・Wとのタイマンは何度もやっている。倒しきれたことはないが。

俺はナイフを逆手にして持ち、腰を落として構える。

「来いよ、デカブツ」

挑発されたことを悟ったのか、大男は力任せの攻撃をしてくる。あまりに単調な攻撃で見切るのも簡単だ。何回か避けたところで、腹から出ている触手の数本をナイフで叩き斬る。斬られた触手は床に落ち、バタバタと暴れる。少し時間が経てば動かなくなるだろう。

スライディングで大男の股の間を潜り抜け、すぐに立ってナイフを背中に突き刺し、背中に刺さっているナイフの柄を蹴る。そしてすぐに引き抜き、ダメージを与える。大

男の背中から緑の血が溢れ出てきた。

「うへえ、気持ち悪ー！」

緊張感の欠片もないことを言いながら、飾られている高級そうな花瓶のふちを掴み、壁を蹴つて跳躍して大男の頭にその花瓶を叩き付けた。花瓶はバラバラに割れ、床に落ちていく。

「よしー！」

小さなガッツポーズを作りながら床に着地し、大男が怯んでいる間に足の腱をナイフで斬る。立てなくなつた大男が膝をつき、その顔面の回り蹴りを喰らわせ、吹っ飛ばす。

「行くぞ、ユーチェン」

「え？ でもまだ生きてるよ？」

ユーチェンの言う通り、大男は死んではいない。

「俺じゃ倒せない。今のうちに逃げよう」

俺とユーチェンは、大男が動けない間にその場を後にしようとする後ろを向くと、大男のいた方から大きな音がした。

「なんだ？」

振り向くと、そこには大男の姿はなく、代わりに床に大きな穴が空いていた。

バリーSIDE

「ここは……レストランか」

ゾンビの姿は見えないが、ここもひどい惨状で真っ白いテーブルクロスが血で汚れ、この場には清潔感の一文字もない。

「そういえば、ロシアの両親が保護者は？」

バリーは、ロシアが一人にいる、という時点で嫌な感じはしていたが、もしものことがあるので躊躇をしたが、聞いてみた。

「両親は死んだわ。研究者だったんだけど、何かの事故で死んじゃったの。親戚に預けられたんだけど、わたしのこと気味悪いって。それでヨーロッパにいる友人の家に預けたいからわたしをこの船に乗せたの」

「そうだったのか。悪かったな、嫌なこと聞いて」

「ううん、良いの」

しかし、子供を一人でこの船に乗せるとは……その親戚は一体何を考えているんだ？ バリーの心の中で激しい怒りが舞い上がるが、今はそんなことに気を使っている場合ではない。早くレオンを見つけ出さなければいけないのだ。

「バリー、奴が来るわ」

ルシアがバリーの服を掴み、歩くのを中断させる。

「『奴』……?」

『奴』となんだろうか。バリーは引き金から手を離さず辺りを警戒する。

「バリーがさつき倒したバケモノよ。生きていたんだわ」

ルシアは真剣な表情と声でそう言った。

「なんだと!」

あの大男はアメーバのように溶けてなくなったはずだ。まだ生きているというのか。至るところに目を通すが、あの大男の姿はない。

「ルシア、何故その大男が来ると?」

バリーは疑問を口にする。

「わたしには分かるの。もう近くよ!」

ドオオン! と上の方から大きな音がし、空けられた天井の穴から大男が降ってきた。

「なに!」

大男に狙いをつけようとハンドガンを向ける。しかし、引き金を引く前に大男のその大きな腕が横にスイングされ、反応しきれなかったバリーの背中に直撃する。その威力

は凄まじく、大柄であるバリーの体は吹き飛ばされ、壁にぶつかった。

「ぐはっ!？」

肺の空気を全部吐き出し、痛みが全身を襲う。あの直撃を喰らったのだ。骨の一本や二本、折れていてもおかしくない。

「きゃー!？」

大男はバリーを無視し、ルシアに近づく。

「させるか……」

さっきの衝撃でハンドガンはどこか飛んでいったようで、バリーは愛用のマグナムを取り出す。だが、その時には大男はルシア共々姿を消していた。

「クソ！ やられた！」

自分の情けなさを抑えるように床を素手で殴る。

あの大男はアメーバのようになっても生きていた。不死身、ということなのか？

だが、それ以上にルシアに関する疑問があった。何故、大男が来るのが分かったのだろうか。大男が天井から降ってくるまで、バリーには何も聞こえなかったし、何の気配も感じなかった。ルシアには特別な能力が……いや、ルシアが情報にあった新型B.

O. W. なのか？

(バカか、俺は……)

確かに、ロシアの能力や大男がロシアを殺さず、連れ去った理由も気になるが、それは後で聞けばいい。今はレオン、そしてロシアを捜しだし、あの大男から助け出さなければいけないのだ。

27話 ナイフと銃弾

バリーSIDE

バリーはレオンとルシアを見つけるため、船内を探し回る。

(これは手が掛かりそうだ)

この広い船内でどこにいるのかわからない二人を探さなければいけない。しかし、新型B・O・Wはルシアを拐ってどうするのだろうか。大西洋上にあるこの船に逃げ場はない。まさか、救命ボードを使って逃げるのだろうか。バリーには想像もつかないが、何らかの手が打つてあるのだろう。

ゾンビをスニーキングキルしながら、狭い通路を進んでいくと、床に穴が空いている場所を見つけた。

「あれは……？」

さつき、大男が落ちてきた穴ではない。あれは全く別の場所だ。

バリーは気になり、穴の中をライトで照らす。

穴の下には、皮のジャケットを着たアメリカ人が倒れていた。その顔には見覚えがある。

「レオンか!？」

レオン・S・ケネディ、地獄と化したラクーンシティをクリスの妹、クレアと少女シエリー・バーキンとともに脱出した男だ。シエリーがウエスカー率いるH・C・F.に拐われたときもレオンや他の戦友とともに共闘し、救出した。

「う、うう……」

バリーの声に気付いたのか、レオンは呻き、目を開く。

「あんたは……バリーか？」

朦朧とした意識の中でレオンは答えた。

「ああ。バリー・バートンだ。久しぶりだな、レオン」

バリーはリュックからロープを取り出し、壁の出っ張りに引っ搔けて穴の中に入る。

「立てるか？」

「ああ」

レオンはバリーの手を掴み、立ち上がった。

「レオンはなぜここに？」

「任務だ。新型B・O・W.の始末で来たんだが……」

レオンは服の汚れを払いながら答えた。

「バリーは？」

「俺も同じようなものだ。クリスからこの船に新型B・O・W. が潜入すると知らされてな」

バリーとレオンは互いに起きたことを話した。

「ルシアが……あのバケモノはなぜルシアを狙う?」

「分からない。ルシアが何かの鍵を握っているのかもしれない」

レオンが見つかったのは、ただの偶然にすぎない。ルシアも偶然で見つかる可能性などほとんどないだろう。

「そういうえば、リヨウと会ったか?」

バリーの耳に驚くべき名前が入ってきた。

「なに!? リヨウもいるのか!?!」

「ああ。もう別れて随分時間が経つ」

日本人のクロセ・リヨウ、ジルたち共にラクーンシティを脱出し、クレアを助けるため南極まで飛び、関東のバイオハザードに巻き込まれた少年。クリスやジルと一緒にB・O・W. を倒したり、バリーの家にも訪れたことがある。

「まさか、リヨウもいるとはな……すまない、彼の所在は分からない」

どこかですれ違った可能性もある。

「リヨウのことだから無事だと俺は思うね。まずはロシアを捜すことの専念しよう」

リヨウの強さはバリーも把握している。

「だが、どこを捜す？ この広い船の中だ」

「警備室に向かおう。あそこなら防犯カメラの映像で撮影場所が分かる。警備室に銃や弾薬が置いているのも普通のことだから、弾薬も手に入るはずだ。一石二鳥だぞ」

確かにそうだ。この船の至るところに防犯カメラが設置されているし、あの巨体の大男だ。見つけるのも簡単だろう。しかも、警備室には銃も置いてあるかもしれない。弾が不足気味のバリーたちにはいいこと尽くしだ。

バリーとレオンは、警備室にたどり着き、鍵が掛かっているドアを蹴り破って中に入る。

銃を構え、ゾンビがいつでも襲いかかっても来ていいように警戒したが、あるのは頭を撃ち抜かれた死体だけだった。

その頭を撃ち抜かれている警備員の手には拳銃が握られている。ここに籠城したのは良いが、もう助からないと思いい、自殺したのだろう。

「レオン、これを見てくれ」

バリーに呼ばれ、監視カメラの映像に目を通す。映像は何十とあったが、その中からルシアを見つけ出すのは簡単だった。裸の大男なんてそうそういるもんじゃない。

大男はルシアを抱え、どこかを移動している。

「場所はどこだ？」

「サイドデツキだな」

レオンは何故バケモノがサイドデツキにいるのかが気になるが、まずは行動だ。

「行くぞ、バリー」

レオンとバリーは警備室のロッカーの中に入っているアサルトライフルとマガジンを取り出し、飛び出すように部屋を出て、サイドデツキへと向かう。

途中、邪魔になるゾンビの頭を撃ち抜きながらも走る速度は変わらない。それはバリーとて同じだ。二人は訓練を受けており、走りながらヘッドショットを決めることなど簡単である。

リョウSIDE

「うわあ、雨が降っているな……」

俺とユーチェンは一通り中を探索したが、他に生存者を見つけることは出来なかった。

まだ探索をしていなかった外に出ると、雨がポツポツと降っており、風も少し強い。一瞬、遠くの空が黄色に光り、数秒遅れて雷音が轟いた。

「ぎゃああああ!」

既に伝統行事と化したユーチェンの叫び声が波の音で掻き消される。ユーチェンは耳を押さえ、床にうずくまっていた。

「こりゃ、嵐が来るな……」

遠くでは空が何度も光り、微かに雷音が聞こえてくる。一時間もしないうちに嵐が来るだろう。

ユーチェンの腕を掴み、立ち上がらせる。

「さ、行くぞ。外を探索できる時間は少ないみたいだ」

それにしてもレオンはどこにいるのだろうか。すれ違ってばかりなのかもしれない。

俺たちはしばらくデッキを歩き続ける。雨が服に染み込んで重たくなってきた。

「リヨウ、寒いよ」

ユーチェンは体を震わせる。夏だが、服が濡れた状態でいつまでもいると風邪をひいてしまいそうだ。

タタタン、タタタタンとすぐ近くから軽やかな銃声が響く。

俺とユーチェンは顔を見合わせる。

「生存者!?!」

俺たちは息ぴったりに言うと、銃声がした方に走り出した。

バリー&レオンSIDE

「大丈夫か、ルシアア!?!」

バリーはルシアを大男から取り返し、壁に横たわらせる。

「バリー?」

ルシアはゆっくりと目を開け、バリーの顔を見る。それを見て、バリーはひと安心した。

「良かった。無事だったんだな」

ルシアの身体を見るが、どこにも怪我はない。

「バリー! 手伝ってくれ!」

レオンは一人で大男に対抗するが、それも限界に近い。
「分かった！ ルシア、ここにいるんだぞ」

ルシアはコクリと頷く。それを確認したバリーは立ち上がり、アサルトライフルで大男に狙いを定め、引き金を絞る。マズルフラッシュとともに銃口から次々と出る弾丸は、空を切つて大男の身体を貫いていく。

だが、大男もやられつばなしというわけではない。レオンに突っ込み、近接戦を仕掛ける。

「クソ！」

バリーは引き金から指を下ろす。そのまま撃てば、弾丸はレオンに当たることになる。

「このー！」

レオンはアサルトライフルの銃口を大男の触手が出ている腹の穴に向け、連射する。大男との距離が近いので、緑の返り血がレオンの服に降り注ぐ。

「このジャケット、高いんだぞー！」

こんな時にも冗談は止めず、弾を使いきる。マガジンを交換している時間はない。レオンはアサルトライフルを投げ捨て、太股のホルスターから弾を詰めたハンドガンを取り出し、大男の頭に向けて撃つ。

バリーも何もしないわけにはいかない。ナイフを取り出し、大男の背後に回って両方の膝関節を斬った。

『グオオオオ！』

大男は膝をつく。

「うおおおおお！」

レオンたちとは違う別の方向から、誰かの雄叫びのようなものが聞こえてきた。

「なんだ？」

バリーとレオンは声のする方を向くと、タキシードを着た黒髪赤目の日本人の少年が、時速四十キロメートルもあるかと思えるほどのスピードでこちらに向かってきていた。

「リヨウか！」

リヨウは止まらず、その勢いのまま膝をついている大男にタツクルを浴びせた。その威力は凄まじく、大男は衝撃で吹き飛び、壁をぶち破った。大男はアメーバのように溶けてなくなる。

「よう、レオン、それにバリー」

リヨウは何もなかったかのようにレオンたちに話し掛ける。

「無事だったか、まあ、それほど心配もしていなかったがな」

レオンはさらっと本音を言った。

「リヨウ、久しぶりだな」

バリーはリヨウの前に立つ。

「ああ、久しぶり。モイラもポリーも元気？」

「もちろん」

互いに挨拶を済ませたところで、もう一人、レオンたちの元へ駆け寄ってくる人物がいた。

黒いドレスを着ている中国人の女性、レオンは彼女の名前を思い出す。

（確か……ユーチェン・ハンだったか）

彼女の活躍はレオンも知っており、世界で有名なピアノ演奏家だ。

「ちよつと、速すぎるよ！」

ユーチェンは息切れしており、苦しそうに胸を押さえている。運動をしたことがあまりないのだろう。

「ユーチェンが遅いんだよ」

それは違う、とレオンもバリーも思うが口には出さない。

「紹介するよ、こいつはユーチェン・ハン。演奏家だ」

「ど、どうも、ユーチェンです……」

ユーチエンはまだ息切れしている。

「バリー・バートンだ」

「レオン・S・ケネディ、合衆国のエージェントだ」

軽い自己紹介を済ませた後、バリーはロシアの方に近寄った。

「ロシア、目は覚めてるか？」

「ええ、ありがとう、バリー」

ロシアは難なく立ち上がる。先程まで気絶していたはずだが、どこにも異常はないの
だろうか。

「レオン、彼女は？」

「ロシアだ、生き残りだよ」

「そうか……」

リヨウは落胆したような顔をした。レオンと同じ気持ちで、あまりに生き残りが少ないのに驚いていようにも見える。だが、あれほどのゾンビの量で二人も救えたのだ。喜んではいけないが、やれるだけのことはやった。

「それで、どうするんだ？ もうそろそろ嵐が来る。ヘリも呼べないし、救命ボートも使えないぞ」

それがレオンたちに襲い掛かる問題だ。レオンがH.Q.にヘリを寄越すように頼んだ

が、嵐の影響で明日までは来れないらしい。つまり、レオンたちはあと何時間もこの船に中で待機しなければならぬ。

「船内に残るのは危険だ。さっきのバケモノは死んだとも限ら——」

バリーの言葉を遮るのように突如、前方からマズルフラッシュが見えた、と思えば何十にも及ぶ弾丸の雨が襲い掛かってくる。

考えるよりも早く、レオンは咄嗟に伏せようとするも、銃から放たれた弾丸は音速を越える。避けられるはずもない。全員、怪物を倒してもう終わりだと思つて油断していた。いや、一人だけ、油断をしていない人物がいた。

流れるようなスピードでリヨウはレオンの前に出た。その手にはナイフが握られている。この場にいる人間には、リヨウが自身の身を盾にしてレオンを守るといふ行動に出たと思うのかもしれない。しかし、リヨウがとつた行動は誰も予想していないものだった。

リヨウは手に持っているナイフを振り、弾丸を叩き落としていく。ナイフと銃弾が接触し、黄色い火花が散つた後、斬られた弾丸はレオンの後方へと飛翔していく。

「なっ!?!」

あまりの光景にレオンは絶句した。人間がナイフという、たかが二十センチメートルの刃渡りの武器で、残像を残しながら銃弾を斬っている。レオンは何かの映画でニン

ジャが銃弾を刀で斬っているのは見たことあるが、もちろんフィクシオンだと思っていた。だが、刀よりも短いナイフで音速の弾丸を斬るその行為は、紛れもなく現実だ。

レオンもリヨウが強いことはラクーンシティのときに知っていた。あの街を力なくして抜け出すことは出来ない。その後も、シエリー救出作戦のときはハンターやH・C・Fの兵士を次々に倒していったことに啞然としたし、トウキヨウでもネメシスとタイマンを張っていた。それほど力を見て、ただの子供ではないと思っただけだが、目の前では銃弾をナイフで斬るという暴挙を見せつけられている。一体、どれほどの身体能力、集外力、反射神経を備えているのだろうか。しかも、銃弾を斬る、ということは音速の弾丸が目に見えているということだ。リヨウの力は人間を越えている。

すぐに銃声が聞こえなくなった。弾が切れたのだ。レオンは、銃を撃った何者かを目を凝らして見る。フルフェイスのヘルメット、防弾チョッキ、各所にプロテクターをしている人間がそこにいた。よく見ると、その肩にはアンブレラのマークが入っている。

レオンはハンドガンを構え、その兵士のヘルメットに狙ってトリガーを絞る。銃口から放たれた三発の弾丸は、兵士のヘルメットに命中した。兵士はマガジンを交換する前にぐらつき、倒れる。

だが、状況を整理する前に奥からアンブレラの兵士が五人現れる。そして、アンブレラのマークの入ったアサルトライフルの銃口をレオンたちに向けた。

絶体絶命かと思われたとき、突如船の後方側から大爆発が起こった。

「うわああ!?!」

「うお!?!」

船が大きく揺れ、足場がもたつく。レオンたちは倒れないようにバランスを保つ。

「次は何だよ!?!」

「場所にエンジンルームだな。このままじゃ船が沈むぞ」

「それは不味い。俺、泳げないんだよな」

レオンは合衆国エージェンツとしてあるまじき発言をした。

「エージェンツがそれでいいのか!?!」

「泳ぎの練習はしてるぞ。多分、四年後くらいには、湖で追い掛けてくるB・O・W. からもクローラで逃げられるくらいになるな」

「えらく具体的だな」

リヨウもレオンも、この場でもジョークを忘れない。

「レオンとバリーはエンジンルームに向かってくれ。あと一回爆発したらすぐこの船は沈んでしまう」

「リヨウはどうするつもりだ!?!」

「アンブレラの相手をするさ」

レオンは一瞬戸惑ったが、考えている時間もない。揺れが止まればアンブレラの兵士たちは再び銃を向け、すぐに弾丸の嵐が舞い起こるだろう。

「グッドラック」

「そつちこそ」

レオンとリヨウは拳を合わせ、レオンとバリィ、そしてルシアはこの場を後にし、船内へと戻っていった。

「ここが正念場かな？」

リヨウはそう呟いて、ニヤリと不気味な笑みを見せた。

28話 沈没

リヨウSIDE

「さて……」

船の揺れが止み、アンブレラの兵士たちが体勢を立て直す。

後方からは、さっきの爆発の影響で黒煙が吹き上がっていた。

息を整え、ナイフを再度構える。さっきは相手が一人だったから良いものの、今は五人に増えている。俺でも五人同時の一斉射撃など防げはしない。近くに障害物もなく、隠れる場所がない。

「リヨウ」

「……」

何故かユーチェンがこの場に残っていた。レオンもバリーも存在を忘れていたのだ。ろうか。

俺はユーチェンを抱え、B.O.W.を吹き飛ばしたときに空いた穴にユーチェンを投げ込む。

「ぎゃっ！」

ドスン！ と何とも痛そうな音がしたが、気にしない。どうせ死にはしないんだ。一番心配なのは俺だ。訓練された兵士五人を同時に相手をしたことなど今までない。しかも、不意打ちではなく、真正面だ。

リーダーらしき人物が指で指示し、五人の中の二人がナイフを抜いて、俺に近づいてきた。

弾をケチりたいのかは知らないが、こちらとしては好都合だ。二人も倒せるんだからな。

アンブレラの兵士二人は、僅か二メートルほどまで近づいてきた。フルフェイスヘルメットのせいでどんな表情をしているのかは分からないが、どうせ笑っているのだろう。

瞬間、正面にいる兵士が俺の首元目掛けてナイフを振る。表情が分からないので一瞬油断したが、ギリギリのところまで身体が反応し、背中を反って避ける。避けただけでは終わらず、体勢を立て直す勢いでヘッドバッドを敵のヘルメットに喰らわせた。

「いてえ……」

流石はヘルメット、硬い。目から少量の涙が出てくるが、何とか堪える。

「貴様……」

今の光景を見ていたもう一人の兵士が俺にナイフで斬りかかるが、慣れた手つきでそ

の腕を掴み、くるりと回して床に叩きつける。倒れた兵士の胸を踏みつけ、とどめをさした。

「構え——」

リーダーらしき兵士が、俺を危険だと思ったのか、残りの三人で銃を向けた。流石に俺でも三人の一斉射撃は捌ききれない。倒した二人の兵士から、アンブレラのマークが入ったアサルトライフルを取り、横一列になっている左右の兵士に銃を投げ付ける。投げられた銃はくるくると回転しながら飛び、真っ直ぐ狙いをつけた目標へと向かう。

「ぎゃー——」

「くっ——」

左の敵には当たったが、右のやつはしゃがんで避けた。だが、隊列が崩れた事には代わりはない。

俺は全力疾走し、敵との間合いを一気に詰める。

「くそ——」

真ん中にいたリーダーが一人で銃を撃つ。俺は致命傷になる部分の弾をナイフで弾き、距離が三メートルになると、スライディングで距離を詰め、リーダーに足を引っ掛けて転ばす。立ち上がり、銃の投擲を避けた兵士に接近戦を仕掛ける。相手はナイフを抜く暇もないと察し、素手で襲い掛かるが俺には通用しない。裏の太ももにローキック

をかまし、膝をついたところで、その顔に回し蹴りをいれた。

振り向き、残りの二人と対峙する。リーダーは銃床で鋭く突いてくるが、それを受け止め、足を踏みつける。表情は見えないが、苦痛に歪んだ顔をしているんだなと予想がついた。リーダーは痛みのみあまり、銃から手を離す。俺はその銃をリーダーの顔を目掛けてフルスイングした。リーダーは床に倒れこみ、ピクリとも動かない。

最後の一人、投擲された銃を喰らって弱っている兵士の側面に回り、肘で首を絞めて壁に投げ飛ばした。

「よし、終わりー！」

自分としては百点満点だな。一分以内に敵を全滅させることができた。

俺は倒した敵からアサルトライフルと手榴弾を取る。

こいつらが何故現れたのか、どうやって現れたのかを知る必要がある。

「ユーチェン、これで身を守つていてくれ」

ユーチェンが隠れている穴の中に銃を投げ込み、俺は走り出した。

近くからヘリの音はしない。となると可能性は一つ。空からではなく、海から。船。または潜水艦で来たのだ。サイドデッキから海を覗くと、予想通り、潜水艦が海面に上がっていた。潜水艦の甲板にはアンブレラの兵士二人が見張っている。

潜水艦の先から、ワイヤーがサイドデッキまで掛けられている。兵士たちはあのワイ

ヤーでのぼってきたのだろう。

「たったの二人ね……」

好都合だ。見張りを倒して、さっさと潜水艦を制圧するか。

海面からここまでの高さは五十メートル以上、ワイヤーを伝って真正面から行くと蜂の巣にされるのは目に見えてるからな。

俺は後ろに下がり、走り出した。

「うおおおおお!!」

勢いを落とさず、船から飛び降りる。高さ五十メートルもあつてか、流石に身震いしたが、もう落下は止まらない。潜水艦の甲板に着地すると同時に受け身を取り、衝撃を減らす。

「な、なんだ、貴様?!」

アンブレラの兵士もいきなり落ちてきた俺にはびつくりしている様子だ。

「さよならだ!」

俺は銃を兵士に向かって投げる。それと同時に走り出し、ピンを抜いていない手榴弾をもう一人に向けて投げた。

「う、うわああ!」

兵士はあまりに驚き、海に飛び込んだ。

「ええ〜？」

作戦ではびつくりしているところで殴りかかるともりだつたんだけど、まあ、いいか。俺は投擲を喰らつて怯んでいる敵の胴体を二発殴り、さらにぐらついたところで足を払うように蹴つた。敵はくるりと半回転し、頭を硬い甲板にぶつけた。さて、この調子で制圧しますか。

難なく潜水艦を制圧することに成功し、俺は潜水艦の艦長を椅子に縛っていた。

「何から聞こうかな？」

うーん、と考え込む。一番重要なのはやつぱり……

「なんでこの船に来た？」

あの新型B・O・Wの回収が目的なのだろうか。

「誰がガキにそんなことを教えるか。拷問でもしてみればいい」

艦長は強気で言った。どうやらガキだと思つて俺を舐めてるらしい。

「じゃ、拷問しまゝす」

俺は腰からサバイバルナイフを取り出した。

「分かつた！ 言う！ 止めてくれ！」

「……………」

つまんな。

「新型B・O・W. の回収だよ！ 見ただろ、あの娘を！」

「娘…………？」

ルシアの事か？

「娘の回収のために来たんだよ！」

「新型B・O・W. はあの大男じゃないのか？」

あいつはどう見ても新型のバケモノだ。

「あいつも新型B・O・W. であることに間違いはないが、あの娘が我々の狙いである新型B・O・W. なのだよ」

なるほど、つまりはルシアを回収するためにあの大男をこの船に送り込んだってわけか。

だが、まだ謎が残る。

「大男はどうやってあの船に乗った？ あれじゃ直ぐバレるだろ」

どう考えてもあの姿のままじゃ乗り込めない。

「言っただろう。奴も新型B・O・W. だ。t—ウイルスとG—ウイルスを何度も投与した結果、偶然にもあのような怪物が生まれたのだ。Gは質量保存を無視することが出

来るほど強力なウイルスなのだよ。あの怪物は人間に変身することも出来る」

うえ、嫌だなそれ。あんなバケモノが人間みたいになるなんて。

「じゃあ、なぜルシアが新型B・O・Wなんだ？ ルシアからは何の敵意も感じなかった」

「今はな。娘の体内には貴様が見たB・O・Wの胚が植え付けられているのさ。あと十日もあれば彼女の身体を食い破り、新たな生物が生まれる。そのB・O・Wを教育すれば、我々の命令を何でも従う最強のB・O・Wになるのだよ。君には分からんだろうがね」

うん、分からん。

「それを止める方法は？」

「誰が言うものか」

ここまで言ったんだから良くない？

俺は再びナイフを向けた。

「あのアタッシュケースの中にワクチンが入ってます」

机の上のアタッシュケースを開ける。中には、書類と一本の注射器が入っていた。注射器には『DEVIL』と書かれてある。

『この注射器は、万が一『ルシア』から生まれるB・O・Wが暴走してしまった場合に

使用を許可する。だが、このワクチンを使うのはあくまでも最終手段である。可能な限り、捕獲されたし』

と書類には書かれてあった。

これをルシアに打てば、B・O・Wの胚を殺せるかもしれない。

「じゃ、艦長、また来るわ」

俺は注射器をポケットに入れ、その場を後にする。

潜水艦から出る途中に、ある武器を見つけた。

「……………」

ロケットランチャーだ。こりや、持ってくしかないな。

レオン&バリーSIDE

「…………泣けるぜ」

「サイアクだな」

エンジンルーム周辺は火の海になっており、凄まじい熱気と熱風が吹き荒れる。

レオンとバリーは設置されている消火器を取り、すぐに消火し始めた。

辺りの火を消すと奥に進む。

動力部は無惨に壊され、この船を動かさそうにない。

レオンは、奥から何かの気配を感じた。ルシアを隠れさせ、バリーにハンドサインを送り、一気に突っ込む。

「なっ!?!」

レオンとバリーが銃を向けた人物は、予想とは全く違っていた。黒髪赤目の少年、クロセ・リヨウだ。

「リヨウ、先回りしてたのか。驚いたぞ」

リヨウは何も答えず、レオンたちに近づく。

「リヨウ……?」

レオンはリヨウから伝わる違和感に疑問を持つが、さほど気にしない。

「ダメよ! そいつから離れて!」

ルシアが出てきて、必死の表情でレオンたちに訴える。

「? どうしたんだ、ルシア。確かにこいつはおかしいところもあるけど、人間だぜ?」

次の瞬間、レオンの背中は車にはねられたような衝撃に襲われ、数メートル吹き飛んだ。

(言い過ぎたか?)

痛みを堪えながら立ち上がり、リヨウの方を向く。

「どうやら偽者だったようだな」

バリーは冷静に判断し、アサルトライフルをリヨウに向けた。リヨウの身体は次第に大きくなり、あの大男へと変身した。

「……なるほどね、人間に化けてこの船に乗り込んだってわけか」

確かにリヨウがジョークの一つも言わないなんておかしい。

「戻るぞ。ここでの戦闘は危険だ。爆発するかもしれない」

ここでは跳弾や弾がエンジンに当たり爆発する可能性がある。

バリーはルシアを抱え、三人で来た道に戻る。大男もレオンたちを逃がしまいと追い掛ける。

「は、バケモノさん、これでも喰らいな！」

レオンは手に持っているアサルトライフルを大男の腹の穴に投げ込んだ。武器を失いはするが、今追い付かれるわけにはいかない。案の定、大男は怯む。

「今のうちだ！」

リヨウSIDE

俺はロケットランチャーを肩に抱え、船まで戻ってきた。

「ユーチエン、いるか!？」

呼び掛けると、ユーチエンは俺が投げ込んだ穴から出てきた。

「本当に痛かったんだよ!？」

ユーチエンは顔を真っ赤にして言った。

「悪い、悪い。てなわけで急ぐぞ」

俺はユーチエンを連れて走る。

「レオンさんとバリーさんのところ?」

「ああ。あの怪物はまだ生きてる。このロケットランチャーで吹き飛ばしてやるんだ

」

船の中に入ろうとすると、扉からレオンたちが飛び出してきた。

「次は本物だよな?」

「何のことだ? 見習いエージェント」

「よし、本物だな」

何のことが全然分からんが、この様子だと逃げてきたみたいだな。

「すぐそこよ!」

ルシアがそう言うと、大男は床を突き破って出てきた。

「「それほんと好きだな！」」

俺とレオン、バリーが口を揃えて言った。

「レオン、これを使え！」

俺は肩に抱えていたロケットランチャーをレオンに渡す。

「よし、華麗に吹き飛ばすか！」

「頼むぜ」

レオンはロケットランチャーを構え、大男に向けて発射した。弾は大男の胸に命中し大爆発を起こす。

煙が消えると、そこには大男の姿はなく、跡形なく吹き飛んでいた。

「……やったか？」

決まり文句を言ったが、復活……みたなことは起きない。

ドオオオオオオン!! と後方から激しい爆発音。船が大きく傾き、揺れる。

「まずい、沈むぞー！」

「アンブレラの潜水艦に乗ろう。すぐそこだ」

俺は道中気絶していた兵士を叩き起こす。

「逃げるぞー！」

「ほんと、優しいなー」

全員で船と潜水艦を繋ぐワイヤーを伝って降り、潜水艦の甲板に着地した。

「スターライト号が……」

スターライト号はタイタニックのように沈んでいく。それは一生に一度も見れないほどの光景だった。

その後、再びアンブレラの兵士を気絶させ、ロシアに『DEVIL』を打った。あの潜水艦とアンブレラの兵士は合衆国政府の土産となり、ロシアは合衆国政府で検査を受けることになった。その後、どうなったのかは分からないが、シエリーと同じく監禁状態にあっているのだろう。可哀想だと思うが、完全に治ったと言えないロシアを俺たちにはどうすることも出来なかった。

「黒瀬宛に手紙が来てたよ」

同じ部屋の平野が一通の洒落た封筒を持ってきた。

封筒を受け取り、中を見る。ユーチエンからの手紙だった。

「そういえば知ってる？ あの世界的に有名なピアノ演奏家のユーチェン・ハンが日本に来るんだって。チケット高いんだろな」

「そうだな……」

その後、ユーチェンは合衆国政府の計らいによって、スターライト号にはいなかったことになった。政府の発表では、スターライト号は謎のエンジントラブルによって沈没したことになった。

手紙を読み終わると一枚のチケットが封筒から落ちた。

「ん？ なにそれ」

平野が拾う。

「ユーチェン・ハンの公演のチケット!? なんて!? どうして!?!」

「返せ! オマエにはやらんぞ!」

「どうということなの!?!」

結局、俺にスターライト号のチケットを送った人物の正体も掴めず、謎が残ってしまっただが、こうやって楽しい日々を送ってます。

5章 オペレーション・ハワイエ

29話 情報屋

1998年のラクーンシティ消滅を境に、世界ではバイオテロが多発、2001年には対バイオテロ部隊『FBC』がアメリカ合衆国によりモルガン・ランズデイルを代表として設立したが、それでもバイオテロは増えていくばかりだ。そんな世界を救う価値などないのかもしれない。いつかはウイルスが世界中に散布され、人類滅亡の危機に陥るかもしれない。だが、そんなことをさせないために、戦うのだ。

「あつちい〜」

小室は日本から持ってきたうちわをパタパタとはたき、顔に風を送る。それでも辺り一帯の暑さのせいで汗は止まらない。

「小室は南米は初めてか？」

隣を歩く黒瀬が汗一つかいていない、逆に涼しそうな顔でそう尋ねてきた。

「初めても何も外国自体初めてきたよ」

「初めての外国がB・O・W。がらみとはな」

小室たちは南米のとあるジャングルを歩いていていた。黒瀬の友人、クリス・レッドフィールドによると、この近くで『化物を見た』との情報が相次いでいるらしい。そして、ここらでは、少女が何者かに誘拐されるとの情報まで入ってきている。B・O・W.とアンブレラが関係していないかを確かめに遥々日本からやって来たのだ。

「でも、本当に付いてくるなんてな。死んでも知らないぞ？」

「死ぬ気はないよ。日本には必ず帰らないとね」

元々は黒瀬一人で行く予定だったのを小室が何度もお願いして承諾を得たのだ。平野も行きたいとの事だったが、黒瀬に『大人数で行ってもなあ』と言われ、ジャンケンをした結果、小室の勝ち。そういう経緯があつて、二人は共にジャングルを歩いている。「よし、着替えるか」

町からも遠く離れ、このジャングルを抜けた先はミックスコアトル村、その村でも少女が多く誘拐されてるらしい。

小室たちはリュックの中に入れておいた戦闘服に着替える。隣村の人たちの話によると、ミックスコアトル村の村人たちと連絡が途絶えたらしい。最悪の事態も考慮しなければいけない。

小室の装備は、ショットガン『イサカM37』、『グロック19』二丁、サバイバルナ

イフ一本だ。対し、黒瀬の装備は『グロツク19』二丁、木刀、刀、サバイバルナイフ、ダガーナイフ二十本と何とも現代の戦闘服に不釣り合いな装備だ。

これらの装備は全て日本から南米までの密輸船に入れて送ってもらった。

「黒瀬、その装備凄く怪しくないか？」

戦闘服を着ておいて、そのほとんどは近接戦の武器だ。しかも、木刀に刀なんて……この姿を見た者は一週間は頭の中に黒瀬の格好が残り続けるだろう。

「そういう小室だつて、近接戦よりじゃないか。普通はアサルトライフルかサブマシンガン辺りだと思っけど」

「僕はシヨットガンが好きなんだよ」

「でもポンプ式だとリロードめんどくさくない？」

「リロードタイムがこんなにも息吹を——て奴だよ」

「ふむ、よくわからん」

そんなこんな他愛もない話をしていると、目的地であるミックスコアトル村が見えてきた。

村の建物のほとんどが木造で一部の民家は水上に位置している。

「……？ 人の気配がないな」

「……ああ」

それは小室も分かるほどの静けさだった。村にしては大きいはずなのに、聞こえてくるのは鳥のせせらぎぐらいいだ。少し進むと、人が倒れているのを見つけた。

「小室、行くぞ」

小室たちは倒れている人物に駆け寄るが、その人物は頭を撃ち抜かれ、絶命していた。血はまだ固まっておらず、死んだのはついさっきということになる。

「誰がこんなことを……」

心からの冥福を祈る。

「小室、これを見てみろ」

黒瀬は男が着ていたシャツを捲る。そこには、肉を大きく抉られたような傷があった。

「なんだ……これ？」

小室の脳裏にあの記憶が甦る。忘れもしない。人が人を喰うあの恐ろしい光景を。

『アアアア』

突如、どこからともなく、多くの人間が現れた。いや、それはもう人とは呼べないだろう。シャツは血で赤く染まり、白目を剥いている。身体の一部が欠損している者までいる。間違いない……

「へ奴らだ……」

〈奴ら〉は人に嘯み付き、そして嘯まれた者まで〈奴ら〉に変える。

「嘯まれるなよ、お前は抗体を持っていないんだからな」

「分かってる」

黒瀬はイーウィルスへの抗体を持っている数少ない人物の一人だ。確か、抗体を持っている人間の割合は十人に一人、だったか。小室もその十人に一人、とは思っていない。

「動くな！」

小室はショットガンの銃口を向けるが、〈奴ら〉は聞かずに襲い掛かる。

「やっぱりダメか……」

〈奴ら〉の胸の辺りを狙い、トリガーを引き絞った。反動で銃が上を向くが抑えつけ、マズルフラッシュとともに飛び出した散弾は〈奴ら〉の頭を吹き飛ばした。

「さて、開戦だ」

黒瀬は木刀を腰から抜き、閃光のようなスピードで〈奴ら〉の頭を潰していく。その殲滅速度は、銃を使う小室よりも速い。

「流石だな……」

小室は溜め息をつき、トリガーを絞り続ける。だが、数は一向に減らず、増えていくばかりだ。

「行くぞ、チンタラしていると食われちまう」

「でもどこに行くんだ？」

「取り敢えず川の方へ、こいつらを連れて来た道に戻るわけにはいかないからな」

小室の背後から〈奴ら〉が二体襲い掛かるが、黒瀬がナイフを投げ、頭に命中させる。「それってどうやるんだ？ 今度僕にも教えてくれよ」

「思ってるより難しいぞ」

小室と黒瀬は走り出した。小室は走りながらショットガンを撃てるほどの技量はないので、ショットガンの銃床をバットののように振って使う。

「やっぱり先客がいるようだな」

地面には小室たちが倒したものではない〈奴ら〉の亡骸が倒れている。

「でも銃声がしないってことは……」

考えられるのは、〈奴ら〉の餌食になったか、それとも無事にこの村を脱出できたか。どちらにしても関係ないことだ。

「どわっ!？」

小室は目の前に出てきた生物に驚き、跳び跳ねる。出てきた生物は、蜘蛛をそのまま巨大化させたようなモノだった。

(夢に出そうだ……)

ショットガンを撃って巨大クモも身体をバラバラに吹き飛ばす。黒瀬は表情一つ変

えずにクモを木刀で倒していく。何の抵抗もないのだろうか。絶対に接近戦はしたくない。

〈奴ら〉を倒しながら川の近くに出る。何体も同時に襲い掛かるが、黒瀬と小室のコンビネーションによりすぐに倒されていった。小室にとつて黒瀬は親友であり師匠、黒瀬にとつて小室は親友であり弟子だ。何年も黒瀬に格闘技を習った。黒瀬のやりたいことなどすぐに分かる。

「あのボートに乗ろう」

黒瀬が指差したのは、古いエンジン付きのボートだった。

「良いね、さっさとこの村とはおさらばだ」

小室がボートに近づこうとすると、川の中から何か飛び出す。その何かは、小室の頭上へと落下——せず、乾いた二発の銃声とともに川にリリースされた。

「おにーさんたち、危なかったねえ」

フードを着た少々小柄な女性がハンドガン片手に現れた。顔はフードでよく見えな
いが、声で女性だと分かる。

「また来るぞー！」

黒瀬の声により再び戦闘状態に入る。川から巨大なカエルが飛び出してきた。さつき小室を襲おうとしたのもこいつだ。鋭そうな水かき、目は小さく退化している。

「気を付けろ、そいつはハンターY、通称『フロツガー』だ。丸のみにされるぞ」
なるほど、確かにハンターの面影がある。

「カエルに丸のみされたくないな」

「俺もだよ」

ハンタータイプの知能と俊敏な動きは前に経験している。小室は速射し、ただ『当てる』ことに専念する。ハンタータイプは狙う時間など与えないほど素早く動くのだ。

小室の攻撃で怯んだフロツガーを黒瀬は抜かりなく倒す。

「黒瀬、ボートのエンジンをかけてくれ。君も乗るなら来い！」

フードの女性に呼び掛ける。フードの女性は辺りの敵を倒すところらに向かっていた。

「すぐに出すぞ、乗れ！」

小室とフードの女性はボートに乗り込み、黒瀬は直ぐにボートを発進させた。

「ふう、なんとか危機は去ったな」

黒瀬は気の抜けた声で言った。隣に知らない女性が座っていると言うのに。

「君の名前は？」

このままだと気まずいので小室は話し掛ける。

「ソフィア・ラライン、情報屋よ」

女性はフードの取り、その顔を見せた。褐色肌で金髪のセミロング、小室たちよりも年下に見える。

「情報屋？」

小室は疑問を口にするが、ソフィアは右手で『マネー』のマークを作った。

（金ね……）

どうやらソフィアはこれ以上聞くには金が必要とのことらしい。しかし、小室の財布には必要な分だけのお金しか入っていない。

「ソフィアが知っている情報はいくらほど価値があるんだ？」

黒瀬が聞いた。

「そうだね、この情報は五百万はくだらないね」

「わかった、後払いになるが、五百万払おう」

すぐに黒瀬は答えた。

「本当？」

「本当だ。通帳をみてみる」

黒瀬は防水加工がしてあるサイドバックから通帳を取り出し、ソフィアに中身を見せ

た。

「うわあ、凄い。おにーさんはお金持ちなんだね」

なんだろう。スゴく見たい。

「交渉成立、何でも聞いて」

「あの村はなぜあんなった？」

「それはマヌエラ・ヒダルゴが関係してるね。アタシがあ村で発見した瀕死状態の人から聞いた話によれば、マヌエラ・ヒダルゴが現れた後にとんでもない怪物が村を襲ったらしいの。それで村はあんな状態」

〈奴ら〉に化したということは、イーウィルスの強化系か。

「そのマヌエラ・ヒダルゴってのは？」

「ハヴィエ・ヒダルゴの一人娘よ。名前くらいは聞いたことがあるよね？」

小室は何の事か分からないが、代わりに黒瀬が答える。

「ハヴィエ・ヒダルゴ、犯罪組織『聖なる蛇達』のボスだ。麻薬王とも呼ばれている」
黒瀬は何でも知っているんだな、と小室は思った。

「そう、その娘が何故かハヴィエの元から逃げ出し、辿り着いたのがあの村よ」

「その後、マヌエラはどうなった？」

「金髪のアメリカー人二人組によって連れて行かれたわ。一人はかなりの手練れよ。化物

「たちをものともしなかつたわ」

〈奴ら〉をもんともせず倒せる奴といえは、

「『FBC』か?」

黒い噂が絶えない『FBC』だが、その中にも手練れはいるだろう。

「ううん、『FBC』がこの辺りで展開している話は聞いていない。謎の人物ね」

「まあ、小室、俺たちの目的は決まった」

「ああ。そのハヴィエを締めに行くんだろ?」

あの村を惨状と化した奴を放っておけない。それは小室も黒瀬も同じ気持ちだ。

「んじや、殴り込みに行きますか」

30話 放水施設

「……凄いな」

小室は、その光景につい口をこぼす。

川を上り、その先にはバカでかいダムが建っていた。小室はこれほど自然に囲まれた大きいダムを見たのは初めてだった。

「あれがハヴィエダム。ダムを越えればハヴィエの居城だよ」

ソフィアはハンドガンの残弾を確かめながら言った。

「て、ソフィアも行くのか!？」

「もちろんだよ。あの村にいたのもハヴィエの居城に行くためだったのさ」

あのとき、ソフィアがいなかったら小室は今頃カエルのお腹の中だっただろうか。

「なんで？」

「ハヴィエの財宝目当てだよ。ハヴィエは飛んでもないほどの金を持っていること有名なんだ。宝石の十個や二十個……」

それは情報屋ではなく、泥棒なのでは？ と小室は思うが、口には出さない。

「じゃあ、一緒に行くか？」

「嫌だね。どこの軍人とも分からない人に付いてくのは危険だからね」

（軍人じゃなだけでなあ）

小室たちの姿を見れば、軍人と思われるも仕方がない。日本の大学生と言っても信じていだろう。約一名、明らかに装備がおかしいものもいるが。

黒瀬はボートを岸に止めた。

「んじや、ありがとね。無事生きてたら空港で会いましょう。そこで五百万払ってね」

ソフィアはそう言つて、水路を駆けていった。

「黒瀬、良かったのか？」

彼女一人では危険だ。まだ子供のようだったし。

「いちいち他の奴の面倒を見てやるわけにもいかないからな。……それより、先にここに来た奴がいるみたいだ」

「……ああ」

小室たちが乗ってきたものとは別のボートが止められてあった。

「ソフィアが話していたアメリカ人のことか？」

ソフィアが金髪アメリカ人二人組の事を話していた。ハワイエの娘であるマヌエラを連れて上流まで上つたらしい。「その可能性が高い。用心しろよ。撃たれるかもな」

「嫌だな。出来れば会いたくないけど……」

とは言つても、こちらの目的地もあちらの目的地もハヴィエの居城だろう。せめて敵では無いことを祈るだけだ。

「それにしても……でかいな」

小室はダムの大大きさに再び圧倒される。

「どうする？ 中に入るか？」

「それ以外にどうやって向こう側に行くんだ？」

「ナイフを壁に刺して上る」

「……………」

確かに黒瀬なら出来るだろうが、小室には到底そんな力はない。

「普通に中から行きましょう」

「オーケー」

小室たちは水路を進む。ダム、といういうこともあって、水の流れる音が聞こえてくる。

「警戒しろよ。B. O. W. が潜んでいるかもしれない」

「ああ」

小室は頷き、気を緩めず辺りを警戒する。〈奴ら〉もB. O. W. も神出鬼没、いつどこから襲ってくるか分からない。

「来るぞ……！」

黒瀬がダガーナイフを抜き、前方に構えた。小室もショットガンの銃口を前方に向ける。黒瀬が感じていた通り、〈奴ら〉が迫ってきていた。

黒瀬が手に持っているダガーナイフを三本投げる。投げられた三本のダガーナイフは、真っ直ぐ飛び、最前列にいた〈奴ら〉の頭に突き刺さった。

「次は僕の番だな」

スコープの中に〈奴ら〉を四体納め、引き金を絞る。発射された20ゲージ弾は四体を吹き飛ばした。

「小室、突破するぞ」

「おうー！」

小室たちは〈奴ら〉の中心を突破する。ショットガンを棍棒代わりにして〈奴ら〉の頭を潰し、水路を駆けていく。出会ったら殲滅、はいちいち出来ない。弾もなくなり、体力も削がれていくだけだ。

「来るぞ！ フロッガーだ」

フロッガーがピョンピョンと跳び跳ねながらこちらに向かってくる。

「蛙はお家に帰る！」

小室は駄洒落を言ってフロッガーを吹き飛ばした。

「小室、寒かったぞ」

「悪いな！」

恥ずかしい気持ちを晴れさせるように、もう一匹も吹き飛ばす。

「つたく、こんななB・O・W.を買っているなんて凄いな金持ちだな！」

手を休めずにフロツガーを撃ち落としていく。

「そりゃこれほどのダムを造る奴だ。麻薬で相当稼いだんだろうな！」

小室たちは順調にB・O・W.を倒していくが、倒していく度に数が増える。

「小室、弾は大丈夫か？」

「まだあるけど、こんなに相手をしてたら直ぐになくなる」

シヨットガンの残弾は……二十発ほどだ。

「ナイフでも使えばどうだ？」

「カエルに接近戦をするのは黒瀬ぐらいだろ」

黒瀬は飛びかかってくるフロツガーを木刀で受け流し、頭を渾身の一撃で叩く。

「そうかもな」

そう答え、木刀に着いた血を振り払った。

小室たちは、B・O・W.の群れを駆け抜けていく。

ダムから抜け出すと、突然小柄な人間が小室たちの方に飛んできた。

「小室、キャッチだ！」

「うおおお!!」

小室に飛んできた人間を両手でキャッチする。小柄なだけあって、予想よりも軽かった。

「ソフィア！」

両手で抱えた女の子は途中で別れた情報屋、ソフィアだった。

「あいつ、……強い」

ソフィアが指を差したそこには、簡単に言うとは、カマキリ人間がいた。ヤゴとカマキリを合わせたような人型の怪物。腕はカマキリのように鎌状になっている。

「あいつは……プレイグクローラーだな。利用価値はそれほどないから、全部廃棄されたかと思ってたんだが」

黒瀬は冷静に答え、溜め息をついた。

「厄介な事に変わりはない。気を付けろ」

小室は頷き、抱えていたソフィアを横たわせた。

「俺が接近して攻撃する。小室はハンドガンで援護を頼む」

黒瀬は木刀を右手で持ちながらカマキリ人間の側面に接近する。注意をこちらに惹き付けようと、ホルスターから『グロック19』を抜き、カマキリ人間に撃つ。カマキリ人間は腕の鎌で攻撃を防ぎ、それほどダメージは通っていないように見える。だが、注意を惹き付けることに成功した。

黒瀬は難なくカマキリ人間に近づき、回り込むように一回転、遠心力を活かした一撃をカマキリ人間の背中に叩きつけた。

『!!?』

カマキリ人間は痛みに悶絶しているかのように暴れだした。鎌を振り続け、接近させるのを許さない。

「オーケー、それなら……」

黒瀬は木刀を腰に直し、カタナ——日本刀を鞘から抜いた。一呼吸おき、カマキリ人間の動きを見極めたかのように

刀を二回、カマキリ人間の両肩に振った。カマキリ人間の両腕はボトリと落ち、そして本体も地面に崩れ、動かなくなった。

ビューティホー、それだけの言葉で充分だった。

黒瀬は刀を斜めに振り、血を振り払ってから鞘に刀を納めた。

「いや、強かった」

体を伸ばしながらをしながら黒瀬は言った。

(二十秒もかかっていないんですけど……)

多分、一撃で倒せなかったのが強かった理由だろう。それでも三撃で倒したわけだが。

「う……ん」

ソフィアは目を覚ます。静かに身体が揺れ、暖かく感じた。意識がハッキリすると、目の前には男の背中があった。おんぶされているのだ。

「起きた?」

ソフィアをおんぶしている男が話し掛けてきた。

(何でおんぶされてるんだ……?)

ソフィアは記憶を辿り、その理由を探る。

(そうだ。あのカマキリ人間にやられたんだ)

B. O. W. やゾンビを退け、逃げるようにダムから出て、ひと安心したところにあ

のカマキリ人間が襲いかかってきたのだ。そこから記憶がない。気絶したところをこの男たちに助けられた……といったところか。

隣を見ると、腰に木刀とカタナを帯刀している男も歩いてきた。見るからに変な奴だが、ソフィアの情報では、現代でも日本人は戦闘にカタナを使うと聞いている。何とも非効率だと思うが。

「おにーさんたちって何者なの？」

そんな質問を試してみる。もちろんちゃんとした返事が返ってこないことぐらい予想している。

「ただの日本人大学生だよ」

ソフィアをおんぶしている日本人が答えた。

「大学生ねえ……」

二人とも顔は若く、大学生でも通じるだろうが、ソフィアは今までこんな大学生を見たことがない。

「本当の事だよ。信じられないだろうけどね」

「……………」

ソフィアは無言で男の背中から降りた。

「もう大丈夫なのか？」

「ええ。おにーさんたちの名前は？」

「そういえば聞いていないことを思い出した。」

「クロセ・リヨウだ」

「コムロ・タカシ、よろしく」

二人は簡単に自己紹介を済ませた。

「——見えたぞ」

クロセがストップの合図を出す。

クロセが言うように、ここからハヴィエの居城が見えていた。

「あそこもB・O・Wの巣窟か？」

コムロは双眼鏡で確認する。

「多分な。ソフィアも付いてくるか？」

「もちろん。アタシの目的はハヴィエのお宝だからね」

「じゃ、行くぞ」

クロセは木刀を抜いた。

31話 末路

「先にここに来た奴がいるみたいだな」

黒瀬は辺りを警戒する。へ奴らやフロツガーが既に何者かに倒され、何体も倒れている。しかも、ほとんどが頭を撃ち抜かれ、一発で倒されている。

「やつぱりアメリカ人か……」

金髪のアメリカ人二人……一体どういう人物なのだろうか。

「ソフィア、件のアメリカ人はどういうやつなんだ？」

「二人がイケメンで、もう一人が軍人だなあつて人だった」

なるほど、分かんらん。だが、やはりその二人はかなりの手練れなのは分かる。へ奴らの頭を正確に撃ち抜き、何回も襲われても退かない不屈の精神。今まで何度も修羅場を潜ってきたことのだろう。

「うーん、金髪でイケメンのアメリカ人ねえ……しかもここまでB・O・Wの対処が上手いとなると……」

黒瀬が何やら考え込んでいる。

「心当たりが？」

「心当たりはあるっちゃああるけど……」

黒瀬は険しい表情で答えた。危険な人物なのか？

「クロセ、コムロ、ヤバイよ」

ソフィアの緊迫した声に気付き、周囲を確認する。小室たちはいつのまにか大量の〈奴ら〉によって囲まれていた。

「なあ、小室。こいつら俺たちを食べたいんだって」

「そうか。悪い子にはお仕置きしないとな」

小室は素早く引き金を引き、ショットシエルが〈奴ら〉の肉を引き裂いていく。黒瀬も動き出し、小室とは反対側で戦いはじめた。木刀による打撃と投げナイフで瞬く間に敵を倒していく。その光景にソフィアはただ口を開き、啞然とするだけだった。

「よし、終わったな」

戦闘終了の合図。十体を優に越える化物は、二十秒もせずに男二人に倒された。

「おにーさんたちも相当な化物だね。ただの大学生と言われても信じられないよ」

ソフィアがそう呟いた。それを聞いていた小室も納得……というわけじゃないが、普通とは違うことは理解していた。

あの日、友人を手に掛けた日でさえ、小室は人間として至って普通の感情が心の中でうづめいていたが、それ以外は何ともなかった。〈奴ら〉の頭を吹き飛ばし続け、普

通の生活に戻ってもPTSDも何もない。夢に時々出てくることもあるが、それはただの夢であつて、怖いなあとしか感じなかつた。

そういうことも踏まえて、小室は自分を「異常者」だと、別の意味で人間ではないと感じていた。

「小室、ソフィア、来てくれ」

黒瀬が進んだところに小室たちも行くと、そこには三メートルを越える大きな鋼の門が待ち受けていた。

「開かないみたいだ。小室、来い」

黒瀬は門のある反対側を向き、両手を重ねて腰を低くした。

「どうやらこの門を飛び越えさせるつもりらしい。」

「行くよ」

小室は黒瀬目掛けて走り、その足を黒瀬の手に乗せた。瞬間、体全体が浮遊感に襲われる。

「う、うわあ!?!」

門の向こう側まで飛び越え、着地と同時に受け身と取った。

「大丈夫だ。行けたぞ」

小室は門の向こう側にいる黒瀬に無事を伝えた。

「じゃあ、ソフィアを投げるぞ。キャッチしろよ」

「え? ——てぎゃあ!」

門を飛び越えてくるソフィアをキャッチする。

ソフィアでも四十キログラムはあると思うが、それを三メートル上に投げるとは……

(あれ? でも黒瀬はどうやってここに来るんだ?)

誰も黒瀬を手助けできる者はいない。流星の黒瀬でも三メートルジャンプすることなど——

「落ちてくるよー」

そんな気の抜けた声と共に黒瀬が真上から落ちてきた。

「どうわ!」

小室は咄嗟に避ける。

黒瀬は立ち上がり、服を叩いて砂を落とす。

「あの……黒瀬さん? 本当に三メートルジャンプしてきたのですか?」

小室は恐る恐る聞いてみた。

「そんなわけないじゃん。門を垂直に走ったんだよ」

それでも凄いですけど……。小室はまだまだ黒瀬に驚かされる。

「ういゝ、気持ち悪い……」

ソフィアはぐらぐらと揺れだす。黒瀬に無理やり投げられ、気分を悪くしたみたいだ。

「大丈夫か？」

修羅場を潜ってきたソフィアにも、人の手によつて三メートル上空に投げられたことはいらないだろう。

「大丈夫、大丈夫。すぐに治るよ」

ソフィアは深呼吸をし、酔いをおさめる。

「よし、さっさとハヴィエの元に向かうとするか」

「……そうだな」

それにしてもハヴィエは何故B・O・Wをこんなに……

ハヴィエの娘、マヌエラが関係しているようだが、実際に聞いてみないと分からない。

小室はショットガン、ソフィアはハンドガン、黒瀬は右手に木刀、左手にダガーナイフを構えて進む。敵の本拠地と言っても過言ではない。

ソフィアは、自分の目的を果たすために途中で別れた。

地下まで行くと、誰かの歌声が聞こえてきた。

「歌……？」

その声は美しく心を安らかにさせる。アカペラ……ということとは誰かが近くで歌っているということだ。

「黒瀬！」

「行くぞ」

小室たちは走り出し、歌声のする方に向かう。

広い部屋に入ると、そこには二足歩行の大型のB・O・W.と二人のアメリカ人、そして歌う女の子。

「誰だ!？」

アメリカ人の一人、金髪のオールバックの男が小室たちに銃を向ける。

「リヨウか!？」

「レオン！」

黒瀬とレオンと呼ばれたアメリカ人は互いに駆け寄り、抱きついた。

「つたく、何で俺たちはこんなに会うんだよ」

「さあな。それよりも……」

大型B・O・W.は、純白のワンピースを着た女性の歌を聞いているかのように静まり返っていた。

「どういうことだ、レオン？」

「分からない。だが、さっきまで暴れていたはずなのに、マヌエラの歌を聞いたとたんあ
あなった」

マヌエラ……確かソフィアが言っていた。ハヴィエ・ヒダルゴの娘、マヌエラ・ヒダ
ルゴ。

マヌエラのワンピースは血で汚れ、右腕には包帯を巻いていた。その歌声に聞き惚れ
ていると、マヌエラは気を失ったかのようにパタリと倒れた。

『オオオオオオ！』

怪物は暴れ出し、側面から伸びている触手で小室たちを攻撃してくる。

「リヨウ、話は後だ。化物を倒すぞ」

「分かった。小室も頼む」

黒瀬はダガーナイフを投げ出した。

「お、おう！」

小室はビビリ気味な返事をし、ショットガンで怪物の身体を抉っていく。

レオンともう一人のアメリカ人も応戦し始めた。黒瀬は触手攻撃をさせないように
刀を抜き、その跳躍力で怪物に飛び乗って触手を斬り始める。

「レオン、あの日本人は何者だ!？」

「B・O・W・ハンターと言った所だ。彼もラークンシティの生き残りだ」

小室は、自分の身体を貫こうとする触手を避け、ありつたけの弾丸を怪物に喰らわせる。怪物は痛そうに悲鳴をあげるが、それでも小室の引き金を引くのを止めない。

しばらくすると、その巨体が床に倒れ、ずずーんと重たそうな音をあげた。

「やったか!？」

怪物は動かない。小室は安心したせいで、全身の力が抜けそうになったが、まだ肝心のハヴィエを見つけしていないことを思い出し、頬を叩いた。

小室たちとアメリカ人二人、意識を取り戻したマヌエラが一ヶ所に集まった。

「リヨウ、何故こんなところに?」

レオンがホルスターに拳銃を納めながら言った。

「俺と小室はB・O・Wの手懸かりを探しにここまで来たんだ。レオンは?」

黒瀬も刀を鞘に納める。

「俺とクラウザーは、ハヴィエの確保をしに来たんだ。アンブレラと接触した情報が入ったからな」

どちらも似たような動機で、最終目的は同じだった。

レオンは、小室たちに今までのことを詳しく話した。

ハヴィエの娘、マヌエラは死亡率百パーセントの風土病にかかり、ハヴィエはそれを

治すためにアンブレラと接触、マヌエラを唯一治せるであろう『t—Veronica ウイルス』をマヌエラに投与した。しかし、その『t—Veronica ウイルス』は普通なら暴走するはずだが、マヌエラと同じ年齢の少女を拐い、その少女の臓器をマヌエラに移植したおかげで、風土病で死ぬことなく、怪物にもならないでいる。

ハヴィエは、一人の娘を助けるために大勢の人間を犠牲にした。気持ちには分からないくもない。だが、ハヴィエのいけないところは、ウイルスに頼ってしまったところだ。「ハヴィエを確保しよう。それで全てが終わる」

小室たちが部屋から出ようとする、怪物が最後の力を振り絞り、トゲをジャック・クラウザーへと飛ばした。

「うぐっ!?!」

クラウザーの左腕にトゲは突き刺さり、一瞬呻き声をあげたが、その手にしているハンドガンで怪物を撃ち続けた。

怪物は倒れ、その最後に涙を流したように見えた。

「お母………さん?」

マヌエラは静かに怪物に近寄った。

「母親だったのか……」

レオンの話によると、マヌエラの母も風土病にかかり、死んだらしい。実際には怪物

にして生かしていたのか。

ずううん、と小室たちがいる部屋が揺れだした。

「なんだ!？」

いや、ここだけではなく、辺り全体が揺れている。

「中にいると危険だ。外に出るぞ」

クラウザーはトゲを腕から抜き、簡単な止血を行う。

「行くぞ」

五人は地下道を駆け抜け、外に出る。そこは、小室たちが飛び越えた門の近くだった。

「なんだよ……あれ」

小室はあまりの光景に絶句した。

全長二十メートルを越え、蜘蛛のような脚に、胴体の先には恐竜の顔の骨のようなも

のが出ている。

「なんてデカさだ!」

化物はその巨大な脚を振り、攻撃してくる。

「全員伏せろ!」

咄嗟にしゃがみ、攻撃を回避する。

『素晴らしい!』

化物から人間の声が響く。

「お父さま!?!」

「こいつが!?!」

マヌエラの父、ハヴィエ・ヒダルゴはこんなにも変わり果ててしまった。

『ウイルスの力がこれほどとは……マヌエラ、おいで。苦しみを取り除いてあげよう』
(ウイルスに取り憑かれた者の姿……)

ハヴィエは、脚や触手を使い、小室たちを追い詰めていく。

「くそ、でかすぎるぞ!」

避けるのに集中し過ぎて肝心の攻撃が出来ない。何か妥協策があればいいが。

「これ以上、他人を犠牲にしてまで生きるのは嫌……」

マヌエラはそう呟き、今まさに振り下ろさんとするハヴィエの脚の下へと向かっていった。

「不味い!」

小室は止めようとするが、それよりも早くレオンが動き、マヌエラを掴んでギリギリでかわす。だが、その避けた先にも脚が振り下ろされようしとしている。

「レオン!」

レオンとマヌエラの身体を踏み潰そうとする瞬間、マヌエラの包帯に巻かれた腕から

炎が巻き上がり、脚を受け止め、弾き返した。

「なんだ!？」

「ベロニカ・ウィルスの感染者の血は酸化すると燃えるんだ。だが、人間の姿を保つていられるとなると……」

レオンとマヌエラは体勢を立て直す。

「脚の関節を狙え!」

その言葉を聞き、小室は残弾五発を撃ち始めた。五発で脚一本を破壊できたが、残りはまだまだある。弾がないショットガンを捨て、ホルスターから二丁のハンドガンを取り出し、脚の関節に撃ち続けた。

「私もやるわ!」

マヌエラは腕から血を放つ。血はすぐに燃え始め、ハヴィエの身体を燃やしていく。

「よせ! 血を使いすぎるな!」

マヌエラはレオンの制止を拒み、血を放ち続ける。その顔は苦しそうだ。

『グオオオオ!?! ダメだ! 私を殺してくれええ!!』

ハヴィエはウィルスを制御できなくなったのか、呻き声をあげる。

「おにーさんたち、これを使う?」

今まで行方を眩ましていたソフィアが、黒瀬に向かってロケットランチャーを投げ

る。黒瀬はロケットランチャーをキャッチすると、三十メートル先で戦っているレオンに投げた。

「レオン、使え！」

レオンはロケットランチャーを受け止め、構える。ハヴィエの頭を狙い、放つ。爆炎とともにハヴィエは倒れ、直後にその身体は発火し始めた。

「終わったのか……？」

「これがウィルスに頼った奴の末路か……」

黒瀬は苦い表情をして、刀を納めた。

小室たちは、レオンたちを回収に来たヘリに乗せてもらい、その場を後にした。

「死ぬべきだったわ、父と一緒に……」

ヘリの中でマヌエラが言った。

「死ぬべき人間など一人もない」

レオンは続ける。

「それには生きる義務がある。体の中の少女たちのためにも……」

マヌエラは静かに頷いた。

「じゃ、約束の五百万」

後日、黒瀬はソフィアとの約束を守り、空港の駐車場でお金を渡した。

「はあ、儲けはこれだけか……」

ソフィアは大きな溜め息をついた。それもそのはず。ハヴィエの屋敷で大量の宝石を盗んだのはいいが、最後に小室たちとともに軍のヘリに乗ってしまったことにより、基地送りにされ、宝石は証拠品として没収された。

「良いじゃんか。五百万もあるんだから」

「仕方ないか」

ソフィアはバックに五百万を入れた。

「黒瀬、そろそろ時間だぞ」

「ああ」

「じゃ、いつかまた会えるといいね」

ソフィアと別れ、小室たちは飛行機に乗った。

ウイルスは増殖を続ける……形を変え、強さを増しながら……

根絶されるその日まで、人の体の中で、人の心の中で……

「黒瀬、マヌエラはどうなったんだ？」

「さあな。もう臓器の移植は必要ないらしいが、どう扱われるかは合衆国政府次第だ」

マヌエラはアメリカ合衆国政府の監視下に置かれた。これからマヌエラはどう暮らしてくのだろうか。一生監禁生活なのだろうか。小室には分からない。

だが、もしまた会えたなら、あの歌を聞かせてほしい、そう思った。

6章 アンブレラ終焉

3 2話 コーカサス研究所

「降下するぞ」

クリスの合図とともに二機のへりから、防寒具や戦闘服に身を包んだ男たちがロープを伝い、ロシアの極寒の地へと降り立つ。

降下した場所は、アンブレラロシア支部コーカサス研究所の工場のだ真ん中。

防寒はしっかりしているはずだが、吹雪が服の繊維を通り抜け、寒さに慣れていない肌を攻撃する。小室は思わず身震いをした。

隣には黒瀬の姿があった。他の者たちと同じ戦闘服だが、装備している武器は変わっている。刀や木刀、ナイフなど、ほとんどが近接戦の武器だ。

黒瀬の口にくわえられていた煙草が、いきなりの突風によって口から離れ、遙か彼方へと飛んでいってしまった。

黒瀬はサイドバックから新しい煙草を取り出し、口にくわえる。ライターで火をつけようとするが、常に吹き荒れる吹雪でそのオレンジ色の炎を消す。火を手で隠し、風から防ごうとするが、すぐに消えてしまった。

諦めたかのようにくわえていた煙草を投げ捨て、腰の木刀を抜いた。ピリピリと黒瀬から殺気が伝わってくる。それは、煙草が吸えないことに苛立ちを覚えているのだろうか、それとも、これから対峙する相手に向けているのだろうか。

「散開！ B. O. W. 共を吹き飛ばせ！」

男の張りのある大声とともに、極寒の大地に降下した隊員たちが銃を構え、目の前にある工場へと小走りで進んでいく。

「黒瀬、僕たちも行こう」

小室はポンプアクションをし、次弾を装填する。

「……ああ」

黒瀬は短く答え、小室とツーマンセルで工場を進んでいった。

二月、日本でも冬真っ盛りの時期に、黒瀬の元へとクリスマスから連絡があった。

クリスマス——クリスマス・レッドフィールドは、ロシアの私設対バイオハザード部隊に所属しており、日々B. O. W. と戦っている。

そんなクリスマスからの連絡の内容は、アンブレラロシア支部の工場で、新しいB. O.

W・が開発されているとのことだった。黒瀬とクリスは友人——いや、戦友と呼べる人物だ。

もちろん黒瀬が『アンブレラ』『B・O・W.』と聞いて黙っているはずがなかった。黒瀬はロシアへと向かう準備をし、それに気が付いた小室は、又もや無理を言つて今回の作戦に同行することになった。

ロシアで待っていたのは、アメリカ合衆国で設立された対バイオテロ部隊『FBC』ではなく、民間で設立された部隊だった。

クリス・レットフィールドやジル・バレンタインもそこに所属しており、二人に久しぶりに会ったという黒瀬は挨拶を済ませ、これから作戦に参加するメンバーとも顔合わせをした。

「よう、久しぶりだな、リョウ」

誰かが黒瀬の肩を叩いた。

「久しぶりだな、カルロス」

カルロスと呼ばれた男と黒瀬はハグをする。

「紹介するよ。こいつはカルロス・オリヴェイラ、俺や他のメンバーと一緒にラクーンシ

ティを脱出したんだ」

黒瀬の紹介で、小室は「ああ」と頷いた。確か、アンブレラの私設部隊『U・B・C・S.』に所属していた。だが、アンブレラにとつて自分たちは、B・O・W. との戦闘データを取る捨て駒だと知り、離反。その後は黒瀬の説明した通り、ラクーンシティを脱出した。

「よろしく、タカシ。頼りにしてるぜ」

「よろしく」

小室は、カルロスから差しのべられたたくましい手を握り、固い握手をかわした。

「アンタがクロセ・リヨウだな」

黒髪のオールバックの男性が黒瀬へと近寄る。

「アンタは？」

「ベリー・コーエンだ。レベッカから話は聞いている」

「俺もだ」

小室は黒瀬たちの話が分ならず戸惑っているが、カルロスもベリーも雰囲気から修羅場を駆け抜けてきたことが分かった。

クリス、ジル、カルロス、ベリー、これだけのメンバーが揃い、これからアンブレラの工場を潰そうとしている。そして、その作戦に小室と黒瀬も参加するのだ。小室は胸

の高鳴りが抑えられない。

「今からブリーフィングを始める」

小室たちも含めて二十人にも及ぶ決して多くないメンバーが集められ、作戦の内容が明らかにされた。

「いたぞー！」

黒瀬のピンと張り詰めた声で、小室の全身に緊張が走る。

正面からは、〈奴ら〉が何体も腕を伸ばしながら近づいてきていた。作業服や戦闘服、裸など格好は様々だ。

〈B・O・Wと遭遇した！ハンターだ！〉

〈こちらにも遭遇！相当な数がいるぞ！〉

胸に付けられている無線から隊員たちの声と銃声が重なりながら聞こえる。

「情報は当たってたか……」

匿名からの情報だったこともあり、信憑性も低かったが、確かにB・O・Wの姿を確認できた。

小室はショットガンを構え、それと同時に木刀を構えた黒瀬が側面から回り込む。小室はショットガンで前列の化物を吹き飛ばし、後方では黒瀬が木刀で〈奴ら〉の頭を叩き潰す。

そうして連携もあつて、近くにいる〈奴ら〉はすぐに殲滅することが出来た。

「ここでもバイオハザードか……」

〈奴ら〉やB・O・W・が外に出ているということは、この工場も何らかのトラブルがあつてバイオハザードが起こり、B・O・W・を管理する人間がいなくなったことで、檻から逃げ出し、外に放たれたのだろう。

「まだ来るぞー！」

正面からは、ハンター五体、ケルベロス三体が小室たちに向かつて走つてきた。

「喰らえー！」

小室はハンターを狙つて撃つが、軽々と避けられてしまう。避けられた焦りからか、標的から一瞬目を離してしまった。

「小室!! 避けろー！」

黒瀬の怒号。小室は我に帰り、咄嗟に仰け反つた。ハンターの爪が首を掠り、通り過ぎていく。あと少し避けるのが遅かったら、ハンターによって首を刈られていた、という恐怖心がさ迷うが、死にたくないという心で、銃口をハンターの胸に押しあて、トリ

ガーを引く。ゼロ距離で発射された弾丸は、ハンターの胸を貫き、飛び散った散弾は後方にいたケルベロスとハンターの肉を切り裂いた。

ハンターの返り血が小室に飛び、目を瞑ったところを狙ったかのように、ケルベロスが小室の喉元目掛けて飛び付こうとする。寸前、黒瀬がケルベロスの横顔を左手で殴り、頭蓋骨を砕く。

「びびってんのか？」

「へっ、まさか。ちよつと油断しただけだ」

そうは言うも、小室の声はうわずっていた。

小室は挽回するように、ケルベロスの身体をバラバラに吹き飛ばし、腰からナイフを取り出してハンターの頭に突き刺す。黒瀬はハンターの動きを見切って、くるりと後ろに回転してハンターの頭を割った。

黒瀬の戦いを見て、やはり凄いなと小室は思った。小室も相当強くなったが、ハンターの至近距離の攻撃を避けることなど到底出来そうにない。黒瀬の動体視力と反射神経は常軌を逸している。

「こちらビリー、施設内への扉を発見した」

胸の無線が流れる。

「アルファ1からアルファ8までは施設内の探索、及び敵の掃討。それ以外は外のB.

O. W. の掃討を続ける

淡々と指令が下る。小室はアルファ8 黒瀬はアルファ7だ。クリス、ジル、カルロス、ビリーもアルファ1から8までに入る。

「さて、指令が下りましたよ、小室さん」

「じゃあ、行きましようか、黒瀬さん」

小室たちはビリーがいる場所まで走り出した。

33話 アリスとエージェント

レオンSIDE

「寒いな……」

ロシアの地に降り立ったレオンは、身を震わせた。

合衆国エージェントであるレオンは、大統領命令でこの地までやって来た。

どうやらロシアの私設対バイオハザード部隊が、新型B・O・W.を開発している情報を受け、アンブレラロシア支部の工場を襲撃しようとしているらしい。

大統領からレオンに下った命令は、私設対バイオハザード部隊と協力し、工場を制圧、そしてアンブレラの情報を抜き出し、裁判へと提出することだった。

裁判——アンブレラのテーウィルスが漏れ、ラクーンシティでバイオハザード発生。合衆国政府は、表では事態を終息させるために、裏では、アンブレラの顧客だった証拠を無くすために核ミサイルを放った。

当然、アンブレラには業務停止命令が下ったが、金で多くの弁護士集団を雇い、合衆国政府と裁判を起こした。それが、あの事件から五年経った今でも続いている。

事件の証拠は、合衆国政府がミサイルを放ったため、何一つ残っていないが、今

から向かうコーカサス研究所、そこには何らかの情報があられるのかもしれない。そういう可能性もあって、レオンが向かわせられた。

レオンは雪道を歩く。この先に研究所までの案内人がいるのだが、その人物の名前までは知らなかった。

前方から雪上車がレオンの方へと向かってくる。目の前で止まり、中から一人の女性が降りてきた。

「久しぶりね、レオン」

彼女は、金髪にウェーブのかかった髪、防寒具を着ているが、至るところに武器を付けていた。

「久しぶりだな、アリス」

彼女の名はアリス——アリス・アバーナシー。1998年、レオンが政府に身をおいた後も彼女の話を何度も聞いた。

噂では彼女はアンブレラの研究所や基地に忍び込み、破壊しまくっているそうだ。

「早速だけど行くわよ。もうそろそろで部隊が研究所に着くわ」
「それなら急がないとな」

アリスとレオンは雪上車に乗り込み、その場から動き出した。

小室SIDE

「遅かったな」

工場内への扉まで行くと、カルロスがマガジンに弾を込めながら待っていた。

「他のメンバーは？」

「もう中に入った。クリスとジルは別ルートから探索している」

小室たちは中に入り、それぞれの武器を構える。

「そういや、アメリカからエージェントが来るんだってよ」

カルロスが唐突に言った。

「エージェント？」

「レオン・S・ケネディだ。知ってるだろ？」

小室と黒瀬は頷いた。一年前に南米で共闘した人物だ。また会えるとは思っていなかった。

「アリスがレオンを連れてくるらしい」

ありす？ 小室の頭のなかでは、可愛い桜色の髪の少女が思い浮かんだ。

「アリスもこの部隊に？ 懐かしいメンバーばかりだな」

小室は今理解した。黒瀬とともにラクーンシティを脱出した人物だろう。

「お、来たぞ」

ハンターがわらわらとやって来た。小室たちに飛び掛かり、爪で攻撃し始める。

「つたく、なんつう数だよ！」

ハンターを近付けさせぬよう、小室とカルロスは撃ち続け、ハンターが弱ったところに黒瀬が木刀で頭を砕いていく。素早くハンターを殲滅した。

「タカシもやるじゃねえか」

カルロスは小室の頭をポンと叩く。

子供扱いをされているのは少し嫌だが、誉められていることに関しては嬉しかった。

「俺は左に行く。リヨウたちは右を頼む」

カルロスは、残弾が少なくなったマガジンを抜き取り、新しいマガジンを差し込むと、左の方へと駆けていった。

小室も弾を詰め込み、辺りを警戒する。

いつどこか現れるのか、一切分らない小室にとって、ここはお化け屋敷のようなものだ。チラッと黒瀬を見ると、サイドバックから煙草を出し、火を着けた。そして、満足そうに煙を吐き出す。

「全く、こんなところでも煙草を吸うとは……」

緊張感の欠片もないなと小室は思った。

「別に良いじゃんか」

そう言つてまた煙を吐いた。

黒瀬はヘビースモーカーではない。時々吸うぐらいだ。というか、小室も黒瀬もまだ十九歳なので、煙草を吸つてはいけない年齢なのだが……

「そういうえば小室も随分と英語が上手くなったな」

いきなり何の話だと小室は思ったが、元々黒瀬はこういう人物なのを思い出し、答える。

「冴子から教えてもらつてるんだよ。昔は英語なんて使わないものだと思つてたけど」

毒島冴子とは、何とも言いにくい関係が続いている。あの事件から心を通わせた二人だが、好きだった宮本麗との関係も取り戻したことによつて、未だに進展しないでいる。

仲間からは「ヘタレ」だの言われるが、確かにそうだ。ヘタレである小室には二人のどちらかを選ぶことなど出来ない。だが、仲間と言われる筋合いはなかった。

平野と沙椰、黒瀬と香月の進展も何一つない。黒瀬に関しては、全くそういう気がない。もうそろそろで二十歳になるというのに、結婚願望などまるでない。というか女に興味がなく、興味があるのは『アンブレラ』や『B. O. W.』だ。本当に大丈夫なのだろうかと思う。

と言つても黒瀬以外のメンバーも恋愛する気はないのかというくらい何も無い。鞠

川静香も南リカも佐藤リコも三十歳なるといふのに結婚していない。ありすはそろそろ中学生になるが、誰とも付き合ってもらいたくない。そんなやつがいたら一発ぶん殴る。

小室はロリコンではないが、ありすとは家族のような関係だ。少しばかり余計なことをしてしまつて怒られることもしばしばある。

「小室、敵さんがいらつしやつたぞ」

階段から〈奴ら〉が複数下りてきた。

「やりますか」

小室は〈奴ら〉にシヨットガンを向ける。

レオンSIDE

「着いたわ」

一時間ほど経つと、目的地であるコーカサス研究所前に到達した。

「行くわよ。もう戦いが始まっているわ」

アリスとレオンは車から飛び降り、工場の敷地内へと入る。

ホルスターからハンドガンを出し、構える。

至るところから風の音と銃声が吠える。アリスの言った通り既に戦闘は始まっていた。

「こちらアリス、目的地へと到着したわ」

アリスは胸に付けられている無線を使う。

「了解した。アルファからアルファ8が工場内で戦闘中だ。そちらに向かってくれ」

「了解」

アリスは無線を切り、ホルスターからマグナムを二丁取り出した。

「聞こえたわよね？ 今から工場内に入るわ」

「ああ」

と、レオンが短く答えた直後、

「ぎゃああああああ!!」

アリスの無線から、耳をつんざくような叫び声が辺りに広がる。

「巨人が……うわああ!!」

ザザーとノイズが流れ、一瞬の静寂が訪れる。

巨人……タイラントの一種かもしれない。せめてロケットランチャーがあれば良かったのだが、レオンの武器はハンドガンだ。

「中に入る前に一仕事しないとね」

アリスが微笑みながら言うと、上から何者かが飛び降りてきた。

「……いつは……」

レオンがラクーンシティで見たタイラントと似ているが、白いコートに青いサンングラスをしている。その白いコートは、人の血で汚れていた。

アリスはその姿を確認すると、無言のまま走り、手に持っているマグナムを連射する。弾はタイラントのコートに当たるが、それほど効いていない。衝撃吸収コートのようだ。

それでもアリスは撃ち続け、弾が切れたマグナムを投げ捨てると、タイラントの腹へと掌低を喰らわせた。続けて、凄まじい跳躍力で顔に回し蹴りを放ち、その巨体を吹き飛ばす。

その光景を見たレオンは唾然としていた。黒瀬もそうだが、アリスもB・O・Wと素手で戦うとは……

タイラントはすぐに立ち上がり、アリスの顔を狙って殴るが、掌で受け止められ、くると回して横転させられた。

黒瀬以上のパワー、レオンが知っている情報には、そんなものはなかった。一人でアンプレラの基地を壊滅させるほどだから、自分よりかは強いと思っていたが……想像以

上だ。

アリスは意図も容易くタイラントの頭を踏み潰し、投げ捨てたマグナムを拾う。

「さあ、レオン、行きましょう」

アリスはマグナムに弾を込めながら言った。

「……ああ」

（俺が来る意味はあったのか？）

正直アリスだけで十分だと、レオンは感じた。

34話 イワン

小室と黒瀬は壁から顔を覗かせ、B・O・W.の様子を確認する。

「猿が五匹、リッカーが四匹、ハンターが三匹に蜘蛛が六匹か……」

黒瀬は一瞬で敵の数を見極め、ダガーナイフを取り出した。ピリピリと殺気を放ち、吸っていた煙草を床に捨て、踏みつける。

「蜘蛛は俺がやる。小室は残りを相手にしてくれ」

「おう」

小室たちは一気に全面に出る。B・O・W.は小室たちに気付き、目の色を変えて襲い掛かる。黒瀬から言われた通り、小室は蜘蛛以外の敵から注意を惹き付け、弾をぶちこむ。それを確認した黒瀬は、壁に張り付いている蜘蛛二匹にダガーナイフを投げ、落とす。ホルスターからハンドガンを抜き取り、反対側の壁に張り付いている蜘蛛四匹に向かつて手榴弾を投げ、壁に手榴弾が当たったところで銃を撃ち、手榴弾に命中させる。手榴弾は爆発し、蜘蛛四匹を昇天させた。

「……………」

小室は黒瀬の背後に近寄るハンターに、胸のナイフを抜いて投げる。ハンターの左肩

に刺さり、怯んだ瞬間、黒瀬がその頭に鉄拳を喰らわせた。

「ナイフを投げるの上手くなったじゃん」

「それはどうも」

黒瀬は倒したハンターから小室のナイフを抜き、近づいてきていたハンターの眉間に刺した。

『キーキー!』

味方が次々にやられ、怒ったように猿が鳴き出す。

「小室、手榴弾を喰らわせてやれ」

手榴弾を腰から取り、猿が隊列を組んでいる真ん中に投げる。直後、爆発。黒瀬と小室は伏せたおかげで傷を負わなくて済んだ。

「残りはリツカーだな」

さっきの爆発でリツカー二匹が巻き込まれ死んだが、残り二匹が残っていた。

「左は俺がやる」

黒瀬は抜刀しようとするが、リツカーはそうはさせまいと舌を硬化させ、黒瀬の心臓めがけて突き伸ばす。

「ほっ!」

黒瀬は軽くかわし、目標を貫けなかったリツカーの舌を掴んで振り回し、壁へと衝突

させた。その間に小室はショットガンでもう一体を倒す。

辺りにはB・O・Wの死体合計18匹が、ぴくりとも動かず倒れていた。

「リツカーの攻撃を避けるなんてスゴいな」

「なあに。よく見れば小室でも避けられる」

無理、そんなことが黒瀬以外で出来るのは……クリスやレオンだろうか？

『想像以上だ。想像以上にやってくれる』

突然、スピーカーから渋い男の声が流れ始めた。

『よくもまあ、アンブレラの最大の敵をここまで集めたものだ。しかも、君たちまでいるとは……クロセ君、コムロ君』

どうやら、この放送は小室たちに向けられているようだ。小室は天井の隅っこを見ると、監視カメラが一台、小室たちの方を向いていた。

「小室、どうやらお前までアンブレラのブラックリスト入りのようだぞ」

「マジか。そんなにアンブレラに敵対することやったかなあ？」

記憶を探っても、アンブレラに直接敵対した記憶はないが、アンブレラの情報力によつて、黒瀬と行動する人物として知られていたかもしれない。

『クリス、ジル、カルロス、ピリー、レオン、アリス、それに君たち……まさかこんなにも揃うとは思っていなかった。だが、ここで邪魔な奴等を全員始末できるといわけ

だ』

声の主はクククと笑う。

『君たちにはここで死んでもらおう。イワンに殺されるのだ』

「イワン？」

二人が声を揃えると同時に、何かが壁を突き破り、小室たちのいる部屋へと入ってきた。

「なんだよ、こいつ!？」

小室は、見たこともないB・O・Wに声を荒げる。B・O・Wと言ってもいいのだろうか。身長以外は、人間の格好をしており、オレンジのサングラスを付けている。

「タイラントだな。こいつら壁を突き破るのが好きなんだよ」

黒瀬はやけに落ち着いている。

『ククク、君たち二人にイワンが倒せるかな?』

タイラントは小室たちにゆっくりと近づいてくる

「黒瀬、どうする?」

「……どうしようかな」

黒瀬はうーんと考え、抜刀するのを止めた

「小室、コンビネーションだ」

「……わかった」

……コンベネーションといってもアドリブだが。

小室はタイラントの注意を惹き付けるように、その胴体に散弾をぶちこむ。だが、タイラントが着ているコートには傷ひとつついていない。どうやら、衝撃吸収コートのようだ。

その間に黒瀬は動き、壁を蹴って跳躍する。足を真っ直ぐと伸ばし、タイラントの後頭部に直撃させ、床に着地した。

「今のどうだった？」

「百点だった」

素直な感想を述べ、再び銃を構える。

タイラントはビクともしておらず、元氣そうに小室を殴った。

「痛っ!？」

小室はタイラントを凶体だけでなく、鈍いやつだと思つて油断していた。壁に背中をぶつけ、肺全部の空気を吐く。

「油断すんな」

それほど心配していない緩い声。確かに動けないほどのダメージではないが、ひどい。

黒瀬はタイラントをストレートを二歩、三歩とバックステップで回避し、そこから助走をつけてタツクルを浴びせた。タイラントは仰け反る。続けて、銃撃のようなラツシユでタイラントの胴体を打ちのめす。

「タイラントを殴った感想は？」

「やっぱ手が痛いね」

黒瀬は痛そうに手をヒラヒラした。それはそうだ。硬いコートを何十発も殴っているのだから。手袋をしているので見えないが、手は真っ赤になっていることだろう。

その一瞬の内に、タイラントは黒瀬を払うように殴る。体重が軽い黒瀬はボールのように飛び、壁に背中をぶつけた。

「あー、油断した」

黒瀬の口から血が流れている。それを袖で拭うと、腰の刀に手を掛けた。

今のを喰らい、平然と立ち上がるのは誰がどう見てもおかしいが、黒瀬だから「ああ、そうか」と思ってしまう。

「……………」

黒瀬は無言のまま、抜刀の構えを取る。辺りの空間はピリピリと張り詰め、小室の背筋が凍る。

（本気だ……………！）

黒瀬の本気の抜刀術、それが今、観れるというのか。ごくりと唾を飲み込み、黒瀬とタイラント、両方の行動を注意深く観察する。

「――！」

黒瀬は目を見開き、床を蹴ってタイラントに駆け出す。

「まずい！」

タイラントはそれを見切っていたように腕を大きく振り上げた。しかし、黒瀬は止まらない。いや、止められない。

「うおおおおおっ!!」

黒瀬の叫びはもはや咆哮だった。タイラントが腕を振りかざす前にさらに加速し、その距離をぐっと縮める。黒瀬の抜刀術が速いか、タイラントの攻撃が速いか。そして――抜刀。

その時、小室には何が起こったのか分からなかった。そもそも、抜刀したかさえ分からない。抜刀するか、というところで、黒瀬は動かなくなつた。そして、タイラントも。黒瀬は腰の刀から手を離し、振り返る。そして、その刹那――タイラントの右腰から左肩まで一筋の線、そこから、赤い血が霧のように噴き出した。タイラントは無言のまま冷たい床へと倒れ、血が広がる。

小室は開いた口が塞がらない。その凄さにただ圧倒されただけだった。黒瀬は目に

もとまらぬ速さでタイラントを斬り、刀を鞘に納めたのだ。

「はは、凄いよ……」

つい、そんな言葉が口から漏れる。

「何点ですか？」

「百二十点だよ」

——いや、それ以上だ……

黒瀬は日々強くなっている。それは小室も同じだが、黒瀬は予想以上に強くなっていた。

『まさかイワンを刀で倒すとはな……ククク、だが、本当に倒したのかな？』

その言葉の意味は小室にはよく分からなかった。と、一瞬の浮遊感。黒瀬は小室の身体を掴み、その場から飛び退いた。その後、ズドオオオオオン!! 部屋中に重たい音が響き渡る。

「なんだ!？」

「仕留め損ねたか……」

小室たちがいた場所に大穴が空いていた。その近くに、白いコートが外れ、筋肉が異常に肥大化したタイラント。

「なんだよ、アレ……」

「スーパータイラント化したんだよ。一定以上のダメージが蓄積されるとパワーアップする」

「そんな……」

あんなのに勝てるわけがない。一発でも殴られれば、床のように穴が空いてしまう。そんな奴と相手をしなければいけないなんて……

「小室……」

黒瀬の怒号で気付く。目の前には、タイラントが迫ってきていた。恐怖心で気付くのが遅れてしまった。

ドンと誰かに突き飛ばされる。小室の目には、しっかりと黒瀬の姿が捉えられていた。小室を庇った黒瀬は、タイラントの攻撃を避けることなく、そのふとましい腕で払われるように腹を殴られる。メキメキと、骨が軋む音が小室にも聞こえ、高く吹き飛ばされた。壁に背中を衝突させ、落下。黒瀬がぶつかった壁には、亀裂が何本も入っていた。

「黒瀬……」

黒瀬はピクリとも動かない。ただ、真っ赤な血が床に広がるだけだった。

35話 取り残された二人

黒瀬SIDE

『お前の力はその程度か?』

脳裏にそんな言葉が響く。どこかでそんな言葉を聞いたような気がする。でもどこだろう? 思い出せない。

頬が冷たい床へと着いていた。身体を動かそうとするが、全く、指さえ動かせない。視界がぐらつき、意識を強制的にシャットダウンしようとするが、必死に堪える。

歪む視界の中には、小室が必死に戦っている様子が映し出された。そうだ、俺はタイラントに吹き飛ばされたんだ。壁に叩きつけられ、骨が何本も折れてしまった。

『お前には素晴らしい力があるはずだ』

まただ、また誰かの言葉が脳内に響く。一体誰の声だ、言葉だ? 記憶にはないはずなのに、どこか懐かしい感じがする。

「ほんと、面倒くさいよー!」

小室の口癖が聞こえた。小室は負けじとタイラントに散弾を浴びせるが、効果はなし。徐々に距離を詰められる。

『今まで頑張ったご褒美だ。これは——』

「うるせえ!!」

脳裏に響く言葉を遮るように叫ぶ。これ以上幻聴に悩まされてたまるか。

俺は動かない身体に力を込める。

小室ではタイラントを倒せない。俺が動かないと、俺が倒さないと、オレガ殺らない

と——

「タカシ、しやがめ!!」

ビリーの声。直後、ロケット弾が俺の頭上を通過し、タイラントへと翔ぶ。タイラントはロケット弾に気づく前に命中し、身体をバラバラに吹き飛ばした。

ああ、良かった。小室は無事だ。本当に良かった。

小室とビリーは俺に駆け寄る。

「何て傷だ……意識はあるか?」

「何とか……」

俺の声は嘎れていた。

俺はビリーから応急措置を受ける。その間に、身体は動けるほどまで回復した。

「本当に大丈夫なのか?」

「ああ。まだ痛いけど戦えないほどじゃない」

「つたく、レベツカの話以上にだな」

ビリーはあきれたかのようにため息を漏らす。

「それにしても、俺が気づかなかつたらお前ら死んでたぞ」

確かにそうだ。ビリーが来なかつたら小室は殺され、俺もその道を辿っていただろう。

「礼を言うよ、ビリー」

「ありがとう、ビリーさん」

俺たちが頭を下げたところで再び男の声がスピーカーから流れた。

『君たちには脱帽だよ。あと少しだったが、どうやら運も持ち合わせていたようだ』

男はクククと笑う。

『イワンがやられた程度、私には何ともない。むしろ心地いいくらいだ』

うえ、こいつMかよ。

『君たちは結局負ける。私が造り出した最高傑作には勝てないのだよ』

そう言つて、奴の声はしなくなった。

「イカれた野郎だな」

「全くだよ」

ビリーはくるりと振り向いた。

「じゃあ俺は探索を再開する。お前らも気を付けろよ。まだ子供なんだからな」

そう言い残し、走り去っていった。

「黒瀬、本当に大丈夫なのか？」

「ああ。まだ痛むけどな」

「……黒瀬、僕をかばってくれたことには礼を言うよ。でも、もうあんな真似をしないでくれ」

小室はうつむいた。

「……わかった」

少し納得できない……俺が助けなかったら、小室は瀕死の重傷を負っていただろう。

俺はそう簡単に死にはしない。俺が仲間を救えるならそれでいいんだ。

アリスSIDE

アリスとレオンは工場内を駆ける。正面からはアンデッド六体が、呻き声をあげる。

アリスは背につけてある小型のショットガンを取り出し、走りながら銃口を集団に向け、発射する。頼もしい銃声と共に銃口から出てきたのは、二十枚にも及ぶ金のコイン。

コインは音速で散らばり、アンデッドの身体に深々と突き刺さった。

ダメージを受けていないアンデッドの頭にシヨットガンや鈍器として振りかざす。アンデッドの頭は割れ、武器として使ったシヨットガンもバラバラに壊れた。アリスは手に掛かったアンデッドの血を気にすることなく、こちらに向かつてくるハンターと対峙する。

ハンターはキラリと輝く爪を見せつけ、腕を振り上げて威嚇する。だが、そんな行為はアリスには通用にしない。ハンターの突きを下に潜り込んでかわし、起き上がると同時にその顎に強烈なアッパーを喰らわせた。

「凄いな……」

辺りの敵を殲滅すると、レオンが息切れしながらパチパチと拍手を贈る。

「あら、そう？　ありがとう」

建前でそうは言ったが、本音は違う。tーウィルスを何度も打たれ、化物の力を授けられたアリス。凄まじいパワーとスピード、回復力を得られたが、こうして戦うたびに自分は人間ではないと思ってしまう。

そういえば、リヨウもアリスのように、体型からしては考えられないほどのパワーを持つていた。更に、リッカーに腹部を貫かれたときも、一時間もせず動けるようになった。

もしかしたら彼も——

「こちらクリス。倉庫で地下へと続くエレベーターを見つけた。ジルと共に今降りている」

アリスの疑問はそこで中断された。

「レオン、行くわよ」

次にいく場所は決まった。予想では、地下に大規模な研究所があると思う。ラクーンシティの地下にも大規模なアンブレラの研究所『ハイブ』があった。そこで仲間がたくさん死に、生き残ったのはアリスただ一人だ。

次はそうはさせない。全員とはいかない事は分かっている。それでも、自分が戦えば犠牲になる人は少なくなる。

アリスはそういう想いを胸に走り出す。

小室SIDE

先ほど、クリスが言っていた倉庫に到着すると、見に覚えのある男性と、金髪にウェーブのかかった女性がいた。

「リヨウ！」

「アリス！」

黒瀬とアリスと呼ばれた女性はハグをした。まるで久しぶりに会った家族のような光景だ。

「レオンも久しぶり」

合衆国エージェント、レオン・S・ケネディもいた。

「つたく、俺たちは戦場で会う運命なのか？」

「そうかもな」

偶然とはよくいうものだ。昨年、南米でレオンと共闘したばかりというのに、今回も「偶然」出会い、共に闘う。

「タカシも久しぶりだな」

「お久しぶりです、レオンさん」

小室は丁寧にお辞儀をした。

「あなたがコムロ・タカシね。アンブレラの要注人物リストにあったわ。アリスよ、よろしく」

何やらとても嫌な事を聞いたが、とりあえず、アリスから差し伸べられた手を掴む。

「タカシです。よろしく」

アリスと小室は固い握手をかわす。

〈こちらクリス、今地下に到着した。これから探索を開始する〉
「どうやら地下に着いたようね」

小室たちは倉庫の真ん中にある大きな六角形の穴を覗き込む。

下は果てしなく続いており、ゴールが見えない。数百メートルはあるだろう。ここからクリスとジルが降りたのは確かなようだが……

レオンが言った。

「エレベーターを戻すのに時間が掛かるな」

「そうね、でも簡単な方法があるわよ」

「そうだな。しかもそれならエレベーターで降りるよりも断然早い」

アリスと黒瀬は意気投合しているが、小室にはどんな事か分からない。

（エレベーターよりも早く降りる？ どうやるんだ？）

頭に？のマークをつくる。小室には想像もつかない。

アリスと黒瀬は後ろ二十メートルほど下がり、腕をぐるんぐるん回し、肩を馴らした。

「……………」

大体予想がついた。だが、数百メートルはあるんだぞ!?

アリスと黒瀬は競争するかのようになり、穴まで一直線に向かう。

「おいおいおい」

レオンは制止させようとするが、二人は止まらず、勢いを保ったまま穴へと飛び降りた。

「ひゃっほおおお!!」

黒瀬の甲高い声がこだまし、どんどん遠くなっていた。

「……………」

「……………」

取り残されたレオンと小室は顔を見合わせる。

「俺たちも行くか?」

「無理ですね」

小室は即行で答えた。

36話 終焉

アリスSIDE

「……にもアンデッドね……」

アリスは無言のまま、ホルスターからマグナムを取り出し、口を大きく開けてアリスを食わんとするアンデッドの口に銃口を突っ込む。アンデッドは口をパクパクさせるが、残念ながらそれは肉ではない。鉄だ。

トリガーを引き、アンデッドの頭を吹き飛ばす。肉片は飛び散り、いくらかアリスにも掛かるが、血などどつくに慣れていた。これまで何度もアンデッドやアンブレラ兵を殺してきた。アリスにとって、アンデッドを殺すことなどハエを叩くのと同じだ。

「アリス、右から四体！」

リヨウの呼び掛けにより、アリスは近づいてくる敵に素早く気付くことができた。向かってくる敵はリッカー二体とキメラ二体。両方とも動きは素早い上にその攻撃のダメージは大きい。だが、そんな事はアリスにはどうでもいい。向かってくる敵はただ殺すだけ、リッカーもキメラもアリスにとって、雑魚以外の何者でもない。

天井に張り付いて移動するキメラを撃ち落とし、飛び掛かってきたリッカーに超反応

でビンタを喰らわせた。仕留めきれなかった敵をリヨウが仕留める。

「あの頃よりも強くなったわね」

ラクーンシティでのリヨウを思い出す。まだあの時のリヨウはアンデッドやB・O・Wを殺すことに躊躇していた。

「いつの話をしてるんだ？　もう五年も前の話だろ」

五年で人は変わるものなのだとアリスは実感する。五年前は敬語を使っていたような気もするが、今では言葉が雑になっていることも一種の成長だろうか。

『アリス、久しぶりね』

突如、スピーカーから少女の声が流れる。その声には何の感情も現れていない。

「あら、私はもう会いたくなかったわ」

本心だ。アリスは声の主と話すだけでも虫酸が走る。彼女のせいで仲間が多く死んだ。

「アリス、こいつは？」

『レッドクイーンよ』

アリスが答えるよりも早くレッドクイーンが名乗った。

『クロセ・リヨウ、アンブレラの要注意人物の一人。ラクーンシティから脱出した後もロックフォード、南極基地、トウキョウ地下研究所で暴れ、ルシア捕獲の阻止や南米で

はエージェントと協力し、ハヴィエを倒した』

レッドクイーンは淡々と語る。まさかりヨウがそんなにもアンブレラと戦っていたとは驚きだ。彼もアンブレラに囚われているのだろうか。

「そのレッドクイーンさんが、俺たちに何のようだ？ アリスの様子を見る限り、敵つてことは分かるけど」

『ひどいわね。そう決めつけるのはよした方が良いわ。でも、今回は当たっているみたい』

通路の奥から大量のハンターが現れる。レッドクイーンが居場所を知らせたのだから。

アリスはマグナムを撃ち、リヨウはナイフを投げる。いくらハンターといえど、この狭い通路では本領を發揮できない。アリスたちの連携により、素早くハンターを殲滅する。

『あなたたちの強さは知っているわ。リヨウ、もちろんあなたもね。似た者同士、精々頑張ると良いわ』

似た者同士、という言葉が気になったが、レッドクイーンはそれ以上話さなくなった。「レッドクイーンってのは何者なんだ？ 子供の声だったけど」

「AIよ。ラクーンシティの地下でシャットダウンしたはずなんだけど、回収されてた

みたいね」

レッドクイーンは必ず消さなければならぬ。アリスはあんな化物を放っておくとなど出来ない。

「あれは？」

リヨウが何かに気付いた。

「どうしたの？」

「今、人影が見えた。誰かが走って移動したんだよ。ハンターでリッカーでもなく、紛れもない人が」

「それは突き止めないといけないわね」

レオンたちの可能性は低い。アリスたちのように飛び降りれば、とつくに地下に来ていられるだろうが、そんな真似はしないだろう。エレベーターが上に到着するのにも時間が掛かる。クリスやジルという可能性もあるが、彼らならもつと奥に進んでいるはずだ。つまり、アリスたち以外にも侵入者がいるということになる。

「行くわよ」

アリスとリヨウは、人影が見えた方向に走り出した。

小室SIDE

「エレベーター遅いな」

レオンが愚痴を漏らす。呼び出して十分は経つが、エレベーターはまだ到着しない。小室も苛立ちを覚えていた。黒瀬もアリスも今頃地下を探索しているはずだ。早く行つて力になってやりたいが、これだとあと何分掛かることやら。

「でも地下にはクリスたちも行つてんだろ？ それなら充分じゃないか？」
合流したビリーが言った。

「そうだけ、地下に行つた四人は俺たちよりも強いからな。俺たちは地上の敵を殲滅した方がいい」

カルロスもそう答える。

「でも俺の目的はアンブレラのデータ回収だ。地下にある可能性が高い」
「それはアリスは知ってるんだろ？ それなら任せておけばいい」

『そうよ、アリスに任せておけばいいわ。そして、あなたたちは死ぬの』

近くにあつたモニターに真紅の少女が映し出された。幼い顔には何の感情も浮かんでいない。

「レッドクイーンか？」

レオンが言った。

「知ってるのか？」

「ああ。ラクーンシティの地下研究所に行ったときに、資料を読んだ。AIらしいが」

『それで合っているわ、レオン。その時は私は回収されていなかったけど』

「それで？ そのAIさんが何のようなんだ？」

カルロスは挑発気味に話す。

『言ったわ。あなたたちは死ぬの、これからね』

モニターは消え、残るのは数秒の静寂だけ。

「おい、ヤバイぞ」

数秒の静寂はすぐに打ち切られた。いつにまにか、小室たちは敵に囲まれていた。

〈奴ら〉やリツカー、キメラ、ハンター、猿、ケルベロス、それらが何十体も集まり、

小室たちに向かってくる。

「……泣けるぜ」

「全くだ」

小室たちは散開する

「面倒くさいよー！」

小室はショットガンを飛び掛かってきたケルベロスの頭に撃った。脳みそと骨が吹

き飛び、命を失った身体は床へと倒れた。

すぐにポンプアクション。舌を今にも突きださんとするリッカーに散弾を浴びせる。その間に近づいてきた〈奴ら〉は小室の首もと目掛けて噛みつきこうとするが、左腕を突きだし、〈奴ら〉に噛ませる。防寒具は厚く、〈奴ら〉の歯を通さないが、多用は危険だ。銃口を腹部に押し付け、放つ。貫かれた腹からは内臓がぶちまけられ、小室から離れた。「敵が多い!」

敵が集中しているところに散弾を何発も撃ち込む。こういうときは便利だが……
「弾切れか……!」

ポケットから弾を取り出そうとするが、そうはさせまいと〈奴ら〉が複数襲い掛かる。ナイフを取り出し、至近距離にいた敵の顎にナイフを突き刺す。手を離し、ショットガンを棍棒代わりにして〈奴ら〉の頭を叩き潰していった。

「タカシ、大丈夫か!」

レオンが走りながらハンドガンを撃つ。流石はエージェント、全ての弾は〈奴ら〉の額に命中し、数を減らす。

「レオンさん、ありがとうございます」

「別に良い。今は殲滅することを考えろ」

レオンは次々とヘッドショットを浴びせる。小室もホルスターからハンドガンを取

り出し、敵に撃つ。黒瀬たちが帰ってくる前に敵を殲滅してやる。

アリスSIDE

アリスとリヨウは広い空間に着いた。その部屋の中には見覚えのある機械が設置されている。

「レッドクイーン……」

やはりレッドクイーンは回収されていた。

「またシャットダウンしてあげましょうか？」

アリスはレッドクイーンを挑発するもレッドクイーンは何の反応もしない。

「アリス、これを見てくれ」

モニターを見ると、NO DATEと表示されていた。まさか、レッドクイーンが何の反応もしないには……

「消されたのか」

リヨウはパソコンを弄るが、何一つデータは残っていない。

「レッドクイーンまで……」

彼女が消されたことに関してはアリスも嬉しい限りだが、問題は誰が消したかだ。リヨウが見た人影かもしれない。もしくは、この研究所の幹部かもしれない。

「行くわよ。ここについても何の成果もあげられないわ」

レッドクイーン、出来れば自分の手で消したかったが、今はB・O・Wの排除が優先だ。

エレベーターで上まであがると、タカシ、レオン、ビリー、カルロスがB・O・Wの死体に囲まれて寝ていた。

「何やってんだ？」

「見ての通り、寝てるんだよ。マジで疲れた」

B・O・Wの死体は百を越える。相当頑張ったのだろう。

「B・O・Wの殲滅を確認した。隊員は外に集まってくれ」

終わった。長い戦いだっただ。これほどのB・O・W製造所だ。アンブレラも大き

なダメージを負ったはず。それでもアリスの戦いは終わらない。アンブレラが生きている限り、B・O・W. が存在している限り。

私の名前はアリス。これは私の物語。終わりの見えない物語。

長い長い戦いが終わった。部隊には死傷者も出たが、それでも少ないメンバーで研究所を制圧したことは誇っても良いことだった。

アンブレラと合衆国政府の裁判。これも決着した。レオンはアンブレラのデータを回収することは失敗に終わったが、謎の人物によってアンブレラの悪事を裁判に提出した。その証拠により、アンブレラは倒産、事実上消滅した。

だが、それでも終わらなかつた。アンブレラの元社員は世界各地に散らばり、バイオテロの件数は多くなり、それにより被害者の数も増えていった。

アンブレラの悪行により、他の製薬会社も疑われるようになったが、製薬企業連盟は批判逃れのため、共同で資金を出しあつて、B・S・A・A. (Bioterroris m Security Assessment Alliance) を結成した。メン

バーは私設対バイオオハザード部隊のメンバーが集められた。
アンブレラが滅びても俺の戦いはまだ終わらない。

番外編 2

演奏／B・S・A・A・新メンバー

演奏

演奏を終えると、ユーチエンは椅子から立ち上がり、観客席を向いた。いくつものライトがユーチエンに当たっているが、客席の一人一人の顔がよく見える。その中に、命の恩人の姿もあった。

息切れがまだ続いているが、ユーチエンは深く、深く礼をした。歓声と拍手が良い響きとなり、ステージ溢れる。そうだ、これだからピアノは辞められない。この歓声と拍手は、紛れもなく自分で取ったものだから――

「平野コータです！ ゆ、ユーチエンさん、握手をお願いします！」

ユーチエンに用意された個室で、眼鏡を掛け、小太り気味の男性が、興奮しながら手を差しのべた。その手はプルプルと震えている。

「ボクの演奏を聴いてくれてありがとう」

ユーチェンは、その太い手を握った。少し汗で湿っていたが、それほど気にならない。それに、自分の演奏をこんなに喜んでくれるなんて、何とも嬉しい限りだ。

「ユーチェン、良い演奏を聴かせてもらった。招待状、ありがとうな」

リヨウの爽やかな笑顔でユーチェンの顔はほんのり熱くなる。

「君は命の恩人だよ？ このくらい当たり前さ」

彼を喜ばせられて良かった。それだけでユーチェンは満足だ。彼には返しても返しきれない恩がある。

「ユーチェンさん、そろそろ移動しますよー」

外からマネージャーの声が聞こえてきた。彼ら二人はユーチェンの古い友人だと伝えてあるので、何の問題もない。

「ごめん、リヨウ、コータ君。今度はゆっくり話そう」

「はい、はいはい！ ゆっくり話したいです！」

コータは今にもどうにかなりそうなくらいに興奮気味だ。

「じゃあね、リヨウ。今度会ったときは日本でオススメの場所を紹介してよ」

遠回りに凄いことを言っている恥ずかしさに耐えられそうもなく、机の上にあった雑誌で顔を隠す。

「ああ。いつでも言ってくれ。どこへでも飛んでいくよ」

これ以上ここにいると、どうにかかなりそうになり、ユーチェンは飛び出るように部屋から出ていった。

「ねえ、黒瀬。君が羨ましいよ」

平野の声が低くなり、変なオーラを放っている。

「そりゃ平野も同じだろ。それにしてもユーチェンがこんなに人気だったとはな」

ユーチェンの船での行動が頭を過る。叫んで転んで泣いて、そのくらいしかイメージが湧かなかったが、今回で一新された。

「それにしてもユーチェンさんは綺麗だなあ……」

平野は顔を綻ばせる。キモい。だが、誰もが世界的有名人会えば、こんな顔になるだろう。黒瀬はならなかったが。

「帰ろうぜ。ありすにお土産を買って帰ろう」

「黒瀬はいつもありすのことばっかだね」

平野は微笑んだ。

B. S. A. A. 新メンバー

「なんでお前らまで来るんだ!？」

黒瀬は新築されたB. S. A. A. 本部で叫ぶ。

B. S. A. A. ——製薬企業連盟の批判逃れのために創られた対バイオテロ組織。NGO団体なので、大胆な行動は制限されている。最初は11人だったのに対し、今は50人を越えているが、今日、ロビーにお客さんがやってきた。

黒瀬の先輩の毒島冴子、同級生の平野コータ、宮本麗、高城沙耶、香月彩、警察の南リカ、田島、黒瀬にとって先生の鞠川静香、可愛い希里ありす。

一体どうしてこのメンバーが集まったのか、黒瀬は予想がついていた。「言つとくけど、俺は反対だからな」

そもそも小室でさえ、B. S. A. A. に入るのを反対したつてのに。

「でも私たちは良いじゃん？ 大人だし、仕事辞めちゃったし」

「そうだけ、S A T、辞めちゃった」

リカと田島から衝撃的な発言が出てきた。

「SATを辞めた!? 何で!？」

「そりゃB・S・A・A.に入りたいからに決まってるだろ。こつちも良いと聞いてるぜ」

田島は指で『マナー』のマークをつくった。

「いや、確かにそうだけど……」

NGO団体といつても、スポンサーは、あの製薬企業連盟だ。日本のサラリーマンよりは給料が高い。

「でも、ありすとか先生とかも入るのか?」

ありすはまだ子供だし、静香は戦えそうのない。それは香月にも高城にも言える。

「私たちは入らないわく、様子を見に来ただけよ」

「そ、そうか」

黒瀬はひと安心した。ありすや香月が戦っているところなど見たら、心臓が止まってしまうそうだからだ。というか、意地でも入らせないが。

「じゃあ、毒島先輩と宮本と平野とリカさんと田島さんは入るってこと?」

「私もよ」

高城が名乗りをあげる。

「マジか……」

「何？ この私が入っちゃダメと？」

「いえ、良いです」

確かに高城の冷静な判断力は力になるが……戦えそうにない。

「訓練もやってるんでしょ？ もちろん参加するわ。私が入ってあげるの！」

(訓練官は俺なんだけどなあ……)

メンバーの増強はB. S. A. A. としても了解したいが、それでも友人が『こちら側』に来るのは反対だった。

「死ぬかもしれないんだぞ？」

「心得ているよ」

皆は真剣な表情だ。遊びなどではなく、本気でバイオテロと戦いたいと思っている。「分かった、受付に言っつてその事を話してくれ」

B. S. A. A. に入りたいメンバーは受付へと向かっていった。

「リヨウ……」

B. S. A. A. に入らないと決めた香月、その顔は曇っていた。

「私もね、バイオテロと戦いたいと思ってるの。皆にみたいに銃を取らない方法で」

「じゃあ……」

「ええ、『テラセイブ』に入るわ」

テラセイブ——FBCやB・S・A・A.のように直接バイオテロと戦うのではなく、バイオテロ被害者の救済、バイオテロの糾弾や監視が目的で設立されたNGO団体。

「私も入るわ」

いつもポワワンとしている静香も今日は真剣な表情だ。

「私たちは地獄を知ってしまった。あの惨状を見て、何もしいなんて自分が許せないの」

バイオテロに囚われている。それは黒瀬にもクリスにもレオンにも言えることだ。

「先生と香月の覚悟はよく分かった。そこに所属している友人がいるんだ。あとで紹介するよ」

本心では、まだ認めていなかった。

「おい、リョウ、見たか!? 日本のカワイコちゃん」

仕事に戻った黒瀬に話し掛けてきたのは、B・S・A・A.メンバー、キース・ラムレイ。どこかの特殊部隊からB・S・A・A.に移籍したそうだ。体の至るところから刺青が見える。

「言っとくけど、あれは俺の友人だ。手を出したらぶん殴るぞ」

キースは女遊びで有名だ。一部のメンバーは「グライNDER（女たらし）」と呼んでいる。

「えー!? マジかよ。羨ましいぜ」

「どこがだ」

憂鬱な気分だ。いっそのこと全員面接落ちてくれと思う。いや、落とそう。黒瀬はB. S. A. A. の面接官としても働いている。

「おう、皆、新メンバーを紹介するぞ」

B. S. A. A. 代表、クライヴ・R・オブライエンは皆の前に出てきた。

（新メンバー？ 聞いてないな……）

いつもなら面接には黒瀬が参加しているが、今回はそれを行っていない。特別なメンバーだろうか？

「入ってきてくれ」

オブライエンに言われ、ドアから新メンバーが入ってくる。

「……………」

黒瀬は驚きのあまり無言になった。

ドアから入ってきたのは、毒島、平野、高城、リカ、田島だった。

（早すぎない？）

別れてから一時間も経っていないのに、もう面接が通り、合格したようだ。小室が仕事から帰ってきたらさぞ驚くことだろう。

ショッピングモールでの戦い 前編

「ほらー、走れー」

訓練所にて、黒瀬は、息を切らして立ち止まっている高城に注意する。

「——なんでこんなに訓練がキツイのよー」

黒瀬は何故か逆ギレされ、睨み付けられる。

「でも戦闘班を選んだのは高城じゃん。今からでも開発班に異動できるぜ」

「いやよー！ 私だつて戦えることを証明するわ」

高城は汗を散らしながら、ランニングを再開する。ここまで体力がないのはびつくりだが、これから良くしていけばいい。高城は頭が良いので、戦闘の技術もすぐに覚えるだろう。

『リョウ、いますか？』

天井のスピーカーから、B. S. A. A. メンバー、クエント・ケツチャムの声が響く。

「いるぜ」

『バイオテロが起きました。メンバーを選んでカークのヘリで事件現場まで行ってくだ

さい。FBCも来るようです』

「分かった。今行く。カークにさっさとヘリの準備をしとけと伝えといてくれ」

バイオテロ……か。その数は年々増えている。アンブレラが潰れてもなお、いや、潰れたからこそ、バイオテロの件数が多くなった。だが、それは決してアンブレラを潰したのがいけなかったわけではない。

「すまん、高城。今から出動するわ」

メンバーの選択はどうしようか。

小室やクリスたちの黒瀬以外のオリジナルイレブンは、アメリカのバイオテロの事件に出動している。アリスは一応B・S・A・Aに籍を置いているが、ふらりと現れ、また去っていく。彼女のことだから、一人でアンブレラの残党やバイオテロと戦っているのだろう。平野や毒島たちも山で訓練中だ。仕方無いので、話したことがないメンバーと行かなければならない。いつもなら小室とツーマンセルで行くが……

「私も行くわ」

高城は息切れしながら言う。

「えー？ でもなあ」

高城の射撃能力は評価するが、運動神経がこれといって駄目だ。B・O・Wと戦うには、身体能力が第一である。

「実戦も大切な訓練よ」

確かにそうだが……いや、高城にバイオテロの怖さを知ってもらうのに良い機会かもしれない。そして、バイオテロの怖さを知った高城はB・S・A・A.を辞めるかも。そしてそして、高城がいなくなったことにより、平野も辞めるかもしれない。

「よし、行くか。クエント！ キースも呼び出しといてくれ！ 俺と高城とキース、カークの4人で行く！」

『了解しました！ グラインダー、任務です。準備してください！』

FBCも来るならカークも含めて4人で充分だ。

「高城、急ぐぞ！」

黒瀬は高城を抱き抱え、武器庫へと急いだ。

「で、状況は？」

黒瀬たちは事件現場のショッピングモールの駐車場に到着し、急遽建てられた無数のテントの中の本部へと入る。そして黒瀬はFBCのメンバーに聞く。

「B・S・A・A.か。こちらでも人手が足りなかったところだ」

男はイタリア人で、けっこう図体が大きい。

「B・S・A・A.のクロセ・リヨウだ」

「FBCのパーカー・ルチアーニだ。それで……それはなんだ？」

パーカーは黒瀬の腰の刀と木刀を指差した。

「これか？ 俺の得物だ」

パーカーはそれを聞いて納得したように頷いた。

「そうか。噂は聞いている。B・S・A・A.には刀を使う日本人がいると」

黒瀬をB・S・A・A.で知らない人物はいない。只でさえB・S・A・A.には日本人が少ないのに、刀使いであり、オリジナルイレブンでもある。もともと、主力の武器は木刀だが。

「状況報告！ 2階のエレベーターと3階の事務室、4階の倉庫に従業員と客が取り残されています。数は不明！」

FBCの隊員がテントに入り、声を張り上げる。

「了解した。チームを5人1組で4つに分ける。リヨウ、俺はB・S・A・A.のチームに入る」

「宜しく、パーカー」

すぐに突入メンバー20人が本部テントに集合した。

諜報員がショッピングモールの地図を使いながら説明し出した。

「現在分かっている情報では、2階のエレベーター、3階の事務室、4階の倉庫に従業員と客が取り残されています。屋上の駐車場からはブレイカーが落ちてシャッターが降りているため、侵入できません。ハンターや大蜘蛛、ケルベロスのB・O・W.を確認。未確認ですが、『感染者』が徘徊しているとの情報も入っています。アルファチームは1階の搜索、B・O・W.の排除、ブラボーチームからB・S・A・A.を含めたデルタチームは各階の生存者の救助、道中のB・O・W.の排除になります」

屋上から侵入できないのは、結構キツイ。黒瀬たちデルタチームは1階から突入しなければならぬ。

黒瀬たちは武器の用意をし、目標が一番遠いデルタチームから侵入することになった。

「ライトを付けろ」

パーカーの呼び掛けにより、全員が銃のライトや胸のライトを付ける。ショッピングモールはブレイカーが落ちているため暗く、B・O・W.には格好の獲物だ。

「ちよつと、黒瀬。私はどうすればいいの？」

困ったように高城が聞いてきた。

「辺りの警戒。敵を見つけたらすぐに伝える」

高城がどれだけ頭がよくても、戦闘面に関しては下の部類だ。一人で行動させるわけにはいかない。

パーカーは黒瀬たちにハンドサインを送り、黒瀬たちは一気にシヨツピングモールに入る。互いの背中を守りながら辺りをライトで照らすが、今のところ敵は確認できない。

「ところで、サヤちゃん、仕事が終わったらバーで飲まない？」

「お断りさせてもらうわ。好みじゃないもの」

キースのナンパは、2秒も持たず終了してしまった。

「こちらデルタ、敵は今のところ確認できない。階段を上る」

『了解した。周囲の警戒を怠るな』

パーカーは無線を切り、黒瀬たちの方を向く。

「言っておくが、今回の事件はFBCの管轄だ。俺の指示に従ってもらう」

「へーい」

そもそもB・S・A・AはNGO団体だ。FBCのような実権はなく、バイオテロの事件が起こってもオブサーバーでしか関われない。こうしてFBCと共に行動できるのは、パーカーの気前が良かったからだろう。

「行くぞ」

黒瀬たちは、
暗い暗い階段を上る。

シヨツピングモールでの戦い 後編

高城沙耶は、震えていた。

自分から言い出し、バイオテロの起こったシヨツピングモールまで来たが、軽率だったと実感した。

暗いシヨツピングモールを照らす一筋の光。この光を頼りに進み、最悪の場合、敵と戦闘しなければならぬ。この暗い場所で、いつどこから襲ってくるかもわからない敵を対処し、人命の救出。失敗した場合には重い責任が下る。

高城は短機関銃『H&K MP5』をぎゅつと握り締める。緊張のせいか、手が湿るが、辺りの警戒は怠らない。

——私のせいで誰かが死ぬ。

その可能性は十分にある。一瞬でも気を緩めた結果、敵が襲い掛かり、仲間を襲うかもしれない。それだけは絶対に避けたい。もつとも、このチームには信頼できる人物がいる。

高城は信頼できる人物、黒瀬リヨウを見た。近代の戦闘服ではありえない装備、日本刀を腰に携え、右手には木刀、左手には、刃渡り3センチメートルほどのダガーナイフ

を3本指に挟め、構えている。黒瀬の赤い目は暗闇の中で微かに光り、その表情は、どよんと、沈んでいるように思えた。

「あら、怖いのかしら?」

「いや、コソコソするのは苦手なんだよ。さっさと突っ込みたい」

予想だにしていない答えが返ってきた。確かに黒瀬の性格からして、コソコソと様子を見ながら進むより、突っ込んでさっさと救出した方が性に合っているのかもしれない。

カークが言った。

「おいおい、先月みたいにB・O・W.をおびき寄せるのは止してくれよ。リョウとタカシがへりまで敵を呼び寄せたせいで俺まで大変だったんだからな」

「でもあれのおかげで施設の敵は全部倒せたんだから良いじゃん?」

黒瀬とカークの話の内容は分からないが、やはりB・S・A・A.のエージェントはかなりの化物らしい。

階段をのぼる。

一段上がるたびに、コソコソと足音が鳴り、この音で敵が気づくかないか不安になる。シーンと静まりかえり、響くのは足音だけ。本当に大丈夫なのだろうか。

敵に会うことなく、4階に到着し、壁に隠れて辺りを警戒する。

「おいおい、あれはハンターか？」

キースが気付く。目を凝らしてキースが指を指した方向を見ると、確かにハンターらしき生物が彷徨っていた。

「こちらデルタ、ハンターを発見した」

『発砲許可は出ている。民間人救出までに来る限りの敵は排除しろ』

相手は1体、こちら5人、普通なら負ける要素はない。

『こちら本部、新しい情報だ。4階の東エレベーター付近で、民間人の子供が親とはぐれてしまったらしい。そちらの搜索も頼む』

「おいおい、マジかよ……」

今、高城たちがいるのは、南エレベーター付近の階段、そして本来の目的の民間人が隠れているところは西の方だ。子供がはぐれてしまったところと民間人が隠れているところは、逆、ということだ。

「仕方ない。チームを分けよう。リヨウ、俺は民間人の方に行く」

パーカーが言う。

「オーケー、それならキース、カークはパーカーと一緒に民間人の救出だ。俺と高城で子供の搜索にあたる」

黒瀬は冷静に判断した。

「こちらデルタ、チームを2つの分けて搜索する」

『了解した』

「リヨウ、子供の搜索が終わったらここで合流しよう」

「オーケー」

「サヤちゃん、気をつけて！ まあ、リヨウがいるから安心だと思うけど」

「そつちこそ」

一手に分かれて行動する。メンバーが少なくなつて少し心許ないが、あの黒瀬と一緒にだ。キースよりかは信頼できる。

「黒瀬、本当に2人で大丈夫なの？」

黒瀬の武器はほとんど近接だ。そして自分もそれほど訓練を積んでいない。敵が襲い掛かってきても遠くの敵を対処できるのは高城だけだ。

「大丈夫だ。俺が高城を必ず守るから」

「……………」

今さらだが、黒瀬はキザなセリフを吐きすぎだと思う。この言葉を知り合つたばかりの人に言っていたら、もうバカを通り越しているが、流石の黒瀬でもそういうことはないだろう。

「気を付けろよ。このフロアにハンターがいることは確実だ」

「わかってるわ」

暗闇を進む。高城は10メートル進むだけでも相当な神経を集中させ、額からは冷や汗が流れる。汗を拭い、再び銃を構えると、黒瀬からストップの合図が出た。

「なこよ……」

「あれ」

黒瀬は正面に指を差すが、そこはライトの当たっていない暗闇。高城は何度も目を凝らす、当然何も見えない。

「分からないのか？ ハンターだ」

「……………」

もう8年ほどの付き合いだが、久しく忘れていた。黒瀬の視力は凄い。夜行性の猫が暗闇の中で目を光らせるのは、夜の僅かな光を集め、反射しているから、と言われていゝる。黒瀬の目も猫の目ように反射し、その奥にいるハンターをしっかりと捉えているかもしれない。

黒瀬はそつと、ナイフを投げた。くるくると回転しながらナイフは飛び、暗闇で見えなくなる。遠くでドシャ、と何かが倒れる音がした。

「倒したか……」

ハンターがいるらしい場所まで進むと、黒瀬の言う通り、ハンターが頭にナイフを刺

されて息絶えていた。

「アンタ……本当に人間じゃないのね」

そもそもナイフ投擲自体難しいのにそれを、20メートル先にいるハンター目掛けて投げるなど、人間業じゃない。いや、そもそも仲間の中に人間以上の事ができる人物がほとんどだが。

平野コータは、元S A Tのスナイパーと射撃勝負で張り合うことが出来るし、毒島冴子は人間ばなれした身体能力を持っている。小室孝も黒瀬に鍛えられたおかげで、軍人とともに戦えるほどにまで成長した。

（私も……）

他に負けてはいられない。ハンターでもケルベロスでも倒して、どんどん強くなる。

「うわあああんー！」

子供の泣き声が、聞こえてきた。かなり近い。

黒瀬と高城は顔を見合わせ、

「行くぞー！」

「行くわよー！」

走り出した。

子供の泣き声のする場所は、情報通り、東側エレベーター付近のトイレ。中に入ると、

男性がトイレの扉を叩き、その中から子供の泣き声が聞こえる。

だが、その男性は既に人間ではなかった。

胸には大きな爪傷があり、服血では真つ赤に染まっている。顔は真つ青、白目を剥いていた。そして、その口からは呻き声に似た声を発している。

〈奴ら〉だ。あれから4年、忘れたことはない。〈奴ら〉は人を喰い、その喰われたものも〈奴ら〉となって数を増やす。動きは鈍いが、集団で襲い掛かることが多く、関東では多くの人が犠牲になった。

こちらに気付き、腕を前に伸ばして近づいてくる。その姿は、まるで映画のゾンビだ。「よっー」

黒瀬は木刀を抜刀し、抜いた勢いのまま、男性の頭に叩きつけた。力を失ったように倒れる。木刀の血を払い、腰に直す。

流石だ。話で聞いた程度だが、今まで何度も死闘を繰り広げてきたこともある。アンブレラを潰したのは、黒瀬を含めたオリジナル・イレブン。彼らの力は計り知れない。

「おい、大丈夫だから、ドアを開けてくれ」

黒瀬がそう言うも、子供は泣き止まず、ドアを開けない。

「バカね。私がやるわ」

高城はトイレのドアの前に立った。

「もう大丈夫よ。敵は私たちがやつつけたわ。もう怖くない。はやくママのところに戻りましょう」

自分でも気持ち悪いと思う声で言ったが、子供は泣き止み、ドアを開けてくれた。

「もう大丈夫よ。怖かったでしょ？」

高城は子供を胸に抱え、頭を撫でる。

「パーカー、こちらリヨウ、子供を救出した」

『俺たちも民間人6人を救出。南階段で合流しよう』

『サヤちゃん、大丈夫!? 化物に何もされてないよね?』

高城は無線を切った。

「はやく行きましょう」

子供は、安心して緊張が緩んだせいか、高城の胸の中でぐつつすと寝ていた。

「じゃ、お姫様とお子様をエスコートしますか」

行きはよいよい帰りは怖い、と通りゃんせの歌にあるように、ケルベロスやハンターが帰りになって襲い掛かってきた。

ケルベロスは高城の首もと目掛けて飛ぶ。目を瞑ったが、いつまでたつてもケルベロスは来ない。

「言っただろ? 俺が必ず守るって」

目を開けると、ケルベロスは倒されていた。

「高城、安心して子供を抱えてろ。何があっても絶対に手は出させないよ」

あまりにクサすすぎる言葉に苦笑するが、これだからこそ黒瀬リヨウと言えるだろう。

「分かったわ！ 私を守りなさい！」

「オーケー、お嬢様！」

「ぶはあ！ やっぱり酒は旨いなあ」

黒瀬はコップ一杯の酒を飲み干し、カウンターの店員にまた同じ酒を頼んだ。

黒瀬と高城は、パーカーたちと合流し、無事に民間人を救出することに成功した。その後、FBCが増援に来たので、用なしとなった自分たちは、帰ることになった。そして、高城は黒瀬に誘われ、いきつけとやらのバーに来ている。

「アンタ……よくそんなに飲めるわね」

これでもう5杯目。しかも、その酒のアルコール度数は70度を越えている。普通なら酔い倒れてそうなどころだが、顔はいつも通りの黒瀬だ。

「俺は酔わないんだよ。ほら、傷の回復力が凄いじゃん？ 多分そのせい」

なるほど、黒瀬の身体の中では、通常より何倍もはやくアルコールを分解しているらしい。

「でもアンタ、未成年じゃない」

「あと1ヶ月だけ？ 変わらん変わらん」

「それがダメだつていうのに……」

高城はオレンジジュースを飲んだ。

「まあ、アンタが言つてたことが今日の事件でよくわかつたわ」

本当に心から恐怖した。いつ殺されるかもわからないあの恐怖。思い出せば、また鳥肌がたつてくる。

「辞める気になつた？」

「いいえ、辞めないわ。黒瀬のおかげでバイオテロの怖さとそれと戦う怖さもちゃんと理解した。でも、だからこそ、私はバイオテロと戦いたい。今日救つたあの子供の命、本当に救えて良かったと思う。でも、あの被害者がこれからも存在し続けるというなら、これからも助けていきたい」

高城の覚悟は本物だ。

「じゃあ、訓練も頑張る？」

「それは、ちよつと……」

覚悟は本物だが、訓練にはまだ抵抗のある高城であった。

バイオテロをふせげ!

プルルルル!

資料室で資料の整理をしている最中、机の上に置かれている黒瀬のケータイに電話が掛かった。

「黒瀬くん、電話が鳴っているぞ」

同じく資料の整理をしていた毒島冴子が、着信に気付き、ケータイを取って黒瀬に渡した。

「ありがとう」

黒瀬は毒島からケータイを受け取る。画面には『ソフィア』と表示されていた。

ソフィア——ソフィア・ラインは、南米で出会った情報屋。彼女のおかげで、黒瀬と小室は救われ、麻葉王ハヴィエを倒すことが出来た。その後も彼女の情報を買ひ、B・O・Wの取引現場を襲撃するなど、その功績は高い。

そんな彼女が電話を掛けてくる理由は1つ、新しく入った情報を買ってほしい。それしかない。

黒瀬は応答のボタンを押した。

「もしもし？ 黒瀬だ」

『あ、おにーさん？ 久しぶりだね。ちょっと買ってほしい情報があるんだけど』

黒瀬の予想は当たっていた。そもそも、ソフィアがそれ以外の理由で電話を掛けてきたことなど一度もない。

「オーケー、買うよ」

『あれ？ 結構素直だね』

「そりゃあな。お前だって情報屋をやってたんだから、俺たちにとって有益な情報を持ってきたんだろう？」

『そうだね。すつごく有益な情報だよ。ラクーンシティの再来が起こるほどの』

それを聞いて、黒瀬はあの記憶を思い出す。トーウィルスにより、パンデミックが発生。合衆国政府によって、地図上から消された街だ。

「詳しく聞かせろ」

『オーケー。簡単に言えば、メリア国の感染症研究所がテロリストグループに狙われている。彼らが狙う目標は、メリア国の感染症研究所で保管されているトーウィルスとG—ウィルスよ』

「G—ウィルスまであるのか!？」

『ええ。メリア国がH・C・Fから買ったらしいの。その情報がテロリストグループ

にリークされ、襲撃されそうになってる。決行日は明日よ』

「明日!?!」

先ほどから驚きの連続だ。Gーウィルスを保管していることもそうだが、それ以上に決行日が明日というのが、驚きだ。

『急がないと、テロリストがTーウィルスを回収してどこかにばらまくかもしれない』

「ありがとう。金は後で払う。それじゃ!」

黒瀬は通話を切った。

「黒瀬くん? どうかしたのか?」

黒瀬の驚きようを見て、毒島は問う。

「ヤバい事件が起こりそうなんだ。詳しい話はあとです。武装してきてくれ」

一刻を争う。はやくしなければ凶悪なウィルスが悪の手に渡ってしまう。

「おいおい、それマジかよ」

ヘリの中でカークが言った。

「ああ。時間がない。急いでくれ」

「これで限界だ」

メリア国にオブライエンを通して事情を話したが、相手にされず、次はレオンにそのことを伝えて対応してもらった。しかし、メリア国とアメリカは仲がそれほどよろしくない。メリア国も半信半疑で、警備の人間が一人二人増えるだけだろう。

「それで私たちが動くわけか」

「ああ。テロリストの数もそれなりに多いはずだ」

「でも、戦えるのはリヨウとサエコだけだろう？ 俺はヘリの操縦があるし……」

問題はそれだ。急遽動けるメンバーが、二人しかいなかった。だが、カークはヘリの操縦があるので、戦えるメンバーは黒瀬と毒島の二人だけとなる。

「しかも二人は近接武器だしなあ……」

カークの言う通り、黒瀬も毒島も主な武器が木刀や刀、敵はもちろん銃を使うだろう。

「それに関しては大丈夫だ。俺も毒島先輩も銃弾くらい避けれる」

「それはそれでヤバいと思うが……」

「進めー!」

テロリストグループ、装甲車で門を突破し、次々と車が現れ、ガスマスク集団総勢20人は近くにいた作業員を撃ち始める。

狙いはこの感染症研究所で保管されているEーウイルスとGーウイルス。この2つがあれば、例えアメリカだろうと従わせることが出来る。

仲間が研究所内にガス弾を撃ち込み、所員を次々と殺していく。

「ふ、生ぬるい」

警察やら軍やらが駆け付けようと、ウイルスを手に入れば最早勝ちだ。脱出も簡単になる。

「へりだー!」

仲間の一人が気づく。へりがこちらに猛スピードで飛んできていた。

「パトロールのへりか!」

だが、へりは止まることなく、感染症研究所を通り過ぎる。が、そのへりから飛び降りてきたものがいた。ロープなしで。

「がっ!」

「ぐえ!」

飛び降りてきた二人は着地し、近くにいた傭兵たちを木刀を叩きつけ、倒していく。

「けっ！ アメコミか？」

男はそう言葉を吐いた。

「うおおおおおー！」

黒瀬は咆哮をあげながらガスマスクの傭兵へと突っ込み、その頭に木刀を叩きつけた。毒島も負けじと応戦し、日本刀で敵を斬り捨てていく。

敵が装甲車の陰に隠れるが、装甲車ごと蹴って敵を吹き飛ばす。

「毒島先輩、左を頼む！」

「承知した！」

黒瀬は飛んでくる弾丸を避けながらナイフを投げる。敵は多い。はやく倒さなければ。

研究所入り口に警備員が倒れていた。既に敵は中に侵入している。

「死にやがれ!!」

傭兵がマシンガン撃ってくるが、近くにあつた装甲車のドアを開け、それを盾にす

る。

カンカンカツカンと銃弾が跳ね返され、窓ガラスさえ割れない。流石は装甲車だ。

黒瀬はナイフを取り出し、車のドアの接合部分を切る。そしてドアを持ちながら傭兵に向かって走り出した。

「て、テメエー！」

驚いた様子だが、もう遅い。黒瀬は傭兵の残弾がなくなったのを確認し、ドアを傭兵に向かってフリスビーのように投げ、傭兵を倒す。

「ここは私に任せて、黒瀬くんは中へ！」

「頼んだー！」

黒瀬は正面にいた敵を突き飛ばし、車のボンネットを蹴って二階まで跳躍する。顔を腕で守り、窓ガラスを割って侵入した。

室内の敵は5人、研究所の職員らしき人物が何人も倒れていた。それもそのはず、今、室内は紫の煙に包まれている。黒瀬の予想が当たっているのなら、この煙は毒ガスだ。ガスマスクをしていない黒瀬は、普通なら死んでしまうが、超人的な回復力により、毒を無効化している。

傭兵の一人が黒瀬の侵入に気づくが、銃を向ける前に間合いに入り、流れるように側面に回って投げ、壁に叩きつける。その音に他の敵も気づくが、既に時遅し。黒瀬は敵

に接近する。不意を突かれた傭兵はフレンドリーファイアを恐れて拳で殴りかかるが、その腕をひよいと掴み、くるりと回して転倒させる。転倒させた傭兵の足を掴み、近くにいた敵に投げる。

近くに味方がいなくなったからか、敵が黒瀬に向かって撃ち始めるが、柱に隠れ、ナイフを取り出して投擲した。

『黒瀬くん、こつちの敵は殲滅した』

「こつちはあと少し！」

残りは二人、というところで、奥から三人の傭兵が現れた。

その手には、二つの試験管が握られている。

「これを落とすぞ。良いのか？」

ガスマスク越しのこもった声で言った。それを言われれば、為す術はない。普通なら。

——そう、黒瀬は普通ではない。

黒瀬は微笑を浮かべた。そして、ゆっくりとウイルスを持つている男に近づく。

五人は、何も出来なかった。黒瀬の笑みを見た瞬間、身体が震え、その場から動くことが出来なかったのだ。

黒瀬は男の手からウイルスを取り、ポーチの中に入れる。

「これ、プレゼント」

黒瀬はその場にピンを抜いた手榴弾を落とし、すぐに立ち去った。

「冴子！ 良かった、無事で」

色々と事情聴取を受けた後、B・S・A・A本部に帰った。ロビーには小室が待っていた。

「小室くん、心配をかけてすまなかつたな。見ての通り無事だ」

二人は抱き合い、顔を見合わせた。

(これで付き合ってもないとか……)

黒瀬はやれやれと、二人の邪魔をしないようにオブライエンへの報告に向かった。

登場人物紹介

B・S・A・A・メンバー

黒瀬 涼

本作の主人公。

ラクーンシティの生存者で、脱出した後も様々なバイオテロ事件の解決に関わっている。

頭脳は高校でトップを誇るほどだが、高校時代は授業をサボって、不良友達の小室たちと遊んでいた。身体能力は、体の見た目以上の力を発揮し、反射神経も高い。

当初は歳上に対して敬語だったが、後に面倒くさくなり使わなくなった。

カントウ事件が起こる前までは、マンションで一人暮らしをしていて、隣には中学生からの付き合いの香月彩が住んでいた。

中学生の頃に両親が事故で亡くなっているが、今ではそれほど気にしていない。小学生の頃の記憶がなく、それを指摘されるまでは、気にしていなかった。

射撃能力はクリスを抜くほどだが、何らかのトラウマがあり、生物には撃つことが出

来ない。

6章でアンブレラの研究所を制圧した功績を称えられ、製薬企業連盟が設立したB・S・A・Aの創設メンバーとなる。7章以降は、B S A AのオリジナルレブンとしてウイルスやB・O・Wとの戦いに身を投じていく。

ウイルスやB・O・Wを悪用するものには激しい憎悪感を抱いており、それらを使用したものには容赦ない。

聖イシドロス大学に通っていた。

実はアンブレラによって造られたクローンであり、その素体はアンブレラ最高幹部の黒瀬和樹。幼少期はアンブレラの研究所で過ごしていたが、実験の最中に暴走し、黒瀬和樹の娘とその夫を銃で殺害してしまう。そのトラウマにより、幼少期の記憶を封印し、銃を生物に撃てなくなってしまう。

小室 孝

本作の準主人公。

3章で黒瀬たちが危機的状況にみまわれた際に駆けつけるなど、友人らしく黒瀬の事を気にかけて。カントウ事件の後も時折事件の光景がフラッシュバックし、忘れることが出来ず、黒瀬に鍛えてもらい、半ば強引に黒瀬についていつてバイオテロに関わるようになった。

カントウ事件から四年経った今でも、毒島冴子が宮本麗かを選びきれず、何とも言い難い状況が続いている。

黒瀬と同様、功績を称えられ、B・S・A・Aの創設メンバーとなる。

8章では、黒瀬と宮本を捜索するために雪山に平野と訪れ、FBCの秘密研究所でウーズと戦う。貨物列車戦では、クリーチャーと化した紫藤にとどめをさした。

番外編3では毒島冴子と結婚する。

スペンサー邸で黒瀬に似ている人物の写真を発見したがそれを伝えることはなかった。

武器はポンプ式ショットガンを好む。

クリス・レッドフィールド

元S・T・A・R・Sのメンバー。現在はB・S・A・Aのオリジナル・イレ

ブン。

クリスのせいで黒瀬がラクーンシティのバイオハザードに巻き込まれることになった。

3章では、友人として黒瀬を救出しに東京までやって来た。

その後も黒瀬やジルとは様々な場所でバイオテロと戦い、厚い信頼関係で結ばれている。

10章エピソードで、飛行機に乗って飛び立とうとしていた黒瀬に連絡を入れる。

ジル・バレンタイン

元S・T・A・R・Sのメンバー。現在はB・S・A・Aのオリジナル・イレブン。

ラクーンシティで黒瀬と再会し、他のメンバーと共にラクーンシティを脱出した。その後もクリスや黒瀬と共にバイオテロと戦っていたが、6章でB・S・A・Aに入ることとなった。

10章エピソードでクリスをウエスカーから庇って谷底に落ち、番外編3でMIAとなってしまう。

アリス・アバーナシー

元アンブレラの特種作業員。現在はB・S・A・Aのオリジナル・イレブン。ラクーンシティの地下に造られていた『ハイブ』という研究所を脱出した後、アンブレラに捕らえられ、t-ウイルスの実験体になってしまう。ラクーンでバイオハザードが発生した後は、t-ウイルスによる超人的な力に目覚め、その力を使ってラクーンシティを脱出した。

その後は各地でアンブレラ戦い続け、ロシアに来た際にジルとカルロスと再会し、対バイオテロ部隊に入ってバイオテロと戦っていた。

B・S・A・Aに入った後も各地を転々とし、アンブレラの残党と戦っている。

カルロス・オリヴェイラ

U・B・C・Sの元隊員。現在はB・S・A・Aのオリジナル・イレブン。

民間人救出という名目でラクーンシティに投下されるが、ジル、アリス、黒瀬と出会い、ラクーンシティを脱出した。

その後は傭兵として暮らしていたが、ジルに誘われて対バイオテロ部隊に入る。B・

S・A・A設立後も最前線でバイオテロと戦っている。

ビリー・コーエン

元海兵隊。現在はB・S・A・A.のオリジナル・イレブン。

アンブレラの養成所から脱出した後は隠居生活を送っていたが、レベッカを通じてクリスからスカウトされる。

黒瀬の話はレベッカから聞いていた。

B・S・A・A.に入った後も最前線でバイオテロと戦っている。

10章では、シカゴでプロトタイラントと戦い、部下をほとんど失ってしまい、自分も重傷を負ってしまう。

クライヴ・R・オブライエン

B・S・A・A.代表。

製薬企業連盟により、B・S・A・A.代表を任された。強い正義感と高い指導力を持つている。

8章の最後で一連の事件の責任を取ってBSAA代表を辞任する。

毒島 冴子

B・S・A・A 隊員。

高校生の時に剣道で全国優勝している。カントウ事件で小室と仲が進展したが、脱出後は四年も関係が進展していない。

小室と会うためにB・S・A・Aに入ったが、バイオテロと戦う決意も本物。

刀での戦闘力なら黒瀬と同等。

B・S・A・Aに入った後も日本刀を使って戦う。

番外編3で小室と結婚する。

平野 コータ

B・S・A・A 隊員。

ドのつくほどの軍事オタク。軍事会社ブラックウオーター社で射撃訓練をしていた事もあり、射撃能力が格段に高い。その腕は全国の警察官の中でトップ5を取る南リカ張り合うほど。

バイオテロと戦うためもあるが、本物の銃がいつでも撃てるという理由もあって、B・

S・A・Aに入った。

B・S・A・Aでのスナイパーライフルの腕は黒瀬を除いて、南リカと同率。
8章では黒瀬と宮本を捜索するために雪山を訪れる。
番外編3で高城と結婚する。

宮本 麗

B・S・A・A 隊員。

黒瀬とは事件以前から知り合いだったが、小室の告白をフった人物としてあまり良く思われていなかった。

紫藤に留年させられ、恨んでいる。

銃術部に所属していた事もあり、槍や銃剣付きの武器を使った近接戦闘が得意。

B・S・A・Aには毒島と同じ理由で入った。

8章では黒瀬とタッグを組み、事件解決に向けて研究所で戦う。研究所内で紫藤と再会する。研究所から助け出した子供たちには、時々会いに行っている模様。

高城 沙耶

事件以前から黒瀬とは知り合いで、テストで毎回一位を取られることが気に食わな

かった。

豊富な知識と冷静な判断力で皆をまとめる。

黒瀬の事を前述の理由で今でも嫌っているが、あくまでも表面上であり、実際には強い信頼関係で結ばれている。

平野とは事件以降、関係が進展していない。が、B S A Aとして共に戦っている内に心を引かれ、番外編3で結婚した。

南
リカ

元警察のS A T隊員。現在はB・S・A・A隊員。

日本の警察でトップ5に入れるほどの射撃能力を持っている。

床主国際洋上空港で戦っていたが、自衛隊による救出作戦が始まった後、小室一行と合流し、黒瀬たちの救出へと出向いた。

警察で犯罪と戦う道よりも、B・S・A・Aでバイオテロと戦う道を選び、警察を辞め、同僚の田島と共にB・S・A・Aに入る。

西部アフリカ支部に所属。

田島

元警察のS A T隊員。現在はB・S・A・A隊員。
南リカの観測手を務めていた。

床主国際洋上空港で戦っていたが、自衛隊による救出作戦が始まった後、小室一行と合流し、黒瀬たちの救出へと出向いた。

南リカと同様、警察で犯罪と戦う道よりも、B・S・A・Aでバイオテロと戦う道を選び、同僚の南リカと共にB・S・A・Aに入る。
西部アフリカ支部に所属。

キース・ラムレイ

元特殊部隊。現在はB・S・A・Aエージェント。

職場でも女性メンバーに絡み、一部のメンバーからはグラインダー（女たらし）と呼ばれている。

黒瀬とは仲がよく、バーで飲み会う仲。黒瀬が出動する際には黒瀬、小室、キース、カークの四人で行く場合が多い。

東部アフリカ支部に所属。

クエント・ケツチャム

B・S・A・Aのエージェント。

技術班と戦闘班の両方を担っている。

欧州本部に所属。

カーク・マシソン

B・S・A・Aメンバー。

B・S・A・Aのヘリパイロット。黒瀬とは仲がよく、黒瀬が出動する際は必ずカークの操縦するヘリに乗って任務に向かう。

西部アフリカ支部に所属。

11章では既に死亡している。

パーカー・ルチアーニ

番外編2に登場。

黒瀬たちの功績を認めており、ショッピングモール以降のバイオテロ現場でも度々会っている。

8章では、FBCを辞めてBSAAに入っており、ジルと共にクリスタたちの捜索を

行った。

10章では、黒瀬に武器を渡すために本部から遙々シカゴを訪れる。
欧州本部に所属。

ラング

10章に登場。黒瀬と共にバイオテロ鎮圧を行う。
北米支部に所属。

シャリア

10章に登場。元々有名な陸上選手だった。黒瀬と共にバイオテロ鎮圧を行う。
北米支部に所属。

レイアン

10章に登場。軍事オタク。オリジナルイレブンを尊敬している。黒瀬と共にバイオテロ鎮圧を行う。

北米支部に所属。

ケンド

10章に登場。黒瀬が銃を使えないことに対して暴言を吐く。シカゴでのテロで敵を恐れ、敵前逃亡してしまうが、必死に戦う市民や警官を見て心が揺さぶられ、プロトタイプタイラントを相手にしていたピリーを救う。最終的に黒瀬と和解した。

北米支部に所属。

アンブレラ関係者

ティモシー・ケイン

アンブレラの幹部の一人。

ラクーンシティで黒瀬たちを捕らえ殺そうとしていたが、一瞬の隙を突かれて逃げられ、大量のゾンビに喰われて死亡する。

チャールズ・アシユフオード

アンブレラの研究員で、**トール**ウイルスを開発した一人。娘の**アンジェラ**を助けるために**アリス**たちに協力したが、**ティモシー**に殺され、ゾンビ化してしまう。

ウイリアム・バーキン

アンブレラの研究員で、**トール**ウイルスを開発した一人。

1章に名前だけ登場。**トール**ウイルスと**G**ウイルスをつくった人物だが、**G**ウイルスを自分に投与して**クリーチャー**化し、**レオン**たちに襲いかかる。最後は列車の爆発に巻き込まれ死亡する。

レッドクイーン

アンブレラによって造られた**AI**。

ハイブで**アリス**によって電源を切られたが、アンブレラに回収された。

コーカサス研究所で機能していたが、**ウエスカー**によって消去される。

ジョン・スミス（黒瀬和樹）

アンブレラの最高幹部。

アンブレラの幹部でも本名を知っているものはおらず、存在自体知らない者が多い。

黒瀬にスターライト号への招待状を出し、バイオハザードに巻き込んだ。

10章では、グレッグ率いる傭兵団にF―ウイルスと大量のB・O・Wを送ってシカゴでテロを起こさせた。

H・C・F・

アルバート・ウエスカー

3、5、6章の黒幕的存在。

表ではS・T・A・R・Sの隊長を、裏ではアンブレラの研究員として活動していた。アンブレラを離反した後はH・C・Fに所属し、クリスや黒瀬たちと戦う。

自身にウイルスを投与しているため、身体能力は通常の何倍にもなっている。

自身の目的のため、ウィルスの存在を世界に知らしめ、世界各地でウィルスの研究をさせようと、部下のデイルク・ミラーを使ってカントウでバイオハザードを起こした。

エイダ・ウォン

7章に登場。

ウエスカーによつて黒瀬暗殺を命じられるが、同じラクーンシティの生き残りとして命令を守らなかつた。黒瀬と協力して暴走クラウザーを倒す。

番外編3にも登場し、黒瀬を利用して自分の目的を果たした。

黒瀬は、エイダとレオンが知り合いなのを知らない。

デイルク・ミラー

アルバート・ウエスカーの部下。

カントウとトウキョウ地下研究所にイーウィルスを放ち、バイオハザードを起こした。

トウキョウ地下研究所で黒瀬とレベツカをハンターと戦わせる。ハンターを倒した

二人の活躍を誉め、その後はカントウから脱出した。

F B C

モルガン・ランズデール

対バイオテロ組織、F B Cの創設者。5章で名前だけ登場。

バイオテロ相手なら手段を選ばないため、一般人から非難されている。こうした理由もあり、黒瀬たちはF B Cに入らなかつた。

8章最後にヴェルトロ騒動の黒幕として逮捕される。

テラセイブ

クレア・レッドフィールド

クリスの妹。本作のヒロインの一人。

ラクーンシティで黒瀬と会った後も関係が続いているが、黒瀬の性格もあり、関係は進展していない。

黒瀬と共にシェリーに度々会いに行き、毎度プレゼントを渡している。

現在はNGO団体テラセイブに所属している。

9章では空港のバイオテロに巻き込まれた。

香月 彩

本作のヒロインの一人。

事件以前は黒瀬とマンションで隣の部屋に住んでいた。

銃知識に乏しいらしく、銃の撃ち方を知らなかった。黒瀬が両親が死んだことで沈んでいた際には面倒を見るなど、黒瀬にそれなりに気がある模様。

3章後半でレベッカにヒロインの座を奪われ、影が薄い。

銃を取らず、バイオテロと戦うため、テラセイブに入った。

9章では空港のバイオテロに巻き込まれた。

鞠川 静香

大学病院で働き、臨時で藤美学園の校医を務めた女性。

黒瀬とは事件以前から知り合い。よく保健室にサボりに来ていたので、時々叱ることもあったが、黒瀬はものともしていなかった。

天然であり、酒癖が悪い。

香月と同様、銃を取らず、バイオテロと戦うため、テラセイブに入った。

9章では空港のバイオテロに巻き込まれた。

セリア・ボランシヤール

8章にて黒瀬と麗によって救われた孤児。

事件後はテラセイブの施設で暮らしている。

合衆国政府関係者

レオン・S・ケネディ

新人警察官としてラクーンシティに向かったが、ラクーン事件のせいで失職。黒瀬と別れた後はクレアやシェリーと共に警察署や地下研究所『ハイブ』を探索し、脱出した。

シェリーと共に合衆国政府に保護され、半ば強引に合衆国政府のエージェントになる

ことを課せられてしまった。

黒瀬とは度々現場で遭遇しており、何度もバイオテロを解決に導いてきた。互いの友情は厚く、切つても切れないものとなっている。

ルイス・セラ

ロス・イルミナドス団でプラーガの研究をしていた自称ハンサムなプー。サドラーに殺されそうになったところを黒瀬に救われる。

孤島を脱出した後は合衆国政府に頭脳を買われ、政府所有の研究所で働くこととなった。

マイク

合衆国政府所属のヘリパイロット。ガナードが撃つたロケット弾でヘリが墜落しそうなところを黒瀬に救われる。

主にレオンの足係となった。

アダム・ベンフォード

合衆国政府高官。

バイオテロを根絶しようとする信念はレオンやクリスと同様。

3章で黒瀬の功績を称え、合衆国エージェントへとスカウトするが断られる。だが、それ以降も黒瀬の活躍を聞き、諦めていない。

ディレック・C・シモンズ

合衆国政府高官。

3章で彼の意見により、トウキョウに核が放たれることとなった。

シエリー・バーキン

ラクーン事件以降、レオンと共に保護され、合衆国政府によつて、軟禁生活を送ることを強いられている。

黒瀬とは度々会う仲で、彼の猛烈なプレゼントに若干ひくこともある。

アンジェラ・アシユフオード

ラクーン事件以降、アリスやジルらによつて合衆国政府に保護され、軟禁生活を強いられている。

ジルが時々会いに来ているらしい。

ルシア

スターライト号事件の生存者。

アンブレラが彼女を捕らえるため、スターライト号の乗客、乗務員が犠牲となった。

抗ウイルス剤を投与し、彼女の身体からクリーチャーが生まれることを阻止するが、後遺症が残っているおり、治療のため、合衆国政府に保護され、軟禁生活を強いられる。

マヌエラ・ヒダルゴ

麻薬王ハヴィエ・ヒダルゴの一人娘。

死亡率百パーセントの風土病に侵されるが、t-veronicaウイルスを投与し、他の少女の臓器を移植し続けなければならない身体になってしまう。

レオンを助けるためにt—Veronicaウイルスの力を覚醒させる。事件後は合衆国政府に保護され、軟禁生活を強いられている。

その他

ジャック・クラウザー

アメリカ特殊作戦軍に所属していた兵士。

レオンと共に南米へ向かい、合流した黒瀬と小室と共に、クリーチャー化したハヴェイを左腕を負傷したまま倒す。

黒瀬の体格からして信じられない身体能力に疑問を持っていた。

その後、謎の事故で死亡した事が黒瀬とレオンに伝えられる。が、実は生きており、ウエスカーやエイダの所属している組織に入っていた。ロス・イルミナドス団にブラーガを狙ってスパイ活動を行うが、最終的に黒瀬とエイダによつて倒される。

ハヴェイエ・ヒダルゴ

南米の麻薬王。

風土病にかかった娘を救うためウエスカーに接触し、t-Veronicaウイルスをマヌエラに投与する。

レオンやクラウザーを倒すため、t-Veronica植物と融合して襲い掛かるが、マヌエラが覚醒したこともあって、倒される。

佐藤 リコ

日本の記者。その道では有名。

陽気な性格で黒瀬を苛立たせる事も多々ある。空手の黒帯を取得しており、ゾンビと素手で戦う事も出来る。

事件以降は福岡の会社の記者となり、ほぼ元通りの生活を送っていたが、現在はフリージャーナリスト。バイオテロ現場や薬物被害者などに取材を行うことが多い。

11章でウイルスの密売を見失い、何者かの手によって殺害される。

ソフィア・ラライン

南米で情報屋として働いている少女。

黒瀬と小室に有益な情報を伝えた。

オペレーション・ハウイエ後も情報屋を続けており、黒瀬に時々情報を買ってもらっている。

8章での黒瀬との約束を守り、BSAAのエージェントとして情報活動を行っている。

レベツカ・チエンバース

3章後半から登場した元S・T・A・R・S・隊員。

アンブレラの調査をするために日本までやってきたが、バイオハザードに巻き込まれてしまう。

高城の家で会った黒瀬、佐藤と共にトウキョウ研究所に向かい、救出に来た自衛隊やクリスたちとトウキョウを脱出した。

その後は大学の教授になるために勉強し、現在は大学の助手として働いている。

10章では、傭兵の体内にあるウイルスを見つけ出す。

バリー・バートン

元S・T・A・R・S・隊員。

ラクーンシティまでジルを救出しに来たり、シエリーをH・C・Fから救出するた
めに戦う。

4章ではスターライト号へ乗り込み、ルシアを救出した。黒瀬とは2章以降から付き
合いがあり、家で連れてくるほどの仲。

紫藤 浩一

藤美学園の教師。

地元の有力代議士の息子。宮本を留年させた張本人。

マイクロバスで高城家まで避難するが、高城の父により、追い出される。

その後は長らく行方不明だったが、ウイルスに魅了され、アンブレラに入る。しかし、
黒瀬たちの活躍もあってアンブレラの研究所や基地が潰されてしまい、職を失う。その
後、その頭脳をFBCのモルガンに買われ、ウイルスの研究を続けるが、研究所内でバ
イオハザードが起きてしまう。強化型t-Abyssを自身に打ち、黒瀬を瀕死状態ま
で追いやったが、小室にロケットランチャーでとどめをさされる。

高城 莊一郎

沙耶の父親。高いカリスマ性を持っている。

黒瀬たちと共に隣家へと渡り、その後、自衛隊に救出され、別荘のある巡ヶ丘市に暮らすこととなった。

平野のことは認めている。

高城 百合子

沙耶の母親。

結婚する前はウォール街でトレーダーとして働いていた。

黒瀬たちと共に隣家へと渡り、その後、自衛隊に救出され、別荘のある巡ヶ丘市に暮らすこととなった。

ユーチエン・ハン

本作のヒロインの一人。

世界で知らぬものなどいないほど有名なピアノ演奏家。4章で黒瀬から助けられ、多

少は気がある様子。

ピアノ以外にも歌やバイオリンも上手い。
時折テラセイブの活動にも参加している。

アーク・トンブソン

名前だけ登場。

レオンの友人で私立探偵を営んでいる。

シーナ島から脱出した後も私立探偵を営んでいるが、テラセイブへの活動にも参加することがある。

嫌な取材／大学の先生

「おすおーす、二気にしてた〜?」

女性が黒瀬に向けて手を振った。

その女性の顔を見た途端、黒瀬の顔が曇る。

「何で記者さんがここに?」

佐藤リコ、通称記者さんは、カメラを掲げてB・S・A・A。本部までやって来た。

「あれ〜? 聞いてなかった? 今日取材に来ると言ってたんだけど……」

黒瀬は首を傾け、記憶を巻き戻す。

確か、カークがそんな事を言っていた。

「じゃあ、受付に行つてください。案内されるはずですよ」

黒瀬はこれから開発中のバイオスキャナーの実験を行わなければならない。

「いやいや、私が取材するのは君だよ」

佐藤はビシッと黒瀬に指を差した。

「……は?」

黒瀬は凍り付く。

「だから、取材相手はリョウくんなの。聞いてなかったの？ オブライエン代表が伝えとくつて言つてたけど」

「なんだとおおお!？」

黒瀬は絶叫に近い声をあげ、またもや記憶を巻き戻す。

確か、あれは三日前……

『「こちら「フオークボール」聞こえるか?」』

海中での任務中、オブライエンから通信がきた。

「こちらリョウだ。どうした、オブライエン?」

フルフェイスマスクを着用しているので、声はこもっているが、はっきりとオブライエンに聞こえるはずだ。

『駄目じゃないか。折角のコードネームがあるだろ?』

「コードネーム? ああ、「ブラックレッド」か。嫌だよ、そのまんまじゃん」

黒瀬の髪の色が黒、目の色が赤ということで付けられた簡易的なコードネーム。

『しかしだなあ、やはり任務中は使つてほしいものだ』

「嫌だね。そもそもオリジナル・イレブンでも使つてるのはオブライエンとジルくらいだぞ?。」

『だからこそ使つてほしいんだよ。君の行動は部下にも影響力があるからな。君やサエコの真似をして刀を使うと言っているメンバーが出てきているんだぞ?』

黒瀬は言葉を詰まらせた。オブライエンの言う通り、黒瀬や毒島が刀を使い、B・O・W・を倒すことで自分も、というメンバーが増えてきている。

「でも言つとくけどなあ、俺が使つてんのは刀じゃなくて木刀だ。別にリーチがあるんならボールでも良いんだぞ?。」

『どつちでも良いだろう? 私言いたいのはB・O・W・に近接戦を仕掛ける者が君たちのように増えてはならないことだ。ゾンビなら未だしもハンターやリツカーにまで近接戦を仕掛ける者までいたらどうする?』

「それ……明らかに俺だけじゃないだろ。オリジナル・イレブンのほとんどが出来るぞ。クリスもパンチで敵を殴り飛ばすし、ジルも敵の急所を的確に攻撃して倒す事ができる。」

『まあ、君たちの力は認めているのだがねえ……』

「んじゃ、良いじゃん。そもそもB・O・W・を実際に見て近接戦を仕掛ける奴自体少

ないから安心しとけ」

B・O・W. とひとまとめしても種類は様々。リツカーは出来るだけ触りたくない
と黒瀬も思っている。

「んで、話は？」

黒瀬は脱線したレールを戻し、本題に入ろうとする。

黒瀬は今海中。話しすぎると酸素が減ってしまう。

『それがなあ——』

オブラエイン続けるが、黒瀬にトーウィルスに感染してしまった魚が襲い掛かってき
た。

黒瀬は魚の突進を避け、パルスグレネードを投げて魚が怯んだところでナイフを突き
刺す。

『——というわけだから、三日後は空けといてくれ。私は製薬企業連盟の方に出張だか
らしばらくは帰ってこんぞ』

オブラエインからの通信が切れる。

「おい、オブラエイン!?! もしもし!?!」

無意味とわかっていても返信を促す。だが、オブラエインからの通信はこない。

『黒瀬くん、大丈夫だった?』

近くで戦っていた宮本が泳いできた。

「あ、おう……」

（一体本題は何だったんだ？）

結局、黒瀬は分からず仕舞いで本部へと帰還した。

「あく多分あれだな……」

オブラエインと最後に話したのは三日前、恐らく黒瀬が戦っている最中に話したのだ。それしか考えられない。

「思い出した？　じゃあ早速その椅子で取材を開始しましょう！」

黒瀬はあからさまに嫌な表情を浮かべるがどうすることも出来ない。

オリジナル・イレブンのほとんどは本部におらず、各地のバイオテロに派遣されている。B・S・A・A.のトップをオブライエンの代わりとしたら、オリジナル・イレブンはその次となる。遠くにあまり出張しない黒瀬がオブライエンの代わりにB・S・A・A.を指揮しなければならぬ。

（面倒くさいから他の奴に任せようかなあ）

そう画策するが、今B. S. A. A. 本部にいるメンバーでB. S. A. A. に詳しい人物は黒瀬だ。

「よし！ どんとこい！」

「良いねえ、私もヤル気が出てきたわ！」

黒瀬はまだ知らなかった。これが地獄の取材になることを……

黒瀬はオーストラリアでの任務が終わり、オーストラリアのフィソロフィー大学にやっつて来た。

「おーい、レベツカー」

大学構内でレベツカを見つけ、手を振る。

「リヨウ！」

レベツカは黒瀬を見つけないや駆け寄り、ハグをしてきた。

「久しぶりだな、レベツカ。仕事のついでに来たんだ」

「仕事ってバイオテロ？」

レベツカはハグを止め、黒瀬の顔を見つめる。

「ああ。FBCが逃がしたハンターを処理したただけだな」

「他の人は来てないの？ タカシ君とか……」

「いや、他にもメンバーはいるが……ビリーの奴、レベツカに会いたくないって。恥ずかしいんだと思う」

レベツカはそれを聞くと顔を真っ赤にさせた。照れているのだろう。

「まあ、ビリーのことだし、わかっただけにいるけど……」

恋とは非常に難しいものなのだろう。B・S・A・A内でも小室と毒島、宮本や平野と高城、他にもリカと田島、クリスとジルなど、互いの気持ちは分かっているくせに恋愛には発展しない。

(そんなに難しいのか?)

黒瀬は恋などしたことないので理解できないが、小室たちに関しては四、五年も進んでいないので、相当難しいことが伺える。

「あく恋してみたいなあ……」

そんなことを呟いた。黒瀬の回りの人物のほとんどは好きな人とかいるのに、黒瀬にはいない。不良をやっていたせいかもしれないが、小室もモテているので関係はないだろう。

「クレアがいるじゃない」

「クレア？」

黒瀬は唐突に言われて混乱する。確かにクレアとは仲が良いが、どうやってもそこま
でだ。クレアにはレオンの方がお似合いだ。

「クレアとは仲が良いけど、恋人までとはいかないよ」

「うーん、そうかしら？」

「レベツカ先生」

一二階から、この生徒らしき学生がレベツカを呼ぶ。

「お呼びだぞ、レベツカ。今度は仕事じゃないときに来るよ」

「じゃあ、その時は日本のお土産ヨロシクね」

「ああ」

レベツカは駆けて、校舎へと戻っていった。

バレンタインデー 前編

「黒瀬よ……」

平野が何やら険しい顔で語りかける。

「何だよ、藪から棒に」

「今日が何の日か知っているか？」

黒瀬は首を捻る。今日は二月十四日ということは知っているが、何の日かは思い出せない。

「もしかして誰かの誕生日か？」

「違うよ！ 今日には二月十四日、バレンタインデーじゃないか！」

黒瀬は「ああ」と納得する。

バレンタインデー、愛の誓いの日だ。しかし、恋人がいない黒瀬には関係ない。

「平野には高城がいるけど、俺にはいないもんなあ……」

そもそも恋人をつくる気がない、というのが正しいだろうか。

「ボクと高城さんが恋人!? あはは、冗談はよしてくれ」

「お前なあ、もう恋人でいいじゃん。告白しちやえよ」

もうあれから五年も経つ。まどろっこしい関係が続けて何の進展もしていない。

「ボクが高城さんに……駄目だ。考えただけでも昇天しそう」

「んじや、何でバレンタインの話を振ったんだ？」

高城に告白する話かと思っていたが、どうやら違うようだ。

「ほら、ボクって射撃が上手いでしょ？ B・S・A・A。でこの事を知らない人はい

ないと思うんだ」

「まあ、確かに」

平野の射撃の腕はB・S・A・A。でもトップクラスだ。その腕は誰もが認めている。近接戦闘では下位だが。

「それほど有名だったら、メンバーからバレンタインチョコをたくさんもらえるじゃん？」

平野は顔を輝かせていた。

「そんな事を言ってもB・S・A・A。は百人もいないし、女性メンバーなんてもつての他だぞ」

「う、そうだよね」

一瞬で平野の顔が暗くなり、黒いオーラを発生させる。

「ボクが……バレンタインチョコを……もらえるはずが……」

うなだれ、近くにあったソファに倒れこんだ。相当バレンタインチョコをもらったかったようだ。

「平野！ ちよつと！」

高城が平野にズンズン近づく。

「こつちにちよつと来なさい」

「え？ どうしてですか？」

「いいから！」

高城の顔は真つ赤になり、その場から立ち去った。一瞬だけ、高城の手に小さな箱が持たれてるのが見えた。

「平野、行ってこい」

「はーい」

平野は黒いオーラのまま、高城の元へと向かった。

もう告白しろ、と黒瀬は思うが、時間が必要だろう。

（頑張り、高城、平野）

黒瀬は心になかで二人を応援した。

「さて……」

黒瀬は背伸びをし、小室がいるはずである訓練ルームへと向かう。

アンブレラが使っていた雪山の倉庫を変化がないか調べなくてはならない。いつも通り、小室やキース、カークを連れて任務に向かおうとしていた。

訓練ルームに着き、中を覗く。

小室と宮本の姿が見え、宮本が小さな箱を渡していた。それをもらった小室は顔を真つ赤にしている。

「……………」

黒瀬は静かにドアを閉め、射撃ルームへと向かう。

南リカや田島なら今頃射撃ルームで訓練中だろう。

射撃ルームに着き、中を覗く。

田島と南の姿が見え、田島が小さな箱を渡していた。それをもらった南は顔を真つ赤にしている。

普通は逆だが、それは日本の文化。逆もまたしかり。

黒瀬は静かにドアを閉め、司令部に向かう。

司令部にはビリーやクリス、ジル、カルロスがいるはずだ。彼らなら今までの事は起きないはずだ。

司令部に着き、中を覗く。自分のデスクがあることを思い出し、覗く必要がないと判断して中に入る。中にはいつも通り、クエントの姿があった。

「あれ？ 他のメンバーは？」

司令部にいるメンバーがいつもより少ない気がする。クリスやジルたちの姿もない。

「今日はバレンタインですからね。出勤している人の数自体少ないですよ」

「ええ!？」

黒瀬は驚くが、そもそもB・S・A・AはNGO団体。休みを取ることを簡単だろ
う。

「クリスやジルもか？」

クリスたちがバレンタインだからといって仕事を休むとは考えられない。彼らの頭
の中はいつでもバイオテロだろう。

「クリスとジル、カルロスは任務中ですね。ビリーは可愛らしい子と食事に行くと言っ
ていました。グラインダーはいつも通り女を漁っているんじゃないですか？」

クエントはコーヒーを啜る。

「クエント……俺にもコーヒー一杯」

「ええ、どうぞ」

クエントにコーヒーをついでもらい、ブラックのまま一気飲みする。熱くてむせるが
無視し、通信機を取り出した。

「カーク！ 出動だ！ ヘリの用意でもしてろ！」

苛立ち気味に言った。

「あのなあ、リヨウ。バレンタインの日はゆっくりさせてくださいよ」

ヘリの中で、カークが呟いた。

「何?! まさかカークも彼女が!？」

「いや、いないけど……。でもバレンタインの日は負のオーラが溜まるんだよな」

黒瀬はそれを聞いて安心した。

「お前は味方だと信じてたぜ」

「何のことだ」

ヘリの窓の向こうには、雪山が見えた。アルプス山脈、そこにあったのはアンブレラのB・O・W・倉庫。FBCが制圧したが、途中天候がひどくなって撤退したのだ。黒瀬の任務はその調査。生き残りのB・O・Wやアンブレラの残党やテロリストたちに再利用されていないか確かめに行くのだ。

「でも、雪山だから着陸するところなんてどこにもないぞ」

「良いよ。カークは下の方で待っていてくれ」

「一人で大丈夫か？」

「ああ。今日の俺は一味違うぜ」

目的地付近に到着し、へりのドアを開ける。その途端、機内に大量の雪と冷風が流れ込んできた。

「うお!?! 寒いからさっさと行け!」

「俺の方が寒い思いをすんだぞ!」

黒瀬はへりからダイブし、フカフカの雪へと着地する。

『じゃあ帰る際は連絡してくれ。凍死しないような』

へりは立ち去り、その場には一人の男が残った。

「寒いなあ」

着ている服が役にたたず、風が貫通して皮膚へと直撃する。現時点でも帰還したい気持ちやまやまだが、寒さを堪えて先へと進む。

誰も通っていない、綺麗な雪原が続く。だが、黒瀬の足跡も雪によつてすぐに埋められるので、誰かが通った可能性も考慮しなければならない。

吹雪の中を進み、高台へと着く。

「あれは……?」

ここから件の倉庫が見えるが、何台もの輸送へりが停まっていた。

黒瀬は伏せて双眼鏡を出し、輸送ヘリの所在を確認する。ヘリにはしつかりと『FBC』と書かれていた。

「なぜFBCが……？」

FBCからそんな情報は回ってきていない。

しばらく見ていると、巨大な倉庫から人間が出てきて、輸送ヘリから人間大の鉄の箱が運び出される。

拡大すると、鉄の箱には『バイオハザード』のマークが書かれていた。

「ということはB・O・W.か？」

しかし、B・O・W.を輸送ヘリで運んで倉庫に保管する理由が分からない。わざわざ生かしておいて何に使うつもりだ？ しかも研究施設ではなく、こんな倉庫に……

だが、黒瀬の思考は中断される。

——ドス!!

伏せていた黒瀬の背中に何か乗っかり、後頭部に銃口らしきものが突き付けられる。

「……………」

あまりに突然のことで驚いたが、すぐに行動に移る。

双眼鏡を置き、降参のポーズを取ると見せ掛け、銃を掴む。被弾しないように銃口を

ずらす。すぐに銃声が響くが、銃弾はフワフワの雪を貫通した。

——この吹雪の中だ。倉庫までは今の銃声は聞こえないだろう。

黒瀬は力任せに銃を奪い取り、投げる。腕立て伏せで三メートルほど跳躍し、身体から乗っている人物を引き剥がした。

宙に浮かんでいる最中に胸からナイフを抜き、着地と同時に謎の人物の首へとナイフを突きつける。

その人物は金髪の髪に褐色肌の女性。ソフィア・ララインだった。

「ソフィアか！」

「おにーさん!？」

二人とも驚くが、すぐに伏せた。

「なんでソフィアがここに？」

「それはこっちの質問だけど……調査だよ。FBCのね」

「やっぱりあれはFBCなのか？」

「うん。と言つてもFBCの裏方。彼らはB・O・Wの実験をしているんだよ」

「何!？」

今日は驚きの連続だ。驚きすぎてどうにかなくなってしまいそうなほどである。

「目的は不明だけど、ハンターを大量に増産しているみたい」

「マジか……」

何の意味があるのだろうか。B. O. W. を倒す側のFBCがハンターを増産しても一ミリも特はしないはずだ。

「ま、目的に関しては後々調べておくよ。おにーさんもちゃんとした証拠が出てきてから告発した方が良いよ」

「ああ。歯がゆいけどそうするしかなさそうだ」

今言つてもはぐらかされ、証拠を消される可能性が高い。この事に関してのFBCの判子つきの資料でもゲットできればいいんだが。

「じゃ、さっさと撤退しよう。当然へりはあるよね？」

「まあな。て、ソフィアも乗るのか？」

「うん。おにーさんのせいで銃がどっかいつちやつたし、その弁償として」

「……オーケー」

今日は疲れた。さっさと休みたいものだ。

二人はへりに乗ってB. S. A. A. 本部へと戻る。

「なあ、ソフィア。今日についてどう思う?」

唐突に意味不明な事をソフィアに聞いた。

「今日? ああ、バレンタインね。おにーさんたちは彼女がいなかったからこんな寒いところで仕事をしてるんでしょ?」

ソフィアの冷たい言葉を聞いたカークは一瞬凍らされ、へりが傾く。

「俺は彼女をつくらないだけだ!」

「モテない男はよくそう言うよね」

カークは撃沈され、魂が抜けたまま、へりを操縦する。

「おにーさんに彼女がいらないことにはど驚きだけだ」

「まあ、不良してたしな」

「じゃあ、おにーさんにこれをあげよう!」

ソフィアはポケットから何かを取り出し、黒瀬の手のひらに乗せた。それは、一口大の銀紙に包まれた物体。

「アタシからのバレンタインチョコ。それしかいまはないけど……」

「うおおお!! 好きだ、ソフィア!!」

黒瀬はソフィアに抱き付く。ソフィアのほんわかとした熱が黒瀬に伝わる。

「ちよ、おにーさん!」

ソフィアは頬を赤らめる。予想だにしていなかったのだろう。ガクン、ヘリが突然急降下し、機体が揺れる。

「どうせ……俺はモテないんだ……」

カークの負のオーラがどんどん高まり、今にも爆発しそうだ。

「ちよ!?! じゃあ、パイロットのおにーさんにもチョコをあげるよ」

その言葉を聞いた瞬間、カークの負のオーラは吹き飛んだ。

「よっしやあ!! 最速で帰還するぞ!」

「……………」

墜落しないで良かった。二人は生を実感した。

バレンタインデー 後編

夕方、ソフィアと別れた黒瀬は、今回の任務の報告書を書くのに励んでいた。

いつも司令部では皆が楽しげな会話をし、賑やかになっているが、今日は違う。司令部に居るのは、黒瀬とクエントだけだった。

「なあ、クエント。お前は彼女をつくらないのか？」

クエントが女性と話しているところを見たことは少ない。機械ばかり弄くっているイメージしか、黒瀬にはない。

「失礼ですね。ちゃんといますよ！」

「どうせパソコンだろ」

「ど、どうしてわかつたんですか!？」

クエントは動揺する。彼の事を知っている人物であれば、普通にわかることだ。

「まあ、彼女さんを大事にしろよ」

「言われなくても毎日手入れをしています」

ちやうど報告書が書き終わり、黒瀬は背を伸ばす。長時間デスク作業をしていたせいで、肩が凝ってしまった。

「あ、そういうや完成したか？ バイオスキャナー」

「ええ。ここにありますが」

クエントはデスク下からビデオカメラを何倍にも大きくしたような物を取り出した。

——携帯型解析デバイス『バイオスキャナー』通称ジエネシス。ウイルスの解析をしたり、弾薬を見つけやすくするといった優れたものだ。

「でも、重そうだな」

「仕方ありません。これ以上小さくするにはもっと優秀な科学者がが必要です」

クエントは黒瀬にジエネシスを向けた。

「あれ？」

クエントは困ったような顔をし、デスクにジエネシスを置いた。

「どうした？」

「いや、故障しているみたいですね。分解して調べてみます」

一体どこが故障していたというのだろうか。手伝おうと思ったが、まずは報告書を提出しなければならぬ。

「じゃあ、俺はオプライエンに報告書を提出してくるわ」

「もう帰ってもいいんですよ？ 今日にはバレンタインですからね」

クエントは黒瀬を気にかけているが、残念ながら黒瀬には彼女はいない。

「いや、まだいるよ。クリスマスだったら帰るけど、他の奴みたいにならないうらいで帰るわけにはいかないよ」

「そうですか。というか、リヨウはちゃんと休みを取っていますか？ 私がB. S. A.

A. に入ってから、リヨウが休暇を取ったところなど見たことはないのですが」

「そうか？」

B. S. A. A. に入り、その後の事を思い返す。最初は十一人しかメンバーがいなかったこともあつて休むことなど出来なかつたが、今では対応出来るメンバーがたくさんいる。確かにそろそろ休暇を取っても良いだろう。

「じゃ、今度休むよ」

黒瀬はそう言つてその場を去つた。

「……………」

黒瀬は訓練ルームでくつろぎ、ふと時計に目をやると、既に二十時を回っていた。ベ
ンチから立ち上がり、大きなアクビをかく。

「そろそろ帰るか……」

これ以上ここにいっても暇なだけだ。ひさしぶりに家でゆっくり休みたい。

黒瀬は司令部に戻り、自分のデスクの前に立つ。

「ん？」

デスクの上に段ボールが置かれてあった。宛先を見てみると、ユーチエンが黒瀬に送ったものとわかる。

ユーチエンから贈り物をされることは初めてだが、一体何だろう。

黒瀬は期待を胸に段ボールを引きちぎる。

段ボールの中には洒落た箱と一通の手紙が入っていた。黒瀬はそれを手にとって読む。

『リヨウへ』

突然でごめんね。でも渡す日は今日しかないと思って、連絡もしないでプレゼントを贈っちゃった。きつとこのプレゼントが届く日は二月十四日だと思う。何の日かはバカなりヨウでもわかるよね？ 恥ずかしいけど、ボクも作ってみたんだ。こんなことをするのは初めてだから下手かもしれないけど、気持ちだけは受け取ってほしいの。あ、話は変わるけど、今度ヨーロッパの方で演奏することになったんだ。その時はチケットを送るから必ず聴きにきてね』

「……………」

黒瀬は無言のまま、箱をバッグの中に入れた。内心、とても喜んでいるが、クエントが近くにいるのではしゃぐわけにはいかない。今の黒瀬は、『愛』ではなく、チョコをもらせることが嬉しかった。

「じゃ、クエント。俺帰るわ」

「ええ、気をつけて」

黒瀬はスキップをしながら車を停めてある駐車場まで行く。

「あら、嬉しそうね」

鍵を開けようとしたところで、クレアが現れた。クレアはいつも通り、赤を強調させた服を着ている。

「ひさしぶりだな。あくでも、クリスは仕事でいないんだ」

的はずれなことを聞いてしまったのか、クレアは頬を膨らませる。

「今日は何の日だが知ってるわよね？」

「ああ、もちろん。バレンタインデーだろ？」

「この単語、今日だけで何回言っただろうと、黒瀬は思う。

「これを……」

クレアは茶色い紙袋から洒落た小さな透明袋を取り出し、黒瀬の手にのせた。袋の中

には、クッキーが三枚入っていた。

「もしかしてこれって……」

「バレンタインデーでしょ？ みんなで作ったの」

「みんな？」

「ええ。シエリーとルシア、アンジーにマヌエラとね」

「へえ、そりや楽しかっただろうな」

黒瀬は、五人で料理をしている姿を思い浮かべる。

「それはもちろん。これを渡すためにヨーロッパまで来たんだから、ちゃんと味わって食べてよね」

「ああ。クレアが作ったクッキーなんて何枚でも食べれるぜ」

「ふふ、じゃあ私はB・S・A・Aのみんなに配ってくるわね」

クレアはやわらかい笑顔を浮かべ、本部の中まで入っていった。

黒瀬もニヤニヤが止まらず、車に乗ってエンジンを掛ける。

「……今日は嬉しい日だな」

バレンタインデーなんて糞食らえと思っていた黒瀬だが、今は気持ちが一変していた。

「レオン、俺な、今日嬉しいことがあったんだ」

黒瀬はこの気持ちるを他の人に伝えたいと思ひ、親友であるレオンに電話を掛けた。
『クツキーのことか？』

「何で知つてんだ？」

心でも読まれたか、と心配する。

『シエリーとマヌエラが渡しに來たんだよ。美味かつたよ』

「うわ、レオンつてモテるんだな」

『年下にモテても複雑だけどな。あ、リヨウの話は聞いてるぜ。大活躍なんだろう？』

レオンの言う活躍とは、もちろんB. S. A. A. でのことだ。

「大活躍つてほどでもないよ。レオンの方は？」

『俺は今度、大統領の娘の護衛につくことになつた』

それを聞いて、黒瀬は仰天した。

「大統領の娘つて、アシユリー・グラハムか？ 出世したな」

『俺としては別の道を行きたかつたんだけどな』

「あ、そうか。もうバイオテロとは……」

『ああ。この任務についたら、当分は関わらないだろう』

レオンの声は、どこか落ち込んでいた。彼の夢は、バイオテロを、ウイルスを、この世から無くすことだ。その夢が遠ざかってしまった。

『それに、重要な任務だ。今までのようにこうして連絡できるのは、今日だけと思っておいた方がいい』

「そうか……ちよつと寂しいけど。もしかしたらまたB・O・W. やウイルス絡みのこところで会うかもな」

『ありそうだから止めてくれ』

「じゃあな、レオン。元気でやれよ」

『リヨウこそ』

黒瀬は通話を切る。二人にはこれ以上の会話は必要なかった。親友だから。

7章

37話 墜落

「リョウ、お客さんですよ」

クエントの呼び掛けにより、黒瀬のデスク作業が中断される。

「客？ そんな話は聞いてないぞ」

黒瀬は記憶を探るが、今日客が来るという話はなかった。

「それが、オブライエンも一緒に立ち会おうらしいです。サングラスを付けてスーツを着た屈強な身体のパディーガードが二人いましたよ」

黒瀬はその光景を想像する。映画とかで言えば、その客はどこかの政府高官だ。だが、B・S・A・A. というNGO団体にそんな人が来るはずもない。

「つたく、こっちは先日のテラグラジア・パニックの書類で忙しいつてのに」
黒瀬はぼやき、客室に向かう。

クエントの言っていた通り、客室のドアの前には屈強そうなパディーガードが二人、部屋には誰も入らせないように、後ろに手を組み、正面を見つめていた。

黒瀬は男たちの前に立つ。

「黒瀬リョウだ」

ボディーガードの一人が胸ポケットから一枚の写真を取り出し、黒瀬の姿を確認してドアを開けた。

(徹底している……)

政府高官はないと思っていたが、その説も浮上してきた。一体どんな人物が待ち受けているのだろうか。

黒瀬は部屋の中に入る。すぐにドアが閉じられ、逃げ場を失う。部屋中を見渡すと、オブライエンと客らしき人物がソファアームに座っていた。

「リョウ、やっときたか。大統領、紹介します。この男がクロセ・リョウです」

「……………」

黒瀬は息をのむ。オブライエンが客の前でふざけるわけがない。オブライエンが言った通り、この男が何処かの国の大統領であることは確かだ。

大統領は黒瀬へと顔を向ける。黒瀬の目には、今まで何度もテレビで見た男の姿が映っていた。

「ぐ、グラハム大統領？」

その男は、アメリカ合衆国大統領グラハムだった。

「初めまして、クロセ君」

大統領は立ち上がって、黒瀬へと手を差し出した。
「初めまして、クロセ・リヨウです」

まさかの合衆国大統領の登場で動揺しているが、その手を掴んで握手をかわす。
「時間がない。早速話をしよう」

黒瀬と大統領はソファアームに座る。

「この話は極秘で頼む。……実は、私の娘が拐われてしまったのだ」

黒瀬はまたもや仰天した。オブライエンも驚いた様子だ。

「誰に拐われたのかは？」

驚きながらもオブライエンは話を進める。

「ロス・イルミナドスという宗教団体のようだ。拐った目的は身代金目的だそうだ。電話は掛かってきてないがね」

今のところ、話が全く見えてこない。

「そのロス・イルミナドスは、B・O・W.の所持を？」

「それに類似したものだ。ガナードというらしい。他の生物もケネデイ君に目撃されてる」

黒瀬の耳に、何度も聞いた名前が飛び込んできた。

「ケネデイって、レオン・S・ケネデイ？」

「そうだ。君はケネディ君の友人なのだろうか？ 頼みがある」

レオンが大統領の娘のボディガードをすることは知っていた。黒瀬は頷く。

「私の娘のアシユリーと、ケネディ君のサポート、そして危険者集団、ロス・イルミナドスの壊滅だ」

「はあ……」

黒瀬は大きなため息をつく。

今回の事件、規模が相当大きく、解決には骨が折れそうだ。

「オイオイ、ため息をすると、運が逃げてくつて言うぜ？」

合衆国のヘリパイロットが言った。

「もう運は逃げてるよ。この事件につくこと自体不幸だろ」

「それもそうか」

パイロットは笑う。だが、黒瀬は笑う気にはなれなかった。黒瀬を選んだ理由は、レオンや政府高官のアダムから活躍を聞いたからだそうだ。

無線がかかり、ポケットから無線機を取り出す。

『あなたがリヨウね』

無線機の画面には、眼鏡をかけた若い女性が映っていた。

「思ったよりも若いな。クロセ・リヨウだ。よろしく」

『イングリッド・ハニガンよ。あなたのサポートをするわ』

正直サポートはいらないが、一人寂しく敵を倒すことよりはマシだ。

『リヨウの任務を確認するわね。まず、アシユリーとレオンの待機地点までヘリで向かい、二人を回収した後、ロス・イルミナドスの壊滅作戦に移ってもらうわ』

ハニガンは淡々と語る。

(ほんと、ひどい作戦だな……)

黒瀬はまたため息を漏らす。敵陣のど真ん中に置き去りにし、しかも、敵を壊滅させる。一人で。

「何でFBCに任せないんだ？ B. S. A. A. の俺よりもFBCの人間を雇った方がアメリカ的には良いだろ？」

黒瀬は大統領本人から聞けなかったことをハニガンに問う。

『意図も簡単にアシユリーが拐われたわ。もちろん警護がついてたけど、ボディーガードは殺されたわ。配置も何もかも知られていた』

「ようは、政府に裏切り者がいると？」

『そう考えるのが妥当のようね。でも、あなたは合衆国政府の人間ではない。そもそもそのヘリに乗っていること自体トップシークレットよ』

「そりゃ嬉しいね」

「ロケット弾だ！」

パイロットの怒号。

と、突如、黒瀬に激しい痛みが襲う。

黒瀬の目には何故か、先ほどまで乗っていたヘリが黒煙をあげながら墜落していく様子が映っていた。

「あ……………れ？」

突然のことすぎて戸惑うが、空中では身体の自由がきかない。

「なあ、ハニガン、こういうときはどうすればいいんだ？」

しかし、黒瀬の手には無線機が握られていなかった。吹き飛んだときに手を話してしまったようだ。

黒瀬はしつかりと地面を見据え、受け身をとって着地する。

「……………さて」

森の中に置き去りにされた黒瀬はちよつと寂しいが、さつきまで一緒だったパイロットの冥福を祈った。

すぐ近くで無線を見つけ、ハニガンに掛ける。

「よお、ハニガン、久しぶりだな」

まだ五分も経っていないが、どうでもいいジョークを吐いた。

『良かった、無事ね。今回で確信したわ。やはりこちら側にスパイがいるようね』

「そうみたいだな。ヘリを偶然見つけた可能性もあるが、ハニガンの言う通り、ヘリのルートを知られていた可能性がある」

『リヨウ、これから新しい任務を出すわ。ヘリ到着までレオンと一緒にアシユリーを守るのよ』

「オーケーオーケー。レオンとアシユリーはどこに？」

『そこから北に行つたところよ。詳しい場所まではわからないわ。気をつけて』

黒瀬は無線を切り、腰から木刀を抜いた。

「つたく、今日はツイてないな」

またしても大きなため息をもらした。

38話 ガナード

「つたく、何で俺が……」

黒瀬は森の中を歩きながらぼやく。時間帯的にも夜なので、森の中は真つ暗のはずだが、黒瀬は迷わず進む。

黒瀬はB・O・Wと戦うこと事態は嫌ではない。黒瀬の夢は、バイオテロ、ウィルス、撲滅だ。しかし、これから戦う敵は、戦いなれたハンターやリツカーなどではなく、未知の敵《アンノウン》。果たして今までの戦法が通用するのかは分からない。

大分進むと、一つの灯りが見えた。小さいが、しっかりと造られている木の家だ。

もしかしたら、家の人がレオンとシェリーを目撃したかもしれない。黒瀬はそう思い、木刀を背中に仕舞って、玄関の前に立つ。

「誰かいますかー?」

返事は返ってこない。だが、黒瀬の耳には、パチパチと焚き火をする音が聞こえていた。

(耳が悪いのか?)

仕方がないので、黒瀬は家の中に入る。

「お邪魔します」

予想通り、中では一人の男が、暖炉の中に薪を入れ、焚き火をしていた。暖炉の隣には、斧が置かれている。その斧で薪を切ったのだろう。

「すみません、聞きたいことがあるのですが」

男は振り向き、黒瀬を見つめた。

「この辺りで金髪の男女を見ませんでしたか？」

『さつさと消えろ！ クソ野郎！』

男は威嚇する。勝手に家の中に入ったのが駄目だったみたいだ。

黒瀬は振り向き、玄関から外へ出ようとするが、異様な殺気を察知する。

「うお!」

咄嗟にしゃがむ。黒瀬の頭すれすれを斧が通過していく。

「おいおい、それはやりすぎだろ」

不法侵入した黒瀬が悪いが、立ち去ろうとした者を斧で襲い掛かるなんて、アメリカでもやらない。

男は再び斧を振りかざすが、黒瀬は後ろにステップして避け、男にタツクルを喰らわせる。男は壁へと叩きつけられ、床へ倒れる。

「すまない、少しだけ眠っていてくれ」

男が倒れたのを確認し、黒瀬は立ち去ろうとするが、またもや殺気が黒瀬を襲う。

「まだ気絶しないの……」

一般人が先程のタックルを喰らい、まだ意識を保っているのはおかしい。

『グガアアアア!』

男は素手で襲い掛かるが、単純で見極めやすい。男の腕を捕縛して肘を顎に喰らわせ、捻って倒す。

それでもかかと、男は立ち上がる。

「おいおい、もしかして気絶しないの?」

動きは単純だが、耐久力が桁外れしている。気絶しないといえどゾンビだが、この男は言葉も道具も使う。明らかにゾンビとは違う。

黒瀬は男の間合いに入り、胴体にラッシュを入れ、足を払うように蹴った。男は倒れるが、また立ち上がる。

『ウ、ウググ』

何やら苦しみだし、頭を押さえた。

「何だ……?」

突如、男の頭が破裂し、血飛沫が飛び散る。男の首からは触手のようなものが飛び出し、ぐにやぐにやと動き続けている。

黒瀬は突然のことで唾然としたが、すぐに木刀を抜いた。

「これ、人間じゃないよね？」

頭がなくても動き、首からは刃のついた触手が出ている。誰がどうみても人間ではない。

触手は黒瀬の身体を抉ろうと凄まじい速さで襲い掛かるが、しゃがんで避け、木刀を振り上げて触手を潰した。

男は次こそ倒れ、動かなくなる。

無線機を取り出し、ハニガンに連絡する。

「ハニガン、男が化物になったんだが、これが新型か？」

『ええ。ガナードというらしいわ。知能もそれなりにあるみたいね』

(ガナード……スペイン語で『家畜』か……)

「わかった。コイツらを倒して行ってレオンと合流すれば良いんだな？」

『ええ。あなたが今までの戦ってきた敵とは違うわ。注意して』

「オーケー」

黒瀬は無線を切り、ポケットに入れる。

(これが……敵か……)

言葉も道具も使うが、人間の形をしていて人間ではない。確かにウエスカーやアリス

のように、ウイルスで強化された人物もいるが、彼らは特殊だ。その特殊さが、ただの人間にも広がっている。正直、テロリスト相手でも時々手加減しているが、こういう敵はやりづらい。ゾンビとは違い、言葉を話すのが原因になっているのだろう。

「でも、やるしかないよな」

彼らを人間には戻せないだろう。ほっとけば、他の者を襲うかもしれない。

黒瀬は家から出て、周囲を警戒する。

敵は今のところいないが、いつ現れてもおかしくない。レオンとはやく合流しておきたいが……

黒瀬は森の中をしぼらく進んだ。

雨が降って地面がぬかるんでいるため、足元に気を付けながら歩く。

パンパン、パン!

雨の音と共に、ハンドガンの銃声が黒瀬の耳に届く。

(レオンか?)

敵か味方かはわからないが、銃声が聞こえるということは、誰かが何者かと戦っているということだ。レオンの可能性も大いにある。

黒瀬は銃声がしている方に走り出し、手入れをされた道に出る。

「クソ！」

男が、複数の村人と戦っていた。後ろ姿でもわかるが、レオンではない。だが、人間がガナードに襲われていることには変わりはない。

「おい、そこの奴！ 伏せろ！」

黒瀬は腰の手榴弾を取り、村人に投げる。男も黒瀬が敵ではないと判断したのか、その場に伏せ、爆風を回避する。村人たちは手榴弾の爆発にやられていた。

「大丈夫か？」

黒瀬は男に近づき、手を差し伸べる。

「手荒だな」

男は黒瀬の手を掴んで立ち上がる。男はラテン系のようなようだ。

「すまないが、サンプルはまだ入手出来てないんだ」

「サンプル？」

誰かと勘違いしているのか、黒瀬には通じない。

「アンタ、あの組織の遣いじゃないのか？」

「何のことだ？ 俺はある男女を探しているだけだ」

男が人間であることに間違いないが、味方かはどうかは不明なので、二人の名前は伏せておいた。

「へえ、もしかしてレオンと大統領の娘さんか？」

男の口から驚くべき発言が飛び出した。

「知っているのか!？」

黒瀬は男に掴みかかる。

「ああ。さつきまで一緒に戦ってた。俺は忘れ物を取りに行くために別れたけどな。今から戻るぜ」

それなら好都合だ。黒瀬と男の目的は同じということになる。

「じゃあ俺も行くよ。俺の目的は二人との合流だからな」

「良いぜ。ルイス・セラだ。ヨロシク」

「クロセ・リヨウ、よろしく」

二人は握手をかわす。

「ところで……煙草を持ってないか？」

ルイスの日記

俺はあの籠城戦をした小屋から、レオンとおっぱいのでかいお嬢ちゃんと別れた後、再び村に戻った。

レオンとお嬢ちゃんは、プラーガの卵を投与されている。時間が経てば、プラーガは孵化し二人ともサドラーの従僕になってしまうだろう。

俺が作っておいた抑制剤を回収し、来た道に戻っている最中、村人に襲われた。

俺のせいで、俺の研究のせいで村人が化物になった。もちろん罪悪感があるが、一々気を取られていたら俺が死んでしまう。数も多く、手こずっていたが、男が現れた。

手荒な方法で助けてくれたが、恩人ということには変わりはない。

男は日本人で、それなりに若い。

話を聞くに、レオンとお嬢ちゃんの仲間のようなのだ。

クロセ——クロセ・リヨウははつきり言って変人だ。現代の戦闘服を着ている癖に使う武器は刀。いや、木刀か。

日本の漫画で刀で戦う奴が何人もいたが、あれはどうやらノンフィクションだったよ
うだ。

一番驚いたのが、リヨウは大人ということだった。最初は子供と思い、ふざけて煙草を持っているかと思いたが、彼がポーチから出してきたときはビックリした。まだ高校生くらいかと思っていたら、まさかの二十一歳だ。どうやらB・S・A・A. というNGO団体に所属していて、教団をぶっ潰す任務でこの辺境まで来たようだ。

それは俺にとっても、『組織』にとっても好都合だ。俺も出来る限り助力しよう。ああ、クソ！ 村人たちがまた来やがった！ 城につくにはまだかかりそうだ。

39話 古城

橋を渡り、黒瀬とルイスは小屋の近くまで来た。

「ここでレオンと一緒に戦ったんだ。もうとつくに先に進んでるだろう」

「……そうか」

小屋の近くには、多くの村人の死体が倒れている。レオンもかなり苦戦をしたんだらう。

「で、この先はどっちに行けばいいんだ？」

扉が二つある。進むには、二つの扉の内どちらかを選ばなければいけないようだ。

「右側にエルヒガンテ、左側には大量の村人だ」

「エルヒガンテ？」

「巨人だと思えばいい。かなり手強いぞ」

どういった経緯でその巨人が完成したのかが気になるが、今度の機会に調べるとしよう。

「じゃあ左だ。村人だけだったらそれほど時間もかからないだろう」

エルヒガンテとかいうB・O・Wは、対バイオテロ組織B・S・A・Aの一員と

して倒しておきたい気持ちは山々だが、今はレオンとアシユリーとの合流が最優先事項だ。村人程度ならそれほど時間も掛からないだろう。

レバーを引いて左の扉を開け、先に進む。

ルイスが言った通り、大量の村人が配置されており、四方八方から殺気が飛んでくる。「なるほど、これはヤバそうだな」

「時間がかかりそうだな」

黒瀬は木刀を抜き、ルイスはホルスターからレッド9を抜く。村人の数は優に二十を越えている。ゾンビならまだしも、ガナードは武器を使うなど、知能があるぶん厄介だ。「やっぱりエルヒガンテの方に行くか？」

「そしたらこいつらも付いてきちまうからな」

ガナードとエルヒガンテを同時に相手をするなど、やりたくもない。

黒瀬は近づいてくるガナードにダガーナイフを投げる。見事に眉間に突き刺さり、ガナードは力なく倒れた。

「いい腕をしてるな」

「まあ、練習すれば誰でも出来るよ」

戦闘服に付けられているダガーナイフを抜き、ガナードに投擲する。斧が投げられるが、命中精度は宜しくなく、黒瀬の横を通り過ぎる。

「もつと練習しろ！」

斧を投げたガナードにナイフを投げて攻撃するが、ガナードの頭は破裂し、中から寄生体が出てきた。

寄生体の湿ったような音で胸が悪くなる。

「寄生体は光が苦手だ。何か持っていないか？」

ルイスがガナードに撃ち続けながら言う。

「目と耳を塞げ」

黒瀬は腰から閃光手榴弾を取り、寄生体を露出させたガナードの足下に放る。すかさず目と耳を塞ぐと、すぐに手やまぶたを貫通して強烈な音や光が届く。

目を開けると、寄生体は死滅しており、ガナードもゆっくりと膝をついて倒れた。

「今の内だ。チャンスだぞ」

閃光手榴弾の光と音で黒瀬たちを囲んでいたガナードは怯んでいる。ゾンビなら通しないが、感覚が残っている敵だからこそ使えた手だ。

黒瀬は木刀で怯んでいるガナードの頭を叩き潰していく。どうやら寄生体が出るのとは出ないのがあるらしい。寄生体が出ないのは黒瀬にとっても都合だ。余計な手が掛からない。

「それにしても多いな」

次から次へとガナードが出現し、一向に減る気配がない。

「おい、あれはヤバイぞ」

ルイスが指を差した所を見ると、頭に包帯を巻いた女ガナードがチェーンソーを持ち、エンジンをつける。しかも二人。

「チェーンソー姉妹？」

二人の容姿はよく似ていて、双子でも通じるくらいだ。

「言ってる場合か。奴らは並のガナードよりも強いぞ」

ルイスが言うくらいだ。相当手強いのだろう。

「じゃあ早く倒した方がいいな」

黒瀬はチェーンソー姉妹に突出し、二人を木刀で払い飛ばす。

一人はすぐに立ち上がり、雄叫びを上げながら切りかかるが、黒瀬は木刀で受け止める。

しかし、木刀が木ということもあり、すぐに真つ二つになった。黒瀬はバックステップし、チェーンソーを避ける。

「あー！ 五千円もしたんだぞ！」

黒瀬は使い物のならなくなった木刀を放り投げ、素手で構える。チェーンソー女は狂気のできで黒瀬に切りかかるが、黒瀬は側面に回り込み、チェーンソー女の頭を肘で

殴った。怯んだ所で手からチェーンソーを奪い取り、元チェーンソー女の首を横から切つて真つ二つにした。

大量の血飛沫が黒瀬に飛び散り、この方法をとつたことに少し後悔するが、チェーンソーのエンジンを切り、もう一人のチェーンソー女の胸に突き刺して手を離す。

「リヨウ……お前はとんでもない奴だな」

ルイスが若干引いている。

「どんな殺し方でも一緒だろー！」

と、このタイミングで無線がかかる。

「ハニガンか。どうした？」

襲い掛かるガナードを足で払いながらハニガンと話す。

『緊急事態よ。レオンと通信が取れなくなつたわ』

「へえ、それは緊急事態だな」

『何者かによつてレオンの無線機がクラッキングされているの。居場所はその先にある古城よ』

「古城なんてものがあんのか」

「……ここに城があるなんて聞いたこともないが、噂にならない以上、小さい城なのだろう。」

『早急にレオンとアシユリーに合流して』

「オーケー」

合衆国エージェントの無線が、そこらの人間にクラッキングされることなどありえるのだろうか。

黒瀬は無線を切り、松明で殴りかかってきたガナードを足で払い、松明をガナードの背中に乗せて燃やす。

「ルイス！ この先に古城があるのか!？」

「ああ！ とんでもない古城があるぜ」

そこにレオンとアシユリーがいる。

「このガナードたちの相手は俺がする。ルイスは先に古城に向かっててくれ」

「いいのか?」

「ああ。楽勝だ」

ルイスは一瞬躊躇ったが、進行方向にいるガナードを撃ち倒し、先へと進んだ。

ガナードたちは目標を黒瀬一人に変え、凄まじい殺気を放ちながら襲い掛かる。しかし、黒瀬は慣れたようにもう一本の木刀で敵の頭を潰していく。

知能は残っているが、それでも動きは単純だ。斧や鎌の攻撃を避け、次々と敵を倒す。

五分後には、黒瀬の回りは村人の死体で囲まれていた。

黒瀬は静かに目を閉じて、村人の冥福を祈った。

「これが古城か……」

黒瀬は絶句していた。目の前にあるのは、中世に造られたように古く、美しい城だ。壁の亀裂や苔がいい味を出している。世界遺産レベルだ。

黒瀬は感慨にひたつてる場合ではない事を思い出し、ハニガンへ無線をいれる。

「古城の前に着いた。でも橋が上がっていて古城側へ渡ることが出来ない」

谷を見るが、下が見えないほど深い。

『別の手段はない?』

「あるかもしれないけど……時間がかかるな」

これほど大きい古城への入り口が一つだけとは考えにくい。しかし、一々探している時間も惜しい。

「仕方無い」

黒瀬はため息をつき、二十メートルほど下がる。

地面に手をつき、クラウチングスタートのポーズを取る。

「ハニガン、合図ヨロシク」

『よーい……スタートー!』

ハニガンの合図で黒瀬は走り出す。助走距離は二十メートルだが、黒瀬には充分だった。時速五十キロメートル近いスピードを出し、上げられている橋を一気に駆け上る。頂上まで来ると、跳躍して古城側へと飛び移った。

「よし、成功だ」

ギリギリだったが、何とか成功。流石は俺の身体能力だと、黒瀬は自画自賛する。

『……何はともあれ良かったわ。レオンとの合流を急いで』

ハニガンも驚いた様子だが、流石はプロ、早急な任務の遂行を選択した。

「オーケー、この城の中を探し回ればいいんだろ? 簡単だ」

倒れているガナードの死体を追っついていけば、いつかはレオンに会えるはずだ。

進もうとすると、真横に矢が飛んできた。矢は地面へ突き刺さる。殺気の方角を見ると、黒ローブを着ている男たちがボウガンで黒瀬に構えていた。

「退屈しなさそうだね……」

黒瀬は地面に突き刺さっている矢を抜き、投げ返した。十数メートル離れている敵の頭に突き刺さり、一人が力なく倒れる。

相手も臨戦態勢に入ったのか、奥から盾や鎖付きモーニングスター、大鎌を装備した黒ローブ男たちが現れる。

「いや、ほんと、退屈しなさいそうだね」
ため息混じりに木刀を抜き、走り出した。

40話 チャイナドレスの女性

「うーん、やっぱり駄目か……」

レオンの無線に繋げて連絡を取ろうとしても繋がらない。ノイズが発生しているだけだ。やはりレオンの無線機は、何者かに乗っ取られたと考えるべきだろう。

「それにしても広いなあ」

レオンの痕跡をたどっているおかげで迷わないですんでいるが、もし、一人で乗り込んでいたら十中八九、迷っていただろう。それほどこの城は広い。何故、今までニュースにならなかったのが不思議なくらいだ。

色々疑問があるが、まずはレオンとの合流が最優先だ。もし、失敗して大統領の娘アシュリー・グラハムが死ぬことになったら、CIAとかに殺されてしまうかもしれない。

（暗殺とかは嫌だな）

今まで、アンブレラやテロリストの邪魔ばかりしてきたが、未だにアンブレラが雇った殺し屋とかに殺されませんでいる。遠くから狙撃されたら、銃弾を切れる人間でもイチコロだ。

(ま、その方が良いんだけどね)

二十二歳という若さで死ぬのは御免だ。やり残したこと……ではないが、やらなければいけないことがある。それは、ウイルス、そしてバイオテロの撲滅だ。当初は、アンブレラの壊滅だけを夢見て戦ってきた黒瀬だが、仲間たちやアメリカ政府の力もあり、一応アンブレラという会社は潰れ、夢は叶った。しかし、アンブレラの社員が世界各地に散らばったことで、各地でウイルスやB・O・Wの研究が続けられ、バイオテロが増え続けている。

バイオテロは、黒瀬にとつて切つても切れない存在なのだろう。今まで幾多のバイオテロに関わってきた黒瀬は、どこかで起きているバイオテロを見過ごすことなど出来ない体になってしまった。

時々、あの時ラクーンシティに行つてなかったら、今頃どういう人生を送っていたのかが、気になる。カントウ事件に巻き込まれ、何も知らないままカントウを脱出し――
「リョウ！」

想い出に耽つていると、ルイスが黒瀬の進行方向からやって来た。

「お、ルイス」

数十分ぶりだ。だが、その数十分は何時間にも思えた。

「小さい瓶を見なかったか？　中にカプセル剤が入っている……」

「いや、見なかったな。大事な物なのか？」

「ああ。レオンとお嬢ちゃんのプラーガの活動を抑える薬だ」

黒瀬は困惑した。話が分からない。

「どういうことだ？」

「二人はプラーガの卵を植え付けられてる。あと一日も経たない内にプラーガが二人の身体を乗っ取り、村人や邪教徒みたいに化物のなっちまうのさ」

「それはヤバイな」

二人の首から寄生体が……考えただけでも恐ろしい。

「俺は落とした薬を探しに行く。リヨウは先に進んでレオンたちと合流してくれ」

「分かった。気を付けてな」

「そっちこそ」

ルイスはそう言うと、走り去っていった。

「プラーガね……」

村人や邪教徒が化物になったのは、プラーガという寄生生物に寄生されたから。

ロス・イルミナドス教団は、相当頭のイカれた集団だ。

「よし、レオンたちと合流するぞー！」

プラーガに寄生されているなら、何か出来るわけでもないが、早急に合流した方がいい

いだろう。

しかし、行く手を阻むように邪教徒が現れる。

「おいおい、今は急いでるんだ。相手は後続の部隊がやってくれるからさ」

走って近づいてくる邪教徒の足にナイフを投げ、転倒させる。盾持ちの足にナイフを投げ、膝をついた瞬間、回し蹴りを喰らわせて吹き飛ばす。

黒瀬は次々に現れる邪教徒を蹴散らしながら進む。

「ああ、くそ。大分進んだぞ」

もうかれこれ一時間以上は城の中をさまざましているが、レオンたちの姿を捉えることが出来ない。邪教徒の死体を追っていけば……と思っていたが、もちろん死体が途絶えている場所もあるわけで、結局迷う羽目になってしまった。

「いや、それにしても本当にスゴいよな」

城内のいたる所にある仕掛けもそうだが、B・O・W.のバリエーションも幅広い。目が見えない鉤爪野郎や透明な虫、背中から寄生体が出ている犬や、やたら武器を売ろうとしてくるガナード。全部を倒すのに手間が掛かった。

いつまで迷えばいいのか。もしかしたら、追いつく頃にはレオンが全て解決しているかもしれない。

(家に帰りてえ……)

これほど無性に嫌になるミッションは初めてだ。そもそも一人行動という時点でやる気が出ない。それにただただ人の痕跡を追って進む。何とも惨めで寂しい。

黒瀬はそんな感じで油断していると、背中に何がか当てられた。

「手をあげて」

ただそれだけの一言。女の声。

黒瀬は一瞬戸惑った。油断していたのもそうだが、この感じは明らかにガナードではない。村人や邪教徒は言葉を話せるが、それは英語ではなくスペイン語だ。英語が話せるガナードだとしても、何故直ぐに殺さないのか。奴等は凶暴で人間を見た途端襲い掛かるのに。

黒瀬は頭の疑問を振り払う。確信しているのは、この女がすぐに黒瀬を殺さないということだ。でなくては、わざわざ拳銃を突き付け、ホールドアップをする理由がない。しかし、正体不明の女にこのまま屈服するわけにもいかない。

黒瀬は肘で女の溝うちを攻撃する。怯んだところで振り向き、銃を握っている手に掌低を喰らわせる。銃は女の手から離れ、後ろに飛んでいくが、女も反応し後ろにバク転。

(——やらせるか!)

黒瀬は胸のナイフを抜き、一気に女との距離を縮める。女が拳銃をキャッチした瞬間、その首にナイフを当てた。

「接近戦ではナイフの方が速い。覚えておけ」

「それ、さつきも聞いたわ」

どうやら先着がいたようである。

彼女は真紅のチャイナドレスにハイヒールという黒瀬にとって信じられない格好をしている。彼女からの殺気が全くないことに気づき、ナイフを首から離した。

「アンタ、名前は?」

「エイダ・ウォンよ。あなたのことには知っているわ。クロセ・リョウ」

エイダ・ウォン、はじめて聞く名前だ。

「何故俺の名前を?」

「あなたは有名人なのよ。ラクーンシティの生き残りでアンブレラの基地や研究所を幾つも壊滅させた男」

「へえ、そりや嬉しいね」

エイダがどこの回し者かは知らないが、名前を知られていて嫌な気分ではない。

「で、俺に何の用?」

わざわざホールドアップしようとしたんだ。聞き出したことでもあったのだろう。

「そうね。本当は暗殺命令が出ているんだけど」

「それって合衆国政府？」

「この場に誘き出して暗殺するという回りくどい方法を？」

「違うわ。あなたがよく知っている人よ」

「分からねえ。こんなことをするやつなんてウエスカーくらいか？」

「正解」

適当に答えたが、正解してしまったようだ。

「で、なんでエイダは俺を暗殺しないんだ？ それが命令なんだろう？」

「一体何を考えているのだろうか。」

「殺すのに気が引けちゃったのよ。同じラクーンシティの生き残りとして」

「アンタもか!？」

「話はここまで。また会いましょう」

エイダは何かを思い出したのか、颯爽と去っていった。

「ラクーンシティの生き残りって、結構凄い人物なんだな」

アリスやカルロス、アンジーにジル、レオンやクレア、アシュリーと、知っている人物だけでもヤバイやつらが集まっている。エイダの他にもラクーンシティの生存者で

ヤバイ連中はまだまだいそうだ。

エイダ・ウオン、一体何が目的かは知らないがウエスカーと関係がある以上、良い人ではないだろう。

無線が鳴り、黒瀬は取る。

『リヨウ、まだレオンたちと合流できないの？』

「厳しい言葉をありがとう。まだ合流できていません」

『そう。何か気づいたこととかあった？』

「あつたぜ。どうやら俺たちとは別で侵入している輩がいるようだ」

エイダが敵という確信がないので、曖昧にしておいた。

『こちらで調べておくわ。他に気づいたことがあったら連絡するのよ』

「オーケー」

そう言つて無線を切つた。

41話 サンプル

「リヨウ！」

黒瀬は城の室内を歩いていると、後ろから聞き覚えのある声で話し掛けられた。

「よう、ルイス。生きてたのか」

ルイス・セラ。今までに見た資料によると、ルイスはロス・イルミナドス教団の研究者だったらしい。

ルイスは気味の悪い紫の液体の入った試験管とカプセル剤の入った瓶を手に行っていた。二時間ほど前に、ルイスがレオンとアシユリーの体内にいるプラーガの活動を抑制させるための薬を落としてしまったため、別れてしまったが、どうやら無事に発見したようだ。

「それが抑制剤？ 試験管の方は？」

黒瀬がそう聞くと、ルイスはあからさまに嫌な顔をした。

「こいつは……ちよつと言えないな」

黒瀬はその試験管の中身が良くない物だと思った。紫の液体なんて毒かそこらだ。

「そういえばまだレオンとは合流してないのか？」

「まあな。でもレオンは大勢の敵に足止めされてると思うし、そろそろ合流できるんじゃないかと思ってるけど」

レオンの痕を追って数時間、流石に合流しないとハニガンに怒られる頃だ。

「じゃあ早く行こう」

黒瀬は目の前のドアを開けて進むと、レオンらしき後ろ姿が見えた。

「おい、あれって」

「ああ、間違いない。レオンだ」

黒瀬が大声で「レオン！」と叫ぶと、レオンが振り向いた。

「リヨウ、ルイス！」

レオンが黒瀬たちに気づき、駆け寄ろうとした時、黒瀬は背後からの殺気に気付く。

「ルイス！」

黒瀬はルイスを力の限り押した。咄嗟の事で、ルイスが持っていた試験管と瓶は手を離れ、宙をくるくると舞う。

「——ぐっ!?!」

鈍い痛みが、黒瀬の右胸を襲った。太い触手が黒瀬の右胸を貫いていた。叫びたいほどの痛みを堪え、触手の方向を見ると、フードを被った大柄な男が、ルイスがさつきまです持っていた試験管を手にかけていた。

「——くそ！」

黒瀬はナイフを抜いて触手を真つ二つに切り、胸に刺さっている触手を抜いた。
一瞬、フードの男が苦痛の表情を浮かべた。

「サドラー！」

ルイスは銃を構えるが、サドラーの触手で叩きつけられる。

「サンプルは入手出来た。お前達の処分はサラザールに任せてある」

そう言つてサドラーは立ち去つた。

レオンはサドラーを追い掛けようとするが、重症の黒瀬をほつとくことは出来ない。
黒瀬に近づき、布で傷口を塞ぐ。

「ぐっ！」

傷口を触られて痛むが、身体が思うように動かなかつた。

「すまない、リヨウ。俺のために……」

ルイスは申し訳なさそうな顔をする。

「別………良いよ。俺なら………死なないし」

肺が潰されているせいで息をするのでさえきつかつた。黒瀬は朦朧とするなか、レオンの顔を真つ直ぐ見つめた。突然の事で動揺している。

「——レオン、数週間………ぶりだな。テラグリジア・パニック………以来か？」

「今は話すな！」

「レオン……アシュリーは……どうした？　もしかしてはぐれたのか？　ハニガンに怒られるのは……俺なんだぞ？」

「いいから黙れ！」

レオンはどうしていいか慌てふためいている。こういうレオンの顔が見れるのはレアだなと、黒瀬は思った。

（ああ、眠たい。少しくらい良いかな？）

もう、意識を保っておくことは出来なかった。黒瀬はレオンを仲間として認めている。レオン一人でもアシュリーを救えるだろう。

「レオン、アシュリーは任せた」

黒瀬はそう言って、静かに目を閉じた。

あれから何時間経ったのだろうか？

黒瀬がわかっていることは、死なずに済んだ、ということだ。胸の痛みも引いている。………

胸を触る。包帯が巻かれているが痛みはない。やはり、既に傷は治っていた。いつものことだが、本当に気持ち悪い身体だ。

「リョウ、起きたか!?!」

黒瀬の動きに気づいたのか、ルイスが駆け寄る。

「ルイスか……。あれからどうなった?」

レオンはどうやら近くにいないみたいだ。

「嬢ちゃんと再会して先に進ませといたよ」

「そうか」

黒瀬は立ち上がった。

「おい、傷が!」

「大丈夫だ。もう治った」

証明するために包帯を取る。穴は空いておらず、完全に治っていた。

「どうなっているんだ?」

流石のルイスも困惑している。

「特異体質みたいなものだよ。傷がはやく治る」

「お前の身体を調べ尽くしたいな」

冗談か本気か。分かりにくい言葉をルイスは口にした。

「止めてくれよ。研究者にモルモットにされたくなくて、ここ何年も病院に行っていないんだぞ」

「確かに、お前の力を知れば、世界中の研究員がこぞつて調べたがるだろうな」

どうも最近は何回復能力が上がっている気がする。擦り傷なんかは一瞬で治るし、酒を飲んでも酔わないなど、子供の頃と比べて、格段に能力が上がっている。

「それで、サドラーとやらに奪われた試験管は何だったんだ？」

教団の優秀な研究者を殺そうとしてまでも奪いたかった物だ。かなりの価値があるのだろう。

「あれは……プラーガの支配種のサンプルだ。あれさえあれば、ガナードよりも上の存在になれる」

あのサドラーという男は、自分の意思を持っていた。

「エイダという女性がサンプルを渡せば、ここから逃がしてくれると言ってたんだ」

エイダ、深紅のチャイナドレスを着た女性。支配種のプラーガが目的か。

「あ、それより！」

黒瀬は思い出し、無線を掛けた。

『何時間も連絡をしないで、何をしてたの?』

声から察するにハニガンは相当お怒りのようだ。

「すまない、気絶していた。レオンと合流したんだが、別れてしまって……」

『発信機を見る限り、レオンは海の上にいるわ。何か聞いてる?』

「いや、何も」

『そちらに向かわせていたへりはレオンの方へ行かせるわ。どうかしてレオンと合流してくれる?』

「オーケー。何とかするよ」

無線を切ってルイスを見た。

「レオンは海の上か……孤島に向かったのかもしいないな」

「孤島?」

「教団の本拠地だ。プラーガの研究施設がある。そうだな、あそこならレオンと嬢ちゃんをプラーガを取り除けるな」

「どうしてレオンがそこに向かっているのかが気になるが、大方またアシュリーを連れ去られたとかだろう。」

「じゃあそこに向かおう。船はあるか?」

「ああ。モーターボートがある。近道があるんだ。着いてきてくれ」

「モーターボート発見！」

ルイスに着いていくと、洞窟の中でモーターボートを見つけた。

「これに乗って孤島まで行こう」

ルイスはモーターボートに張り切って乗った。

「ルイスも行くのか？ 後で救助をよこすからここで待つても良いんだぞ」

「いや、俺も行く。教団の最期を見てみたいからな」

それは良い、と黒瀬は思った。

「でもここにたどり着くまでに時間がかかったからな。レオンがとつくに潰しているかも」

「なら尚更急がないと」

黒瀬もモーターボートに乗り、ルイスが発進させた。

海を渡り、十数分の時間が経つと、バラバラとヘリのプロペラ音がしてきた。武装ヘリは黒瀬達の真上に止まり、風が吹き荒れる。

『よう、お前がB・S・A・A.のエージェントか?』

無線機から若い男の声があった。

「そうだ。合衆国のヘリパイロットか?」

『ああ。今から王子様とお姫様を助けに行くけど、乗ってくかい?』

ヘリから梯子が下ろされる。

「料金はツケにしといてくれ」

黒瀬とルイスは梯子を掴んで上り、機内へと入った。

「クロセ・リヨウだ。アンタは?」

「マイクだ。よろしく頼む」

何はともあれ、レオンたちに追い付くのはそろそろだろう。

42話 救えた命、救えなかつた命

黒瀬達の乗るヘリ、はレオン達のいるロス・イルミナドス教団の本拠地へと向けて出発した。

「で、アンタは？」

合衆国のヘリパイロットはルイスへ問い掛けた。

「ルイス・セラ、ハンサムなブーさ」

明らかにそれだけではわからないだろうと黒瀬は思い、付け加える。

「テロリスト共に仕えてた元研究員だ。良心が痛んで抜けたんだってよ。事件が解決したら政府につき出すつもりさ」

「おいおい、逃がしてくれないのか？」

「当たり前だ。どうあつてもテロリストの“元”研究員なんだから」

そして、ルイスはプラーガの支配種のサンプルをエイダという女性に渡そうとしていた。エイダがどういう女性かは知らないが、その背後にはウエスカーがいる。サンプルがウエスカーの手に渡れば、悪用されるのはほぼ間違いない。

「まあ、この事件は公にされることはないだろうし、牢屋には入れられないだろうから安

心しとけ」

「仕方ないな。俺のせいで村がああなった責任もあるし」

この事件が解決した後、村や古城に部隊が投入され、生き残りのガンナードは殲滅させられるだろう。黒瀬は彼らの冥福を祈る。

「島が見えてきたぞ」

マイクは高度を上げ、島の崖を上がる。

ヘリの下には大量のガンナードが武器を構えて歩いていた。黒瀬は物陰に隠れているレオンを発見する。

「マイクだ。援護するぞ」

『スゴいのできたな。頼りにしている』

レオンの声は元氣そうだ。

「よし、しっかり掴まっておけ」

マイクは高度を上げ、ヘリの側面に取り付けられているガトリングを発射する。凄まじい閃光と音を響かせながら、弾丸はガンナードの集団へと飛翔する。ガンナードもヘリの存在に気づくが、避ける暇もなく、その体をただの肉の塊へと変えていった。

「うわ、B級映画みたいにくろいな」

流星はガトリング。秒間何百発という攻撃で、その弾が一発でも当たれば人を肉塊に

出来る威力。その光景は目に置いときたくないほどだ。

ミサイルも発射し、隠れている敵も遮蔽物ごと一気に吹き飛ばす。

「いつになったら降りれる?」

黒瀬は今すぐにでも木刀を抜いて戦いたいが……

「降りる? バカ言え。今降りたら敵ごとミンチにしちまうぞ」

確かにそうなるもおおかしくないほどの銃撃だ。それに、黒瀬が戦うよりもへりに任せておいた方が、殲滅スピードは早いだろう。

高射砲も破壊し、ある程度敵を殲滅した。

『帰ったら一杯やるか』

レオンもマイクの働きぶりを認めているようだ。

「いい店があるんだ。皆で行こうぜ」

マイクがそう言った直後、黒瀬は気付く。ガンードがロケットランチャーを構えてへりを狙っていた。

「マイク!」

だが時すでに遅し。ロケットランチャーは引き金を引かれ、後部からバックファイアを噴かす。

——クソ!

黒瀬は咄嗟の判断でヘリのコントロール・ステイックを掴み、素早く引いた。ヘリは傾くが、すぐに爆発と揺れで操縦が効かなくなる。どうやら機体の尾の部分に被弾したようだ。

黒瀬はドアを開け、真下を見る。真下には青い海。

「クソ、操縦が……」

マイクはあわてふためいている。ルイスに至っては何故か無表情だ。死を悟っているのかもしれない。

黒瀬はナイフを取り出し、マイクに付けられているシートベルトを切る。そしてルイスとマイクの襟首を掴んだ。

（一か八か!!）

このまま飛び降りても崖に衝突する恐れもある。例え海に飛び降りたとしてもそこにヘリが落ちてくる可能性もある。ただわかることは、機内にいたら確実に死んでしまうことだ。

「うおおお!!」

黒瀬はルイスとマイクを引っ張って火を噴き上げているヘリから飛び降りた。そのまま崖に衝突することはなく、海へと激突した。水面に叩きつけられたことにより、背中が若干痛むが、それよりもコントロールの効かなくなったヘリの確認だ。

ヘリはくるくると回転し、崖に衝突して大爆発を起こす。

黒瀬は安堵の息を漏らす。考えていた事態にはならなくてすんだ。

「ぶっはあ!!」

「ぶほー!」

沈んでいたルイスとマイクが水面へと上がってくる。

「鼻に水がつ!?!」

「溺れるわ!!」

二人ともリアクションが派手だ。

「崖まで泳ぐぞー!」

波もそれほど強くなく、簡単に崖の下に着いた。

直ぐに無線機が使えるかどうかを確認する。流石は合衆国エージェントが使う無線機だ。今の時代の無線機は高度な防水仕様に、あれほどの衝撃を喰らってもまだ普通に使えるほど素晴らしい。

「ハニガン、ヘリが墜落した。パイロットは無事だ。もう一機よこしてくれないか?」

まさかこの数時間の間に、乗っていたヘリが二回も墜とされるとは思っていなかった。ヘリ恐怖症になってしまいそうだ。

『怪我はないわね? 仕方無いわ。近くでパトロールしているヘリを向かわせるわ』

「ああ、頼んだ」

黒瀬は無線機をしまふ。

「で、姉ちゃんは何だつて?」

ルイスは服を絞りながら言った。

「近くのヘリを呼ぶんだつて。まあ、正直船が良いんだけど」

次も墜とされてしまわないか心配だ。

墜とされたヘリの操縦士、マイクは限りなく広がる海を見つめ、呟いた。

「ああ、生きて帰れたとしても始末書ものだ……」

気を落とすすぎである。まずは今命があることを喜ぶべきではないだろうか?

「ここにいても何も始まらないから、進もうぜ。そこに洞窟があるし」

黒瀬が指を指した方向には、かなり大きな洞窟の入り口があった。

「地上に通じているかもしれない。調べよう」

黒瀬たちは立ち上がり、海水を含んで重たくなった服から水を滴らせながら洞窟の中へと入った。洞窟には、松明が壁に掛けられており、明らかに人の出入りがある空間だ。

「これなら地上に通じているかもな」

期待に胸を膨らませながら進む。だが当然、簡単に地上にたどり着けそうにはなさそう
うだ。

『いたぞー!』

『殺せ!』

武装したガナードが現れ、ボウガンで攻撃を仕掛けてくる。

「隠れる!」

岩に背中を隠し、様子を伺う。

「敵は……八人だな」

その内、四人がボウガン装備だ。黒瀬たちが隠れている岩に矢を放っている。

「道は一本、やることは一つだな」

マイクはハンドガンを取り出した。

「へえ、やる気になったか?」

「ああ。四人で酒を飲む約束をしたしな」

四人、この事件に関わった黒瀬、レオン、ルイス、マイクの四人だ。

「それなら死ぬわけにはいかないな。俺とマイクで敵を引き付ける。リヨウは先に進んでくれ。やれることがあるはずだ」

ルイスも銃を構えた。

「分かった……死ぬなよ」

黒瀬は立ち上がり、ダガーナイフを四本抜いてボウガン装備のガナードの手首に投擲

した。もちろん命中し、四人は怯む。

その隙に一直線の道を一気に駆け抜ける。怯んでいないガンナードが、斧やスタンバト
ンで攻撃してこようとするが、ルイスとマイクの援護射撃により、その攻撃が黒瀬に届
くことはなかった。

残りの道を駆け抜けて階段を昇ると、予想通り地上に着いた。外はまだ暗いが、そろ
そろ夜明けのはずだ。

パシユツと軽い音が聞こえ、赤いチャイナドレスの女性が、宙を移動していた。

「エイダ!？」

エイダもこの島に来ていたようだ。だが、驚くべき問題はそれだけではなかった。上
の足場には、黒瀬が知っている人物がいた。

短い金髪の男。その男とは昔、南米で共に戦ったことがある。

——まさか!？」

黒瀬はその正体を確かめるために壁を走って上へと上がり、エイダの隣に着地した。

「あら、あなたも来ていたの?」

エイダは冷静沈着だが、黒瀬はそうもいかなかった。そこにいた男の名は——ジャツ
ク・クラウザー。

南米で生物兵器を所持していた人物を倒すために共に戦い、そして謎の事故により死

亡した人物。まさか生きているとは……。

しかし、クラウザーの左腕は寄生体になっており、彼からは凄まじい殺気が伝わってくる。

「クラウザー……ウィルスに頼ったのか……？」

クラウザーは黒瀬の顔をじっと見て、何かを思い出したかのように笑う。

「リョウカ。今日は懐かしい奴に良く会うな」

「答えろ！」

あの時、ウィルスの怖さを知ったはずだ。あの事件の首謀者はウィルスに頼った所為で儚い結末を遂げた。あの光景をクラウザーも見えていたはずだ。

「俺の価値観はあれから変わったのさ。マヌエラの力を見ただろう？ ウィルスは、人も！ 世界も！ 簡単に変えることが出来る！ 俺はその力が欲しかったのさ！」

「そんな理由でウィルスに手を出したのか!!」

かつての仲間がウィルスに囚われている。もちろんそれはクラウザーだけではない。黒瀬もレオンもそうだ。クラウザーとレオンたちとの決定的な違いは、その力を、その驚異を、否定するか、利用するかだ。

「ちようど良い。貴様もエイダと共に葬ってやろう。貴様が嫌っているウィルスの力だな！」

もう、クラウザーの耳には誰の言葉も届かないだろう。

「彼、あなたを殺すみたいだけどうするの?」

エイダが尋ねる。

「もちろん倒す。ジャック・クラウザー! 現時点から、お前をB・O・W. と見なし、処理する!」

「やれるものなら」

クラウザーは、寄生体と化した左腕で真つ直ぐと黒瀬の胸を狙って殴りかかるが、黒瀬の怒りは既に頂点に達しており、そんな攻撃など簡単に見切れた。

「らああああ!!」

突き攻撃をしゃがんで避け、クラウザーの顎にアツパーを喰らわせる。すぐにその胴体にラツシユを加え、顔面を殴り付けた。

黒瀬が優勢に見えたが、あまりに熱が入っていた所為で、クラウザーが投げた閃光手榴弾に対応出来ず、目と耳を麻痺させてしまう。

黒瀬の身体が殴り付けられ、倒れたところで肋骨を踏まれる。

「ククク、その程度か、クロセ・リヨウ。だが、パンチは効いたぞ」

目が治り、正面を捉える。クラウザーは寄生体を硬化させ、今にも黒瀬の胴体を貫かんとしている。

「あら、私がいるのを忘れ？」

エイダがボウガンの矢をクラウザーに放つが、矢は右手で捕まれる。

「残念だったな」

「そうでもないわ」

クラウザーが掴んでいた矢は爆発し、クラウザーは吹き飛んだ。黒瀬はクラウザーから解放される。

胸を踏みつけられていた所為で息がしずらいが、今はそれどころではない。クラウザーとの距離を縮め、また顔面を殴りつけた。

「クラウザー！ まだ殴り足りないぞ！」

ローキックからの助走なしの飛び蹴り。軽いフットワークで起き上がり、側面に回り込んで三発、顔を殴り付けた後に首を肘で抱え、床に叩きつけた。

「ぐう……！」

クラウザーは元軍人だが、昔のような動きをしていない。寄生体に身体を乗っ取られようとしているのかもしれない。

しかし、クラウザーの反撃。閃光手榴弾を床に落とした。黒瀬は目を瞑り、耳を塞ぐが、それでも一瞬の間が出来る。クラウザーはその隙を逃がさず、黒瀬に攻撃を仕掛けた。

硬化させた寄生体で黒瀬の上半身を斜めに斬り上げ、右手首を真つ二つに斬り落とす。

「——あつ、がああ!？」

斬られた胸と手首から、血が霧のように噴き出す。流石に気を失いそうな痛みだが、黒瀬は歯を食い縛り、切断された腕でクラウザーの顔面を殴った。

そしてまた、気を失った。

「リョウ、無事か!？」

目を開けると、目の前にはルイスの顔があつた。

「つたく、こんなところで昼寝とは良い度胸だな」

マイクも無事だ。二人ともボロボロだが。

右手を見ると、ちゃんと右手は生えていた。胸の傷もない。夢だったのか？ そんなはずはない。確かに手首を切断され、胸を斬られた。ヒーリング能力で再生したのだから。

(手まで生えてくるとは……トカゲか俺は?)

近くを見渡すと、クラウザーが倒れていた。動きそうにない。

黒瀬が殴った時に倒したのか、はたまた気絶した後、エイダが倒してくれたのか、それはわからない。エイダの姿もない。

「リヨウ、さつきレオンと連絡を取ったんだ。プラーガは除去し、サドラーとの最終決戦に挑むらしい」

「そうか。参加したいが……」

今回は身体を張りすぎた。傷が回復しているといっても、身体がダルいことには変わりはない。

「ヘリの降下ポイントで休んどくよ」

レオンならサドラーを倒してくれる。レオンの強さは黒瀬も認めている。

黒瀬はハニガンにヘリの降下ポイントを聞こうと無線機を取り出したとき、ドコオン!! と何かが扉を破った。

「何だ!?!」

破られた扉の方を見ると、大男が二枚刃のチェーンソーを持って、こちらを凝視していた。

「あいつは……?」

大男は黒瀬たちを目標に決めたのか、二つのチェーンソーの重量をもともせず振

り回し、黒瀬たちの元へと走ってくる。

「ヤバイな……」

マイクとルイスは巨大チェンソー男に向けて何度も発砲するが、まるで効いていないかのように走るのを止めない。

「あんなのと戦いたくないな。逃げるぞ！」

流石の黒瀬でも、近接戦闘が仕掛けられない敵には分が悪い。それに、この数時間で傷を治しすぎたせいかな、身体が想像以上にキツイ。

黒瀬たちは取り敢えず走る。

「おい、ハニガン。ヘリはまだか!？」

『今そっちに向かっているわ。ヘリのパイロットと無線を繋げるわね』

『よお、俺をなしで任務に出たかと思ったら、そんな島で遊んでいたとはな!』

その声は、黒瀬が聞いたことのある声だった。

「その声、カークか!？」

『俺以外に誰がいるんだよ?』

この声の主は、B. S. A. A. の優秀なヘリパイロット、カーク・マシソン。どうやら彼が救援に駆けつけてくれるようだ。

『ボクもいるよー』

「またもや聞き慣れた声。」

「平野も一緒か！」

平野コータは、B. S. A. A. の狙撃手だ。共に六年前のカントウ事件を生き抜き、流れるようにB. S. A. A. に志望した。

『そろそろで着く。それまで我慢しといてくれ』

「オーケー！　でもロケットランチャーには気を付けてくれよ。ヘリがトラウマになりそうなんだ」

黒瀬は無線を切り、ルイスたちに状況を説明しようとするが、無線がかかる。

『リヨウ、聞こえてる？』

エイダの声だ。

「ああ。何だ？」

『もうそろそろでその島は爆発するわ。早く逃げた方がいいかも』
『でもレオンがまだ……』

『レオンと大統領のお嬢さんなら大丈夫よ。上手く脱出出来るように手を加えておいたわ』

「そうか、ありがとな。でも、何で俺たちに手を貸すんだ？」

エイダの上にはウエスカーがいる。そもそもエイダには黒瀬たちを助ける義理なん

てないのではないか、黒瀬はそう考える。

『同じラクーンシティの生き残りとしての情が湧いちゃったのかも？』

エイダは無線を切った。

黒瀬には、エイダが心からの悪い人物ではないことが分かる。しかし、何故そんな人物が今回のような仕事をしているのか。だが、今はそんなことを考えている時間ではない。

黒瀬はマイクとルイスに状況を説明した。

「ヘリが来るまで逃げれば良いんだろ？」

「そういうことだな」

巨大チエーンソー男は持久力を衰えずに黒瀬たちの元へと向かってくる。

黒瀬はレッグホルスターからハンドガンを抜き、巨大チエーンソー男の近くにあるドラム缶を撃ち抜いた。ドラム缶は爆発を起こす。それでも巨大チエーンソー男を倒すのには至らず、膝をついたただけだった。

「時間稼ぎにはなつたはずだ」

黒瀬たちは、カークが見つつけやすいように高いところまで走る。しかし、その終着点は崖だった。

「クソ、行き止まりかよー！」

エイダの言った島が爆発する時間まであとのくらいだろうか。残されている時間は少ない。

巨大チエーンソー男は、あと少しで島が爆発するとも知らずにチエーンソーを振り回し続けて、黒瀬たちへと近づくと、

「やるしかないな」

あのチエーンソーの攻撃を掻い潜り、刀で首を斬れば良いが、そんな体力もない。チエーンソーに切られて今の身体の状態で回復するとも限らない。そもそもチエーンソーに切られたくない。

黒瀬はナイフを投擲するが、当然奴には効かない。

「クソ、どうするってんだ!？」

マイクとルイスも巨大チエーンソー男を近づけまいと撃ち続けるが、ものともせず近づいてくる。

『こんなときにヒーローの登場?』

その声のすぐあとに、発砲音が聞こえ、巨大チエーンソー男が怯んだ。

ヘリが黒瀬たちにいる崖へと向かってきていた。平野はヘリから身を乗り出し、ライフルを構えてまた撃った。弾丸は吸い込まれるように巨大チエーンソー男に命中する。

『こんな体勢でも命中させられるって……ボクって天才!？』

「そうだな、天才だよ！」

へりは瞬く間に崖へと到着し、機体を横へと傾けた。

『ロケットランチャーには気を付けてるぜ。俺は何があっても墜落しない！』

「だってよ、マイク。このへりパイロットは何があっても墜落しないらしい」

「俺だって墜落しないと思ってたわ！」

『……！ 三人とも早く！ 奴が……！』

巨大チエーンソー男はまだ立ち上がり、チエーンソーを振り回す。

『喰らえ！』

平野はライフルを連続で撃ち、命中させるが、それでも倒れそうにない。

『なんてタフさ……でもこれなら！』

平野が取り出したのは、ロケットランチャーだった。

『ごめんね、黒瀬。良いところはボクがもらっていくよ！』

平野はロケットランチャーの引き金を引いた。ロケット弾は真っ直ぐ飛翔し、巨大

チエーンソー男の腹部へと命中。大爆発を引き起こした。

その場に残っていたのは、チエーンソーの欠けた刃だけだった。

『流石はRPG7！ 対人兵器じゃないけど、その威力はやっぱりすごい！ 撃つてみた

かっただけだけだね』

地面が揺れる。さっきまでいた施設が爆発していた。

『え!? ボクが撃つたせいで!?』

「違うわ」

三人はヘリへと乗り込んだ。

「じゃあ出すぞ」

ヘリは爆発に巻き込まれないように、すぐにその場を離れた。

「ルイス、教団が潰れる姿を見れて良かったな」

「ああ。一生忘れないぜ」

でも、結局教団を潰したのはレオンだ。黒瀬は自分は何も出来なかったと悲観する。

「それは違うな」

ルイスは黒瀬の肩を叩いた。

「お前がいなければ俺は古城でサドラーに殺されてた」

「そうだな、俺もリヨウがいなければヘリと一緒に墜落してた」

二人の顔は笑顔だった。

「そうだな。俺でも……役に立てたんだな」

本来の任務はレオンが遂行してくれた。でも、自分だからこそ救えた命もあった。そして結局救えない命もあった。

(クラウザー……)

彼とはどこで道を違えたのか。彼は自分の間違いに気づけなかったのだろうか。昔の戦友が死んだことには代わりはない。でも、それでも、進み続ける。これ以上のバイオテロに、ウイルスに囚われない人間が増えないように……

「よお、レオン」

「どうも、リヨウ」

ハニガンの連絡で、レオンとアシユリーの元へと向かうと、水上バイクに乗っている二人の姿があった。

「今からマイクのおすすめの店に、彼のおごりで飲みに行くんだけど、乗ってく？」
「そうだな、ちょうど飲みたい気分なんだ」

レオンもアシユリーもボロボロだった。

「レオン、これからも宜しくな」

「ああ、当たり前だろ」

ウイルスは増殖を続ける。バイオテロも増え続ける。でも、だからこそ、戦う、戦い

続ける。ウイルスがこの世から消滅するまで。

8章 リベレーションズ

4 3 話 テラグリジア・パニック 前編

この事件を語るには、まず一年前に遡らなくちゃな。言っておくが、この事件は俺一人だけで解決できたわけじゃない。クリスやジル、オブライエンたちの力もあつたからこそだ。だから、俺の話だけじゃ事件の全貌も分かりにくいよ？ 記事にするには、クリスたちの話も聴かないと意味はないとな。………じゃあ、語ろうか………あれは一年前、今はなき海上都市テラグリジアで始まったんだ。

「クソ、敵が多すぎる！」

「どうした、カルロス。へこたれたのか？」

「バカ言え」

飛び掛かってきたハンターを黒瀬はカウンターで殴り飛ばし、頭を踏みつけた。

B. O. W. との戦闘訓練を受けていない兵士なら、今のハンターの攻撃をかわしき

れずに首をポツカリ持っていかれてるが、黒瀬は違う。六年前のラクーン事件の頃からB・O・W・と戦い続けているのだ。ハンターはゾンビよりも知能や攻撃力があり厄介な敵だが、今の黒瀬には如何なる手も通用しない。しかし、油断も禁物だ。油断した人物から、ハンターに殺されていく。この現状がそうだ。

黒瀬はまた飛びかかってくるハンターを蹴り飛ばした。

NGO団体B・S・A・Aの仕事は、バイオテロ現場でのオブザーバーが多い。しかし、今日は違う。

地中海にある人口海上都市テラグリジアで大規模なバイオテロが起こった。テラグリジアはレギア・ソリスといった人工衛星で、太陽光エネルギーを供給する環境にも配慮された島として、宣伝されていた。だが、それに異を唱えるものもいた。

ヴェルトロと呼ばれる活動団体は、テラグリジアの開発に反対し、デモを起こしていた。それだけならまだしも、デモは徐々に過激になり、テロ行為まで行うようになった。そして、今回の事件は新型のウィルスと大量のハンターがテラグリジア内に送り込まれるという大規模なバイオテロだった。

事態を重く見たB・S・A・A代表クライヴ・R・オブライエンは、数名のB・S・A・Aのメンバーを連れ、テラグリジアへと向かった。しかし、予想以上にバイオテ

口が深刻な状況だったことにより、オブサーバーとして準備していたB・S・A・Aのメンバーも戦闘に参加させられることになった。

「それにしても、ここまでハンターが来るとは……。前線のFBCの連中は全滅か!?」
今の状況に狼狽しているのは、黒瀬と同じB・S・A・Aのメンバー、カルロス・オリヴェイラ。彼とは六年前のラクーン事件の際にラクーンシティを共に脱出した。

「そうかもな。FBCの連中でもこの数はキツイだろう」

FBCのメンバーが弱いとは言っていない。黒瀬たちも危うい状況なのだ。

黒瀬たちの後ろに控えるのは、何千人も避難している避難所だ。更にその後方には、市民を脱出させるための船が泊まっている。前線はFBCが食い止め、"もしも"ハンターに突破されれば、黒瀬たちの出番だったが、現状の通り大量のハンターに突破され、その相手を黒瀬たちが行っている。ここをハンターに通せば、避難している市民が犠牲になってしまう。

「ヴェルト口の奴ら、よくこんなにハンターを用意できたな」

「もしかしたら、バックにお金持ちがいるのかもな」

ハンターの数は予想以上。その数は優に百を超え、各地点でFBCとB・S・A・

A. のメンバーが戦闘を行っている。しかし、それが持つのも時間の問題だろう。

十体以上が橋を渡って黒瀬たちのもとへ地向かってくるが、そのハンターたちは瞬間に倒れていった。

「平野、無事に狙撃地点まで着けたようだな」

『毒島先輩とリカさんのおかげだよ』

黒瀬は直線上にあるビルの屋上を見ると、スコープの反射光が二つ見えた。一つは平野、もう一つは南リカのライフルだろう。

ハンターは次々と撃ち倒され、黒瀬たちの仕事は奪われてしまう。

「お前ら、俺たちの仕事を取りすぎ！」

『東の方で田島さんと小室が戦ってくるからそっちに行けば？』

「遠いわ！ こっちは西だぞ！」

そんなこんな話していると、上空からFBCと書かれたヘリが現れ、九人が降下してきた。

「リョウカ!?!」

「レオン!?!」

その九人の中に一人だけFBCじゃない人物が紛れ込んでいた。

レオン・S・ケネディ、アメリカ合衆国のエージェントで、ラクーンシティの生き残

りの一人だ。

「何でテラグリジアに？ 大統領の娘を護衛をするって話じゃなかったか？」

「それはあと数週間後の話さ。合衆国のお偉いさんがビルの中に閉じ込められて、俺が

B. O. W. との戦闘に慣れているからわざわざヨーロッパまで来させられた」

「そりゃ不運だな」

それにしても、よく会うなあと黒瀬は思う。

お互い別の組織に所属しているにも関わらず、バイオテロ現場で遭遇するのはこれでも何回目だろうか。もしかしたらこれからも会うのかもしれない。

「B. S. A. A. の二人、ここを食い止めてくれてありがとう。後は我々に任せてくれたまえ」

数秒時間を置いて黒瀬は「ああ」と答えた。八人では心配だが、B. S. A. A. が F B C に口答える事は出来ない。主導権は彼らにあるのだ。

「レオン、その役人さんはどこにいるんだ？ 俺とカルロスが援護するぜ」

「分かった。付いてきてくれ」

黒瀬たち三人はビル街を走っている途中、無線がかかる。

『こちら毒島だ。十四番区のビルで負傷者を発見した。誰か援護にきてくれないか』
毒島は平野と南と分かれ、一人行動のはずだ。

「カルロスだ。俺が向かう」

『すまない、では待機する』

カルロスはアサルトライフルのマガジンを入れ換えた。

「じゃあな、リョウ、レオン。無事で」

「そつちこそ」

「グッドラック」

カルロスは毒島の援護をしに別行動、レオンと黒瀬が二人で行動することになった。

「そう言えばテラセイブも来ているんだってな」

レオンが唐突に話す。

「それが何だよ？」

「クレアも来てるかもな」

「……かもな」

黒瀬は、最近バイオテロが多くなったことにより、クレアにあまり会っていない。クレアだけではない。クレアと同じテラセイブに所属している香月や鞠川、日本で暮らしているありすとも久しく会っていない。大人になり働くとは自然に会わなくなるのだろうか。黒瀬は自分が大人ということをあまり実感していない。

(そういえば、成人式にも参加しなかったな……)

大学の友人たちは元気だろうか。黒瀬は友人に何も言わずに大学を辞めてB. S. A. A. に入ったが、連絡の一つくらい入れておけばよかったですと後悔している。

「リヨウ、来るぞ！」

ハンターが黒瀬たちの行く手を阻むように現れた。

「やりますか……」

木刀を抜く。ハンターを撲りすぎた所為で木刀は茶色から血の赤色へと染まっていた。そろそろ折れてしまうかもしれないが、五千円の安物だから別にいいだろう。

黒瀬はハンターに飛び掛かった。

44話 テラグリジア・パニック 後編

黒瀬とレオンは合衆国のお偉いさんが閉じ込められているというビルの入り口までたどり着いた。

「で、レオン。そのお偉いさんはどこにいるんだ？」

「さあな？　そこまでは俺も知らない」

ではしらみ潰しに……というわけにもいかない。ハンターと新型ウイルスによる被害が多く、FBCの部隊がテラグリジアを撤退するのは時間の問題だろう。

「警備室に行こう。そこなら監視カメラの映像でビル中が見れるはずだ」

「俺が言おうと思ったのに先に言われたな……」

黒瀬とレオンは素早くフロント走り、エレベーターのボタンを押す。が、その前にエレベーターは動き出し、下へと降りていく。

エレベーターは途中で止まることなく、二十階、十五階とどんどん下まで降りてくる。

「中にハンターが乗ってるかもな」

「それは怖い」

エレベーターが五階まで来ると、二人は後ろの数歩下がり、黒瀬はナイフを、レオン

はハンドガンをエレベーターの扉へと向けた。

心臓が激しく鳴る。エレベーターの扉が開いた途端、ハンターが飛びかかってくる可能性も大いにあり得る。油断大敵だ。

エレベーターが一階に着いた。レオンはトリガーを強く握る。チン、と到着の合図が鳴り、エレベーターの扉がゆっくりと開いた。

「うわあああー！」

男の叫び声が聞こえた刹那、黒瀬の目にはオレンジ色の光が見えた。マズルフラッシュ、エレベーターの搭乗員から放たれた弾丸は真つ直ぐと黒瀬の額へと向かっていく。

流石の黒瀬もハンターが飛び出してくること以上に驚いたが、エレベーターの中には一般人と思われる複数の男女乗っていた。一瞬なので顔までは見れなかったが、銃を撃った男性も撃とうとして撃ったわけじゃないだろう。こんな状況だ。扉が開いた瞬間、正面に誰かいれば誰でも驚く。もちろんその行動は軽率だが……。

しかし、相手が自分で良かった。黒瀬は少し安堵し、首をひよいと右に傾けて弾丸を避けた。相手を確認しないで発砲してしまう奴だ。緊張と興奮が身体を支配しているのだろう。第二射が放たれないとも限らない。

黒瀬は右手を突き出してほぼ満員のエレベーター内に駆け込み、男性の右腕を掴んで

上へ上げ、即座に下に降り下ろした。男性の手汗で銃はするりと手から離れ、エレベーターの床に落ちた。

「危ないじゃないか、撃つときはしつかり相手を確認しろ」

「……………ひゃい」

男は少し涙ぐんでいた。

（こつちが泣きたいわ！）

さっきの弾丸を避けられたのは、あくまでも運だ。筋トレをサボっていたり、体調が少しでも優れていなかったら、今頃頭には鉛玉がぶちこまれているころだろう。結局は結果オーライだが。

「リョウ、それにレオンも!？」

エレベーターには見慣れた人物が三人乗っていた。しかし、他にも乗客がいる。黒瀬は一旦エレベーターから降り、道を開けた。

「まさかここで二人と会えるなんて思ってもいなかったわ」

「そうよ、黒瀬くんもレオンくんも久しぶりねえ」

「ほんとよ！ リヨウなんか連絡もよこさないんだから！」

道路の端で歩きながら会話する。

黒瀬が見慣れていた三人の女性というのは、クレア・レッドフィールド、鞠川静、香月彩だ。三人はB・S・A・A・やFBCとは違い、バイオテロを鎮圧するのではなく、バイオテロの被害者救出したり、弾圧したりなどする組織、NGO団体テラセイブに所属している。黒瀬はレオンから、今回の事件にテラセイブも来ていると聞いていたが、まさか、レオンが救出しようとしていた合衆国政府の役人を先に救出されるとは思ってもいなかった。

「ほんと、びっくりだよ。三人と会えるなんて思ってもいなかった」

「これはあれだな。リヨウと俺がバイオテロ現場でよく会う奴だ。俺とリヨウだけが特別な運命に引かれあっているかと思ったら俺だけじゃないみたいだな。安心した」

「特別な運命に引かれあっていることは間違いないけどな」

五人はバイオテロに関係する仕事に就いているので、仕事現場で会う確率が高いことは確かだ。しかし、レオンとは会いすぎなんじゃないかと、黒瀬は思う。

「リヨウ！ ありすちゃんに最近会いに行つたの!?! この前会いにいつたとき、リヨウだけ来てくれなかったって悲しんでたよ！」

香月から痛い言葉を貰う。

「そうよ、ありすちゃんもまだ子供なんだから。あ、反抗期になる前には会いにいった方が良いかもね〜」

黒瀬は、反抗期になった記憶はない。そもそも反抗できる親がいなかったわけだが。反抗期とはどのようなものだろうか。自分もありすから拒絶されるかと思うと、黒瀬は心配で心配で仕方ない。

「でもなあ……」

会いに行けない理由もある。このご時世、毎日ではないが、至るところでバイオテロが起こる。B・O・Wやテロリストとの戦闘が絡む以上、被害者は必ず出てしまう。黒瀬は、自分なら他のFBCやB・S・A・Aよりも強いと自負しており、バイオテロの被害者を減らすために多くのバイオテロ現場へと出向いている。その行動や他人を庇う姿勢はメンバーからも度々注意されているが、他人が傷付くよりも自分が傷付いた方がよいと考えている。

彼の場合はヒーリング能力もあり、メンバーもその行動に強く反論できないというのが現状だ。

飛んできたFBCのへりに、テラセイブによって救出された一般人と役人、レオンが乗り込む。

「じゃあな、レオン」

少し寂しくなる。レオンはあと数週間もすれば、合衆国大統領の娘の警護につき、バイオテロ現場で会うことはなくなるだろう。それに仕事が仕事なだけあって、会う機会も大幅に減少される。

「そんな顔をするなよ。俺たちのことさ。大統領のお嬢さんがバイオテロに巻き込まれてその現場で会うかもしれないだろ？」

「コラ、不謹慎よレオン」

レオンはクレアに小突かれる。

黒瀬とテラセイブの一員は飛び立つへりを見送った。そしてすぐあと、B. S. A. A. とテラセイブの無線、各地点に設置されているスピーカーから放送が流れる。

『バイオハザードのレベルが最大まで上がりました。我々FBCはこれ以上の感染拡大を防ぐため、レギア・ソリスを使い、島の滅菌作戦を行います。この作戦は決定事項です。作戦開始は二時間後、十六時三十分から開始いたします。市民の皆さんは至急避難してください。繰り返します——』

やはりか——遅かれ早かれこういう事態になると想像していたが、まだ避難が完了していない区域もあるはずだ。FBCのやり方だと市民が残っていても作戦開始の時間の変更はないだろう。

「レギア・ソリスを使うってことは、島を太陽の力で消滅させるってこと!?!」

「ああ。テラセイブの職員は至急避難してくれ。俺は限界まで市民の救出を行う。皆気をつけて」

「分かったわ。リヨウも気をつけて」

「黒瀬くんのことだから簡単には死なないだろうけどね」

「リヨウ、必ず生きて会いましょう」

三人との別れを済ませ、黒瀬は来た方向を戻っていった。

『黒瀬、さっきの放送聴いたよね？』

平野からの通信だ。

「ああ。そっちは大丈夫か？」

『もちろんさ。ボスが黒瀬はFBC本部のビルまで来てくれたって』

「了解」

近くに取り捨てられたバイクを見つけ、それに乗ってFBC作戦本部へと向かった。

FBC作戦本部のビルの会議室に入ると、B・S・A・Aのボス、クライヴ・R・オブライエンとFBCのボス、モルガン・ランズデールが何か揉め事を話していた。

先程の連絡で黒瀬以外のB・S・A・Aのメンバーは撤退したらしい。

「お、来たかサムライ」

「この子供がパーカーの言ってた日本人？ 戦えるの？」

熊のような巨大な男と失礼な女が登場した。

「失礼だな。確かに筋肉はそれほどないが、ハンターの十体や二十体は余裕だぞ」

「リヨウの言っていることは俺が保証しよう」

黒瀬の荷を持つのは、パーカー・ルチアーニ。FBCのメンバーだが、前に一度共に任務をこなしてから仲良くなった。

「紹介しよう。この女はジェシカ・シエラワット。こんなやつだが、頼りにはなる」

「どうも、ジェシカです。よろしくサムライ君」

サムライと呼ばれるのは好きではないが、それをここでいう時でもない。顔には出さないでおいた。

「クロセ・リヨウだ、よろしく。で、パーカー、俺たちは何を？」

「簡単に言うと、退路を確保して屋上に向かう」

「それは良いね。では早速行こうか」

オブライエンの話も終わりそうにない。黒瀬たちは会議室を出る。

生きている人間が集まっているからか、ハンターが先程よりも多く集まっていた。

「よし、やるぞ」

黒瀬たちは障害物を避けてエレベーターに向かい出した。

ハンターが襲い掛かるが、数が多すぎる。器用に避けて進んでいく。

「そろそろだよな、滅菌作戦」

「まるでラクーンシティの再来ね」

「隠蔽によって消滅した街だな」

ラクーンシティ……あの事件により黒瀬はアンブレラと戦い出した。

黒瀬は時々思う。もしも、クリスに射撃大会に誘われずラクーンシティに訪れることがなかったら……。その時の黒瀬はどこか遠くであっている事件と思っていただろう。それにラクーンシティの事件に巻き込まれていなければ、カントウ事件では、黒瀬は何の真実も知らず仲間と共にカントウを脱出していた。いや、そもそも生き残れるかどうかとも怪しい。

無事に脱出出来たとしても、今のようバイオテロやウイルスとは戦っていないだろう。何の真実も知らないのだ。今頃は大学に通い、仲間と幸せな人生を送っていた。もしも、と考えても仕方ないが、後悔といえばカントウを脱出したメンバーをバイオテロの道に進ませてしまったことだ。彼らが強いことは黒瀬は重々承知だが、それでも自分が情けない。彼らをこの道へと進ませてしまったのは何を隠そう黒瀬自身だ。

——あいつらに何かあったら俺の責任だ。

進ませてしまった、と言ってもB. S. A. A. に勧誘した訳じゃない。黒瀬のバイオテロと戦う姿勢を皆に見られたことが不味かったのだ。彼らは黒瀬がバイオテロと戦っている道を知り、幸せな人生を送れる筈だったのに地獄に再び戻ってきてしまった。もしも——もしも彼らが死んでしまうようなことがあつたら——

「リヨウ、聞いてるの?」

目の前にジェシカの顔があり、少々驚いた。

黒瀬たちはいつの間にかエレベーターに乗っていた。

「すまん、聞いてなかった」

「もう! パーカーが地元のバーで全メニユーを奢ってくれるらしいわ」

「本当か、パーカー!?!」

「おいおい、二人分もか? ——いや、男に二言はない。二人分奢ってやろう」

「やったわね!」

「ここは本当にバイオテロ現場か? と疑うほどテンションが違った。」

「日本人と飲むのは初めてだな」

「そうなのか? F B Cには日本人がいないのか?」

F B Cは国連の機関なので、多くの人種が集まっている。

「日本人はいないな。情報がシークレットの幹部なら可能性があるが、そういう噂は聞い

たことがない」

「あれ？ でもFBCの友達の研究員が見たことあると言ってたわ」

「でも日本人は少ないんだよな？」

B・S・A・A.にも黒瀬、小室、平野、高城、毒島、宮本、南、田島と昔から関係のある人物しか日本人がいない。テラセイブでも香月の話によると、日本人は香月と鞠川の二人だけらしい。

カントウ事件で四千万人の被害者がいるわけだから、FBCには日本人が多く所属していると思っていたが、どうやら逆みみたいだ。

屋上にたどり着き、ヘリポートにはヘリが待っていた。

「三人とも急げ！ 飛び立つぞ！」

辺りが暑くなっている。そろそろ滅菌作戦が開始されるだろう。

「テラグリジアが……」

ヘリで飛び立ち、海上へと向かった。

テラグリジアに放たれたレギア・ソリスの高出力太陽エネルギーにより、テラグリジアは光に包まれて消滅していく。

「眩しいな」

これもモルガンを選んだ正しい選択の一つだ。あれ以上の被害を出さないように島ごとの消滅を選んだ。正しい、正しいことは分かっている。これ以上の案もなかった。

(分かっているけど——)

黒瀬はこの事件によって死んでいった者たちに黙祷を捧げた。

45話 雪山

あの事件から一年ほどが経った。

テロ組織「ヴェルトロ」によって行われたテラグリジアを巻き込んだバイオテロは、「テラグリジア・パニック」と名付けられた。今の時期には「テラグリジア・パニック」のニュースが掘り返されたり、事件に巻き込まれて亡くなってしまった多くの被害者を追悼したりと、どこもかしこも大忙しだ。

「テラグリジア・パニック」を起こした「ヴェルトロ」は、事件の少し後にFBCの手によって壊滅させられたらしい。この事件により、世界はバイオテロの重さを実感し、FBCの戦力増強が行われた。バイオテロが起こっても、FBCが即座に駆け付け、事態を終息する。

誰もがそう思っていた。

研究所は慌ただしくなっていた。研究員や警備員があちこちを走り回っている。

『バイオハザードレベル5、職員はただちに所定の場所まで避難してください。繰り返します——』

館内放送が全てを物語っていた。バイオハザードが起こったのだ。

「所長！ 一部電源設備の低下ダウンによって、檻のB・O・W. が複数体脱走しました！ 制御しきれしていないB・O・W. は職員を襲っています」

所長と呼ばれたスーツの男は、少しずれた眼鏡をクイツとあげる。

「B・O・W. をこれ以通さないでください」

「と、言いますと？」

「シャッターを下ろすのですよ」

「ですがそれでは——」

「皆さんが助かるにはそうする他ありません。今すぐ実行してください」

スーツの男は冷静に見えたが、内心ではそんなことはなかった。

（誰がバイオハザードを？ 私の研究所は完璧なはずです）

誰かがへまをして研究所全体にウィルスが行きとおるはずがない。明らかに何者かが意図して仕組んだバイオハザードだ。

（例え研究所を放棄することになって——）

男は嚴重なケースから一本の注射器を取り出した。

(これだけは失えませんが)

得体のしれない液体。男は一年もの研究の結果、あのウイルスの強化型を開発することに成功した。

男はふと、六年前を思い出す。あの事件があつたからこそ、変わった。ウイルスの素晴らしさに目覚めることができた。

「ふふふ、ははは」

男は笑いが込み上げてくることに違和感がなかった。

ウイルスの研究者がウイルスによって殺される。

「私はまだ死にません。あの娘に会うまではね——」

「さっむー！」

黒瀬はあまりの寒さに苦痛の声をあげた。

「仕方ないじゃない。私たちが登っているのは、あのアルプス山脈よ」

隣にいる女性はB・S・A・A.のメンバー、宮本^{みやもと}麗^{れい}。彼女とは六年前に起きたカ

ントウ事件を仲間と共に脱出した仲だ。

だが、宮本と黒瀬はそれほど仲は良くない。別にお互いが嫌っているわけではなく、

ただ話さないというだけだ。もちろん彼女とはカントウ事件の頃から命を助け合ってきた仲だが、その頃もあまり話していなかった。彼女とは話しにくい感じがするのだろう。宮本と日常的な会話ができるのは毒島と小室ぐらいだ。

何故、そんな彼女と、アルプス山脈に武器を装備して登っているかというところ、B・S・A・A.にはある噂が流れ込んできたからだ。

それは、一年前にテラグリアでテロを起こした「ヴェルトロ」の復活だ。

ヴェルトロはFBCによって壊滅させられたらしいが、細かい情報は報道されず、B・S・A・A.も事実確認が出来ていない。テラグリア・パニックを起こしたヴェルトロが復活したとなれば、またテラグリアの二の舞となる場所が現れるかもしれない。そうはさせないために、黒瀬は友人の情報屋にヴェルトロに関する情報を探ってもらった。

時は二日前に遡る。

B・S・A・A.は着実に大きな組織に成長し、新しいメンバーも増えてきていた。

一年前にテラグリアで共闘したパーカー・ルチャーニとジェシカ・シエラワットもFBCからB・S・A・A.へと転職した。他にもFBCから移籍した者もあり、理由

としては、バイオテロを終息させるためにテラグリジアを消滅させたことだろう。他にもFBCには黒い噂が絶えず、それから離れるためかもしれない。

デスクワークをしている最中、黒瀬の携帯電話に電話が掛かってきた。『ソフィア・ラライン』と表示されている。ソフィアとは南米での事件以降何かと付き合いのある友人だ。今日は大方先日頼んだヴェルトロの件だろう。

「もしもし、何かわかったのか?」

『もちろん。当たってるかは確証はないけど』

「と、いうと?」

『FBCのサーバーをハッキングしてヴェルトロの情報を盗もうとしたんだけど、ロツクがものすごく固くて入り込めなかったんだ。仕方ないから地道に捜査したら、FBCが二年前に制圧したアルプス山脈のアンブレラ研究所がここ最近再稼働してるらしいんだ』

「へえ、FBCは何か対応を?」

『ううん。何にも。自分たちの管理下だから知っててもおかしくはないはずだけ』

「そうか。一応調べておくよ」

『でもヴェルトロに関係するかはわからないよ?』

「大丈夫だ。関係しててもしてなくても、アンブレラの研究所が再稼働してることには

代わりないんだからさ」

何者かが放棄された研究所を使ってることは間違いない。

「連絡が早くて助かるよ。ソフィア、B. S. A. A. に入らないか？」

『唐突だね』

「ソフィアの情報屋の腕は認めてるからこそ、その力を犯罪に使ってほしくないんだ。給料は少ないけど、俺たちの元で働いてくれないか？」

ソフィアに金を払えば、たった数日で仕事をこなしてくれる。金さえ払えばいいので、金を持っている犯罪者グループにも利用される危険がある。

『B. S. A. A. に入る理由はないし——B. S. A. A. がFBCよりも大きな組織になったら入ってあげてもいいかも』

「それは……無理かも」

流石に国連の組織にNGO団体が敵うはずがない。

『じゃあ諦めてね。アタシは楽しく犯罪でも何でも金のためならやつちやうよ』
そうして通話は途切れた。

黒瀬は立ち上がって上着を羽織る。

「リョウ、どこか行くのですか？」

B. S. A. A. メンバーのクエント・ケツチャムが黒瀬の行動を見て尋ねる。

「ああ、アルプス山脈に行ってくる。オプライエンに伝えといてくれ」

そんな感じで本部から出た。

小室と共に任務に出ようと思ったのだが、残念ながら別の任務でおらず、知り合いでいたのは宮本だけだったので二人でアルプス山脈を登ることとなった。

「……………」

聴こえてくるのは吹雪の音だけ。二人は終始無言で、雪原に足跡を残しながら進んでいく。

（気まずっ！）

いつもならB・O・W・やテロリストが相手でも仲間と楽しく会話するのだが、こんなに気まずい任務は初めてだ。話そうにも何を話せばいいか。まさか会話の内容を考える日が来るとは思っていなかった。

「いい天気ですね」

「吹雪だけだ」

「……………」

いきなり失敗した。真面目に答えるとは……。次は何を言おうか——

黒瀬は何かに気づいて木刀を抜いた。四方八方からゾワゾワとなめ回すような感覚が伝わってくる。

「なこ？」

いきなりの行動に宮本も驚いた様子だ。

「トリガーから指を離すな。何かいるぞ」

宮本は黒瀬の真剣な表情で察し、銃剣付きM4A1のトリガーに指を当てた。

吹雪の中、黒瀬は確かに感じ取っていた。僅かな獣の唸り声と凄まじい殺気を——

46話 グロブスター

宮本はM4A1のトリガーに指を当てる。

黒瀬は木刀とダガーナイフを抜いて辺りを警戒していた。

(一体何なの?)

宮本は周囲を見渡すが、見えるのは雪の積もった岩場と白い地面。吹雪のせいで視界は決して良くはないが、それでも何か動いたら気づける範囲だ。

でも、黒瀬が言うには間違いない。宮本はそう言い聞かせた。

『グルルル』

獣の声はどこかから聴こえた。幻聴ではない。この吹雪の中、確かに宮本の耳に届いた。

「来るぞー！」

黒瀬がそう叫んだのと同時に、どこに隠れていたのか大量のオオカミが現れた。オオカミは身体に穴が空いていたり、骨が露出しており、明らかに尋常ではないことを示している。

宮本と黒瀬はオオカミの群れに瞬く間に囲まれ、逃げ場を無くす。

オオカミは唸りながら、じわじわと宮本たちとの距離を縮める。宮本は銃を向けるが、敵は四方八方。一匹に銃口を向けても他の十数体相手をしきれない。

「どうするの、黒瀬？」

「これを使う」

黒瀬が腰から取り出したのは、B・O・W・デコイ。投げた先でB・O・W・を誘き寄せ、一定時間で爆発する便利な代物だ。

黒瀬はデコイを投げ棄てるように投げる。目標を変えたオオカミたちがデコイの周りをグルグルと旋回する。

「今のうちだ」

オオカミがデコイに引き寄せられる隙に、宮本と黒瀬はその場を素早く離れた。安全を確保し、黒瀬はしやがんで無線をかける。

「こちら黒瀬だ。複数のB・O・W・を確認した。何かがあるのは間違いない。増援を頼む」

『……ジャ……カス。つう……が聞き取……ん。げん……いち……教え……さい』

ノイズが酷く、声が聞き取れない。

「クエントか!?! 応答してくれ」

だが、流れるのはノイズだけ。吹雪のせいか、通信状況は最悪だった。

「仕方ない、目的地も近いし、進むか」

黒瀬の意見に宮本も賛成だ。戻って凶暴なオオカミを相手にするよりも、進んで研究所に入った方が危険度は少ない。寒さも凌げるだろう。

小さな洞窟を見つける。洞窟の中は松明が仕掛けられており、充分なほど明るかった。さらに進むと、洞窟には不釣り合いな綺麗なエレベーターを見つけた。黒瀬は迷わずボタンを押し、ナイフを構える。

エレベーターが到着し、扉は開かれるが、中には何もいなかった。

「暗いな」

エレベーターの中は非常用電源が入っているかのように薄暗い。

二人はエレベーターに乗って、下まで降りる。ドアが開くと、そこには暗闇が広がっていた。

いや、完全に暗闇というわけではないが、非常電源で緑の淡い蛍光灯の光が少し辺りを照らしているだけだ。

どうするのか、宮本は困惑した表情で黒瀬を見る。

「きゃっ!?!」

黒瀬の顔を見て、宮本はしりもちをついた。

「どうした?」

黒瀬は宮本に手を差し出した。

「あなた、暗いところで自分の顔を見たことある？」

「いや、ないが？」

宮本は黒瀬の顔、詳しく言えば、目に驚いた。黒瀬の目が赤いのは知っていたが、その目がまるでネコ科の動物の目みたいに発光しているのだ。

「ねえ、もしかして明るく見えたりする？」

「ああ、でも本当は暗いんだろ？」

当たり前だが、明るく見えるといつても、本当に明るい場所と暗い場所では見え方が違うらしい。

「ん？ 何だ？」

黒瀬がまたもや何かに気づく。

「何？」

「何か、びちゃびちゃと音が聞こえるんだよ。例えるんなら、水に濡らして絞ってない雑巾を床に落とすような」

「ふーん」

大体想像はついた。でも何故そんな音がするのか。

「どんどん近づいてきてるな」

黒瀬のその言葉で、宮本は胸のライトを付ける。先ほどよりも明るくなつたが、正面には何もいない。だが、黒瀬の言う通り、その音は次第に大きくなっている。

「来るー！」

黒瀬が言った次の瞬間、ダクトから何かが飛び出してきた。

地中海沿岸

「あらわれたな」

四人の足音を聞き、中年の男が振り向いた。

「ボス自らお出迎えとはめずらしいな」

「平野ケータ、只今到着しました！」

パーカーと平野はボスと呼ばれた男に軽く挨拶した。

男の名前はクライヴ・R・オブライエン。NGO団体、対バイオテロ組織B・S・A、A.の代表だ。代表をしていることもあり、頭も切れる。

この場にいるメンバーは全てB・S・A・A.に所属している人物だ。ジル・バレン

タイン、パーカー・ルチアーニ、小室孝、平野コータ。この四人は何度も死線をくぐり抜けてきた優秀な戦士だ。

「君らはここら一帯がFBCに封鎖されていたことは知っているな。だが、この数週間正体不明の漂着物の情報が相次いでいる」

「FBCの隠蔽体質も海から流れ着くものは止められないってことだ」

パーカーが皮肉気味に言った。

パーカー・ルチアーニは、去年までFBCに所属していた。話を聞けば、*「テラグリア・パニック」*の時の救出作戦に参加していたらしい。もちろん小室たちはそんなことは知るよしもなかったが。

「場所が場所だけにウイルス汚染が疑われるのも無理はないわね」

ジルはため息をつく。この地区に住んでいる人たちもそれを怖がっている。一年前に沈んだテラグリアは目と鼻の先。ここからでもビルの残骸が見える。

「しかも*「ヴェルトロ」*が使ったという新型ウイルスの情報も公開されていませんしね」

*「テラグリア・パニック」*が起きて数週間後、FBCによって*「ヴェルトロ」*は壊滅したというニュースがテレビで放送されたが、その詳しい情報やテラグリアで使わ

れたウイルスの情報も報道されなかった。

FBCは設立当時からパーカーの言った通り隠蔽体質のようで、一般人には最低限の情報しか与えない。だが、ようやくB・S・A・Aも現地調査にこぎつけられた。

「早速だが、調査を開始してくれ」

「イエッサー！」

ジルとパーカー、小室と平野で分かれて調査する。

「あれがああのテラグリジアなんだね」

平野は遠くのテラグリジア跡を見つめる。

「変わり果てたな」

小室も平野もテラグリジアに訪れたのは救出作戦の一度きり。あれほど大規模な街は一瞬で崩れ去った。

「早く調査を終わらせよう。黒瀬と麗のことも気になるし」

「ああ、そうだったね」

黒瀬と宮本は雪山の封鎖されたアンブレラ研究所に向かったらしい。危険なことにあつていないか小室は心配する。

二人は調査対象に近づいた。

その調査対象を簡単に説明するなら、白濁した色の大きな肉塊。今にも動き出しそう

だ。

「グロブスターだね」

「グロブスター？」

「グロテスク・ブロブ・モンスター」の略だよ。海岸に漂着する謎の肉塊」
「へえ」

確かに目の前にあるのは謎の肉塊だ。だが、一体何の肉塊かは想像もつかない。

小室はグロブスターに触る。ぶよぶよとした感触で正直触っていて気持ちよくはない。

「うわ、よく触れるなあ。ボクは絶対に無理」

「そうは言ってもこういう職についてるわけなんだから」

小室はグロブスターの下を持って裏返そうとするが、突如グロブスターは震えだした。驚き、小室は手を離す。

「下がれ！」

小室は肩に下げていたショットガン『イサカM37』を構える。

グロブスターは小室たちを狙うように地面を這って近づいてくる。

別の場所から銃声が聞こえてきた。ジルとパーカーも同じようなことになっているのだろう。

『タカシ、コータ、近くの肉塊に気を付けろ。発砲許可を出す』

オブライエンからの無線。平野はそれを聞き、スナイパーライフル『H&K PSG 1』のトリガーに指を乗せ、スコープを覗く。

これほど近いならスコープを覗く必要はないのではないかと小室は思うが、彼なりの拘りがあるのだろう。

「喰らいやがれ！」

先ほどとは別人のように目付きと声色が変わり、ライフルのトリガーを引き絞った。

放たれた弾丸は大きく口を開けたグロブスターに命中する。しかし、倒れない。平野はマガジンが空っぽになるまで撃ち続け、グロブスターはピクリとも動かなくなっていた。

「周囲の確認！」

人格が変わったような平野に従い、他に散らばっているグロブスターに小石を当てる。何度かそれを繰り返すが、動いたのは、最初の一体だけだった。

『四人とも戻ってきてくれ』

小室と平野は急いでオブライエンの元に移動する。既にジルとパーカーは到着していた。

「何か収穫は？」

「肉塊が動く。ウィルス感染体であることは間違いないさそうです」

「ジルとパーカーがこんなものを見つけてくれた」

オプライエンが手に握っているのは、赤い液体が入っている試験管のようなものだった。

「これを本部に持ち帰って調べる。ん、緊急連絡だ」

オプライエンはポケットから通信機を取り出し、通話相手と話し出す。

「ああ、私だ——何だと?! 状況は理解した。だが計画を前倒す必要がある。今すぐだ。ああ、わかった。……では頼む」

そう言つてオプライエンは通信を切った。会話は聞こえてこなかったが、何かヤバい状況になっているのか?

「ジル、パーカー、タカシ、コータ、君たちにはこのまま動いてもらう」

「一体何が?」

「クリスとジェシカ、リヨウとレイとの連絡が途絶えた」

「原因は?」

「不明だ。四人の通信が途絶えた地点の座標を送る」

小室は送られた座標を見る。クリスとジェシカは海上、黒瀬と宮本はアルプス山脈で通信リンクが途切れていた。

「クリスとジェシカはヴェルトロ搜索で北歐の雪山では？　しかもこの位置からすると……」

「船だな。私は本部に戻って搜索の指揮を取る。ジルとパーカーはクリスたち、タカシとコータはリョウたちの搜索に向かってくれ」

「了解」

四人は走り出した。

47話 ウーズ

アルプス山脈 アンブレラ研究所

「なんだ、こいつは？」

宮本と黒瀬の前に落ちてきたのは、全身白濁した色の人の形をした何かだった。目はなく、腕は鉄球のように変形している。

「B・O・Wの類いかしら？」

宮本は銃を「人の形をした何か」に向けるが、やはりというか恐怖心というものはないらしく、黒瀬たちのもとへとぐらぐらと不規則に歩きながら近づいてくる。

「化け物であることは間違いないな」

宮本がどうするの？という目で黒瀬を見る。もちろん黒瀬としてはB・O・Wと
思われる敵は倒しておきたいが、新種を相手にするにはある程度の覚悟が必要だ。

「後ろに下がるぞ」

二人はエレベータ前まで戻る。奴はゾンビのように動きがのろく、走れそうにもない。それに歩く度にぐらぐらとふらついている。

白濁した肌の化け物、しかもアンブレラの研究所で出現した化け物だ。黒瀬としては

アンブレラの研究所で戦うのは二年ぶりだ。全く謎のB・O・W；果たして何が関わっているのか。それを知る必要がある。

黒瀬は懐からダガーナイフを取り出し、奴の足に投擲した。それでも倒れずこちらに向かってくる。だが、傷口から毒ガスなどの有害な物質が噴出されることはなさそうだ。黒瀬は一步踏み出し、化け物との距離を詰める。サバイバルナイフを抜いて化け物の腋を掠めた。

微かに赤い血が飛散する。見た目は完全な化け物だが、こんな奴にも赤い血が通っているようだ。化け物はトゲ付きの腕で殴りかかってくるが、黒瀬はそれを軽くいなして顎にナイフを突き刺した。化け物はゆっくり倒れる。

黒瀬は敵が完全に沈黙したことを確認し、しゃがんで倒した化け物の身体を調べる。

「元が人間なのは間違いないようだな」

「じゃあこの化け物が造られたB・O・W。かそれともイーウィルスもように空気感染したもののか、どっちなの？」

「それはわからないな。でも空気感染の場合は……」

黒瀬は今までウィルスやBOWと戦い続けて七年、こんな化け物を見たことがない。新種と考えるのが妥当だろう。その場合、その新種のウィルスに対する抗体は持っていない可能性がある。

「私たちはここを出れないの?」

「そういうことになるな」

黒瀬たちが感染している可能性は充分にある。そんな人物を外に出すわけにはいかない。

黒瀬は本部との通信を繰り返して行くが、流れてくるのはノイズだけだ。

「本部と連絡が取れないな」

「どうするの、オリジナルイレブンさん?」

宮本は黒瀬を睨む。そうされても仕方ないだろう。宮本をこの状況に陥らせたのは黒瀬本人だ。黒瀬は本気でこの世界からB・O・Wやウイルスを撲滅させたいという思いで戦っている。だが、宮本は違う。宮本がB・S・A・Aに入ったのは小室がいたからだ。小室がB・S・A・Aに入っていないければ宮本も百パーセント入っていない。覚悟の差が違いすぎるのだ。

「ここに残つときたいなら残つともいい。ここなら正面からの敵を倒すだけでいいからな。俺は先に進むよ」

この化け物が現れたのはごく最近だ。床には埃はそれほど積もってない。もしもここで何かの研究をしていてその研究で何かのアクシデントがあったとしたら。この化け物がここで造られたとしたら新種のウイルスのワクチンがどこかにあるかもしれない

い。それにこの研究所はヴェルトロが関わっているかもしれないのだ。

「私も行くわ。一人でいるよりもあなたといた方が安心だろうし」

「そうか……」

黒瀬は一人の方が楽と考えるが、彼女がそういうのなら仕方ない。

「じゃあ早速周辺を調べてみよう」

化け物はダクトなどの小さな隙間からも現れる。十分に注意しなければならぬ。

部屋にはほとんどロックがかかっているが、やっと開く部屋を見つけ二人は中に入る。部屋の中はひどい惨状だ。資料が散らばり人の血と思わしき液体が壁や床に飛び散っている。

二人は散らばっている資料を見るが、専門用語が多く解読ができない。

「黒瀬、何かわからない？」

宮本は、BSAAでもトップを誇るほどの頭脳の持ち主に聞く。

「主にt—A b y s sウイルスとかいうのを研究していたようだな」

黒瀬は手に持っていた資料を置いて、まだ使えるパソコンを開き、すさまじい速さで何かを調べていく。

「さっきの化け物の名前は『ウーズ』、t—A b y s sウイルスの感染者のようだ。その他にも変異体があるらしい」

つまりさっきの化け物はウイルスに感染した人間の成れの果て。ゾンビと同じようなものだ。

「じゃあ何かのアクシデントでそのウイルスが漏れたってこと？」

「ああ、そうなるな」

だが、そのアクシデントとはなんだ？ そこを探らなければならない。

「行先は決まった？」

「ばっちりだ。警備室に行こう」

警備室なら監視カメラの映像もあるはずだ。その映像を見ればバイオハザードが発生した詳しい位置が判明するかもしれない。

「早速行きましょう。同じ場所に留まっていると危険だわ」

黒瀬は短くああと答え、パソコンをシャットダウンした。

二人は警備室に到着し、早速監視カメラの映像を見る。

写し出されたのは三日前の映像。三日前までは白衣を着た研究員たちが何かの研究を行っている。恐らくt-Abyssの研究だろう。だが、それもすぐに終わることになる。警報がなり、研究員たちが慌ただしくなる。警備兵と思われる者たちが避難誘導

をしているが、次々と倒れていく。早送りすると、倒れた研究員や警備兵はウーズと化し、どこかに消えていった。

「どこでウイルスは漏れたんだ？」

研究室の監視カメラを巻き戻しても、アクシデントでウイルスが漏れている映像はない。

「黒瀬、これを見て」

宮本が見ていたのは、別の区域のカメラの映像だ。映し出されていたのは、生き残りと思われる警備兵と研究員。その奥には牢屋があるが、警備兵と研究員が邪魔で中の様子は伺えない。その映像はリアルタイムだ。

「どこだ？」

「えつと……実験体収容所って書いてあるわ」

実験体収容所、何て響きの悪い。黒瀬は何故かその言葉で胸が悪くなってきた。

「行きたいが……そいつらは味方じゃないからな……」

t—Abysというウイルスを造っている奴等だ。黒瀬たちはヴェルトロがこの研究所を使っているかと思い、訪れたが、その可能性は最早ゼロパーセントに近い。ただのテロリストがこれほどまでの人員と研究費をかけられるわけがない。つまり、この施設を利用していたのは別の組織。漠然とウエスカーやエイダが所属している組織を思

い出す。しかし、そいつらが F B C や B. S. A. A. に所在が明らかになっている研究所をわざわざ使うのだろうか。黒瀬は考えた。

一つの可能性として浮かんできたのが、F B C だ。だが、F B C がアンブレラの研究所を使って t—A b y s s の研究を？ いや、バイオテロと戦う人間がそんなことをするメリットは一ミリもない。この先には一体どんな答えが待ち受けているのか。黒瀬は刀の柄を握り締めた。

小室と平野は、アルプス山脈の麓にある町に到着していた。

「うう、寒いな」

平野はブルブルと震え、カイロで頬を暖め出した。

「はは、我慢してくれよ。これからもっと寒くなるんだぞ？」

黒瀬と宮本はこの町を通り、そのまま山に登っていった。もしかしたら雪崩に巻き込まれた可能性もあるが、クリスタちとほぼ同時に連絡が取れなくなるのはいくらなんでもおかしい。二組はヴェルト口の復活の噂を探っていたのだ。危機的状况に陥ってい

るのは間違いない。

「小室、なんだろうあれ」

平野が指を差したのは、警察に立ち入り禁止にされている施設だった。看板には孤児院と書かれてある。その施設の壁には銃弾と思われる穴が複数。銃撃事件があったのだろうか。

「あんたたち、山に登るのかい？」

小室はそんなことを疑問に思っていると二人の前に老婆が近づいてきた。

「ええ。理由は言えないんですけど」

「気を付けた方がいいよ。最近山で行方不明者が相継いでいるんだ。それに化け物を見たって噂もある」

「化け物？」

気になるフレーズが飛び出してきた。平野はそれに食いつく。

「ええ。オオカミみたいな、でも骨が剥き出しになってたり目がなかったり。……襲われたって話もあるわ」

小室の頭に浮かんできたのは、*t-u-w*ウイルス由来のオオカミだ。だが、それが *B*、*O*、*W*、かそれとも空気中の *t-u-w*ウイルスに感染したか。

「ありがとう、お婆ちゃん。気を付けるよ。ところであの施設は？」

平野は立ち入り禁止にされている孤児院を聞いてみた。

「あれは一ヶ月前まで孤児院をやっていたんだよ。みんな可愛い子でさ。でもいきなり武装集団が現れて孤児院の子供たちを拐ったのさ。先生まで殺されちゃつてさ。本当、やるせないよね」

まさかそんな事件があつていたとは。小室は殺された先生に追悼した。

二人は老婆と別れ、山へと向けて歩き出した。山に化け物が出る。十分に用心しなければならぬだろう。

48話 六年前

アルプス山脈 アンブレラ研究所内部

黒瀬は警備室のパソコンを使い、ドアやシャッターのロックを解除した。

「これで進めなかった場所も進めるはずだ」

確かにそれは良いことだが、今まで閉じ込められていた化け物が移動可能になってしまふ。いつでも戦えるように準備をしておかなくてはならない。

「ん？」

他の監視カメラを見てみると、ふと目に写ったのは、列車だった。それがどこにあるのかはわからないが、この列車は山の麓から荷物を運ぶためのものだろう。

黒瀬は警備室から出ようと扉を開けると、いきなりウーズが襲い掛かってきた。黒瀬はナイフを抜こうとするが、それよりも早くウーズが黒瀬の肩を掴んで身動きを取らせまいとする。ウーズは口から発達したような舌を出す。

資料で見たが、ウーズはt—A b y s sウイルスの影響で異常なまでに水分を欲するようになるらしい。つまり、ウーズから見れば黒瀬たちの血は貴重な食料になる。ゾンジの強化版のようなものだ。

ウーズは舌を黒瀬の首筋へと近づけるが、黒瀬も必死で抵抗する。やはりというか、ゾンビと同じで力が強く、簡単には引き剥がせない。

「黒瀬！」

黒瀬の顔に赤色の血がかかる。ウーズの腕に宮本のアサルトライフルの銃剣が刺さっていた。ウーズの力が弱まるのを感じ、黒瀬はウーズを蹴り飛ばして頭にナイフを刺した。

「ありがとな、宮本」

「別にいいわよ」

会話が一瞬で途絶えた。もしかしたら嫌われているのかもしれないと、黒瀬は心配してしまう。

(これでも生死を共にしたんだけどなあ……)

事の発端は六年前、まだ黒瀬たちが高校生の時だった。

六年前

1999年の春、あれを一言で言い表すのなら、『地獄』というのがもつとも相応しいだろう。

黒瀬はその頃、床主市にある私立藤美学園高等学校に通っていた。彼はラクーン事件の被害者であり、数少ない生存者の一人だった。

皆の日常を変えたのは、授業中に流れた放送だった。

校内で暴力事件が発生しているという、避難訓練で何度も聞いた台詞だった。しかし、教師がいきなり聞くに耐えない悲痛な声で叫びだし、放送は途切れた。その放送で全校はパニックになった。集団ヒステリー状態になり、一人を除いて叫びながら教室を出ていった。

「何故そうなる!?!」

取り残された黒瀬は心の声を実際に吐き出した。

黒瀬は同じ高校のマンションで隣に住んでいた香月 彩と合流し、学園を脱出しようとした。そこからは地獄だった。ゾンビと化した生徒や教師を相手にしながら、小室たちと合流。部活遠征用のマイクロバスで学園を脱出することとなった。

バスに乗り込み、出発しようとしたが、一人の教師と何人かの生徒が現れた。教師の名前は紫藤 浩一。黒瀬とは接点がなかった。

黒瀬と小室は当然、その一行を助けようとするが、

「ダメよー！」

宮本に止められた。

「あんな奴、死んじやえばいいのよー！」

宮本の顔は、これまででない狂気と憎悪に満ち溢れ、その視線の先には紫藤がいた。紫藤と宮本の関係が明らかになるのは随分後の事だった。

結局、紫藤一行をマイクロバスに入れ、バスは出発した。

学園を離れて、紫藤は正体を現した。リーダーを決めようという話になったのだ。紫藤一行の挙手により紫藤はリーダーに、それに耐えられなかった宮本は一人でバスを降りると言った。小室はもちろん止めたが、宮本は従うつもりはなく、進もうとした時、暴走したバスが突っ込んでその二人と黒瀬たちは落ち合う約束をして別れた。

その後、黒瀬が寝ている間に話が進み、黒瀬たちは紫藤一行を残してバスを降りるこ
とになった。

彼らとの合流地点に行く途中、ゾンビに囲まれて絶対絶命の危機に陥っていたが、合流した小室と宮本の活躍で事態は落ち着き、鞠川の提案で鞠川の友人、警察官の南リカが使っているというアパートに泊まることとなった。

南リカという女性は家に大量の銃と弾薬を所持していた。銃は銃声でゾンビが近づいてくる危険性があるが、近づかず倒せる安心もあった。

その日の深夜、小室は望遠鏡で窮地に陥られている少女を見つけ、救いに行った。その事に黒瀬が嬉しく思った。この状況でも他人を救おうと思う小室はやはり主人公だ。

小室の活躍で希里アリスを救出し、南リカが所持していたハンヴィーでアパートを後にした。これからの目的は小室と宮本、高城の親探し。鞠川、平野、毒島の親の心配は、黒瀬の親は中学生の頃に事故死し、香月の母は海外に行っている、三人と同様、心配はいらなかった。

希里ありすは、黒瀬にとって妹のような存在になった。

中学生の頃、黒瀬は両親と母のお腹にいた妹を失っている。それが関係しているのかもしれないが、黒瀬はありすを可愛がった。

なんやかんやあり、一行は高城家に到着。そこには高城の親やその配下、避難民が大勢いた。

そこでは短い間だが、楽しく暮らせた。だが、状況が変わった。紫藤一行を乗せたバスが高城家に避難してきたのだ。

紫藤の父親は地元の代議士らしく、高城の父親、高城荘一郎と関係もあり、避難してきたという。

だが、紫藤が来たことによって、宮本の怒りが爆発した。

宮本の父親は警察官だった。彼は紫藤の父親が使っていた金の出所を捜査していた

が、紫藤の父親に目をつけられ、警告として紫藤に頼んで宮本を留年させた。

教師のやることではない。その話を聞いた黒瀬も頭が怒りで爆発しそうになった。

結局、紫藤一行は高城の父親によって家を追い出された。

「懐かしいな……」

決して良い記憶ではないが、あの事件があったからこそバイオテロに立ち向かう仲間がいる。

あれから六年、もう六年も経った。黒瀬はその六年を全てアンブレラやウイルス、バイオテロに使った。後悔はしていない。

「どうしたのよ、黒瀬」

宮本から変な目で見られる。しまった、口に出たか、と黒瀬は口をつむぐ。

「昔のことを思い出してたんだ。両親は元気にしてるか？」

「ええ。私はあなたと違って定期的に日本の帰ってるわ」

「そ、そう……」

はつきり言われると胸が痛い。B. S. A. A. に入ってから二年、黒瀬は二、三回しか

日本に帰っていない。

「ありすちゃんが会いたいわって言うていたわよ？」

「うぐぐ……」

黒瀬の胸が締め付けられる。この二年、黒瀬は日本を忘れた日は一度もない。だが、こんな世界だからこそ帰れないわけがあった。もし、自分が日本に戻っている間にパイオテロが起きたらどうしよう。自分がいれば死なずにすんだ人がいるかもしれない。そんな悪い心配に悩ませられる。

「何のために私たちがいると思っっているのよ……」

宮本が言うのもごもつともだ。仲間を信じなくて仲間と呼べるのだろうか。だが、仲間を信じたことによつて後悔が生まれる可能性もある。

——俺は弱い人間だ。

誰も喪いたくない。しかし、こんな仕事に就いていけば、もちろん人は死んでいくだろう。もしも仲間が、小室たちが死んだとすれば、自分はどうなるのだろうか。後悔で埋もれ、自分を呪うかもしれない。

「宮本、俺のこと、どう思う？」

黒瀬は単刀直入に宮本に聞いた。

「どうって……熱血バカ？」

「ええ……」

それは前にも高城に言われた事があった。頭ではなく、性格に問題があるようだ。人一倍正義感が強く、他人を庇える。だが、それは自己犠牲とも言える。

「でも、黒瀬の性格で皆救われてると思う」

「え？」

「黒瀬は気づいていないと思うけど、皆を笑顔にする能力があるのよ」

「そう……なのか……」

黒瀬はその言葉で身体中が暖まった気がした。仲間と言われる言葉がこんなに良いものだとは知らなかった。

「でも無理は駄目よ。生きて脱出できたら日本に帰りなさい。私の両親だって黒瀬を心配してるのよ？」

「ああ。必ず生きてこの事件の真相を掴んで脱出しよう」

しかし、よく考えると、日本で会わなければいけない人が多すぎる。

「えっと、宮本の両親、小室の両親、高城の両親、平野の親は外国にいるだろうし、毒島先輩は難しいな。後は高城の両親の家にいるありすと、香月の母さんだな」

連休を取ろう。それにありすと旅行にも行こう。黒瀬は頭の中で既に想像していた。

「彩ちゃんのお母さん？　そういえば会ったことないかも」

「そうなのか？　でもカントウを脱出した後、巡ヶ丘市にある高城の別荘で皆で暮らし
てたじゃないか」

「確かに彩ちゃんには居たけど、お母さんは住んでいなかったわよ？　別の所で暮らして
いたんじゃない？」

「そうだっけ？」

黒瀬は自分の記憶を探る。

（あれ？）

　　そういえばいつから香月の母親に会っていないだろうか。顔ははつきり思い出せる
のだが、ここ何年間、香月の母親に関する記憶がない気がする。黒瀬の記憶に矛盾が発
生していた。

「ま、いつか」

アルプス山脈　雪原

「うわあああ！」

イを所持していなかった。

「平野、走るぞ！ あの洞窟まで！」

小室の指差した方向には、ポツカリと穴の空いた洞窟があった。あそこならば、四方八方から囲まれることなく、正面からで対応出来る。

小室と平野は進行方向にいる邪魔な化け物を走りながら撃つて洞窟まで走る。雪に脚を取られるが、死に物狂いで洞窟まで到着した。

だが、安心して居る場合ではない。小室は直ぐ様、洞窟の出口に銃口を向けるが、
「なんだ？」

化け物は唸るだけで、洞窟には決して入ろうとしなかった。

「ここには入ってこれないわけがあるのかな？」

「さあな。でも外に出たら襲われるし……」

化け物が本当に洞窟に入ってこれないとしたら、今ここで洞窟の入り口にいる化け物を倒せるが――

「流石に止めておくか」

撃つ瞬間、襲い掛かってくる可能性がある。その可能性を考慮して、小室は撃つ選択肢を止めた。

「出れない以上、進むしかない」

暗い洞窟だが、生き物がいる気配はない。だが、油断は禁物だ。

平野がライフル弾を取り出して、暗闇に投げた。聞こえてくるのは、ライフル弾が地面を跳ねる音と、それにこだまする音だけ。

小室と平野は胸のライトを付け、警戒しながら進む。見えてきたのは、整備されてまだ新しいエレベーターだった。

「平野、アンブレラの研究所の入り口はまだ先だったよな？」

「そうだけど……アンブレラの研究所は雪山の中にあるんだ。入り口が一つとは限らないよ」

戻れはしない。小室と平野は進むしかなかった。

49話 子供たち

アルプス山脈 アンブレラ研究所通路

薄暗い通路で、何十回とオレンジ色の光と銃声が轟いていた。

「何て数なの!？」

通路の奥からは、様々な種類のウーズが黒瀬たちの向かって進み出していた。

「この先が実験体収容所だからな。生存者がいるってわかるんだろ」

ゾンビもそうだが、匂いや微かな音に反応しているのかもしれない。

暗闇の向こうから骨のようなものが、黒瀬の顔めがけて飛んできた。黒瀬はそれを首を傾けて回避する。

トライコーン。三本の角に三角の頭のウーズだ。奴は骨を射出して攻撃してくる。

「化け物の癖に遠距離攻撃とは!」

黒瀬はダガーナイフを二本出してトライコーンの頭に投擲して倒した。

宮本も頑張っているようで、ナイフの黒瀬とアサルトライフルを使う宮本では全くと言っていないほど、殲滅スピードが違った。

「流石は宮本サン! この調子で全部倒してくれ」

「こつちも弾は有限なの！」

宮本は正面しか集中しておらず、背後から近づくとウーズに気づいていない。

「危ない！」

黒瀬は腰の刀を抜刀し、宮本に近づくとウーズを斬りつけた。ウーズの胸から赤い血飛沫が舞う。

「ありがとう！」

「油断は禁物だ」

黒瀬は、ダクトを潜って現れたウーズにまた斬りかかった。奴等は身体が軟体動物のように軟らかく、狭い隙間などは簡単には通り抜けられる。黒瀬は近づいてくるウーズの首を次々と撥ね飛ばした。これほど軟らかいのだ。木刀などの打撃は非効率だろう。

「前が空いたわ、突破できる！」

正面の敵は残り数体となっていた。床には宮本が倒したウーズやその変異種の死体が転がっている。

「走るぞー！」

黒瀬は後ろからの追撃を振り切るために足下に手榴弾を落とす。途中のウーズを無視して廊下を一気に駆け抜け、実験体収容所があるはずの扉を開ける。

扉を閉めると同時に廊下から爆発音が聞こえてきた。

奴等は扉の開閉は出来ない。だが、ダクトからの侵入の危険性がある。十分に用心しなければならぬ。

「黒瀬……見て」

宮本の声が震えていた。何だろう。黒瀬は振り返ると、そこには生き残りであつたであろう研究員や警備員が血だらけで床に突つ伏していた。

黒瀬は研究員に近づき、脈を測る。残念ながら死んでいるようだ。研究員の首から指を離すと、指がネバネバしていた。ウーズのものだ。だが、そのウーズはどこに？

彼らにとって人間の血は貴重な食料であるはず。その食料を無視してどこに向かったというのか。近くからガシャンガシャンと鉄を叩くような音が聞こえてきた。そして、微かな震え声。

黒瀬は宮本にハンドサインを出す。宮本は頷いて銃を構えた。足音を消して進むと、予想通りウーズは牢屋の前に群がっていた。流石のウーズでも牢屋の鉄格子の間隙は潜れないらしく、鉄格子の叩くだけだった。

俺が殺る。黒瀬はハンドサインを出して抜刀した。敵は通常種の五体。これだけなら数秒で終わる。

黒瀬は敵に向かつて走る。ほぼ無音だった。ナイフを手前の敵の頭に投擲して倒す。気づかれる前に二体の首を跳ねた。黒瀬の存在に気づいた一体がすかさず掴みかかる

うとするが、しゃがんでカウンターのタックルを喰らわせ、刀を頭に突き刺した。刀を手放し、残り一体の顔面を力任せで殴る。数メートルすつ飛んで、壁にぶつかって沈黙した。

「あんな化け物を一撃で倒すなんて……」

「俺もびつくりだけど。でも手がネバネバするから使いたくないな。それよりもだ……」

黒瀬は牢屋の中を見た。十代手前から十代前半の子供が五人、牢屋の奥で身を寄せあつて震えていた。

「もう安心して、助けに来たわ」

宮本は子供たちに語りかけるが、信じていないのか、怯えているのか何も答えない。

「黒瀬、この鉄格子を斬っちゃって」

「いや、漫画じゃあるまいし……」

そこら辺の死体が鍵を持っているかもしれないが、時間が掛かってしまう。黒瀬は鉄格子の上下を刀で斬った。斬ったと言っても、数ミリ削れた程度だ。刀はそれだけでポロポロになり、使えなくなつた。黒瀬は刀を放り捨てた。

鉄格子を数ミリ削れたが、それで十分だった。回転して勢いをつけ、鉄格子を蹴り破る。

「あなたの力には毎回驚かされるわ」

宮本はアサルトライフルを黒瀬に渡した。これから男は不要らしい。宮本に任せれば大丈夫そうだ。

宮本が子供たちと話している間、黒瀬は実験体収容所の中を探索した。生き残り……までとはいかないが、何か情報が掴めるかもしれないからだ。

黒瀬はまず、警備兵を見て回った。武装を見て、どここの所属か判明するかもしれないなかったからだ。

警備兵の装備は全て、FBCの物だった。まさか、とは思っていたが、こんなところで判明するとは思ってもいなかった。

「うう……」

男の掠れた声が聞こえてきた。まだ生きている人間がいる。黒瀬はその方向に走ると、壁に寄り掛かっている警備兵がいた。

「あいつは……?」

日本人のようだった。金髪の髪を跳ね上げている。ヤンキーのような印象だった。

それ以前に、黒瀬は彼をどこかで見た記憶がある。黒瀬はその男に近づいた。

「俺以外にも……生き残りがいたとはな……」

男は腹部や口からも血を流しており、顔も真っ青だった。応急処置をしても長くは持たないだろう。

「FBCの部隊の一人だな。生き残りはお前だけのようだ」

男は黒瀬の声を聞いてはつととなった。恐る恐る黒瀬の顔を覗く。

「け、何の廻り合いだ……」

やはりか。どうやら黒瀬と男の間には接点があるようだが、黒瀬は、男の印象が薄かったのかよく覚えていない。

「お前のことだから……覚えてないだろうな。やっぱり気に入らねえ」

「おまえ、あのバスに乗ってたな」

確か角田という苗字のはずだ。六年前、教師だった紫藤とバスに乗り込み、気に入らないという理由で、黒瀬と小室に突っかかっていた。

「やつと思いい出したか……」

「ああ。生きてたんだな」

あいつらはトウキョウの上空に核が発射される直前までバスに乗っていたので、バスのブレーキが効かなくなつて壁などの衝突で死んだかと思っていた。正確に言えば今

思っただが。黒瀬は、紫藤やその仲間の安否などどうでも良すぎて今まで考えていなかった。

「それにしてもFBCになつてるとはな。紫藤は死んだか？」

「何を言っている。紫藤様は死んでなどいない。安全な場所に避難しているはずだ」

「紫藤様……？」

黒瀬は背筋が凍るほどの寒気を感じた。紫藤に相当毒づけされているようだ。

「いや、待て。紫藤が安全な場所に避難しているだど？」

何故安全な場所に避難する必要があるんだ？ 黒瀬は疑問を抱いたが、この状況ですぐに理解した。

「紫藤様はこの研究所の管理者だ……お前らとは違って世界のために活躍した」

「活躍……だど？ この研究所でt—A b y s sの研究や非人道的実験をしていたのはわかっているんだ！」

「非人道的実験？ あいつらは世界のために死んでいったんだ……あいつらのおかげで実験が捗った」

角田は血を吐き出した。どこか会話が噛み合わない。それほどこの男の頭は狂っているのだろう。

「とりあえず情報提供ありがとうございます。苦しみながら死んでくれ」

奴に掛ける義理などなかった。FBCはバイオテロやウィルスの脅威から一般人を守る役割のはずだ。そんな組織が人を殺す兵器の開発を進めていた。最低のクズ野郎だ。

「やっぱりお前は気に入らねえ」

そういえば六年前にもそんなことを言っていた。

「どういふことだよ」

「お前は俺たち不良にとつて目の敵だった。俺らはバカだった。人から舐められないためにああしたんだ。でもお前は違う。学年一位の成績の癖に授業をサボって不良を振りをしてやがった。頭が悪い不良と良い不良、そんなんで比べられるのが嫌だった」

「そうか」

黒瀬には彼の気持ちなどこれっぽっちもわからなかった。不良をしていたと云っても、黒瀬と角田のスタイルは違う。

『黒瀬、こっちは大丈夫よ』

宮本から通信が入る。

「了解。そちらへ向かう」

大丈夫、ということとは子供たちに自分等は味方だ、と理解させたようだ。

角田を見ると、既に息絶えていた。

牢屋に容れられていたのは、男三人女二人、いずれも年端もいかない少年少女。着せられてるのはブカブカの白いＴ―シャツ。怪我はないようだった。

「それで、何て？」

黒瀬は宮本に預かっていた銃を渡してからから子供たちの現状況になった経緯を聞く。

話を聞くと、山の麓にある町の孤児院から連れ去られたようだった。安心したのは、彼らはまだ何の実験もされていないことだった。この牢屋の閉じ込められてから、他の牢屋から連れ出される老若男女をただ見つめるだけだったという。

「お前ら、よく頑張ったな」

黒瀬は五人の子供の頭を撫でた。子供たちは一体どういう心境でこの場にいたのだろうか。きっと彼らにしかわからない。

「これからどうするの？」

「そうだな……」

守る人数が五人になったことで、化け物との戦いはより慎重にしなければならない。

彼らを死なせるわけにはいかないのだ。

「……司令室」

子供の一人が口を開いた。彼女は十代前半だろうか。華奢なからだつきで、髪は水色のショート。クールといえはいいのだろうか。どこか冷めている感じがあった。

「司令室がどうしたの？」

宮本が優しい口調で聞く。

「司令室に、ここのトップがいるんだって……」

「それなら私も聞いたよ」

「僕も！」

司令室にここのトップ……。角田の話を信じるのなら、この研究所のトップは紫藤になる。

「ありがとう。君の名前は？」

黒瀬も宮本の真似をして優しく聞く。

「セリア・ボランシャル」

「そうか。良い名前だな」

黒瀬は再びセリアの頭を撫でた。

50話 紫藤

「俺が先に行こう」

子供たちを危険に晒すわけにはいかない。黒瀬が先に進んで安全を確保し、宮本と子供たちを進ませる方針だ。

「気をつけてね、黒瀬」

「ああ、宮本もな」

黒瀬は扉を開け、先へと進む。やはり一人の方が誰の心配も要らずに軽々と進める。道中にもウーズが十数体いたが、背後から倒していき、簡単に司令室の扉の前に到着した。

「よっ」

角田やセリアが言うには、ここに紫藤がいるらしい。彼がまだ生きているのなら、何故ウイルスに手を染めたのか知る必要がある。

黒瀬は脅しようにハンドガンをホルスターから抜く。扉にそつと手を当て、一気に押して司令室に入り込んだ。周りの確認をする。司令室の一番奥にある椅子に誰かが座っていた。

「そこから動くな」

黒瀬がそう言うのと、人影は素直に手を上げた。言葉が通じるのなら化け物ではなく人だ。

「宮本、大丈夫だ、来てくれ。それと無線は繋げっぱなしにしといてくれ。久しい奴の聲が聴けるぞ」

『……？ 了解』

黒瀬は短い階段を上がり、その人物の隣に立った。

「久しぶりだな、紫藤……」

紫藤浩一、奴の姿は六年前とほとんど同じで、スーツに眼鏡の優男だった。あくまで外見の話だ。彼の本性は六年前によく味わった。

「いけませんねえ、黒瀬君。紫藤『先生』と呼びましょう」

紫藤は手を下ろして立ち上がった。その顔には不気味な笑みが広がっていた。

「この期に及んで教師面すんのか？」

「私はあなたの授業を担当したことはありませんが、元とはいえ教師は教師ですよ」

「そうかよ、紫藤『先生』？」

宮本は黙っているが、彼が生きていることを知って内心どう思っているのだろうか。怒りだろうか、それとも呆れだろうか。

「黒瀬君、君の活躍は知っています。アンブレラを潰したのは実質あなたたちですから」
「そう言われると有り難いね」

「私は六年前の事件で、目覚めたのですよ」

紫藤は目を瞑った。昔を思い出しているのだろうか。

「自衛隊によつて助けられた私は、内心がっかりしていました。これで元の日常が戻るのか……と。ですが、私はウイルスというものに興味を持ちました。人間が造ったウイルスが人間を生ける屍に変える。なんと素晴らしい」

彼も黒瀬たちと同じでバイオテロやウイルスによつて何年も囚われている。

「残念ですが、私と黒瀬君の道は違いました。黒瀬君はウイルスと戦う道を選びましたが、私はウイルスを造る側になりました。その頃はまだアンブレラ社も秘密裏に活動していましたからね。ですが、あなたたちの活躍によつて私は第二の職場を失った。いえ、これは幸運ともいえるでしょう。私の頭脳をFBCに買ってもらったんですよ」

紫藤はパソコンにUSBを差し込んで、パソコンを操作する。

「動くなー」

黒瀬は銃を向けるが、紫藤は微動だにしない。

「知っていますよ、黒瀬君。君は銃を生命体に撃てない。アンブレラに所属していた頃、君のデータを盗んでおきました。実に君は面白い。R計画、これが何を指すのか……」

「おい、さっさと話を進めろ」

「おつとお、そうでしたね。FBCのモルガン総司令は、ある計画を進めていました。バイオテロを脅威を世界に知ってもらうのです。全ては上手くいっていました。t—A b y s s やハンターをヴェルトロに渡し、テラグリジアでバイオテロを起こさせた」

「やはりあれはFBCが関与してたのか……」

テラグリジア・パニックでのあのハンターの量。明らかに尋常ではなかった。ハンターが安価で手に入れられるとはいえ、百はゆうに越えていた。

「モルガン総司令は善の想いで、バイオテロの脅威、恐怖を世界に伝えたのですよ」

確かにあの事件以降、FBCには多くの予算が回り、一般人からの感謝の声が多くなった。

「だが、その事件で何人死んだと思ってる！」

あの時、戦っていたFBCのメンバーもそうだ。FBCによる自作自演で何も知らずに戦い、死んでいった。それに巻き込まれた何万の一般人も住む家を失い、愛する人も喪った。

「あの犠牲があったからこそ、今多くの人が救えています。一年前ならそうはいきませんでした」

「小の虫を殺して大の虫を助ける、そんなことわざがあったな」

「ええ。テラグリジアの皆さんには非常に感謝しています。彼らがいたからこそこの今です」

黒瀬はその言葉を完全には否定できなかった。確かにあの事件で世界は世界はバイオテロの脅威を知った。そのお陰か、FBCやB・S・A・Aのバイオテロへの介入はスムーズに行えた。あの事件がなければそう上手くはいかなかった。

「理解は出来る。でも賛同は出来ない」

そんなことをすれば、もう人間ではない。ただの怪物だ。

「黒瀬君ならそう言うと思っていました。君は頭が良いですからね。ただ否定するだけでは、それこそ『偽善』です」

「でも、あんたらが善くてわけじゃない。そもそも善がこの世界にあるのか知らんが」

「ほう……？ 黒瀬君がしているのは善ではないと？」

「そうだな……『偽善』かもな……」

「それは違うわ！」

いつの間にか、宮本と子供たちが司令室の中に入ってきていた。

「おやおやあ？ 宮本さん、お久しぶりですねえ、私はずっとあなたに会いたかったんですよ」

宮本はズンズンと紫藤に近づき、銃床で紫藤の腹を殴り付けた。紫藤は痛みで床に倒

れる。

「宮本……」

「パアン！ 宮本は振り向き、黒瀬の頬を叩いた。よろめくが、体勢を立て直す。」

「黒瀬は今まで自分が行ってきたことに自信を持ってないの!? あなたは自分が死ぬかもしれないのに、誰かの命を救うために自分の身を投げ出してきた！」

心が傷んだ。宮本の言葉が突き刺さる。

「偽善なら自分の命を投げ出せるの!? 私には到底出来ないわ、死にたくないもの！人の身代わりになんてそう簡単になれっこない」

ああ、そうか。黒瀬の目には涙が潤った。宮本は自分のために本気で怒ってくれている。

「ありがとう、宮本」

偽善か善かなんて関係ない。自分が思うように戦う。それだけだ。

「宮本さん、酷いですね……再会を喜びべきではありませんか？」

紫藤は腹を押さえながら立ち上がった。

「誰があなたと会って喜ばないといけないの？ こんなゴミクス当然の奴と」

「私は宮本さんに会えて喜んでいきますよ？ 六年前、あなたは私にこう言いました。『殺す価値もない』と。それを私は許せなかった。くやしかったですよ。この私を殺す価値

値がない？ あの頃の宮本さんにはそう見えたかもしれませんが、今の私はどうですか？ 殺す価値があるでしょうか？ もしもここでバイオハザードが起こっていないなかったら、そこにいる子供たちはt—Abyssの実験で死んでいたでしょう」

宮本は紫藤の顔を殴る。

「気持ち悪い。いつまでもあんたを恨んでるほど私も暇じゃないのよ」

「どうやら宮本の心配はいらないようだ。黒瀬は先ほど紫藤が操作していたパソコンを調べる。USBメモリに今までの実験データをコピーしていたようだ。」

「これがあればFBCの悪事をしらしめることが出来る」

「黒瀬君、本気ですか？ この世界にFBCがいなくなれば、バイオテロから人々を守るものはいなくなるのですよ？」

「ヴェルトロを使ってバイオテロを起こすような組織に世界を守られたくはねえよ。それに大丈夫だ。うちのトップは非常に優秀でな。FBCの代わりになればいい」

黒瀬はUSBメモリを抜いてケースに容れた。

パソコンの隣にアタッシュケースがある。中を確認すると、十本の注射器が入っていた。その内の一本からは禍々しい感じが伝わる。

「おい、これはなんだ？」

「それはt—Abyssのワクチンと強化型t—Abyssですよ」

「なるほど」

黒瀬はワクチンを取り出して自分の腕に刺した。何ともない。本物かどうかはわからないが、身体に異常はないようだ。

「動くなよ、紫藤。宮本、子供たちにもワクチンを打ってくれ」
「わかったわ」

宮本はまず自分の腕に刺して異常がないことを確かめ、子供たちにも指し始めた。

『いつの間にか賑やかになっていいるな』

突然司令室の大型の画面がついた。その映像にはモルガンが映っていた。

「モルガン総司令！」

「黒幕の登場か？」

『クロセ君、こうやって話すのは初めてだな』

「アンタとは話したくなかったけど」

『君がそこから脱出できたとしても、君は逮捕されるだろうな。もうじきB. S. A.

A. は潰れる』

「何？」

『B. S. A. A. は一年前のテラグリジア・パニックを起こしたヴェルトロにウィルスやB. O. W. を売り渡した』

ただのデマ。だが、FBCなら簡単に出来るだろう。

『君はその研究所でバイオハザードを起こした犯人として逮捕される。証拠がなくとも、証拠を作ればいい』

「こつちにはUSBメモリがあるんですけど」

『そんなものはなんとでもなる。データを書き換えてB・S・A・Aのものにもな』

「そりゃ怖い。まだ二十一なのに逮捕されるのか？」

『終身刑、いや死刑は免れないだろう』

嘘で死刑になるなんて残酷すぎる。

「そんなことになったら、俺はアンタを殺すね。てか、それを世界中が信じたとしても、アメリカのお偉いさんは信じないと思うけど」

『グラハム大統領にベンフォード高官のことだな。だがそれがどうした。君が、B・S・A・Aが犯罪者集団と知れ渡れば、君の生きる場所はなくなる。それがいやならこゝで死んでもらっても構わない』

ウーズがダクトを通って司令室に入り込む。数が多い。

「どうするの、黒瀬？」

「ワクチンを打ったんならもう大丈夫だ。脱出しよう。死んだら身の潔白を証明することも出来ないからな」

黒瀬は余りの二本のワクチンをポーチにいれ、近づいてくるウーズを蹴り飛ばす。

「モルガン、言っとくが俺たちは諦めないからな」

『私はそこで死んどく方をお薦めしよう』

「断ります」

黒瀬はテレビの出力装置を撃って、映像を停止させた。

「バアン！」と黒瀬たちが入ってきた反対側の扉から二人の男が入ってきた。

「小室に平野!?!」

何故ここに、と言う前にまずは目の前の敵を排除しなければならない。

51話 成長

「う、うわああ！ 助けて！」

紫藤がウーズに捕らえられていた。

「くそ、めんどくさいな」

奴が屑でも救える命なら別だ。黒瀬はナイフを投げて紫藤をウーズから離す。

「ちよつと、小室。意味がわからないんだけど!? 何で紫藤がいるのさ！」

「二人とも話は後だ。子供たちを連れてここを脱出する。二人はこれを！」

黒瀬は余っていたt—A b y s sのワクチンを二人に渡した。

「ここから逃がしませんよ」

全員が紫藤に注目した。彼は助かりたくないのだろうか。

「君たちはここで死ぬのです」

紫藤が何かを押した。その直後、赤い蛍光灯が点滅し、スピーカーから放送が流れる。

『残り十分でこの施設は爆発します。職員は直ちに避難してください——』

紫藤が押したのは、この研究所の自爆スイッチだったようだ。

「クソ！ 何でアンブレラの研究所には自爆スイッチが取り付けられてんだ！」

そう言っても仕方がない。黒瀬は正面のウーズにナイフを突き刺して子供たちを前に進ませる。

「私は死にません」

紫藤はそう言つて、首に何かを刺した。紫藤が言つていた強化型 t—A b y s s だ。

「う、うおおお！ がああ！」

紫藤は苦しみ出して床をのたうち回る。

「奴はほつとけ。脱出するぞ！」

黒瀬たちは司令室を出て、通路を走る。だが、子供たちの体力が持たない。

「おりゃああー！」

黒瀬は子供たちを脇に二人ずつ、背中に一人おんぶさせて走る。

「なんとというか、凄い光景だな……」

「うるさいー！」

確か、警備室で見た列車はこの近くにあつたはずだ。

何とかたどり着いて全員列車に乗せる。列車は真新しくまだ使えそうだった。

「俺が運転する」

黒瀬は列車の運転席に座つた。前にマニュアルを見た程度だが、何とか運転できそうだった。

「お兄ちゃんたち！ 何かいる！」

子供の一人が叫んだ。小室は外に出て辺りを見回すが何もいない。

「何だ？」

何もいないが、微かに何か動く音がした。

「右！」

子供が叫び、小室は咄嗟にしゃがんだ。髪を何かがかする。右を見ると僅かだが、空間が歪んでいるように見えた。

「小室！ どうやら透明の敵がいる！」

平野は列車の上に立ち、小室の右側を撃った。何か血を噴いて倒れる。それはハンターだった。

「透明のハンターか!？」

小室は目を凝らして辺りをよく見た。空間が歪んでいる部分がある。そこにショツトガンを放った。ハンターが吹き飛ぶ。厄介だ。ただでさえハンターは強いのに、それが透明と来た。

「黒瀬、まだいけないのか!？」

「あとちよつとだ！」

爆発まであと五分を切っていた。早くしなければ爆発に巻き込まれてしまう。

「孝、中に入って！」

宮本が手榴弾を投げた。小室は急いで列車の中に入る。

爆発し、透明だったハンターが倒れていった。

「もういけるぞ！」

列車が震え出した。爆発までのあと四分。

「あれは……?！」

小室が見たものは、タイラントのように巨体な化け物だった。顔は縦に割れてそこからは大きな眼を覗かせ、手は水掻き、背中には背鰭のようなものがついていた。

「まさか、紫藤か……?！」

まだ完全に変異を遂げていないらしく、どこか紫藤の面影があった。

「掴まれ！」

列車は急に動き出した。小室は椅子に掴まる。

「小室、さっきの見た!?!」

平野が列車内に避難する。

「ああ。多分紫藤だろうな」

ズシン！ と重たい音が上で響いた。

「まさか、上に乗り込んできたのか!？」

「俺が行く!」

黒瀬は列車を自動操縦にし、ガラスを割って列車上部へと出た。

『黒瀬クウン……?』

最早それは人の姿ではなかった。完全な化け物。これがあの紫藤だということのか。

黒瀬は木刀を抜いた。刀を二本持ってきておけばと思った。

足場は揺れて最悪。横幅も一人が寝れるくらいしかなかった。

「来い!」

化け物は眼を光らせ、黒瀬に近づいてくる。

「あ、ぐ!？」

次の瞬間には黒瀬は前に突き飛ばされていた。正面にいたはずの化け物がいつの間にか背後に移動している。

「なんなんだよ!」

化け物はまた眼を光らせる。次は見逃さない。だが、背後からタツクルを喰らう。

「これは……忍者の分身か？」

『そんなわけではないでしょ！』

宮本からのツツコミがとんでくる。

「んじや、幻覚か」

幻覚のキーとなるのはあの眼の光だ。だが、眼を瞑ってしまったては戦えない。

化け物はまた眼を光らせる。

「そう何度も喰らうか！」

黒瀬は振り返って、化け物が降り下ろしてきた腕を抑える。そのまま、化け物の腹部へストレートを喰らわせた。しかし、後ろによろめくだけだ。

『皆、聞こえる!?』

無線機から高城の声が聞こえてきた。

『あなたの無線機の位置情報が結構なスピードで移動してるけど、何に乗ってるの?』

「列車だ」

黒瀬は化け物の攻撃を避けて木刀を叩きつけた。三回で木刀は折れてしまう。

『列車の到着地点まで先回りしておくわ』

「ああ」

黒瀬は化け物と格闘戦を繰り広げる。化け物は丸太のように硬いが、黒瀬は奴に幻覚を使わせまいと、速さで勝負する。

殴る度に、蹴る度に、腕が、足が痛んだ。だが、そんな痛みは今の黒瀬にはどうでも良かった。ここで奴を倒す。それが出来なくても、列車の終点までは足止めできるだろう。

黒瀬は化け物からタツクルを喰らう。車に跳ねられたような衝撃だった。全身の骨が軋み、血を吐いた。

化け物はまた眼を光らせた。幻覚を使ってくる。化け物は正面から堂々と歩いてくるが、これまで通りでいけばこれは幻覚。本物は背後にいる。黒瀬は背後に回り蹴りをした。だが、足は空をきるだけ。そこには化け物はいたが、身体が透けて攻撃が当たらなかった。

——こつちが幻覚か！

気づいたときにはもう遅かった。黒瀬の背中は防弾チョッキごと切り裂かれ、血が吹き出す。

「あ、ぐあー!!」

痛いなんてものじゃなかった。切り裂かれた背中からは背骨が露出していた。この痛みを意識があるまま持続させる。正直叫びたかったが、今はそんな場合ではない。

黒瀬は化け物にローキックを喰らわせた。ふくらはぎの骨にヒビが入った。あと一発いければ足の骨は折れてしまう。

体格も力も、全て奴が勝っている。そんな敵に黒瀬が勝てる可能性はゼロに等しかった。だが、だからこそ諦めない。そもそもこんな化け物に素手で戦うなど正気の沙汰ではないが、銃を使っても非効率だろう。もっと強い武器が必要だ。

視界が揺らいだ。血の出しすぎだ。ヒーリング能力でもこれほどの傷の再生は追いつかない。

もう駄目かもしれない。だが、最期の一時まで戦い続ける。

敵のタツクルをジャンプしてかわし、黒瀬も真似してタツクルを喰らわせる。

倒せる自信もない。列車から突き落としても、ここ化け物は死なないだろう。

化け物は鋭利な爪で黒瀬の顔を狙う。身体が上手く反応し、奴の爪は黒瀬の頬をかすった。黒瀬は完全な隙となった腕を掴み、背負い投げをする。化け物は叩きつけられ、重さで天井がへこむ。

また眼を光らせた。左右を確認する。化け物が二体。どちらが本物だ？

黒瀬は左右にナイフを投げた。しかし、当たらない。

——そんな馬鹿な！

奴はどこにいった。戦うスペースはここにしかない。

と、突然背後から突き飛ばされた。後ろを見ると、あの化け物が。列車の側部に張り付いていたらしい。

「クソー！」

このままでは列車から落ちる。

黒瀬は腰からワイヤーフックを投げ、列車に引っ掻かせる。

こういうときにエイダのフックショットは便利そうだ。

黒瀬は列車上部に戻るが、

「黒瀬、しゃがめ!!」

小室の怒号。黒瀬はその場に伏せた。頭上をショットガンの弾が通り過ぎる。小室はポンプアクションを繰り返してショットガンを撃ち続けた。しかし、この化け物には効果が薄い。身体が異常なほど筋肉質だからだろう。ショットガンを喰らっても少しよろめくだけだった。

列車の速度がみるみる遅くなる。そろそろ終点だ。研究所の爆発までの三十秒を切っていた。

高城はへりの中から、列車がトンネルを出たのを確認した。列車の上部には三人の影

があつた。

二人は黒瀬と小室と判別できた。もう一体は、巨体の化け物だ。

「そのまま列車と速度を合わせて！」

ヘリのパイロットに指示して、高城はスナイパーライフルを取り出した。その横にはロケットランチャーがあるが、使うなら彼らが列車を降りてからだ。

遠くで何かが爆発した。その威力は凄まじく山の半分が欠ける。その地点は、アンブレラの研究所があつた場所だ。一体どれほどの爆薬を積んでいたのか。あれでは生き残りはいないだろう。

高城はスナイパーライフルでヘリの中から化け物目掛けて撃ち始めた。偏差射撃には高度な頭脳の回転が必要だが、あいにく高城にそれが備わっている。十発中五発が命中した。

『仲間の援護で殺されるわ！』

黒瀬は叫んだ。良かった。まだ叫べるくらいの元気は残っている。高城はそれで心が少し落ち着いた。

列車は終点に到着した。

列車が完全に停止したことを確認すると、小室は黒瀬の肩を抱える。

化け物は近づこうとするが、ヘリからの狙撃によって怯まされていた。

「早く降りて！」

小室と黒瀬は列車から飛び降りる。地面は雪が積もっていたので痛みはない。

『小室、受け取りなさい！』

ヘリから高城が投げてきたのは、ロケットランチャーだった。小室はそれを拾い、化け物に標準を合わせる。

「じゃあな、紫藤先生！」

小室は引き金を引いた。放たれたロケット弾は化け物の胸に突き刺さり、爆発した。

本部までヘリで移動すると、連行されているモルガンを見つけた。ジルとクリスの活躍によってモルガンの悪事は政府やB. S. A. A. 本部に届けられた。黒瀬は今回も活躍できなかった。いや、それは違う。五人の命を救えたんだ。

「よう、モルガンさん」

黒瀬は立ち止まった。彼と少しの間だけ、話をしたかった。

「クロセ君、君はあの場で死んでおくべきだった。君が生きているせいで世界は破滅への道へ向かう」

モルガンは黒瀬の何かを知っていた。だが、そう簡単に話すような相手ではない。

「アンタもバイオテロを止めたかった。でもな、どこかで道を間違つたんだよ。他にいくらでやりかたがあつたはずだ。でもアンタはそれを考えもせず多くの犠牲者が出る方を選んだ。それはもう善でも偽善でもない……悪だよ」

「なるほど、君はまた成長したのか。彼らもバイオハザードを起こしたかいがあつたというわけだな」

話す時間はここまでのようでもルガンは連行されていった。

「彼ら」その彼らがあの研究所でバイオハザードを起こした。モルガンはそれを話さないだろう。その証拠も全て灰になった。

「でも、俺は確かに進んでいるんだ」

黒瀬は拳を固く握りしめた。

FBCは今回の事件を公表され、解散することになった。機材、人材の大部分はB.

S. A. A. に吸収され、B. S. A. A. の部隊はこれまで以上に拡大した。

あの事件で保護した子供たちは、クレアや香月を通じて、テラセイブの保護施設に預けることとなった。彼らとはまたどこかで会えるだろう。

クライヴ・R・オブライエンは、今回の事件の責任を感じ、B. S. A. A. 代表を辞退した。

「リヨウ、君が私の代わりにB. S. A. A. 代表にならないか？」

「やだ。俺は椅子に座って指示するよりも現場で戦う方が性に合ってるし」

B. S. A. A. は部隊が拡大したことによって、国際連合加盟国の対バイオテロ特殊部隊として編成され、迅速なバイオテロ解決のために全世界に支部を置かれる計画が上がっている。

「て、わけ。どう？ 良い記事が書けそう？」

あれから一ヶ月、B. S. A. A. 本部は改築や人材、物資移動のため、騒がしくなっ

ていた。

そのロビーのソファーに黒瀬と記者の佐藤リコが座っていた。

「そうねえ。やっぱりクリスさんやジルさんにも話を聞いた方が良いわね」

「パーカーなら入院中だし、ゆっくり時間が取れるぜ」

「そうね、考えておくわ。今日は小室君たちはいないの？」

佐藤は辺りを見渡すが、小室たちの姿は見えない。

「あいつらは異動だ。B. S. A. A. は世界各地に支部が置かれるからな。元々本部にいた奴らで留まるのはほんのわずかだ」

小室、宮本、毒島、平野、高城は極東支部。クリス、ジルは北米支部。田島、南、カークは西部アフリカ支部。キース、カルロスは東部アフリカ支部。ビリーは豪州支部。クアントと入院中のパーカー、B. S. A. A. が大きくなったら入ると約束したソフィアが欧州本部。黒瀬と行方がわからないアリスはフリーとなった。

「フリーって、どこの事件にも介入できるの？」

「まあ、オリジナル・イレブンの特権を使えば、俺やアリス以外の九人も他の支部の事件に介入できるな」

黒瀬とアリスは、完全なるフリー。どこの支部にも所属していないので、他のオリジナル・イレブンよりもスムーズに他の支部への介入が行える。B. S. A. A. での権

力はかなり上位だ。

「あ、そろそろ時間だな」

黒瀬は時間を確認し、ソファから立ち上がった。

「何か用事？」

「ああ」

黒瀬はバッグからチケットを取り出した。それには日本行きと書かれている。

「久しぶりに日本で長期休暇を取るんだ」

「お、国内旅行？ 私も連れて行って」

「やだ」

黒瀬はそう言って、車のある駐車場へと歩き出した。

ウイルスは確実に増殖を続けている。……それでも俺たちは戦い続ける。もう昔とは違う。多くの仲間が共に戦う。ウイルスが生きている限り、俺の、俺たちの戦いは終わらない。

9 章 デイジエネレーション

5 2 話 空港

——俺は、小さい頃何になりたかったのだろうか？

時々、そう思う。

もしも、この世界にアンブレラという狂った製薬会社がなかったら、ラクーンシティの事件も起こらず、世界各地でバイオテロが行われることもなかった。

小さい頃（といつても黒瀬は小学生の頃の記憶はないが）、確かになりたいものがあつたはずだ。

アンブレラがなければ、カントウ事件も起こらなかった。東京大学に首席で合格し、寝ながら講義を受け、四年を将来のために費やす。

どこかの会社で働いていたのだろうか。当然今のようにB・O・W やテロリストと戦うなど考えられなかった。どこかの会社で幹部でもなんでもいい。四十年をデスクワークで費やして、老後の人生をほのぼのと送る。

その過程で、誰かと結婚し、子供を作り、その子供が成長していく姿を見られたかもしれない。だが、この世界で、黒瀬にはそんな暇などなかった。

高校生の時から、アンブレラと戦っていたせい、誰かと恋愛をすることもなかった。全てをアンブレラのせいにするのは無理だが、アンブレラのせいで黒瀬の未来が、生活が奪われたのは確かだった。

今は、日々をバイオテロとの戦いに費やすだけだ。

黒瀬たちを乗せたヘリはけたたましいローター音を鳴らしながら、バイオハザードの起こった現場へと向かっていた。

場所は、アメリカ中西部ハーバードヴィルのハーバードヴィル空港。

ハーバードヴィルはアメリカ有数の工業都市だ。最近のニュースでは、ハーバードヴィル出身のロン・デビンス上院議員が、巨大製薬企業ウィルファーマ社を誘致したことが話題になっている。

七年前、アメリカの工業都市だったラクーンシティは、その頃売上世界一だったアンブレラ社の作ったウィルス、tーウィルスによってバイオハザードが発生。死者が蘇り、生者を食うという地獄が溢れた。結局、政府の判断によってラクーンシティは放た

れたミサイルで地図から姿を消した。

ハーバードヴィルの住民はそれを危惧しているのかもしれない。自分達もラクーンシティの二の舞になるのかもしれない。

今日もそれを危惧した人々がデモを起こしていた。しかも今日はニュースで見た限り人数が倍以上になっていた。ロン・デビス上院議員がハーバードヴィルを訪れようとしていたからだ。

だが、思わぬ事態が発生する。空港内でバイオハザードが起こったのだ。その直後、飛行機がハーバードヴィル空港に墜落した。

そしてアメリカ政府宛に犯行声明が送られてきた。

内容は、七年前のラクーン事件の真実を公開すること。

犯人の指すラクーン事件の真実とは、アメリカ政府がアンブレラの研究に関わっていたことだ。つまり、世界がこうなってしまったのは、アメリカ政府の原因。それを公開すれば、アメリカはアンブレラの被害者から大バッシングが起ころうだろう。

この事態を重く見た政府は、ホワイトハウスから一人、ウィルス専門の秘密研究所から一人、バイオテロと戦う専門家B S A A (B i o t e r r o r i s m S e c u r i t y A s s a s s i m e n t A l l i a n c e) を現場へと派遣した。

本当ならB S A Aの部隊で行くべきだが、B S A Aは国連直轄の対バイオテロ部隊と

して編成されている途中なので、すぐ動け、戦闘経験豊富な人間が一人しかいなかった。

B S A Aは元々、アンブレラが起こした事件の飛び火が移らないように、製薬企業連盟が創った組織だった。製薬企業連盟に加盟しているのは、誰もが名前を知っている会社ばかり。世界的製薬企業ウイルフアーマやトライセル、日本で有名なランダルなどがある。そんな部隊で活躍する日本人の男が一人。

黒瀬 涼。B S A Aでは数少ない日本人の一人であり、B S A Aの創設メンバー、オリジナル・イレブンの一人。七年前のラクーン事件から、バイオテロと戦い続けている。

黒瀬はふと、横を見る。見慣れた顔がそこにあつた。

金髪で凛々しい顔立ちの男、レオン・S・ケネディ。彼とはラクーンシティの事件からの付き合いだ。彼は一日だけ警察官だった。理由は、勤務先のラクーンシティ消滅。一日で失職した彼は、ラクーンシティを脱出した能力を認めたアメリカ政府によってエージェントの道を進むことになった（脅されたらしいが）。今や大統領直属のエージェントになっている。

そんな彼と話すのは、ルイス・セラというイギリス人の男性。彼は一年前まで、イカれた宗教団体ロス・イルミナドス団で『プラーガ』の研究をしていた。だが、ロス・イルミナドス団による繰り返し返される非人道的実験で、良心が痛み、教団から逃亡した。黒瀬に命を救われた彼は、その頭脳を買われて秘密研究所に半ば監禁状態にされて働かさ

れているらしい。

「そろそろ目的地だ」

ヘリのパイロットが言った。

黒瀬たちが乗っているヘリのパイロットの名前はマイク。彼もまた一年前のロス・イルミナドス団との事件に関わった人物で、ヘリでレオンと大統領娘アシュリーを回収してきたところ、ロケット弾で墜落させられた。

ここにいるメンバーは、一年前のそれだった。アシュリーがいれば完璧だったが、流石に無理だろう。

レオンとルイスは軽口合戦を止めて通信機を取り出した。

通信機には、一年前、レオンや黒瀬をサポートした女性、イングリット・ハニガンの顔が映っていた。

『あなたたちの軽口で頭が痛くなったわ』

黒瀬はハニガンに同じ気持ちだった。ここにヘリの操縦をしていないマイクが加わったらどうなるだろうか。軽口で人が殺せるかもしれない。

『詳しいことは現場で確認するけど、生存者の報告も出ているわ。あ、レオン、お土産よろしくね』

最後の部分はいらないが、生存者、その言葉が黒瀬を少し安心させた。

今までは平常を保っていたが、内心焦りではしかなかった。

一昨日、香月からメールが着ていた。

香月彩。彼女と黒瀬は中学時代から、マンションの部屋が隣同士、学校も同じで仲が良かった。カントウ事件を経験した彼女は、バイオテロや薬剤被害者の救済を行うNGO団体テラセイブに所属した。

そんな彼女からのメールの内容は、クレア・レッドフィールド、鞠川静と共にハーバードヴィルに向かうという内容だった。デモに参加する友人の子供を空港で預かった後、町を回る予定だったらしい。

何時出発するかは聞いていなかったが、その三人とは連絡が取れなくなっている。巻き込まれた可能性が高い。これをクリスに言うのなら、戦闘機を使ってでも駆け付けよう。言わない理由は、これが推測にすぎないから。先程の通り、巻き込まれているかもしれないが、三人で旅行を楽しんでいる可能性もある。北米支部の編成で忙しいクリスに無理をさせたくはない。

へりは現場に到着し、黒瀬たちはロープで降りる。

『頑張れよ〜』

マイクはそう言ってへりで飛び去っていった。

現場周辺には、警察の建てたフェンスの向こうテントが張り巡らされており、更にその奥に、空港が見える。

黒瀬たちは中に入ろうとするも、当然止められる。黒瀬とレオンは手帳を見せつけ、中に入った。

「じゃあ俺は遺体の所に行ってくる」

とルイス。

彼は、今回バイオテロで使われたウィルスを特定させるために呼ばれたのだ。

「ああ」と軽く答え、本部であろう大きなテントに入る。

中の隊員たちが一斉に黒瀬とレオンに注目した。

「おいおい、誰だよ部外者を入れたやつは」

隊員の一人が言った。そいつはパーカー似だが、パーカーよりも聞き分けが悪そうな感じだ。

この場にいる隊員の肩や背中には『SRT』と書かれている。ハニガンによれば地元の特務部隊らしい。

「あなあなたが政府から派遣された……？」

ブロンドヘアの女が言った。

「政府から派遣された。レオン・S・ケネディだ」

「B S A Aの黒瀬涼だ」

二人とも手帳を見せた。

「この部隊の隊長は誰だ？」

「私よ」

さっきの女だった。この歳で特殊部隊の隊長を担っているとは……。相当な実力者らしい。

「状況の説明をしてくれ」

53話 発見

「先生、着いたよ」

「ほえ？」

鞠川静香は肩を揺さぶられて目が覚める。口から垂れている涎を袖で拭い、ぐくと背を伸ばす。

「もう着いたの〜？ 早かったわね〜」

「それは先生が寝てたからよ。飛行機に乗ってすぐ寝ちゃうんですから」

香月彩はそれが不満そうだった。鞠川静香のようにどこでも寝れる人間はそうそういない。

「別にいいじゃない。先生だつてずっと働いていたんだから眠くだつてなるわ」

クレア・レッドフィールドは立ち上がり、髪の毛をポニーテールへと結ぶ。

鞠川静香、香月彩、クレア・レッドフィールドは、NGO団体『テラセイブ』に所属している。テラセイブの活動は主にバイオテロや薬害による被害者の救済が挙げられる。

この三人はテラセイブが発足された時期から所属しており、ウイルスへの知識、経験

も豊富だった。

三人はロビーに出ると、ラーニー・チャウラーという少女とその叔母が待っていた。

「久しぶりね、ラーニー」

ラーニーは、インドでウィルフアーマ社による臨床実験で両親を亡くしている。そしてアメリカに住んでいる叔母に引き取られた。

「車をまわしてくるわ。ここで待ってて」

ラーニーの叔母はそう言ってロビーから出ていった。

「クレアちゃん、飲み物買ってこようか？」

「じゃあお茶で」

「先生、私も行くわ」

静香と彩はクレアとラーニーを残し、自動販売機へと行く。

「あ、テラセイブの皆が映ってるわよ」

静香は設置されている大型テレビを指差した。テラセイブのメンバーやハーバードヴィルの住民が空港前でデモを起こしていた。

「何で皆デモをしているのかしら？」

「ロン・デイビス上院議員がウィルフアーマ社の研究施設をここに誘致しようとしてるからでしょ」

「そうだったわね」

誰かが漏らした情報に寄れば、ロン・デイビス上院議員は今日飛行機に乗ってハーバードヴィルを訪れる予定らしい。

「デモって疲れるから嫌いなよね。それよりもウイルスや薬の被害者の手当てをしてくれる方が楽だわ」

「静香先生は外で大声だしてるイメージないもんね」

自動販売機で飲み物を買う。ラーニーは何が良いだろうか。静香は聞いていないことを思い出した。

「子供だしオレンジジュースでいいわよね？」

彩に聞いたつもりだったが彼女からの返事がない。彩はどこか一点を見つめていた。今までの彼女からは想像もできないほどの顔つきだ。

「キヤー!!」

「うわああああああ!!」

突如、ロビーに叫び声が響いた。後ろを振り返ると、人に噛み付いている人がいた。

「な、なんなの?!」

「先生、あれは……」

その猟奇的現場を見た者たちはパニックとなり、それはロビー全体にすぐに広まっ

た。

「危ない！」

静香は彩に突き飛ばされる。後ろから人が襲い掛かろうとしていた。いや、それはもう人ではない。

「な、なんで……？」

静香の目の前には六年前と同じ光景が広がっていた。人が人を喰らう、狂った光景が。

「先生、逃げないと！」

彩の声で目が覚める。

「ええ、そうね！」

理由は分からないが、空港内でバイオハザードが発生したことは確かだ。一刻もはやく外に出なければならぬ。

クレアとラーニーも連れていきたいが、このパニック状態ではどこにいるかわからない。

（ラーニーにはクレアちゃんがついてる。きっと無事よね……）

クレアはラクーンシティの数少ない生還者。それだけで安心できる理由がある。

「うわああ、飛行機が！」

「え?」

飛行機が空港に突っ込む。静香と彩は咄嗟に伏せ、危険を減らす。呆然としていた人や飛行機に気づかなかった人は瓦礫に潰され、直視できない姿になっていた。

「次から次になんなの!」

飛行機のハッチが開き、そこから人がワラワラ出てくる。だが、この事故で立っていない人間などいない。

「嘘でしょ……?」

飛行機の乗客たちもゾンビ化していた。

この状況を簡単に抜け出すことなど出来ない。

アンジェラ・ミラーというSRT隊員は、状況の説明を開始する。

「数時間前に9-1-1に連絡がありました」

アンジェラはその内容を流す。

『部屋に閉じ込められているの。デビス議員も一緒よ。怪我人もいるわ、早く助けに来て!』

聞いたことのある声だった。何度も共に戦ってきた女性の声。

「レオン、この声……」

「ああ、クレアだな」

やはり黒瀬の予感当たっていた。ラクーンシティの生還者は運が悪い。まるでウイルスに呪われているかのよう。

「なに？ 知り合い？」

アンジエラが聞いてくる。

「俺たちの友人だ」

クレアがいるということは、彼女と旅行する予定だった彩、静香も一緒に閉じ込められているかもしれない。

アンジエラは空港内の地図を広げ、説明をし出す。

「彼女たちが閉じ込められているのはVIPルーム。正面入り口や避難出口はSRTのメンバーで閉鎖されているので、屋上からしか侵入できません」

「了解した」

四人はへりに乗っていた。

レオン、黒瀬、SRTのアンジェラとグレン。

レオンが言うには、無用な犠牲を出させたくないかららしい。それならば、レオン、黒瀬とで十分だが、オブザーバーとしてそういうわけにもいかない。

「奴らを倒すには頭を潰すしか方法はない。それ以外では死なない」

黒瀬は、ヘリの中でアサルトライフルのチェックをしていた。チャージングハンドルの引いて初弾を装填。それからハンドルの引いて排莖をチェック。飛び出てきた弾をキヤッチして弾倉に戻す。

もつとも、トリガーを引く可能性はゼロに近いが。戦う際は、アサルトライフルの先端に銃剣パコネットを着ける。

「なあ、アンタ。その腰の武器はなんだ？」

グレンは黒瀬の腰に差してある刀に指を差した。刀を装備している兵士など見たことがないのだろう。

「日本刀だ。俺専用の武器みたいなもんだ」

専用と言っても、BSAAには刀を使う人物がもう一人いる。彼女の刀と黒瀬の刀は価値が違いすぎるが。

ヘリが空港の屋上に到着する。

「屋上に感染者は確認できません」

「よし、行くぞ」

四人は一斉にロープで降下し、周囲を確認。ドアへと歩を進める。レオンがゆっくりドアを開け、SRTの二人を指示する。だが、グレンという男はレオンと黒瀬のことが気に入らないようだった。

(そりゃ当然か……)

いきなり出てきた二人に指揮を取らされているのだ。どういいう人間かわからない以上気に入らないのも無理はない。

空港内は非常用の電源が付いており、薄暗いが遠くまで見れる。

「奴らが出てきたら頭を狙え」

ゾンビの弱点は頭。それ以外はいくら弾をぶちこんでも無駄だ。レオンと黒瀬は慣れているが他の二人は難しいだろう。数時間前までは人間だったモノを撃つのだ。元には戻らないとわかっていても受け入れ難いものがある。

「ん?」

黒瀬は立ち止まる。

「どうした、リョウ」

「今、人の声がした。奴らではなく、人間の声だ」

「何言ってるやがる。オレには聞こえなかったぞ」

グレンは嘯み付いてくるが、黒瀬は耳を澄ませる。

「二人の女の声だ。VIPルームとは別の方だな」

黒瀬は人間離れた聴力で声を聞いていた。だが、ゾンビのうめき声で掻き消され、詳しい場所まではわからない。

「レオン、俺は別行動を取る。アンジェラとグレンを任せていいか？」

「了解だ」

レオンと黒瀬は長い付き合いだ。黒瀬の能力を理解しており、何の疑いも持っていないだろう。

「俺が来なくても先に脱出しといてくれ」

黒瀬はそう言っつて声のする方へ歩き出す。

（この声……誰だ？）

聞いたこのある声。いや、聞き慣れている声だ。

「まさかとは思うがあの人じゃないよな」

廊下を進んでいくと、話し声が日本語であることに気づく。

「……やっぱりあの二人か」

クレアと同じ部屋にいて思っていたが、どうやら別の場所に隠れていたようだ。

曲がり角を左に曲がると、ゾンビが複数行く手を邪魔するが、銃剣を頭突き刺し先

に進む。

「……運が悪かったな」

今回のテロで何人死んだのだろうか。黒瀬の頭には憎悪が溜まっていく。

どんな理由でもバイオテロを起こして人を殺していいはずがない。今回の犯人がラ
クーンシテイの被害者だったとしてもだ。

「きゃああああ!!」

廊下に甲高い女の絶叫が響く。

「近いー」

黒瀬は全力疾走し、目の前の扉を蹴り破って室内に入る。

「ゴキブリがいたのよ。ホントなのー!」

「ゴキブリくらいビビらないで!」

鞠川静香が香月彩に抱きついていた。

「……………」

取り敢えず黒瀬は胸を撫で下ろした。二人の服は汚れているが怪我はないようだ。

「あれ、リョウウ!」

「あ、リョウウくんだー」

二人は黒瀬を見て驚いている。なぜここにいるのかという表情だ。

「BSAAの任務だ。二人を助けに来た」

「久しぶりくリョウくん！」

静香が飛び付いてくるが黒瀬はそれを華麗にかわす。

「他に生存者はいないな？」

「クレアがどこかにいるかも」

「大丈夫だ。そちらにはレオンが向かってる」

「レオンってあの金髪の？」

「ああ」

二人はこの状況なのに怖がっている様子などはない。仮にもカントウ事件の生存者だ。耐性がついたのだろう。

「はやくここを脱出しよう。奴らがどこから現れるかわからないからな」

「ええ、そうね」

静香を立たせ、三人は部屋から出る。

「それにしてもリョウくん遅しくなっちゃったわね」

「いきなり何ですか」

「だって会うの久し振りなんだもん。彩ちゃんも会いたいわって言ってたわよ」

「きゃあああ!!? 何てこと言うの！」

彩は静香の口を塞ぐ。

「すまない。バイオテロばかりで忙しかったんだ。俺も彩に会いたかったよ」

「真面目に言うな！」

黒瀬は頭を叩かれる。

「痛いな。何も叩かなくていいだろ」

「別にいいでしょ」

静香も彩も強い。それは今も昔も変わらない。

しばらく進むと、ゾンビが大量にいるエリアに到達した。

「どうするの?」

「倒すしかないな。これだけの数をバレないように進むのは無理だ」

全部で十六体。この数なら二分以内に全滅させられる。

二人をその場に待機させ、黒瀬はゾンビの群れに突っ込む。黒瀬に気づいたゾンビが口を大きく開けて近づくと、銃剣を大きく開いた口の中に突き刺した。黒瀬に気づいた感染者たちが襲い掛かる。銃剣を引き抜き、アサルトライフルを半回転させ、二体の首を切断する。ゾンビには恐怖心などない。仲間がやられても問答無用だ。黒瀬は銃剣とストックを使い、瞬く間にゾンビを全滅させた。

「すごいわ〜！」

静香が黒瀬に称賛の拍手を贈る。

「麗ちゃんに習ったの?」

「まあな。あいつが一番銃剣使うのが上手いし」

宮本は元々銃剣術を習っていた。BSAAで一番銃剣使いが上手いのは宮本だろう。

「さあ、進もう」

出口も近くなってきた。レオンたちは脱出した頃だろう。外の部隊が突入を待ち兼ねている。ゾンビを倒しながら進むと、開けた場所に出た。墜落した飛行機もそこにある。

「ロビーか。酷い有り様だな」

最早ロビーの面影はない。瓦礫に潰され、バラバラになった人の姿もあった。

「数が多いな……」

先ほどのより何倍の数だ。

「レオンたちの銃声に誘き寄せられたか……」

黒瀬一人での突破なら簡単だが、非戦闘員が二人。簡単にはいかない。

「二人とも離れるなよ」

黒瀬は腰の刀を抜いた。

54話 ウイルフアーマへ

「先生、彩、俺から離れないでくれ」

ロビーにはゾンビが数十体。まだまだ集まってくるだろう。それに暗く、視界が悪い。二人を置いていくのは危険だ。

「さつきみたいに全滅させないの？」

「ああ。俺一人でも時間かかるし、それは俺の仕事じゃない」

空港内のゾンビを一匹残らず排除することなど黒瀬には造作もない。しかし、今回の黒瀬の仕事はオブザーバーとしてだ。この単独行動も本来ならやってはいけない。黒瀬たちが脱出すればすぐにSRTが突入する次第だ。

「進むぞで」

近づくとゾンビの頭に刀を突き刺して行く。歩くのが遅いのが救いだ。これが走るようになれば奴らを倒す難易度がぐっと上がる。

（まだそんなウイルスはないけどな……）

新種のウイルスは年々増加している。そんな恐ろしいウイルスが完成するのも時間次第だろう。

ゾンビを倒し続ける。静香と彩は流石にゾンビの群れを歩いて突破するのが怖いらしく怯えている。

「もうそろそろだ」

外の灯りが見えてきた。SRTの隊員が突入したくてうずうずしているだろう。

「あ……」

黒瀬の目の前に武装した男のゾンビが現れた。背中にはSRTの文字とマーク。グレンだった。

「クソ……！」

グレンの腕には噛み傷がある。そこから感染したのだろう。

（俺がついていれば……）

グレンは死なずに済んだのだろうか。罪悪感が積み上がる。

「リヨウ……」

「ああ、すまない」

ゾンビになってしまうと、もう人間には戻せない。だが、ついさつきまで元気にしていたグレンを殺すのは躊躇してしまう。

（ごめんな）

黒瀬はグレンの額に剣を突き刺す。グレンは動かなくなった。

「……行くこう」

グレンの死体を横にして三人は進む。

外に出るとライトが当てられた。

「これで最後だ。突入してくれ」

SRTの部隊が三人を通り過ぎて空港の中に突入していく。すぐにけたたましい銃声が響き渡る。隊員が二人、黒瀬たちの元にくる。

「全員怪我はない。感染してないはずだ。念のため医療班のところに」

「リヨウ……行くの？」

「ああ。俺の仕事だ」

黒瀬は再び空港に入る。

黒瀬とSRTの隊員たちは空港内のゾンビを粗方倒し終わり、外に出る。

(……何人死んだ?)

SRTの隊員たちは突入したときと比べると、三分の一ほど少なくなっていた。隊員

たちは疲労しており、怪我人も複数いる。

「ん、あれは……?」

テントの横に三台のトラックが見るも無惨に破壊されており、消火された後があった。

「リヨウ、無事だったのね!」

テントの中から彩が飛び出し、黒瀬にタツクルする勢いで走ってきた。

「ああ。彩、あれは?」

「ワクチンを載せていたトラックが爆発しちゃったの」

「え!」

「ーウイルスのワクチンは確かウィルファーマ社が開発していると聞いている。

「ワクチンがなくなったのか!」

SRTの隊員にはゾンビの噛まれ負傷したものもある。ワクチンを打たないと、はやくてもあと数十分で発症してしまう。

黒瀬は負傷した隊員たちを見る。血色は悪いが、互いに励まし合い、助かることを願っていた。

「クソ……!」

せつかく任務を果たして脱出できたのに、このまま死んでしまうしかないのか?

「リョウ、大丈夫だ」

テントからルイスが出てきた。

「さつきハニガンに連絡して試作型のワクチンをヘリで運んでもらっている。あと十分で着くはずだ」

「そうなのか!？」

「ああ。政府の特別チームが作っておいたワクチンだ。極秘だぞ」

あと十分なら噛まれた者も助かるはずだ。黒瀬は胸を撫で下ろした。

「良かった、助かるんだな」

黒瀬はこれ以上目の前で人が死ぬのはうんざりだった。

「そーいやレオンたちは？」

静香やレオン、アンジェラ、救出されたクレアがいない。

「静香先生はテントの方で怪我人の治療をしているわ。クレアはウィルフアーマ社の人についていったの」

「ウィルフアーマ社の？」

「ええ。名前は確か……フレデリックといたかしら」

「レオンとSRTのかわいい子ちゃんは車で兄の家まで行っただぜ」

ルイスが付け足した。

「何で兄の家に？」

「どうやらかわいい子ちゃんの兄が今回のバイオテロに関わっているとかいけないとか……」

「ということはアンジェラの兄がラクーンシティの被害者ということになるのだろうか。」

黒瀬は携帯端末を取り出した。

「ハニガンか？ アンジェラ・ミラーの兄について調べてほしい」

『とつくに調べ終わってるわ』

流石はハニガンだ。抜かりがない。

『アンジェラの兄の名前はカーティス。ラクーンシティで妻子を失っているわ』

やはりラクーンシティに関係のある者だった。

『それとウィルファーマ社のフレデリックという男。調べてみたら元アンブレラ社員だ』

『そうよ』

『ほう』

元アンブレラの間人は世界中に何千人もいる。フレデリックはアンブレラの時と変わらず、製薬会社に務めたようだ。

「あとはカーティスがどうやってtーウイルスを入手したかだな」

ただの一般人がそう簡単にtーウイルスを入手できるはずがない。裏から手を回し

た者がいるはずだ。

「レオンとアンジェラがカーティスを捕まえてくればいいが……」

テロを起こした者が家に戻るとは考えにくい。ハーバードヴィル中に検問所を立てるしかないのか。

ピリリリリ！

黒瀬のポケットが震える。私物の携帯だ。着信先はクレアからだった。

「クレア、どうかしたのか？」

『ウイルファーマ社が爆破されたの！ 犯人が現れたのよ！』

「なに!? カーティスのことか!？」

黒瀬は怒鳴るが、もう電話は繋がっていなかった。

「クソ、なんてこった。ハニガン、今からウイルファーマ社に向かう」

『わかったわ。レオンも向かっている最中よ』

カーティスがウイルファーマ社を襲ったのはなぜだ？　　tーウイルスを狙って？

ウイルファーマ社がtーウイルスのワクチンを作っているのなら、当然tーウイルスを所持していることになるが、カーティスには裏で取引している人間がいるんじゃないのか？　　tーウイルスを狙って単独で襲うのはおかしい。

(この事件、カーティスによる復讐だけではないのか?)

ワクチンを運んできたヘリが着陸する。

『リヨウ、話は聞いたぜ。乗りな！』

マイクの声だ。

「了解！」

今はクレアのためにも急ぐ必要がある。

55話 利用

「なんでお前らまで乗ってんだ？」

ヘリには静香、彩、ルイスが乗っていた。

「私たちも行くのよ」

「危険だ。やめとけ」

「クレアは私の、私たちの友達よ？ ほっとけないわ」

彩の目は本気だった。静香もそうだろう。

「リョウくん、危険だってことはわかっているわ。お願い」

頼まれると断れない。黒瀬は自分をつくづく甘いなと思った。

「ルイスは？」

「俺もクレアちゃんを助けたい。あんな美人を逃すなんて惜しいぜ！」

「死んでもしらんぞ」

二人の覚悟はある。ルイスは不純だが、戦力になるかもしれない。

「マイク、出してくれ。急げよ」

ウイルファーマ社の駐車場に到着し、ヘリは着陸する。

「俺はヘリでお留守番だ。四人とも無事でな」

マイクを残し、四人はウイルファーマ社に入る。

暗い。非常用電源がついている。

四人はロビーにある地図を見る。

「二手に分かれるか？」

「そうだな。ルイス、これを」

黒瀬はホルスターからハンドガンを取り出す。

「いや、大丈夫だ。俺にはこれがある」

ルイスは胸からレッド9を取り出した。

「じゃあこれは彩に」

彩にハンドガンとナイフを渡す。

「チームは？」

「俺と先生、ルイスと彩だ。危険だと判断したらすぐに逃げろよ」

「了解」

黒瀬と静香は左側の通路を進む。

「リョウくん、彩ちゃんをあの人に任せて良かったの？」

静香は心配そうな顔で黒瀬を見つめる。無理もない。今日あった男に友達の命を託したのだ。

「ルイスはあんな性格だが頼りになる奴だ。心配ない」

言葉ではそう言うが、黒瀬は彩を心配していた。十年来の付き合いだ。本当は側で守ってあげたいが、この状況で二人の女性を守れるとも限らない。黒瀬は彩と組む選択肢もあつたが、静香はルイスには手がかかる。ルイスを信じるしかない。

「誰もいないわね……」

静香は辺りを見渡す。人の姿はない。

「いや、いないわけじゃないな」

至るところから唸り声やグチャグチャという湿った音が聞こえてくる。その音を黒瀬は何度も聞いたことがあつた。どうやらカーティスはトールウィルスを研究所内に散布させたようだ。

「先生、奴らがいます」

静香にしゃがむように促して、ゆっくり進む。窓から少し顔を出して研究室を見回

す。やはり奴らの姿があった。

(こんな惨事じゃ生存者がいる可能性は少ないな……)

黒瀬は静香にハンドサインを出して、奴らのいる部屋を抜ける。いちいち相手にするのは面倒だ。それに今の最優先事項は、カーティスを逮捕すること、クレアを保護することだ。

カーティスはきつとレオンが何とかしてくれる。今はクレアが先だろう。

『リヨウ……聞こえるか……?』

端末からルイスの声がする。息は荒れており、どうやら走っている様子だ。

「どうした?」

『こっちはハズレだ、B・O・W・がわんさかいるぜ!』

「なに!?!」

カーティスはB・O・W・まで所有していたのか。

(いや、そうなるか……)

tーウィルスにB・O・W・。到底個人が買えるような代物ではない。組織ぐるみ

か、それとも――

「ルイス、彩は無事か!?!」

『多分な……。彼女は監視室に向かわせた。俺がB・O・W・を惹き付けてるところだ』

「今からそちらに向かう。死ぬなよ」

通信を切つて、静香を担いで走り出した。

「きやあ!?!」

「ごめん、先生。少し急ぎます」

先程の道を引き返す。戦闘を避けた奴らが待ち構えているが、無視して通り抜けた。奴らは遅い。走つていれば絶対に追い付かれることはない。

「彩ちゃん無事よね!?!」

「そう簡単に死ぬ奴じゃない。先生も知ってるはずですよ」

「ええ、そうよね!」

彩はカントウ事件を生き抜いた人間だ。監視室に無事に逃げ込んでいるにちがいない。
い。

最初に別れたロビーに戻り、ルイスたちが進んだ方の道に進む。

銃声が聞こえてくる。ルイスとの距離は近い。銃声は曲がり角の先からだ。

黒瀬はそこを曲がろうとすると、ちょうど大きな物体が飛んできた。

「うお!?!」

「きやあ!」

黒瀬はそれを回避しきれず、まともにぶつかってしまう。静香も落としてしまった。

飛んできた物体の正体はルイスだった。

「クソ、あいつら……銃が効かないぞ」

廊下の先を見る。ルイスが言った通り B・O・W が複数いた。しかもそれは全部タイラントタイプだった。

「マジかよ……」

黒瀬はルイスの言った B・O・W をハンターやリツカーかと思っていた。それがタイラントタイプとは……

ルイスは怪我で動けそうにない。静香とルイスを抱えて逃げるには黒瀬でも難しい。「やるしかないか……」

そもそも黒瀬には逃げるという選択肢はない。この先に彩がいるのだから。

「ルイス、先生を守ってくれ」

黒瀬は抜刀した。

敵がタイラントとなれば、本気を出すしかない。

タイラントが一体、黒瀬に向かって突っ走る。たかが人間一人すぐに殺せると思っているのだろう。

「人を見た目で判断しない方がいいぜ」

タイラントは次の瞬間、上半身と下半身が真っ二つになっていた。タイラントの生命

力は高い。真つ二つになっても数分間は暴れる可能性がある。黒瀬は床に倒れているタイラントの頭を足で踏み潰した。その威力はコンクリートの床にヒビが入るほどだ。

「まずは一体……！」

黒瀬は接敵わずか数秒でタイラントを倒すほどの力を身に付けていた。BSAAにはタイラントを倒すマニュアルがあるが、黒瀬はただの力押しで倒すことが可能だった。

ベツトリとタイラントの血が付着した刀を左右に払い、血を落とす。刃こぼれしており、もう刃物としての機能はなさそうだった。

タイラントタイプの多くは、スーパータイラント化を抑えるために防弾防爆コートという大層なものを身に付けている。AK弾でも大してダメージにならないだろう。そんなコートとタイラントの強靱な肉体を真つ二つにすれば、安物の刀など黒瀬の腕でも使えなくなるのは当然だ。

（もうちよつと高い刀だったらなあ……）

そもそも現代の刀は斬る用ではなく、観賞用なので斬ることに特化してないのも多いが。

黒瀬は使い物にならなくなった刀を鞘に納め、もう一本の刀を抜刀する。

その刀は二刀流にして使うことは少なく、今回のように使い物にならなくなってし

まったときのような予備だ。

タイラント一体に刀一本の消費。少なくともあと一体は倒せるが、その後ろにまだ三体が控えている。しかもその中の一体はネメシスだった。

タイラントが襲い掛かる。黒瀬は壁を蹴って空中に上がり、タイラントの首をはね飛ばした。すかさず刃こぼれした刀を奥のタイラントの心臓目掛けて突き刺し、サブナイフを二本抜いて、顎と額に突き刺した。

しかし、黒瀬の攻撃はそこまでネメシスの触手が邪魔に入る。それを避けるが、ネメシスは触手を鞭のようにしならせて攻撃を仕掛ける。その攻撃は黒瀬には掠りもしないが、もう一体のタイラントが黒瀬に突っ込む。流星にそれは避けきれず、壁に背をぶつけて倒れこんだ。

「クソ……」

タフな黒瀬はすぐに立ち上がろうとするが、タイラントに両手で胴体を掴まれる。その掴んだ手に力が加えられ、黒瀬の肋骨はアーマーごとバキバキとヒビを入れられる。

目の前にあるタイラントの顔面にフックを入れるが、少し怯むだけで手の力は弱まらない。ナイフさえあれば一発だが、アーマーにナイフを付けているせいで取ることが出来ない。

「リョウ、これを使え！」

ルイスから注射器が投げられる。黒瀬はそれをキャッチした。

「これは!？」

「tーウイルスのワクチンだ。一本だけ取つといた」

「これなら……!？」

細い注射器の針はタイラントの肌を通さないだろう。黒瀬はぱっちり開けているタイラントの目に注射器を射し込んだ。タイラントはすぐに手を離し、暴れ出す。タイラントの体内のtーウイルスがワクチンによって消されていく最中だ。ナイフを抜いて頭に刺すと、ぼたりと倒れた。

「あと一体だな……!？」

残ったネメシスは逃げる様子もなく、戦う姿勢だ。先程のように黒瀬を近づけまいと触手の襲い掛かる。しかし、その触手はルイスの撃った弾によって撃ち落とされる。

「行け!？」

ルイスの合図と同時に瞬時にネメシスとの間合いを縮め、その脇腹に強烈なフックを叩き込む。ぐうとネメシスが唸るが、黒瀬は攻撃の手を休めない。目にも止まらぬ早さの格闘術でネメシスに膝をつかせ、頭を掴んで壁に叩きつける。一回だけではなく、その奇形な顔がぺちゃんこになるまで続けた。

ピクリとも動かなくなったネメシスの顔から手を離す。狭い通路には、合計五体の夕

イラントタイプの死体が転がっていた。

「ルイス、怪我はないか？」

全身を返り血で真っ赤に染め上げた黒瀬はニツコリした顔でルイスと静香に近づく。

二人はその姿の黒瀬に僅かな恐怖を感じ、後ろにたじろぐ。しかし、黒瀬であることは確かだ。

「少し腰が痛むくらいだ」

ルイスは平然とした様子で立ち上がる。

「リョウくんは大丈夫なの？ あの様子じゃ肋骨が損傷してるんじゃない……」

静香は心配して黒瀬に駆け寄る。

「大丈夫です。すぐ治ります」

黒瀬は言った。

静香は黒瀬の再生能力に関しては何となく知っていたが、それでも激痛がするはずだ。黒瀬は二人に心配をかけないように、平然を装っているのだ。

「監視室に急ごう。そこに行けばクレアの居場所もわかるかもしれない」

三人は通路を進む。ゾンビはほとんど倒されていた。

「ルイスがやったのか？」

「いや、俺はここまで来てない。日本のお嬢ちゃんがやったんじゃないのか？」

ゾンビの額には綺麗に銃弾が命中している。黒瀬が知っている彩はこれほど射撃が上手ではない。

監視室と書かれた扉の前に到着する。扉をそつと開けると、そこにはクレアと彩が倒れていた。

「大丈夫か!？」

黒瀬と静香倒れている二人に近づき、抱き上げる。

「ううん」

クレアの目が覚める。

「クレア、何があった!？」

「……わからない。彩と一緒にいたら背後から誰かに襲われたの」

クレアは頭を抑える。

黒瀬は部屋を見渡すが、他に気配は感じない。ここにくるまでは一本道だからすれ違っているはずだが、それらしき人物は見えていない。ダクトを通じて逃げた可能性もある。

「クレアちゃん、怪我してるじゃない!」

クレアの太股から血が垂れていた。静香は医療用ポーチから道具を取り出し、簡単な治療をする。

彩も目が覚めていた。

「彩、無事か？」

「ええ」

彩は黒瀬の手を取って立ち上がる。

黒瀬は監視カメラの映像を見る。レオンとジェシカの姿があった。二人ともボロボロだが、どうやら戦いは終わったようだった。

「リヨウ、その映像録画されてるようなの」

クレアが言った。

黒瀬はパソコンを調べる。

「映像データがコピーされた形跡があるな」

USBメモリでコピーされている。

「つまり、誰かがお嬢ちゃんたちを襲って、データをコピーしたわけか」

「そしてどこかに消えた……」

ダクトを通って逃げたのなら、追い掛けようもない。

「一応、調べとくか」

どこのダクトから逃げたか見当もつかないが、運良く鉢合わせ出来るかもしれない。

「ルイス、弾は残ってるか？」

「すまない、さっきので切らした」

「彩、俺の銃あつたよな？」

「……………ごめんなさい。どこかに落としたみたい」

「……………そうか」

「こんな状況だ。急いでる途中に落としたのだろう。」

黒瀬はホルスターから予備の拳銃とマガジンを取ってルイスに渡す。

「三人を無事に外に届けてくれ。俺は真犯人を探す」

『……………で、リヨウは今ダクトの中にいると』

ハニガンは呆れた顔で言った。

「くそー、まさか逃げ出してたとは……………」

ハニガンから聞けば、どうやら真犯人はレオンたちのおかげで逮捕されたようだ。元アンブレラ社のフレデリックが、tーウィルス、Gーウィルス、タイラントタイプのデモンストレーションのためにカーティスを利用してバイオテロを起こしたらしい。

「じゃあ、クレアたちを襲って映像データを抜き出したのもそいつか」

『それが……』

ハニガンは何か言いたそうだった。

『彼は映像データをWi-Fi経由で私物のパソコンにコピーしたそうなの』

「え？」

じゃあクレアと彩を襲ってデータをコピーしたのは誰なんだ？

結局、コピーした人物を突き止められないまま、黒瀬、レオン、ルイスは皆に別れを告げ、ヘリで帰還を命じられた。

「よお、大変だったな」

ヘリの運転手はマイクだった。

「フレデリックは逮捕できたし、無事ってわけでもないけど事件解決だな」

「……そうだな」

カーティスはフレデリックに利用され、そして化物になって死んだ。アンブレラに関わっていたアメリカ政府に復讐をしたかったのだ。

「俺にはカーティスの気持ちなんてわからないね」

黒瀬はカーティスのことをラクーンシティで妻子が死んだことしか知らないが、カーティスはバイオテロで家族を失う気持ちを知っていたはずだ。利用されたのもあるが、彼のせいで多くの人間が死んだのも事実だ。

(カーティスみたいなクズは死んで当然だな)

黒瀬のウイルスやB・O・W. を恨む気持ちは変わらない。彼はトウウイルスを使つて何百人も人を殺した。どんな理由であれ、絶対に許されない。

(俺の手で殺したかったな)

「あ、ハニガンへのお土産を買うの忘れた」

レオンが思い出したかのように口を開く。

「恨まれるな」

「絶対ネチネチ言われるぜ」

へりに乗っている四人は爆笑した。

誰もいない路地裏で何者かが連絡を取っていた。

「ええ。彼がタイラントタイプと戦っている映像データを送りました。ここ数年の彼の成長は凄まじいものです」

その人物は微笑する。

『R』プロジェクトを次の段階に進めましょう」

黒瀬が知らないところで、その計画は進んでいる。

10章 戦う意味

56話 傭兵部隊

彼は物心着くとき既に銃を手にしていた。

別におかしなことでもなかった。周りにも彼と同じような歳、又はそれ以下の少年が銃を握り、戦地へと出向いていく。

彼が所属していたのは、国の反政府軍。理由はよく覚えていないが、その頃の政治体制に不満があり、多くの市民で結成して戦い始めたらしい。

バカらしい話だ。彼は今ではそう思う。他の国から見れば、反政府軍という名のテロリストであり、国を倒すためなら、子供の命でさえ惜しまない。狂った人間の集まりだ。彼には、親と呼べる存在がいなかった。さっきの通り、物心着くときには銃を手にしていて、自分の親もいるかどうかからなかった。一応、彼や他の少年兵を育成する上官らしき存在はいたが、到底親とは呼べなく、少しでも気に障ることがあるのなら、彼や他の少年兵を気絶させるまで殴り蹴っていた。

反政府軍は時には、子供の身体に爆弾を巻き付けて政府軍の兵士もろと木っ端微塵にしていた。

戦争、紛争。人が死ぬ。それだけだ。銃を握ったその日から、隣では誰かの頭が撃ち抜かれた。次は自分かもしれないと思っても大人には逆らえず、銃を撃ち続けるしかなかった。そうしないと食べ物も食えずに飢えて死ぬからだ。いつ終わるのかわからない戦いを続け、いつの間にか反政府軍は解散していた。

それから十年の月日が流れた。

彼も大人となったが、当然あの時の記憶は忘れられない。彼は紛争が終わった後も数人の仲間と各地を転々とし、戦ってきた。戦争で金を啜る泥ネズミ。そう言われても仕方がない。戦争で育ってきた彼は、銃で戦う以外金を稼ぐ方法を知らないからだ。

今ではB.^{バイオ・オーガニック・ウエポン}O. W. と呼ばれる生物兵器が紛争地帯に出回っている。

B. O. W. は弾など恐れずに敵と判断した者に襲い掛かる。人間とは違い、恐怖心はない。しかも人間より身体能力も攻撃力も高く、尚且つ低価格だ。

テロリスト、反政府軍はB. O. W. を買い、世界を変えようとした。

しかし、それは何度も阻まれた。BSAAという国連の対バイオテロ部隊。B. O. W. やそれを使うテロリスト専門のスペシャリスト。この世界でB. O. W. との戦闘が長けているのは間違いなくBSAAだ。

「隊長、仕事の時間です」

ソファアで寛いでいた彼に、武装をした男が現れた。

「もうそんな時間か……」

彼はソファアから立ち上がる。

彼は今や多くの傭兵を指揮する傭兵部隊のリーダーとなっていた。金さえ貰えば、

B・O・W・とも隊列する狂った集団だ。

いや、違うな。彼は否定した。

最早狂った集団ではない、俺たちはB・O・W・そのものだ。

彼は手に持っていた注射器を握り潰した。

俺はグレッグ・リチャードソン。傭兵部隊のリーダーだ。

B S A Aの隊員、黒瀬涼は今回もバイオテロ事件を追って、ビジネスジェットでアメリカへと向かっていた。

今回の事件は正確に言えばバイオテロではない。バイオテロに繋がる可能性のある事件だ。

アメリカ合衆国のとある研究所が襲われ、嚴重に保管されていたイーウィルスが持ち出されてしまった。

黒瀬はBSAAに支給されているノートパソコンで、研究所に設置されていた監視カメラの映像を見る。

完全武装した傭兵たちが、研究員や警備員を次々に殺している。驚くべき点は、その傭兵の動きがあまり素早いことだ。百キログラムは越えてそうな武装だが、奴らは警戒な動きで進んでいく。

『リョウ、聞こえてる?』

ノートパソコンに、大学教授として、BSAAのアドバイザーとして働いているレベッカ・チェンバースの映像が映る。

「ああ、聞こえている」

『あの映像は見た?』

「ちようど今見終わったところだ。奴ら、何であんな動きが出来るんだ?」

それが黒瀬の疑問だった。あんな武装で軽やかな動きなどしている者など見たことがない。

『生き残った警備員の話を聞くと、銃弾を避けるやつもいるらしいわ』

「なに?」

『射線を予想して、撃つ前に避けるんじゃない、撃つてから避けるらしいの』
「そりや面白そうだ」

黒瀬はにやけた。撃たれた銃弾を避ける。そんな神業と呼べるものを出来るのは、今までで黒瀬とアリスくらいしかないからだ。

「強化人間の可能性は？」

『もちろんあるわ。レオン・レポートに書かれてあつたガンナードもその一つだから何らかのウイルスで強化のかもしれない』

奴らはガンナードとが違い、明らかに理性、知性がある。アリスのように——ウイルスを投与されて強化されたのかもしれない。

もしくは俺のように——

黒瀬は自身の手のひらを見つめた。

この力はなんだ？ 黒瀬はそう時々思う。この力は生まれつきではない。調べていないので確信は得ていないが、人間離れた身体能力、腕を切断されても数時間で再生する回復能力、こんな力を生まれつきなど到底思えない。

小さい頃の記憶がない、両親は何らかの研究員、アルバムにあつた赤ん坊の黒瀬の目の色。ヒントはいくらでもある。

この力は、人為的に与えられたものだとしたら？

『どうしたの、リョウウ?』

レベツカの言葉で黒瀬は我に帰った。

「何でもない。そろそろそっちに着くよ。迎えを呼んでおいてくれ」

黒瀬はそう言ってノートパソコンを閉じた。

黒瀬は空港に到着し、駐車場まで行くと、一際目立つ車両が停まっていた。高機動多用^ハ用途^ン装^{ザイ}輪^イ車^イ両^イだ。側面にはBSAAのロゴが付いている。こんな豪華な乗り物ではなく、タクシーで充分だったが、用意されたものは仕方ない。黒瀬はハンヴィーへと向かうと、中から四人の隊員が降りてくる。

「お勤めご苦労様です! 北米支部に所属しているラングです」

眼鏡の黒人男性。その体格はクリスと争えるほどだ。

「同じく北米支部所属、シャリアです!」

金髪でショートの女性。どこかで見たことがあると思ったら、三年前に陸上の世界選手権に出場した人物だった。

「……ケンドだ」

ケンドは黒瀬が気に入らないのか、鋭い目付きで睨んでいる。かなり失礼なやつだなと、黒瀬は思った。

「お、オレ、レイアンって言います！ ああ、本物に会えるなんて……オレ感激です！」

レイアンは黒瀬に詰め寄り、手を掴む。レイアンの表情は幸せそのものだった。

「ちよつとレイアン！ 困ってるじゃないの！」

シヤリアはレイアンを無理やり引き剥がす。

「あ、すいません！ オレ、つい熱くなっちゃって……」

「別に良いよ。俺も嬉しいし……」

人から好かれるのが嫌いな人間はいない。黒瀬にはレイアンからの好意が充分に伝わってくる。

「早速ですが、車に乗ってください。こちらも急いでいるので」

ケンドは会話を切るように言った。

運転席にシヤリア、助手席にケンド、黒瀬を挟むようにしてレイアンとラングが座っている。

レイアンがノートパソコンを開いて状況の説明を始める。

「研究所を襲ったのは、グレッグ・リチャードソン率いる傭兵部隊、盗まれたのは試験管に入った三本のイーウィルスです。パニックを避けるために報道は控えられています」

「まあ……妥当だろうな」

ラクーンシティを滅ぼしたイーウィルスが盗まれたのだ。それが世間に知ればアメリカ中、いや世界中がパニックになるだろう。

「今のところ、飛行機や船で国外へ出ていません。この国のどこかに潜んでいます」

「大雑把な場所も分からないのか？」

「途中で車や武器も全て捨てているので……」

途中で車を乗り換えて移動した可能性が高いだろう。電車やバスなど目撃証言が多くなる公共機関は使わない。

「BSAA北米支部や警察が勢力をあげて調べています。念のためイーウィルスを保管している研究所も警備を増強しています。イーウィルスですから、もしも撒かれたらアメリカ中に広がる可能性がありますから」

「そうはさせないさ。BSAAがいるんだからな」

イーウィルス、死者を蘇らせ、生きる屍へと変える。ラクーンシティのあの光景を広げるわけにはいかない。

「BSAAだって限界がある。あんた一人が来ても状況は何も変わらない」

ケンドは唐突に言った

。「ケンド……テメエ！」

レイアンはケンドに掴みかからんとする勢いだ。黒瀬はレイアンを手で制した。

。「どういう意味だ？」

。「そのままの意味だ。銃を使わずに近接武器だけで戦う？ 非効率だし、射線の邪魔だ。

そんな奴よりも銃を持った一般人が戦う方が役に立つ。俺よりも筋肉がない身体じゃないか。そんな身体でオリジナルイレブンと言われてもな。何らかの方法であんたが自分の株をあげてるんだろう？」

ケンドは黒瀬を挑発するように笑う。隣でレイアンの怒りは今にもブチキレそうだった。ラングも表情には出さないが、腕が震えていた。

「そう言われても仕方がないな。ケンドの言う通り俺は銃を使えないし、敵が遠くにいれば接近戦しかできない俺は役立たずだ。でもな、ケンド。その明らかに人を侮辱する態度はいただけじゃないな。おまえが俺をどう思っているかと仲間なのは代わりない」

ハンヴィーには一触即発の雰囲気漂う。しかし、それを遮断するかのよう通信が入ってきた。

『聞こえてる!? その近くにある研究所が武装集団に襲われているわ!』
「その研究所にもテロウィルスが?」

『そうよ。そこから数キロ先に研究所があるわ。現場に急行して!』

何はともあれ、仲間内で争っている場合ではない。

57話 敗北

襲われている研究所に急行する。

研究所の入り口には、黒瀬たちが乗っている物とは別のハンヴィーが五台止められており、見張りが五人ついている。

B S A Aのハンヴィーに気づいた傭兵たちは、アサルトライフルで迎え射つ。

銃弾で車体に穴が開き、窓ガラスが割れる。

「みんな、掴まって！」

シヤリアはそれでも怯む様子はなく、アクセルを全快にして傭兵たちに突っ込んでいく。

ドガシャン!! 敵のハンヴィーにぶつかって車体は動かなくなった。だが、数秒は敵を攪乱できるはずだ。

ハンヴィーに乗っていた五人が一斉に飛び出す。傭兵に向かって反撃を開始し始めた。

黒瀬はハンヴィーのボンネットを蹴って、一気に傭兵の元へと駆け寄った。

武器を所持していない黒瀬だが、勝てる自信は十分にあった。

傭兵は間合いが悪いことにいち早く気付き、ナイフを抜く。

傭兵は突くようにナイフを振るが、黒瀬はその手を掴む。そして力任せに傭兵をハンヴィーの車体へとぶつけた。

それだけで充分気絶するだけの威力はあったはずだが、傭兵は気絶せずに黒瀬の胸ぐらを握る。

「くっ！」

黒瀬は傭兵と入れ替わるようにして車体へぶつけられる。傭兵は持っていたナイフで黒瀬の喉を切ろうとしてくる。

強い。その一言だった。黒瀬を押しえつけている力は、日々の訓練や技術で身に付けられるものではない。何らかで強化された力だ。

黒瀬は傭兵の足を踏みつける。黒瀬を拘束する力が一瞬緩んだ。黒瀬は肘を傭兵のヘルメットに繰り出す。ガードされているとはいえ、かなりの衝撃がくるはずだ。

ぐらついている傭兵の背後に回り込み、腰を両腕で囲むように掴む。力で持ち上げて、ブリッジするように傭兵を地面に叩きつけた。

「残りはい！」

BSAAの四人も必死に戦っているが、強化された傭兵の攻撃を喰らわないようにするのが精一杯だった。

研究所の所員を殺し、嚴重に保管されている τ -ウィルスを盗み出す。それが依頼の一部だった。

傭兵のリーダー、グレッグ・リチャードソンは、今回も目的が達成できたと思つていた。

τ -ウィルスをケースに入れたところで、彼の前に仲間の一人がやってきた。

「BSAAが来ました。奴の姿もあります」

「わかった」

グレッグは τ -ウィルスの入ったケースを仲間に渡し、アサルトライフルと交換する。弾は三十発、アンダーバレル式で、グレネード弾が一発。外にいる人間を倒すなら、これだけで充分だ。人間なら……。

チャージングハンドルを引いて初弾を装填、安全装置を解除してトリガーに指を掛ける。目の前にあつた窓ガラスに三発撃ち込み、ストックで叩き割る。

壁に身を隠して外の様子を確認した。

敵は全員で五人、じきに見回りの警察が集まってくるだろう。その五人の中で一人だ

け動きが違う人物がいた。

素早い動きで傭兵を翻弄し、CQCで昏倒させている。

奴だ。グレッグは確信した。B S A Aの創設メンバーであるオリジナル・イレブンの一人、黒瀬涼。依頼主から、彼は必ず来るとの伝言だったが、まさか本当に現れるとは思っていなかった。

黒瀬はまたもや傭兵を倒し、もう一人に挑む。これで味方は三人やられた。残りの二人、黒瀬と戦っている奴はもうじき倒されるだろう。もう一人は残りのB S A Aの四人を食い止めていた。

B S A Aも中々強い。たったの四人で強化された傭兵を相手にし、まだ一人も死んでいない。

だがそれも終わりだ。

グレッグは窓から銃口を突きだし、黒瀬を狙う。どこに当たっても良い、三発を手始めに撃ち込んだ。

黒瀬は四人目の傭兵を殴り付けた。四人目を倒し、外の傭兵は残り一人となった。

黒瀬は背後からの殺気に気付き、横に跳び跳ねた。黒瀬がさつきまでいた場所に三発の弾丸が飛んできた。

弾丸が飛んできた方向を見ると、一人の男がいた。その男はヘルメットを被っていない。

「クソー！」

黒瀬は倒した傭兵からライフルと手榴弾、ナイフを奪い、ハンヴィーの陰に隠れる。

これからどうする？ 敵は研究所内にまだ大半、B S A Aの四人は残り一人の敵に手こずっている。黒瀬はケンドの言葉を思い出した。

『銃を使わずに近接武器だけで戦う？ 非効率すぎるし、射線の邪魔だ』

ケンドの言う通りだった。非効率すぎる。実際、ハンヴィーの陰から身動きが取れないでいる。

「でもな、こつちにも意地つてもんがあるんだよ……」

黒瀬は傭兵から奪ったナイフでハンヴィーのドアの接合部を切った。車体から引き離されたハンヴィーのドアを右手で持ち上げる。

「やってやろうじゃねえか……」

黒瀬は研究所に向けて走り出した。

グレッグが見たものは、とても奇妙だった。

男が車のドアを前に突き出して研究所へと走ってきている。

「アレ」の到着まで奴を近づけさせな！」

グレッグの命令を聞いた傭兵たちは、一斉に黒瀬を撃ち始めた。だが、彼が盾にしているのはハンヴィーのドア。そう簡単には貫けない。

グレッグはアンダーバレルのグレネード弾を黒瀬に撃ち込んだ。ハンヴィーのドアの強度がどうであれ、グレネード弾に耐えられるはずがない。

ハンヴィーのドアに着弾し、爆発、黒煙をあげた。

やったか。煙でよく見えないが、あれをマトモに喰らったのだ。死んでいなくても動けないだろう。グレッグがそう思った瞬間、彼の顔めがけて黒く細長い物が飛んできた。アサルトライフルだ。

グレッグは身を屈めて間一髪でそれを回避した。予想が外れた。奴は生きている。

「全員、当初の作戦通り屋上に集まれ。時間稼ぎはオレがやる」

グレッグは窓から飛び降りた。

黒瀬の前に誰かが窓から飛び降りてきた。他の傭兵と違ってヘルメットは被っておらず、その顔がよく見えた。

「国際指名手配犯のグレッグ・リチャードソンだな？」

黒瀬は彼を知っていた。それはそのはず。彼は何度もテロを起こしている。もちろんバイオテロも。彼の指名手配書は、B S A Aの基地にまで貼つてある。

「お目にかかれて光栄だよ、クロセ・リヨウ」

「へえ、俺のことを知ってるなんて嬉しいね」

「君はこつちの世界では有名だからな。スーパーパワーで善良な一般人のために敵を倒すんだらう？ まさしくアメコミのヒーローだ」

グレッグは紳士的な顔立ちだった。銃を持たず、会社でビジネスマンをやった方が似合っている。

「俺はヒーローじゃない。救えてない人が多すぎる」

「それはそれは」

グレッグは黒瀬に飛びかかるようにして殴りかかる。黒瀬は腕で防ぐが、ミシミシと

骨が軋んだ。

間違いない。こいつも強化されている。

「なんなんだよ、その力は……」

黒瀬とグレッグは、殴っては防ぎ、の繰り返して話し始めた。

「素晴らしいだろう？ この力は今回の依頼主から貰ったものでね」

グレッグは黒瀬にローキックを喰らわせた。太ももの骨にヒビが入る。

「tーウィルスを盗んでどうするつもりだ？」

黒瀬はグレッグの顔を殴ろうとしたが、避けられる。

「tーウィルスをどうするだ？ もちろんテロに使う。それ以外の方法が？」

「てめえ！」

黒瀬とグレッグの攻防が続く。グレッグは、強化された力だけではなく戦闘の技術も

プロ以上。黒瀬がただの人間であれば、とつくにやられているだろう。

「クロセ！ 奴から離れろ！」

ケンドが銃をグレッグに構えた。だが、黒瀬が邪魔で撃てないでいる。

B S A Aの四人は、見張りの傭兵を倒したようだった。

黒瀬はバックステップでグレッグから離れる。ケンドはライフルをフルオートで全

弾発射するが、グレッグは射線が見えているかのようにストレスで避ける。

「なっ!？」

グレッグは驚愕の表情だが、手は休めずにマガジンキャッチボタンを押して空のマガジンを捨て、新しいマガジンを叩き込もうとする。だが、そんな行動を敵が易々と見逃してくれるわけがない。

グレッグは、大型弾倉で三点バーストのハンドガンを腰から抜いた。

グレッグの能力からして、距離が離れていてもヘッドショットなど容易いだろう。黒瀬はナイフをグレッグの腕に投擲した。グレッグは銃を撃つ前にナイフに気付き、横に反れる。

「うおおおお!」

黒瀬は全力でダッシュし、グレッグにタックルを喰らわせた。グレッグはまるで車にはねられたかのように吹き飛び、握っていた銃をどこかに飛ばしてしまう。

「戦闘ヘリだ!!」

ライオンが叫んだ。

上空には戦闘ヘリが一機、武装なしのヘリが二機。

戦闘ヘリに付けられているミニガンの銃口はグレッグでも他の傭兵でもなく、黒瀬に向けられていた。警察のヘリかと思ったが、的はずれだったようだ。

「くっー」

黒瀬は走った。ミニガンの掃射で地面は削りとられる。ハンヴィーも一瞬でズタボロになり、爆発した。爆風で黒瀬は吹き飛ばされ、別のハンヴィーに背中をぶつける。

戦闘ヘリは黒煙と砂ぼこりで黒瀬を見失ったようだ。

「どうしろってんだ……」

黒瀬の腰には敵から奪い取った手榴弾があつた。ラクーンシティのときはこれでヘリを墜落させたが、あのとときのヘリの狙いはアリスだった。敵の目が別に向いていたからこそ、やれた作戦だ。

そろそろ視界が良好になる。戦闘ヘリはすぐに黒瀬を見つけ、ミニガンで肉片に変えようとしてくるだろう。

「せめて武装でも壊せれば……」

黒瀬は望み薄に敵のハンヴィーのドアを開ける。中を探すとセミオートアンチマテリアル対物ライフル『QSV-96』を二挺見つけた。弾数は五発、合わせて十発。十発もあれば、戦闘ヘリを墜とすことなど容易い。

黒瀬は二挺の対物ライフルを掴む。ずっしりしている。重量は確か十三キロ前後だったはずだ。それが二挺、二十キロ後半もある。

黒瀬はヘリにライフルを二挺向けた。まだ黒煙で見えないが、ローター音で居場所は

把握できる。

「よっしやあー！」

黒瀬はにやつく。戦闘ヘリはのうのうと待機している。今から墜とされるとも知らずに……。

対物ライフルを撃ち始める。片手で撃つなど、ましてや対物ライフルの二挺などやったことないので、最初の二発は反動で外れた。だが、残り八発残っている。

残り八発を撃つ。対物ライフルの反動を片腕で抑えつけるなど普通なら出来ないが、黒瀬は普通ではない。

五発目でパイロットにヘッドショットを決め、頭は肉片となり弾け飛ぶ。それに気づいていない黒瀬は残りも撃ちつくした。

パイロットとテールローターを失った戦闘ヘリは、ぐるぐると回転し、研究所の庭へと墜落。爆発した。

黒瀬はライフルを投げ捨て、黒煙から飛び出す。

武装していない二機のヘリが飛び立つところだった。ヘリの中には研究所を襲った傭兵たちが乗り込んでいる。グレッグの姿もあった。

「クソー！」

黒瀬は、拾ったアサルトライフルでテールローターを狙う。トリガーを絞るが、弾切

れを起こしていた。

グレッグは黒瀬を嘲笑うかのようにへりから身体を覗かして腕を振った。へりは遙か彼方へと飛んでいく。

黒瀬はライフルを握り潰した。まんまとイーウィルスを盗まれた。戦闘へりよりも非武装のへりを墜としておくべきだった。

黒瀬は敗北した。

58話 シカゴ

「リヨウ、大丈夫？」

BSAA北米支部の研究所の休憩室に、レベツカ・チェンバースが現れた。白衣を着ている彼女を見るのは久しぶりだった。

「ああ、大丈夫だ。怪我は……治ったよ」

ほぼ擦り傷や切り傷だったが、その傷は跡形もなく無くなっている。

「それで？ 傭兵の身体を調べたんだろ？ 何かわかったか？」

黒瀬やBSAAの四人が倒した傭兵は、全員自殺していた。拳銃を頭に突き付けてグレッグ率いる傭兵部隊の決まりなのだろうか。どちらにせよ、傭兵の口からは情報は聞き出せない。だから、身体を調べることにした。あの超人的な力を誇る身体に。

「tーウィルスの反応が出た」

ルイス・セラが現れた。その手には三本の缶コーヒーが握られている。それを黒瀬とレベツカに渡し、ソファアへと座った。

「詳しく言えば、tーウィルスだったものだ。何らかの改良がされている。そうでないと、あの傭兵部隊は全員ゾンビになってるからな」

「人間の力を極限まで上げるウイルスか……」

アリスの姿が頭の中に浮かぶ。彼女はT-ウイルスを身体に何度も投与され、スーパーパワーを得た。だが、そうできたのは彼女が特別だったからだ。普通なら死んでいくか、化け物になっている。

「ともかく、敵は研究所から奪ったT-ウイルスと、敵全員が超人的な力を持っていることには代わりはない。何らかの対処をしないと……」

「でも警備を強化していた研究所までやられちゃったんだ。米軍に、装甲車と戦闘ヘリ、兵士百人くらいで守らせないと今回と同じになってしまう」

それでも足りないかもしれない。奴らは銃弾を避けるほどの反射神経だ。格闘能力も射撃能力も判断力も元々高いのだろう。それが何倍にもなっている。

一体どうすれば奴らを防げる？ 黒瀬は考える。アリスがいれば少しは変わったかもしれないが、彼女とは連絡が取れないままだ。しかも、北米支部には今、クリスもジルもない。戦力はがた落ちだ。

「ビリーが来ているわ。それに本部からパーカーという人も」

「それはありがたいな」

ビリーとパーカーなら、多少は戦力増強になる。それにオリジナルレブンが二人もいれば、B S A Aの士気があがりはするだろう。

シカゴのとある酒場

グレッグは、仲間を失った。何年も共に戦ってきた仲間を六人も。

彼らは捕まるくらいなら、死を選ぶだろう。それはグレッグも他の仲間も同じだ。今まで銃を握り、人を撃ってきた。それが出来なくなるのなら、死んだのと同じだ。

グレッグたちは撃つことに喜びを覚えていたし、撃たれることにも喜びを感じていた。撃ち、撃たれる、それが戦いだ。戦って死ぬのなら本望だ。死んだ五人も、最後に優秀な奴らと戦えてさぞ喜んだことだろう。

この傭兵部隊には、誰も戦いたくないなど思っている人物はいない。銃で生きてきた彼らだからこそ、これからも銃で生き、銃で死んでいくのだろう。

六人が死んでも作戦の変更はない。

「おまえら！ 今日が人生最高の前夜祭にしよう！」

『うおおおおお!!』

仲間は酒を飲み、食いたい物を食う。

グレッグも上等な酒を一口飲んだ。

今日の正子、作戦は開始される。B S A Aは必ず来る。黒瀬涼もだ。
ノートパソコンを見る。

今回の依頼内容が書かれてある。依頼主はジョン・スミス。何とも胡散臭いが、五千ドルとヘリ、大量のB・O・Wを送りつけるほど、金持ちらしい。

仲間は楽しんでる。彼らも悟っているのだろう、誰も生き残らないことを。

夜、シカゴにある黒瀬たちは酒場へと向かっていた。

酒場の店員から、密かに通報があったのだ。屈強な身体をした男たちが、酒場で騒いでいると。もしかしたら、あの傭兵部隊かもしれない。警察が先に向かったが、既にいなくなっていたらしい。

黒瀬たちも酒場に到着し、中に入る。

「何かあったか？」

近くにいた警官に聞いた。

「ノートパソコンが一つ。それと無針注射器が一本です。ノートパソコンのデータはほとんど消去されています」

「見せてくれ」

別の警官が、そのノートパソコンと空の無針注射器を机の上に置いた。

黒瀬とレベツカは、中身を確認する。

無針注射器には、Fーウイルスと書かれてあった。

「Fーウイルス？ 何の略だ？」

「Forceじゃないかしら？ 彼らの力の源はこのFーウイルスかもしれないわ」

レベツカとルイスは、死んだ傭兵の体からtーウイルスだったものが検出されたと言っていた。

「tーウイルスの強化系か。知能はそのままにして、身体能力だけを上げる」

本当なら、人類を進化に導ける代物でもある。

『リョウウさん！ 外が！』

無線機からシャリアが呼び掛ける。

外から男の叫び声と銃声が轟いた。そして、何か窓を突き破り、侵入してきた。

犬だ。いや、もう犬ではない。眼は白濁し、口から涎を滴ながら唸っている。体のあ

ちこちが欠けていたが、犬はそれを気にする様子もない。

間違いない、B・O・W.のケルベロスだ。

「うわあああああ！」

黒瀬にノートパソコンを渡した警官が、銃を抜いて撃とうとする。だが、その前にケルベロスは警官に飛び掛かって喉を食いちぎった。

外からはまだ銃声が続いている。

『リョウ、レベッカ、聞こえているか!? シカゴ市内でバイオテロだ! B・O・W.が解き放たれてやがる!』

ビリーの声だ。ビリーも応援で北米支部に駆けつけている。

「B S A Aの部隊を出勤させろ! B・O・W.の殲滅をするんだ」

言い終わると同時に、ケルベロスが黒瀬に飛び掛かる。だが、黒瀬は慣れたように足で叩き落とした。レベッカは死んだ警官から拝借した銃でケルベロスを撃ち殺した。

こんな偶然があるはずがない。B・O・W.を解き放つたのは間違いなく、グレッグたちだ。

「レベッカは避難してくれ、俺は街に向かわないと」

「まだよ。このパソコンを調べてからよ」

考えている時間はない。

「わかった、着いてきてくれ」

外に出ると、警官とシャリアたちがB・O・W.と戦っていた。レベツカは手際良くB・O・W.を倒す。

「腕は鈍っていないようだな」

「ええ、トレーニングは欠かさないようにしているわ」

動きはあの頃とちつとも変わっていない。

「シャリア、運転を頼む」

警官と協力し、近くのB・O・W.を殲滅した。

黒瀬たちは車に乗り込み、市の中心部へと向かう。そこが一番ひどい状況だろう。

「クソ、今日で俺は死ぬのか……?」

ケンドはハンヴェーの窓ガラスを叩く。

「それはお前次第だ。そう思ってるんなら死ぬさ」

それしか言えない。黒瀬も今まで何度もそう思った。だが、それは違うだろうと、生きなければならぬと、決して心は折れなかった。

隣でレイアンは震えていた。シャリアもラングもだろう。初めての事態で誰もが恐怖している。この場で何も恐れていない者はいない。今まで何度もB・O・W.と戦ってきた黒瀬もレベツカも同じだ。

街に着く。ひどいありさまだった。B. O. W. から逃げ惑う人々。B. O. W. と応戦する警察官。地面には放置された車や、人間、B. O. W. の死体が転がっている。

「出るぞー！」

黒瀬たちは車から飛び降りた。シャリアたちは近くにいるB. O. W. を撃ち倒していく。

「これを使ってください」

レイアンとラングが黒瀬にナイフを渡す。いや、正しくはナイフではない。アサルトライフルの先端に付ける銃剣^{パヨネット}だ。

「すまない」

黒瀬はパヨネットを受け取り、一本は腰に収めた。

「レベツカはどうする？」

「私はここでパソコンを調べるわ。何かわかったら連絡するから回線は開けておいて」

「わかった。ベリーの隊をこの付近に展開させるから、何かあったらベリーに言うんだ」

黒瀬はそう言つて、敵と戦い始めた。

「折角の休暇が台無しだな……」

シカゴのとあるホテルの一室で、銃を握る男がいた。

レオン・S・ケネディ、大統領直属のエージェント。彼は数少ない休暇で、シカゴを訪れていた。

ふと窓から外を見ると、地獄が広がっていた。

どうやらツイていないようだ。レオンはため息をつき、机に置いてある銃を握る。

「……泣けるぜ」

休暇中でもB・O・W.と戦うことになるとは。ホテルに籠ることも可能だが、レオンは生憎そういう性格ではない。

ドアを開け、廊下を確認する。敵はいない。

レオンは一気にエレベーターまで向かった。

BSAA欧州本部に所属しているパーカー・ルチアーニは、ヘリでシカゴへと向かつ

ていた。

「全く、どこもかしこもバイオテロか……」

この世界は少しの平穏もないのか？ パーカーはそう思う。戦っても戦っても、次から次へと狂った連中が現れ、バイオテロを起こす。最早この世界に平穏は訪れないのかもしれない。

「パーカーさん、そろそろシカゴです」

パイロットが言った。

シカゴが見えてくる。そこからで火事が起きており、黒煙が上がっていた。

「街の中心部で降ろしてくれ」

パーカーはリュックを背負う。リュックの中には、黒瀬涼の装備が一式入っている。これを黒瀬に届けなければならぬ。

街に入る。

酷い状況だ。BSAA北米支部の全部隊がまだ到着していないらしく、警察官と州兵が奮闘していた。だが、対B・O・Wの訓練を受けていない彼らは、やられていく一方だった。

「B・O・Wが多いな。今回のテロリストは規模が違うようだ」

そう言った次の瞬間、パーカーに血が降り注いだ。

「なに？」

先ほどまでヘリを操縦していたパイロットの首が肉片へと変わっていた。フロントガラスが割れている。何者かに狙撃された。

機体が揺らぐ。パイロットの頭をぶち抜いた弾が、当たってはいけないところに当たってしまったようだ。

「クソ！」

パーカーはドアを開ける。ヘリの外部は炎を上げていた。墜落する。もしかしたら、墜落する前に爆発するかもしれない。

ヘリはビルの屋上をすれすれで通過していた。これなら一か八か。

「今日の酒は上手くなりそうだな」

パーカーはヘリから飛び降りた。

59話 それぞれの想い

レイアンは一般的に言う軍事オタクだった。

父が海兵隊だったこともあるのだろう、子供の頃から、そういうことばかり調べていた。

レイアンは決して運動神経が良い方ではなかった。学校での徒競走も後ろから数える方が早かったし、その他も身体能力も平均以下だった。

だが、それでも彼は諦めなかった。父と同じような逞しい軍人になるため、必死に努力した。

そして何年もの月日が流れた。軍人という選択肢もあつたが、彼はBSAAに入り、バイオテロと戦う決意を決めた。

世界中で起こるバイオテロは、彼の友人まで死に至らしめた。それがきっかけだった。

BSAAの創設者と言われるオリジナル・イレブン。彼らの存在はレイアンを奮い立たせた。

オリジナル・イレブンのほとんどがラクーン事件、カントウ事件の生存者だった。ア

ンブレラに因縁のある者だ。彼らは小さな組織を、国連の特殊部隊になるまでに成長させた。

そして今、その一人がレイアンの隣にいた。

黒瀬涼。ラクーン事件やカントウ事件の生き残り。こんな経歴を持つ人物など彼一人だろう。

黒瀬は理由は知らないが、銃が使えないらしい。噂によれば、トラウマがあるとか。だが、彼は銃を使わなくても強かった。

レイアンとラングが渡した銃剣で、次々と現れるB・O・Wを倒していく。人間業とは思えない。B・O・Wの身体能力を圧倒している。

やはり彼は英雄だ。レイアンはそう思いながら、トリガーを絞り続けた。

ビリー・コーエンは、街の中を進んでいた。現れるB・O・Wを殲滅しながら。

「隊長！ このままじゃ弾が切れます！」

「敵が多すぎます！」

ビリーの部下が弱音を吐く。いや、言うのが普通だ。これほどまでのB・O・W。を相手にするのは、コーカサス研究所以来だ。

「あと少しで援軍が来る。それまで耐えるんだ」

コーカサス研究所、あの時はたったの十数人で戦った。その時のメンバーは優秀すぎた。ほとんどがB・O・W。との戦闘に馴れているメンバーで構成されていたからだ。

今のメンバーは、お世辞にもそうは言えない。不純な動機で入った者もいれば、戦闘のせの字も知らない奴。今のBSAA百人より、あの時のメンバーをかき集めた方が迅速にこの事件は対処できるだろう。だが、世界中でバイオテロが起こっている今、あのメンバーを一ヶ所に集めれば、他の地域が手薄になる。それほど強いメンバーだ。

しかし、今のメンバーを成長させるのは、オリジナル・イレブンであり、ビリーだった。彼らも死にたくて戦っている訳じゃない。誰かを救いたくて戦っているんだ。そして、その救い方を教えるのはビリーだ。

「リロード中は他の奴が援護に入れ。弾は増援と一緒に来るはずだ。今からレベッカ・チェンバースの救出に向かう！」

レベッカ・チェンバース。彼女とは、共に助け合い、戦った仲だ。彼女のためなら、命さえ惜しくない。

「美しいな」

グレッグ・リチャードソンは、街の惨劇を見ながら言った。

彼がいる場所は、アメリカで二番目に高いとされるシアーズ・タワーの最上階。彼の横には、奇妙な箱形装置があった。この機械を使つて、トールウィルスを上空の風に乗せてアメリカ中に散布させるのだ。

「ここまでの計画は完璧だな」

ワインを口を含む。今宵は満月。最期に見える月が満月とは何とも幸運なのだろう。

いずれこの場所もばれ、奴らが攻め混んで来るはずだ。だが、ここに来るまでに、F—ウィルスで強化された傭兵が徘徊している。並の人間じゃ辿り着けないだろう。ここに辿り着けるのはただ一人、黒瀬涼だ。

『リョウ！ グレッグの計画がわかったわ』

レベッカから通信が入る。酒場に置かれていたパソコンの解析が進んだのだろう。

「なんだ？」

『teeウイルスをアメリカ全土に撒くのよ。シアーズ・タワー、その屋上でteeウイルスを散布するの』

「了解！ シアーズ・タワーだな！」

確かシアーズ・タワーの屋上は標高四百五十メートルほど。そこからteeウイルスを撒けば、風に乗ってかなり遠くまでteeウイルスが散布されてしまう。

「聞いたな!? 戦える奴はシアーズ・タワーに行くぞ」

味方は四人。シャリア、ケンド、レイアン、ラング。彼らは疲弊している。弾も残りわずかになっていた。彼らを連れていくべきか、正直迷う。シアーズ・タワーには強化された傭兵が集まっているだろう。そんな奴らと戦う力など彼らには残ってはいまい。

「俺は行くぞ」

ラングが言った。

「俺は、俺の両親はラクーン事件で死んだんだ。あんな事件、繰り返してたまるか！」

ラングの目は正しく燃えていた。彼の志は黒瀬と同じだ。

「私も行きます」

「オレも、クロセさんが行くとこならどこでも着いていきます！」

彼だけではない、皆も同じだ。

「ケンドは？」

ケンドは答えない。彼の顔は疲労でいっばいだった。

「ここに別部隊を送る。それまで隠れていてくれ」

疲れた隊員をほつとくことになってしまいが、今はアメリカ中の市民の命がかかっている。

黒瀬たちがシアーズ・タワーに向けて走り出した。

「クソー」

シアーズ・タワーに向けて走っていく黒瀬たちを見て、ケンドは銃を地面に叩き付けた。

何故俺は戦っているんだ？ 何故あいつらはそれほどまでに命をかける？

ケンドは自分の命が一番だと考えていた。いや、ケンドだけではない。大勢が思っている。だが、彼らは違う。自分の命よりも他の命のために戦っている。

それは彼の過去が関係していた。

母は他の男と毎日遊び、父は酒とドラッグまみれ。ケンドはそんな父から毎日虐待を受けていた。結局両親ともに警察に捕まり、ケンドは保護施設で育った。それから、一

人で生きるため、強くなるため、BSAAに入った。

「俺は……俺は……」

ケンドは膝をついた。

パーカーは、ビルの屋上から辺りを確認する。

ビルの壁には、大蜘蛛が張り付いており、道路にはハンターやケルベロス、他にも様々のB・O・Wが暴れまわっている。

「こんな街を進まなきゃならんとは……」

BSAAの使命はウィルスやB・O・W；、それを使うテロリストと根絶させることだ。弱音を吐いてはいられない。

パーカーが飛び降りたビルは、高級ホテルのようだった。

エレベーターに早速乗り、一階へのボタンを押す。エレベーターは一階へと降りていくが、誰かがボタンをおしたのか、途中の階で止まってしまう。

「何がお出ましかな？」

ボタンを押したのが、客や従業員という可能性もあるが、B・O・Wという可能性

も十分ありうる。パーカーはライフルを扉に構えた。もし、B・O・W. だったら、蜂の巣にしてやる。

扉が開く。ハンドガンを構えた金髪の男がそこにはいた。

「一緒に乗ってもいいかい？」

軽そうな男だと思った。しかし、どこからか貫禄があるような、そんな気もする。

男は乗り込み、閉めるボタンを押す。そしてエレベーターは再び動き出した。

「BSAAはもう展開してたのか。主犯はわかっているのか？」

やけに慣れている。この男は特殊部隊かなにかかもしれない。

「パーカーだ。お前は？」

「政府のエージェント、レオンだ。休暇中だったんだが、そうは言っていられないようだな」

レオン、聞いたことがあった。レオン・レポートを書いたレオンか？

「運は悪いようだな」

「まあ、それなりに」

パーカーも運が悪い方だが、逆に言えば運が良い方でもあった。今生きている時点で、運が良い。

エレベーターが一階に到着する。

戦いが始まる。
殺戮を求めるB.
O.
W.
との……

60話 普通

「リョウウ！」

「パーカー、レオン!？」

シアーズ・タワーの近く、黒瀬たちはレオン、パーカーと合流した。

「パーカーはわかるが、何でレオンが？ まさかいつもの運の悪さか？」

「……その通りだ」

黒瀬もそうだが、レオンも大概運が悪い。いや、ラクーンシティの生還者のほとんどは運が悪い奴らの集まりだが。

「で、シアーズ・タワーにテロリストがいるんだろ？」

「ああ。屋上からテーウィルスを撒くらしい」

あの量のテーウィルスを撒けば、アメリカ以外にも近隣の国にも影響が及ぶ。

「ヘリでは近づけないのか？」

レオンが聞くが、それにパーカーが答えた。

「無理だろうな。あのタワーには狙撃要員がいるはずだ。俺の乗ってきたヘリもパイロットごと撃たれた」

「なるほど、だからエレベーターに乗っていたのか」

黒瀬たちにはレオンとパーカーが何を言っているかわからなかったが、既に仲良くなっているらしい。

「ともかくシアーズ・タワーに乗り込むんだろ？ 正々堂々入り口から行くのか？」

「それしか方法はないな。こここそ隠れてもどこに狙撃手がいるのかもわからないし」

パーカーとレオン。二人が加わったことで戦力がかなり上がる。

タワーの前まで来ると、傭兵が数人、入り口から見張っていた。レオンとパーカーが撃ち、増援が来ない内にタワー内へと入る。

「リヨウ、これを」

パーカーからリュックを渡される。

「忘れ物だ」

中身は黒瀬の装備一式だった。

「ありがとう、パーカー」

黒瀬は瞬く間にいつもの戦闘服に着替えた。

「うおおお！ クロセさんのフル装備！ 後で写真撮ってもいいですか!？」

レイアンは興奮気味に言った。

「おい、リヨウ。大丈夫なのか、こいつ」

「俺のファンだって。嬉しいだろ？」

そうこうふざけていると、黒瀬たちに銃弾が降り注ぐ。黒瀬たちは近くの柱に飛び込んで回避した。

見張りがやられたことに気づいた傭兵が集まってきた。

「リヨウ、ここは俺たちに任せろ。倒してすぐに追い付く」

とレオン。

「だけどあいつらは強いぞ。他の傭兵よりも何倍も」

「そうらしいな。でもここですつと足止めをくつておく気か？」

それもそうだ。テーウィルス散布の時間まで残り少ない。ここは、突破できる黒瀬だけでも行くべきだった。

「皆！……ここは任せた！」

レオンとパーカー、鍛えられたBSAAの三人。そう簡単にはやられない。

黒瀬は腰の刀を抜刀した。

——そう、この感じだ。

空気が震える。鈍い者にもわかるほど、エントランスは黒瀬の殺気で埋め尽くされていった。

黒瀬は歩いて柱から出る。傭兵は黒瀬のその行動に驚いたのか、一瞬だけ銃撃が止ま

る。

傭兵たちも気づいたのだろう。この恐ろしい殺気を出しているのが誰なのかを。

「う、撃て！」

傭兵は射撃を再開した。再開したと同時に、黒瀬は二階へと上がっていた。

「はっ。」

傭兵はすつとんきような声を上げた。それもそのはず、目の前の傭兵たちが血飛沫を上げていたからだ。あの一瞬の内に……。

黒瀬はエレベーターのボタンを押した。

——中に六人。

まだ到着していないが、長年の勘と実力で把握できた。全員扉方向へと銃を構えてい

る。エレベーターが到着し、扉が開く。黒瀬の推測通り、六人が銃を構えていた。

「それがどうした？」

刹那、黒瀬は傭兵を斬り裂き、血だらけのエレベーターへと乗り込んだ。

「クロセ・リョウカ」

タワアの屋上。そこには奴がいた。

グレッグ・リチャードソン。このバイオテロの主犯だ。

グレッグの隣には妙な機械があった。あれで恐らくティーウィルスを散布するのだろう。

「好きな武器を二つ取って、他は捨てる。言う通りにしなければ今すぐに機械を起動させ、ティーウィルスを散布する」

グレッグは機械に触れる。脅しではない、本気だ。

「わかった」

折角パーカーが届けてくれた装備だが、もう使えないようだ。黒瀬は刀とサバイバルナイフを取り、他の武器を捨てる。

「それで良い。素直な奴は好きだ」

「俺はおまえが嫌いだけだな」

グレッグを倒し、あの機械を止める。それが黒瀬がやれること。失敗すれば、アメリカ、もしかしたら世界中にティーウィルスが蔓延する可能性もある。

グレッグは三点バースト、大型弾倉のハンドガンとコンパクトナイフを取り出した。近接武器しかない黒瀬は圧倒的に不利だ。

「脅している側だからな。これくらいのハンデは許してくれ」

「……………」

黒瀬は無言で答える。そして抜刀した。

二人は睨み合う。じりじりと円形に移動し、グレッグの発砲によって戦いの幕は上がった。

マシンガンのような連射速度の銃弾が黒瀬へと襲い掛かる。それを黒瀬は避けず、まっすぐに突っ込む。

「うおおおおお!!」

咆哮。黒瀬に襲い掛かるはずの弾は、次々に真つ二つにされていく。だが、全部を弾けるといってもなく、黒瀬の全身にかすり傷が出来ていた。

「やるな!」

グレッグはマガジンを交換しようとするが、黒瀬の刀がそれを遮る。グレッグの胸に刀が届く前に、ナイフで弾かれる。反射神経は相手も高い。黒瀬は刀を素早く引いて、また電光石火の一撃を喰らわせようとするが、素早いリロードを終わらせたグレッグが黒瀬の胸に弾丸を撃ち込んだ。

「ぐ……………ッ!」

防弾チョッキのおかげで弾は弾かれるが、それでも骨を折るくらいの威力はあった。

よろめく黒瀬にグレッグはまた銃を撃つ。黒瀬の肋骨はボロボロになっていた。そこにグレッグの前蹴りが飛んできた。黒瀬はまともに喰らい、後方に吹き飛ばされる。

「どうだね。痛いかな？」

動けない黒瀬の顔をグレッグが殴る。

グレッグは昨日戦ったときよりも遥かに強くなっている。

「君は強い。だが、それがどうした？　いくら強くても近接格闘しか出来ない君に負けるわけがないだろう？」

「……それもそうだな」

黒瀬は口に溜まっている血を吐き出した。

「でもな、俺は、俺たちはそんなことで諦めないんだよ。おまえらみたいなクズがいる限り……」

「まあ、B S A Aの根性は認めている。だが、私たちのようなクズがいるから、おまえらは今、ここにいるんだろう？　私たちのようなテロリストを相手にすることで飯が食える」

反論しようにも出来ない。グレッグの言う通りだった。彼らのようなテロリストが存在しなければB S A Aという組織は出来ていない。

「おまえは何のためにこんなことをするんだ？」

テロリストの考えなど知りたくもないが、傷が回復するまで時間稼ぎをしなければならぬ。

「何のために……か。私には……俺にはこの道しかなかったんだよ。幼い頃から戦争をやっていて、人を殺してきて……。そんな人間が一般人のように普通の生活を送れると思うか？ 俺にとつての“普通”は銃を持って敵を撃ち殺すだけだ。そこにウイルス、B・O・W. という要素が追加されただけ。時代も変わるんだよ」

確かに彼の言う通り、子供の頃から戦争をしていた人間が、幸せな生活を送れると言われれば疑問を持つ。けれども、そんな理由で人殺しをするなんてイカれている。

「おまえはどうなんだ？ おまえに戦う理由も、意味もあるのか？」

黒瀬は口を紡ぐ。戦う理由、意味……。

「俺はな、アンブレラなんかいなきやな、一般人みたいな普通の生活を送ってたんだよ。普通に学校生活して、大学に行って、戦いなんて関係ない職に就いてた。結婚もしてただろうし、子供も出来てただろう。でも、あんな光景を見て、真実を知って……普通ではいられなくなったんだよ」

黒瀬の戦う理由はグレッジと似たものだった。

ラクーン事件に巻き込まれ、戦う選択をし、今もウイルスやB・O・W. を使うテロリストと戦っている。もう戦いから離れられない身体になっていた。

「俺は……ウイルスを悪用するやつを許さない。あの光景を、これ以上繰り返したくない」

「ラクーンの生還者だからこそ言えることだな」

数分の時間稼ぎの末、傷はほとんど回復した。これでさっきの通り戦える。

グレッグと黒瀬、再び互いに睨み合う。グレッグはマガジンを交換し、いつでも撃てる状態にしている。油断さえしなければ、銃弾程度斬れるが、奴は普通の人間ではない。しかも何故か前回よりも強くなっている。すさまじい力で黒瀬を翻弄するだろう。

「まだ戦えるだろう？」

「もちろん。さあやろう」

61話 諦めない

「クソ、数が減らないな」

ビリーとその部隊は、レベツカと合流するために街を走る。だが、B S A Aの使命はB・O・Wの殲滅。目に写るB・O・Wを排除しながらなので、進行ペースは遅い。

既に体力も限界を迎えていた。

「レベツカ、今どこにいる?」

『近くの銀行に立て籠ってるわ』

もうそろそろで到着する。警察や消防隊も力を合わせて戦っている。殲滅までそう時間は掛からないだろう。

『ああ、嘘……!』

レベツカの怯えた声。その後ろからは一緒に立て籠っているらしい男女の叫び声が聞こえてくる。

「レベツカ、どうした!?!」

返答はない。何かがあったのは確実だ。

銀行が見えてくる。ビリーは先行し中へ突入した。

「あいつは……！」

ビリーの目の前には、大男の後ろ姿があった。右腕が爪のようになっていた。大男が歩く先にはレベッカと他に避難している一般人の姿。

その大男の姿には見覚えがあった。

ビリーは大男の注意を惹き付けるために数発背中へ撃ち込む。

大男が振り向く。皮膚はボロボロに腐敗しており、心臓が露出している。

間違いない。ビリーは確信する。大男の正体はプロトタイラントだ。

1998年、アークレイ山地にあるアンブレラの幹部養成所でレベッカと共に戦い、倒した敵。

「まだ在庫があったとはな！」

タイラントは、攻撃目標をレベッカからビリーへと変え、歩き出す。そしてその歩幅はどんどん素早くなっていった。

ビリーは銀行から出る。ちょうど追い付いた部隊と合流した。

「敵はタイラントだ！　これから排除する！」

隊員は疲労しているが、ここでタイラントを抑えなければ、もつと被害者が出てしまう。

「シヨットガンで足を止めろ！」

ビリーの指示でシヨットガンを持った三人が、タイラントの足を撃つ。タイラントは膝をついた。

「一気に仕留めるぞ！」

ビリーを含めた九人が一斉に銃を掃射する。タイラントは巨大な腕と爪で急所を守る。だが、いくら強靱であろうとこれほどの弾を喰らえば、ただではすまない。

『ウゴオオオオオオ!!』

タイラントが叫ぶ。その叫びに隊員の数名が怯み、銃撃が止んでしまう。

「く、バカ！」

マズイ。ビリーは直感的にそう思った。B・O・Wには一瞬の間も命取りになる。そしてそれは現実へと変わる。

タイラントは一瞬の間を使い、一気に距離を詰める。気づいた時にはもう遅かった。その長い右腕の爪で隊員の一人の胸を貫いた。

「ぐ、あああああ!?!」

悲痛な叫び声をあげる。貫かれた隊員は片手に持っているアサルトライフルを乱射した。もちろんそれでタイラントに当たることはなく、被害は仲間にあふ。隊員は腕を振り回しながら撃つせいで、仲間へ銃弾が飛ぶ。

一人の頭を貫き、もう一人の肩へと命中した。

「しゃがめ！」

隊員は直ぐ様伏せるが、間に合わなかった一人の足が撃たれる。

胸を貫かれた隊員はタイラントに投げ捨てられ、地面に血溜まりを作る。

「うわあああああ！」

足を負傷した隊員にタイラントが近づく。片手で後ろに下がりながらハンドガンで応戦するが、巨大な足で頭を潰されてしまう。

「くー！」

ビリーは脳をフル回転にして考える。どうすれば倒せる!?

隊員はこの数十秒の間で九人から五人へと減ってしまった。しかも、ビリーを除いた四人は、今の光景を見て戦意を喪失していた。

「しっかりしろ！ 殺されるぞー！」

ビリーは立ち上がり、タイラントの背中に撃つ。

カチン、カチン。その音はビリーを絶望へと追いやった。——弾切れだ。

予備のマガジンはここに来るまでの戦いで使い果たしてしまった。残る武器はハンドガンと手榴弾、ナイフだけになっていた。

「……………」

ビリーはちらりと右を見た。死んだ隊員の銃、そしてマガジン。それを使えばまだ戦える。しかし、敵はそんな隙を与えてくれそうにない。そんなことすれば先程の隊員と同じで胸を貫かれるだろう。

「死にやがれえええ!! 化けもんがあああ!!」

狂乱状態と化した隊員の一人がタイラントへ怒りの銃弾を浴びせる。そのおかげでヘイトはビリーからその隊員へと移る。だが、その状態の隊員をほっとくわけにはいかない

「よせ! 正気に戻れ!」

ビリーは隊員の銃を下げようとするが、目の前で次々と仲間が死んでしまった人間の正気を取り戻すのは簡単ではない。

ビリーと隊員に巨体が迫る。タツクルの構えだった。ビリーは隊員を押し避けて避けさせようとするが、時すでに遅い。二人は巨人のタツクルを完全に喰らってしまう。

「ぐう!」

脳へ直接衝撃が響く。まるで全身の骨が砕けたような感触と浮遊感。二人は吹き飛ばされる。

ビリーは地面にゴロゴロと転がり、もう一人は電柱に頭を打ち付ける。電柱には男の頭から出た血が付いていた。

ビリーは立ち上がろうとするが、さっきの衝撃で身体が動かない。視界が揺らぐ。
(こんなところで眠るわけには——！)

失いそうな意識を気合いで持たせようとするが、身体はそれを逆らおうとする。しかしビリーも簡単に気絶するわけにはいかなかった。

レベツカがいる。

もし、ここでビリーが死んでしまつたら、タイラントはレベツカの元へ向かうだろう。それだけは避けなくてはいけない。彼女はまだ生きていなくてはいけない存在だ。

「うわああああー！」

残っていた隊員もタイラントにねじ伏せられていく。

——すまない。

ビリーは、彼だけを残し、死んでいった隊員に心の底から謝る。自分の力不足だ。

今まで何度も仲間を失ってきたが、仲間が死ぬのはなかった一向に慣れない。いや、慣れてはいけない。

これ以上仲間を失いたくないと願って、何人死んだらどうか。職業柄仕方ないのかも知れないが、目の前で死んでしまうのは明らかに自分の責任だ。

撤退も可能だった。しかし、ビリーはレベツカに気を取られ過ぎていた。疲労した隊員をタイラントと戦わせるなど無謀な行為だったのかもしれない。

ビリーは薄れていく意識の中、後悔だけが積もる。ズシンズシンと重たい足音がビリーへと近づく。

タイラントだ。

ビリーは最早戦意を喪失していた。もう戦えない。彼の身体もそう言っている。足音がビリーの前で止まる。タイラントは、その大きな右腕の爪を振り上げた。

——ダメか。

こんなことになるならレベツカに言っておけば良かった。

諦めかけたその時、二発の銃声が轟いた。その二発はタイラントの背中に命中するが、特に大したダメージもない。だが、腕を降り下ろすことなくタイラントは振り返る。そこには女がいた。レベツカ・チェンバース。彼女はビリーを救うために自分の命を投げ出そうとしてまで、撃つたのだ。

レベツカのその行為はタイラントの標的を変えることに成功した。ビリーの元を離れ、レベツカへと歩を進める。

「……レベツカ」

ビリーの目にはうつすらと彼女が見える。

「レベツカアアアア！」

失いかけた戦意も意識もそれだけで元に戻る。

彼女だけは死なせるわけにはいかない。その心が彼を呼び戻した。

ビリーは本来動くはずのない足と手に力を入れる。ゆっくりと彼は立ち上がる。

『うおおおおお!!』

彼には走れる力などなかった。倒れるようにタイラントとの距離を縮める。その間に出したのはナイフ。そのナイフを倒れながらタイラントの右足の腱に突き刺した。

——まだだ。

この程度ではタイラントはびくともしない。ビリーはホルスターからハンドガンを抜き、タイラントの左足へと全弾撃つ。それでやっとタイラントが膝をついた。

「ビリーー!」

レベツカが叫ぶ。とても痛々しい声だ。

——すまないレベツカ。

ビリーは腰から最後の手榴弾を取り出した。タイラントから離れる余裕はない。

ビリーは手榴弾のピンを抜く。自爆する覚悟だった。これで奴が倒せるのなら——

『うおおおおお!!』

無線に誰かの雄叫びが流れる。それと同時に車のエンジン音。ビリーは音の方向を見ると、車がタイラントとビリーの方に突っ込んできていた。

その車はビリーすれすれを通り、タイラントへと衝突する。それでも運転手はアクセ

ルを緩めず、加速させる。そして車はタイラントごとビルの壁へと衝突した。

運転手は車のドアを開け、外へと飛び出る。運転手はB S A Aの服を着ていた。その男は、確か黒瀬たちと行動を共にしているはずのケンドという隊員だ。

「早くその手榴弾を！」

ケンドがビリーに叫ぶ。

タイラントはあれほどの攻撃を喰らっても尚、生きている。しかも、車を退かそうと押し上げる。車は煙を揚げており、壊れた箇所からオイルが漏れていた。

これを見てビリーがやることはひとつだった。

「うおおおおお!!」

ビリーは最後の力を振り絞り手に持っていた手榴弾をタイラントと車へと投げる。その手榴弾は車の下へと潜り込む。

「伏せろ！」

ドオオオン!!

爆発した手榴弾は、車のオイルへと引火し、車ごと大爆発を起こす。そして壁と車に挟まれていたタイラントは、その大爆発でバラバラに吹き飛ぶ。

「最高だぜ……」

彼女を救えた。

酷い耳鳴りと共に、ビリーの意識は途切れていった。

6 2話 自分で決めた

「うおおおおお!!」

レオンは咆哮しながら、傭兵へと回し蹴りを喰らわせる。しかし、その攻撃は見切られていたかのように塞がれる。傭兵は腰の鞘からコンバットナイフを抜き、くるりと回転させてレオンへと向ける。レオンもサバイバルナイフを抜いて、構える。

瞬間、二つの刃が交錯した。激しい攻防。互いのナイフがぶつかり合う度に火花を散らす。

傭兵たちがいくらウィルスで強化されたといっても、技術が変わるわけではない。レオンは何年も訓練を積み重ね、大統領直属のエージェントとなっている。自分の力に心酔している輩に負けるはずがない。

しかし、技術でカバーしているレオンと、パワー、スピードで勝っている傭兵とは戦い続けるには限界がある。少しずつではあるが、傭兵のナイフがレオンのジャケットを掠め取っていく。B S A Aの四人に援護を頼みたいところだが、彼らも他の傭兵で手一杯だ。

「ツイてないな……」

レオンは、ナイフと蹴りで攻めるがまるで動きを読まれているかのようには防がれる。奴は何年も戦地で戦ってきた傭兵。相手の動きくらい見切れるのだろう。

それならば――

レオンは一か八かの賭けに出る。失敗すればデメリットだらけだが、このまま戦っていても力負けになる。

レオンはナイフを上へと投げた。もちろん上には天井しかない。だが、傭兵は油断し目でナイフを追う。その瞬間を狙い、レオンは素早い回し蹴りを傭兵の胸へと叩き込んだ。それだけでは終わらず、落ちてくるナイフを掴み、相手がナイフを持っている腕を斬る。強化されていても痛みは感じるらしく、手からナイフを離してしまう。

武器を失った傭兵は最早敵ではない。タックルと蹴りの追い討ち、相手がぐらついたところで背中の方へと回り、腰に腕を回す。そして相手を抱えて、背中を倒れる寸前まで倒した。

鈍い音がした後には手を離し、素早く起き上がる。

傭兵もこれには堪えたのか、すつかり延びていた。

「二人でもこれか……」

レオンは額から流れる汗を拭いながら弱音を吐いてしまう。BSAAのおかげで敵は分断されたが、こんな奴がまだ待ち受けているとなると戦法を変えなければならな

い。

「……………」

ふと天井を見上げる。

リヨウは今頃、屋上でグレッグと戦っているだろう。もし、リヨウでも勝てない相手だったら……。

いや、余計な心配だ。今まで数々の化け物と戦ってきたが、リヨウも、そしてレオンも勝ってきた。不屈の精神が有る限り、どんな敵でも倒してくれる。

レオンは敵の銃を拾い、構える。

レオンたちの使命は、グレッグ以外のテロリストどもを排除すること。グレッグは必ずリヨウが倒してくれる。レオンは戦いに集中した。

「ゲホっ……」

黒瀬は吐血し、膝をつく。最早身体の限界がきていた。

黒瀬の回復力がいくら常人の何倍もあるうが、それをフルでいつまでも保てはしない。黒瀬の身体は擦り傷でさえ再生しなくなっていた。

「これが君の限界だ」

グレッグはナイフの血を拭き取り、銃に弾を装填する。グレッグは想像以上の強さだった。

F―ウイルスを取り込んだ傭兵程度なら一撃で倒せるが、グレッグはそいつらの何倍も強い。どうやらF―ウイルスを何本も体内に打ち込んでいるようだ。

「F―ウイルス……どうやら打った量が多すぎたようだ。ウイルスが今にも私の身体を支配しようと暴れているよ」

それは、想像絶する痛みであろう。グレッグがそれを抑え込んでいるのも不屈の精神があるからこそだ。

——だから何だ？

黒瀬はボロボロになった身体を無理やり起き上がらせる。

全身の骨にヒビが入り、銃で撃たれたところからは血が止まらない。だが、黒瀬も不屈の精神を持っている。

「俺には限界なんてないね。今までもそうだった」

黒瀬は今まで、体格も違う、パワーも違う格上の化け物と死闘を繰り広げてきた。その戦いの中で黒瀬はしっかりと成長し、今ここにいます。

「最後の警告だ。グレッグ・リチャードソン、投降しろ」

黒瀬は刀の刃先をグレッグの心臓に向ける。

グレッグは許せない人間だが、聞きたいことが山ほどある。FーウイルスやB・O・W・を売った組織や今回のバイオテロの目的などだ。

「バカを言うなよ」

グレッグは苦笑し銃口を黒瀬へと向ける。黒瀬はすかさず横に跳び跳ねるが、弾丸の追撃がくる。

黒瀬は致命傷になる弾だけ弾く。弾ききれなかつた弾丸は黒瀬が着用している防弾チョッキに当たる。

「う……うッ」

骨にヒビが入る。傷の再生が遅いのでこれ以上の被弾は危険だが、そうも言っではいられない。

黒瀬は少しでも距離を縮めるため、ナイフを投げる。グレッグは当然避けるが、その一瞬でも黒瀬にはチャンスだった。

「おおおおおおお!!」

咆哮。力強く握り締めた刀の柄によりいつそうの力を込め、刃先をグレッグの腹目掛けて突き刺す。

グレッグは反応しきれず、顔が苦痛で歪む。だが、すぐに反撃の銃弾。黒瀬は刀を離

し、避ける。

「ぐ、まだこの程度の力じゃ反応しきれないか……」

腹に突き刺さった刀を抜き、遠くへ投げ捨てる。その隙を黒瀬が逃がすはずもなく、グレッグの顔面に飛び膝蹴りを喰らわせる。

(まだだ……！)

膝をついたグレッグに追撃をかけようとする。しかし、黒瀬の身体は悲鳴を上げ、倒れこんでしまう。

「あれ……？ 身体が……」

立ち上がろうとしても力が入らない。全身の痛みがどんどん激しくなる。身体に無理をさせ過ぎた。

「どうやら身体の限界がきたようだな」

グレッグは立ち上がり、腕に注射を打った。あれがF―ウイルスだろう。グレッグの腹の傷がみるみると治っていく。

「力というものは素晴らしい。お前もそう思うだろう？」

「……そうだな。俺にもつと力があればアンタをとづくに殺してる」

身体の傷が再生しない。このままでは奴に勝てない。

(くそ、意識が……)

あまりの痛みに勝手にシャツトダウンしようとする。

(寝るわけのは……)

徐々に瞼が降りて行く。黒瀬でもそれを抑えられそうにはなかった。

「黒瀬リヨウ、その程度か」

「……………」

「そういえば……君はアンブレラがなかったら普通の生活を送っていたと言うが、それはない」

(え?)

いきなり何を言ってるんだと言おうとするが、声が出ない。

「そろそろ来るか」

銃声が近くなってきた。BSAAとレオンが敵を倒しながら近付いてきてる証拠だ。

「まあ、雑魚がきたところで何の役にも立たないからな」

グレッグは黒瀬の顔を見て、ニッコリと笑う。

「君の目の前で殺してやる、残酷にな。そしてアメリカ中の人間がゾンビになったところを見せつけ、絶望した君をじっくりといたぶって殺してやろう」

グレッグはレオンたちが来るだろう扉へと向かって行く

(俺は何をしてるんだ?)

混濁とした意識の中、黒瀬は疑問に思う。

他人のために戦って死ぬ。そんな人生を送りたかったわけじゃない。でもそれを選
択したのは八年前のラクーンシティにいた黒瀬自身だった。

(自分で……決めたんだ)

「まだ……だ」

グレッグはそのか細い声を聞いて立ち止まる。

振り返ると、ぼろぼろの身体の黒瀬が立ち上がろうとしていた。

骨もあちこち折れていて肋骨の骨は肺に突き刺さっているだろう。動けるケガでは
ないはずだ。

「なぜ立ち上がる?」

グレッグは素直な疑問をぶつけた。こんなにぼろぼろになって、ちよつと動いたびに
激痛が全身を走っているはずだ。なのになぜ?

「お前を倒せなかったら……みんな死んでしまう」

みんなとは今このビルにいる黒瀬の仲間だけではないだろう。アメリカ国民もだ。

「自分の命に代えてでも救いたいのか？」

「……ああ」

この言葉に嘘はない。だが、黒瀬のこの信念は――

グレッグは悲しくなった。可哀想、哀れだと。何も知らない。もしかしたら知ることもなく死ぬのかもしれない。

「お前がまだ戦うというのなら私も全力で答えよう」

とはいっても全力を出す前に黒瀬は力尽きてしまっただろうが。

グレッグはそう思った。黒瀬の今の身体じゃ歩けるかどうかとも怪しい。

「は？」

グレッグの顔の十センチメートル先には、拳があつた。血で汚れているが、力強く握られている拳が。

グレッグは考える間も無く、その力強い右ストレートを鼻っ柱からまともに喰らう。グニヤリと視界が揺らぎ、たくましい身体は後方へと吹っ飛んで壁に激突した。

鼻から血がドバドバと溢れる。鼻骨が折れたか。

「……なぜ……そんな力が出せる？」

鼻を押さえながらグレッグは立つ。黒瀬は答えない。しかし、その答えは既に知らさ

れていた。

(まさかここまで力を発揮するものなのか！)

黒瀬の傷は超スピードで回復している様子だった。それにパワーも先程より数段上がっている。

「俺は、お前が憎いよ」

黒瀬が口を開く。

「お前のせいで何百人、何千人もの未来ある一般人が死んで、そしてトーウィルスをやメリカ中に撒くだど？」

黒瀬の言葉はどす黒く変化していた。

「絶対に許されない。絶対に許さない。俺がいる限りこれ以上被害は出させない」

黒瀬は再び力強く拳を握り締めた。

(これが『R』の力……。確かにこれほどの力があれば、奴の計画も上手くいくかもしれない)

グレッグは今の状態の黒瀬には勝てないことを悟っていた。だが、逃げる気はない。

「こい。私を殺せなければ大量の人間が死ぬぞ」

人生でこれほど悦ばしいことはない。

「………負けたか」

グレッグは倒れ、星空を見上げていた。

黒瀬は傷を抑える。先程まではこのくらいすぐに再生していたが、流石に再生力は落ちていた。

グレッグは重傷だが、Fーウィルスを体内に宿している。死にはしないだろう。

「グレッグ、お前を逮捕させてもらおう」

黒瀬は拘束用の手錠を取り出し、グレッグに近付く。

「ふふ、任務は完了した」

「なに!?!」

グレッグの突然の発言に驚く。ウィルス散布装置を見るが、作動していない。

「大丈夫だ。誰も死にはしない。今のところはな……」

黒瀬はグレッグが何のことを言っているのかさっぱりわからない。

「リヨウ、大丈夫か!?!」

扉を蹴って、屋上にレオンとパーカーが突入する。

「ああ、グレッグも倒した。他のメンバーは?」

「傭兵を片付けて拘束されている従業員たちを解放している」

良かった。あの三人は無事のようだ。

「それで……こいつか。今回のバイオテロの主犯は……」

レオンはグレッグに銃口を向ける。

「仲間が……死んだか。最期に良い戦いが出来て良かったな」

グレッグは虚ろ目で呟いている。死んだ仲間語りかけているのだろう。何年間も付き合ってきた仲間だ。こんな奴でも良い信頼関係を築いていたはずだ。

「黒瀬リヨウ、最後に良いことを教えてやろう」

「最後……？ お前は取調室でたくさん吐いてもらう予定だが」

「敵は……すぐ近くにいるぞ。誰も信頼しない方がいい」

「何言ってるんだ？」

敵はすぐに近くにいる。それはグレッグのことではなく、仲間のことを言っているのだろう。

「あ、ぐあ!?! あがああああ!!」

グレッグはいきなりうめきだす。身体から太い血管が浮かび上がり、手足ばたつかせる。

「どうした!?!」

黒瀬はグレッグに触れようとするが、凄まじい力で振り払われた。

「F—ウイルスが……暴走しているッ……!!」

グレッグの筋肉はみるみる膨張する。大量に打ったウイルスが弱ったグレッグの身体を支配しようとしてるのだ。

「正気を保て! まだ聞きたいことが山ほどあるんだ!」

B・O・W・やF—ウイルスの入手方、今回のテロの目的。何一つ解決していない。

「アア……これが、ウイルスのチカラ……。スばらシイ」

もう黒瀬の言葉は届いていない。グレッグの身体は巨大化しその姿はタイラントの二倍はある。もう人間とは呼べない。

「リヨウ、もう手遅れだ。俺たちで片付けるぞ」

パーカーとレオンは銃を構える。

「……そうだな」

黒瀬は武器を拾う。

「じゃあな、グレッグ」

——ウイルスの恐ろしさ。理解できたか?

グレッグの人生は悲しい結末だった。

「朝日か……」

これほどの戦いが起きても太陽は昇る。たくさんの人間が死んだが、もう街には誰の叫び声も響いてなかった。増援にきたB S A Aと米軍のおかげで街中のB・O・Wは駆除できただろう。

屋上からの景色は綺麗だった。あんな戦いの後だというのに……

「なあ、レオン。俺たちはいつまで戦えばいいんだ？」

アンブレラの名は、一生歴史に刻まれる。最悪の世界を築いた張本人。終わりのない戦い。

「さあな。死ぬまでかもしれない。だけどお前はそんなことでは止まらないだろう？」

「ああ。ウイルスを根絶する。悪用するやつもだ。この人生を選択したのは俺自身だから……」

——望んでいた未来じゃなかったとしても、希望のない未来だとしても俺は戦う。

「リヨウさん、お別れですね」

黒瀬が出発する空港に、出迎えてくれたBSAAの四人が見送りにきていた。

ラング、シャリア、レイアン、ケンドは今回の事件で立派に成長した。

「クロセ・リヨウ……すまない」

ケンドはいきなり頭を下げた。

「俺は何も知らないのに、勝手にバカにして。そして俺は逃げたんだ。何も出来なかった……」

「いや、お前の言う通りだったよ。銃が使えなければ俺は弱いままさ。今回も手こずったしな。いつか仲間を失うかもしれない。それに比べてお前はよくやったよ」

ビリーとレベツカの話によれば、タイラントとの戦いのときに助けられたらしい。ビリーは入院中だが。

「お前は自分で選択したんだ。逃げるんじゃないやなくて戦う道を……」

この四人は強い。身体ともに。

「さて、俺は行くよ。新しい任務がある」

これまでもこれからも黒瀬の生活は変わらない。バイオテロが起こる限り、世界中を飛び続ける。

黒瀬はエレベーターへと歩く。その途中で、BSAAの携帯端末に連絡が入る。クリ

スからだった。

クリスは別の任務で基地を留守にしていると聞いているが……。

「どうした、クリス？」

「……すまない、ジルが……」

「え？」

本当の地獄の始まりはここからだった。

番外編3

結婚式

今日、小室孝と毒島冴子の結婚式が日本で行われる。

黒瀬リヨウは、十分前に結婚式会場に到着した。

「遅い！」

会場に入るや否や、高城の鉄拳が飛んでくる。

「間に合ったからいいだろ」

「普通はもっと前にくるわよ。アンタ以外全員来てるんだからね」

会場は黒瀬の見知った人物ばかりだった。

「ほとんどB S A Aのメンバーじゃないか」

「そりゃB S A Aで働いてるからね」

クリスやジルの姿もある。流石に関係の薄いレオンの姿はなかった。黒瀬はクリスのスーツ姿を見て吹き出しそうになるが、手で押さえる。

「失礼よ、アンタ」

「いや、クリスがスーツを着てるところなんて初めて見たからさ」

黒瀬は高城に案内され、席に座る。少し待つと、小室と冴子が登場した。和装に身を包まれた毒島冴子は誰もが美しいと思っただろう。小室は恥ずかしそうに顔を真っ赤にした。

「小室の奴、緊張してるな」

「結婚式なんだから緊張くらいするでしょ」

「そんなもんか」

一通りの儀式を済ませ、二人は誓いのキスを終わられた。

結婚式が終わった後は、披露宴が行われた。ほとんど見知った顔ざからか会場は賑わっている。

黒瀬は運ばれてきた料理に手をつける。久しぶりに戦闘糧食以外を食べ、舌が喜んだ。

同じテーブルには、高城、平野、彩、静香の姿があるが、宮本の姿はなかった。

「すまん、トイレに行ってくる」

黒瀬は席を立てて会場を出る。宮本は簡単に見つかり、ロビーのソファアに座ってい

た。ボーと外を見つめている。

「あの場所にいたくないのか？」

黒瀬に気づいた宮本はゆっくりと視線を上げた。

「慰めにきたの？」

「心配しに来た」

宮本の強さによく知っているが、心の強さはそうでもない。黒瀬は彼女が小室に恋愛感情を抱いていたのも知っているし、冴子に嫉妬していたのも知っている。

「バカよね、あたし。あの時から孝があの人のことを好きなのは知ってたのに……」

あの時……カントウ事件のことを言っているのだろう。黒瀬の目から見ても、小室の気持ちはあの時から既に冴子に傾いていた。

「でも、孝を諦めきれなくて、BSAAまで入って……それでも駄目だった」

宮本の目には涙が潤んでいた。今にも泣き出しそうなほどだ。

「辞めるか？ BSAA」

宮本が言った通り、彼女は他人のために自分を犠牲にする性格ではない。小室目当てだ。黒瀬はとつくに気づいていた。

「いえ、辞めないわ」

宮本はすっと立ち上がった。袖で涙を拭う。

「もう戻れないの。この世界を知って普通の生活に戻ることなんて出来ない」

宮本の目は決意に満ちていた。

「安心したよ。宮本が辞めたらBSAAの戦力が半減するからな」

「あなたの頭の中ではあたしだけ強い設定なのよ……」

「どうやら心配無用だったようだ。黒瀬は会場に戻ろうとする。」

「黒瀬」

「ん？」

「ありがとう」

「何もしてないよ」

平野コータは怯えていた。

小室と冴子の結婚式から半年後、釣られるようにして高城に告白し、そして今日結婚式が行われる。

平野は高城のウエディングドレス姿に見惚れる暇もない。純白のウエディングドレスを纏った高城沙耶と腕を組んでいるのは、平野の義父となる高城壮一郎。彼の重く鋭い目付きで今にも平野は気絶しそうだった。参列席からも彼の配下から殺気が飛んでくる。

高城にとっては最高の結婚式かもしれないが、平野にとっては最悪だ。緊張で出なかつた小便が、ここで出そうだった。

高城親子はバージンをロードをゆつくり、一歩ずつ進む。その一歩の度に壮一郎の眼力に潰されてしまいそうだ。

(あ、あれ?)

平野は参列席から殺気がしなくなつたことに気づく。先程まで殺気立っていた壮一郎の配下が下を向いて怯えていた。配下の後ろの席に座っている黒瀬がニタニタと笑っている。そして口パクで言った。

「邪魔者は滅らした。後はおまえ自身だ」

(ありがとう! 我が友よ)

残るは壮一郎のみ。一对一の勝負だ。残り五メートル。天変地異が起ころうかというほど平野の精神は揺れる。しかし、ここまで来たのならもう引き下がれない。彼は決意した。

残り三メートル。壮一郎が巨人に見えてくるほど平野は恐怖心を抱いているが、歯を食い縛る。

そして平野は勝利した。高城は平野の隣に並ぶ。

大きな試練をクリアした平野と、何故か汗がダラダラになっている平野に困惑している高城は神父の前で神に永遠の愛を誓う。

高城と平野の結婚式の二次会は高城の家の庭で行われることになった。

「久しぶりに戻ってきたな、巡ヶ丘市」

黒瀬たちはカントウ事件の後、巡ヶ丘市にある高城の家に住まわせてもらい、高校にも通っていた。黒瀬は世界中を飛び回っていたこともあり、二年ぶりほどだ。

「少しは休んでゆつくりしたらどうだ？」

小室は心配するように肩に手を置いた。

「そうしたいけど、俺が救えるはずの命を救わないなんて無理だ」

小室は黒瀬の人一倍ある正義感を理解しているつもりだが、それは自己犠牲とも呼べた。

「リョウちゃんはありませんよりも他の人が大事なの？」

いつの間にかありませんが隣にいた。

「いや、そういうわけじゃなくてね！　ありませんも大事だよ！」

黒瀬はありすを相手にしどろもどろする。小室はその姿を見て笑ってしまふ。
こんなに平和な日が続けばいいのと思うほど、幸せを堪能できる日はない。

B. O. W. オークシヨン

黒瀬は街を歩いていた。

イタリアの街。煉瓦の建物で囲まれ、まるで物語の中に入ったような雰囲気だ。

イタリアでの仕事が終わわり、次の飛行機が来るまで時間潰しに街をぶらつくようだ。

「んっ。」

黒瀬は、人混みの中に目立つ女性を見つけた。深紅の服を着ている。背格好、髪型といい、見覚えのある人物だった。

名前はエイダ・ウオン。2004年にロス・イルミナドス教団が引き起こした事件に、彼女は支配種のプラーガを奪取するために潜入していた。

黒瀬は彼女を追い掛ける。エイダは味方が敵かわからないが、少なくとも今すぐ敵対するような奴ではない。

エイダは路地裏に入る。黒瀬はそれを確認し路地裏に入るが、そこは壁で行き止まりになっていた。

——気づかれてたのか。

完璧に気配を消したと思っていたが、彼女の方が一枚上手だったらしい。

「あら、あなただったのね」

上からの声がある。上を見ると、エイダが屋根に座っていた。

「やつぱりエイダか」

「久しぶりね、クロセ・リヨウ」

エイダは屋根から飛び降り、黒瀬の目の前まで歩く。

「私に何か用？」

エイダは笑っているような目で黒瀬に問う。

「そりゃあな。BSAAとしておまえをほつとくわけにもいかないしな。色々と暗躍しているみたいじゃないか」

彼女の活躍は黒瀬の耳にも届いていた。赤い服の女。それを聞いただけでエイダとわかる。ロス・イルミナドス教団の時もどうだが、あんなに目立つドレスで潜入する者など彼女くらいしかいまい。

「それが私のビジネスだね。表舞台は嫌いな」

表舞台に立つのが嫌いなら、服も控えめにすればいい、と黒瀬は思う。

「で、まさかエイダがこの美しい街に買い物に来た……てわけじゃないよな？」

「私だって女よ？ もちろん買い物に来た……て言いたいけどあなたの言う通り。別の目的」

「教えてくれないかな？ どうもウィルス関係の仕事だと思っただが」

黒瀬の耳に入ってくる彼女の噂は、ウィルスやB・O・W・が関係しているものかとんだ。

「当たり前よ。……教えてあげてもいいけど、BSAAが手に終えるような仕事じゃないわ」

「なんだと？」

「大物政治家が関わっているの。BSAAでも干渉出来ないわ」

「そりゃ面白そうだ」

BSAAがいくら国連管轄の組織と言っても、動けるのには限度がある。今回のように大物政治家など国連にもダメージがあるものには、出動できない。

「BSAAが無理なら単独で動く」

「あら、悪い子ね」

「そうか？」

BSAAのHQは隊員を駒として扱う人間が多い。オブライエンがまだ代表をしていれば少しは変わっただろうか。ともかく黒瀬はHQを全面的に信用してはいなかった。

エイダの目的は、組織の裏切者を殺すこと。組織が何なのかは黒瀬には知るよしもないが、その裏切者は今やB. O. W. の商売人となっている。

「本当にこんなところであるのかよ……」

黒瀬が訪れたのは、有名なホテルだった。エイダによれば、このホテルの会場でB. O. W. のオークションが開催されるらしい。黒瀬の目的は売られるB. O. W. を殺すことだ。

「堂々とやってバレないとは……」

エイダの言った通り、大物政治家が関与しているせいだろう。警察もマスコミも、B. O. W. 専門のBSAAでさえ簡単には手が出せない。

黒瀬はホテルに入り、会場へと向かう。エイダに高価そうなスーツを渡され、微妙な変装をさせられたが、黒瀬のことを知っている人物などここにはいないはずだ。

会場の入り口には黒服サンングラスの雇われ警備員が堂々と銃を持って警護をしている。

「お客様、その機械へカードを差し込んでください」

会場に入るためには、招待状のカードが必要らしい。

黒瀬はエイダから事前に預かっていた。こんなものを手に入れるなど、エイダの手腕には驚かされる。カードを読み取り機に差し込む。

ピピピピピピピ！ 機械が警報音を鳴らす。

「貴様、何者だ！」

SPたちの銃が一斉に向けられる。

「エイダのやつううう!!」

エイダから貰ったカードは偽物だったらしい。

黒瀬はその場から全力で逃げ出した。警備の人間はその場を離れ、黒瀬を追い掛ける。

「これで邪魔者は減ったわ。ありがとね」

どこかでエイダの声がした。

「くそ、エイダの奴。見つけたら逮捕してやる」

黒瀬はトイレの個室に倒した警備員を閉じ込め、服を頂く。会場に入れるカードも警備員から入手できた。

これで会場に入ることが出来る。それに警備の人間のほとんども黒瀬探索のためにホテルを彷徨くことになり、より侵入しやすくなる。結果オーライだろう。

黒瀬は扉の前に戻ってカードを使い、侵入する。

「おいおい、マジかよ」

パーティーが開催されるかのようにテーブルに豪華な食事が置いてあり、予想以上の人間がいた。そこにはテレビで見たことがある有名人も混じっている。

「……………」

黒瀬はこの場にいる全員を刑務所にぶちこみたい気分だったが、深呼吸で怒りを抑える。

警察に通報することなら簡単だ。しかし大物政治家やこれほどの有名人がいれば、確実になかったことにされるだろう。

『レーディースアンドジェントルメン！ ようこそ、B. O. W. オークションへ』
(言った！ 普通にB. O. W. オークションって言った！)

スーツの男は客に向けて饒舌に話す。彼がエイダの目的の裏切者だろう。エイダがスーツの男を始末するとして、問題はB. O. W. だ。

スーツの男の指示によって、ハンターやリッカーなどの有名なB. O. W. からマイナーなB. O. W. まで小さな檻に入れられたまま運ばれてくる。

結構な数だ。数体ほどなら一瞬で殺して逃げればいいが、これほどの数となると時間が掛かる。十秒もすれば警備に囲まれてしまう。

そうこう考えている内にB・O・Wのオークションが始まってしまった。どうやらお金持ちたちはB・O・Wをペット用に買ったり、檻の中で人間と戦わせるために買ったりするらしい。

——どうすればいい？

手がなければ、B・O・W・特效毒ガスグレネードを使うしかないが、これは人間にも有毒だ。死にはしなくても五感のいずれかを失う可能性がある。この場にいる者全員がクズだが、問答無用で殺せば黒瀬はただのテロリストだ。

「もう始めるわ」

どこかでエイダの声が聞こえた。次の瞬間、男の額には矢が突き刺さっていた。

オークションの怒声が悲鳴へと変わる。エイダは煙幕を張り、その場から立ち去る。会場はパニックになった。

「やるしかないか！」

黒瀬はステージの近くにいる人間を吹っ飛ばして檻から離れさせ、グレネードを投げる。毒ガスを吸い込んだB・O・Wが死に絶えていく。

「ステージに誰がいるぞ！」

エイダが張った煙幕が消えかかろうとしていた。警備の人間がステージへと銃を向ける。

「クソー！」

黒瀬はステージから飛び降りて、近くのテーブルを盾に即席のバリケードを作る。そこに銃撃が浴びせられる。高級そうな分厚いテーブルは銃弾でゴリゴリ削られ、もう持ちそうにない。

「クソツタレ！」

悪態をついて黒瀬はテーブルから飛び出した。手にはテーブルから落ちたナイフをフォークが持たれている。黒瀬はそれを警備員の致命傷にならない部位へと投擲する。

「邪魔だああああ！」

行く手を阻む敵をばったばったと薙ぎ倒し、扉のまえに溜まっている客の間を縫って外に飛び出す。

「奴だ！」

ロビーの入り口には警備員が待ち構えていた。銃を向けているが、黒瀬は止まらない。近くのテーブルとソファアをfrisbeeのように投げて、敵を倒し全力疾走でホテルを後にした。

「お疲れさま」

路地裏で休憩していると、屋根の上からエイダが現れる。

「おまえのせいで酷い目にあつた」

「あら、でも結果オーライじゃない」

エイダはクスクスと笑う。黒瀬には彼女が何を考えているかわからない。そもそも彼女が敵なのか味方なのかもわからないのだ。

「なあ、エイダ。おまえは何でこんなことしてるんだ？」

「さあ？ どうしてかしら」

エイダは惚ける。

「さて、私はハワイでバカンスでもするわ。追い掛けてこないでね」

「誰が追い掛けるか！」

本当につかみ所がない女だと黒瀬は思った。しかし、今回B・O・W.を始末できたのは彼女のおかげだ。

「ありがとな、エイダ」

「お礼を言われる筋合いはないわ。あなたを利用しただけよ」

エイダはそう言うと、フックショットで屋根に上がり、どこかに消えていった。

「便利そうだな、フックショット」
いつかは使ってみたいと思う黒瀬だった。

スペンサー邸／仲間の墓

スペンサー邸

ジル・バレンタイン。BSAAのオリジナルイレブンの一人。洋館事件の生存者であり、ラクーンシティの生存者でもある。ジルはBSAAを引っ張って行く頼れる存在だった。

そんな彼女が行方不明になった。

BSAAは長らく行方を眩ましていたアンブレラの総帥オズウェル・E・スペンサーの居場所を判明した。クリスとジルを派遣したが、そこに待ち構えていたのは、スペンサーを殺したアルバート・ウエスカーだった。クリス、ジルはウエスカーと戦ったが、クリスは追い詰められてしまい、それを庇ったジルはウエスカーと共に谷底に落下した。現在、谷底や付近の川でジルの捜索活動が行われている。

「それで……僕らの目的はジルさんの捜索じゃなくてスペンサー邸に潜んでいるB・O・Wの排除？」

小室孝は残念そうに言った。

「まあ、搜索の人数は足りてるしな。俺だってジルを探したいさ。でもスペンサー邸にはまだ世界に残っているアンブレラの研究所や重要な書類が眠っている可能性があるし……。搜索は他の奴らに任せよう」

黒瀬はスペンサー邸の玄関のドアを蹴って開け、中に侵入する。

「クリスさんによれば、道中に会ったB・O・Wは全て倒しているらしい。二人が行ってないところに行こう」

小室はH・Qから受け取っていた情報を確かめる。B・O・Wの名前は『ブロボ』。人形のB・O・Wで、頭にはフードを被っており、錨のような武器を持っているらしい。

「さっさと終わらせて、俺たちもジルの搜索に向かうか」

「……ああー」

小室は元気に返事をした。彼もジルが心配なのだ。小室とジルはB・S・A・Aに入る前から仲だ。不安が積もっているのだろう。

黒瀬と小室は、暗い館を進んでいく。スペンサーのS・Pの死体がゴロゴロとそこら中に転がっている。ブロボがS・Pを侵入者と勘違いして殺したらしい。

「小室、来るぞ」

ガリガリと何かを引きずっている音が廊下の曲がり角から聞こえてくる。

小室はショットガンを構える。黒瀬は抜刀した。

『ウオオオ！』

B. O. W. が吠える。だが、その声は曲がり角からではなく、後ろからだつた。振り返ると、情報通りの外見の化け物が、錨を降りおろして小室の頭を潰そうとしていた。

「小室！」

錨が小室の頭に直撃する寸前、黒瀬は刀で錨を食い止める。

——もたない！

錨の重量とプロブのパワーによつて、刀に亀裂が入る。しかし、黒瀬は錨を剃らすことに成功した。錨はズドンと床にヒビを入れる。小室がこれを喰らつていたのなら即死だろう。

「伏せろ！」

小室の怒号。黒瀬が伏せると同時に、小室はショットガンを撃つ。散弾は真つ直ぐプロブの頭に命中し、吹き飛ばした。

『グオオオ！』

もう一体のプロブは、廊下を曲がり黒瀬に急接近し、重そうな錨を振り上げる。

黒瀬はもう一度刀で攻撃をそらそうとしたが、それをしては刀がもたない。

腕をクロスして錨を受け止めた。百キロ以上の重量が黒瀬にのし掛かる。

「小室、やれ！」

小室は銃口をブロボに近づけ、その頭を吹き飛ばした。ブロボは力なくその場に倒れた。

「大丈夫か!？」

「ああ。腕にヒビが入っただけだ」

「大丈夫じゃないじゃないか……」

ジョークを言える黒瀬を見て小室は安心した。

黒瀬はヒビの入った使えなくなった刀を納刀し、もう一本の予備の刀を抜く。

「油断しなければ大丈夫だ。注意して掛かろう」

それから二時間もせず、二人はスペンサー邸のB・O・W. を全て排除した。

「……これは?」

二人は、アンブレラの研究所などの手がかりがないか、スペンサーの自室を調べる。何かの書物が部屋を覆うように棚に入っている。

小室が見つけたのは本の中に挟まっていた一枚の写真だった。スペンサーと初老の日本人男性が写っていた。その写真を見て、本を見ている黒瀬の顔を見る。再び写真に

視線を戻した。

その日本人男性は、黒瀬に酷似していた。親子のそれではなく、まるで歳の離れた兄弟のような……。

小室は黙ってその写真を胸ポケットに入れる。小室自身も理由はわからないがこれを黒瀬に見せてしまつては駄目なような気がした。

「何か見つけたか？」

粗方調べ終わったのか黒瀬は小室に近づく。

「い、いや、何も……」

「……本当か？」

黒瀬は怪しむような目で小室を見つめる。

「本当だよ、隠しても意味がないじゃないか！」

「……それもそうだな」

黒瀬は納得したかのように手を叩き、端末を取り出す。

「そろそろジルの捜索に行こう」

そう言つて、本部に連絡を取る。

——本当にこれで良かったのか？

小室は自分のしたことを悔やむ。あの写真は黒瀬に関わっているものかもしれない。

そもそも隠す必要があるのか？　だが、あの写真を見せれば、黒瀬が壊れてしまうような気がした。

仲間の墓

寒空が続く冬、黒瀬はBSAAの墓地を訪れていた。

名誉ある死を遂げた身寄りのないBSAA隊員がこの墓地に眠っている。その一つに、黒瀬の親友……戦友とも呼べる人物も眠っている。

黒瀬はその墓石の前に立つ。いつもは服など気にしない彼だが、今日は整ったスーツ姿だった。

墓石には『ジル・バレンタイン』と書かれてあった。

スペンサー邸や崖下、付近の川も搜索されたが、結局ジルは見つからなかった。ウエ

スカートの姿も。

BSAAはジルを殉職と断定し、ここに墓が立てられた。ここにはジルの遺体すらない。

BSAAという組織に属していれば、いつか大切な仲間を失う。それは分かっていた。今までも任務中に何度も隊員が死んだ。だが、ジルの死は黒瀬やクリス、昔からの戦友に多大なダメージを与えた。

「ジル、今までごめんな」

黒瀬はジルに伝えたいことがたくさんあった。謝りたいことも、感謝の気持ちも。彼女が死んだ今それは言えない。本当の死人は動かない。ジルに至っては、姿形さえない。

黒瀬は花束を置く。そしてジル・バレンタインという素晴らしい人間に対して敬礼した。

黒瀬の頬に涙が流れる。久しぶりの涙だった。

強い風が吹いて捧げた花束の花弁が空を舞う。それを見た黒瀬はやるべきことを思い出す。

「ごめん、ジル、もういくよ」

世界の各地でバイオテロが起きている。黒瀬がこうしている今、狂信者のせいで大勢

の人間が死んでいる。それを止めるためにも行かなくてはならない。
もう彼の頬には涙はなかつた。

希里ありすの今

希里ありす、彼女は小学二年生のときカントウ事件で両親を亡くしてしまった。

父は籠城していた家の人間に刺され、母はいつどうやって死んだのかさえわからない。

そんな彼女はカントウ事件後、すぐ別の親に引き取られた。

彼女を引き取ったのは高城沙耶の父、高城荘一郎とその妻百合子であった。

両親を失った彼女を二人は心優しく慰めてくれた。そして彼女を支えるのはその二人だけではなく、一緒に脱出した仲間たちだった。

そのほとんどの仲間は、B S A Aやテラセイブに所属した。時々しか会えないがそんな彼らが彼女の心の支えだった。

今でも毎日日本の両親を忘れることは出来ない。あの時のことを思い出しては泣き叫びたくなるくらい、心が締め付けられる。それでも彼女は強く生きようとしていた。救ってもらった命はとても大切にしなければならぬ。

「ありすお嬢様、お帰りなさいませー！」

しわひとつない制服を着た屈強そうな男たちは、巨大な門を通ってきた希里ありすを迎える。

「ただいま、いつも言うけど毎回迎えなくてもいいのに」

「いえ、ありすお嬢様を迎えるのが我らの仕事でございます」

「えー」

そんな身体をしないと別のことに使えないのかとありすは思う。

むさ苦しい男たちはありすによってたかる。

「ありすお嬢様、バッグをお持ちしましょうか？」

「お嬢様、学校生活はうまくいっていますか？」

「お嬢、お綺麗です」

まるで変態的な目だった。彼らは、ありすを心配し、そして心から愛している。だが、毎日こうではありすもいい加減我慢の限界だった。

「うるさーい！ 散って！」

彼女のお叱りを受けた男どもは、残念そうに戻っていった。

「……まったく」

ありすは言った後に言い過ぎたかなと気付くが、ここで謝ってしまったては明日からも

あの状態が続いてしまう。ここは心を鬼にする必要があった。彼らには当分の間我慢してもらおう。

ありすは玄関へと向かい、紳士な男性が大きなドアを開ける。

「お帰りなさいませ、ありすお嬢様。お客様がお待ちです」

「お客？」

ありすには心当たりがない。友達と約束してないし、孝や沙耶なら直接帰ってくる連絡をする。彼女は誰かなと考えながら客室へと向かう。

使用人から挨拶されながら広い客室に入る。そこには久しぶりに会う人物がいた。

「リヨウお兄ちゃん！」

ありすはリヨウの姿を確認するや否やタツクルするように抱き着いた。

「ありす、久しぶりだな」

ありすとリヨウの再会は、高城沙耶と平野コータの結婚式以来、実に二年ぶりだった。「仕事で中国まできてな。久しぶりに日本に戻ろうかと思ってたんだ」

リヨウは二年前と変わっていない。性格も姿も。少し身長が伸びたくらいか。彼は二十五歳近くだが、そこらの高校生のような外見だ。

ありすは本当に嬉しかった。リヨウは、孝やコータのようにBSAA極東支部に在籍しておらず、世界を飛び回っている。そのため日本に帰ってくるのが少なかった。

ありすはリヨウに夢中で話した。この二年間のこと、リヨウへの愚痴、積もり積もった思い出話、それは日が暮れるまで続いた。リヨウはずっと笑顔で聞いていた。

いつもの豪華な夕食はもつと豪華になり、リヨウはそれをペろりと平らげた。荘一郎と百合子もリヨウと楽しく話した。血はつながっていないが、本物の家族ように団らんとしていた。

風呂に入った後、リヨウに勉強を教えてもらおう。ありすは進学校に通っているので宿題が多く、予習復習しないとついていけないほどだ。

「ありすはこの大学に通うんだ？」

「うーん、近くに良い大学がないから遠くの方に行くかも」

「聖イシドロス大学とかは？」

「悩む〜」

聖イシドロス大学は、リヨウや孝たちが通っていたので、色々アドバイスが出来るが、大学も色々学部がある。ありすはどうも決めきれない。

「まあ、まだまだ時間はあるからな。ゆっくり考えればいいよ」

リヨウは、ありすに自分たちと同じ道を辿ってほしくはなかった。ウイルスと関わってしまえば、不幸しか起きない。妹のような存在だからこそ、日本で幸せに暮らしてほしいのだ。

「ねえ、リヨウお兄ちゃん」

「ん？」

「ありすに彼氏が出来たらどうする？」

「彼氏を殴る」

即答だった。

「俺のパンチに耐えきるやつだったたら付き合うことを許してやろう」

まるで頑固親父のような言い分だ。

「耐えきる人はいないと思う……」

リヨウの右ストレートを顔面に喰らったら、首が吹き飛んでしまうだろう。

ありすとリヨウは夜遅くまで話し、ありすはいつのまにか眠ってしまった。

朝起きると、リヨウはすでにいなくなっていた。

「もう行っちゃったのか」

もつと話したかった。休日には色んなところに遊びいきたかった。そうありすは思うが、リヨウのことを理解しているつもりだ。彼はありすも大事だが、他の人間も同じくらい大事に思っている。そんな彼を引き留めることなどありすには出来ない。

だが、何故か引き留めとけばと、ありすは思った。もう会えないようなそんな気がした。

また会える

中東アジアのとある町で炭疽菌によるバイオテロが行われた。テロリストは地元軍とB S A Aが共同して制圧し、一応事件解決することが出来たが、炭疽菌による被害者が多く、医療設備も整っていない国なのでB S A Aから医療班とテラセイブや国境なき医師団からの支援が行われることになった。

黒瀬はB S A Aのエージェントだが、この場ではただの雑用と化していた。

仮設医療テントにどんどん荷物を運んでいく。一通り運び終わった後は患者をベッドまで運んだりと力仕事だらけだ。

「リヨウさん、休憩していいですよ」

何時間か経ってやっと休むことが許される。

テントから出ると、日本人のジャーナリストがN G O団体に取材を行っていた。

「うげー」

黒瀬が知っているジャーナリストだった。その人物から気づかれないように立ち去ろうとするが、時すでに遅く彼女は背後に迫っていた。

「久しぶり、リヨウ君」

ジャーナリストは黒瀬の肩を叩き、嫌な笑顔で話しかけてくる。黒瀬は思わず顔がひきつってしまふ。

「俺って運悪いな」

「あら、いつものことじゃない」

フリージャーナリストである佐藤リコは、黒瀬に取材したくてウズウズしている。

黒瀬はこの場から立ち去りたかったが、この女の前では無駄だと判断して諦める。

「先に言つとくがほとんど話せないことばかりだぞ」

「あら、ものわかりがいいじゃない」

一通りの取材を終えて、黒瀬はため息をついた。

「うーん、ほとんど情報がないじゃない！」

「最初に言つたら、話せないことばかりって」

黒瀬と佐藤リコはラクーン事件以前の付き合いだが、ジャーナリストである彼女に何でもかんでも話すわけにはいかない。

「そういえば、あれから十年経つのかね」

リコは空を見て言った。

「なんだよいきなり」

「カントウ事件から十年も経つよ。あれから色々変わったもんね」

「……そうだな」

あれから十年、黒瀬は早いものだなと思った。当時は高校生だった黒瀬だが、今ではおっさんになっている。

「気づけば二十七歳だ。婚期逃したかな」

「あなたに結婚願望とかあったの？」

「ない」

黒瀬はキツパリと答えた。

「俺はあんたと同じでフリーだからな。世界中飛び回っている男の妻なんて可哀想だろ」

「そういうものかしら」

「そういうもんじゃないのか」

「好きな人もいないの？」

「……………」

黒瀬は黙ってしまふ。恋愛感情を抱いた相手。今まで考えたこともなかった。

「彩ちゃんとかクレアちゃんはどうか？」

「クレアは仲間……かな？ 彩は……」

彩と黒瀬の付き合いは長い。

「ほうほう、彩ちゃんが好きなんですな〜」

リコは黒瀬をからかうように脇を小突く。

「彩は……何だろうな。何でか守りたい、護らなくちゃいけないって思うんだ」

「恋愛対象としては見れない？」

「わからない。でも彩はもつと……」

言葉で表現できない。これが好きという感情なのだろうか。黒瀬は頭を掻いた。

「まあ、他の女の子よりは好きなんじゃないかな」

「おおー」

リコはまるでおっさんのようなはしやぎようだ。

「それよりあんたの方はどうだ？ もう色々やばいだろ」

リコは三十歳を越えている。若く見えるが、おばさんには違いない。

「私もリヨウ君と同じよ。世界中飛び回ってるからね」

「あつそ」

「黒瀬リヨウさんはいますかー？」

B S A Aの医療班から呼び出しが入る。

「じゃあ俺はもういくよ。俺とあんただしまたどつかで会えるだろ」

「そうね。リヨウ君の運の悪さならきつとすぐに会えるわ!」

リコはニツコリ笑顔で言った。

「リヨウ君」

「ん?」

「私はいつでもあなたの味方よ。困ったときにはいつでも相談しなさい」

「そんな機会ないと思うぜ」

黒瀬は手を振ってテントの中に入った。

それが黒瀬の見た最後のリコだった。

11章 “化物”の正体

63話 アフリカの大地

煉瓦造りの綺麗な街には雨が降っていた。人通りが少なく、事件が起こったとしても誰も気づかない路地裏に女性は倒れていた。

——伝えないと。

日本人の女性、フリージャーナリストである佐藤リコの脇腹からは大量の血が流れている。銃声をもかき消す雨はリコの血を流していく。

助からない。リコは自分の命を悟っていた。だが、このまま死ぬわけもなかった。ポケットから携帯電話を出し、電話帳を見る。そこから黒瀬リヨウの名前を探す。

意識が薄れる。身体が強制的に痛みをシャットダウンしているおかげで痛みはないが、それでも出血は止まらない。もう眠ろうよと死神の囁きが聴こえてくる。

——まだよ。

せめて眠るのは黒瀬に連絡をしてから。リコは必死に死神に抵抗する。

敵は、本当の敵はすぐ近くにいた。前々からリコは怪しんでいたが、核心をつくことはできなかった。しかし、偶然見てしまったウイルスの取引でそれは確信へと変わっ

た。

黒瀬の電話番号を見つけ、発信する。彼は世界中で戦っているので応答してくれる可能性は少ない。

リコの予想は当たっていて、黒瀬は電話に出ることはなかった。

——せめて留守番電話を残せば。

リコは携帯に向かって話す。

「リヨウくん……驚くと思うけどよく聞いて」

リコの体力はもう持ちそうにない。

「敵はすぐ近くにいたの……あなたはよく知っている人よ。名前は——」

「悪い人ね」

リコの携帯電話は握っていた手ごと、何者かに踏み潰される。それでも痛みはなく、感覚などとつくになくなっていった。

リコは意識を失いそうになりながらも、その人物に鋭い目付きを浴びせる。殺気と憎悪。今まで騙されていた。いや、一番かわいそうなのは黒瀬だ。彼が真実を知ればどうなってしまうのか。リコは想像がつかない。

——私はこのまま死ぬのね。

連絡手段を断たれ、この死は無意味になる。

「死ぬのだからもう少し怯えればいいのに」

その人物は銃を取り出し、真っ直ぐリコの頭へと向ける。

「怖いでしょ？ 死にたくないでしょ？」

薄気味悪く笑う。冷徹な目は狂気を表していた。

「リヨウくんは……あなたのことを……好きだつ——」

雨の街に銃声が響く。銃声は雨音に消され、誰も気づくことはない。

ごめん。リコは黒瀬の力になれなかったことを薄れていく意識の中で詫びた。

黒瀬リヨウ、彼は今アフリカの上空にいた。

へりのローター音が機内に響き、仮眠を取ろうにも音がうるさすぎて寝れない。仕方なく外を見つめる。外には荒野が広がっていた。日が暮れそうになっていたが関係ない。H Qからの指令を達成するだけだ。

HQから黒瀬に下された指令は、B・O・Wの商人であるリカルド・アーヴィングの逮捕。事前に伝えられている情報に寄れば、マジニと呼ばれるプラーガに寄生された人間がキジュジュ地区や周辺の街に『人間』として暮らしているらしい。

クリス・レッドフィールド、シエバ・アローマと西部アフリカ支部のアルファチームがキジュジュ地区に乗り込んだが、突如本性を現し、襲い掛かった。マジニや正体不明のB・O・Wによってアルファチームと潜入していたエージェントが死亡した。

クリスとシエバは現在、車に乗ってデルタチームとの合流を目指している。

黒瀬は、二人とデルタチームと協力してアーヴィングを逮捕しなければならない。

「ん？　ありやなんだ？」

ヘリのパイロットが何かを見つめる。

それを聞いた黒瀬は再び荒野に目を戻すと、何人かの人が車から降りてヘリに向かって手を振っていた。

「車がエンストでもしたのか？」

黒瀬とヘリパイロットは、一秒でも早く現場に向かわなければいけないが、彼らはキジュジュ地区から逃れてきたプラーガに感染していない人間の可能性がある。

「あいつらの話を聞こう」

もし検討違いだとしても、困っている人間を見過ごすことなど出来ない。検討違いな

らそれならそれで救援を呼べば良いだけだ。

荒野に障害物などほとんどない。ヘリは着陸しようとする。

「あ？」

いつの間にか手を振っていた男はロケットランチャーをヘリに向けていた。

「避けッ——」

パイロットに知らせようとするが時既に遅くロケット弾が放たれる。何も知らないパイロットは回避行動を取ることもなく、ヘリに直撃した。

「う、うう……」

頭が痛い。全身が重い。だが、意識はあった。

歪んだ視界には、燃え盛るヘリが写っていた。どうやらヘリの外まで吹き飛ばされたらしい。

二人の男が黒瀬に息があること気づき、斧を黒瀬の頭に降り下ろそうとする。

「ク……ッソ！」

ボロボロの身体で黒瀬は横にローリングして回避した。すぐに立ち上がり、男二人を蹴り飛ばす。

残りの男が黒瀬にボウガンに向けた。何の躊躇もなく矢は発射されるが、それをすりどき避けて男の頭にナイフを投擲した。

吹き飛ばされた二人はいつの間にか立ち上がっており、黒瀬を睨み付ける。

男たちの口が大きく開いた。そこから肉色の塊が飛び出し、四方に広がって花卉の形になった。

憎悪だけを抱いて、黒瀬に向かって全力ダッシュをする。

その二人の腕を掴んで投げ飛ばした。

プラーガは人間の脳を支配し、元の人間のように生活できる。人間の力を最大限に發揮出来るが、格闘センスのない一般人の脳を支配しても、センス自体は上下しない。

訓練を受けた黒瀬からしてみれば、二人程度どうさもない。

しかし、耐久力はあるようで致命傷を与えなければ何度でも立ち上がる。

黒瀬は木刀を抜く。一回転して遠心力をつけた攻撃を二人の頭に喰らわせた。まるでトマトのように簡単に潰れ、木刀は血で染まる。血を払って納刀した。

炎上するへりを見つめる。パイロットは即死だった。黒瀬が生きているのは運が良かったからだ。

——またか。

仲間をまた失った。この世界は良い人ほど早く死ぬ。ジルが死んで三年。これ以上仲間を失わないために努力してきたが、人間は脆くすぐ死んでしまう。

「クソ……!」

怒りを抑える。今はH Qへの報告が最優先だ。黒瀬は端末でH Qに連絡を取ろうとするが、その手を止める。

いくつものエンジン音が聞こえてくる。

遠くからは五台のバイクが黒瀬一直線に猛スピードで接近していた。

「なに!?!」

全員の手に鎖のチェーンが握られていた。ライダーマジニは瞬く間に黒瀬を取り囲む。エンジンを鳴らし、黒瀬を威嚇した。

ライダーマジニはチェーンを振り回す。

——速い!

バイクのスピードに乗ったチェーンは黒瀬に襲い掛かる。攻撃範囲が広く、何度も避けられない。ついに黒瀬の胸へと当たり、吹き飛んでしまう。すぐに立ち上がろうとするが、マジニはそうはさせまいと黒瀬の背中をバイクで轢く。

「……やってくれたな!」

痛みを堪えながら瞬時に立つがそこに又もやチェーンが襲う。ジャンプして胴体への直撃は避けたが、チェーンは足に絡まってしまう。

マジニはバイクのスピードを緩めることなく、黒瀬を引き摺る。時速百キロを越えるスピードで荒野を駆けていく。腰に着けていた手榴弾やナイフ、刀や木刀は引きずられている途中で外れてしまい、どうにもできない。

ヘリからどんどん離れていってしまう。四体のライダーマジニは引きずられている黒瀬にチェーンを降り下ろす。黒瀬は急所である顔だけは守ろうと防ぐ。黒瀬の身体には容赦ない攻撃が続けられている。

「クソー」

こんなところで死ぬわけにはいかない。揺らぐ意識を覚醒させる。

振りかざされたチェーンを掴んで、ライダーを転倒させた。チェーンを離すことなく円形に振り回す。黒瀬を囲んでいた三人の頭にヒットし次々に倒れていった。

残りは引きずっているマジニだけだが、チェーンが届かない。黒瀬はチェーンを捨てて胸に着けていたナイフで足に絡まっていてチェーンを切る。そのチェーンを離すことなく、黒瀬は立つ。軍靴がガリガリと削られるが、今さら軍靴程度どうでもいい。チェーンをたぐい、バイクへ少し近づいていく。そしてすぐ後ろまで接近し、マジニのうなじにナイフを突き刺した。力なくマジニは倒れ、運転手を失ったバイクはバラ

ンスを崩して荒野を転がり爆発した。

黒瀬もゴロゴロと転げるが途中で受け身を取ってアスリートのように立ち上がった。

「……………」

移動手段を失い、武器も失ってしまった。対衝撃用ポーチに入れておいた端末は無事だった。

黒瀬はボロボロになった防弾アーマーを脱ぎ捨てH Qに連絡を取る。

「こちらリヨウ。ヘリがマジニによって撃墜された。パイロットは死亡。俺は武器を失った。移動手段もない。代えのヘリを寄越してくれ」

『ヘリの増援はない。単独でキジュジュ地区へ向かえ』

「なに!? 状況をわかってるのか? ここからキジュジュ地区までどんだけあると思ってるんだ!」

『もう一度言う。ヘリの増援はない』

H Qによる冷酷な判断が下された。武器もなしに百キロ以上もあるキジュジュ地区に迎えだど? 黒瀬は苛立ちで端末を投げ付けたくなるが、我慢して冷静さを保つ。

これ以上H Qに文句を言っても無駄だ。奴らは隊員のことを駒としか考えていない。

黒瀬はキジュジュ地区のある方角を見た。

既に日は暮れ、星と月が暗闇を照らしている。

「走るか……」

削れた軍靴を脱ぎ捨て、黒瀬は走り出す。長い長い一人マラソンが始まった。

64話 VS ンデス

黒瀬は荒野をダツシユシ続け、もう一時間ほど経っていた。クリスやデルタチームとの合流場所であるキジュジユ地区はまだ見えない。

いくら黒瀬が人間離れた身体能力を持っているとしても体力の限界が近づいている。黒瀬は少し休憩しようと立ち止まる。

「クソ……！」

一時間で四十キロほど進んだだろう。だが、それでも目的地はまだまだ先だ。

黒瀬はザラザラの砂の大地に座り込む。そしてゆっくり呼吸を整える。十分ほど休憩すればまた走れる筈だ。

休憩中の黒瀬に一台のバイクのエンジン音が近づくのが聞こえてくる。しめた。黒瀬の顔は思わずにやけてしまう。

こんなところでバイクに乗っているのはマジニくらいだ。マジニを倒してバイクを傷つけないで入手できれば、一気に目的地に到着することができる。

黒瀬は後ろを振り返る。バイクに乗っている人物はフードを被っていて顔は見えない。だが、黒瀬にまっすぐ突っ込んでくるといことはマジニ以外の何者でない。黒瀬

はそう決めつけていた

『絶対に襲わないでね』

耳に装着しているインカムに誰かの声が流れる。インカムで通信できる距離にいる人間はただ一人。バイクに乗っている人間だ。

(誰だ?)

どこかで聞いたことのある声だが、誰だか思い出せない。

バイクは黒瀬の目の前で止まった。フードの人物はフードをまくりあげて素顔を見せる。

金髪の髪、褐色肌の女。BSAAのメンバーだった。

「おまえだったのか。ソフィア」

「久しぶりだねリヨウ」

笑顔でソフィアは答えた。

ソフィア・ライオン、彼女と黒瀬の出会いとは七年前、オペレーション・ハヴィエまで遡る。地元で情報屋を営んでいた彼女から情報を買ったのが始まりだ。

あの頃から黒瀬はソフィアから情報を買っており、黒瀬の誘いによつて今はBSAA所属のエージェントになった。

「身長随分と伸びたじゃないか」

何年か前に会ったときとは比べ物にならないくらい背が伸びていた。黒瀬には及ばないが、百七十近くはある。

「アタシだって成長期くらいあるよ」

ソフィアは黒瀬の言葉が気に入らなかつたのかそっぽを向ける。

「すまん。それで何でソフィアはここに？」

「リカルド・アーヴィングの情報を追って近辺の町で情報収集してたんだけ」

ソフィアはB S A Aのエージェントとしてほぼ一人で情報収集を行っている。彼女もH Qからの指令で黒瀬よりも前にアフリカに来ていたらしい。

「それよりはやくいかないと」

「そうだな」

何はともあれ、足を確保することが出来た。黒瀬はソフィアの後ろに乗る。

「飛ばすよー！」

エンジン音を鳴らし、猛スピードでサバンナを駆ける。この調子なら一時間足らずでキジュジュ地区に着くだろう。

「リヨウ」

「なんだ？」

「あのお兄さん元気？」

あのお兄さんと言われて黒瀬は考える。

「もしかして小室のことか?」

「あー、確かそんな名前」

ソフィアが小室と顔を会わせたのは七年前。ソフィアは、小室がBSAAに所属していることは知っているが、それからは会ってないらしい。

「元氣だぞ。そういえばソフィアは結婚式にはいなかったな。小室は結婚したんだ」

小室と毒島冴子は四年ほど前、日本で結婚式を挙げた。黒瀬も勿論参加していた。冴子は結婚はしたが、BSAAをやめるつもりはないらしく、現場で活躍している。

「知ってるー。あの美人さんとだよ。コムロのお友達も結婚したんだよね?」

「ああ」

黒瀬は頷く。

平野と高城も小室たちが結婚した数カ月後、結婚した。平野の場合は婿入りなので、書類上は高城コータになっているが、黒瀬や小室は変わらず平野と呼んでいる。

「リヨウは結婚しないの?」

「ああ。誰とも付き合う気はない」

恋愛感情を抱いた相手なら黒瀬も覚えがある。その人物の名前は香月彩だ。彼女はテラセイブに所属しており、二人とも多忙なこともあって時々しか会えない。

「あーあー。将来孤独死するね」

「そうかもな」

適当に答えるが、黒瀬は孤独死をする歳まで生きられるとは思ってはいなかった。

黒瀬、ソフィアはキジュジュ地区に到着するが、そこは荒れ果てていた。

マジニの死骸があちこちに転がっており、戦闘の形跡がある。デルタチームやクリスタたちがマジニと争った跡だろう。

人形の巨大B・O・WがBSAAのハンヴィーに倒れており、その近くにはデルタチームの死体があった。無惨に殺されていた。

「どうやらこいつにやられたようだな」

人形の巨大B・O・Wは、レオン・レポートにあったエルヒガンテにそっくりだった。黒瀬もあの場にいたが、エルヒガンテとは戦っていない。

「この化け物がデルタチームを殺ったとして、化け物は誰が倒したの？」

「クリスだろうな。こいつを倒して油田へと向かったんだろう」

流星はクリスと言うべきか。これほどのクリーチャーを倒せる者はそうそういない。

シエバラしき死体はない。きつとクリスと共に行動しているのだろう。クリスの相棒として貢献しているようだ。

黒瀬はデルタチームの死体に近づき、追悼する。

彼らは善人だった。自分達の命よりも他人を優先する人間だった。だから死んだのだろう。この世界は良い人から早く死んでしまう。

(おまえらの死は絶対に無駄にはしない)

この世からB・O・Wを無くす。可能かどうかはわからない。ウイルスは増えすぎた。だが、死んでいった者のために力の限り、命の限り戦う。黒瀬の覚悟は揺らがない。

追悼を捧げ終わった次の瞬間、どこからか銃声が響く。ビルの屋上から放たれたライフル弾は黒瀬の横を通り過ぎていつの間にか接近していたマジニの頭を貫いた。

『ここは戦場だ。油断するな』

インカムの通信だった。男の声、しかも日本語。黒瀬は聞き覚えがあった。

「左右の風ほぼなし……！ 射撃許可……言うまでもないか」

その言葉を受けて、南リカはスナイパーライフルでの射撃を開始した。黒瀬とソフィアに近づく敵を片っ端から撃ち倒す。

「数が多い！ アンタは下に降りて二人を援護して！」

「了解！」

田島はアサルトライフルを持って、ロープで降下する。

先程までは静かな町だったのにどこから出たのか大量のマジニが全方向から出現していた。

ズシンズシンと、重たい足音が響き渡る。

デルタチームを壊滅させた大型B・O・W. がもう一体残っていた。

「おいおい、マジかよ」

流石にこれだけの数のマジニに、大型B・O・W. の相手はしきれない。助けたのはいいが、撤退を考えなければならぬかもしれない。

次々に敵が出てくる。ソフィアはハンドガンと体術でマジニを倒す。普段はあっけらかんとしていて頼りないが、やはりBSAAのエージェントだ。正確にマジニにヘッドショットを決めていく。

それを見ていた黒瀬に武器を持ったマジニが襲い掛かる。接近を察知しており武器を使わないで鋭く重たい一撃をマジニの頭に喰らわせる。

グシヤリ、と頭が潰れた。その様子にマジニは怯むことなく接近戦を仕掛けてくるが、バツタバツタとなぎ倒されていった。

屋上からのリカの援護射撃でマジニの数は減るが、それ以上に出現する。

どこから現れたのかデルタチームを壊滅させた巨大B・O・W。までもが出現し、大きく吠えた。

巨大B・O・W。——ンデスは近くの電柱を引きちぎり、黒瀬に接近する。

最優先に倒さなければいけないのはあいつだ。

「ソフィア、田島さん、援護を頼む！」

黒瀬はンデスに向かって全力疾走。田島とソフィアの援護により黒瀬の行く手を遮る敵は倒される。

ナイフを抜く。ンデスは電柱を振り回す。電柱が顔面直前に当たるところでスライ

ディングで回避し、ンデスの巨大な股を潜り抜けて後ろに回り込んだ。

そこから軽いフットワークで両足の腱を削ぎ落とす。ンデスも腱を切られては立つことが出来ず、膝を着いてしまう。寄生体が背中から飛び出し、自ら弱点を露にした。レオン・レポートにはエルヒガンテは大ダメージを与えれば背中から寄生体が露出すると書かれていた。ンデスも同じようだ。

黒瀬はひとつ飛びでンデスの背中に上り、ナイフで寄生体を真つ二つに切る。ンデスは糸が切れたかのように正面にいたマジニを巻き込みながら倒れた。

「あとちよつとだー」

例え敵が百、二百いようと、今の黒瀬たちに勝てる者などいなかった。

長いようで短かった戦闘が終わった。辺りにはマジニの死体が転がっていたが、重症を負った者はいなかった。

「リカさん、田島さん、久しぶりです」

ビルから降下してきた南リカも合流し、久しぶりの対面だった。

リカと田島はカントウ事件の生存者で、元S A Tだった。二人は元々ツーマンセル

で、BSAAのエージェントになってもそれは変わらない。

「久しぶりだな、リヨウ。世紀末みたいにもボロい格好だけど大丈夫か？」

田島は黒瀬のボロボロの戦闘服を見て苦笑した。

「まあ一応は。田島さんたちは何故ここに？」

黒瀬の質問にリカが答える。

「あたしたちはクリスやシエバよりも前にキジュジュ地区に潜入していたのよ。と言つても隅つこの方だったから駆け付けるのが遅くなっちゃったけど。まさかアルファもデルタもやられるなんて思つてなかったわ」

リカの表情が暗くなる。田島とリカにとつてアルファデルタ隊員は家族のようなものだったのだろう。その悲しみは黒瀬よりも重い。

「リヨウ、その格好じやなんだから着替えたらどうだ」

「そうしたいのは山々なんだが、着替えがないんだ」

黒瀬がそう言うと、田島はデスにやられたデルタ隊員を指差した。

「比較的綺麗な隊員の装備は使えるだろ。おまえに使ってもらった方があいつらも喜ぶさ」

黒瀬はデルタ隊員に近づく。目が不自然な方向に向いている。首の骨が折れており即死だった。苦しまないで死ねたのが責めてもの救いか。

隊員からジャケットと軍靴を借りる。サイズはピッタリだった。ホルスターからハンドガンを取る。使う気はないが、持っておくことにこしたことはない。

「ごめん、少し借りさせてもらう」

黒瀬は隊員の瞼をそつと閉じさせ、立ち上がった。

「行こう。クリスたちを追わないと」

「ええ、そうね」

これほどまでアーヴィングにやられて黙っているメンバーではなかった。仲間の仇は絶対取る。

黒瀬たちは油田に向けて行動を開始した。

65話 VSアーヴィング

黒瀬、ソフィア、リカ、田島の四人はクリスたちとの合流を急ぎ、油田へと到着した。油田の作業員も既にマジニ化しており、到着早々戦闘が開始される。

リカはさつきまで吸っていたキューバ産の煙草を投げ捨てハンドガンで応戦する。

マジニはダメージを気にせず襲い掛かるが、エージェントの四人には一撃も加えることさえできない。

チエーンソーを持ったマジニさえ登場するが、一瞬で黒瀬に倒される。

気づけば油田入り口付近のマジニは全滅していた。

「意外とはやく終わったな」

「俺たちの手に掛ければ当然だ」

田島は自慢気に言った。

「リヨウ、そういえば」

ソフィアが一枚の写真を黒瀬に渡す。

「情報収集をしている途中、偶然見つけたんだ」

黒瀬は写真を受け取って見つめる。

写真に写っているのはダークブロンドの長髪の女性だった。

「これは……!?!」

その女性は三年前に死んだはずのジル・バレンタインに酷似していた。

「リヨウ、どうしたの？」

リカと田島も黒瀬が持っている写真を覗き込む。

「これって……」

リカも写真の人物がジルだということに気づく。

「ジルだ、間違いない」

三年前、スペインサー邸でジルとクリスはウエスカーと戦った。しかし、クリスたちは劣勢となり、クリスがウエスカーに殺されそうのなつたところをジルは庇ってウエスカーと共に谷底に落ちていった。

その後、長い期間搜索されたが、結局ジルは見つからずMIAとなつてしまった。

「ジルちゃんはこの事件に関係してそうだな」

「ああ。アーヴィングに聞けば何かわかるかもしれない」

ジルの手がかりを知る人物。逃がすわけにはいかない。

「クリス！」

「リヨウか！」

四人はマジニを倒しながら油田を進むと、船橋でクリス、シエバと合流した。

「シエバ、無事だったのね」

リカはシエバに抱き着く。リカの目には涙が潤んでいた。同じ支部に所属しているだけあつて関係も相当深いのだろう。

「急ぐぞ、もうじきここは爆発する！」

クリスと言葉で全員の気がしまる。

船橋を走って進むと、デルタチームのジヨツシユ・ストーンがボートにエンジンを掛けて待機していた。

「ちようどボートは二隻ある。はやく乗るんだ！」

全員ボートに乗り込み、急いでその場を離れる。すぐに油田は爆発した。

「ヒューー！ 少しでも遅れてたらやばかったな」

田島は安心して座り込んだ。

「残念だが安心して暇はないぞ。アーヴィングが船で逃げた」

「アルファとデルタの仇を討つチャンスね」

リカはハンドガンに新しいマガジンを叩き込む。

「少しでも抵抗するようならこれで頭を吹き飛ばしてやるわ」

あまり怒らないリカは今回ばかりは許せなかった。家族同然に過ごしていたアルファとデルタがやられたのだ。アーヴィングの額に弾を撃ち込みたくてうずうずしていた。

「リヨウ、ジルが生きているかもしれん」

クリスは端末の写真を見せる。それはさつき黒瀬が見た写真と同じだった。

「ああ。アーヴィングが何か知っているかもしれない。聞き出さないと」

そう言っていると、アーヴィングが乗った船が見えてきた。マジニが船に装備しているガトリングガンでボートを近づけまいと撃つがクリスによって倒される。

黒瀬、ソフィア、リカ、クリス、シエバは船に乗り込む。田島とジョツシュはボートで船を追う。

甲板にアーヴィングが立っており、怪訝そうな顔をしていた。

「アーヴィング、ここまでだ！」

全員がアーヴィングに向けて銃で狙いを定める。

「人の顔に泥を塗りやがって……」

アーヴィングは黒瀬たちを睨み付ける。

「あいつら、誰のお陰で計画が進められたと思ってんだ。金を集めたのは俺様だぞ」

アーヴィングが言うことは黒瀬たちには分からない。だが、アーヴィングの背後には必ず何者かがいる。

「どいつもこいつも馬鹿にしゃがって……」

アーヴィングが手にしていたのは注射器だった。それを首筋に打ち込む。

アーヴィングは苦しみだし、背中からは触手を出す。

「なに!?!」

「打ったのはウイルスか……!」

リカはアーヴィングに向け発砲をする。だが、人間離れた俊敏な動きでそれを避けた。

「俺はな……お前らみたいなクズとは違うんだよ……!」

「おいおい、それはお前だろ」

黒瀬は瞬時にアーヴィングに接近した。そしてその顔に右ストレートをぶちかます。

「クソ!」

アーヴィングは何を思ったのか川に飛び込んだ。これほどの速度を出している船から飛び降りるのは自殺ものだ。

だが、間もなく巨大な触手が船の甲板を叩きつける。川から出現したのは体長15

メートルはあるイカのような化け物だった。

頭が花弁のように割れ、その中心にいたのはアーヴィングだった。

『俺様をコケにしたことを後悔しろ！』

「うるさい！」

黒瀬とクリスは弱点を露呈させた本体に向け、攻撃した。

モンスターと化したアーヴィングは苦しみ、再び川に飛び込む。

『みんな、どうなった!? 何なんだあの化け物は!?!』

ボートを運転している田島とジョッシユから通信が入る。

「危ないぞ離れている」

クリスは二人にそう伝える。

「みんな、船には機関銃がついている。それで応戦するぞ」

ただの銃ではモンスターアーヴィングには有効なダメージは与えられない。運良く

甲板には固定機関銃やグレネードランチャーが設置されていた。

「リョウ、船のなかにこれがあったよ！」

ソフィアが持ってきたのは銃剣付きのアサルトライフルだった。

「ありがとう、ソフィア。これで俺も戦える」

黒瀬はアサルトライフルを受けとる。

「でもどうすんの?」

例え近接武器があっても川に潜んでいるアーヴィングに攻撃を加えることは出来ない。

黒瀬は何か手ががないか考えていると、川から巨大な触手が複数出現した。

「これだー」

黒瀬は触手に飛び付き、川に飛び込む。

触手を辿って泳ぐとモンスターアーヴィングがいた。

黒瀬はそいつにナイフを刺す。何回か刺しただけではダメージにならない。秒間十回以上、深く刺す。

クリスたちの攻撃もあつてモンスターアーヴィングは身体を浮上させた。

「よしー」

黒瀬はモンスターアーヴィングにアサルトライフルの銃剣を刺しながら全力で走る。豆腐のように軽く切れる。

ダメージに耐えきれなくなったのか口から本体を出した。

クリスたちはそこに総攻撃し、本体は弾き出されて甲板に転がる。黒瀬も一つ飛びで甲板に戻る。

変わり果てたアーヴィングがそこにはいた。

「何を企んでいる!？」

クリスはアーヴィングに銃を向ける。

「エクセラの奴、二流品を押し付けやがって……!」

「エクセラ……?」

シエバヤリカ、ソフィアはその名前に心辺りがあるようだった。

「実験施設はどこだ!？」 ウロボロス計画とは何だ!」

クリスはアーヴィングに問い詰める。

「BSAAか、呑気な奴等だ。もうすぐ世界のバランスが変わるつてのによお……」

「世界のバランスが変わる? ウロボロス計画のことね。何を知っているの?」

「今更知ってどうする? 手遅れなんだよ。ウロボロスが世界を変えちまう」

ウロボロス計画。黒瀬もそれには聞き覚えがあった。シエバが言った通り、世界のバ

ランスを変えるほどの計画。そんなものはただの噂だと思っていた。

「うおあああああ!」

アーヴィングは苦しみ、ばたばたと暴れる。

「クリス、リヨウ、下がって!」

シエバは危険と判断し二人を下がらせた。

二人の名前を聞いてか、アーヴィングは二人の顔を見つめる。

「クリス？ リヨウ？ おまえらが……」

アーヴィングは先程の痛みが嘘のようにいきなり笑いだした。

「何がおかしい！」

「クリス、リヨウ、この先の洞窟に答えはあるぜ。お前らにとつては地獄だがな。悪くねえ気分だ。先に逝つてるぜ！ せいぜいもがいて見せな！」

「時間の無駄だ！」

クリスはアーヴィングの頭に銃口を向けるが、シエバによつて制止される。

アーヴィングはすぐみドロドロに溶けて死んでいった。

「くそ……」

クリスはアーヴィングからほとんど情報を聞けず悔しい表情だった。

「これからどうするの……？？」

「とにかく先に進むしかない」

66話 アンノウン

アーヴィングが言っていた洞窟の船橋に辿り着く。

「あの船、あいつが乗っていたー!」

シエバは船橋に停められていた小型ボートを指差した。

「あいつ……?」

クリスたちは知っているようだが、黒瀬たちはわからない。

「アーヴィングと一緒にフードで仮面をつけた奴がいたのよ」

「協力者……か」

アーヴィングが言っていた通り、バックには巨大な組織がいるのだろう。

「みんな、本当に行くんだな?」

ジョッシュが確認する。

「ウロボロス計画のこともある。引き下がれないさ」

「止めても無駄みたいだな。俺はH.Q.に報告してくる」

「わかった、気をつけて」

ジョッシュはボートで引き返していった。

ジョツシユを見送った彼らは先に進む。

「アーヴィングが言っていたエクセラとかいうやつ……」
シエバが話す。

「心辺りが？」

「トライセルアフリカ支部の支部長と同じ名前だわ」

「黒い噂が絶えないけどね」

ソフィアが付け加えた。

トライセル。製薬会社でBSAAのスポンサーの一つだ。

「トライセルか。何を考えている？」

リヨウSIDE

洞窟、そして遺跡を進むと、光が差し込む場所に辿り着いた。

「なんだこゝろ？」

他の場所とは雰囲気全然違う。中心には紅い花が咲いていた。

「見たことのない花だ」

「あれは!？」

クリスは何かに気づく。埃を被っている箱から埃を払うと、黒瀬やクリスには因縁深いマークがそこにはあった。

アンブレラのロゴだった。

「なんでアンブレラが？」

そうとう古い。十年以上前の物だった。

「向こうにはトライセルのテント……一体どういう関係だ？」

先に進むと、比較的新しい施設の中へと入れた。

「施設は相当広いみたいだ。分かれて進もう」

チームは、クリスにシエバ、黒瀬にソフィア、リカに田島となった。

「何かあったら直ぐに連絡してくれ」

互いに幸運を祈り、黒瀬とソフィアは先に進む。

「ソフィア、俺から離れないでくれ。近くにいる限りお前を守る」

「うっわ……そのセリフ寒すぎるよ」

「そうか？」

黒瀬は自分が言ったセリフの恥ずかしさに気づいていない。

「これ以上俺の目の前で誰も死なせたたくないんだ」

B S A AはテロリストやB・O・Wと戦う。勿論死人も少なくない。黒瀬も目の前で仲間が死ぬところを何回も見てきた。その度に自分を恨んだ。もつと力があれば救えたかもしれない。そう思うことが何度もあった。

今回の作戦で友人のカークが死んだ。黒瀬とカークは、まだB S A AがN G O団体の時からの付き合いだった。仲間を亡くすのは辛い。だから黒瀬はせめて近くの仲間、ソフィアは死なせたくなかった。

「リヨウはさ、色々と背負いすぎなんだよ。仲間が死ぬのはアタシだって悲しいけど、それを自分のせいにしなくても……」

「いや、俺のせいだ。俺は『力』を持っているのに、仲間を救えないなんて……」

黒瀬は傍らから見れば、情熱家で仲間思いの人間だが、本当の黒瀬はいつも自分を悔やんでいる。

「リヨウ……」

ソフィアは何も言えなかった。

黒瀬がこの十一年間、どんな思いで戦ってきたのかソフィアは知らない。その中で多くの仲間を亡くしたのは事実だろう。これ以上の励ましの言葉が思い付かなかった。

「ごめん、ちよつと辛気臭くなっちゃったな。でもこれだけは約束する。お前を必ず守

る」

「うん」

ソフィアは頷くだけだった。信じているからだ。黒瀬は約束を破らない。ソフィアは良く知っていた。

「さて、そろそろ敵のお待ちかねだ」

黒瀬は敵を確認し、ソフィアに物陰に隠れるよう指示する。

壁から敵の様子を見る。全員がアサルトライフル、手榴弾、ナイフやスタンロッドで武装しており、今まで戦ったマジニよりも戦闘能力が高そうだった。

(これは一筋縄じゃいかないな……)

今までのマジニは、斧や素手での近接戦が主だったが今回は違う。全員が遠距離武器だ。倒す難易度は格段に上がるだろう。

「ソフィア、気を引きしめろ」

「分かってる」

黒瀬はソフィアに合図し攻撃を始めさせる。銃声に気づいたマジニたちは物陰に隠れてアサルトライフルで応戦し始めた。

黒瀬が隠れている壁にも何十発もの銃弾が飛んでくる。

「さて、どうするか……」

黒瀬の武器は銃剣付きのアサルトライフルとサバイバルナイフ一本だけ。せめて刀があれば銃弾の嵐を突破出来るが、残念がらない。

ソフィアが隙を伺ってハンドガンを撃つ。BSAAのエージェントただけあって確実に敵に命中止させていくが、マジニに銃弾一発当たただけでは数秒の時間稼ぎしかない。

(俺も銃が使えれば……)

黒瀬は銃を持つ度にそう思っていた。わけのわからないトラウマに十年以上付き合わされ、銃を使えないが上に窮地に立つこともしばしばあった。昔、レベッカにトラウマが治せないか聞きに行ったことがあるが、トラウマの記憶を思い出せない限り、克服は難しいらしい。

(……これじゃ俺が守られてるだけだ)

つい先ほどソフィアを守ると言ったのには今はソフィアに頼っている。増援が駆けつけ、敵がどんどん増えていく。この状況を打破しなくてはならない。

「ソフィア、俺が飛び出る。少しだけ時間を稼いでくれ」

敵の中心に入れば、直ぐにでも全滅させられる自信が黒瀬にはあった。

「分かった。気を付けてね」

ソフィアは黒瀬を信頼している。

「行くぞー！」

黒瀬は壁から飛び出る。出来る限りソフィアの射線には入らないようにする。マジニは突っ込んでくる黒瀬を狙うが、ソフィアに腕を撃たれてしまう。

「よしー！」

黒瀬は敵のゾーンに入ったことを確認し、銃剣を正面のマジニの胸に突き刺した。マジニの耐久力を甘く見てはならない。確実に胸に刺したが、マジニは銃剣を抜こうを暴れる。黒瀬はそうさせないよう、銃剣を突き刺した走つて壁にぶつけた。銃剣はもつと奥まで突き刺さった。それでもマジニはまだ死なない。黒瀬は仕方なく腰の鞘からサバイバルナイフを抜いて顎に突き刺した。

ここまでやって倒せたのはまだ一人だった。黒瀬の存在に気づいたマジニたちは黒瀬に一齐に銃を向け、銃撃を再開させる。黒瀬は死んだマジニの胸ぐらを掴んで盾にし、銃弾を避ける。マジニの腰に手榴弾が付けられていることを思い出し、腰から手榴弾をもぎ取つて素早くピンを抜いて投げた。

足下に転がった手榴弾に気づいたマジニは回避行動を取るがもう遅い。手榴弾の爆発によって近くのマジニは吹き飛び、離れていたマジニも爆風と破片で傷を負う。

チャンスだった。これほど大きなチャンスを黒瀬は逃がさない。

盾にしていたマジニを投げ捨てる。瞬時に足を痛めているマジニとの距離を詰め、首

を銃剣で切り裂いた。流れるように腰の手榴弾を取ってマジニが隠れている遮蔽物に投げる。

体勢を直したマジニが再び銃を構えるが、引き金を引く前に黒瀬はナイフを頭に投擲した。右方で爆発が起きる。さつき投げた手榴弾だ。隠れていたマジニは逃げる暇もなく爆発に巻き込まれ、宙に舞っていた。

(あとは……！)

黒瀬は全神経を集中させて敵を探す。遮蔽物から身を乗り出したマジニが黒瀬に銃口を向ける。だが、引き金を引くことはなく、その頭は撃ち抜かれていた。

「危なかつたね」

ソフィアが黒瀬の肩を叩いた。

「ありがとう、ソフィア。助かったよ」

「バックアップは任せて。全力でリヨウをサポートする」

心強い仲間がいるおに黒瀬は安心した。二人とも信頼しているからこそ、最高のチームワークが発揮される。

「ここからはどんどん敵が手強くなっていく。サポートは任せた」

「うん！」

ソフィアは笑顔で答えた。

リカSIDE

南リカと田島は、BSAAに入る前、警察の特殊部隊『SAT』の頃からの付き合いだった。リカは狙撃手、田島は観測手

という相棒的存在で、切っても切れない友情関係を築いていた。

そんな彼が隣にいる。リカはそれだけで安心していった。それは田島も同じだろう。二人で何度も死線を掻い潜ってきた。十年以上もだ。

「リカ！ 右方からライフル持ちが現れた！ 近場は俺がやる。任せたぞ」

「了解！」

リカは背負っていたスナイパーライフル『PSG1』を構える。スコープを覗くと、リカたちをライフルで狙っているマジニのマヌケな顔が見えた。

「狙撃の腕であたしに勝つつもり？」

リカの狙撃の腕は、BSAAの中でも一位二位を争うほど。そこらのマジニに負けるなどあり得ない。スコープに目標を入れて一秒、リカは迷わず引き金を引いた。問答無

用で発射されたライフル弾はマジニの頭を意図も容易く撃ち抜いた。

「よくやった!」

田島はリカを褒めながらも敵を撃ち続ける。耐久力が高い上に銃持ちとなると、これ以上にならないスリルがあつた。

「……………なに?」

リカは銃撃戦の最中に僅な変化に気づく。敵の数が減っている。倒したわけではない。どこかに移動したのだ。

「ねえ、田島」

「気づいてる」

田島も妙な変化に気づいていた。遮蔽物からそくと覗くと、一人のマジニが増援を求めて何人かのマジニを連れていつていた。

「リヨウか、クリスたちが近くににいるの?」

「いや、クリスとリヨウのチームは下に降りていったはずだ。……上に上ってきたのか?」

リカは嫌な予感がした。胸騒ぎがする。

増援に向かつていたマジニが次々に倒れる。誰かに撃たれていた。リカたちを相手にしていたマジニは後方の仲間が倒れたことに気付き、射撃を止めた。

リカたちやマジニ全員が、マジニが倒れた通路の先を見る。よく見えないが、全身黒ずくめの人物が三人ゆつたりと歩いてきていた。

誰だ？ リカも田島もその疑問が頭を横切った。マジニと敵対しているということ
は確かだが、BSAAからの増援が来るという連絡は来ていない。

リカはライフルのスコープで黒ずくめの人物たちの姿を確認する。

黒い戦闘服を身に纏い、ガスマスクを付け、手にはアサルトライフルを持っていた。
戦闘服はマジニの血か、所々赤く濡れていた。肩には、醜いアンブレラのロゴが入って
いる。

マジニが一齐にガスマスクの人物たちに銃を向けた。だが、ガスマスクの人物は一切
恐れることなく狭い通路を堂々と歩いてくる。リカと田島は、その人物のやばさに気づ
いていた。

マジニはガスマスクの人物（＝アンノウン）に向かって銃撃を開始する。十体以上の
アサルトライフルやマシンガンでの銃撃だ。普通ならアンノウンは蜂の巣になってい
る。だが、アンノウンは普通ではなかった。

目に見えないほどのスピードで狭い通路を駆け抜け、近場のマジニを一瞬で葬った。
五秒も掛からぬ内に十体以上のマジニは、たった三人のアンノウンに寄って殲滅され
る。

その光景を見ていたリカと田島は思わず息を飲んだ。銃は一切使っていない。ナイフ一本だけでマジニの首を切断し、銃弾も全て避けていた。

これは現実かと思うような目を疑う光景だったが、現実であることには違いない。奴らと戦うことは最善ではない。この場から離れ、黒瀬たちに奴らの存在を知らせなければならぬ。

だが、そううまくいくものでもなかった。

ガスマスクの一人が、いつの間にか背後に立っていた。ガスマスクの赤い目が光る。何を考えているのか分からない。だが、殺気だけは感じ取れた。

リカと田島には恐怖が込み上げる。

「——やるぞ!!」

田島は大量の冷や汗を滴ながら叫ぶ。見つかつてはどうしようもない。戦う以外に手段はなかった。だが、リカも田島もは勝てる自信がなかった。

67話 苦戦

リカSIDE

田島は銃をガスマスクの人物に向けた。敵との距離は一メートルほど。外すはずがない。自信を持つて引き金を引いた。発射された弾丸はガスマスクを貫——かず、首を少し曲げることで回避した。人間離れた反射神経。アンノウンは、手に握ったナイフで田島の首を掻き切ろうと一歩距離を詰めた。その一歩は恐ろしく速く、田島は避けることさえ考えなかった。

死ぬ。それだけが田島の頭を横切った。

だが、アンノウンのナイフが田島の首を落とす前に、リカが決死のタックルをアンノウンに喰らわせた。アンノウンはよろめき、田島の首の皮を数ミリ掠め取る。

田島は一瞬で脳を覚醒させ、ガスマスクに渾身の右ストレートを喰らわせる。ガスマスクの目にヒビが入り、再びアンノウンはよろめいた。

この隙を逃がす二人ではなかった。リカと田島はコンビネーションの格闘を一瞬にして喰らわせた。アンノウンは倒れる。

倒したかと思つたが、そんな簡単にはいかなかった。何事もなかったかのように立ち上がり、首をコキコキと鳴らす。手応えは確かにあつたはずだ。奴が想像以上にタフだつたのだ。

いつの間にか残り二人のアンノウンにも囲まれていた。リカと田島に鋭いフツクが襲い掛かる。一度目は腕を盾にして防いだが、二度目は脇腹に入つてしまう。二人ともあまりの激痛に倒れ込んでしまう。肋骨にヒビが入つたのかもしれない。たつた一発で気を失いそうだった。

リカは今すぐにでも立ち上がろうとしたが、身体が上手く動かない。このままでは死ぬ。それは理解していたが、痛みには逆らえなかつた。だが、ガスマスクの三人は何時までもとどめを指しにこなかつた。

一人の兵士が残り二人を制止させていた。

『ここで殺すにはまだ早い』

マスクでこもっているが、確かに女の声だった。その女が一番上なのか二人はそれに従い、ナイフを鞘に納める。

三人は一瞬にしてその場から消えた。それを見たリカは安心したせいかわどい眠気が襲つてきた。田島も同じで、二人ともそれに逆らうことは出来なかつた。

リヨウSIDE

「クソ、リカたちと連絡が取れない……!」

黒瀬はリカと田島に向けて何度もコールするが、依然として繋がらない。

何かあったのか？ 黒瀬の頭に最悪のイメージが流れる。いや、そんなはずはないと首を横に振った。

リカと田島は、BSAA設立の初期から現場で活躍していた。彼らの戦闘能力やチームワークは黒瀬も評価している。そんな彼らがマジニにやられるはずがない。

黒瀬はそう思わずにはいられなかった。

「リヨウ、どうするの?」

ソフィアは黒瀬を心配そうに見つめる。

「今は進もう。リカさんと田島さんは絶対に生きてる」

黒瀬がそう言った瞬間、一本のナイフが黒瀬の頭目掛けて飛んできた。

なに？ 黒瀬は一瞬、何が起こっているのかわからなかった。ナイフは確かに黒瀬を狙っている。だが、それを投げた人物の気配を全く感じ取れなかった。ナイフを投擲出

来る距離なら、微かな音や気配で気づける。なのにナイフが迫るまで気づかなかつただ。だ。

「クソ！」

黒瀬はナイフを背を反らして避けた。

冷や汗が止まらなかつた。あと0.5秒でも気付くのが遅かつたら、今頃ナイフが頭に突き刺さつて死んでいる。

ナイフが飛んできた先を見ると、ガスマスクを着けた兵士が立っていた。肩にはアンブレラのロゴが入っている。

「なに、あいつ……」

ソフィアも奴の不気味さを感じ取っていた。

「気を付けろ。普通じゃないぞ」

黒瀬とアンブレラの兵士との距離は二十メートルほどだ。これほどの接近に気付かず、音も立てないでナイフを投げる技術。普通じゃない。

兵士はその場から動かない。黒瀬とソフィアをじつと見つめているだけだった。

「何者だ！」

アンブレラの兵士であることはロゴでわかるが、聞かずにはいられなかつた。

兵士は答えない。それにピクリとも動かない。まるで自分に視線を集中させている

かのようにだった。

——いや、そうしているんだ！

黒瀬は背後から迫る微かな殺気を察知する。二人の兵士が黒瀬の首をナイフで狙っていた。

考える時間などない。黒瀬は回し蹴りを放つ。しかし、黒瀬の脚は空を切るだけだった。二人は上に跳び跳ね、依然として首を狙っている。

黒瀬は避けられたことにショックを受けていた。二人は、ノーモーシヨンからの攻撃を見てから避けたのだ。それを可能にする反射神経と身体能力。そんな人間がいるはずがない。

そう普通ならいない。だが、黒瀬はそれを可能にしていた者と戦ったことがある。

三年前、シカゴで起きた大規模なバイオテロ。それを起こした傭兵たちは、Fーウィルスという身体能力を爆発的に向上させる代物を使っており、結果的には全身体能力がオリンピック選手以上に跳ね上がった。そしてそのバイオテロの主犯であるグレッグ・リチャードソンは、黒瀬と互角の戦いをしていった。

黒瀬は、アンブレラの兵士がFーウィルスを注入しているのではないかと疑っていた。

だが、今はそんなこと関係ない。奴らは敵であり、今すべきことは奴らを倒すこと

だった。

黒瀬は、アサルトライフルを半回転させる。二人は銃剣を避けるように空中で体勢を変えて床に着地した。

やるな！ 黒瀬は敵を称賛しながらも手は緩めない。二人が着地した瞬間を狙って攻撃を仕掛ける。二人もそれを察知していたようで、バク転をすることによって銃剣を回避した。

「クソー」

奴ら、想像以上に出来る。黒瀬は苛立ちを覚えてきた。アサルトライフルを投げ棄て、右ストレートを兵士にぶちかます。両腕をクロスしてガードされるが、後ろによるめくほどの威力があった。一步踏み込んで次は左ストレートを顔面に喰らわせようとする。よく見るとガスマスクの目にヒビが入っていた。誰かにやられたのだろうか。そんな疑問を振り払う。

左ストレートがガスマスクのキャニスターに当たる直前、もう一人がカバーに入るようにナイフを黒瀬の左腕に振りかざしていた。

それに気付いた黒瀬は左腕を引つ込める。兵士はナイフを空振ることなく、ピタリと止めて黒瀬の胸を突くように腕を伸ばした。黒瀬はバックキックを兵士のナイフを握っている拳に当てた。ナイフは兵士の手から離れ、天井に突き刺さる。近距離武器を

無くしたのは黒瀬にとって好都合だった。がら空きの胴体にタツクルを仕掛ける。兵士は少し呻いて背後の壁に背をぶつけた。

この数秒の攻防で黒瀬の神経は擦りきれそうだった。頭をフル回転させ、コンマで判断し、コンマで身体を動かす。ほとんど反射のようなものだった。この反射はそう持たない。必ず限界があつた。

黒瀬は二人と攻防を繰り返す。黒瀬は二人のコンビネーションに翻弄されてしまふが、大きなダメージは受けないよう、的確に防御する。それは敵も同じだった。

黒瀬は攻防の中、気になつていたことがあつた。それは、最初にナイフを投擲してきた兵士だった。その兵士は今もあの場から動かず、まるで黒瀬と兵士二人の戦いを観察しているかのような感じ。気味が悪い。ガスマスクのせいで表情を読み取ることが出来ないが、何故かガスマスクの下で笑っていることが予想できた。

「うぜえ!!」

黒瀬の苛立ちは頂点に達する。その瞬間、身体能力が爆発的に向上した。黒瀬自身はそれに気付いていない。

今まで手こずっていた二人を一瞬で吹き飛ばし、奥の兵士に向かって勢いよく駆けだした。その顔面に殴りかかろうとするが、予測されていたかのようにスリリと避けられ、背中を押される。黒瀬は身体のバランスを崩して派手にコケる。受け身を取って立ち

上がるが、目の前には気味悪い兵士の顔があった。

近くで見たら分かるが、女のように細い腕に脚だ。実際女なのかもしれない。

「いっしょー」

胸ぐらを掴もうとするがまたもや予測していたのか、腕を掴まれて捻られる。黒瀬の身体は横転し、そこを狙うように腹を鋭い蹴りが襲った。威力は凄まじく床を滑るように転がる。すぐに立ち上がるが、床にはグレネードが転がっていた。

「なっ!」

黒瀬は驚くが、顔を腕で守りながら後ろにジャンプした。そしてグレネードは爆発する。強烈な光と音を周りに撒き散らした。スタングレネードだった。黒瀬は視力や聴力が常人以上にある。それが命取りとなった。目が眩み、耳鳴りが発生する。何も見えず何も聞こえない。いつ襲われるかもわからない。黒瀬は腕を振ってせめてもの抵抗をする。しかし、敵はいつまでも襲ってこなかった。

スタングレネードの効果が切れ始め、黒瀬はゆっくり目を開ける。そこには既に兵士はいなかった。三人とも数秒の間でどこかに消えていた。

「くそー」

黒瀬は苛立ちを壁をぶつけるように殴る。コンクリートの壁には亀裂が入った。

まんまと逃がしてしまった。それを許した自分が情けなかった。だが、何故敵は逃げ

たのか。あれほどのプロならばスタングレネードで怯んでいる内に殺すことも可能だったはずだ。

「うう……」

黒瀬の耳に微かな呻き声が聞こえてくる。一旦、疑問を振り払い、ソフィアに駆け寄る。

ソフィアは頭を抑え、ふらふらと立ち上がろうとしているが。

「大丈夫か、ソフィア！」

「……う、うん。スタングレネードなんて生まれて初めて喰らったよ」

ソフィアには怪我はない。強烈な光と音のせいで頭痛が伴っているのだろう。

「俺も初めてだ。あいつら、相当手慣れていた」

「ごめん、リヨウ。アタシ何も出来なかった」

「いや、謝ることはない」

逆にソフィアが戦闘に介入してこなくて良かった。奴らならソフィアを簡単に捻り潰せるだろう。

「あいつらには注意していくぞ。まだ施設内にいるかもしれないからな」

68話 富士山

トウキョウの一部が消滅した。

その情報は、アメリカ合衆国政府直属のエージェント、レオン・S・ケネディにも届いていた。

「何がどうなっているんだ?！」

レオンの周りは慌ただしくなっていた。ほとんどの人間が走り回ったり、どこかの機関と連絡を取り合っている。

そもそもトウキョウはカントウ事件の後、十年以上も封鎖されている。カントウ事件はトウキョウを中心にしてパンデミックが広がり、トウキョウは甚大な被害を受けた。核ミサイルによる電磁パルス攻撃によってほぼ全ての電子機器の使用は不可能となり、トウキョウ全ての電子機器の修理や撤去は現実的に難しく、日本政府によって封鎖されることが発表された。

「レオン、トウキョウの消滅した範囲がわかったわよ」

ハニガンがノートパソコンの画像を見せる。

衛星写真のようで画質は粗いが、トウキョウにポツかりと巨大な穴が空いていること

が分かった。

「どうやったらこうなる？ ミサイルじゃないな」

「これが消滅する瞬間の映像よ」

ハニガンはパソコンを操作して映像を流す。これもまた衛星から撮ったもので画質は粗い。

暫く荒れ果てたビル街が映っていたが、渋谷の中心に穴が空き、一機のオスプレイが飛び立つ。その直後、渋谷を中心としてプラズマのようなものが発生して、さっき見た画像と同じになった。

「トウキョウの地下か……」

レオンには思い当たる節があった。

「調べてみたら、あなたが考えている通り、アンブレラの地下研究所があった所がまるまる消滅しているわ」

「やはりか……」

レオンは十年前、トウキョウのアンブレラ地下研究所に侵入したことがあった。だが、そこは焼却処理されたはずだ。

「焼却処理されたのは研究所のほんの一部だったのか」

レオンは研究所の全てを回ったわけではない。少しの時間しか滞在出来なかった。

アンブレラの残党、もしくはよからぬことを考えている連中がトウキョウ地下研究所で研究を続けていた。そして、何かトラブルが発生し、研究所を消滅させることになった。レオンはそう仮説を作る。

だが、トラブルとはなんだ？ それにトウキョウは自衛隊が監視しているはずだ。何故のこのこと研究が出来た？ 疑問がどんどん湧いてくる。

「消滅する直前、オスプレイが飛び立つたでしょ？ そのオスプレイは富士山に落下したらしいの」

「なに？」

「レオン、上からの命令よ。日本の富士山に向かってオスプレイの残骸を調べてきて。

何か重要な書類があったら、日本政府ではなく、真っ先に私たちに伝えること」

「なんだと？」

「多分、あなたが考えている仮説と、上が考えている仮説は同じよ。日本政府や自衛隊が何か隠しているのかもしれない。重要な事実が隠蔽される可能性があるわ」

「了解だ」

レオンは頷いて、日本へ向かう準備をし始める。

「レオン、お土産ヨロシクね」

「……ああ」

レオンは日本に到着し、すぐに自衛隊のヘリで富士山へと向かう。

隊員から話を聞くと、富士山は封鎖しており、一般人やマスコミを近付けさせないようになっているらしい。トウキョウの件もまだ報道されていないが、バレるのも時間の問題だろう。

富士山の頂上付近に近づくとオスプレイの残骸らしきものが見えた。その近くに自衛隊のテントが複数立てられている。

レオンと何人かの隊員はロープで富士山に降下する。足を滑らせないように歩き、テントへ入る。

「アメリカから来た。レオンだ」

レオンはそう言うのと、一人の自衛官が前へと出る。歳は四十代半ばだろうか。この場で一番階級が高いことには違いない。

「話は聞いている、レオンくん」

「何かわかったことは？」

「隊員に付近を搜索させたところ、女性を発見した。君と同じアメリカ人だそうだ」

「会わせてくれ」

自衛官によって別のテントに案内させられる。

そのテントに入ると、毛布で身を包み、ホットコーヒーを飲んでいる女性がいた。その人物とレオンは知り合いだった。

「アリスか!?!」

「……レオン?」

アリスは声を震わせながら反応した。顔や身体は傷だらけで全身が凍るように冷たかった。この雪の中、防寒もしないで外にいたせいだろう。

「君たち、知り合いかなのか?」

「ああ、大事な仲間だ」

レオンはアリスの手を握る。

「アリス、何があった?」

「トウキョウの地下研究所で……アンブレラが研究を続けていたの……ウエスカーを逃がしたわ……」

「ウエスカーが!?!」

ウエスカーとレオン、いやレオンだけではない。クリスやリョウも因縁の敵と呼べるだろう。

アリスの手には生々しい傷が残っている。

「アリス、傷が……」

昔のアリスなら、この程度の傷すぐに治ったはずだ。だが、今は全く傷の修復が行われていない。

「オスプレイの中でウエスカーと戦ったとき……t—ウイルスの血清を打たれたの……前のように力が出ないわ」

そういうことか。レオンは納得がいった。ウエスカーの奴、考えたな。

レオンは立ち上がり、自衛官に言う。

「彼女の身柄は合衆国政府が預かる」

「許可は出来ん。彼女は重要参考人だ。何が起こったか全て話してもらおう必要がある」

「信用出来ないな。拷問でもして痛めつけるんじゃないか？」

「何を言っている？」

「トウキョウト、アンブレラ研究所は自衛隊が監視しているんだろう？ 何故、アンブレ

ラの研究に気づけなかった？」

「……………」

自衛官は黙る。やはり何か裏がある。レオンは確信した。この場の隊員と敵対してもアリスは守らなければならない。

レオンと自衛官はにらみ合う。こちらから手を出すわけにはいかない。レオンは向こうから手を出してくるのを伺っていた。

だが、それを遮るようにけたたましいヘリのローター音が外から聞こえてくる。

「隊長！ 所属不明機が！」

隊員の一人が知らせに来る。その手にはアサルトライフルが握られていた。

よからぬことが起きている。それはレオンにも察知できた。

テントの外に出ると、武装しているオスプレイが十機、この場へと向かってきていた。オスプレイにはアンブレラのロゴが入っている。

「あれはなんだ!？」とレオン。

「わからん！」自衛官がローター音に掻き消されないよう大声で答えた。

オスプレイはミサイルを発射し、近くに滞空していた自衛隊のヘリを貫いて爆発させた。最早操作不能となったヘリはくるくると回りながら落ちていった。

「全員戦闘態勢を取れ！」

自衛官がそう叫ぶが時既に遅かった。十機のオスプレイは機関砲を掃射し、隊員はなすすべもなくバラバラにされていく。

レオンはホルスターのハンドガンを抜いて応戦するが、相手はオスプレイ。ハンドガン程度何の役にも立たない。

ホバリングしているオスプレイからアンブレラの兵士が降下してくる。レオンは、降下してくるアンブレラの兵士を撃つ。兵士は叫びながら落ちていく。

「クソー！」

レオンは周りを見渡す。生き残っている隊員たちは怯えている。仲間が目の前で死んだ。怯えなくなる気持ちもわかるが、戦わないと死ぬ。そうやってやりたいが、降下してくる兵士を撃つので精一杯だった。

ハンドガンの弾が切れる。こんな事態を想定していなかったため、予備のマガジンを持ってきていなかった。

何か使えるものはないか。レオンは探すと、アサルトライフルが握られている隊員の腕が近くに落ちていた。レオンはアサルトライフルを拾って、再び撃ちはじめる。だが、十機のオスプレイから降下する兵士をレオン一人で止められるわけもなく、着地に成功した兵士たちが隊員を殺し始める。隊員は何も出来ない。叫びながら、命乞いしながら、何も言わず死の恐怖に怯えながら、次々と死んでいった。

兵士はレオンに銃を向けるが、それよりもはやく兵士の頭は貫かれる。

「そう簡単にやられるか！」

この場で一番、戦闘に長けているのはレオンだ。敵であるアンブレラの兵士は自衛隊よりも戦闘能力が高いことが見て取れるが、レオンには及ばない。彼もそれをよくわ

かっていた。

わかつてはいたが、どんなに優れた人物であろうと、数には勝てない。今は兵士たちのヘイトがレオン以外の隊員たちにも向いているが、あと三十秒もしないで、隊員は全滅するだろう。そうなれば、兵士たちは一斉にレオンに襲い掛かる。どこか隠れる場所があれば良いが、ここは富士山山頂付近。隠れそうな場所はテントしかない。だが、テントに隠れば、一貫の終わりだ。

そもそも奴らの狙いはなんだ？ その答えは考えなくても分かる。

オスプレイが機関砲やミサイルで武装しているのならば、わざわざ兵士を降ろさずにオスプレイだけで殲滅出来るはずだ。だが、奴らはそれをせず、最初に外にいた隊員を機関砲で殺した後、兵士を降下させた。その際、テントを狙ってはいなかった。テントの中にほとんどの隊員がいたにも関わらずだ。テントをミサイルや機関砲で撃てば、もう事は済んでいる。

何故それをしなかったのか。アンブレラは気付いているのだろうか。目標がテントの中にいることを。だが、どのテントにいるのかわからないので、外の隊員だけを先に殺した。

目標、レオンは既に気づいていた。奴らの目標はアリスだ。

「……泣けるぜ」

レオンは本当に泣きたい気分だった。だが、泣いてもどうにもならない。レオンは今出来ることを精一杯やる。

隊員の最後の一人が殺され、兵士たちはレオンに撃ち始める。レオンはテントの後ろ側に飛び込んで避けた。兵士の一人が撃たないように命令する。奴らはアリスがどのテントにいるかわからない。無闇にテントを撃てば中にいるアリスに当たってしまう可能性がある。レオンはそれを利用して一時の休憩を得る。深く深呼吸して、横たわっている隊員の屍からライフルのマガジンを取る。

「さて、どうするか」

敵は多く、味方はいない。アリスがいるが、あの状態じゃ戦えないだろう。アリスをやすやすと連れ去られるわけにもいかない。

勝算はない。せめてものは敵を一人でも地獄行きにすることだ。

レオンはテントを撃って、その先にいる兵士たちを倒す。レオンはアリスがどのテントにいるのかわかっている。だが、この戦法も長くは続かない。敵もレオンの思惑に気づいて、そのテントを撃ち始める。既にレオンは隣のテントに移動していた。

敵は残り二十人ほど。やはり数には勝てない。レオンは囲まれようとしていた。

テントを背にしていれば、無闇には撃たれない。そう思っていたが――

「なこっ!」

兵士は引き金を引いた。レオンは横に飛びながら兵士を撃つ。兵士の撃った弾はテントを貫通していた。

レオンはアリスがいたテントを見る。中からはアリスが兵士によって連れ出されていた。アリスは必死に抵抗するが、ストックで頭を殴られてしまう。

もう見つかったか！

「クソー！」

レオンは悪態をつく。どうしようもなかった。ポトツとレオンの横に深緑の球体が落ちてきた。手榴弾だ。

レオンはその場から離れようと走る。次の瞬間、手榴弾が爆発した。

轟音と衝撃。レオンが背にしていたテントは吹き飛び、その爆風はレオンをも巻き込んだ。身体が浮遊し、内臓が裏返ったかのような気持ち悪さに襲われる。レオンはそのまま吹き飛ばされ、地面に転がる。全身に力が入らなかった。

兵士はレオンを殺したと思ひ込み、オスプレイに乗り込んでいく。アリスは気絶させられて運ばれていった。

レオンはそれを見ることしか出来なかった。

オスプレイは撤退していく。どこにいくのだろうか。まだ発見されていないアンブレラの研究所だろうか。

いや、待てよ。レオンは気を失いそうになりながらも、疑問を持った。

オスプレイが十機も飛んできたのだ。どこから？ 何故日本の警察や自衛隊はそれに気づかなかった？ 答えは一つ。気づいていたが、見逃した。理由はわからないが、アンブレラのロゴを描いたオスプレイが日本の上空を飛んでいるのだ。そうとしか考えられなかった。

レオンは気を失う。

その場には荒れ果てたテントと自衛隊の肉片が転がっていた。

69話 自分を見失わないで

黒瀬とソフィアは遺跡に辿り着いていた。

先へと進む扉の前に、一人の女性が座っていた。その顔に黒瀬とソフィアは見覚えがあった。

「ジルー」

ジル・バレンタインだった。三年前に死んだはずのジルが生きていた。

ジルは駆け寄ってくる黒瀬に気付き、立ち上がる。黒瀬はジルに抱き付いた。

「ジル……良かった。本当に……生きてたんだな」

黒瀬は今にも泣きそうだった。ジルが生きていたことが嬉しかったのだ。このことを小室たちや他のBSAA隊員にも今すぐにでも伝えたかった。

「久しぶり、リヨウ。ごめんね今まで悲しかったでしょ?」

「ああ……でもジルは生きてた。それだけで十分だよ」

黒瀬とジルは笑い合う。ジルも黒瀬と再会できて嬉しかった。それはソフィアもだ。

「リヨウ、ソフィア、よく聞いて」

ジルは言わなければならないことを思い出し、真剣な表情に戻る。

「ウエスカーの計画がもうそろそろ実行されるの」

「ウエスカーが!？」

やはりウエスカーは死んでいなかったのか。

「ウエスカーは爆撃機で世界中にウロボロス・ウィルスバラまくつもりなの」

「ウロボロス・ウィルスをバラまかれたらどうなるんだ？」

「ウロボロス・ウィルスに適合した者は、人の形を保ったまま超人的な力を得られるらしいの」

「適合できなかつたら？」

「化け物になるわ」

黒瀬とソフィアは絶句した。そんな恐ろしい計画が進められていたというのか。そしてその計画がもうすぐ実行される。

「クリスとシエバが既に向かってるわ。あなたたちも急いで！」

「ジルはどうする？」

「私はまだ動けそうにないの。先に行つて」

黒瀬は静かに頷いた。

「行こう、ソフィア」

黒瀬とソフィアは駆ける。クリスとシエバに追い付けるとは限らないが、行かないわ

けにもいかない。

「ねえ、リヨウ。ジルを置いてきて良かったの？」

「ジルの傍にいてやりたいの山々だけど、今はウロボロス計画を止めるのが先だ」

黒瀬は冷静さを取り戻していた。誰も失いたくないからこそ、ウロボロス計画を止める必要があつた。

「それにしてもまさか世界を救わなきゃいけないなんてね」

とソフィア。

「世界を守るために戦う。かつこいいじゃないか」

「でもそのためにアタシが命をかけるなんて。今まで想像も出来なかつた」

「俺はそうでもないぞ」

黒瀬は苦笑した。ソフィアは黒瀬の今までの活躍を思い浮かべて笑う。

「リヨウは何度も世界を救ってるもんね！ そんな人が隣にいるなんて光栄だよ！」

ソフィアは笑い続ける。

「何度も……ってほどじゃないよ。それに世界を救えたのは俺だけの力じゃない。仲間がいたからだ」

「じゃあアタシが今からその一人になるかもってこと？」

「そうだな」

そうこう話していると、施設の外に出た。既に日は沈みかけている。施設の先には広大な海が広がっており、今にも輸送タンカーが出発しようとしていた。

「リヨウ、もしかしてあのタンカーに……」

「ああ、クリスとシエバがいる。そしてウエスカーもだ」

ウエスカーと黒瀬との因縁は十年以上続いている。だが、ウエスカーを倒すべき人間は黒瀬ではない。クリスだ。本当なら S. T. A. R. S. の生き残り全員でウエスカーとの因縁を断ち切ってもらいたいが、そう都合よくはいかない。

「ソフィア、急ぐぞー！」

黒瀬はソフィアを抱えて、一気に崖を下る。タンカーが港を離れようとしていた。ソフィアはギヤーギヤーと騒いでいるが、気にする暇はない。タンカーに乗れなかったら、ウロボロス計画を止めることは出来なくなる。

崖を下ると、道なりに走る。タンカーは港を二十メートルほど離れていた。

「え……リヨウ、まさか！」

「そのまさかだ。飛ぶぞー！」

黒瀬はソフィアを抱えたまま、全力で跳んだ。落ちれば海に真つ逆さま。二十メートルも跳んだことはないが、何故か跳べる気がしてならなかった。

ふわりと浮いた身体は、一直線にタンカーへ向かった。そして黒瀬はタンカー甲板に

着地する。

甲板にはマジニが何人もいた。黒瀬とソフィアの存在に気付いたマジニは銃を向けるが、撃つよりも早く黒瀬に喉を切り裂かれる。

「大丈夫か、ソフィア」

黒瀬は近くに敵がいないことを確認し、ソフィアを下ろす。

「全然大丈夫じゃないよ！ 死ぬかと思った！」

ソフィアは元気に答えた。どうやら大丈夫のようだ。

「死ななかつたから良かったじゃないか」

黒瀬は平然と答えた。ソフィアはうんざりとした表情で言う。

「そんなんだから彼女が出来ないんだよ」

ソフィアのその言葉は黒瀬を深く傷つけた。

「関係ないだろ！」

「リヨウは女の子の気持ちを理解出来ないからね。前にも言われたことない？」

「……あるな」

昔、香月に言われたことがあった。

「もうこの話はやめようぜ。傷つく」

「あはは！ リヨウでも傷つくんだね」

「あのなあ、俺はこれでも一応人間だからな」

ソフィアは黒瀬の言葉を聞いて笑みが消える。

「これでも——じゃないよ。リヨウは普通の人間だよ」

ソフィアは先程とは違って真剣な表情をしていた。

「俺だつて自分を人間だと思いたい。でも時々本当に俺が人間なのか分からなくなるんだ。いつまでも経つてもこの力の正体を掴むことは出来ない」

黒瀬は自分の掌を見る。血や泥で少し汚れているが至つて普通の白い掌だ。だが、黒瀬にはその普通が気持ち悪く感じた。外から見ても黒瀬は人間と同じ形をしている。それなのに、身体能力は化物と言つていいほどだった。いざとなれば、この至つて普通の掌で、コンクリートを叩き割ることも出来る。果たしてそれが普通なのか？ 黒瀬はその矛盾が不愉快だった。

「そう思っているのならリヨウは普通の人間だよ。ちゃんと迷つて、足掻いて、苦惱して、時には笑つて。そうできるのは人間だからこそだよ」

「……ありがとう、ソフィア」

ソフィアの言葉は嬉しかった。でも納得することは出来ない。黒瀬は誰よりも自分が化物だということを知っている。

「さあ、そろそろ行こう。ウエスカーが殴られに待つてるからさ」

ソフィアは頷いた。

黒瀬は突然ソフィアに戦闘準備の合図をする。

ソフィアには聞き取れないが、敵の足音が近くなっているのを黒瀬は感じ取っていた。二十、いや三十はいるだろう。それほどの敵が黒瀬とソフィアを取り囲もうとしている。

「敵の数およそ三十だ。ほとんどが銃を持っているはず。気を付けろ」

ソフィアは頷いて、ハンドガンの残弾を確認する。マガジンの弾も合わせて残り四十発。的確に頭を狙えば弾切れは起こらないだろう。黒瀬もいつでも戦えるように銃剣付きのアサルトライフルを構えていた。どこから敵が現れようと、首を斬ってやる！

二人とも戦う準備は万端だった。

二人の集中は正面に行きすぎていた。上からの攻撃を予想していなかったのだ。

何かがパチン！ と切れる音がした。黒瀬はそれが上からということに気付き、見上げる。大きな檻が黒瀬を閉じ込めるように落ちてきていた。

クソ！ 黒瀬は自分の迂闊さに悪態をつく。檻の範囲から出ようと横に跳ぶが、気づくのがあまりにも遅かった。黒瀬が檻の範囲から出る前に檻は落下し、黒瀬を閉じ込める。黒瀬は鉄格子に頭をぶつけてしまう。

マズイ！ 頭の痛みを堪えて立ち上がる。黒瀬はすつぽりと檻に閉じ込められてい

た。ソフィアは運よく檻の範囲外にいたおかげで閉じ込められることはなかった。いや、この場合は運が悪い。

「リョウ、大丈夫!?!」

ソフィアは心配して檻に駆け寄る。

「駄目だ、ソフィア! 今すぐこの場を離れろ!」

マジニが次々に姿を現す。黒瀬が予想していた通り、数は三十を越える。ガトリングガンを抱えたマジニまで登場する。この数をソフィア一人で相手にするのは無理だ。

マジニは一斉にソフィアに銃を向ける。檻に閉じ込められている黒瀬は後回しにするつもりなのだろう。

ソフィアは走る。マジニは銃弾の嵐をソフィアへと向けるが、ソフィアは遮蔽物を使い、上手く避けていた。

黒瀬は腰の鞘からサバイバルナイフを抜いて鉄格子に向けて振った。しかし、思った以上に鉄格子は硬かった。一撃でナイフはポツキリと折れ、その刃はどこかに飛んでいってしまう。鉄格子には浅い傷しかなかった。

「クソ!!!」

黒瀬は全力で鉄格子を蹴った。それでも檻が揺れるだけだった。それでも諦めず何度も何度も蹴る。

ソフィアは着実に追い詰められていた。銃弾の風のせいで遮蔽物から動くことが出来来ない。

「ソフィア！ 逃げろ！」

黒瀬は叫ぶ。その声がソフィアに聞こえたのか、黒瀬を向いてにつこりと笑った。次の瞬間、ソフィアが隠れている遮蔽物にガトリングが襲い掛かる。一秒間に七十発を越える弾丸が遮蔽物をボロボロにした。もうこの場に隠れてるのは無理だ。ソフィアはそう判断して、すぐ近くの遮蔽物に飛び移ろうとした。だが、ガトリングマジニはその行動を読んでいた。ソフィアが飛び出した途端、標準を横に傾ける。放たれた弾丸はソフィアの右腹と脚に命中した。

プツン、何か黒瀬の中で切れた。その瞬間、身体が燃えるように熱くなって何も考えられなかった。手で鉄格子を掴んで横に引っ張ると、鉄格子はまるで粘土のようにグニヤリと曲がって出口を作ってしまう。黒瀬はそこから通り抜けると一直線にソフィアの元に向かった。遮蔽物の先にソフィアはいた。近くにいる敵五体を素手で瞬殺してソフィアに駆け寄る。

ソフィアはひどい姿だった。右足は欠損し、腹部からは腸が引きづり出されていた。血は止まらず全身の血を出すのではないかという勢いで今も出続けていた。

「あ……………」

黒瀬は思わず呻いた。そして頭が真っ白になる。

——なんで？　なんで？

目の前の現実が嘘であつてほしかった。

「……………リヨ、ウ？」

ソフィアが掠れた声で黒瀬を呼んだ。黒瀬は我に返り、ソフィアを抱き抱える。

「ご……………めん、こんなことに……………なっちゃ、て……………」

「何でお前が謝るんだよ……………俺が言ったのに……………必ず守るつて……………」

誰が見ても分かる。ソフィアには手の施しようがなかった。

「リヨウ……………自分を……………見失わないで……………」

ソフィアはゆっくりと瞼を閉じた。ソフィアからどんどん熱が引いていく。

「おい、おい！　目を開けろよ……………」

ソフィアは何も答えない。黒瀬の胸の中で既に息絶えていた。

「何でだよ……………ソフィアが何したつてんだよ……………何で俺じゃないんだよ……………」

黒瀬の頭はぐちゃぐちゃになつていた。目の前で起こつた親友の死。守れなかった自分の疎か。色々な感情が合わさつて黒瀬の脳を掻き乱した。

「何が……………これ以上誰も死なせたたくない」だ。俺は死なせた！　仲間を、大事な仲間を……………！　守るつて言ったのに！」

マジニが黒瀬を取り囲む。全員がニヤニヤとにたつき、敵を一人殺せたことを嬉しがっていた。次は男だ。男を殺せ！ まるで勝利を確信しているかのようにマジニは雄叫びを上げる。

「お前ら……お前らのせい……」

黒瀬はマジニたちを睨み付ける。その目からは赤い涙が流れていた。そしてある一つの感情が黒瀬を支配した。

殺意だった。

「殺す……殺す……殺す……」

まるで呪文のように黒瀬は言った。もう黒瀬自身も自分を止めることは出来なかった。

「あ………れ………」

気がつくくと、黒瀬の周りには血の海が出来ていた。マジニの姿は確認できないが、マジニと思わしき肉片があちこちに飛び散っていた。

全身は血で真っ赤に染まり、鼻をつんぎく臭いが立ち込める。吐き気がしてきた。
「俺が……やったのか」

自分がやった記憶はあった。そうなる過程もちやんと覚えていた。

「ソフィア……」

ソフィアの周りにはマジニの血や肉片が及んではいなかった。黒瀬はソフィアに駆け寄って、再び抱き抱えた。

「ごめん、ごめんなさい……約束を破った。守るって、守るって言ったのに」
もうソフィアは冷たくなっていった。

「本当に、嘘つきだな、俺は……」

瞳から涙が流れる。今度は赤くなかった。透明の涙だった。

「ごめん、ごめん、ごめん」

何度謝ってもソフィアが目を開けることはもうない。

いや、t—ウィルスなら——死人を甦らせれるt—ウィルスなら。

『自分を見失わないで』

黒瀬はソフィアの最期の言葉を思い出した。

「……駄目だな、俺も」

涙が溢れて止まらない。死んだ人間は生き返らない。その事実は何年も前から知っ

ている。

黒瀬は泣いた。声を上げて。タンカー全体に響くほどの大声で、何時までも泣いていた。

70話 混乱

何時間泣いただろうか。黒瀬はそれも分からないほど、泣いていた。仲間の死、それは今まで何度も目の前で見てきた。それなのに、こんなに泣くのは初めてだった。

それは彼女には特別な感情があつたからだ。

別に恋愛の対象として見ていたわけではない。彼女は黒瀬を心配し、大切に想つてくれた。それだけで黒瀬は嬉しかった。彼女を本気で守りたいと思つていたので。

だが、彼女——ソフィアを守れなかった。黒瀬は自分を恨んだ。何故ソフィアを救えなかったのか。それは自分が弱かつたから。

「俺が……悪いんだ……」

黒瀬は自分でも聞き取れないような低い声でそう呟いた。

仲間を救いたければ、強く、誰よりも強くならなければならぬ。

抱き抱えていたソフィアを、そつと床に下ろす。

「じゃあな……ソフィア」

黒瀬はゆつくりと立ち上がり、ソフィアという勇敢な戦士に敬礼した。彼の目にはもう涙は流れていない。

黒瀬はタンカーのマジニを全滅させた。これで誰もソフィアを穢すことはない。あとは、本命を倒すだけだ。

アルバート・ウエスカー。この事件の黒幕。奴のウロボロス計画という残忍な計画のせいで多くの人間が死んだ。マジニになった人間もそうだ。アルファ、デルタチームの隊員や友人のカーク。守れなかったソフィア。

仇を討つてやる。黒瀬の心は真つ赤に燃えていた。グツグツと胸が煮えたぎり、今すぐにもウエスカーをぶん殴ってやりたい気持ちでいっぱいだった。

タンカー内を進むと、格納庫に出る。そこにはジルの言っていた爆撃機があった。その近くではクリス、シエバがウエスカーと戦っていた。現時点ではクリスたちは苦戦しているようだ。

「ウエスカー！」

黒瀬はウエスカーの顔を見た瞬間、全てが憎悪に包まれた。奴のせいだ……！

ウエスカーの元へと駆ける。その速度はいつもよりも速い気がした。その勢いのままウエスカーの顔面に一発を叩き込もうとするが、掌で受け止められる。

「貴様か……」

ウエスカーはにたりと笑って煽るように言う。

「大事な仲間が死んだようだな」

どこかでソフィアの死を見ていたのだろうか。黒瀬はもう我慢の限界だった。

「このクソ野郎！」

再び殴りかかるが、ウエスカーの人間離れたスピードでいとも簡単に避けられる。

「お前のせいで人がどれだけ死んだと思ってるんだ！」

「さあな。数えたことはない。それに俺にそれを言っただろう？ 反省するまでも

？」

ウエスカーには悪びれる様子もない。本当に自分が正しいと信じているかのようだ。

「なんで、そんなことが言えるんだよ！ おまえのせいで、多くの人間の未来がなくなっ

たんだぞ！」

「遅からずとも世界は破滅し、多くの人間の未来は失われる」

「何を！」

黒瀬は連撃するが、ウエスカーの素早さに翻弄され、一撃も加えることができない。

黒瀬とウエスカーが初めて戦って十年以上経つ。それでも黒瀬はウエスカーには及

ばない。

何でだよ！ 黒瀬は自分に苛立ちを感じていた。どれだけウエスカーを倒したいと思っただけでも、結局は実力がものをいう。今の黒瀬ではウエスカーを倒せない。

「R計画の要がこの程度とは……笑わせてくれる」

ウエスカーは黒瀬を鼻で笑う。ウエスカーは黒瀬の知らない何かを知っているようだった。

「R計画？ なんだそれは！」

「知る必要はない。今から世界はウロボロスに呑み込まれるのだからな！」

ウエスカーはそう言つて、凄まじい跳躍力で爆撃機へ飛び乗った。すぐにエンジンは稼働し、加速が始まってしまふ。

「クリス、シエバ、飛び乗るぞ！」

黒瀬は走り出した。クリスを追い越し、爆撃機のハッチに手が届きそうな距離まで来ていた。

あと少し！ 黒瀬はハッチに手を伸ばすが、そこに銃弾が飛んでくる。それに気づかず、黒瀬の右腕を一発の弾丸が貫いた。

「ぐうっ!!」

あまりに突然のことで立ち止まってしまふ。銃弾の飛んできた方向を見ると、ガスマスクをしたアンブレラの兵士が三人、立っていた。

「リヨウ、大丈夫か!？」

クリスが駆け寄ってくるが、

「今はウエスカーだ! 急げ!」

怒り気味にそう叫ぶ。クリスは一瞬で判断し爆撃機へと急いだ。

クリスとシエバが何とか爆撃機に乗り込んだのを見送る。

頼んだぞ、クリス、シエバ。

ここまでできたあの二人なら、ウロボロス計画を阻止してウエスカーを倒せるはずだ。

黒瀬はそう確信していた。

それよりも、今はアンブレラの兵士が最優先だ。

アンブレラの兵士は、何故かクリスとシエバを殺さず、黒瀬だけを狙った。奴らの狙

いは分かっている。だが、何故狙うのかが分からない。

「お前ら、一体何なんだよ!」

黒瀬は苛立ちを三人に向けるが、それを無視して兵士はいきなり襲い掛かってくる。

一人が突撃してナイフで黒瀬を狙う。

もう、手加減はしない。黒瀬はソフィアの死でそう決めた。奴らがどこの何者である

うと、必ず殺す。

黒瀬は撃たれた右腕でガードする。避けるのはが、わざと避けなかった。黒瀬の右腕

はスパリと真つ二つに切れて床に落ちる。敵はその行動に驚き、一瞬動きが止まる。避けると予想していたのだろう。黒瀬はその一瞬を逃がさない。

左腕に力を込め、渾身の一撃を兵士の腹部へとぶつける。その威力は防弾アーマーごと腹部を貫通するほどだった。

まだだ！

兵士はまだ死んでいない。油断しないためには必ず息の根を止める。黒瀬は腹部から腕を引き抜いて、兵士の後頭部を掴み、地面に激突させる。頭はトマトのように弾け、ペチャンコになってしまう。

完全に殺した。これで奴は目を覚ますことはない。

「次はどういった？」

黒瀬の切られた右腕からは煙が上がり、みるみると腕が再生していた。これほどの回復がはやいのは、三年前のシカゴでの事件振りだった。

兵士の一人がハンドガンを抜いた。あの女の兵士だ。

その兵士は三発を瞬時に撃った。ハンドガンの弾速程度、今なら簡単に避けれる。黒瀬はそう思っていた。事実、一発目は避ける。だが、その避けた先にもう一発が迫っていた。

クソ！ 何故予想出来た!? 黒瀬は身体を捻ってそれを避ける。しかし、その先にも

弾が迫っていた。流石に瞬時には避けられず、その弾丸は黒瀬の心臓を貫いた。

「うっ!？」

黒瀬は一瞬呻いて倒れこむ。血液が全身に循環せず、身体から力が引いていく。

まだチャンスはある。心臓から弾丸をえぐりとれば、すぐに再生する。

だが、敵はそうさせてはくれない。もう一人の兵士が黒瀬にのしかかり、腕に注射器を刺して血液を抜いた。

「彼の動きを封じて」

兵士は、女の兵士からそう命じられ、黒瀬から抜いた血液を保護ケースに入れて、動けない黒瀬の両足を撃った。

「えっ——?？」

黒瀬は撃たれた事実よりも、女の兵士の声に驚いた。今まで何度も近くで聞いた、透き通った美しい声だった。

女の兵士は、ガスマスクを外しその素顔を黒瀬に曝した。

長く美しい黒髪、吸い込まれるような瞳、淡い桜色の唇。

「何で……………?？」

女の兵士の正体は、香月彩だった。黒瀬を何度も支えてくれ、カントウ事件では生死をともしした、言葉では言い表せない特別な感情を抱いている相手。

黒瀬は、立て続けに衝撃なことが起こりすぎて脳がごちゃごちゃになっていた。

彩は兵士？ アンブレラの兵士？ 何で何故？

「リヨウ、今までお疲れさま」

彩は、動けない黒瀬に近づき、顔を間近に合わせる。

「彩……なのか？」

「ええ、真正正銘の香月彩よ。今まであなたの心の支えになっていたね」

彩は今までの思い出を思い出しながら失笑する。

「あなたの子守りも今日で終わり。今までR計画のために働いてくれてありがとう」

タンカーにヘリが近づく。そのヘリには醜いアンブレラのロゴが。それは彩にとっても醜いロゴのはずだった。今日までは。

「迎えが来たみたいね。お別れよ、リヨウ」

彩は黒光りするナイフを抜いて黒瀬の心臓へと刺す。それだけでは終わらず止めをさすために捻って引き抜く。心臓から血が吹き出し、その鮮血は一メートルにも及んだ。

「じゃあね」

彩はそう言って、着陸したヘリに乗り込む。黒瀬は薄れていく意識の中、彼女が立ち去る様子をただ見ていることしか出来なかった。

71話 行くべき場所

黒瀬は目を開ける。

空には綺麗な星空が広がっている。あまりに広大な空に黒瀬は吸い込まれそうだった。

——生きてる。

彩に心臓を刺され、黒瀬は死さえ覚悟した。黒瀬は胸を擦る。撃たれ、そしてナイフで刺された傷口は既に治っていた。

心臓に弾がある限り、再生はせず、血が巡らないで死ぬはずだ。もう一度胸を擦るが、弾丸が残っている感触はない。

風に揺られて、一発の血のついた弾丸が黒瀬の横をコロコロと転がる。黒瀬はそれを手に取り、確かめる。

確かに、その弾丸は黒瀬の心臓に命中したものだ。

——あの時か。

彩は黒瀬の心臓にナイフを刺し、とどめを差したように見せ掛けた。だが、本当は心臓の弾丸をナイフで摘出していたのだ。

きっと彩には何かの事情があるのだろう。アンブレラに脅されたり、もしかしたら人質を捕られているのかもしれない。そうとしか考えられない。彩にあんなこと出来るはずがないのだから。

そう黒瀬は信じた。十年以上もの付き合いだ。彩を信じていたかった。

「っー」

起き上がろうとすると、両足に激痛が走る。黒瀬はあまりの痛みにぐらつき、尻餅をついてしまう。

そういえば、足も撃たれてたな。

足の傷も治ってはいいたが、弾丸が取り残されたままだ。このまま歩いたりすれば、いつまでも激痛が伴ってしまう。

黒瀬はナイフを取り出して、撃たれた場所に突き刺した。痛みはするが、どうせすぐに治る。その傷口に指を突っ込んで弾を摘出する。左足の弾丸も同じ方法で取った。

両足の傷口は少しずつ治っていった。腕が再生したときよりも格段に遅い。今までもそうだったが、どうやらこの再生は、自分の精神力に影響されるらしい。怒れば再生は早い、通常時には今のようになんか少しずつ治っていく。

「ほんと化物だな、俺は……」

黒瀬は傷が治ったのを確認して立ち上がる。

クリスとシエバは無事だろうか。いや、あの二人なら必ずウエスカーを倒してくれるはずだ。それよりも今は彩を優先しなければならぬ。

彩に乗せたアンブレラのヘリは北へと向かっていった。H Qに連絡してヘリの追跡調査を行わなければ。

黒瀬はH Qに連絡を取ろうと、端末機を取り出した。だが、その端末の画面には見たくもない顔が映っていた。

『目覚めたのね、リヨウ』

画面に映っていたのは、全身が真紅の少女だった。その顔と声には何の感情も乗っていない。

「何でお前がいる、レッドクイーン」

黒瀬は、その赤の少女を知っていた。アンブレラによって造られた高性能AI。だが、彼女はロシアのコーカサス研究所で消去されたはずだった。

『あなたが想像している通り、あたしはコーカサス研究所で確かに消されたわ。でも、完全に消去される前にアンブレラが造った衛星にバックアップを取っておいたの』

赤の女王は淡々と答えた。

黒瀬は上空を見上げる。星々が輝いているが、あのどれか一つにアンブレラの衛星があるはずだ。その衛星の映像で黒瀬を監視しているに違いない。

『ネットに繋がれば、あたしはどこにでも現れられるわ』

「ケータイを持つのが怖くなってくるな。それで？ 本題は？」

赤の女王はただ黒瀬をほくそ笑むために連絡を取ったのではない。何かの目的があるはずだ。

『彼女の場所知りたくない？』

「彼女？ 彩のことか？ やはりお前らが彩に何かしたのか!？」

『ええ、そう。あなたの大事な友人の居場所よ。もう一人いるけどね』

端末の画面が切り替わり、寂れたビル街を映し出す。そのビル街には見覚えがあった。日本の元首都トウキョウの渋谷だ。黒瀬は遊びに何度も渋谷に通ったことを今でも覚えている。

渋谷の中心に穴が開いてそこから一機のオスプレイが飛び立つ。その直後渋谷を中心としてプラズマのようなものが発生し、トウキョウに巨大な穴を作った。

「なんだこれは？」

トウキョウの地下。黒瀬は覚えがあった。十年前、カントウ事件の際にアンブレラの地下研究所に乗り込んだのだ。

『あなたも知っている通り、トウキョウの地下にはアンブレラの巨大な地下研究所があった。焼却処分されたのは研究所のほんの一部分よ。アンブレラは無事だった研究

所で昨日まで研究を続けていたわ」

「昨日まで？」

赤の女王は『ええ』と頷いて続ける。

『プロジェクト・アリスはアンブレラのラスベガス研究所を襲撃した際、トウキョウの研究所が稼働していることを知った。そしてラスベガス研究所で仲間にした大量の妹たちとともにトウキョウ地下研究所を襲撃したわ。でも、ウエスカーの策略によって妹たちは地下研究所とともに壊滅。ウエスカーはオスプレイに乗って一人で脱出しようとしていた。ウエスカーの策略に気づいていたオリジナルアリスは、先回りして機内にいたの。ウエスカーとアリスは機内で戦った。油断してしまったのね。アリスはウエスカーにトウキョウの血清を打たれたの。そのせいで今までのような超人的な力が出せない。オスプレイはそのまま富士山に落下したわ。富士山でごたごたもあつたみたいだけど、アンブレラはアリスを回収した』

赤の女王はそこまで言つて黒瀬に発言の権利を与える。

「いや、待て。それは昨日の話なんだよな？　ここはアフリカだぞ。日本からアフリカまで20時間くらいはかかる」

黒瀬が言いたいのは、ウエスカーが日本からアフリカまで来て、ウロボロス計画を実行するのは不可能ということだ。

『あなたの疑問を簡単に説明するわ。日本にいたアルバート・ウエスカーが、アンブレラの作ったクローンっただけ。まあ、本人は自分がクローンだなんて思っただけだろ
うけど』

「ウエスカーのクローン？ 何の意味がある？」

『簡単よ。アンブレラは彼の力が欲しかったの。でも彼が打ったウイルスを制御できる人間はそうそういない。だから彼のクローンを作った』

「そんなことをしなくても……彩と一緒にいた兵士たちはなんだ？ あの力は人間じゃない」

『あなたも知っている通り、あの力の源はFーウィルスよ』

「ウエスカーのクローンがいるのなら、兵士を全部ウエスカーのクローンにすればいいはずだ。なのに、何故俺にも及ばないFーウィルスを使用した兵士を戦わせた？」

『それを詳しく説明するには少し時間が掛かるわ。でも簡単に言うと、アンブレラにも派閥があるの。クローンウエスカーがいる派閥、Fーウィルスを使用した兵士がいる派閥。アリスを拐ったのは、Fーウィルスを使用した兵士がいる派閥よ』

「派閥ね。結局世界の敵ってことには代わりはないな」

黒瀬は頭を悩ませる。アンブレラがまだそんなに残っていたとは。奴らは倒しても倒しても数は一向に減らず、何度も甦る。まるでゾンビのようだ。

『世界の敵……そうね。一般人にとってはそうかもしれないわ。あたしもどちらの派閥の計画も詳しくは知らないの』

「アンブレラが造った高性能A Iなのにか?」

『高性能A Iだからかもしれないわ。アンブレラの計画にあたしが反発する可能性もある』

「そうかよ」

『話を元に戻すわ。アリスと彩の居場所よ。あなたは命を落としてまでもそこに向かう覚悟はある?』

「なんだよ、敵なのに俺の心配か?」

『あたしはA Iよ。絶対にアンブレラの命令を遂行しなければならない。けど、その命令に疑問を持つこともあるわ』

「それで、居場所は?」

黒瀬の覚悟はとづくに出来ていた。命などアンブレラとの戦いを決意した日から捨てているようなものだ。

『カムチャツカ半島にある旧ソビエトの潜水艦の修理ドッグよ。冷戦が終わった後、アンブレラが買い取って巨大な研究所を造ったの』

「カムチャツカ半島だな。今すぐ行く」

『あたしを信じるの?』

「信じはしないさ。お前の悪行はアリスから聞いているからな。それに、どうせ罠だろう?」

『ええ、罠よ。』

赤の女王ははつきりと断言した。

『あたしは命令されてあなたと会話をしている。あなたを誘き出すためにね』

「何故だ?」

『ここから先は言えないわ。あなたに覚悟があるのなら、今すぐロシアへ向かって』
「行つてやるさ。そしてアリスと彩を救い出す」

『リヨウ』

「なんだよ」

『真実を知っても……後悔しないで』

「何の真実だか知らないが、俺はもう後悔はしないって決めたんだ」

ソフィアの死を思い出す。もう仲間を目の前で失つたりはしない。

——そう決めたはずだった。

『リョウ、無事!？』

タンカーの上空を飛んでいるBSAAのヘリから、黒瀬を心配する声がある。

「ええ、無事です。リカさんと田島さんも無事だったんですね」

リカと田島とは連絡が取れず、安否がわからなかったが、声を聞く限りでは無事のようだ。

『少し気絶してけど無事よ。ジルはクリスたちの所に向かっているわ。あたしたちも行きましよう』

「いや、行くところが出来ました。HQに伝えてください。アンブレラの施設の場所がわかったと」

黒瀬は拳を握り締める。

(彩、必ず助けてみせる!)

黒瀬は、何も知らない。

7 2話 渋谷

レオンSIDE

富士山の山頂近くに、多くの自衛隊員が来ていた。

目的は、アンブレラに殺された自衛隊員の遺体の回収と情報収集。しかし、情報収集は難航していた。生存者が一人しかいなかったからだ。そしてその一人は新たに立てられた仮設テントの中で治療を受けている。

「つたく、ツイてないな」

レオンは、女性の隊員から軽い治療を受けてながらそう呟いた。いや、生きているだけツイているのだろう。なんせ、生存者はレオンただ一人なのだから。

レオンとしては任務終了後、すぐに帰国するつもりだったのだが、どうやらそうはいかないらしい。この後、防衛省や警察からの事情聴取が控えているだろう。事情を聞きたいのはこちらの方だ。

治療が終わわり、レオンは机に置いてあったコーヒーを一口、口に含んだ。冷めた体に熱が広がる。やはり冷えた体にはコーヒーが一番だ。

レオンは感慨に浸っていると、同じく机に置いてあった端末に女性の顔が映った。

ハニガンだ。

『レオン、無事だったのね。連絡が取れないから心配してたわ』

「無事じゃないな。こっちはアンブレラと戦って負傷したんだぞ」

負傷、と言っても全身にかすり傷ができた程度だった。

『なら、大丈夫ね。レオン、新しい任務よ』

「任務？」

『ええ。アリスの居場所がわかったわ。あなたはアリスを救出しに行くの』

「アリスのどと!？」

アリスが連れ去られて数時間、まさかそんなにはやく見つけるとは。

「誰からの情報だ？」

『リヨウよ』

レオンはその人物の名を聞いて驚いた。またも関わるのか。

「俺とリヨウは運命の赤い糸で結ばれているのか？」

『場所はロシアのカムチャツカ半島にあるアンブレラの秘密基地よ』

「場所がいいが……部隊はどうする？ B S A Aも参加するのか？」

『B S A Aからはリヨウを含めた三人が行くわ。目的は別の人間の救助らしいけど。あ

なたと、他の人間で混成部隊を作成中よ』

リヨウが他の人間の救助、レオンがアリスの救助を担うことになる。

リヨウSIDE

「俺が殺したのか……?」

黒髪の少年は、目の前で倒れている二人を見て眩いた。

倒れている人物は、少年の両親だった。いや、厳密には違う。育ての親と言うべきか。母親とは血が繋がっていることは確かだ。最も少年の身体を流れている血液は本物ではないが。

ともかく、少年の両親は白衣を血に濡らし、全身が赤で染まっていた。

少年は、右手で握っているモノを恐る恐る見る。

「う、わあああ!」

それを見た途端、少年は一気に力が抜け、手に持っていたモノを投げ捨てた。黒い物体が床を滑る。

それは銃だった。

——俺が殺した。

銃を両親に向けて撃った。そして殺した。

「ああ……アああアああああ!!」

少年は絶叫する。両親を殺した。俺が殺した。オレが殺した。オレガ殺シタ。オレガ——。

「うわあああ!!」

黒瀬は飛び起きた。

周りを確認すると、リカと田島が驚いた様子で黒瀬を見つめていた。

「……夢、か」

ヘリはグラグラと揺れながら、目的地へと向かっていた。寝るつもりはなかったが、あまりに大きな事件が積み重なって、身体に負荷が多く、強制的にシャットダウンしてしまったようだ。

「怖い夢でも見たの?」

リカは黒瀬を心配する。

「ええ。不謹慎ですが……両親を殺す夢を見たんです。あまりにリアル過ぎて……」

いや、あれはまるで遠い記憶のように懐かしく感じた。だが、黒瀬に両親を殺した記憶なんてない。両親は不運な交通事故で死んだのだ。

「あたしも時々見るわ。隣のバカの頭を吹っ飛ばす夢を」

リカは隣に座っている田島を指差した。

「おい、バカって俺のことか？」

「アンタ以外誰がいるっていうのよ」

リカと田島はまるで付き合いたてのカップルのようにイチヤつく。黒瀬はその二人の姿を見て苦笑した。

「ほんと、仲が良いですね」

「仲良くない!!」

二人は息ピッタリで否定した。やはり仲が良いようだ。

「楽しみのところ悪いが、もうそろそろ目的地だぞ」

ヘリのパイロットが言う。

黒瀬は窓から外を見る。広大な雪原がそこにはある。いや、厳密に言うと、凍った海の上に雪が積もっているのだ。遠くで軍艦を見つけた。沈没した軍艦には雪が積もり、一つの墓標のように見えた。そんな光景があちこちに広がっている。

「あつたぞ、あれだ！」

雪原に、不自然にポツカリと穴の空いた場所があつた。その穴からは潜水艦の展望塔が突き出していた。赤の女王に寄れば、あれに乗って、施設に向かえるらしい。

黒瀬、リカ、田島は、彩を救い出す、緊急出動したレオンやバリーを含む混合チームがアリスを救出しに行くと言令だつた。

施設の構造がわからない以上、大部隊を突入させるわけにはいかない。少数精鋭で二人の救出をしなければ。

へりは高度を落とし、氷の上へと着陸する。黒瀬はハッチを開ける。凍えるほどの冷たい風が機内へと入ってくる。実際に凍えていた。

「クソ、なんて寒さだ！」

田島はあまりの寒さに悪態をついた。三人ともアーマーの上に防寒コートを着ているが、それでも急速に体温が下がっていった。

「潜水艦に急ぐぞ！」

三人は猛吹雪の中、潜水艦へと進み、潜水艦の展望塔のハッチを開けた。リカと田島は銃を構えながら、潜水艦の中に入る。それほど艦内は広くはないので、敵は潜んでないことがわかつた。

「本当に大丈夫なんだろうな？ 海に入った途端操縦が利かなくなつて沈むなんて嫌だ

ぞ」

「そうなるかもな」

黒瀬はハツチを閉じて操縦席に座る。赤の女王が気をきかせてくれたのか、暖房が付きっぱなしだった。コートに付いた雪が暖房の熱で溶ける。防水も担っているコートに水が染み込むことはなく、雪水はコートを伝って床に落ちた。

「リカさん、田島さん、本当に覚悟はいいんですね？」

田島の言った通り、潜水艦は本当に制御不能に陥って沈むかもしれない。施設に辿り着けたとしても、そこに何が待ち受けているか分からない。アフリカでソフィアを失った黒瀬は、本当は二人を置いていきたかった。死の危険に晒すことは分かりきっている。

「今のアンタをほっとけないわ」

リカは黒瀬の顔を見て言った。

「え？」

「鏡を見ればわかるけど、相当酷い顔してるわよ」

リカはポーチから小さな手鏡を取り出して黒瀬に見せる。リカの言う通り、酷い顔だった。目付きはいつもより鋭くなつて目の下には大きな隈が出来ている。顔は病人のように真つ青だった。

「疲れているのよ。まる一日戦っていたわけだし」

「そういうこった。子供を一人にしちやおけないのさ」

もう二十七歳なんだけどな。と黒瀬は心の中でそつと呟いた。

「ありがとうございます。二人の力貸してください」

「おうよ！」

潜水艦は故障することもなく、潜水艦の修理ドックへと入った。アンブレラのロゴが入った潜水艦があちこちにある。これを使って世界を行き来していたのだろうか。

三人は潜水艦から出て、周囲の確認をする。敵らしき影は見えないが、ここは既に敵地。罠が仕掛けられているかもしれない。油断は禁物だ。

ハンドサインで指示しながら、三人は物陰を移動する。進んだ先に、不自然に壁に掛かっているタブレットがあった。まるで取ってくださいと言っても言っているようだ。

黒瀬はそれを手に取る。画面をスライドすると、マップが出てきた。どうやら、この施設のマップらしい。丁寧に現在位置まで書かれている。

「彩ちゃんはどこにいるんだ？」

田島がタブレットを覗き込んで言った。

「多分、ここかな？」

いくつもの施設を越えた先の研究所に、まるでここへ向かえと言っているかのよう
に、赤い点が点滅していた。

「結構先ね。何時間掛かるのかしら」

「どんな罠が仕掛けられていようとも俺は行きます」

マップを見ると、この先にあるのはシブヤエリアのようだ。渋谷以外にもラクーンシ
テイやニューヨーク、ベルリン、ロンドンなど様々な都市のエリアが書かれてある。

「渋谷？ どういうこと？」

「わかりません、行ってみましょう」

三人は白い通路を進む。敵が隠れている可能性は低いが、どんな罠が仕掛けられてい
るかわからない。慎重にだ。

通路の奥まで行くと、大きめの扉があった。それに近づくと重たい扉が自動で開き、
その先の光景を黒瀬たちに見せつけた。

「オイオイ、マジかよ……」

田島は驚きのあまり、口をポツカリと開けた。他の二人も同じように驚く。

三人の目の前に広がっているのは、夜のトウキョウだった。厳密に言えば、渋谷のスクランブル交差点だ。トウキョウがカントウ事件で封鎖される前、三人ともこの場所に訪れたことがあった。あの時と全く同じだ。本物と考えるほどの完成度だった。一部違う点を言えば、至るところに死体が転がっていることか。しかも死んで間もない。

ネオンの眩い光や映像の広告が目を眩ませる。懐かしい光だ。今の日本ではこんな光景をそうそう見ることは出来ない。

「一体なんなんだ？ 俺は夢でも見てるのか？」

田島は自分の頬をつねる。痛みを感じて夢ではないことに気づくが、夢ではないとすれば、目の前の光景はなんだ？

『アンブレラが実験のために造り出したの』

田島の疑問に答えたのは、黒瀬でもリカでもなく、タブレットからする音声だった。

黒瀬はタブレットを取り出す。画面には赤の女王が映っていた。

『侵入成功おめでとう。あなたたちはアンブレラの最高重要施設の一つに潜入したの』
「まるで最高重要施設がまだあるみたいだな」

『ええ。ほとんどBSAAに潰されたけど、あと二つ最高重要施設が残っているわ』

「それはどこにある？」

『一つは皆が知っているわ。でももう一つは、あたしでも知らないの。その施設を知っ

ているのは、アンブレラでも最高幹部だけよ』

アンブレラが造り出したAIでも場所を知らないとなると、アンブレラは相当極秘主義のようだ。

「それよりも何でアンブレラはこんな施設を造ったんだ？」

田島は赤の女王に質問する。

『アンブレラはウイルスでも収入を得ろうとしたのよ。でも、その効果を現実世界で試すことは出来ない。そこでアンブレラはニューヨークの中心を再現し、ウイルスの爆発的感染をシミュレーションして、その結果をロシアに見せ、彼らにウイルスを売ろうとした。それからモスクワにおける爆発的感染をシミュレーションして、アメリカに売ろうとした』

トウキョウの爆発的感染を中国に、北京での爆発的感染を日本に売る。こうすることで、誰もがウイルスを持つ時代が来るというわけか。

『でも、結局はラクーンシティの件や、その後の事件でこの施設の存在意義は無くなったわ』

「本当のウイルスの恐怖を知ってしまったからな」

ウイルスは国ではなく、テロリストの手に渡ることになってしまった。そして世界は気づいたんだ。国同士で歪み合っている場合ではないと。実際、アンブレラが表向きで

は崩壊してからは、世界的にバイオテロが増えた。それは都市を巻き込むほどだ。

『そう。結局アンブレラはウイルスを売ることが出来たのは初期だけよ』

「なに？　初期には売れたのか!？」

『ええ。ラクーン事件が起こる前に、アメリカやロシアに日本、中国、イギリスやフランス……その他にも多くの国が買い取ってくれたわ。そしてそのウイルスは今も処分されていない』

そんな情報、BSAAには一切入ってきていない。

「おいおい、ラクーンの事件が起こらなかつたらウイルス戦争が起こりそうだな」

と田島。

『実際そうだったのかも知らないわね』

核ミサイルに変わる新兵器か。tーウイルスは核よりも安価で、しかも都市一つを壊滅させることが出来る。生物兵器の使用は条約で禁止されているが、いざ戦争となれば守るものなど少ない。

『それよりも大丈夫？　彼らがあなたたちを発見したみたいよ』

赤の女王の言葉で、黒瀬たちは周囲を警戒する。いつの間にか、人間に囲まれていた。いや、もう人ではない。目には眼球は白濁化し、顔は死んでいるのかあのように真っ青だ。しかも、その口の回りには誰のかもわからない血がべったりと着いていた。ゾン

ビだ。

「いつの間に!」

三人とも武器を構える。数はいようと薄のろのゾンビだ。エージェントの三人には勝てないはずだ。

しかし、ゾンビは予想を裏切って——走った。

「なに!?!」

ゾンビが一斉に食料——人間の血肉を追い求めて走り出す。

「撃て!」

田島とリカを近づいてくるゾンビの頭を片っ端から撃つ。ゾンビが走るなんてデタは今までなかった。驚きはしたが、それだけだ。先程までは銃を持ったマジニを相手にしてきた。武器も持っていない敵に負けるわけにはいかない。

黒瀬も木刀で接近するゾンビの頭を叩き潰す。動きは素早いが結局ゾンビであることに変わりはない。

『凄いわね。流石はBSAAのエージェント。このアンデッドたちはターウィルスにプラーガを合わせて、アンデッドの弱点である身体能力を向上させたの。マジニのような知能はないけど、数を増やすには噛み付くだけでいいの』

「余計なもん作りやがる」

黒瀬は赤の女王に文句を言って、スクランブル交差点を駆け巡る。その速度はリカでも辛うじて終えるほどだった。黒瀬は瞬く間に五十を越えるゾンビを始末し、木刀を納める。

『素晴らしいわ。でも、この先にも試練が待ち受けているわよ』

赤の女王がそう言うのと、目の前のビルが横に開き、通路が現れる。

「敵を倒したら扉が開くのか。まるでRPGみたいだな」

『あなたたちは先に進むしかない。……最終的にはリヨウだけが残っていればいいのだから』

「あら、あたしもいれなさいよ。このバカは死んでもいいけど」

リカは田島をからかう。しかし、田島は言い返す元気はなかった。

「行くわよ、リヨウ」

リカは扉の先に進もうとするが、「待ってくれ」と黒瀬が呼び止めた。

「何か……いるな」

黒瀬は別方向のビルを見つめる。そのビルから何かの気配がする。

「レッドクイーン、あのビルには何がいる」

『生存者よ。あなたたちには関係ないわ』

関係ない？ 関係ないでは済まされない。生存者がいるのならば助けないと。

三人はそのビルに入り、気配のする場所へと向かう。

「この先か」

扉の先から人の気配がする。数は……二人だろうか。黒瀬はその扉を開けようと取手を捻るが、開かない。鍵は掛かっているないので、机や椅子を扉の前に積み重ねて開かせないようにしているのだろう。

黒瀬はため息をついて、扉を蹴り破る。積み重ねていた机や椅子は吹き飛び、ガラガラと崩れた。

黒瀬は部屋に入る。

「おい、誰かいるか——」

その瞬間、横からバットを持った少年が飛び出してきた。そのバットは、黒瀬の頭を狙っている。

「俺はゾンビじゃないぞ」

黒瀬は頭の上に腕を置いて防ぐ。ミシミシと骨が鳴るが、こんな痛みこの十年の間でなれてしまった。黒瀬は少年の手首を叩いてバットをもぎ取る。少年は派手に転ぶが、すぐに体勢を立て直した。

黒瀬と少年は顔を見合わせる。

二人とも硬直してしまう。

「え？」

なんせ、その少年が黒瀬と同じ顔だったからだ。

73話 クローン

リヨウSIDE

「どういふことだ」

黒瀬は先ほど保護した二人から離れた場所で、赤の女王と話していた。二人は、田島とリカと話して安心している。

『見ての通り、＼アレ＼はあなたと、あなたの友人のクローンよ』

赤の女王は何も隠すことなく、そう答えた。

黒瀬は二人を見る。黒瀬のクローンは、本当に瓜二つだった。違う箇所と言えば、目の色くらいだろうか。黒瀬の瞳は紅色だが、クローンの黒瀬は黒色だった。友人——彩のクローンも彩と瓜二つだ。言われなければ気付けない。

黒瀬は、前に赤の女王にシミュレーションのことを聞いて、少し疑問に思っていたことがある。それは、シミュレーションに使う人間のことだ。今からあなたは実験台になってゾンビに噛まれます、というシミュに参加したい人間なんてそうそういない。

『シミュレーションを行うためにアンブレラは多くの人間のクローンを用意したの。そ

して作ったクローンに今まで暮らしていた記憶と、バイオハザードの脅威に適切な感情的反応を示すための基礎的なメモリを植え付けるの』

「だが、あいつは？」

黒瀬は、自分のクローンを指差した。

黒瀬のクローンは、その脅威に立ち向かおうとしていた。クローンは黒瀬をゾンビと勘違いして、バットを握り、黒瀬の頭をカチ割ろうとしたのだ。

『時々いるのよ。『怯える』というルールを破ってしまうクローンがね。その傾向は、今までのバイオハザードに正面からぶつかってきた人間のクローンが多いわ』

「俺以外にもクローンがいるのか？」

『もちろんよ。アリスやレオン、クリス……あなたの友達のカローンもいるわ』

クローンを造るには、その人物のDNAが必要だ。ほとんどのクローンは血液検査をした人物の血で造られたのだろう。

「レオンやクリス、小室たちは血液検査の時に血を奪われたのか」

赤の女王は頷いて言う。

『アリスはハイブを脱出してアンブレラに捕らわれたときに血を採られたの』

「だが、俺は？ 俺の血は信用している人間にしか提供していない」

黒瀬は血液検査の時は、BSAAではなく、レベッカに頼んでいる。超人的な力を誇

る人間の血液を病院で渡すわけにはいかない。この血の重要さは黒瀬も理解していた。

「タンカーの上でアンブレラの兵士に血を抜かれたな。それで作ったのか？」

黒瀬は昨日の戦鬪を思い出していた。

『そんな直ぐに新型のクローンは作れないわ。それに今のあなたの血でクローンを作るとあなたのクローン全員が超人的な力を持ってしまう』

「じゃあ何時だ？」

「1999年4月。あなたはカントウを脱出した後——」

赤の女王が言い終わる前に黒瀬は、

「クソ、自衛隊か！」

と悪態をついた。

カントウを脱出してすぐに自衛隊によってイーウィルスに感染してないかどうか、血を採取された。その時か。

『そうよ。自衛隊にもアンブレラの工作員が潜んでいた。そしてあなたの血を渡し、二つのモノを作った』

「二つ？」

『あなたのクローンと——発言権をブロックされたわ。ここでは言えない。目的地に辿り着けば全てがわかるわ。あなたの全てがね』

「……………」

全てがわかる。それはこの力の正体や自分の記憶がないことも含まれているのだろう。

『それよりあの二人をどうするの？ 連れていく気？』

黒瀬はクロロンの二人を見た。黒瀬のクロロン、そして彩のクロロンだ。

「もちろんだ。この場に置き去りするわけにはいかない」

『二人が運良く生き残れて、外の世界に連れていってどうするの？ 二人は、自分たちがクロロンと知ったらどうなるか、あたしでも予想できないわ』

「アンブレラのAIのくせに二人のことまで心配してくれるのか？ お前にとってはただの実験体のはずだ」

『その通りよ、あたしにとってアレはただの実験体。あたしは現実的な意見を述べているだけ。あの二人の記憶は実験のために作られたの。数時間前までは空っぽだったのよ。全てまやかし』

「あの二人にとっては現実だ」

『ええ、そうね。……だからこそ、あの二人に本当の現実を見せたらどうなる？ 今まで現実だと思っていたことが、全て引っくり返る。家族も友人も、学校に通っていることも、全て偽物の記憶なのよ』

あなたのようですね。赤の女王はそう言いかけたが、禁止ワードだったようでブロックされてしまった。

「少しづつ……教えていけばいい。あいつらには酷いことをしてしまいかもしれない。でも、ここで死ぬよりかは遥かにマシだと思うんだ。生きていれば、いつかは理解できる日が来る」

『……そうね。あたしが口出しすることではなかったわ。ここから無事に抜け出せればだけど』

「必ず抜け出すさ。誰一人失いはしない」

黒瀬は赤の女王にそう言って、タブレットをポーチに収めてクローンの二人から離れて田島とリカに事情を話した。

「あたしも賛成よ。彼らはクローンだとしても、生きているもの。ただの人間と何一つ変わらない」

「右に同じ。クローンだからって助けられない理由はないし、BSAAはバイオテロの被害者を助けなければいけないからな」

田島とリカは笑顔で言った。彼らの想いは黒瀬と同じだった。

「田島さん、リカさん、ありがとうございます」

黒瀬は二人に頭を下げた。

「全く……そのくらいで礼を言われても困るぜ」

田島は黒瀬の頭を小突いた。黒瀬は頭をおさえて笑顔で返す。

「さて、話は終わった。二人の名前を聞かせてくれ？」

黒瀬は、黒瀬のクローンと彩のクローンに近づいてそう言った。

「おれは上田佑都です」

「岸川真美です」

クローンだからといっても名前は同じじゃないようだ。

「ユウト、ママ。ここを脱出出来たとしても、お前らにとつては辛い現実は待ち受けてるぞ。それでも俺たちに付いてくる気はあるか？」

真実をここで言うわけにはいかなかった。ここで生きる気力を無くしてしまつては困る。

「辛い現実を受け止められるかどうかはわかりません。でも、おれはここで死にたくない。あなたたちに付いていかせてください」

「わたしもユウトと一緒にです」

佑都と真美は顔を見合わせ、笑顔をつくった。

……こいつら、出来てんな。黒瀬はクローンに少し嫉妬してしまうが、今はそんな場合ではない。

「ユウト、これを」

黒瀬はハンドガンとマガジン、サバイバルナイフを佑都に渡す。

「使い方は歩きながら教える。行くぞ」

佑都 S I D E

佑都と真美は、見たことも聞いたこともない部隊の人間と地下道を歩いていた。

彼らは所属を B S A A と言った。一切聞いたことはない。警察の特殊部隊の一つだろうか。しかし、何故いきなりこんなことになってしまったのか。佑都は事が起きる前の記憶を探る。確か、幼馴染みの真美と渋谷に買い物に来たのだ。

そして、その幸せな時間を襲ったのは、カニバリズムに目覚めた人間だった。いや、あれはもう人間とは言い難い。ホラー映画に出てくるゾンビのように、噛んだ人間を化け物へと変えてしまう。映画と違う点を言えば、走るかどうか。今まで見たゾンビ映画では、ゾンビは鈍重としていて、一体一体は驚異ではない。しかし、あれは何だ？ さつき見たゾンビのようなモノは、全力で走れ、動きがとても素早い。あれでは一体を倒すのにも一苦勞だろう。

しかし、彼らは違う。BSAAと呼ばれる部隊の三人は、走るゾンビをものともしない。まるでゾンビのエキスパートのように、テキパキと処理している。

佑都は、彼らが何者なのかわからない。だが、彼らに付いていくしか生き残る術はないのだ。

黒瀬リヨウと名乗った人物は、生き残っても辛い人生が待っていると云った。佑都にはその辛い人生がどういうものかわからない。しかし、生きていられるのなら、どんな人生でも受け入れるつもりだった。

「ねえ、ユウト。あの人ってユウトの双子とかじゃないよね？」

佑都の隣で歩いてきた女子がこそりと話す。

彼女は、優也の幼馴染みの岸川真美。幼稚園から高校までずっと一緒にいる仲だった。

「いや、おれに兄弟がないことはママも知ってるだろ？　世界には同じ顔の人間が三人いるっていうし、それなんじゃないかな？」

佑都も、黒瀬と名乗った人物と顔が似ていることを気にしていた。いや、似ているでは済まない。ほぼ同じだ。声も体格もだ。一つ違うといえ、目の色だろうか。佑都の瞳は黒だが、黒瀬の瞳は紅色だ。

「でも、凄い奇跡ね。偶然、そんな人に救われるなんて」

「ほんとだな」

佑都と真美が仲慎ましく話していると黒瀬から『止まれ』の合図が出る。

「この階段を登った先だ」

黒瀬はそう言って先行して登る。次に優也と真美が登り、その後ろをリカと田島が後方を警戒しながら進む。

この階段の先には何があるのか。地下道を進んでからまだ十分ほどだ。

しかし、その先は佑都が想像していたものと全く違っていた。

「え……………?」

あまりのことに佑都は絶句していしまう。それは真美も同じだった。

佑都たちの目の前にあったのは、学校だった。それも自分たちが通っている学校、藤美学園。

おかしい。さっきまでは渋谷の地下道を歩いていたはずだ。地形や場所を考えてもありえない。佑都は頬をつねるが、痛みを感じて夢ではないことに気づく。

真美も佑都と同じで頬をつねっていた。

「さっきまで夜だったのに……」

夜だったはずだが、いつの間にか陽が降りてきている。昼の三時くらいだろうか。

本当は地下道を歩いていた時間は十分ではなく、何時間も歩いていたのかもしれない

い。だが、それでもあの道から藤美学園にたどり着けるはずがない。佑都は混乱する。「佑都、真美、お前らには何が起こっているのかわからないと思う。全部ここから脱出したら教える」

と、黒瀬が冷静に言った。

ここから脱出とは、どこなのだろうか。渋谷にいたはずなのに藤美学園に辿り着き、そして次はどこに向かうのか。佑都は何一つわからない。

しかし、今の頼みの綱は彼らだけだった。

74話 母校

「まさか藤美学園に辿り着くとはな……」

黒瀬はそう小さく呟いた。

まさかスクールエリアが藤美学園だとは思ってはいなかった。それは他の者も同じだろう。佑都と真美は、何が起こっているのと、戸惑った表情だ。アンブレラがこの藤美学園を造ったとすれば、その狙いは何なのだろうか。

考えていると、ポーチから赤の女王の音声が流れる。

『無事に着いたようね』

ポーチからタブレットを出す。赤の女王が無表情で黒瀬を見つめた。

「なぜ藤美学園がある？」

率直な質問だった。

『学校でバイオハザードを起こす実験をするのなら、どこでもいいわ。でも、カントウ事件の際、藤美学園だけはその敷地の広さや感染者の数もあつてか脱出できた生存者が極めて少なかった。その生存者の半分はアンブレラに敵対する組織に入ったわ。アンブレラはその学校を再現して何度も実験を繰り返しているわ』

赤の女王の言う通り、藤美学園からの生存者は極めて少ない。というか、黒瀬たちと紫藤一行しか学園を脱出出来ていない。そして紫藤一行は滅び、黒瀬たちはB S A Aかテラセイブのアンブレラに敵対する組織についた。

「酷い」としやがる」

黒瀬は溜め息をついた。

黒瀬は今まで何度実験が行われたのか知らないが、あの悲惨な脱出劇が繰り返されてきたと思うと、胸から怒りが込み上げてくる。

『……あなたたちに試練よ。この先のエリアに進むにはカードキーが必要な。そのカードキーはこの学校のどこかにあるわ』

「この学校のどこかかって……。どんだけ広いと思ってるんだ」

『ヒント、三階のどこかよ』

三階か。藤美学園には南校舎、中校舎、北校舎、西校舎がある。そのうちの三階のどこか。これは骨が折れそうだ。

「リカさん、田島さん。聞いての通りだ。二人はユウトとマミを連れて南校舎と中校舎を頼みます」

「一人で大丈夫なの？」

リカが心配した目で黒瀬を見つめる。

「はい。カードキーを見つけたら連絡をください」

黒瀬はそう言つて、いますぐ西校舎に向かおうとするが、

「ちよつとあなたたち誰なの？」

呼び止められる。

振り向くと、三人の教師が黒瀬たちに向かつてきていた。実験に使われるクローンだ。

「俺たちは不審者じゃない。こういうものだ」

黒瀬はBSAAの証明書を出した。教師らはBSAAの証明書など見てもわかりはしないだろうが、クローンだとしても事は穏便に済ませたい。

「BSAA？ 特殊部隊？ あなたたち、頭がおかしいの？」

当然の反応か。黒瀬たちが持っている武器も本物だとは思っていないだろう。

「京子先生、私です！」

真美は京子と呼ばれた女性教師に駆け寄る。

どうやら、佑都と真美は設定上、藤美学園の生徒らしい。

「どなた？ あなたはここの生徒なの？」

女性教師は、真美のことを知らないような態度を取った。いや、実際に知らないのだろう。このクローン個体には真美と出会った記憶がないのだ。

「う、うう……!?!」

三人の中の一人の男教師が苦しみ出す。

「どうしたんですか、手島先生!?!」

手島と呼ばれた教師は力なく倒れ、地面に血反吐を吐いた。

「どけー」

黒瀬は手島の脈を測る。

生きている。いや、これは……

黒瀬は手島から離れ、ナイフを取り出した。

「何をするつもりなの!?!」

女教師には黒瀬の行動が理解できない。理解できなくて当たり前だ。今からゾンビになります、と言つても信用するはずがない。

「う、うわああああ!」

もう一人の教師が叫びながらサスマタで黒瀬を押さえつける。普通の行動だ。人が目の前で殺されそうになったら、はいそうですか、と見逃すはずがない。

「リカ、倒れている教師をいまずぐ処分しろ!」

リカは銃を構えるが、既に遅かった。

手島はいつの間にか立ち上がっていた。しかし、その顔には生気がない。

「おいー」

黒瀬はサスマタをどかそうとするが、ゾンビの方が行動がはやく、近くにいた女教師の首に噛み付いた。

「きゃあああああ!!」

女教師の首から鮮血が飛び散り、辺りを真っ赤に染める。リカは一足遅く、そのゾンビの額を撃った。

「ひ、ひいいいい!」

黒瀬をサスマタで押さえつけていた教師はサスマタから手を離して情けない悲鳴を挙げながら、どこかへ逃げていった。

「ど、どうなっているの?」

真美の足は震えている。目の前で見知った顔が二人も死んだんだ。

「この学校でも渋谷と同じことが起きようとしているんだ。ユウト、マミ、絶対に二人から離れるなよ」

黒瀬はそう言って走り出した。とにかく、今はカードキーを見つけてることが最優先だ。

佑都には何が起こっているのかさっぱり分からない。目の前で教師が二人死んだ。佑都と真美のクラスの授業を担当していた教師がだ。しかし、京子は何故授業を担当している生徒の顔を知らなかったのだろうか。佑都は教師とお喋りをするタイプではないが、真美は京子とはよく話していた。混乱していたのだろうか。佑都は都合よくそう解釈した。

B S A Aの隊員の黒瀬が言うには、この学校も渋谷のようになるらしい。ゾンビが溢れ、人が死ぬ。そんな状況に。

もう佑都の頭はパンクしそうだったが深呼吸して心を落ち着かせた。

「ママミ、大丈夫か？」

「え、ええ……」

真美の顔は真つ青だった。佑都も同じ状態だった。足が震え、教師の死体を見れば、喉の奥から酸っぱいモノが込み上げてくる。

「二人とも、休んでいる暇はないわ。死にたくなかったらあたしたちにしっかりついてきて」

リカと田島は校舎に向けて走り出す。佑都も真美の手を引っ張って二人についてい

く。死にたくはない。そして真美を死なせたくはなかった。

「酷い状況だな……」

田島は校舎に入って、あまりの状況にそう呟いた。

人があちこちに倒れている。それもほとんどが噛まれていた。

「はやく移動するわよ。いつ目を覚ますか……」

「……ああ」

田島が先行して階段を昇る。その後ろには佑都と真美。後ろから優也と真美をカバーするのはリカの役目だ。二人とも何の訓練も受けていない高校生だ。大した戦力にはならない。しっかり守ってあげなければ。

「三階って言ってもこの広さじゃ簡単に見つけられそうにないな」

探すだけなら時間を費やせば終わる。しかし、そう簡単にはいかない。

田島は階段を上り、壁に背を張り付けて廊下を覗く。

「いたぞ……」

簡単にはいかない理由。それはこのゲームには敵がいるからだ。しかも、それは音に

敏感で数で攻めてくる。呻きながら歩くゾンビとはワケが違う。そいつは成人男性と同等かそれ以上のスピードで走る。しかも、人間よりも耐久力が高い。

そいつ——ゾンビは廊下の先に三体いた。全員が死体を貪り喰っている。こちらに気づいている様子はなさそうだ。

「どうする、リカ」

「このまま進んだら結局見つかるわ。あたしが行く」

リカはナイフを抜いた。銃を使えば奴らを倒すのは簡単だが、それでは外の奴らも銃声に反応して三階に集まってきてしまう。こちらには戦闘能力のない人間がいるのだ。出来れば隠密に倒したい。

リカの歩く足音に気づいたのか、ゾンビはリカたちの存在に気付く。彼らは目の前の死体から目を離して立ち上がる。新たな血肉を求め、リカの元へ全力ダッシュで距離を縮めていく。リカはナイフをくるくると回しながら、前進する。余裕の表情だった。

リカを喰おうと三体のゾンビが群がるが、リカのナイフ捌きで瞬時にして喉を掻き切られ絶命した。

「いへろうかん」

田島はリカの肩を叩いて褒め、三階の索敵を開始する。敵はリカが倒した三体しかおらず、すぐにカードキー探しに移った。

「俺は奴らが三階に上がってこないか見張っておく。三人はカードキーを探してくれ」

「クソ、見つからないな」

佑都がカードキーを探して十分ほど経ったが、未だに見つからない。

そもそも小さいカードキーを『三階のどこか』というヒントで見つけられるはずがない。あの赤い少女はもう少しヒントをくれても良かったんじゃないか？ 佑都は溜め息をつくも、机の中身を調べ続ける。

「それにしても本当に何が起こってやがんだ？」

佑都は藤美学園に着いた時から、このことばかり考えていた。

これが夢でなければ、渋谷から十分足らずで藤美学園に着いたことになる。地理的にありえない。渋谷でのゾンビの発生や現在置かれているこの状況。もう佑都の頭はパンクしそうだった。

しかし、生き延びるためにBSAAの三人に従うと佑都は決めた。それは真美を守るためでもある。

佑都は真美に好意を持っていた。幼稚園の頃からの付き合いである真美とは腐れ縁

のようなものだったが、いつしか彼女のことを好きになっていたのだ。佑都は何としても彼女を助け出したかった。

「ユウト!」

佑都がカードキーを探している教室に真美が飛び込んでくる。

「どうした、マミ?」

「これ見て!」

真美の手にあったのは、白と赤の傘のようなロゴの入ったカードキーだった。

「どこにあった?!」

「椅子をひっくり返したら、張り付けてあったの。これで先に進めるんでしょう?」

「多分な!」

早速二人はこのことを田島とリカに伝えようと、教室の外に出る。

「田島さん、リカさん、カードキー見つかりましたよ!」

佑都は嬉しそうに言ったが、田島たちからの返事はない。

「田島さん?」

確認のため、もう一度呼ぶが、結果は同じだった。

二人は三階の教室を見て回るが、田島とリカの姿はどこにもなかった。

「どういうことなの?」

「おれにもわからん」

何故彼らは消えた？ しかも突然。佑都は考え込んでいると、ポケットに入れていたスマートフォンが震えた。

75話 捕縛

西校舎の三階には黒瀬がいた。

彼の手には木刀が握られており、床には頭から血を流すゾンビが倒れている。走るゾンビといっても、今の黒瀬では相手にもならない。

「よし、探すか」

三階のゾンビを掃討した黒瀬は早速搜索に移る。

今の彼の目的はカードキーを探すこと。黒瀬は手近な教室に入って地道に机や椅子の下などから探す。教室が散乱しているので簡単には見つからないことは分かっている。しかし、どこにカードキーが隠されているかわからないため、念入りに調べるしかない。

「ん？」

黒瀬は調べている最中、この教室が懐かしく感じられた。

「もしかして……」

教室のドアから顔を出してクラスのプレートを見る。プレートには『2-A』と書かれてあった。黒瀬がまだ藤美学園に在学していた頃のクラスルームだ。

黒瀬は懐かしさを感じた理由がわかったところで、自分の席を思い出す。

確か、右側から一列目の最後尾だった。

その席を見る。あの席でよく寝ていた。

黒瀬は昔の自分を思い出して苦笑する。

黒瀬はあの頃は授業なんて聞かなくても、定期考査では学年トップだった。だから、授業中は寝るかサボるかかのどちらかだった。そういえば、屋上で寝ていたら、同じサボりの小室と出会ったのが、彼との出会いだ。

「はー、いかんいかん」

感傷に浸っている場合ではない。今は一刻も早くカードキーを探さなければならぬ。

黒瀬は自分の目的を思い出し、早速行動に移った。

一つの教室を調べ終わり、廊下に出たところで、黒瀬は何かに気付いた。

——誰かいる。

“何か”の気配に気付いた直後、彼に突風が襲い掛かった。しかし、それはすぐに止む。

「なんだ？」

人の気配がすることは確かだが、場所を探れない。この狭い廊下のどこかにいることはわかってはいるが、人が隠れる場所なんてない。

「(ハハ)だよ」

誰かが黒瀬の耳にそう囁いた。次の瞬間、黒瀬は後方に吹き飛ばされる。

——なに!?

黒瀬の胸が痛む。殴られたような痛みだった。すぐに受け身をとって木刀を抜く。

「透明になっているのか！」

昔、黒瀬は透明のハンターと戦ったことがあった。しかし、今回の敵は言葉を喋る。人間までもがウイルスの影響で透明になれるようになってしまったのだろうか。

「ちげえよ、ボケ」

またも黒瀬に誰かが囁く。次は背中が殴られ、床に倒れこんでしまう。

「なんなんだよ！」

透明のハンターの気配は探れたが、こいつの気配は探れない。黒瀬は焦りと苛立ちを感じていた。

「その程度か？」

再び、黒瀬は後方に吹き飛ばされる。床に着地する前に殴られ、前方へ。それが何度

も繰り返され、黒瀬の身体はボロボロになっていった。

「ふう、ちよつと疲れたな」

やっと攻撃が止み、黒瀬は床に転がる。全身の骨にはヒビが入っており、少しでも動けば激痛が走る。

「く、そ……」

意味が分からない。敵は透明ではないとすればなんなんだ？

「よお、痛い？」

黒瀬に攻撃した本人が姿を現す。茶色の短い髪に顎に少々の髭を蓄えている男。そして……黒瀬と同じ紅い瞳。テレビか何かで見た人物だった。その男はどこからどうみても普通の人間で、とてもB・O・Wには見えない。だが、敵であることには変わりない。

「お前か！」

黒瀬は痛みには耐えながら起き上がり、その男の顔面に拳を放つ。しかし、当たる直前、というところで男は消え、黒瀬は横に吹き飛ばされて、教室のドアを破り、机や椅子を巻き込みながら転がった。

「遅いな、それでも原種か？」

どこかで男の声がし、黒瀬の顎に見えない拳が飛んでくる。それをまともに喰らい、

脳が揺れる。

——こいつ、消えたんじゃない。

黒瀬はふらつきながら、耳に全神経を集中させていた。教室中に響く足音が聞こえる。しかし、それはあまりに早すぎる。

「やはりそうか！」

この男は、銃弾よりも速いスピードで教室を駆け巡っていた。銃弾がほんの一瞬見える黒瀬でも彼の姿を捉えることが出来ない。

速すぎる。それが、黒瀬の素直な感想だった。だが、そんな奴が相手でも黒瀬は諦めていない。

黒瀬はダガーナイフを十本、周囲に投げる。男が音速で教室中を駆け巡っているというのなら、どれか一本でも当たるはずだ。

しかし、その投げたダガーナイフ全ては、瞬時に黒瀬の元へと返ってきた。身体の上るところに刺さり、黒瀬は痛みで膝をつく。

「おいおい、俺は自分のスピードをコントロール出来る。お前が投げたナイフは俺には止まっているように見えるんだぜ？」

男は止まり、黒瀬の隣でそう囁いた。

「ハイッー！」

黒瀬は胸の鞆に納められているナイフを抜いて男に刺そうとするが、既に男は消えていた。代わりに黒瀬の腰にあった手榴弾が、ピンのない状態で足下に転がっていた。

—— マズイ。

黒瀬は直ぐにその場から離れようと立ち上がる。しかし、全身の傷で上手く身体が動かない。

手榴弾の爆発は黒瀬に襲い掛かり、その身体を吹き飛ばした。

—— 俺はなんなんだ？

ふとした疑問だった。

幼少期からの記憶がなく、両親が就いていた職も思い出せない。しかし、武道などのあらゆる戦闘術に優れ、射撃の腕は本物のスナイパーを凌ぎ、頭脳明晰だ。その上、常人の何倍も身体能力が高く、四肢が欠損しても臓器に穴が開いても、再生する能力を持っている。

まるで漫画や小説に出てくる人間みたいだ。

この力は天性の才能——ではない。

もう、黒瀬は気付いていた。自分が何者かによって造られた“化物”だということに。

目が覚める。

黒瀬はすぐに自分が拘束されていることに気付いた。

鉄の椅子に黒瀬の腕と足は固定されている。全力で固定器具を壊そうとするがビクともしない。

そういえば、と黒瀬はこの状況に陥る前を思い出した。

カードキーを探している最中、正体不明の敵から襲撃を受け、手榴弾で身体を吹き飛ばされたのだ。

しかし、黒瀬にはもうその傷は残っていない。凄まじい回復力で傷を再生したようだ。

黒瀬は拘束椅子からの脱出を一旦諦め、周りを確認する。

白い四角の部屋。何かの実験装置が隅々に置かれており、ここが研究室であることが伺える

「やあ、起きたかね」

黒瀬の後ろからしやがれた老人の声がした。

今までその人物の気配に気付かず、黒瀬は驚いたが、すぐに平常心を取り戻す。

「誰だ？」

黒瀬は椅子に固定されているため、後ろを振り向くことが出来ない。

「ほう、覚えてないか？」

黒瀬の横から自動式の車椅子が通り過ぎ、黒瀬の正面で止まる。車椅子に座っているのは七十を越えた老人だった。

「なっ!？」

黒瀬はその老人の顔を見て驚いた。あまりにも自分に似ている。

黒瀬が順調に老いれば、この姿になるだろうと容易に想像がつく。しかし、黒瀬はそれ以前に、この老人を見たことがあるような気がした。

「——ッ!」

老人を見つめていると、鋭い頭痛が走る。頭に何かの映像が流れる。黒瀬はいつも遠くにいる彼を見つめていた。彼はその時、白衣を着ており、車椅子ではなく、立っていた。いつの記憶か分からないが、十年以上前の記憶であることは確かだ。

「ふむ。いくつかヒントを教えれば記憶は戻りそうだな。貴様にとっては良い記憶では

ないが」

「何を……言ってるやがる」

「そういえば、彼はどうだった？ 随分と痛め付けられたそうじゃないか」

「あのクソ野郎のことか？ どうやってあんなのを造った？ 今までのB・O・Wとは何もかも違う」

あのスピード、尋常じゃない。ウエスカーを越えている。

「あれはB・O・Wではない。立派な人間だよ。人間の形をしていたし、言葉を話しただろう？ あれは強化人間の類いだ」

「何か……新種のウイルスを使っているはずだ」

「新種か……彼に使ったウイルスは発見して二十年以上経っている」

「なに？」

あれが新種ではない？ 黒瀬はその言葉が冗談としか思えなかった。そんなウイルスが昔から見つかっていれば、アンブレラはとつくに世界を支配している。

「そのウイルスの名前はR―ウイルス」

「R―ウイルス!？」

またも黒瀬に頭痛が走る。聞いたことがある。幼い頃に。しかし、脳が思い出すことを拒否するように、思考がブロックされる。

「ふむふむ、やはりそうか」

老人は何かに納得し、車椅子から立ち上がった。

「歳を取ると立つだけでもキツイものだ」

老人は車椅子に掛けている杖を取って、黒瀬の回りを歩く。

「五年ほど前に足腰を悪くしてね。アンブレラの技術力を持って、老いは防げない」

「……………」

黒瀬は老人の話を無言で聞く。

「しかし、それも今日までだ」

老人は黒瀬の正面で止まる。

「貴様のおかげだ。先ほど『誰にでも』適応するR―ウイルスが完成した。このウイルスがあれば私の計画は全て上手くいく」

「……………計画？」

「ラグナロク計画だ。世界を壊し、創り直す」

「は、何が創り直すだ。結局おまえの目的もウエスカーと同じなんだな」

「ウエスカーか。彼も『あの計画』を知ってしまったから、ウロボロス計画を実行しようとしたのだろう。しかし、彼の計画はなんら『あの計画』と変わらない。変わるの
は、自分が世界の中心に在ることだ」

黒瀬は老人が何を言っているのかさっぱり分からない。分かるのは、この老人が世界の敵であることだけだ。

「私は世界を救うために、世界を壊す。破滅へのタイムリミットまでそう長くはない。あの計画”は必ず止める”」

老人は後ろの机の上のケースから注射器を取り出す。

「なに、ただの麻酔だ。心配することはない」

老人は黒瀬の首筋に注射器を注す。

黒瀬は抵抗など出来なかった。すぐに視界が歪み、眠りに落ちた。

76話 二人の戦い

佑都はズボンのポケットから震えるスマートフォンを取り出した。

画面には赤の女王が映っている。

「あんたがレッドクイーン？」

佑都は、黒瀬たちが赤の女王と話しているのは見たが、話すのは初めてだった。彼らの話によると、赤の女王は高性能AIらしい。

『ええ。あたしがレッドクイーンよ。あなたたちがユウトにマミね』

名乗った覚えはないが、どこかで会話を聞いていたのかもしれない。

「ああ。そうだけど……」

『カードキーを見つけたのよね』

「ああ」

何故知っている。佑都はどこかに監視カメラがないか辺りを見渡すが、そんなものは確認できない。疑問もあるが、佑都は見つけた傘のロゴが描かれているカードキーを、自分のスマートフォンのカメラに映るように見せた。

『そのカードキーでこのエリアから脱出出来るわ。でもあなたたちは本当に生きたいの

『？』

「え？」

佑都と真美には、赤の女王の質問の意図が分からない。

『あなたたちは薄々気付いていると思うけど、もうあなたたちの生きてきた世界はないの。……………いや、元々そんな世界はなかった』

赤の女王は無表情のまま、淡々と話を続ける。

『あなたたちの記憶は全て偽り。そしてその場所もね。二人が今まで過ごしてきた記憶は何もかもが嘘なのよ。あなたたちは生まれてから一時間も経っていないわ』

「はあ？」

このAIは何を言っているんだ？ 壊れているのか？

佑都はそう思ったが、赤の女王は佑都の考えを予想していたかのように付け加える。

『昨日の夜ご飯は何を食べたか覚えてる？ 昨日の授業の内容は？』

佑都はそう言われて、昨日の夕食を思い出そうとする。しかし、何を食べたのか全く記憶になかった。それは真美も同じだった。

『あなたたちは大まかな記憶しか植え付けられていないの。自分で疑問を持たない程度にね』

「……………何を言ってるんだ？」

『リヨウは直接言うのを避けていたみたいだけど、はつきり言わせてもらおうわ。あなたたちはアンブレラの実験のために造られたクローンよ』

「……………は？」

佑都は一瞬、思考が停止した。赤の女王が言ったことを受け止めるのに五秒ほど時間が掛かった。

「いやいや、おれがクローン？ そんなはずはない。おれは藤美学園2年A組の上田佑都だ。」

佑都は自分に必死にそう言い聞かせた。

両親の仕事、住んでいる家、全て頭の中に浮かぶ。しかし、昨日や一昨日の授業の内容、友人と何を話したのか、そういう記憶が一切ない。

もう思考が追い付かない。もし本当にクローンだとしたら、マミを想うこの気持ちも偽りなのだろうか。

『それでもあなたたちは生きたいの？』

赤の女王が答えを迫る。

黒瀬の前では、生きたいと言った佑都だが、赤の女王の話で混乱していた。分からない。何もかも。

「生きたいです！」

赤の女王に返事をしたのは、佑都ではなく、真美だった。

「マミ？」

「ユウト、確かにわたしたちがクローンだなんて簡単には信じられない。例え、それが本当だったとしてもわたしは生きたいよ。ここで死んでゾンビになるなんて嫌」

佑都は『生きたい』と言えなかつた自分が恥ずかしく思えた。彼女の方がよっぽど強い。そうだ、例えクローンでも死にたいとは思わない。

「ありがとう、マミ。レッドクイーン、おれたちは生きたい。どうやったらここを出られる？」

赤の女王はその答えを待っていたかのように頷き、スマートフォン画面に学校の地図を表示させた。

『そのカードキーはこの場所で使えるわ』

地図で赤く表示されたのは、藤美学園に本来ないはずの地下一階だった。

「地下？」

『そうよ。実験体のクローンはこの場所の存在を知らない。そこまで行けばひとまず安全でしょうね』

「分かった。行ってみる」

敵か味方か分からない赤の女王を信じて良いのか。だが、今の彼らは赤の女王に従う

しかなかった。佑都はスマートフォンをポケットに戻そうとするが、すんでのところで聞き忘れていたことを思い出す。

「そういえば、リカさんと田島さんはどこに行っただ？」

二人は突然行方不明になってしまった。赤の女王なら二人の居場所を知っているのではないだろうか。赤の女王なら知っている佑都は考えた。それにカードキーを見つけたことを黒瀬にも伝えないといけない。

『二人はもうこのエリアにはいないわ、それにリヨウも。でも大丈夫。先に進めば出会えるはずよ』

佑都は赤の女王の言葉を信じることにし、今度こそスマートフォンをポケットに戻した。

「ユウト、行きましょう」

「ああ」

佑都と真美は、廊下を少しずつ進み出す。二人が生きているのは、BSAAの三人の助けがあったからだ。しかし、その三人は今はいない。もう誰も頼れないのだ。

佑都は一步一步進むだけで心臓が爆発しそうだった。いつ、ゾンビが階段を昇って三階まで来るか分からない。恐怖心が佑都を支配しようとする。

(駄目だ、こんなんじゃない……！)

「佑都は震える足を手で叩く。赤の女王には強気に言ったが、実際に行動するには多大な勇氣が必要だった。」

「ユウト……怖い?」

「真美が佑都の服を摘み、震えた声で聞いた。真美は声だけではなく、佑都と同じように足も腕も震えている。」

「……怖いよ。今にも心臓が爆発しそうだ」

「佑都は正直に答えた。」

「ふふ、わたしも」

「真美もこの状況に恐怖していた。しかし、決して絶望はしていない。佑都と二人でここを出ること。それが彼女を支えている。」

「(バカだ、おれは……)」

「佑都は自分を貶める。情けない。女の子に心配されるなんて。」

「生きてここから出ると言った以上、必ず生きてここから出る。佑都は黒瀬に貰った武器を思い出し、ベルトとズボンの隙間に挟めていたハンドガンとサバイバルナイフを取り出す。」

「撃てるの?」

「……ああ、多分な」

銃の使い方は地下道を歩いていたら時に黒瀬からレクチャーされた。流石に銃を撃つたことがない素人が遠くの敵に当てられるはずもないが、五メートルほどの距離ならば身体のどこかには当てられる。

マガジンサイズは十五発。予備はマガジン一つだけ。

(全部頭に当てても三十体か……)

佑都の植え付けられた記憶によると、藤美学園の生徒数は千人近い。しかも、それがほとんどゾンビ化しているとすると、弾三十発では心許ない。

ゾンビは人間と同じように速く走り、人間よりも腕力が強い。そんな奴とまともに戦える武器は銃だけだ。一体ならまだしも複数を相手に接近戦はしたくない。

佑都は銃のセーフティを外し、スライドを引いて引き金にそつと指を置く。そして壁に背を張り付け、階段を覗く。見たところゾンビはいないが、充分な警戒をしなければならぬ。

下の階の階段にもゾンビがいないことを確認し、音をたてないようにゆっくりと降りる。

二階の廊下にはゾンビがいたが、死体を食るのに夢中で、佑都たちには気付いていない。その隙に一階に降りる。

一階の廊下の様子を覗く。全部で六体のゾンビがいる。佑都たちの目的地はその先

の備品室だった。戦闘は避けられない。

「ユウト、どうするの?」

真美が心配そうに聞く。

「もちろん戦うしかないさ」

一直線の廊下、隠れられそうな場所は何処にもない。佑都の覚悟は既に決まっていた。

「来いー」

佑都は一步前が出る。佑都の声に六体全てのゾンビが反応し、ギラギラと眼を光らせる。獲物を見つけた眼だ。新鮮な血肉を喰らおうと全力で走ってくる。

佑都は銃を構え、向かってくるゾンビの頭を狙って引き金を引いた。先頭を走っていたゾンビの額を弾丸が貫く。銃を持つのも今日が初めてのはずの佑都。しかし、第一射が狙い通りに当たったことに驚きもせず、次の目標に弾丸を叩き込む。銃など撃つたことないが、DNAに撃ち方や狙い方が刻み込まれているように身体は動いた。五体目を倒したところで、最後のゾンビは既に目の前に迫ってきていた。狙いを付けるよりも接近が早い。佑都はすかさずゾンビの懐に蹴りを入れて転ばし、後頭部に銃口を突き付けて撃つた。

「……………」

佑都は頬に着いた血を袖で拭いて立ち上がる。

「ユウト……大丈夫？」

「……ああ」

廊下には先程まで人間だったモノが頭から血を流して倒れている。クローンだとしても殺してしまった酷い罪悪感がこみ上げてくる。しかし、こうするしかなかったのだ。佑都は自分が正当だと心の中で言い聞かせる。

——— こんなことしている場合ではない！

今の銃声を聞いたゾンビたちが校内中から集まってくるはずだ。

「マミ、急ごう！」

佑都は真美の手を引っ張って走り、備品室に飛び込むように入る。

赤の女王の話ではこの部屋から地下に通じる道があるらしい。

「多分、あれだ」

佑都が指差したのは壁に不自然に置かれている柵だった。それを横から押すと、地下へと繋がる階段が現れた。

「急ごう！」

佑都と真美は階段を駆け降り、一直線の真っ白な通路を進む。そして見えてきたのが、ドアとキーロック。

「マミ」

「ええ」

真美はポケットからカードキーを出して読み取り口にスライドする。ドアが開いたところで再び佑都のスマートフォンが鳴った。

77話 身体の変化

佑都はスマートフォンを取り出す。画面には赤の女王が映っていた。

『無事、学園から脱出出来たみたいね』

「なんとかな。お前のお陰だ、ありがとう」

佑都は素直にお礼を言った。彼女の助言がなければ、学園からの脱出は不可能だっただろう。

『その扉の先に武器庫があるわ。そこにBSAAの二人の装備もある』

「リカさんに田島さんの武器か！ 二人はどこにいるんだ？」

『武器庫の先の監禁部屋に監禁されているわ』

「分かった、今から向かう」

『気をつけた方が良いわ。武器庫の先の通路にB・O・W.を放っておいたから』

「B・O・W.？」

佑都はその言葉をどこかで聞いたような気がするが、はつきりと覚えていない。

『バイオ・オーガニック・ウエポン。要するに化物よ。ゾンビよりも手強いかもね』

赤の女王はまるで二人を脅すように言った。

「それで、何でそんな化物を放ったんだ？ 味方じゃないのか？」

『味方なんて一言も言っていないわ』

佑都はどうも赤の女王の思惑が読めない。だが、学園から佑都と真美を手助けして脱出させたのは確かだ。

「それでもおれは行くよ。その先に田島さんとリカさんがいるのなら」

「ここまで来て怖いなど言っていない。佑都は固く決心している。

『そう。なら言うことはないわ』

佑都はスマートフォンをしまい、真美と共に通路を歩き出す。

「大丈夫かな、そのB・O・W. っていうの」

「大丈夫じゃなくても進むしかない。おれたちに選択肢はないよ」

佑都は学園でゾンビを倒してから、何故か落ち着いていた。まるで今度も戦ってきたような感覚だ。

自分の親同然でもある黒瀬の記憶を受け継いでいるのだろうか。それなら銃を扱えたのも、ゾンビを簡単に倒せたのも納得がいく。

赤の女王が言った通り、通路の先には武器庫があり、帯たたいいほどの武器が並んでいる。その中に、机に置かれたBSAAと書かれた武器が置いてあった。

「これがリカさんたちの武器か」

佑都と真美は二人分の武器を置かれてあったリュックに入れる。

「これはわたしが持つわ。わたしも少しは役に立ちたいし」

「でも……重いぞ?」

「大丈夫よ、このくらい」

真美は武器を積めたリュックを手にとつて立ち上がり、背にかける。しかし、武器の重さでよろけ、倒れそうになってしまう。

「おいおい、大丈夫か?」

「ええ、このくらい平気よ。それよりユウトは武器を取らないでいいの? B. O. W. という化物がいるんでしょ?」

「ああ、そうだな」

佑都の武器はハンドガンにナイフ。心許ない。

「いるとしてもリュッカーやハンターかな? タイラントだと並みの武器じゃ歯が立たないぞ」

佑都は無意識にその言葉を発していた。

「りっかー? はんたー?」

真美が聞き返す。

「あれ?」

佑都も自分の言葉に疑問を持った。やはり、黒瀬の記憶が混ざっているのだろうか。本当の現実に触れてしまったため、奥底に眠っていた記憶や知識が開かれようとしているのかもしれない。

「リョウさんの記憶が残っているのかもな。リョウさんはおれがさつき言ったりリッカーやハンターと戦ったことがあるのかもじゃない」

「そ、そんなこともあるのね。わたしもわたしの元になった人の記憶が残っていたりするのかしら」

「分からないな。レッドクイーンに聞いてみたいけどこつちからじゃ繋がらないし」

「そういえば、マミの元になった人はどういう人なのだろうか。リョウさんが知っている様子だったが。佑都は黒瀬に会った時のことを思い出した。黒瀬は佑都と真美の顔を見て、怪訝な顔をしていた。

いや、今はそんなことを考えている場合ではない。佑都は自分用の武器を探す。武器庫というだけあって様々な武器が飾られている。佑都は学生服を脱いで傘のマークの入ったタクティカルベストを着用する。そして五・五六ミリ口径のアサルトライフルを手を取った。

「弾は三十発、予備は六つでいいか」

スリングで肩に下げ、黒瀬から貰ったハンドガンホルスターに、ナイフをベルトの

隙間に収める。手榴弾を三つ取ってベストにぶら下げ、準備完了だ。

「マミも、これ」

佑都は同じライフルを真美に手渡した。

「わ、わたしは大丈夫だよ。戦えるか分からないし」

「でも武器は持つておいた方がいい。おれが戦うけど万が一の場合もある」

「そ、そうね」

真美は銃を取って肩に下げた。

リカや田島の武器、そしてライフルを背負っているので、真美はまたもやバランスを崩し、倒れてしまう。

「おいおい、大丈夫か」

「ええ。……てあれ?」

真美は何かに気付き、指を指した。佑都はその方向を見ると、日本刀や木刀、ベストが壁に立て掛けられていた。

「もしかして……」

佑都は近づいて、ベストを見る。それにはBSAAのマークが施されていた。

「やっぱりリョウさんのだ」

「え、じゃありョウさんも?」

「捕まったんだろな」

彼の武器がここにあるということはそうに違いない。佑都は黒瀬のベストを持つとうとする。しかし、重くて中々持ち上がらない。

よく見ると、かなりの武器がベストに入っており、帯たたいいほどのナイフや手榴弾が収められていた。

「……これは持っていけないな」

真美にこれ以上荷物を持たせるわけにはいかない。かといって佑都はこれを着て戦えそうにない。

「刀だけ持っていけば？」

「ああ、そうするよ」

佑都は日本刀と木刀を取って腰に掛けた。

「よし……行くぞ」

武器庫の扉の先には、赤の女王の話が本当ならB・O・Wが放たれている。

佑都はライフルのハンドルを引いて初弾を装填させた。そしてドアを開けるスイッチを押す。

ドアの先は今までと同じ真っ白で広い通路。遮蔽物など一切ない。しかし、B・O・

W・——佑都の予想通りハンターとハンター——がいる。

「マミは中にいろー！」

全部で十五体。佑都は無傷で全てのB・O・Wを倒せる自身がなかった。

「でもー！」

「いいからー！」

佑都は真美を武器庫に押し込み、銃を構えた。佑都たちの声に気づいたハンターとリツカーは全速力で佑都の元へと向かってくる。

「クソー！」

佑都はライフルの引き金を引いて、近い敵から倒していく。しかし、やはりB・O・Wというべきか。耐久力が高く、胴体に二、三発当てたところで少し怯む程度だ。しかも、ハンターもリツカーも驚異的な身体能力で銃弾を避ける個体もいる。

弾があつという間に切れ、リロードをする。次に構えた時には、ハンターが目の前まで迫ってきていた。佑都は直ぐ様引き金を引いて三十発全てを放つてハンターをバラバラに吹き飛ばした。

しかし、その後ろから別のハンターが迫る。佑都との距離は三メートルもない。リロードをしている時間などなかった。

サイドアームのハンドガンを抜いて構えようとするが、ハンターに押し倒される。そのまま自慢の爪で首根っこを引き裂こうとするが、佑都はナイフを抜いてハンターの小

さな頭に突き刺した。絶命したハンターを横に退けて仰向けのまま、ハンドガンで敵を打ち倒していく。

だが、やはり一人では止めるのには無理がある。

天井を張ってきたリッカーが黒瀬の真上に迫り、その裂けたような口から鞭のような舌が飛び出した。

佑都は顔を傾ける。間一髪だった。リッカーの舌は佑都の頬をかすめていた。そのリッカーの頭を撃つて、その場から離れる。死んだリッカーが佑都がいた場所に落下していた。

これだけでも倒したのは六体だけだった。リッカーは壁や天井を這い、リッカーは通路をまっすぐ走ってくる。

あと九体、やはり無傷で倒すのは不可能のようだ。佑都は気を引き締める。

すぐにライフルの弾倉を叩き込んで、壁や天井のリッカーを撃つ。しかし、リッカーだけに集中してはいけけない。ハンターも真つ直ぐ向かってきている。近くまできていたハンターが腕を振った。佑都は背を反らす。鋭利な爪が佑都の首をかすめとつた。すぐに反撃、しかし、三発ハンターの胴体に撃ち込んだところで弾が切れてしまう。

——使える攻撃手段は全て使う！

少し怯んだハンターの頭をストックで叩き潰す。壁を這ってきて飛びかかろうとす

るリツカーに蹴りを喰らわせ、頭を踏み潰す。

残りリツカー二体、ハンター三体。

もうリロードしている時間なんてない。佑都はライフルを投げ捨て、正面のハンターの頭にハンドガンを撃つて叩き込む。ハンドガンも弾切れになり、それも捨てる。

残りの武器は手榴弾と刀、木刀だった。手榴弾を使うときは死ぬときだ。せめて自爆してでもマミのために倒さなければ。佑都は自分の命を投げ捨てる覚悟でいた。だが、それはまだだ。

刀を抜刀し、リツカーが射出した舌を切り落とす。だが、それでも死ぬ様子はない。逆に激怒させてしまったようだ。口を限界まで開き、猛スピードで佑都に飛び掛かる。佑都はそれを間一髪でかわし、下からリツカーの腹を切り裂いた。

休む暇もなく次の攻撃。ハンターが腕を降りおろし、佑都の右腕を引つ掻く。佑都は刀を落としてしまう。その傷からは血が吹き出し、痺れたように動かなくなるが、脳のアドレナリンのおかげで痛みは感じない。

またもやハンターは腕を降り下ろしてくる。佑都は木刀を抜いて攻撃を防ぐが、天井のリツカーが舌を伸ばして木刀を絡めとった。

「ちくしょー！」

武器を失っても佑都は諦めない。ハンターの肩を掴んで飛び膝蹴りを顔面に喰らわ

せる。怯んだハンターの頭に左腕のストレートパンチを決めて吹き飛ばした。

残るはリッカー一体。あの俊敏さに素手で勝てるとは思えない。武器を拾わせる隙も与えないだろう。しかも先程のハンターの攻撃で右腕が使えない。

——やるなら今しかない。

佑都はベストの手榴弾を握り締めた。

真美さえ生きてくれればいい。佑都はリッカーを巻き添えに自爆をするつもりだった。悔いはもちろんあるが、奴を倒す方法はこれしかない。

リッカーは佑都の喉元は食いちぎろうと飛び掛かる。

(ごめん……マミー)

佑都は手榴弾のピンを抜いた——が、それをいざ爆発させるには少しばかり勇気が足りなかった。

しかし、いつまでもリッカーは襲い掛かってこない。佑都は恐る恐る目を開けると、目の前には穴だらけのリッカーが倒れていた。正面にはライフルを構えた真美が立っている。引き金を引いたままだ。弾切れになったことすら気付いていない。

「マミー……？」

佑都の言葉で真美は我に返り、手にしていたライフルを床に落とす。

「ごめんなさい……ユウトが危険だと思って、身体が咄嗟に……」

「いや、謝ることはないよ。逆に助かった。ありがとう」

真美がリッカーを倒していなければ、確実に佑都の喉元は掻き切られていた。

——とりあえず……生きている。

まだ佑都の心臓は破裂しそうなほど激しく鼓動していた。深呼吸で息を整える。

だんだんと冷静になっていき、それに伴って右腕の傷の痛みがひどくなっていく。大量に分泌していたアドレナリンが切れてきたのだ。それに全身が百メートルを全力失踪した後かのようにだるい。立っているのもやっとだった。

「ユウトー！」

ふらりと、床に倒れそうになった佑都を真美が抱える

「ごめん、マミ。少しだけ……眠らせてくれ」

佑都はそう言って目を閉じる。

身体は限界を迎えていた。

78話 リユウ

リカは目を覚めて、現状を把握するのに十秒ほど費やした。

—— 捕らわれている。

固定された鉄の椅子に手と足を手錠で繋がれて座らされている。捕らわれている部屋はかなりの大ききで、至るところに見たこともない機械が並べられていた。

「よお、起きたかお姫様」

真後ろから田島が話し掛ける。田島もリカと同じように捕らわれていた。

「最高の目覚めよ。状況は最悪だけど」

リカの正面には武装したアンブレラの兵士が立っていた。田島の正面にも同じく。兵士は二人をじつと見張る。どうやっても逃がさない気だ。

いや、そもそも逃げれない。リカと田島の腕と足は金属の太い手錠で繋がれている。リカの正面の兵士の腰に手錠の鍵らしきものがぶら下がっているのが見えるが、この状態ではどうにもできない。誰かの助けがあればいいが。

そもそも、何故アンブレラに捕まっているのか。彼女の記憶は藤美学園でカードキーを探しているところで途切れていた。そう思うと、背中が痛む。誰かから不意を突かれた

のだろうか。だが、あの時誰の気配も感じなかった。

カラン、と部屋の奥で金属か何かが落ちた音が響いてきた。

一人の兵士が音の発生源を確認しに奥まで向かう。が、次にドサリと、重いものが倒れる音がした。確認をしにいった兵士の姿が見えない。

「おい、どうした」

残ったもう一人の兵士が確認を問うが何の返事も返ってこなかった。

もう一人の兵士は流石に警戒心を強め、銃を構えて音の方向へゆつくりと進む。

「誰かいるのか！」

兵士は声を強くして言うが返事はない。と、突然物陰から銃を構えた一人の男が現れ、ありったけの弾を兵士に浴びせた。

リカは一瞬、その男を黒瀬だと思ったが、黒瀬は人に銃を使えない。それによく見れば、瞳の色が紅ではなく、淡い赤色だった。黒瀬のクローンである佐都だ。

「良かった、二人とも無事で」

佐都は銃をリロードしてリカたちに近づく。その後ろからは彩のクローンである真美も現れた。

はぐれてそれほど時間は経っていないはずだが二人は成長しているようにリカは感じられた。

「そのの兵士が手錠の鍵を持っているわ」

リカはそう伝え、鍵を入手した祐都に手錠を解除される。

「お前ら、何か随分と成長してないか？」

田島は二人に言った。

「レッドクイーンに全て聞きました」

真美は答えた。

「……え」

全て、と言うことは自分達がクローンであることも聞いたということか。

「それでもおれたちは生きます」

二人は自分がクローンと知っても戦い続けている。記憶が違ってもやはり黒瀬と彩ののクローンというべきだろうか。

「そう言えば、リヨウは？」

「レッドクイーンによれば、先に進めば会えると言っていたんですが……」

リカも田島もレッドクイーンのことは信用できないが、今は前に進むしか選択肢はない。

リカと田島は真美から武器を受け取って装備する。

「リヨウと彩を救い出すわ。ユウトもマミも脱出は後回しになるけどいい？」

佑都と真美は顔を見合せ頷く。

「勿論です。黒瀬さんはおれとマミの命の恩人です。逆に手伝わせてください!」

佑都の目の光は消えていない。それどころか眩しいくらいに光っている。

「本当にリュウにそっくりだな」

田島は佑都の頭に手を置いた。

「気持ちありがたいが、お前はリュウのクローンであれ、まだ子供だ。俺たちの後ろでゆっくり休んでいてくれ」

リカも田島と同意見だった。佑都も真美も、度重なる戦いでかなりの体力を消耗している。この状態で戦わせるわけにいかない。

「……わかりました。じゃあ二人が危険になったらおれも戦います」

佑都はニカりと笑って言った。

「生意気な奴!」

佑都は田島に小突かれた。

「そういえば、彩って誰ですか?」

通路を歩いてみると、佑都が話し出した。

「彩ちゃんは……マミちゃんのオリジナルって言った方がわかりやすいか？」

田島が答えた。

「わたしの……オリジナル？」

「ああ。ユウトのオリジナルがリヨウであるように、マミちゃんにもオリジナルがいる」

「それが彩って人ですか？」

「そうだ。彩ちゃんは……言うなればリヨウの恋人だ」

「ええっ!？」

佑都と真美は同時に驚く。

リカが田島の頭を叩いた。

「捏造するんじゃないわよ。まだキスもしてないって彩が言ってたわ」

「え、まだキスもしてないのか!?! あいつら十年以上の仲なんだから!?!」

リカの言葉に田島も驚いたようだ。

「リヨウは恋愛に関しては大バカだからね。関係が進展しないのも任務ばっかしているせいよ」

まさか黒瀬さんにそんな一面が……。佑都はまるで自分のことを言われているかのように恥ずかしくなった。それは真美も同じで顔を赤くしていた。

「彩さんも皆さんと同じBSAAに？」

「いや、彩ちゃんはテラセイブっていうNGOに所属してる。BSAAがバイオテロと直接戦い、テラセイブはその被害者の治療やケアを行ってる」

「そうなんですか」

佑都は真美の銃の扱いを見て、彩も戦闘のプロかと思っていたがどうやらそうではないらしい。

通路を越えると、新たなエリアが彼らを待っていた。

天候は晴れ、雲ひとつない創られた空。辺りには見慣れた景色が広がっていた。

日本の住宅街だ。詳しい場所まではわからないが、ありふれた場所。今にも子供の遊び声や婦人たちの会話が聞こえてきそうなものだが、まるで時が止まったかのように何の音もない。時々、心地よいそよ風が吹いているだけだ。

「こんなに明るいのに不気味ですね」

最初に口を開いたのは佑都だった。確かに彼の言う通り、この状況はおかしい。

ここは敵地。リカと田島が部屋から脱出したのを敵は気づいているはずだ。それな

のに進行先にB・O・Wの一体もないとは……

「よお、やっときたか」

聞き慣れた声が二階建ての家の屋根の上から聞こえてきた。声の主はのっそりと立ち上がる。

黒髪で紅い瞳の日本人だ。

「リヨウ、無事だったのね!」

リカは歓喜したが、その人物から凄まじい殺気が解き放たれた。

「オレがリヨウだと……? あんな出来損ないと一緒にすんじやねえよ」

リカたちはその人物が黒瀬ではないと気付いた。顔も声も体格も何から何まで黒瀬だが、それでもはつきり違うと断言できた。

「あなたは……誰?」

おおよそ検討はついている。黒瀬のクローンだ。しかし、彼女らの考えは外れていた。

「オレはラグナロク計画で生まれた黒瀬和樹のクローン、リユウだ」

「は?」

彼女らは突然のことで理解できない。ラグナロク計画? 黒瀬和樹? 何のことだ
がさっぱりわからない。

「わかんないって顔してるな。要は、リュウの奴も和樹っていうジジイのクローンってわけさ。ラグナロク計画は世界を終末に導く計画、詳しいことはオレも知らねえけどな」

リュウはそこまで言ったところで、屋根に置いていた武器を全身に着け始める。

マシンガンや対物ライフル、ロケットランチャーに手榴弾に刀……ただの人間では絶対に背負えない重量だ。

「色々と話しすぎた。でもお前らも冥土の土産に何かほしいだろ？」

リュウはRPGを構え、リカたちに向けて躊躇なく引き金を引いた。

「避けるー！」

田島の怒号が飛ぶ。田島は佐都を、リカは真美を押し倒すように伏せさせた。

ロケット弾がコンクリートの地面に当たって爆発し、コンクリートの破片がパラパラと落ちる。

全員無事だが、轟音で耳鳴りが酷い。

「オレの初手を避けたのはお前らが三十回目だ」

「結構多いじゃねえか」

田島は銃をリュウに向けて構えた。

「オレが不意打ちを仕掛けた回数も千八百二十一回だ。こう聞いても多いと思うか？」

「そんなに数えてるなんて律儀な奴だな！」

リュウは弾頭のなくなつたRPGを捨て、屋根から飛び下りた。

「お前らには期待できそうだ。三分時間をやる。それまでに隠れるんだな」

「そんな時間は必要ない！」

田島はマガジン全ての弾をリュウに向けて放つた。が、その弾はリュウにはかすりもしなかつた。

リュウが構えていたのは、日本刀だつた。たつた一本の刀で、弾を全て弾いていた。

田島とリカは黒瀬が何度か見たことが銃弾を斬っているのを見たことがある。勿論そんなのは普通の人間じゃ出来ない。つまり、こいつも普通じゃない。黒瀬と同等もしくはそれ以上か。

「おいおい、折角時間をやったのに本当にいらぬのか？ お前らの死ぬまでの時間を延ばしてやったんだぞ？」

リュウは不気味な笑みを浮かべる。

正面からじゃ勝てない。誰もがリュウの今の行動で気付いた。ここは彼の提案に乗るべきだ。

「行くわよ！ 三分で対策を立てましょう！」

リカは田島を引っ張るようにして連れていく。その後ろに佑都と真美も続いていっ

た。

「対策立てればいいなあ！」

リュウは彼らを嘲笑う。これは彼にとってただの遊びだった。

79話 待っていた

リカたちは近くの家に逃げ込み、戦う準備をしていた。

「リカさん、田島さん、どうするつもりですか？」

「勿論戦うわ」

「でも……」

「わかってる」

リュウの身体能力は黒瀬とほぼ互角と言っているだろう。つまり、黒瀬が敵になったと言っても過言ではない。リカも田島も、黒瀬が敵に回ることなど今まで一度も考えたことがなかった。考えたとしても、彼を倒せるビジョンがどうしても思い付かない。

「正面からじゃ無理。背後を狙うしかないわ」

正直、背後を狙っても黒瀬なら気付くとリカは確信している。それならリュウにも通用しないだろう。だが、今やれる手段はそれだけだ。

「あなたたちはここにいて。音を出さない限り安全なはずよ」

ここが他のエリアと同じなら半径五百メートルはあるはずだ。しかも、隠れられる家が山程ある。そう簡単にリュウには見つからないだろう。だが、敵はあのリュウだ。発

砲音の一つでも出せば、すぐ場所を気付かれる。

倒せるチャンスは一度だけ。

「行くぞ、リカ。もうじき三分経つ。奴も動き出すぞ」

「ええ」

リカと田島は家を出た。

リカは民家の二階で待機していた。

リュウを見つけるのは、意外と簡単だった。彼は堂々と道路を歩いている。

作戦は簡単だ。背後から撃つ。もし避けられたのなら、別の場所で待機している田島の出番だ。

窓からリュウの頭を狙う。胴体に撃っても大したダメージにはならないと踏んでいくからだ。

距離は百メートルほど。リカの射撃能力はBSAAでも一位、二位を争うほど。外すはずがない。

「撃つわ」

田島に合図し、〃もしも〃のための準備をさせる。

「三、二、一……」

——零。

リカのライフルから放たれた弾丸は、真つ直ぐとリュウの頭へと突き進む。外すはずがない。リカも田島もそう思っていた。しかし——

リュウがとつた行動は、首を横に傾けるといふ、ただそれだけだった。それだけでリカの弾丸はただ空を切つただけで終わり、コンクリートの地面へとめり込んだ。

——気付かれていた。

リュウの行動からして、居場所を悟られた様子は一切なかった。それなのにどうして。

だが、まだ案ずることはない。次は田島の攻撃だ。田島はリュウに向かって右、四十メートル離れたアパートの四階に身を潜めていた。

田島も射撃に関してはエリートだ。外すはずがない。

しかし、頭を狙つた田島の狙撃は、又もや首を傾けられて避けられてしまう。

気付いていた。リュウは二人の狙撃場所に気付いていた。

「逆になんて気付かれてないと思つてんだよ！ こんな静かな街で話し声の一つや二つ、気付かねえわけないだろうが！」

リュウはリカたちの考えていることを読んだのか、笑いながら言った。

普通は気付かない。しかし、彼が黒瀬と同様の能力を持つていれば、視力も聴力も人間離れしている。それに早く気付くべきだった。いや、気付いていたとしてもどうにも出来ないが。

リュウはマシンガン二丁をリカと田島の狙撃ポジションへと向ける。彼ならば、片腕で狙うマシンガンでも正確に当ててくるはずだ。

リカは窓から離れ、反対側の窓を突き破って民家から脱出する。直ぐにさつきまでいた場所は蜂の巣になっていた。

「無事!？」

無線で田島の安否を問う。

『なんとかな! どうする、不意打ちは効かないぞ』

「ともかく逃げながら合流しましょう。一対一だと分が悪すぎる!」

リカは走りながら話す。リュウにとつて隠れるという行為は無駄だ。

『そこからオレンジのマンションが見えるか!？』

リカはオレンジのマンションを探す。二百メートルほど先に十五階建て真新しいマンションが見えた。

「ええ!」

『そこで合流しよう！ 戦うことは考えるな！』

「あなたもね！」

リカは無線を切る。近道のためにブロック塀を乗り越え民家の敷地を走る。

「走るの速いな、お前！」

後ろからリュウの声が響く。リュウは民家の屋根を飛び越えながらリカを追っていた。

「そんなのあり!？」

「ありに決まってるんだろ！」

リュウが二丁のマシンガンを構える。リカは民家の玄関のドアを蹴り破って中に転げ込み、キッチンの裏口から外へ駆け出る。すぐにその民家は蜂の巣になった。

「ほんと、逃げ足だけは一人前だな！」

リュウは弾切れとなったマシンガンを捨てて、対物ライフルを構えた。

「おらおら、さっさと逃げろ！」

リカのすぐ隣に十二・七ミリ弾が着弾した。その威力はコンクリートの地面を意図も容易く吹き飛ばす。かすつてもアウトだ。

しかし、いつまでもリカに直撃することはない。近くのブロック塀や地面、電柱を撃ち抜くだけだ。

完全にリカは手玉に取られていた。遊ばれている。結局、これはリュウにとって遊んでしかない。リカはそれが分かかっていても諦めるような人間ではなかった。

『捉えた』

無線機から田島の声が聞こえる。その直後、リュウの対物ライフルを一発の弾丸が貫いた。田島の狙撃だ。

「なにっ!?! ふざけやがって!」

リュウは使い物にならなくなったライフルを投げ捨てた。彼はマシンガンやライフルで派手に銃声を轟かせていたせいで、音による田島の位置を掴めていなかった。

すかさず第二射撃目がリュウに襲い掛かり、その脇腹を貫いた。リュウは短いうめき声を上げ、屋根から滑り落ちた。

リカは目的地のマンシオンを見ると、三階の階段からライフルのスクープの反射が見えた。田島は先に辿り着いていた。

ようやく、命からがら追っ手を遮ったリカはマンシオンに辿り着いた。そして地面にへたりこむ。ずっと全力疾走で逃げていた。息を整えるために深呼吸を繰り返す。

「よお、久しぶりだな、相棒」

田島が四階の階段からリュウを警戒しながら話し掛ける。

「やったの?」

「やったんなら警戒はしないさ。お前はリョウが弾丸の一発や二発で死ぬと思うのか？」

「不謹慎だけど……そうね、ありえないわ」

そう、リョウなら弾丸の何発かは喰らっても行動可能だ。それならほぼ同等の能力を持つリユウも同じはず。

「今のところ、奴の姿は見えない。お前も上に上がってこい」

「ええ」

リカが立ち上がった瞬間、田島がいた場所が突如爆発した。

「さっきのは効いたぜ！」

振り向くと回転弾倉式のグレネードランチャーを構えたリユウの姿があった。彼の脇腹から出血しているが、そんなことは気にも留めていない。

「クソ！」

リカはハンドガンホルスターから抜く。しかし、構えるよりも早く、リユウはリカの間合いへと入った。

「なっ!?!」

リカはリユウの右ストレートを腕でガードする。ミシミシと腕の骨が軋み、苦痛で顔を歪める。リユウはそんなことお構い無しでリカの腹に蹴りを喰らわせた。その威力

は凄まじく、リカは宙を舞ってマンションのフロントガラスを突き破った。

「うう……」

リカは立ち上がることが出来なかった。肋骨の何本かにヒビが入っている。防弾ベストをしていなければ、肋骨は折れ、肺に突き刺さっていただろう。

「おーい、生きてるー?」

リュウは笑いを堪えながら問い掛ける。しかし、リカは返事が出来ない。

「返事がないな。生存確認を行いますね」

リュウはグレネードランチャーを構えた。

——絶体絶命か。その時。

「うおおおおお!!」

ユウトは雄叫びを上げながらリュウへと銃を撃った。しかし、リュウは佐都の接近に気付いていたようで佐都の射撃を全てかわす。

「ユウト、どうして!?!」

「お、そういえばお前もいたな。リョウのクローン!」

リュウは笑みを広げ、グレネードランチャーをリカからユウトへと向けた。

「リヨウならまだしもそのクローンに何ができるってんだよ！」

リユウはグレネードランチャーをユウトの近くの障害物に撃ち始めた。爆風と熱気がユウトを襲う。しかし、それでも走るのを止めない。

「まだだ！」

ユウトはアサルトライフルの弾が切れるとそれを投げ捨て、黒瀬のハンドガンを撃ち始める。だが、それもリユウに効果はない。全て見切られているかのように簡単には避けられる。

「根性あるな、クローンのかげに！ いや、クローンのカローンか！」

「うるせえ！」

ハンドガンの弾も尽きてしまう。ユウトは黒瀬の刀を抜刀した。

リユウには敵わない。そんなことは知っている。それでもユウトはリカや田島が殺されるところを見たくない。

「接近戦で勝てると思ってんのかよ！」

「思っていないさ！」

ユウトは全力でリユウの頭に振りかぶる。しかし、それさえも避けられてしまう。

隙が出来たユウトの顎にアッパーが叩き込まれ、後頭部を掴まれて顔面に膝蹴りを喰らう。鼻骨が折れ、鼻から大量の血が吹き出した。ユウトの意識は混濁する。それでも

リユウの追撃が繰り返される。死なない程度に全身を殴られ、蹴られ、骨や肉がミンチのようにズタボロにされる。最早痛みなど感じないほどに。

「雑魚のくせにイキつたからだぞ」

リユウは笑みを堪えきれず、大声で笑う。

「じゃあな、クローンのクローン君。来世に期待してくれたまえ。クローンに来世があるとか知らないけど」

リユウは倒れているユウトの頭に拳銃を向ける。ユウトは何とか身体を動かそうとするもピクリとも動かない。

——クソ野郎。

ユウトは役に立たない自分を呪いたかった。力があればリユウを倒せた。そればかりが頭に駆け巡る。だが、その力を持っているのも、リユウを倒すのもユウトではない。

リユウは引き金を引こうとするも、その腕を背後から掴まれた。

「あ?」

リユウが振り返る。ユウトもその人物を見た途端、笑みがこぼれた。

「……………待ってました」

黒瀬はリユウを睨み付ける。

「これ以上俺の仲間に手は出させない」

80話 力の差

黒瀬は起きると、先ほどと同じ部屋にいた。

部屋の明かりは付いておらず、人の気配はない。

奴はどこにいった？

老人の姿は消えていた。

拘束がいつの間にか解かれている。黒瀬は立ち上がって、部屋から出た。

黒瀬とリュウは睨み合う。

黒瀬はこのエリアに着いたばかりだが、この状況は理解していた。

「お前、俺のクローンか？」

黒瀬はそうリュウに尋ねた瞬間、リュウからの殺気が突き刺さる。彼から尋常でないほどの怒りを感じた。

「オレはお前のクローンじゃねえよ、出来損ないが！」

リュウは黒瀬に殴り掛かる。黒瀬は後ろに回避するが、リュウは一步詰め込んで腹に蹴りを喰らわせた。

黒瀬はまるで自動車に撥ね飛ばされたかのような威力で吹き飛ばされ、ブロック塀を突き破って民家の庭に倒れた。

ただの人間じゃない。黒瀬は痛みと引き換えにやっと気付いた。立ち上がって口に溜まった血を吐き捨てる。

「お前も俺と同じ能力を？」

「ああ、そうだ。それにしてもオレの本気の一撃を喰らっても立ち上がれるなんてな。出来損ないの癖にやるじゃねえか」

「何でこんなことをする？ お前はアンブレラに造られたんだろ、何故奴らに従うんだ！？」

「別に従ってるわけじゃねえ。ここにいとたくさん殺せるからな。人間でも、B・O・W・でも」

同じ顔、同じ声、同じ体格、そして同じ能力でも、黒瀬とリュウの違いは明らかだった。リュウは戦いを楽しみ、殺しを楽しんでいる。

『何を言っても無駄だ、リュウはそうやって生きてきたのだからな』

造られた空に巨大なモニターが現れ、それにはあの老人が映っていた。

「お前！」

黒瀬を造り出した人物だ。最もそれが本当なのか黒瀬も思い出せないでいた。

『まさかまだ思い出せていないというのかね？ 貴様は本当に臆病者だな。自分のやったことに目を背けている』

「思い出すことなんてない！」

『現実を見る。君はただ思い出したくないだけだ。君の記憶は偽りで塗り固められている。そもそもその力がなによりの証拠だ』

「なに?！」

黒瀬は自分の拳を見た。

『君はRーウィルスについて何の疑問も持たなかった。本当は分かっていたからさ』

そうだ。黒瀬はこの男の言葉を肯定した。この力はウィルスで造られた偽物だ。そして昔の記憶を思い出せば思い出すほど、記憶がパラパラと崩れ落ちる。

「おい、ジジイ。別に話はそこまでいいだろ。どうせこいつはここで死ぬんだ。記憶を思い出そうが思い出さまいが関係ねえ。楽しむことた大事だろ!！」

リュウはサブマシンガンを黒瀬に撃つ。黒瀬は避けようとするも、身体の反応が鈍ってしまい、何発が被弾してしまう。

『Rーウィルスには特性がある。それは君も良く知っているはずだ』

黒瀬とリュウが交戦しながら男は話し出す。

『Rーウィルスは感情で能力が左右する。思い出してみる』

黒瀬はリュウの攻撃を避けながら、記憶を振り返る。コーカサス研究所でタイラントと戦った時、孤島でクラウザーと戦った時、シカゴでグレッグと戦った時、そしてアフリカでソフィアが死んだ時がそうだ。他にも色々と思いつく。

『怒りで能力が上がるのではない。自分の戦う意思だ。それが出来ないとアフリカで君の仲間が死んだ時のようにただ暴れまわる怪物になる』

つまり、現在能力が発揮できないのは、黒瀬の戦う意思が揺らいでいるからだ。そもそもアフリカから連続の戦いで身体は疲れきっており、そこにクローンだの、Rーウィルスだの、記憶だのと黒瀬の脳はぐちゃぐちゃになっていた。

「一体、どうしろってんだよ……！」

黒瀬はリュウに回し蹴りを仕掛けるが、見事に避けられてしまう。

「遅えー！」

リュウのカウンターが顎に決まり、黒瀬は吹き飛ばされて駐車場の車にぶつかる。

「出来損ないが。お前はオレには勝てないんだよ」

「俺は……出来損ないじゃない……」

「出来損ないだよ、お前は！ 今がそうだ！ ナヨナヨ悩んでてさあ。でもオレは違う。」

悩むなんてことはしない！ それよりも殺すのが楽しいからな！」

「俺は……悩んだからこそ、今の俺があるんだ……！」

「だからなんだよ！」

リュウはグレネードランチャーを撃つ。黒瀬は咄嗟で避けるが、弾が車に当たって爆発し、爆風で吹き飛ばされる。

「オレの方が強い！ 殺しを楽しんできたオレの方が強いんだよ！ 悩んで得することなんかねえよ！」

リュウはグレネードランチャーを撃ち続ける。黒瀬は避けても避けても爆風でよろめき、吹き飛ばされてしまう。

ランチャーの弾がなくなり、リュウは武器を対物ライフルに切り替えた。
「お前と比べられてるってだけで虫酸が走るぜ」

リュウは対物ライフルの引き金を引く。黒瀬に避ける力は残ってなく、身構えるが弾は飛んでこない。

リュウは引き金をもう一度引くが弾は出ない。黒瀬に対する怒りで弾切れなのを忘れてしまっていた。

チャンスだ。身体が動かないとかは関係ない。このチャンスを逃すわけにはいかな
い。

黒瀬は走り出した。一步足を着くたびに激痛が走り、全身が悲鳴をあげる。それでも黒瀬は走り止めない。身体の心配なら後で良い。痛みで動けないからといって、チャンス逃して死ぬのは御免だ。

「クソっ!」

リュウはライフルを投げ捨てて予備のハンドガンを抜こうとするが、黒瀬の方が一步速かった。リュウの顔面を殴り付けて、股間を蹴り上げる。そして痛みを悶絶するリュウの腰のナイフを抜き取って、左腕を切断させた。

「う、ぎやああ!?!」

切断面からは血が吹き出し、リュウは傷口を抑える。

黒瀬は今まで数々のB・O・Wやテロリストと幾度もなく戦って死線をくぐり抜けてきた。その度に何度も重傷を負い、死にかけてきた。それに比べてリュウの場合は自分よりも弱い者を殺すだけの遊びだった。怪我をすることなど少なかったのだろう。痛みに対しての耐性がない。

「俺はお前みたいに遊んだりはしない。今ここで殺す!」

黒瀬はナイフをリュウの頭に突き刺そうとしたが、ナイフの刃を歯で挟んで止められしてしまう。リュウはそのまま刃を砕く。

「なっ!?!」

黒瀬は一瞬驚いたが、すぐに思考を切り替える。まだ殺す手段はある。リュウの腰にぶら下げられている日本刀。それを使えば……。

しかし、それを行動に移す前にリュウは黒瀬に組み付き、右肩に噛み付く。咄嗟に剥がそうとリュウの腹に膝蹴りを喰らわせるが、それが仇となつて肩を食いちぎられてしまう。

痛い。黒瀬にとつてこの傷はその一言で済ませられる。

「痛いじゃねえか、クソ野郎！」

リュウは刀を抜いて、黒瀬に胸をななめに斬つた。そして左腕の前腕と右足の太ももが切断される。

痛い。それでもまだだ！

黒瀬は右腕でリュウの鼻つ柱を殴る。前に倒れそうになるが、リュウの胸ぐらを掴んで引き留め、頭突きを喰らわせた。

「クソ、テメェ！」

リュウはやり返すかのように、黒瀬に頭突きを喰らわせた。黒瀬は片足がないせいでバランスを失つてふらつく。

その隙をつくようにリュウは黒瀬の身体を次々と

斬っていく。奴の力ならば、胴体を真っ二つにすることなど簡単だが、痛め付けるか

のようにわざと手加減をしていた。

血だらけとなった黒瀬の胸を蹴る。力をなくした黒瀬は受け身を取ることなく、地面に転がった。

「痛いなあ、マジで痛いぜー！」

リュウは傷から血を吹き出しながらも笑っている。狂気に満ちは溢れた顔だ。

「こんな傷を負わせたのはお前が初めてだ」

リュウは切断された左腕を拾い、傷口同士を合わせる。みるみると傷が癒着する。そして肩をぐるんと回して手のひらを握り締めた。

「これがR—ウィルスの力だ。流石に切断面が綺麗じゃないとくつついてくれないけどな」

リュウは治った左腕でハンドガンを抜いて、数発黒瀬の胸に撃ち込んだ。

「オレは十年以上、殺しを楽しんできてる。腕を切断されたのは初めてだが、切断したのは初めてじゃない。自分の身体については研究してるつもりだぜ？」

黒瀬はリュウの行動を見て、ただのサイコパスだと思いついていた。しかし、それは違った。彼は本当にイカれた化物だ。

どうにかして身体を動かそうとするが、指一本も動かない。

クソ、何でだ。

身体が動かなくなるなど今までで何回もあった。黒瀬はその度に立ち上がった。しかし、今回はそう出来なかった。あの男の言葉に黒瀬は惑わされているからだ。

『残念だな貴様は。もつと戦えると思っていたが……どうやらここで終わりのようだ』

——俺は……ここで……死ぬのか？

死にたくない。まだ彩を助けていないのに……。黒瀬は彩の心配をするが、薄れていく意識に逆らうことは出来なかった。

81話 記憶

1993年

××××
研究所

『戦闘訓練を開始します』

機械音声が流れる。円形の真っ白なフロアの複数のドアが一斉に開き、ハンターが開放された。

『リヨウ、ハンターは全部で十体よ。全部倒せたら今日はもう休んでいいわ』

十歳ほどの黒髪の少年が付けているインカムに若い女性の声流れる。少年はフロアの壁上部にある指令室を見ると、強化ガラス越しに声の主の女性が手を振っていた。

少年がその優しい笑顔に気を取られていた内にハンターはジリジリと間を詰める。ハンターの一体が少年に飛び掛かって鋭い爪を振りだす。少年はハンターの殺気に気付いて、姿勢を低くしかわしたが、少年の頬をかすっていた。

「危なっ！」

避けるのが少しでも遅かったら、少年の首は飛んでいただろう。しかし、少年はそれに怯えることなく後ろへ下がりがり、両足にあるホルスターから二挺の拳銃を抜いた。

二体のハンターが両脇から襲い掛かる。少年は慌てることなく、その二体の頭に鉛玉を喰らわせた。

少年を恐れた残りのハンターは一斉に襲い掛かる。

ハンターの知能は決して高いわけではないが、人間の命令を聞いたり、連携攻撃も可能だ。しかし、兵器として優れているハンターは、少年に手も足も出なかった。

『お疲れ様』

全身がハンターの血塗れになった少年は、銃をホルスターに戻して、出口へと歩く。

彼の後方には一寸の狂いなく、頭を撃ち抜かれたハンターの死体が転がった。

出口のスイッチを押してドアが開くと、そこには先程まで指令室にいたはずの若い女性を立てていた。

「母さん！」

「今日も頑張ったわね」

少年は女性に抱きついた。女性も血を嫌がることなく、少年を抱き締める。

「いっぱい汚れちゃったわね。今日はお風呂に入って早く寝ましょう」

「うん！」

少年は元気に返事し、シャワールームへと走っていった。

「今日のはかすり傷だけで済んだんだって？」

女性の後方から若い男が現れる。女性の夫のようだった。

「ええ。あなたも見れば良かったのに」

「もうちよつと仕事を早く終わらせれば見れたかもな」

彼らがいる場所は、アンブレラ最大の研究所。その場所はトップシークレットでアンブレラの最高幹部しか知らない。この研究所で働く研究員は世界中から集められた最高の天才たちばかりだが、その彼らも目隠して連れてこられ、研究所は地上なのか地下なのか、はたまた北極なのか南極なのかわからないが、そんなことはすぐに気にしなくなった。

アンブレラ最大の研究所ということもあり、必要な機材は全て十年以上先をいくテクノロジーが使われたものだった。ここではなんでも出来る。ほしいものを言えば、一日もせずに届けられる。娯楽施設もあれば、世界の都市の一部を再現した街まである。しかし、何より研究者たちの目をひいたのは、クローンの存在だった。動物、人間、植物のDNAさえあれば、完璧なクローンが造れる。ここで働く研究員以外の従業員は全て人間のクローンだ。しかし、研究員は他の方法でもクローンを使っていた。

クローンを使った実験。人間の完璧なクローンであるため臨床試験さえも簡単に出来た。もし、異常が現れれば廃棄すればよい。彼らにとつてクローンなどただの道具だった。完璧なクローンといつてもただのクローン。造られたモノはモノとして扱われる。そしてそれに反対する研究員はいなかった。彼らは表の世界じゃ出来ないことをやった。そして様々な薬を作った。アンブレラが世界で一番の製薬会社と言われたのはこの研究所があるからだ。

そして、この研究所では最大のプロジェクトが始動していた。

十年以上前、新しいウイルスが発見された。そして発見した研究者はそれをラグナロクウイルスと名付けた。

使い方によれば、世界を滅ぼすこともできるからだ。

ラグナロクウイルス——R—ウイルスは研究者を驚かせた。四肢を欠損させたクローンに投与すれば、四肢が再生し、癌を煩わせたクローンに投与すれば、癌細胞が死滅する。このウイルスがあれば、世界から全ての病気や障害がなくなる。そう思われたが、そんなに上手くいくはずがなかった。

R—ウイルスを投与された人間は数時間の内に死んでしまったのだ。病気を治したかと思えば、人間の身体を蝕んでいく。すぐに改良が進められたが、失敗に次ぐ失敗。

研究は頓挫しようとしていたが、一人の研究者がそうさせなかった。そして彼が造ったのは遺伝子操作した自分の赤ん坊の頃のクローンだった。

その赤ん坊はウイルスに適合した。

それが黒瀬リヨウだった。

そしてリヨウはすすくと育った。リヨウを育てたのは彼のオリジナルである黒瀬和樹の娘、黒瀬祥子とその婚約者である俊哉だった。二歳になる頃から英才教育を始め、五歳になる頃には戦闘訓練を始めた。十歳になる頃には、この研究所にいる研究員にひけをとらないほどの頭脳と、世界で活躍出来るほどの身体能力を有していた。

リヨウは何も疑問に思わなかった。B・O・Wと戦わせられても、一日中分厚い本を読まされても。彼は育ての親である祥子と俊哉さえいれば充分だった。

「母さん、今日は何するの？」

いつも通り、朝の六時に起きたリヨウは祥子に聞いた。

「今日はね、お祖父ちゃんに会うの」

「え、お祖父ちゃんと……」

お祖父ちゃん——リヨウのオリジナルである和樹のことだ。しかし、リヨウはそれの

ことは知らない。

「どうしたの、お祖父ちゃん嫌い？」

「……うん、いつも怖い顔してるから。ボクもお爺ちゃんになったら、あんな感じになるのかな？」

「それはリヨウ次第よ。他人に優しくすれば、怖い顔にはならないわ」

「……そうだよね！」

二人は和樹の部屋へ歩く。

和樹はアンブレラの最高幹部の一人であり、この研究所の所長だった。部屋もそれなりに大きい。

「お父さん、着いたわ」

祥子はドアのインターホンを鳴らした。

『来たか、Rー1だけでいい』

Rー1——リヨウの実験体番号だ。

「わかったわ。リヨウ、お祖父ちゃんはリヨウと二人だけで話がしたいらしいの」

「えー、怖いよ」

「タイラントやハンターみたいに？」

「もつとだよ」

祥子はその言葉にくすりと笑った。

「一人で行けたら、今日はゲームを買ってあげるわ」

「え、本当!?!」

「本当よ」

リヨウは晴れ晴れとした顔で部屋の中へと入った。

大きな部屋の奥に和樹は立っていた。

「お祖父ちゃん……」

「来たか、R——」

リヨウは恐る恐る和樹へ近づく。和樹もリヨウを見つめるが全くの無表情だった。

「R——、お前は外の世界へ出たくないか?」

「外の世界へ!?!」

リヨウはもちろん外の世界を知っていた。

「今度の訓練で勝てたら両親と外で暮らすがいい」

「本気なの、お父さん」

祥子は和樹を問いたです。

「本気だ。R―1の教育もそろそろ終わりにする」

「今までこの研究所で暮らしてきたのよ？ そんな彼を外に出したら……」

「どうなるんだろうな」

「どうなるんだろうなって……」

祥子に怒りが込み上げてくる。

「祥子、勘違いするな。お前は親役だ。本物の親ではない。それにこれはただの実験の
はずだ。お前は実験体に本当の愛情でも持つのか？」

確かに、リヨウは和樹にとっても祥子にとっても実験体だった。しかし、祥子はリヨウに親として接する内に本物の息子として愛情を注いでいた。

「理由を聞かせてください」

「単純だ、ただの実験だよ。その代わり、R―2はここに残す。R―ウィルスを宿した人間にはこれから全く別の環境で暮らさせる」

R―2―リユウのことだった。彼にもリヨウと同じように英才教育や戦闘訓練をしているが、リヨウと違うのは親役がないことだった。

「それで……R―ウィルスの変化をみたいわけね？」

「そうだ。外の世界でもお前と俊哉には親役を続けさせる。お腹の子も外で暮らす方がいいだろう」

和樹は証拠の腹に宿る子の心配をしていた。彼にとって本物の孫に当たる存在だ。実験体とは違う。

「そうかもね。このお腹の子にとっても」

「仕事については心配するな。アンブレラ・ジャパンで働けるように手配しておこう。ここほどではないが、機材は一通り揃っている」

「わかったわ。俊哉には私から話しておく」

「母さん、今度の敵を倒せば外で暮らせるんだよね？」

「ええ、そうよ」

「どこで暮らすの？」

「日本の床主市よ。知ってるかしら」

「確かに海上に国際空港があるとところだよね」

リヨウたちが引越す場所は既に決まっている。リヨウが新型B・O・Wを倒せれば床主市のマンションに住むことになる。——倒せなければ、という考えはなかった。リヨウは十年以上も訓練を積んできた。新型だろうと、彼ならば倒してくれるはず

だ。

そして、戦いの日はすぐにやってきた。

「今日でこの場所ともお別れかあ……」

真つ白な部屋。この場所で何十回、何百回もB・O・W、やクローン兵士と戦って、殺してきた。今日、勝てばこれで最後になる。リヨウは負けるつもりなど一切なかった。今までと同じで本気で戦う。

司令室には、和樹やリヨウの両親、アンブレラの幹部が集まっていた。新型B・O・Wと、Rーウィルスを宿した少年、どちらが勝つのか。

(リヨウ……勝って！)

祥子は心から願う。

扉が開く。そこから現れたのは、身長が三メートル近くある大男。新型B・O・W。とはタイラントとのことだった。

司令室がざわめく。何もかもがリヨウを上回っている。普通なら勝てるはずがない。

「……結構大きいな」

当事者であるリヨウも驚いていた。身長は自分の倍近く、ふとましいその腕はコンク

リートをも破壊できるだろう。

それでもリヨウは負けるつもりはなかった。

武器はいつものハンドガン二挺とナイフ一本。これほど巨大な敵だと心許ない気もするが、やるしか選択肢はない。

タイラントはリヨウに向かって走る。見た目とは違い、速い。

リヨウは銃を抜いて、タイラントに撃つ。しかし、タイラントが着ているコートによつて弾かれてしまう。タイラントはそのままリヨウに突っ込む。

「うわっ！」

リヨウは横に飛びながら、タイラントを撃つが全くといっていいほど効果がない。

タイラントは急停止し、腕を横に振った。リヨウは即座にガードするが、タイラントのパワーは凄まじく腕の骨が軋み、吹き飛んでしまう。

「Rーは圧されていますね」

タイラントの計画に関わった研究員が和樹に言った。

「どうします？ 強力な武器を与えてやってもいいですが……」

研究員はニタニタと笑う。彼も自分が造ったモノに自信を持っているのだろう。

「余計なこととはしなくていい。Rーのハンドは拳銃とナイフだけで充分だ」

和樹はこの研究員と同じく、自分の造ったモノ——リヨウに自信を持っていた。ここ

で死んでしまえばそれまで。代わりはいる。そう考えてはいるが、今までの訓練を乗り越えてきたリヨウはやられるはずがない。

(どうすればいい!?)

リヨウは逃げ回りながら、タイラントに勝てる方法を考える。

敵は防弾コートを着ていて、ハンドガンじゃ通用しない。唯一守られていないのは、頭だ。そこを狙えば勝てる可能性はあるが、生物の弱点である頭を守らないのは元々皮膚が硬いのもかもしれない。

ともかくやってみなければわからない。

リヨウは振り返って、追いかけてくるタイラントの頭に銃弾を浴びせる。タイラントは少し怯んだだけだった。やはり効果は薄い。だが、怯んだということはダメージはあ
るはずだ。

リヨウはハンドガンの残弾を確認する。予備のマガジンの弾も全部頭に命中させれば倒せるかもしれない。

簡単に言うが、リヨウもタイラントも動き、それを頭に命中させるにはかなりの集中
力がある。

(それでもやるんだ！)

司令室では皆が期待の目で見ている。その中には祥子と俊哉もいる。リヨウは二人の期待を裏切るわけにはいかなかった。

二発頭に撃ち、タイラントの股間を潜り抜けて後頭部を撃つ。反応を見る限りやはり効果は薄い。脳へのダメージはいつているはずだ。

立て続けに撃つ。しかし、ここで最大の難所が来てしまう。

引き金を引いても弾が出てこない。二挺合わせて二十発の弾が入っていたはずだが、最初で十発以上使っていたようだった。今までのB・O・Wならば弾切れになっても体術で時間を稼いでリロード出来たが、タイラント相手には簡単ではない。そもそも体術が果たして効くのかどうか。投げ技や合気道もこの巨体には通用しないだろう。

ともかくやって見なければわからない。リヨウは片方のハンドガンホルスターに戻してもう片方のハンドガンのリリースボタンを押す。予備のマガジンを叩き込んで銃をスライドさせた。一挺はこれで成功した。二挺目にも取り掛かりたいが、慢心はいけない。この一挺で戦えばいい。

リヨウの回避能力や集中力相まって、十分後タイラントはやつと膝をついた。

「やったのか?」

リヨウの体力は限界を迎えていた。いくらRーウィルスで身体能力が強化されていようが、十代で飛び抜けているというだけでオリンピックの選手には敵わない。まだ立ち上がるというのならば、相応の怪我が必要になってくるだろう。

「ほう、Rーも中々やりますね」

研究員はリヨウとそれを造った和樹を誉めた。

「そちらの新型のタイラントもな」

もちろんこんな簡単に決着がつく相手ではない。勝負はここからだった。

タイラントは膝をついたまま、動かない。しかし倒したかどうか、不用意に近づくには危険だ。リヨウはハンドガンをリロードした。

タイラントは立ち上がる。コートが崩れ落ち、屈強な筋肉が更に膨れ上がって、爪が鋭く伸びていく。

「これは……!?!」

リヨウは後ろに下がってタイラントを撃つ。しかし、屈強な筋肉で弾は防がれる。

「そうか、あのコートはリミッターみたいなものだったのか!」

命の危機に瀕すれば、コートが外れてスーパー化する。

タイラントは瞬時に間合いを詰めて、その凶悪な爪でリヨウの腕を切り裂いた。手から落ちた銃が床を転がっていく。

(やばい！)

腕の痛みなどどうにでもなるが、スーパータイラントになったことによつてパワーもスピードも格段に上がっていた。

「これは勝負ありですか。R―1を失う前に中止した方がよろしいのでは？」

研究員は勝ちを確信していた。確かに誰の目から見てもここからリヨウが勝つのは難しいだろう。

「実験は続行だ。ここで死ぬ程度のものならここで処分しておく」

和樹は冷酷な判断を下す。彼にとつてやはりリヨウは実験体に過ぎない。

「お父さん、止めさせてください！」

祥子が和樹に掴みかかる。

「このままじゃリヨウが死んでしまうわ！」

そう言っている間にもリヨウは切り裂かれ、蹴られ、吹き飛ばされていた。

「祥子、公私混同するな。前にも言ったが、奴はただの実験体だ。代わりはいくらでもいる」

彼に何を言っても無駄だ。聞く耳を持ちやしない。だが、逆らって実験を止めさせる権限は祥子にはない。祥子はリヨウの無事を祈るしかない。

「……………痛い」

リヨウは倒れたまま呟いた。

全身はズタボロで動かせそうにない。傷の再生も滞っている。ここままでは出欠多量で死んでしまうだろう。

——なんで僕、こんなことやっているのだろう？

リヨウはふとそう思った。

毎日毎日、勉強して、武術の訓練して、B・O・Wと戦わされる。その度に傷付いて。

それが自分にとって当たり前前の世界。化物と戦うなんて本当は嫌で、本の世界のようにちゃんと学校に行つて、友達も作りたかった。でも両親のために頑張ってきた。だから、外の世界で暮らせるて聞いたときは嬉しかった。

「いよいよ、決着がつく。指令室のほとんどの者はタイラント側の勝ちだと確信していた。」

タイラントが腕を振り下ろす。リヨウの身体がバラバラに——ならなかった。代わりに落ちたのはタイラントの腕だった。

リヨウはいつの間にか立ち上がっており、ナイフを構えていた。

「な、何故立てる!？」

「研究員は驚く。」

「先ほどまでは立ち上がる力も残っていなかったはずだ。まさか、弱ったフリをしていたというのか!？」

「そうではない」

和樹は断言した。

「あれがRーウィルスの真骨頂だ。ウィルスを宿した人間の感情で能力が上下する」

「なに!？」

「Rーは死ぬよりも生きたいという感情が高かった。生きることによりRーウィルスが手を貸しただけだ」

「バカな、そんなウィルス聞いたことがない!」

「……そうだろうな。Rーウィルスは一際特別なウィルスなのだよ。今までのウィル

ス、これから造られるウイルス、全ての上位互換だ。……まだ完成はしていないがね」
そうこう話している内に、決着が着いていた。

バラバラに引き裂かれたタイラントの上に立っているのはリヨウだった。しかし、倒したことに気付かずに、タイラントの肉片をナイフで刺し続けている。

「実験は終了だ」

和樹が宣言した。指令室の者は誰も文句など言えない。誰がどう見てもリヨウの勝ちだった。

「お父さん、リヨウに会いに行くわ」

祥子と俊哉が和樹に駆け寄る。

「好きにしろ」

その言葉を聞いた二人は笑顔で駆けていった。

「これで計画の第一段階は終了だな」

今はまだタイラントに手こずるほどが、将来は軽々と倒せるほどの力を得る。その為にも……

パン、パン！ と既に戦いを終えた実験ルームから二発の銃声が轟いた。

リヨウは無我夢中でタイラントの肉片を刺し続けている。最早タイラントの影も形も無くなっている。それでもリヨウは刺し続けていた。

実験エリアのドアが開き、若い男女二人が入ってきた。

祥子に俊哉だ。二人とも涙ぐんでおり、リヨウの生還を喜んでいる。しかし、リヨウにはそれが醜い化物にしか見えなかった。

「リヨウ、無事で良かったわ!」

(母さんの声?)

リヨウにはハッキリと祥子の声が聞こえた。目を凝らして二人を見るが、リヨウにはどうしてこゝ二人が化物に見える。

「本当に無事でよかった!」

(無事?)

リヨウは二人の言葉に疑問を持った。

リヨウの身体は全身血まみれで骨も何カ所も骨折している。何故この状態で無事と言えるのだろうか。

「このくらいの傷なら大丈夫よ。リヨウの再生力なら治せるわ」

「……………このくらいの傷?」

この姿を見て、このくらいの傷? リヨウに激しい怒りが沸いてくる。

「泣き叫びたいほど痛いのに、このくらいの傷だつて？」

リヨウの言葉に祥子と俊哉は困惑する。

「どうしたんだ、リヨウ。前に全身を切り刻む実験をしたじゃないか。トラックに轢かれる耐久実験もした。あの傷でもリヨウは綺麗さっぱり治つたんだぞ」

俊哉は笑顔でそう言った。

「何で僕つてこんな目にあつてるんだ？」

今まで両親のために頑張つてきた。何故、何のためにこんなことをされているんだ？
リヨウは肝心なことを知らなかった。いや、聞いても教えてくれないだろう。

「何で父さんも母さんも僕がこんなに傷付いているのに止めてくれないの？」

「それは……実験だからだよ。リヨウだつて今まで楽しんでいたらどう？」

実験、それつて何の？ リヨウはそう聞きたかったが、もう全部が嫌になつてきた。

目の前の二人はさらに醜くなつていく。

誰のせいでこんな目にあう？

こいつらのせいだ。

リヨウは銃を構えた。そして二人の頭を撃ち抜いた。

「何が起こった!？」

「わかりません、Rー1がいきなり発砲を！」

和樹は窓から実験ルームを見る。祥子と俊哉の頭は撃ち抜かれており、どうみても即死だった。

「Rーウイルスの暴走なのか!？」

リョウの何かの感情が抑えきれないほど膨れ上がり爆発した。そうでなければ親役である二人に手を出すはずがない。

「実験ルームのドアを全てロック、催眠ガスを撒け！」

「“アレ”に効くんですか？」

「致死量を撒け。大丈夫だ、死にはせん」

まさか、このような形で終わるとは。

祥子……………。

和樹は膝から崩れ落ちた。

82話 “今” のために

ああ、そうだったのか。

全てを思い出した黒瀬の目には涙が流れていた。

今まで自分が思っていた両親はただの虚像。記憶を失ったりリョウが作り出した願望の両親。しかし、現実は違った。あの二人がリョウを愛していたのは本当だ。だがそれは、酷く汚れた愛だった。

「あはは……」

笑いが込み上げる。

今思えば、両親は狂っていた。それに自分も。

黒瀬はただ泣いて笑うしかなかった。この感情をどう処理すればいいのか分からなかった。

「おいおい、何で笑ってんだ？ マゾか、お前」

リョウが黒瀬の首筋に刀の刃を当てる。

「………思い出したんだよ、自分の両親の醜さを、そして俺の醜さも……」

思い出したくない記憶。出来ることなら一生、死ぬまで思い出さなくてよかった。心

の中で黒瀬は分かっていた。だから、今まで極力思い出そうとしなかった。

「こんなの思い出してどうしろってんだよ……」

両親がアンブレラで働いて、自分はクローン。しかも、身体にウィルスを宿している。思い出しても心がより一層沈むだけだった。

「へへ、思い出せてよかったな。両親を自分で殺して、勝手に記憶を封印して、両親は事故死したと思ひ込んだ。オレが言うのも何だが、お前ってクズだよな」

クズ、そう言われても仕方ない。自分が過去に背を向けたのは本当だ。

でも、あそこで殺していなかったらどうなっていたのだろうか。今の自分は形成されていなかったのだろうか。

『それはないな』

黒瀬の心の中を見透かしたかのように和樹が言う。

『どのみち祥子は死んでいた。床主市に移り住んだ後、どんな手段を使っても殺すつもりだった』

和樹の言葉は黒瀬に衝撃を与えた。

「なに……？」

『R—ウィルスを成長させるためだ。そのためにも貴様の心を壊す必要があったからな』

「何で、そんなことのために……お前の娘だろ！」

『R—ウイルスの完成には犠牲が必要だった。娘が犠牲になってくれたおかげで貴様はここまで成長した。貴様もわかるはずだ、R—ウイルスの価値が。そのウイルスに何度命を救われた、何度命を救った？ 貴様ならわかるはずだ』

確かに、このウイルスの力は凄まじい。黒瀬自身が今までこの力を使ってきたからこそ分かる。

『今日まで実験に協力してくれて感謝しよう。R—1、貴様も私たちと同じ道を歩まな
いか？ 記憶を取り戻した貴様にはその価値がある。共にこの世界の神になろう』

思ってもなかった提案だった。そして黒瀬は呆れた。ウイルスを悪用する者は結局そこに行き着いてしまう。

「……断る」

『……そうか。R—2、やれ』

「あいよ」

リュウは黒瀬の首に刀を降り下ろそうとする。しかし、銃声が轟き、リュウは中断して避ける。

撃つたのは田島だった。

「あの野郎、生きてやがったか！」

グレネードランチャーの炸裂弾が廊下の中ではなく、外壁に当たっていたことで軽傷ですんでいたのだ。

「リヨウ、早く回復をするんだ、時間を稼ぐ！」

「何ならアタシたちが倒してやってもいいのよ？」

気絶していたリカも援護に加わる。

「雑魚は引つ込んでろ！」

リユウはハンドガンで反撃しながらリカたちへ近づいていく。

「リカさん、田島さん……！」

どうやっても二人が勝てる相手ではない。そう断言出来るほどリユウは強い。

「クソ、何やってんだ俺は……」

このままでは二人が死んでしまう。そう思っても黒瀬の身体は動かない。

「……リヨウさん、リカさんと田島さんを……助けて……ください」

ボロボロになって立てない佑都は、いつの間にか駆け付けていた真美に支えられて黒瀬に懇願した。

「おれじゃ……駄目なんです。おれはどうやっても……あいつに勝てない。勝てるのは……リヨウさんだけです！」

佑都は必死に頼み込む。

「リョウさん、わたしからもお願いします」

真美も頼み込んだ。

「そうだ、そうだよな……」

黒瀬は動かない身体を無理矢理起こす。

「俺にはまだやるべきことがあるんだ……」

黒瀬はここに来た目的を思い出した。ここに捕らえられている彩を救うためだ。どこにいいのかは分からないが、生きていることは確かだ。

そのためにもここで死ぬわけにはいかない。そして、仲間を死なせるわけにもいかない。

「過去がどうこうで今を失うわけにはいかないんだ……!」

黒瀬の並々ならぬ根性で傷がみるみる再生していく。

(これがR—ウィルスの力……!)

今までウィルスを悪用してきた者は大勢いた。その度に仲間と一緒に倒してきた。

「この力は皆の為に使う。お前らみたいに悪用なんかしない」

これまでそうしてきたようにこれからも。ウィルスに囚われず、逆にウィルスを利用する。

覚悟は決まった。黒瀬は再生した腕と脚を一步ずつ動かしていく。

リュウは強かった。

BSAAのエージェント二人が全力で戦っても勝てないほど。

田島とリカはいつの間にか追い詰められていた。リュウは刀を振り回しながら、二人へと近付く。

「つたく、スナイパーの癖に全弾外しやがって」

「アンタもでしょ」

田島はリロードして銃を構える。だが、超スピードで接近してきたリュウに対応できず胸を蹴られる。

吹き飛んだ田島は壁にぶつかって倒れる。

「アンター！」

リカはリュウの頭を狙って撃つが、しゃがんで避けられてしまう。そして首を掴まれて壁へ放り投げられた。

「さて、どつちを先に殺すか……悩むな」

リュウは笑みを浮かべた。

「女を先に殺すか」

リュウは二人の関係を看破していた。恋人、もしくはそれに近い関係。それならば女を先に殺して男の反応を見たい。

何度もクローンを殺してきたリュウの楽しみがこれだった。恋人が目の前で殺されたのならどういふ反応をするか。リュウは楽しみで仕方無い。

「よく見とけよ」

リュウは田島を見て言い、刀を振り上げた。当然田島も黙っているわけにはいかないが、身体が動かない。今までの戦闘が今響いていた。

(このままじゃ……)

銃さえ握ればいい。それなのに身体は言うことを聞かない。

「止めろ、止めてくれ！」

田島は叫ぶが、それでリュウが止めるはずがない。逆に笑みが増していた。「さあ行くぞ行くぞ死ぬぞ死ぬぞ！」

リュウはリカの首目掛けて刀を降り下ろす。

絶体絶命かと思われたその時、リュウの刀は間一髪防がれた。

「お前……！」

防いだのは黒瀬だった。

「まさかほんの数分で手足を再生させたってのか?」

リュウは信じられないと驚愕していた。

「ああ、そうだが」

「どうやらリュウは切断された手足を接合するのは容易いが、再生をするのには時間を要するらしい。」

「一体どんな手を使いやがった……!」

「何も。ただ自分の目的を思い出したただけだ」

「目的……?」

「ああ。彩を助ける。その為に誰も失わない。皆無事に生還する」

それを聞いたリュウは嘲笑した。

「残念だがそれは叶わない」

「何?」

「ここで死ぬからな!」

リュウは刀を振る。黒瀬は後ろへ回避した。

黒瀬の武器は、佑都から返してもらった刀と木刀。十分だ。十分すぎる。

リュウは黒瀬に襲い掛かる。

「出来損ないが！ オレに勝てるわけねえだろ！」

「……………」

黒瀬はリュウの攻撃をかわし続ける。黒瀬にはリュウの攻撃がスローモーションに見えた。

「遅いよ、お前」

黒瀬は木刀を抜いて半回転して背後に回り込み、背中に重い一撃を喰らわせた。

最初から刀を使っていれば勝負はここで終わっていた。だが、黒瀬はそうはしなかった。

「てめえ……………」

それに気付いたリュウに怒りが湧く。先程よりも素早い攻撃をするが、かわされて胴を斬られる。勿論木刀なので切り傷はないが、肋骨の数本は叩き折る。

「舐めてんのか！」

怒りでまともな思考が出来なくなったりリュウは突進したが、黒瀬は翔んで回避し、彼の脳天を叩く。

「ガあつ——!?!」

リュウは頭から血を吹き出し、膝を着いた。

「人を虐めるのつてつまんないな」

黒瀬は小さいがリュウにはつきり聞こえるように呟いた。

「……何だとお!?!」

「こんなことをして何が楽しいんだよ」

リュウに怒りが立ち込める。

（オレが虐められている?）

つまりリュウは黒瀬よりも弱い。だが、それはリュウのプライドが許さない。

「オレは強い! 出来損ないのお前よりも!」

リュウは立ち上がって襲い掛かるが、肩、胴、脚そして頭への連撃で叩き伏せられる。

リュウは吹き飛んで倒れこんだ。

「クソ、何でだよ。オレはあいつよりも——」

『弱い』

モニターで見ていた和樹はそう断言した。

『R—2、貴様はR—1よりも弱い』

「何……だと……?」

『Rーウイルスは確かに戦えば戦うほど進化する。だが、それだけでは完璧とは言えない』

「ジジイ、どういうことだ……」

『言っただろう、Rーウイルスは感情で能力が左右される。貴様は幼い頃から一人で戦ってきた。回りには誰もおらず、ただひたすら殺してきた。それに比べ、RーIは両親という存在がいた。その後も仲間と共に私が与えてきた試練を乗り越えてきた』

「試練だと?」

黒瀬が尋ねる。

『そうだ、試練だ。何の為に外で暮らさせたと思っている』

Rーウイルスを成長させる為。

『ラクーンシティ、どうにかしてそこへ行かせるつもりだった。両親の秘密がある、とでも言えば貴様は食いついただろう。まあ、何もなくても貴様は勝手にラクーンシティへ行っただがな』

ラクーンシティ、全ての始まりの場所。あの事件がなければ、今の世の中にはなっていない。

『これは本当に都合だった。貴様は勝手に巻き込まれていくからな。ロックフォートや南極基地にもな。カントウ事件やスターライト号事件は手を打つ必要があった。』

少々強引な手を使わせてもらったがな』

「あれはお前が?」

『そうだ、良い経験になっただろう? アルプス研究所にウィルスを撒かせたのも、ウィルフアーマの研究所にB・O・W.を解き放ったのも、グレッグに事件を起こさせたのも私の指示だ』

「そんな……」

『グレッグは良い人間だったよ。自分が死ぬと分かっているにもかかわらず。流石は戦闘狂というべきか』

黒瀬は落胆した。自分を成長させるために関係ない人が死んでいる。

「なんで、そこまで……!」

『何度も言っているだろう。ラグナロクウィルスにはそこまでする価値があるのだよ。貴様もそれは十分分かっていているだろう』

「ジジイ……! こいつよりも強いって言ったのはお前だろうが! 嘘をつきやがったのか!」

『ああ、そうだ。貴様がR—2に勝てるはずがないだろう。貴様はR—1のお膳立てにすぎない。だが礼は言っておく。ラグナロクウィルスの力を再確認することが出来た』
非情だ。和樹は黒瀬もリユウもただのモルモットとしか見ていない。

『Rー、この先で待っているぞ。貴様の愛しい女と一緒にな』
そう言つて空中の映像は途切れた。

「クソ、何でだ……オレは誰よりも強いはずだ……!」

リュウは傷を再生しながら立ち上がる。

「もう止めよう。俺とお前がこれ以上戦う理由はない」

黒瀬はリュウを殺したくなかつた。彼の性格がどうであれ、アンブレラによつて造られた被害者だ。

「戦う理由がないだと……? ふざけるな。オレはお前を殺せば充分なんだよ。そう
だ、ジジイにお前の首を持っていけば、オレの方が強いと認めてくれる!」

リュウは刀を構えた。

「お前は利用されてたんだぞ! それなのになんで……!」

「利用がどうか関係ねえ。お前がオレより強いってのが気に食わないんだよ!」

リュウの一閃。黒瀬は後ろへ跳んで回避するが、リュウはすぐに距離を詰める。

「死ねよ、出来損ないがあああああああ!」

リュウは黒瀬の心臓を貫こうと刀を突き立てるように走る。

「こうなるしかないのかよ!」

殺したくない。だが、きつとこいつは殺さない限り、絶対に諦めない。だから殺すし

かない。

黒瀬はリュウの攻撃をすらりと避けて抜刀。彼の首をはね飛ばした。

ボトリと地面に首が落ち、切り口からは鮮血が溢れ出す。

呆気ない。メンタルがやられ、焦りで判断能力が鈍っていたのだろう。

「こんな、呆気なくていいのかよ……！」

リュウは敵。そう理解していても黒瀬と同じ境遇の持ち主だ。出来ることなら、その力をアンブレラにぶつけてほしかった。

だが、リュウの死を悲しんでいる暇などない。黒瀬には救うべき人物がいる。「待つてろ。もう少しの辛抱だ、彩！」

83話 どうして

「皆、一応無事だな」

黒瀬たちはボロボロだった。無事とは言っても、動ける程度の無事だ。全員疲れきっている。

「ユウトの傷も大体治ってるな」

黒瀬はユウトの瞳を見た。ほんの少しだが、紅くなっている。黒瀬のクローンであるユウトにもRーウィルスの影響が出ていた。

「リヨウさん、おれはどうなっているんですか?」

「ウィルスのせいで……いや、おかげか。再生能力が少しだけ向上している」

「リヨウさんと同じように……ですか?」

「同じようにはならないだろうな。俺のオリジナルが言うには、俺のようになるにはかなりの経験が必要らしい」

「それにしてもあのじいさんがリヨウのオリジナルなんてな」

田島は自分の傷を応急処置しながら言った。

「俺も初めて知りました。でもきつと嘘じゃない。俺はクローンで、アンブレラに造ら

れた化物です」

「アンブレラに造られたとか関係ないわ」

リカが黒瀬の肩を叩く。

「あなたは世界のために戦ってる。アンブレラとは違う」

「そうですよ、リヨウさんはわたしやユウトを助けてくれました。あんな奴らとは違います」

「リカさん、ママ、皆、ありがとうございます」

黒瀬はそれが嘘でも嬉しかった。きつとこれがリユウが手に入れられなかったモノなんだろう。

「さて、最後の仕事をしに行くわよ。囚われのお姫様を救出しなくちゃー！」
「そうですね」

彩の救出。それがここへ来た目的だ。随分と脱線してしまった。

黒瀬たちは立ち上がる。

この先、更なる戦いが待っているはずだ。黒瀬やリカたちを倒した男もこの先にいるはず。気を引き締めなければならぬ。

「さあ、行くか」

黒瀬たちは街を進む。戦闘の影響であちこちで火事が起きていたが、無視して進む。

全員疲労が溜まっていた。黒瀬も再生能力で傷がないとはいえ、精神的な疲れは治らない。リカと田島は後少し持つとしても、子供二人が持たないだろう。

(どうする、先に脱出させるべきか……?)

そもそもここから脱出出来るのか。最初の潜水艦ドッグに行けばいいのだが、そこまでの道のりも長い。黒瀬たちは前へ進むしかなかった。

次のエリアは、ヘリコプターの格納庫だった。かなり広いエリアで、一定間隔でアンブレラのロゴが付いたヘリが並べられている。

黒瀬は上を見る。鉄の天井だが、ヘリコプターが飛び立つ時は天井が開き、地上へと繋がっているのだろう。

ここで脱出手段を見つけたのは幸いだった。ユウトやマミの体力も限界に近い。リカが田島に頼んで地上まで送ってもらうか、このエリアで待たせておくか。

黒瀬はどちらか迷うが、このエリアもいつB・O・W. が現れるか分からない。先に脱出させた方が賢明だ。

「あ、あそこに誰か倒れてる?」

ユウトが指を差して言った。黒瀬たちはその方向を見ると、確かに誰かが倒れてい

た。

長い黒髪の女性。黒瀬やリカたちは見覚えがあつた。

「彩?！」

黒瀬は気付くや否や、倒れている女性に駆け寄る。リカと田島もそれに続いた。

黒瀬は女性を抱き上げる。クローンじゃない。正真正銘の香月彩だ。身体には傷があるようには見えない。黒瀬は思わず涙ぐんでしまう。

「良かったわね、リョウ」

「彩ちゃんめ、心配かけやがって」

リカも田島も喜んでいる様子だった。彼らにとつても彩は十年以上の付き合いだ。

仲間の無事を喜ばないわけがない。

「彩、大丈夫か?」

黒瀬は眠っている彩を起こそうと身体を揺する。

彩は目を開け起き上がると、次の瞬間、どこから出したのか彩は拳銃を構えていた。

「……………はっ」

黒瀬が彩の行動を理解する前に、その拳銃から二発の弾丸が放たれた。その弾丸は黒瀬の後ろにいるリカと田島の額を貫いた。

二人は脱力し、床へと倒れた。額から流れる血が床へ広がっていく。

死んだ。黒瀬の腕の中で行われた彩の一瞬の行為で、大切な仲間が死んだ。十年以上共に世界のために戦ってきた大切な仲間がこんなにあっさりとは。

黒瀬は頭が真っ白になった。何も考えられない。彩の突然の行動と仲間の死。理解するのに時間がかかった。

理解する前に彩が動いた。黒瀬の腕から離れて立ち上がり、その拳銃をマミへと向けた。

「さよなら、憐れなお人形さん」

彩は不敵な笑みで眩き、引き金を引いた。

黒瀬は理解するよりも先に身体が動く。マミの前に飛び込んで、マミに当たるはずだった弾丸は黒瀬の横腹を抉った。

「あら、流石に行動が早いわね」

彩は特に驚くことなく、ユウトに銃を向けた。

黒瀬はすぐに立ち上がり、再び飛び込んでユウトを押し倒す。彩の撃った弾は黒瀬の太股を貫く。

「凄いわ、リョウ。反応が想像以上に早い。でももう少し早かったら、あの二人も救えていたのに」

彩はリカと田島の遺体をごみを見るような目で見ていた。

「彩……どうして……う？」

黒瀬は悲痛な想いで彩に聞いた。

彩は、クローンである様子も、操られている様子も見受けられない。

「どうして……。私がアンブレラだから？」

彩の惚けた回答に黒瀬は固まってしまう。

アンブレラ？ 何故？ どうして？

このほんの少しの時間で黒瀬の脳はパンクしかかっていた。

「もっと知りたいなら、この先で待っているわ。……皆でね」

彩は拳銃を納め、奥の扉へと歩いていく。

「彩、待ってくれ！」

黒瀬は彩を追い掛けようと立ち上がるが、太股を撃たれたせいで走れず、倒れてしま
う。

「リョウさん！」

やっと状況を理解したユウトとママが黒瀬に駆け寄る。

「クソ、何でだよ、彩！」

黒瀬は行きどころのない怒りと喪失感を床へぶつけるように殴る。

冷静になって、リカと田島を見た。

二人は死んでいる。彩によって殺されたのだ。

「リヨウさん……」

ユウトとマミは、黒瀬に何て言えば良いのか分からない。二人にとつてもリカと田島の死は衝撃だった。理解しているのは、マミのオリジナルで、黒瀬の仲間の彩が突然二人を殺したこと。理由はこの場の人間には分からない。だが、黒瀬が庇わなければ、この場所の死体ももう二つ増えていただろう。

「すまない、二人とも」

黒瀬は傷が塞がったことを確認して立ち上がり、リカと田島の前へ立って膝を付いた。

リカの頬を触る。まだ温かい。だが、もう決して目が覚めることはない。自然と黒瀬の瞳から涙が溢れてきた。二人の積もり積もった記憶を思い返す。

また大切な仲間が死んだ。BSAAの職業上、仲間の死は付き物だ。しかし、今まで共に戦ってきた仲間が死ぬのはいつも辛い。しかも、二人を殺したのは仲間であるはずの彩。理由は分からない。

だから、聞きに行くしかない。

黒瀬はリカと田島の臉を閉じさせ、近くのヘリのドアを開けた。そして二人の遺体をヘリへと運んだ。

「ユウト、マミ、お前らとはここでお別れだ」

「え、何で！」

「この先、何が待ち構えているか分からない。それに二人とももう体力の限界だ」

「それはリョウさんも同じじゃないですか。おれも力になります！」

「駄目だ！」

黒瀬は強く言った。

「これ以上……誰にも死んでほしくないんだ……」

黒瀬の頬に涙が流れる。それを見た二人は従うしかなかった。

それについていっても足手まといになるだけだろう。

「レッドクイーン、見てるんだろ！」

黒瀬の呼び掛け反応するかのように壁のモニターが付いて、赤い少女のホログラムが

映し出される。

「ユウトとマミを地上へ連れていってくれ」

『あたしがあなたの言うことを聞くとでも？』

レッドクイーンの言う通り、本来なら聞くはずがない。黒瀬とレッドクイーンは敵対

関係にある。

「……頼む」

レッドクイーンは、少し考える。

『いいわ。特別にあなたの言うことを聞きましょう。彼ら二人はこの先関係ない。あなたさえ進めばそれでいいもの』

「分かつてる。俺は逃げも隠れもしない」

黒瀬がそう返答すると、ヘリのエンジンが付いてプロペラが回転し始める。レッドクイーンがヘリを遠隔操作している。

「さあ、二人とも乗るんだ」

黒瀬はユウトとマミの背中を押した。

「リヨウさん、生きて……帰ってきますよね……?」

ユウトは黒瀬を心配していた。彼から見ると黒瀬は、既に疲労しているように見える。

「……………分らない」

黒瀬は静かに答えた。

「俺が戻ってこなくても、外には味方がいる。そいつらに頼るんだ」

「……………はい」

ユウトは正直、反対されてでも黒瀬に着いて行きたかった。だが、ユウトにはマミがいる。彼女を一人にするわけにはいかない。それに行っても足手まといになるだけか

もしれない。それでも今の黒瀬を独りにしたくない。

ただユウトは唇を噛み締めるしかなかった。

天井が開き、曇りの空が見えてくる。レッドクイーンが操作しているヘリもそろそろ飛び立ちそうだった。

「さあ、乗るんだ」

二人はヘリに乗る。そして離陸を始めた。

「リヨウさん！ 必ず帰ってきてください！」

「わたしたち、待ってますから！」

二人は黒瀬に励ましの言葉を送ったが、見送りをする黒瀬の顔は暗いままだった。

「じゃあな、ユウト、ママ……」

黒瀬は小さい呟いて、二人に別れを告げた。

二人を見送った黒瀬は扉の奥へと目をやった。

『あなたはこれから死ぬわ』

レッドクイーンは冷たくはっきりと告げた。

「死ぬつもりはない。俺は出来ることを全力でやる。彩も出来ることなら取り戻す」

『……健闘を祈るわ』

84話 さよなら

重い扉を開けると、次のエリアが広がっていた。

とはいっても単純な構造のエリア、潜水艦ドッグだった。あるのは全長二百メートルある巨大潜水艦一隻だけだった。

エリアの奥には、「敵」が待ち構えていた。

「よくここまで来たな」

黒瀬のオリジナルである和樹は笑顔だった。

「貴様のおかげでラグナロク・ウィルスを量産、強化に成功した。彼らがその投与者だ」
和樹は両隣に並んでいる者たちに手をやった。

スナイパーライフルを手にしている無精髭を生やした四十代の日系人の男。

藤美学園で黒瀬をいとも簡単に倒した金髪の若い男。

両腰のホルスターにサブマシンガンを収めている茶髪の十代後半の男。その胸にはアンブレラが開発した洗脳装置「スカラベ」が取り付けられている。

そしてとりわけ黒瀬の目を引いたのは、身長が五メートルほどある大男。銀色の強靱な肉体をさらけ出しており、その顔はタイラントに酷似している。

全員が異様な雰囲気を漂わせており、只者ではないことが分かる。だが、黒瀬は彼らに興味を示さず、和樹の後ろに立っている彩へと視線を向けた。

「彩！ どうして！」

黒瀬はどうしても田島トリカを殺した理由を聞きたかった。

「だから言ったでしょ？ 私がアンブレラだから。邪魔者を消しただけよ」

「そんなの信じられない！」

彩の胸にはスカラベは取り付けられていない。なら、他の方法で洗脳したか。黒瀬はどうしても彩の一連の行動を信じきれなかった。

「おいおい、無視とは哀しいな」

金髪の男が残念そうに言って、走り出した。黒瀬との距離は五十メートルほど。それを一秒もかからずに接近し、黒瀬の胸を殴る。

黒瀬は何が起こったのか分からないまま、吹っ飛んで床に転じた。

「つつ………！」

黒瀬は立ち上がるが、またいつの間にか接近していた男に肩を突き飛ばされる。

「はは、やっぱりすげえなこの力。流石はRーウィルスだ」

金髪の男はたまらず笑みを浮かべる。

「どうだ？ 貴様が今まで戦って成長させたラグナロク・ウィルスを更に強化した。さ

しずめ強化型R―ウイルスと言ったところか」

和樹は自慢げに語っている。

強化型R―ウイルス。その力は黒瀬を遥かに凌駕していた。

それが四人。

他の投与者も金髪の男ほどの力を持っているのだろうか。

だが、今はそれどころじゃない。

「彩―」

黒瀬は彩の言葉を聞きたかった。

「聞き分けが悪いわね。さっきから言ってるじゃない」

彩は呆れた様子で言った。

「聞き分けのない子に説明してあげるわ。最初から私はアンブレラよ」

「最初から……?」

最初から。それは黒瀬と彩が初めて会った時のことを指すのだろう。

いや、待てよ。いつからだ?

黒瀬は彩と初めて会った時のことを思い出せない。思い出したのは、黒瀬の両親が死んで家に引きこもっていた時に世話をしてくれた記憶だった。

「違う、この記憶は……」

「あら、今頃気づいたの?」

記憶が矛盾している。黒瀬はその時、自分を傷付けないために記憶をねじ曲げて、両親は事故死だと思いついていた。そして、彩も黒瀬の両親が事故死したことを知っていた。だが、実際には暴走した黒瀬が殺したのだ。

「あの時は精神が衰弱してくれていて助かったわ。あなたの作り物の記憶にすんなりと入り込めた」

「そんな……」

「この十四年間で、あなたをずっと監視し続けていたわ。アンブレラの命令でまさか中学と高校を二回もやるハメになるなんてね」

「彼女は私の命令でよく働いてくれた」

和樹は彩の肩に手を置いた。

「アルプス研究所でt-Abyssウイルスを撒いたのも、ウィルフアーマの研究所で貴様とタイラントの戦闘の様子を収めた監視カメラのデータを抜いたのも、グレッグにF-ウイルスやB・O・Wを渡したのも、すべて彼女だ」

「そんな……」

信じたくない。黒瀬は耳を塞ぎこみたかった。だが、どうしても記憶がそれを否定する。

「私の計画通りに動いてくれた貴様には本当に感謝している。これでいよいよラグナロク計画も大詰めだ」

和樹はポケットから注射器を取り出した。黒瀬はその中身が直感的にR―ウィルスだと気付く。

和樹は自分の首筋に注射を打つ。

「おお？ うおおおお！」

和樹の皮膚のシワはどんどんなくなって筋肉が付き、白髪混じりの髪は黒くなり、瞳は紅くなる。

その姿は黒瀬と瓜二つだった。それも当然のはず。彼は黒瀬のオリジナルなのだから。

「これがラグナロク・ウィルス！ 凄いぞ、力が溢れて止まらない！」

和樹は両手を空に上げ、喜びを実感していた。

「もうここには用はない。貴様と一緒に沈んでもらおう」
「なに!?!」

床が揺れ始めた。いや、施設全体が揺れている。和樹は研究所の自爆装置を作動させ、すべてを海に沈めようとしていた。

「さあ、戻るとするか。あの研究所へ」

和樹と彩は後ろを向いて、潜水艦の入り口へと向かう。

「彩!」

黒瀬は彩を止めようと、走り出す。

「お前の相手は俺たちだぜ?」

R—ウィルス投与者の四人が立ちほだかる。

無精髭の男がスナイパーライフルで瞬時にして黒瀬の四肢を撃ち抜いた。

「だから……なんだ!」

黒瀬は痛みに怯むことなく、走る。驚いた無精髭の男は黒瀬の心臓を撃つがそれでも止まらない。

血を吐き出しながら黒瀬は無精髭の男を蹴り飛ばした。

金髪の男が目にも止まらないスピードで黒瀬に接近し、黒瀬の脇腹を殴った。だが、その瞬間、黒瀬は金髪の男の腕を掴む。

「なっ!」

黒瀬と金髪の男は一緒に吹き飛ぶ。黒瀬は金髪の男を離さない。そのまま空中で男を投げ飛ばして着地する。

着地した瞬間、火が黒瀬に襲い掛かった。黒瀬の身体が燃え盛る。

「熱っ!」

黒瀬は床を転げ回ってすぐに火を消した。

黒瀬を襲ったのはあの茶髪の少年だった。しかし、彼の手には火を飛ばせるような武器など何もない。

少年は無言のまま手を振った。彼の手から出た血液は瞬時に燃え、黒瀬を襲う。

「まさか……!」

この能力には覚えがあった。t-veronicaウイルスに適合した人間の力。だが、そのウイルスに適合するには十年以上の歳月が掛かる。

t-veronicaウイルス感染者にR-ウイルスを投与して適合させたとしたか考えられない。

いや、だとすれば――

クレアが南極基地で話していた男と姿が一致する。

「ステイブなのか!？」

黒瀬の問いに少年は答えない。それもそのはず、彼はスカラベによって操られていて。勝手な行動は許されない。

「クソー」

ステイブだとしても今の彼は黒瀬にとって敵だ。

黒瀬は一直線にステイブへ突っ込む。彼は腕から血を放つ。それが空気中で燃え、

黒瀬に襲い掛かる。黒瀬は避けずに直撃し、燃えながらステイプの顔を殴り飛ばした。

「ぐうっ！」

黒瀬の身体が一瞬止まりかけた。そろそろ限界が近い。

最後に大男が立ちはだかる。タイラントにR―ウィルスを投与したのだろう。

大男は丸太のような腕を降り下ろす。黒瀬は咄嗟に避けた。その腕はコンクリートの床を粉碎した。もしあれに直撃したら――。考えただけでもゾツとする。だが、今止まるわけにいかない。黒瀬は抜刀し、大男の股間をスライディングで潜り抜け、その大きな背中に刃を振った。

バキン！ と黒瀬の刀は大男の強靱な肉体に寄って、いとも簡単に折れた。まさかこれほどの強度を持つていたとは。対物ライフルやロケットランチャーでも敵うかどうか怪しい。

どうすればいい。黒瀬は大男を倒す手段を考えるが、武器が無くなった今、どうすることもできない。

その時、爆発で地面が大きく揺れた。大男はバランスを崩し、よろめいた。黒瀬はそのチャンスを見逃さず、膝にタックルを仕掛けて転倒させた。

そろそろこの場所も危ない。あと数分で海水が流れ込んでくるだろう。

「彩！」

黒瀬の呼ぶ声を聞いて彩が振り返った。一時的にとはいえ、R―ウイルス投与者の四人を振りほどいた黒瀬に驚いていた。

黒瀬を邪魔する者はあと一人、和樹だけだ。しかし、和樹ではなく、彩が前に出てきた。

「まさかここまでやるなんてね」

彩はホルスターから拳銃を抜いて、黒瀬へ向ける。

黒瀬は足を止めた。

「彩、俺を撃つのか？」

「ええ。あなたはもう用済みなの。あ、そういえば……」

彩は何かを思い出したかのように、身に付けているポーチに手をやって、取り出したものを黒瀬の目の前に投げた。

「……………え？」

それは見覚えがあるカメラだった。

田代リコがいつも身に付けていた仕事道具のカメラだ。

まさか。黒瀬の心臓の鼓動が更に高まる。

「取引を偶然見られちゃってね。殺すしかなかったの。彼女の死体は死体用のミキサ―

「かけといたから心配ないわよ」

狂っている。何故これまで一緒にいた仲間を簡単に殺せるんだ？ きつと彼女は皆を仲間だと一度も思ったことがないのだろう。

「……本当に敵なんだな」

「ええ」

黒瀬は彩への想いを噛み締める。

黒瀬にとって彩と共にいた十四年は本物だ。そして黒瀬が抱いている想いも。

「彩、俺はずっとお前のことが——」

「さようなら」

黒瀬が言い終わる前に、彩は引き金を引き、黒瀬の頭を撃ち抜いた。

「あ……や……」

薄れていく意識の中見えたのは、彩の笑みだった。

黒瀬の目から涙がこぼれる。もう皆で楽しんでいたあの頃には戻れない。彩は世界の敵だ。

黒瀬は床に倒れた。その身体はピクリとも動かない。床に頭から流れる血が広がっていく。

R—ウイルス投与者はすぐに潜水艦へと乗り込んで、潜水艦は海の中へと姿を消し

た。

研究所は崩壊し、全てのエリアを海水が襲う。潜水艦ドッグの壁に亀裂が入り、氷混じりの海水が流れ込む。黒瀬は海水に押し流され、瓦礫の中に埋まっていった。氷混

85話 もう戻れない

アンブレラ・プライムのすぐそばの氷海の上で、戦闘は繰り広げられた。アリスを救出したレオンたち。その追っ手であるジルとレインのクローン。

アリスはジルと、レオンと他のメンバーはレインと戦っていた。

彼女らはラス・ブラガス寄生虫を投与しており、銃が効かない身体になっている。

氷点下の中での戦闘はレオンたちには無理があった。いくら動いても身体は温まらず、逆に冷えてく。それに比べ、ジルとレインは圧倒的な動きでレオンたちを苦戦させていた。

このままじゃなぶり殺しにされる。だが、何も策はない。ここで死ぬのか。

その時、地面が揺れた。正確には、レオンたちが立っている氷が、だ。

「な、なんだ?」

氷にヒビが入り、そしてついには砕け、穴が開いた。その穴から手が飛び出した。

その様子にその場の全員は動きを止めた。

穴から這い上がったのは、一人の男だった。ボロボロの服を着ているが、その肩にはB S A Aのマークが施されている。

黒瀬はこの氷点下の海を泳いで地上まで上がってきたのだ。

「リヨウ……なのか？」

レオンは思わず聞いてしまった。どう見ても黒瀬だったが、彼の雰囲気は今までとは違う。負のオーラが彼を纏っていた。

黒瀬はジルとレインを見た。

敵だ。黒瀬は一瞬で判断し、レインの頭を素手で砕いた。それを見たジルはアリスを無視して、黒瀬へと向かうが、彼女がクローンだと気づいた黒瀬は、レインと同じように頭を粉碎した。

レオンたちは一瞬の出来事を見ているだけだった。あれほど手こずっていた敵が十秒もかからず葬られたのだ。だが、レオンはやはり黒瀬に違和感を抱いた。

今までの黒瀬ならば、ジルのクローンを戸惑いもせずに殺せるのだろうか。何か違う。いや、変わったのか？ この数時間の間で。

レオンはB S A Aの二人がいないことに気付いた。

「良かった。レオン、アリス。無事に脱出出来たみたいだな」

黒瀬は海を泳いでいる間、施設の崩壊に巻き込まれていないかが心配だった。だが、

それよりも前に脱出出来た様子だ。

「リヨウ、他の二人はどうしたんだ？」

レオンが聞く。レオンは黒瀬の様子を見て、既に察している。

「死んだよ。彩に殺された」

「アヤに!？」

レオンもアリスも彩とは交友関係がある。彩の裏切りと田島とリカの死は二人にもシヨックを与えた。

バラバラとヘリの音が近づいてくる。空を見上げると、アンブレラのロゴのヘリが着陸しようとしていた。

「クソ、アンブレラからまた追っ手か!？」

レオンは銃を構えたが、黒瀬が制す。

「違う。あれは——」

窓からユウトとマミが手を振っていた。

「あれは……クローンか？」

レオンはユウトとマミの姿を見て、戸惑いながら聞いた。

「ああ」

ヘリが着陸し、ドアからユウトとマミが飛び出して黒瀬に飛び付く。

「おい、止めろ。濡れてるから冷たいぞ」

黒瀬の注意も聞かず、二人は抱きついたままだ。

「良かった、リヨウさん。もう会えないかと思つてました……！」

「わたしたち、リヨウさんまで死んだらどうすればいいのかつて……」

二人は黒瀬の生還を心から喜んでいた。

「……死んだ方が良かったかもな」

黒瀬はボソリと呟いた。

へりのドアからリカと田島の遺体が見えた。

夢じゃない。この出来事は。

黒瀬の瞳からは涙が溢れる。

「リヨウ………さん？」

「………すまん」

黒瀬は涙を拭うも、涙が止まらない。

仲間を失いすぎた。リコ、カーク、ソフィア、田島、リカ。

今まで共に戦つてきた人間が二日で五人も死んだ。そしてその内三人は、黒瀬の目の前で死んだ。

「………俺のせいだ」

黒瀬ははつきりと言った。

「ソフィアと約束したのに……強くなるって！ でも結局俺は……弱いままだ」

黒瀬は哀しみと憎悪で心が膨れ上がっていた。

「何で……良い奴らから死んでいくんだよ！ 皆、それぞれ世界のために戦ってきた。この世界をどうにかしようと、命を懸けて戦ってきたんだ！ なのに……こんな最期を迎えるのかよ……！」

これ以上堪えきれない。心が痛い。

彼らとの記憶を思い出すほど後悔しか残らない。どれだけ願っても記憶の中のあの頃には戻れないのだ。

「リヨウ……」

レオンもアリスも黒瀬に掛ける言葉がなかった。哀しいのは彼らも同じだが、目の前で喪った黒瀬は比にならないほど悔しいはずだ。心のどこかで、救えたのではないか、死んだのは自分のせいだ。そう思い込んでトラウマとなつて甦る。レオンもアリスも何度も経験したことだ。

黒瀬はその状態になつていた。だからこそ、掛ける言葉がない。否定するのは逆効果だ。

「俺は……もう油断も手加減もしない。敵は全員殺す！ 仲間より先に殺せば仲間は死

ななくてすむ」

自分の心配なんてしない。

『リョウ、生きていたのね』

へりの通信機からレッドクイーンの声がした。

「レッドクイーン、彩は、敵はどこにいる？」

『あたしにも分からない。分かっているのはアンブレラ最大の研究所であり、あなたが生まれた場所よ』

「俺が生まれた場所……」

黒瀬の記憶には場所を知る手掛かりはない。黒瀬は自分が生まれた研究所がどこにあるのか知らなかった。

「そこに奴らがいるんだな……」

『ええ』

「彩……お前は俺の手で殺す。絶対に……」

ユウトとマミは、身分を詐称して外国の片田舎で暮らすことになった。

黒瀬から提供された家に二人は過ごしている。

しばらくは黒瀬から振り込まれる大金に頼っていたが、いつまでも世話にはなつては
いられないという考えで、ユウトは建設会社に入社した。

仕事はかなりきついはずだが、ユウトの体内にある少量のR―ウイルスのお陰でそれ
ほど疲れを感じなかった。

(リョウさん、今はどこにいるのかな……)

帰宅のために自家用車を走らせながら、ユウトは考えた。

B S A Aの本部で別れた後、彼らは会っていない。

あの時、ユウトはB S A Aに入って黒瀬と共にアンブレラと戦う気であったが、きつ
ぱりと拒否されてしまっていた。

『ユウト、マミ、俺たちのようにはなるな……』

それが黒瀬が二人に言った最後の言葉だった。

あの時の黒瀬は、少し触れただけで崩れてしまいそうな様子だった。ユウトはそんな
黒瀬をどうにかしたかったが、自分じゃどうにも出来ないことは分かっていた。

きつと断らなかつたら、といつか後悔するかもしれない。だが、あの黒瀬の泣きそう

な顔を思い出すと、断るなんて選択肢はなかった。

家が近づいてきた。

街まで二十分ほどの森の中にある二階建ての木造の家。家の裏には川があり、休日には釣りをしたり寛いだりと、かなり良い物件だった。

駐車場に車を停めて降りると、家の中から料理の良い匂いが漂ってきた。

玄関のドアを開ける。

「ただいまー」

ユウトの声を聞いて、キッチンから女性が駆け寄ってきた。

女性のお腹は少し膨らんでいる。彼女は妊娠していた。

「おかえり、ユウト」

彼女は満面の笑みでユウトの帰宅を喜んでいた。

きつと、これがリヨウさんがおれたちに託した“叶えられなかった”ものなのだろう。

「ただいま、マミ」

ユウトは今の幸せを噛み締めながら、玄関を上がった。

12章 Restoration

86話 終わらない地獄

太田歩はただのどこにでもいる高校生だ。平凡な家庭に生まれ、平凡な暮らしをしている。

顔も頭の良さも平凡で、殴り合いの喧嘩など生まれて一度もしたことがない。

そんな彼は、家族思いだった。

今の日本はゴールデンウィークの真つ最中。その休日を使って国内外へ旅行に出掛ける人が多く、アユムとその家族もそうだった。

国内最大級の遊園地で遊ぶ。それが今回の旅行の目的だった。

何もアユムが遊園地で遊びたいわけではない。遊園地で遊びたいのは彼の妹。妹はまだ小学生五年生だ。思春期真つ盛りで、最近は何も聞いてくれないが、家族思いのアユムは家で五日間ゴロゴロするという計画を投げ捨て、今回の旅行へ付いてきた。

最初は仕方無く付いてきた彼であったが、生まれてから一番の遠出である今回の旅行に若干興奮していた。

昼過ぎにホテルにチェックインすると同時に、アユムは両親の許可を取って、都会を

歩き回ることにした。

初めての街を歩くのは、少し怖いが、それ以上に気持ちが高揚していた。

彼が住んでいる巡ヶ丘市は、田舎というほどではないが、この街と比べると田舎と言つても過言ではない。

立ちそびえる高層ビルの数々。歩道を歩く人々。それがアユムの住む街とは比べ物にならなかつた。

「あ、やばいー」

アユムは腕時計を見ると、時間は夕方五時を回っていた。両親には五時半にはホテルに帰ると伝えてある。

電車に乗れば、十分ほどでホテルの近くの駅に着くだろう。そこから走つてギリギリか。

アユムの両親は時間には厳しい。一分でも遅れてしまえば説教だ。

彼は余裕を持たせるため、最寄りの駅まで走る。高校では部活に入っていないが、中学の頃は陸上部に所属していた。部活を辞めてからも二日に一度、走っているので体力はそこそこある。

汗一つかかず、駅に着くと、駅は人で溢れかえっていた。

（しまった。都会の駅は人が多いんだ！）

時間は五時六分。ゴールデンウィークでも働く会社員やアユムと同じでホテルに帰ろうとする旅行者で人が一杯だった。

このままでは電車に乗れるか怪しい。満員になってしまえば、次の電車が来るのは数分後。彼はその数分が命取りだった。

「バスの方がはやいか？」

いや、バスも同じだろう。ここは潔く諦めるしかない。アユムは携帯電話を出した。先に両親に遅れることを伝えておけば、少しは説教される時間が短くなるとアユムは考えていた。妹にはまた冷やかされるだろうが。

父に電話を掛け、携帯電話を耳に持っていく。しかし、それは何者かに妨害されてしまう。

スーツを着た中肉中背の男が、アユムの背中にぶつかつた。突然のことで、アユムは携帯電話を床に落としてしまう。

「うわ、すみません！」

アユムは、こんな人混みの中で立ち止まってしまった自分が悪いと思い、咄嗟にスーツの男に謝つた。しかし、スーツの男は何も返事することなく、グラグラと左右に揺れながら、人混みを進んでいく。

「なんだ、あの人？」

アユムは一瞬、スーツの男の顔を見た。真っ青でまるで死人のような顔だ。

きつと仕事で疲れているのだろう。アユムはそう思つて携帯電話を拾おうとする。しかし、落としたはずの歩の足元には携帯電話はなかった。

この人混みだ。どうやら、誰かに蹴られて遠くに行つてしまつたらしい。

面倒だと思ひながら、アユムは人混みを掻き分けながら携帯電話を探す。もう約束の時間までにホテルには帰れないだろう。気持ち沈むが、携帯電話を無くしたと親に知られれば、説教は単純計算で二倍になってしまう。それだけは避けたいと思ひ、足元を注意深く探す。

「おい、おっさん！ぶつかつたんなら謝れよ！」

人混みの中で、低い男の声が響き渡る。辺りはざわめき、何事だと、声のした方向に人の視線が集まつていく。アユムは、その人混みに押されてしまい、半ば自動的に騒ぎの中心の近くに辿り着いてしまう。

その中心にいたのは、不良と思われる三人の男と、先ほどアユムとぶつかつたスーツの男だつた。スーツの男は立ち止まつており、下を見つめている。

「おいおい、聞こえないのか？謝れつて言つてんだよ！」

不良の一人は唾を撒き散らしながら怒る。他の二人は笑いながらその光景を見ていた。

どうやらスーツの男が不良にぶつかってしまったようだ。

「ぶつかつたくらいであんな怒るか?」「不良怖えく」「おっさん、あんな奴に目をつけられて可哀想だな」

野次馬は不良を否定する言葉を吐いているが、誰一人仲裁しようとする者はいない。アユムもその一人だった。面倒事は御免だ。

「聞こえねえのか!?!」

不良がスーツの男の胸ぐらを掴む。流石に野次馬たちもやばいと思つたのか、その不良の行為に息を呑んだ。しかし、誰もが予想もしていない事態が起こる。

スーツの男が、不良の首筋に噛みついたのだった。

「……………え?」

アユムは、何が起つたのか一瞬分からなかった。周りも同じだ。

辺りは不良の首から吹き出す鮮血で真っ赤に染まる。取り巻きの不良二人も何が起つたのかという表情で口をパクパクと動かしていた。

「おい、何をしている!」

人混みを掻き分けながら、駅員が近づいてくる。遅い。事が終わつてからではどうしようもない。

人が、人に噛み付くという無惨な光景を見た人々は、駅員の声で我に帰る。そして次

にとる行動。

『うわあああああああああ!?!』『きゃあああああああ!』『』

群衆が一斉に叫び、スーツの男から離れようと押しながら動き出す。歩もその動きに抗うことが出来ず、群衆に押される。

駅員がスーツの男を不良から引き剥がそうとするが、男の圧倒的な力で押し倒され、首を嘔まれる。

駅はパニックに陥った。そしてこのパニックは駅だけでは済まなかった。

また、地獄が始まった。

87話 ヒーローじゃない

「はあ……」

クレアは、ビルの四階の休憩フロアの椅子に座り、大きな溜め息をついた。

この仕事も疲れるわ。

腕時計を見ると、時間は十九時を過ぎていた。外はもう暗く、車やビル、街灯が街を照らしていた。

「お疲れさまー、クレアちゃん」

クレアの頬にピタリと冷たい缶コーヒーが付けられる。

「ありがとう、シズカ」

クレアは缶コーヒーを受け取った。

テラセイブの一員であるクレアと鞠川静香は、バイオテロや薬剤被害の摘発の講演のため、日本を訪れていた。今日はその講演の一日目が終わった所だった。

「明日の予定は？」

「昼から大阪で講演よ。だから五時起きね」

「じゃあ、今日は早めに寝ましようか」

予約を取っているホテルまでここからタクシーに乗って十分ほどだ。遅くても二十一時には寝れるだろう。

「折角日本に来たのに観光できなくてごめんねー」

「いいわよ。仕事で来てるんだもん。観光はそのうち休みをとってするわ」

クレアは今の仕事に誇りを持っていた。決して楽な仕事ではないが、大勢を助けられる仕事だ。今日のこの講演でも一人でも世界の敵に立ち向かう者が増えてほしいとクレアは願っている。

「さて、そろそろ出ましようか」

「クレアは椅子から立ち上がる。その直後だった。外からガシヤーン！ と大きな何かがぶつかった音がし、キャーキャーと人が騒ぐ。

「何?」

クレアはと静香は、窓から外を覗く。

車と車がぶつかって大破していた。どうやら先程の音はそれだったみたいだが、何やら様子がおかしい。

叫びながら逃げる人は、車ではなく、別の“何か”から逃げていた。

「クレアちゃん、あれ……」

静香が外の何かに指を差した。

見えにくいがクレアは指差す方向を注視した。

その光景は、クレアが何度も見てきたものだった。

人が人に嘯み付いている。

「うそ……そんな……」

よく見れば、そこだけではない。回りにもその光景が広がっていた。

「あれって……」

「間違いなく感染者ね。ハロウインはまだ遠いもの」

まさかまた巻き込まれることになるとは。もう何度目か分からないが、また覚悟を決めるしかない。

「シズカ、逃げるわよ」

黒瀬と小室は、ヘリに乗っていた。

B S A Aのヘリではなく、自衛隊のヘリに。

彼らは今回の事件が起きて急遽、極東支部から日本へと飛んだ。陸上自衛隊や現地警察へのオブザーバーとしての役割のためだ。

オブザーバーには極東支部のエースである小室孝と、本部所属の黒瀬リヨウが選ばれた。それは日本政府と、製薬企業連盟に入っていてBSAAへ多額の出資をしているラウンド社の意向だった。

「黒瀬、大丈夫か？」

小室は、黒瀬の様子を見て、心配の声を掛けた。

「……………大丈夫だ」

全く大丈夫じゃない声で黒瀬はそう言った。

黒瀬の目の下には隈が出来ており、目付きも前より鋭くなっている。

黒瀬は一年前の「あの事件」以降、休むことなく世界中を飛び回ってウィルスを悪用するテロリストと戦っている。小室はあの事件の現場にいなかったため、何が起きたかは書類を読んで把握していた。

黒瀬の幼馴染みである香月彩がアンブレラのスパイであり、大事な仲間を多く失った。

小室もリカや田島たちが死んだことにはショックを受けた。こんな仕事をしているが、あの二人が死ぬとは到底思っていなかったからだ。

そして黒瀬は亡くなった仲間の葬式の後、『俺のせいでみんな死んだ』。それだけを残してすぐに戦いに身を投じた。それ以来会うこともなく、今日は一年ぶりの再会だった。

だが、再会した彼は別人のように変わっていた。

「なあ……黒瀬？ 何でこの一年間会いに来なかったんだ……？」

「……………」

「みんな心配してたんだぞ？ 冴子も麗も平野も紗耶も先生もありすちゃんも……………」

もちろん小室も黒瀬を心配していた。今日の再会もはしやぎたかったほどだ。

「悪いな……会いに行ける時間がなかったんだ……」

「世界中を飛び回って戦ってたからか？」

「……………ああ」

黒瀬の返事には覇気が籠っていないかった。

「そろそろ現場に着くぞ。なんて惨状だ」

ヘリのパイロットが言った。小室も外を見てみる。

簡単に言ってしまうえば、地獄の光景が広がっていた。至るところで火災が起き、ビル

の屋上には発煙筒で助けを求め人達が集まっている。

だが、多すぎる。一つだけじゃない。ほぼ全てのビルでそのような事態が起こっていた。〈奴ら〉がいるせいでも下に降りれないのだろう。

「救助活動はしてないのか？」

小室はパイロットに聞いた。

「してるさ。でも規模がでかすぎて手が回ってないんだよ。全国の自衛隊が集まれば救助活動なんてすぐ終わるんだが……」

「そう簡単にはいかないか……」

ビルの上の民間人を助けようにも助けられない。非情な話になるが、このへりに乗せられても数名。へりの乗車券を巡って必ず争いになるだろう。それに今の任務は、一刻も早く避難所に着いて陸上自衛隊の部隊と合流することだ。

非情だが、彼らを見捨てるしか選択肢はない。

「……………なんとも思うな。救えない奴は救えないさ」

黒瀬が外の様子も見ずにそう言った。

「……………なに？」

小室がその言葉に反応して、黒瀬を睨み付ける。

「今何て言った、黒瀬？」

「だから……ビルの奴らは救えない。ゾンビに襲われて敵が増えるだけだ」
「お前！」

小室は黒瀬の胸ぐらを掴んで壁に押し付ける。

「何だよ。本当のこと言っただけじゃねえか」

黒瀬は小室の腕を掴んで力を込めた。激痛が走るが、小室は腕を離さない。

確かに黒瀬の言葉は真実だ。救助活動が難航すれば、屋上のドアを〈奴ら〉に突破され、〈奴ら〉が増える。そんなこと小室はわかっていた。だが――

「黒瀬にはそれを言っただけじゃなく、はしくなかつた！」

「……………はあ？」

黒瀬は意味が分からないという顔をした。

「昔の黒瀬なら、ビルのみんなを助けようとするだろう！ 命令違反を犯してでも、自分を

犠牲にしても！」

「俺はそんなヤツじゃない!!」

黒瀬は力づくで小室の腕を引き剥がした。

「俺はな、お前らが思っているような奴じゃないんだよ！ 漫画やアニメみたいなヒーローじゃない。そんな奴らみたいに完璧な人間じゃないんだよ！」

小室もそんなことは知っていた。黒瀬を間近で見てきたから分かる。黒瀬は完璧

じゃない。だが、助けを求めている人間を見捨てるような奴ではない。助けるために命令違反を犯し、自分が傷付きながらも他人を助け、助けられなかった人に涙する。そんな人間だったはずだ。それが出来るのは黒瀬しかいないはずだ。そしてそれを手助けするのは小室の役目だった。だが、今の黒瀬は最初から諦めている。

それが小室は腹立たしかった。

「僕は黒瀬に言っただけじゃないんだ！ 『助けよう』って！ 困っている人達を助けようって！ そうしたら——」

「そうしたら……なんだ？ お前が付いてくるってか？ 俺の手伝いでもすんのかよ」
「……………ああー！」

勿論だ。僕だけじゃどうにもならない。ただ〈奴ら〉に囲まれて死ぬだけ。だが、黒瀬がいれば。

「……よく分かったよ。俺はお前の便利屋ってわけだ」

「え？」

「ようは小室一人じゃ何も出来ないからだろ？ 俺がいればお前は安全に行動できる。お前がピンチに陥っても俺が全力で助けに来るからな。そして俺は言うわけだ。『助けに来たぞ』ってな。全身ポロポロになって、死にかけて。大体そんな感じだもんな。いつも頑張るのは俺だけだ。お前はそれを脇から見ているだけ」

「そんなことは……!」

ない……なんて言えなかった。

「俺は今までヒーローを演じてきたつもりだった。俺が犠牲になればみんな助かるって。そう思ってた。でも現実はその甘くなかった。俺がいくら頑張っても仲間は死ぬ。手足が吹き飛んでも、腹藁抉られようとも、俺は全力で戦ってきた。……それでも死んじまったんだよ」

黒瀬が誰の話をしているのか小室には分かった。一年前の事件で死んだ仲間のことだ。

「もう……疲れたんだよ。ヒーローを演じるのに……」

「……………」

小室は何も言えなかった。

黒瀬は元々責任感の強い人物で、昔から人のためならと戦ってきた。だが、それ一年前の事件で崩れ去ってしまった。

「お二人さん、お取り込み中の所悪いが、もう着いたぞ」

いつの間にかへりは目的の場所で、避難所にも指定されている中学校に到着していた。

グラウンドには自衛隊や警察の仮設テントが張られており、体育館や校舎の教室には

多くの市民が避難をしていた。

ヘリが着陸体勢に入り、テントからは自衛隊の上官と思われる人物が数名出てきて小室と黒瀬を迎える。

ヘリから降りると、三十代半ばと思われる男が前に出る。

「武岡二等陸尉だ」

男はそう名乗った。

「BSAAの小室で、こいつが黒瀬です。よろしくお願いします」

小室は握手のために手を差し出すが、武岡二尉はそれを無視した。

「上からはプロが来ると聞いていたがな……」

小室と黒瀬の姿を見て、武岡二尉はテントに戻っていった。

「なんだよ……あいつ」

まあ、そう思われても仕方がない。BSAAから来たのは、屈強な身体や厳つく年季の入った顔の男ではなく、どこにでもいそうな二人組だ。だが、本人の前での態度は有り得ない。

「すいませんね、うちの上官が失礼を」

小室の前に出てきたのは、若い自衛官だ。

「お前は？」

「あ、すみません。自分は井上一等陸士です！」

井上は元気に名乗った。

一等陸士といえ、自衛官としての経験が浅い。若さからみて、高校卒業で自衛隊に入ったのだろう。

「僕は小室孝だ」

「……黒瀬だ」

小室と黒瀬が自己紹介を終わらせた所で、井上は二人の手を掴んだ。

「光栄です！ B S A Aのオリジナルイレブンの二人に会えるなんて！」

井上はキラキラした目付きで二人を見ていた。

「僕たちを知ってるのか？」

「知ってますよ！ 雑誌で何度も特集が組まれてましたし！ B S A Aで戦う、数少な

い日本人！」

「雑誌で特集……？」

小室はそれを聞いて大体検討がついた。

「佐藤リコっていうフリージャーナリストが記事にしてたんですよ。もちろん知ってますよね?! 最近その人の記事見ないけど……」

「やっぱりあの人か……」

何度か取材に来ていたが、本当に記事にしていたとは。そもそも本当にジャーナリストだったのかよ……。

小室は懐かしい記憶を思い出すも、ハツとして黒瀬に振り向く。

佐藤リコは一年前の事件で殺されたのだ。

黒瀬は先ほどと変わらず暗い表情だったが、拳がギュツと握られていた。

「それで……僕たちは歓迎されてないようだけど……？」

小室は話をずらして疑問に思ったことを聞いた。

「そりやそうですよ。自衛隊には自衛隊の面子があるんですもん。上官たちはBSAAに指揮権を握られるんじゃないかって思ってます」

「まあ、それもそうだな。自分の部隊が他の組織に乗っ取られるようなもんだし」

「でもこんな事態だからこそBSAAに指揮を取ってもらった方がいいと思うんです。

二人はこの手のプロなんですから」

井上は小室にそう耳打ちした。

「そういうグダグダはいい。井上、俺達は何をすればいい？」

黒瀬が単刀直入に聞いた。

「こちらに来てください」

二人は井上に案内されてテントの中に入る。中には特に大した機材もなく、机と椅

子、そしていくつかの書類が置かれていた。

「ここが二人の専用のテントです」

「……そうか」

黒瀬はテントに入るや否や、机上の書類に手をやった。

一枚の大きな地図とともに今回の事件の概要が書かれた紙と、その対処方が書かれた書類がある。

小室はそれに目を通すと呆れたように溜め息をついた。

「またテロリストか……」

「ええ。それもかなりの人数のようです」

井上は地図を広げ、マーカーで印を付けていく。

「ウィルスがばら蒔かれたのは全部で五ヶ所です」

地図の駅や繁華街に印が付けられている。

「特に被害が酷かったのは、ここです」

「神岡駅……?」

「テロが起こつたのは十七時十分頃で、そのとき帰宅する会社員やホテルへと向かう観光客で駅はいっぱいでした」

「そこへウィルスが……」

「現在の上空からの映像では、駅周辺には感染者の姿しか見えなかったそうです」
「テロリストは何て声明を？」

「見てもらった方が早いですね」

井上はタブレットを取り出した。

「テロリストは犯行後、動画サイトに声明を上げました」

井上は再生ボタンを押す。すると、百人は越える男女が並んでいる映像が流れ、真ん中から一人の男が出てきた。

『我々は感染者保護団体である』

その名乗りの次に世界地図が映し出された。

『世界では年に二千件以上のバイオテロが起きている』

地図に棒グラフが表示され、中東やアメリカのグラフが目立つ。

『その中でも特に目立つのは、人を凶暴化させるウイルスを使用したバイオテロだ』
別の映像が流れる。

それは〈奴ら〉が人を襲う映像だった。

『ご覧の通り、人が人を襲っている。これはイーウイルスというアンブレラが作ったウイルスに感染してしまったからだ。———しかし！』

男は怒るように大きく手を振った。

そして映像が再び切り替わる。

『彼らは被害者であるにも関わらず、銃を扱う野蛮人どもによって殺されている!』

映像にはアメリカの特殊部隊が〈奴ら〉を殺していく場面が映されていた。

『私は、いや、この映像を見た者は当然怒りが湧いてくるはずだ。何故平和に暮らしていた人々がこんな奴らになんぞ殺されなければいけないのかと! 何故殺した奴らは呑気に暮らせるのかと!』

男の台詞は感情が高ぶっているからかどんどん早くなっていく。

『だから私たち感染者保護団体は、この事実を世界中に伝えるため神岡市で行動を起こした! これはテロではない! 世界に真実を伝えるための正しい行動だ。私たちの同志が増えることを願っている』

映像は終わった。

「こいつらイカれてやがる……!」

映像を見て小室はただそうとしか思わなかった。

「ですよ、『だから』から飛躍しすぎてます」

井上も小室の言葉に同意する。

こいつらはバイオテロを起こし、感染者を出すテロリストよりも感染者を殺す者たちを恨んでいる。普通なら元であるテロリストを非難するはずだ。

「きつと友人や家族が感染者になって他の人に殺されたんでしょうね」

「でも『ああ』なつてしまえばもう治らない。殺してやるしか方法はないんだよ」

「分かつてます。でも家族や友人は簡単には割りきれないと思うんです」

確かにそうだ。治らないと分かつていても、誰かに頭を潰され殺されたことには代わりはない。

「だからなんだ？」

黒瀬が二人の会話を割り込んでくる。

「こいつらはテロリストだ。誰が何と言おうとな。被害者だからつて他の人を傷つけて良いわけがない」

それは黒瀬だけではない。小室も井上も、ここに避難している人も全員分かつている。

「井上」

「はい？」

「こいつらどこにいる？俺が殺しに行つてやる」

黒瀬からは憎悪の感情が滲み出していた。

88話 邪魔

「殺しに行くって……この人たちをですか？」

「こいつら以外誰がいるんだ？」

井上は困った表情で、資料を出した。

「残念ながらテロリストグループの鎮圧にはSATが動きます」

黒瀬は資料を受け取って中身を見る。

「テロリストは神岡テーマパークに拠点にしているのか」

小室は神岡テーマパークの名前を聞いたことがあった。確か日本最大級のテーマパークのはずだ。遊園地だけではなく、水族館や動物園、ホテルがある。更にはパークの中心には神岡テーマパークタワーという標高200メートルのタワーがあり、神岡市を見渡せる絶好の観光スポットになっている。

「ええ。テロが起こってパークの客は全員外に逃げましたからね。好都合だったんでしよう」

井上は地図上の神岡テーマパークに印を付ける。

地図を見る限り、パークは相当広い。

「何でテロリストはこんな場所を拠点にしたんだ？」

小室は疑問に思う。

「奴らは逃げも隠れもしないって伝えたいからだろうな。さっきの映像を見る限り、奴らは自分達の行動が正しいと思いつ込んでる。正しいから逃げも隠れもする必要がない。なら、この街で一番目立つ場所はどこか？」

「それが神岡テーマパークだったってことか」

「ああ」

黒瀬は資料の中にある神岡テーマパークのパンフレットを見た。

「神岡市を見渡せるタワーか……。奴らはそこからこの惨状を見て喜びに浸ってるんだろうな」

ひしひしと怒りが伝わってくる。

黒瀬はテントから出る。小室と井上もつられてテントから出た。

黒瀬が見ている方向には、かなり小さいがタワーが見えた。ここから何キロメートルも離れている。

「敵はあそこにいるのか」

「ええ。でもそれはS A Tの仕事です。俺たちは……」

「俺たちは何だ？ それはお前の仕事だろ？」

黒瀬は井上の言葉を予想したかのように言った。それを聞いた井上も気まずい顔になる。

「黒瀬、どういうことだ？」

「分からないか？ 井上が言った通り、自衛隊の奴らは俺たちが目障りみたいだ。だから俺たちの相手をしているのは武岡二尉や部隊を指揮できる奴じゃなく、下っ端のこいつだ。俺たちに仕事はないんだよ」

「そうなのか、井上？」

「……………黒瀬さんの言う通りです。武岡二尉があんなに頑固じゃなければよかつたんですが……………」

自衛隊には自衛隊の事情がある。それは仕方ないことだが、バイオテロのエキスパートである僕たちに何もさせないのはいかがなものか。

小室も黒瀬と同じように苛立ちを覚えるが、ここは日本で指揮を取っているのは自衛隊だ。従うしかない。

「じゃあ暇な俺はテロリスト共を壊滅させてくるよ」

黒瀬はそう言い、小室と井上に背を向ける。

「待てよー」

立ち去ろうとする黒瀬の肩を小室が掴んだ。

「あそこまで行ってテロリストを倒すなんて無茶だ。僕たちは武器も持っていないんだぞ」

「誰がお前と行くと言った？」

黒瀬は掴まれている手を払い除けた。

「お前がいても邪魔なだけだ。ここで何もせずに過ごしてろ。頼めば雑用くらいはやらせてくれるかもな」

「邪魔って……黒瀬のサポートくらいは出来る。今まで一緒に戦ってきたろ?」

「迷惑なんだよ!!」

覇気のなかった黒瀬の声に感情が乗った。

「お前はゾンビに噛まれたら怪我するし、銃で撃たれたら死ぬ。そんな奴に着いてこれても邪魔なだけだ! お前が今まで生きてこられたのは運が良かったからだ! 死なないって思っても……俺が守ろうって思っても……死ぬときは死ぬんだよ! それがこの世界だ!」

「それは黒瀬も同じだろ? いつも無茶な戦い方をして何度も死にかけてきて、でも死ななかつたのは周りに仲間がいたからじゃないか!」

黒瀬と小室が睨み合い、井上もどうすればいいのかと慌てる。

「武岡二尉、マズいことになりました!!」

自衛官の一人が校舎から走ってきた。

テント周りの自衛官や警察がざわざわしている。

「どうした？」

「校舎や体育館に避難している者が突如として暴れ出しました！」

「何？ 一人じゃないのか!？」

「各教室で起きています！」

「手があいている者は現場へ向かえ！」

武岡二尉の言葉で十名ほどの自衛官が校舎へ駆け出していった。

「手があいている者だつてよ。僕たちはまさにそうだな」

「暴れている奴くらい自衛官や警察で充分だろ」

「そうかもな。でも一応さ」

黒瀬は仕方無いと重たい腰を上げた。それに井上も答える。

「俺も付いていきますよ。武岡二尉の命令で二人を見張ってないといけないんで」

「はいはい」

三人は走って校舎へと向かった。

校舎に早速入ると、至るところから叫び声が聞こえてくる。

「何が起きているんだ？」

すぐ近くの教室のドアを突き破って、自衛官が男に押し倒された。

「助けてくれ！」

男は自衛官の首に噛み付こうとしている。

「まさか……！」

小室は男を引き剥がそうと走るが、黒瀬の方が反応が早く、一瞬で男を蹴り飛ばした。

「助かったよ」

小室は自衛官に手を伸ばして立たせる。

蹴り飛ばされた男は痛がる様子もなく立ち上がる。その口には真っ赤な血が着いている。

tーウィルスに感染していることは明らかだった。怪我をしている腕をタオルで縛っているのを見ると、そこを噛まれて感染したのだろう。

「井上、まさか怪我人に何の処置も行っていないのか？」

「怪我は申告制で、治療テントもあるんですが……」

「噛まれたなんて言えないか……」

「いえ、一応噛まれた人もそこで処置を受けています」

「は？ 隔離はしているんだろうな？」

「それが……………」

井上は言いずらそうだった。そうこうしている内に感染者がゆらゆらと揺れながら黒瀬に近寄っていく。

「危ないぞ、君！」

自衛官は黒瀬に離れるように促す。

「……………」

黒瀬は無言のまま、男の頭を掴んで壁に叩き付けた。

男の頭はトマトのように弾け、身体はゆっくりと倒れた。

小室は何度も見た光景だった。こういう事件が起こる度に、〈奴ら〉を殺さなければならぬ。それがついさつきまで人だったとしても。だから〈奴ら〉が死ぬ姿は何度見ても慣れない。

「うっツ……………」

その光景を見た井上は膝をついて床に吐瀉物を吐き出した。

「大丈夫か、井上!？」

小室は井上の背中をさする。

「す、すいません……………人が……………死んだところなんて初めてみたんで……………」

無理もない。あれはさつきまで生きている人間だったんだ。その頭がぐちゃぐちゃになっっているのも見たら誰でも耐えきれない。

「貴様！」

黒瀬が助けた自衛官が駆け出して、黒瀬に殴り掛かる。

黒瀬はひよいと避けて、足を引つ掻けて転ばせた。

「なんだ、お前？」

「何をやったのか分かっているのか!？」

自衛官は怒りではち切れそうな表情だった。

「感染者を殺したただけだ」

「この……………クズが!」

自衛官はまたもや黒瀬に殴り掛かるが、首を掴まれて教室に放り込まれた。

小室は自衛官の気持ちは分かる。だが、彼らも感染したらもう治らないということは知っているはずだ。

「分からず屋だな」

黒瀬は教室の中に入り、自衛官を追い詰めようとするが、そこには恐ろしい光景が待っていた。

子供から大人までの感染者が人の肉を食い漁っていたのだ。

「は？」

感染者は入ってきた新鮮な肉に飛び掛かった。

「小室、外へ出ろ！」

黒瀬は飛び掛かる感染者を蹴り飛ばして、廊下へ出た。

「どうしたんだ？」

「ここはもう駄目だ！」

黒瀬は井上を抱える。

感染者が窓やドアを突き破って廊下へと出てくる。

「まさか……」

「そのまさかだ。どうやら噛まれた奴がたくさんいたようだな」

黒瀬たちは急いで校舎を出ると、既にグラウンドも同じ状況になっていた。

治療テントから出てきた感染者が、自衛官や警察官を襲っていた。

「なんでこんなことに……」

「答えは明白だろ。何もしなかったんだよ。身体検査もしてないし、ワクチンも打ってない。噛まれた感染者すら隔離してなかったんだ」

黒瀬は襲い掛かる感染者を蹴り飛ばしていく。

「どうすんだよ?」

「ここにも駄目だ。ワクチンもないんじやゾンビは増えるばかりだし、この数のゾンビを倒すのは手が折れる」

「そういう話している内にも被害者は増える一方で、自衛官や警察官は次々に噛まれていく。」

「へ奴らへに対する訓練をしていないのか……!」

「そう思うほど呆気なくやれていく。」

「武器が使えないんだ。訓練を受けた奴でもあんなもんさ」

「黒瀬は先程のテントに入って地図を取った。」

「こんなところに用はない。行くぞ」

「ぴちやり。」

水滴の落ちる音でアユムの身体がビクリと震える。

あれから何時間経っただろうか。

アユムは駅の近くの公衆トイレで怯えていた。

いつまでここにいれば良いのだろうか。そんなことは分からない。でも、ここを一步でも外へ出れば、人が人を喰っているという、B級映画のような惨状が広がっている。ネットでは、ツイッターに感染した者はゾンビのようになると書かれてあった。半分冗談かと思っていた。だが、それは本当で、しかもその感染者が周りにはたくさんいる。

一体何の冗談だ!?

ただ、ゴールドデンウィークで家族水入らずで遊園地に遊びに來ただけなのに、なんでこんな目にあわなければならないんだ。

家族は無事なのだろうか。連絡したくても、駅でスマホを落とさせたせいで連絡できない。ただ、家族の無事を祈るだけだ。

不安なことばかり考えていると精神がどうにかなってしまいそうだった。ともかく今は外は暗く、視界が悪い。朝まで待つて明るくなってから行動すればいい。もしかしたら救助活動も行われるかも。

アユムはそう思つて無理矢理にでも眠りにつこうとする。

「シズカ、早く走つて!」

「そう言われても、走りにくくて」

トイレの外から女の会話が聞こえてきた。

アユムは聞き間違いじゃないか、耳を澄ませる。

「ハイヒールを脱げばいいでしょ！」

「それじゃ素足になつて怪我しちゃうじゃない！」

「死ぬよりはマシでしょ！」

間違いない。生存者の声だ。

アユムは出るかどうか迷う。出てもどうすればいいのか。おとなしく救助を待つた方がいいのではないか。

（一人よりはマシか……）

このままここにいてもただ怯えているだけ。アユムは勇気を振り絞つて、トイレのドアを開けた。

外に出て周りを確認する。

ゾンビはちらほらいるが、走つて振り切れる距離だ。

右を見ると、会話をしている二人の女性がいた。

一人は金髪の日本人で、もう一人は白人だった。

「あ、あのっ！」

アユムは二人に声を掛けた。

二人が驚いてアユムを見る。だが、生存者だと気づいて警戒を解いた。

「やっと生きている人間に会えたわね」

白人の女性がアユムに駆け寄る。ハイヒールを脱いだ女性もそのたわわな胸を揺らしながら走ってきた。

「奴らに嘯まれてない？」

「あ、はい。嘯まれてないです」

白人の女性は、アユムの身体を一通り見て言う。

「自己紹介とか詳しい話はあとにしましょう。今はここから離れるわよ」

ゾンビが唸りながら三人に近づいてきていた。

「そうした方がいいですね！」

三人は駆け出した。

89話 特殊部隊

「あれ、ここは……?」

井上は目を開けると、見知らぬ部屋にいた。

「よ、目が覚めたか」

小室はカッププラーメンにお湯を注いで井上に渡した。

「小室さん、ここはどこですか?」

「どこって……誰かの家?」

「ええ!?!」

小室は井上が気絶した後の話をした。

避難所の学校が最早崩壊したこと。そこから逃げて民家へと忍び込んだこと。

「そんな……俺のいた部隊は……」

「多分……もう……」

井上の目には涙が滲む。

小室にも彼の気持ちは痛いほど分かる。仲間が死ぬなんて信じられないし信じたく

ない。だが、これが小室には日常だった。いつまでも経つても慣れることはない。

「すみません……俺、助けてもらったんですよね……」

「助けたのは僕じゃなくて黒瀬だよ。僕は大人一人を担いで（奴ら）の群れを突破するなんて無理だし」

「黒瀬さんはどこに？」

「屋根の上で街の様子を見てる」

小室はテレビを付けると、どのチャンネルでも神岡市の報道をしていた。

「どうやらさっきの避難所であったことが他の避難所でも起きており、多数の自衛官や警察官が犠牲になっているらしい。」

「最悪のゴールデンウィークだな」

「本当ですね」

井上はカップラーメンを取る。

「頂きます」

井上はがつつくようにラーメンを啜る。喉に詰まったのか咳き込んだ。

「おいおい、急がなくてもいいよ」

小室は井上に水を渡す。

「すみません、俺……俺……」

ポロポロと井上の目から涙が溢れる。我慢の限界のようだった。

時間は0時を過ぎていた。

「……………」

黒瀬は民家の屋上で街の様子を見ていた。

至るところで火事が起きていて、風向きのせいか黒瀬の方向に煙が飛んできていた。外にいるのは感染者しかおらず、人間の影なんてどこにもない。

「……………世界は変わらない」

どれだけ戦ってもテロは増える一方だ。この光景も今まで何度見たことか。

黒瀬に怒りと喪失感の両方が立ち込める。

俺の仲間はこんな世界を創るために死んでいったんじゃない。

そういくら思っても無駄だ。仲間は死に、世界は酷くなるだけ。

「うわああああんー！」

まるで子供のような泣き声が下の部屋から聞こえてきた。

近くにいたゾンビたちが声に気づき、民家の庭へと入ってくる。

「ちっー！」

黒瀬は屋根から二階のベランダに飛び降りて部屋の中に入る。部屋の中で泣いている井上を小室が抱きしめてあやしていた。

なぜ泣いているのか黒瀬には分かっていた。

こんなことばかりだ。

アユムたち三人は住宅街に入っていた。

「どこか休めるところを探しましょう」

クレアはそう言って先頭をずんずん進んでいく。

怖くないのかな？ とアユムは疑問に思う。まるでこの状況に慣れていくかのようだ。

「待って！」

T字路でクレアが制止させた。

「どうしたの、クレアちゃん」

「見て」

アユムは左右を見る。

そこには何体もの感染者が徘徊していた。

「どうやっても見つかってしまうわ……」

道路は狭く、遮蔽物もない。感染者に見つからないようにして進むのは困難だ。

「どうするんですか？」

アユムは恐る恐る聞いた。

「武器さえあれば良かったんだけど……」

(武器があればどうにかなるのか……)

クレアが悲観していると、右の道路の奥に人の姿が見えた。

「あ、あれ！」

アユムは指差し、クレアと静香は凝視した。

迷彩服に、銃を抱えた部隊だった。顔は黒い覆面を被っていてよく見えない。

「あれ自衛隊ですよ！ 助けてもらいましよう！」

「ちよつと待って、何か様子がおかしいわ」

クレアが何かの違和感に気付き、二人を止める。

「おかしいって……何が？」

自衛隊の部隊は、背後から感染者をナイフで突き刺して、前へと進んでいく。先頭が

進むと、後ろから続々と隊員が進んでいった。その数はおよそ三十人。そして最後方には装甲車がいる。

アユムは彼らを見て、何もおかしいとは思わない。

「彼らの目的は救助活動じゃないわ。どこかへ向かっているの？」

クレアの言う通り、彼らの目的は救助活動ではないように思えた。

救助活動をしているのではなく、どこかへ隠密に行動しているように見える。

「とにかく距離をとって、後ろから着いていきましよう。邪魔なのは全部倒してくれるはずだから」

今はクレアに従うしかない。

「んっ？」

黒瀬は何かに気づいたかのように立ち上がる。

「どうした黒瀬？」

「何か音が……近づいてきている」

黒瀬はそう言つて窓から外を確認しようとしたその時、ドン！ とどこかでライフルの銃声がして、黒瀬が倒れる。

「黒瀬！」

「黒瀬さん!？」

小室と井上が黒瀬に駆け寄る。

「かすっただけだ……」

黒瀬の頬にかすり傷が付いていた。それはどこかから放たれたライフル弾によるものだった。

「気を付けろ、狙われてる」

小室と井上は窓から顔を出さないよう、身を低くした。

「狙われてるって、誰からです!？」

「知るかよ」

黒瀬は窓からそつと顔を出す。と、同時に手榴弾が部屋の中に投げ込まれた。

「殺しに来てるな」

黒瀬は怯みもせず、手榴弾を掴んで外へ投げる。手榴弾は空中で爆発した。

「な、何が起こってるんですか!？」

「迷彩服を着た奴らだ。囲まれてる」

黒瀬は一瞬見ただけで外の様子を把握していた。

「迷彩服!? 自衛隊か?」

「多分な。覆面集団だ。そうとう手慣れてるぞ」

「覆面の自衛隊って、特殊部隊かも……!?!」

他の自衛隊とは違い、明らかに戦い慣れている。どうやら人に向けて銃を撃つのは初めてじゃない奴らしい。

「なるほどな。どうりで攻撃されるまで気付かなかったわけだ」

黒瀬はニヤリと笑った。

「なんでそんな奴らが俺たちを狙うとかこの際関係ない。俺が引き付けるから、その内に逃げろ」

黒瀬は窓から飛び出そうとするが、井上に腕を掴まれて引き留められる。

「関係ないとかの問題じゃないですよ！ 彼らは何か勘違いをしているだけです！ ちゃんと話せば分かってくれます！」

「警告もなしに頭を吹き飛ばされるところだったんだぞ」

「それは……」

井上は反論出来なくなった。黒瀬は溜め息をつく。

「一応言ってみる……」

黒瀬は両手を上に上げて窓から身体を出した。

「BSAAの黒瀬だ！ お前ら、狙う相手を間違えてるぞ」

黒瀬は下にいる隊員と向かいの窓にいる狙撃手に聞こえるように言った。
「撃て！」

一人の合図で黒瀬に一斉射撃が襲い掛かる。すぐに身を伏せた。
「どうやら最初から僕たちが狙いのようだな」

「何で!？」

「知るか。お前、自衛隊で問題児だったんじゃないの。このさいだから殺しに来たとか」
「そんなんで特殊部隊が動くわけないでしょ！」

そうこう話している内に、ヘリのプロペラ音が近づいてくる。

絶対に味方のヘリじゃない。しかも装甲車の重々しいタイヤの音まで聞こえてきた。

「理由は分からないが、敵は部隊を動かしてる。多分、俺が目的だ」

「何で黒瀬さんを？」

井上は黒瀬の力を知らないため、分からない。

「俺は化物なんだよ。俺一人でもこの部隊を全滅させられるほどのな」
「え？」

黒瀬は立ち上がる。

「小室、井上は任せた」

そう言う黒瀬の顔はヒーローのように眩しかった。

「ああー！」

黒瀬は窓から外へ飛び降りる。

道路に確認出来る敵は5人。最低でも近くに十人はいる。

飛び降りる黒瀬を隊員は一斉射撃する。

黒瀬は頭を守る。ほとんどの弾は黒瀬の腕や足に当たった。

「……ッ！」

何度経験しても慣れない痛み。昔の自分なら痛みで悶絶していただろうが、今は違う。

黒瀬は地面に着地した。

全身の傷から血が吹き出す、そんなこと関係なしに一番近い敵に走り出す。

「ば、化物か……！」

敵は黒瀬を撃つ。黒瀬は全て俊足で避け、間合いに入った。

敵はライフルを使った銃剣術を繰り出してくる。対応が早い。流石はエリート部隊。

そこらのテロリストとは違う。

だが、それも黒瀬にとって関係ない。

敵が銃剣を刺す前よりも速く、股間蹴り上げた。

流石のエリートでも股間の痛みは耐えきれないようで、銃から手を離してうずくまる。

「ほら、死ねよ」

黒瀬は敵から奪ったライフルの銃剣を抜き取り、うずくまっている敵の首に深々と突き刺した。

きつとこいつらは悪い奴じゃない。ただ上からの命令に従っているだけだ。だが、殺してくる奴らには容赦はしない。

「一人やられたー」「やられたぞー！」

周りに潜んでいた敵が続々と出てくる。黒瀬には探す手間が省けて好都合だった。

「お前ら、逃げるなら今のうちだぞ」

黒瀬はそう言って、出てきた敵に銃剣を構えながら走り出す。

敵は撃つが、黒瀬は撃たれても全く怯まないで走り、敵の胸に銃剣を突き刺した。死んだ敵の腰から手榴弾を取る。

すぐさまピンを抜いて集団に向かって投げる。

「グレネードー！」

手榴弾を投げられたことに気づいた兵士たちが回避行動に出るが、道路は塀に囲ま

れ、隠れる場所がない。咄嗟に伏せたのはいいが、爆風に巻き込まれ、何人かは吹き飛んだ。

黒瀬は走り出し、巧く回避出来た兵士が立ち上がる前にその頭を蹴り挙げた。バキヤツ！と軽快な音とともに首の骨が折れ、そのまま兵士は絶命する。

「く、くそおおおおお！」

自棄になった兵士が黒瀬に向かって撃つ。が、それよりも速く間合いに入り、下から敵の顎を突き抜けるように殴った。

その威力は兵士の身体が１メートル浮き上がる程のものだった。

黒瀬は倒した兵士の身体を掴み、盾にしながら次のターゲットに向けて放り投げる。

死体は兵士に覆い被さって倒れた。すぐに立ち上がるとする兵士の頭を黒瀬はヘルメットごとぐしやりと踏み潰した。

きっと奴らもこうなるとは思っていなかっただろう。BSAAの二人を何十人もの部隊で殺すだけのミッション。何故殺すのか理由も分からない彼らは罪悪感がある者もいたはずだ。

「お前らは悪くない。運が悪かっただけだ」

この世界は運がない奴から死んでいく。

「こちらアルファ5。アルファ6と共に敵の拠点に突入する」

『了解した。敵もプロだ。気を付けてかかれ』

アルファ5は小室と井上がいる民家に入り込む。

銃を構えながら、物音を立てないように二階の階段を昇る。

二階の部屋の前について、もう一人の隊員に待てと合図を出した。

敵はまだこの部屋にいるはず。

部隊の目的はB S A Aの二人を抹殺することだ。

一人は手強いと聞いているが、もう一人はそれほどでもないらしい。今まで厳しい訓練を受けてきた俺らには敵わないだろう。

深呼吸して部屋のドアをそつと開け、閃光手榴弾を放り込んだ。

すぐに炸裂し、強烈な光と音が部屋中を包み込む。

「突入！」

アルファ5はドアを蹴り破り、アルファ6と共に部屋に飛び込んだ。

「……なに？」

部屋には敵の姿はない。

もう別の場所に移動したのか？ アルファ5はそう思ったが、ここに来るまで誰の気配も感じなかった。

「このおとおお」

突如として、一人の男がクローゼットから飛び出した。

肩にはBSAAのマークがある。ターゲットの一人だ。

小室はアルファ6に組み付き、壁にぶつける。

「ま、待て。撃つな！」

「アルファ6、ターゲットから離れろ！」

アルファ5は銃を構える。だが、小室がアルファ6から離れない。このまま撃てばアルファ6まで巻き込んでしまう。

どうやらこれが敵の作戦のようだが、それは時間の問題だ。

アルファ5は銃のストックで男の背中を殴打する。小室は呻くが、アルファ6から手を離そうとしない。アルファ6も引き剥がそうとするが、簡単には離れない。

「小室さああああん！」

押し入れからまた誰かが飛び出し、手に持っていたハサミをアルファ5の肩に突き刺した。

「な!?!」

二人は完全に油断していた。敵は二人だと聞いていたが、まさかもう一人いるとは。アルファ5は銃を振って、飛び出してきた男を吹き飛ばした。

その男は自衛官だった。

アルファ5は何故この自衛官が二人と共に行動しているのかは分からない。仲間を殺したくはないが、姿を見た者は全員殺せとの上からの命令だ。

「悪いが死んでもらう！」

「嫌だ！」

井上は、アルファ5の脛を蹴る。少し怯むが、そのまま撃つ。しかし、肩の痛みで銃がぶれてしまい、盛大に外す。

井上はそれをチャンスだと判断してアルファ5に飛び付いた。

アルファ5は引き剥がそうとするが、井上がアルファ5の肩に刺さっているハサミを掴んでグリグリと回す。

「ぐあああああ!!」

アルファ5は経験したことない痛みで悶絶する。肘で井上の顔を殴るが、それでも止めない。

「井上、ハサミを貸してくれ！」

「はい！」

井上はアルファ5の肩からナイフを抜き、小室へと投げる。

小室はそれを受け取って、組みついているアルファ6に頭突きを喰らわせ、怯んだ瞬間を狙って首元に刺す。そのままアルファ6を床に倒して、アルファ5の顔を全力で蹴り挙げた。

小室と井上は倒れこむ。

「流石に強いな……」

「そら自衛隊の精鋭ですからね……」

小室は疲れを癒したかったが、そんな暇はない。

すぐに立ち上がって、銃を奪う。

「黒瀬がまだ戦ってる。援護してやらないと」

小室は井上を家の中に残し、外に飛び出していった。

外には信じられない光景が広がっていた。

90話 裏切り者

クレアは困惑していた。

それもそのはず。黒瀬と自衛隊が戦っているのだから。

久しぶりに黒瀬と再会出来て嬉しいが、今は目の前の状況を何とかしなければ。

「二人はここにいて」

一緒に逃げてきた二人を待機させ、クレアは自衛官へとゆっくり近づく。

黒瀬に気を取られてクレアの存在に気づいていない。

クレアは背後から、首に手刀を喰らわせ、怯んだところで顔に蹴りを浴びせた。

自衛官はドサリと倒れ、持っていたハンドガンを取る。

「リョウ、一体何がどうなっているの……？」

こんなはずではなかった。

特殊部隊の隊長はただ絶句するしかなかった。

B S A Aの二人を殺すこと。それが今回の任務の命令だった。国民の救助活動でも

なく、事件の首謀者であるテロリストを制圧するのでもなく、世界のために戦っている B S A A を殺す任務には疑問を感じたが、上官の命令は絶対だ。わざわざこんな任務を理由も言わずに命令することは必ず何か裏がある。

考えられたのは、ターゲットの二人が事件の首謀者である可能性。もしくは、他の国で何らかの事件を起こしている犯罪者か。

だが、この推測には矛盾が生じる。

まず、ターゲットである二人は今回の事件が起こり、B S A A に多額の出資をしている日本の製薬会社『ランダル・コーポレーション』の意向により、海外から日本へと来た。この時点でアリバイがある。そもそも、バイオテロと戦っている B S A A がバイオテロを起こすというのも、普通に考えてありえない。

では二つ目の考えはどうか。これもありえないだろう。そもそも B S A A は国連直属の組織だ。そんな組織が危険人物を所属させるはずもない。

ではいったいこの任務の裏にあるものは何か。

何も分からない。自衛隊の上層部、もしくは日本という国が彼ら二人を殺さなければならぬ理由など分かるはずもない。

分かるはずもないが……こんなのはあんまりだ……。

何も知らずに殺される仲間たち。ターゲットの一人である黒瀬という人物はもはや

人間ではない。何の躊躇もなく、殺していく。

「クソ、何でだ……」

隊長はこの部隊が誇りだった。自衛隊の中でもっとも過酷な訓練をしたと言っても過言ではない。その過酷な訓練を共に乗り越えてきた仲間は最早家族同然だった。

その仲間が次から次に殺されていく。たった一人の手によって。

こうなるために自衛隊に入ったわけじゃない。

隊長はもう遅すぎる後悔をしていた。

「隊長おおおー」

「た、たすけっ！」

もはや陣形もクソもない。圧倒的に強すぎる黒瀬によって味方のほとんどは戦意を喪失させていた。

今までの過酷な訓練の中でも死を感じたことはいくらでもあった。しかし、戦いの中でのリアルに感じる死への恐怖は、大切な家族や友人がいる彼らの心を折るには十分だった。

きつとこれでも折れない奴は頭がイカれた奴だ。

隊長は震えていた。彼には妻も娘もいる。娘はまだ小学生になったばかりだった。

「死にたくねえよ……」

そう思っても、逃れられない死が近付いてくる。仲間が叫びながら死んでいく姿を見て、彼はもう正常な判断が出来なくなっていた。

次々に仲間がやられ、目の前にいた仲間の首がナイフで切られ、血飛沫をあげながらポロリと地面へと落ちた。

「ひいー！」

隊長はみつともない叫び声をあげ、その場から駆け出す。

「隊長、どっへ!？」

数少ない仲間が隊長を静止させるが、彼は振り向きもせず走る。

死にたくないその一心で。

「ぎゃっー！」

後ろで静止した仲間の断末魔が聞こえた。それを聞いて彼をいつそう恐怖心が支配する。

と、同時に彼は転けるが痛みはなかった。

「あ……………」

彼の視界にはナイフを持ったターゲットである黒瀬と、膝をついて首の上から血飛沫を上げる彼自身の身体が映っていた。

(そうか……………)

彼は薄れゆく意識の中でこの任務の目的を理解した。
こんな化け物をほつといたら、必ず世界は――

「リョウ！」

部隊を粗方壊滅させたところで、黒瀬にクレアが近寄ってくる。

「……クレアか？」

何故クレアがここに？ 黒瀬は表情に出さずに驚いた。

「黒瀬、無事か？」

小室も駆け寄る。

「タカシもいたのね！」

「クレア？ どうしてここに？」

「おい、再会を喜ぶのはまだ後だ」

上空にはヘリが飛んでいた。ヘリの武装は黒瀬たちに向けられている。

「あれを奪えば移動が楽だ」

「奪うって、どうやって!？」

「飛び乗るんだよ」

そうギャグのようなセリフを吐いた瞬間、へりに火の玉が襲い掛かった。へりはそれに直撃し、空中で大破する。

「何が起こったの!？」

「この能力は……!」

この能力を黒瀬は知っていた。いや、黒瀬だけではない。この場にいる三人はそれを知っている。

「t—Veronicaウイルスの力か……」

「まさか……!」

小室の頭にマヌエラの姿が思い浮かぶ。

「マヌエラじゃない。t—Veronicaを使った……いや、使われた奴はもう一人いる。俺とクレアは知っている」

「リヨウ、それって……!」

「ああ、クレアが思い浮かべている人物だよ」

「久しぶりね、リヨウ」

どこからともなく、彩が現れ、その隣には「スカラベ」という洗脳装置を胸に取り付けられた男がいる。

「彩！」

「アヤちゃん!？」

やはり黒瀬の予想通りだった。

「それにステイブも!？」

クレアはステイブを見て驚いていた。

「やっぱりあれはステイブだったか……」

「ええ……。あの頃と姿が変わってないわ」

ステイブはコールドスリープでもされていたのだろう。1998年の頃から容姿が変わっていない。

「黒瀬もクレアも、あいつ知り合いなのか?」

小室とステイブとは面識がない。実際黒瀬も彼と会ったことはなかったが、クレアから話は聞いていた。

「詳しい話は後だ。こいつらを何とかして倒す」

「こいつらって……酷いわね。幼馴染みでしょう?」

彩は微笑んでいる。

「幼馴染みだと……? よくそんな嘘がつけるな。それにお前は俺の頭を撃ち抜いた」

黒瀬は自分の額に触れる。傷は残っていないが、あの時の痛みは鮮明に覚えている。

「本当、ゴキブリみたいな生命力ね。心臓を突き刺しても頭を撃ち抜いても死なないんだもん」

「そうさせたのはお前らだろ」

正直、黒瀬自身も頭を撃ち抜かれた時は死んだかと思っていた。だが、R―ウィルスの力はあの場にいた全員の想像を上回っていた。

「アヤちゃん、どうして私たちを裏切ったの!？」

彩は元テラセイブの一員。クレアや静香と行動することも多かつただろう。言いたいことがたくさんあるはずだ。

「あら、リヨウは何も話してないの？ 既に知っているのかと思っていたけど」

そう、彩の言う通り、黒瀬は何も話していない。自分の過去も、彩が何故裏切ったのかも。

「そんなことどうでもいい。何でアンブレラがここにいる？ 自衛隊の特殊部隊が襲ってきたのも、このテロの黒幕も全部お前らだったのか？」

「ふふふ、残念だけど違うわ」

「なに!？」

「私たちがこんなことをするメリットなんか一つもないわ」

確かにR―ウィルスを完成させた彼女らが、わざわざこんな事件を起こす理由など黒

瀬には思い付かない。

「じゃあ何でここに?」

「実験よ」

彩がそう言った瞬間、ステイプがペロニカウイルスの力を使う。腕から放たれた血は燃え盛り、クレアへと襲い掛かる。

「クソ!」

黒瀬はクレアの前に飛び込んで、火の玉を自分の身体に喰らわせる。

黒瀬は衝撃で吹き飛んで、身体は火に包まれる。

「黒瀬!」

「リョウ!」

黒瀬は地面に転がり、火を掻き消す。全身火傷だが、傷はみるみる回復していく。

「本当、ゴキブリみたいね」

「彩!」

クレアと小室は彩とステイプに銃を向ける。

「動くな、お前を撃ちたくない」

「ステイプ! クレアよ。覚えてない!」

小室とクレアの言葉は二人に届かない。

彩が拳銃を抜いて、小室を撃つ。小室もまさか撃たれるとは思っていなかった。彩が遅れる。が、黒瀬が底い、弾丸は彼の脇腹を撃ち抜いた。

「黒瀬！」

「このくらい……！」

—— お前らに殺された仲間比べれば！

黒瀬は彩に殴り掛かる。隣にいるステイブが彩を守ろうと、立ちほだかった。

「眠つてて貰うぞ！」

黒瀬はステイブに回し蹴りをいれるが、腕でガードされる。

「………いつ！」

ステイブはRーウィルスでペロニカウィルスに適合しただけでなく、身体がはるかに向上していた。

ステイブは黒瀬の腹を殴る。黒瀬も腕でガードするが、ステイブの拳が発火し、爆発で黒瀬は吹き飛んだ。

一年前よりも明らかに強い。Rーウィルスで強化されたtーVeronicaウィルスを使いこなしている。

「二年前の彼らはRーウィルスを打つてすぐだったから、自分の能力が使いこなせないで、あなたに遅れを取った。でも一年経てば自然の能力のコツが分かってくるものな

の

「……そうかよ」

黒瀬は彩の言葉を聞いて、絶望などしていなかった。勿論Rーウィルスの力は知っている。だが、あの巨大なタイラントや高速で走る男、スナイパーの姿は見えない。ステイープ程度なら倒せる自信が黒瀬にはあった。

「ステイープ、やって頂戴」

ステイープは腕に力を込め、背を丸める。

「何をする気だ……？」

小室もクレアも彼の行動を傍観している。

「……まさかー！」

黒瀬にはステイープが何をするのか大体予想がついた。

クレアと小室を抱え、その場から離れようとする。だが、もう遅く、ステイープが溜めた力を放つように腕を広げた。

瞬間、ステイープの身体から全方位に火炎放射よりも強力な火が放たれる。まるで大爆発をしたかのような威力だった。

黒瀬たちは吹き飛ばされる。

「……………クソー！」

頭が痛い。黒瀬の視界がボヤけている。

小室とクレアは黒瀬が必死に守ったおかげで目立った怪我はないが、気を失っていた。

民家が火で燃え広がり、かなりの範囲で火事が起きていた。

生き残っていた自衛隊員も今の攻撃に巻き込まれて身体が燃え、叫び声をあげている。

立ち上がる黒瀬にステイプが道路に止められてあつた軽自動車を投げた。

後ろには小室とクレアが倒れている。避けるわけにはいかない。

黒瀬は飛んでくる車を腕を広げて受け止める。

ステイプは車に向けて炎を飛ばした。

車のガソリンに引火したのか、車が爆発を起こし、黒瀬はまた吹き飛ばされる。

「……………クソー！」

これ以上攻撃を喰らうのはマズイ。

黒瀬の身体の傷は高速で再生していくが、それにも限度がある。特殊部隊との戦いで既に体力を消費しており、あと数回即死級の攻撃を喰らえばいくらRーウィルスの力でも死んでしまうだろう。

「ほら、はやく立ち上がらないと仲間が死ぬわよ」

彩は気を失っているクレアに銃を向ける。

「……ッ！」

黒瀬は痛みを堪え、クレアに覆い被さる。と、同時に銃弾が三発放たれ、黒瀬の背中を撃ち抜いた。

身体が悲鳴をあげている。

「ほんと、あなたはバカね。これ以上仲間を庇えば死んでしまうわよ？　もしかして自分がヒーローだと思ってる？」

「………そんなわけないだろ」

黒瀬は再び立ち上がり、彩を睨み付ける。

「これ以上何も失いたくないだけだ。俺が犠牲になれば誰も傷付かなくてすむ」

「……予想通りの回答。ほんと、かわいそう」

彩は溜め息をつき、再度銃を黒瀬に向ける。

「さあ、どうするの？　そんなボロボロな身体で二人を庇いながら私たちを倒せるかしら？」

「………ああ」

黒瀬は彩に向かって走り出す。彩は全弾を黒瀬に撃つ。弾は黒瀬の頬や胸、太ももを貫くが、それでも黒瀬は止まらない。

「お前だけは……殺す！」

黒瀬はリカと田島の死に際を思い出していた。あの時、もつとはやく反応できていれば……。

黒瀬と彩の間にステイブが割り込む。どうやら、彩には手を出させないように命令されているらしい。

「邪魔だ！」

黒瀬はステイブよりも速く動き、彼の首を掴んで地面に叩き付けた。

(彩を先に殺せば、ステイブは後でどうにかなる！)

彩まであと十数メートル。ここで止まればもうチャンスはない。

「うおおおお!!」

全身の痛みを掻き消すかのように叫びながら黒瀬は駆ける。

(こいつだけは……!)

残り数メートル。黒瀬は拳を握り、決心する。彩との思い出を振り切つて。

直後、直径二メートルはする鉄球が民家と塀を突き破つて黒瀬を押し潰すように吹き飛ばした。

「え？」

黒瀬の身体は鉄球とともに民家二件を突き破る。

何が起こったのでも分からずに黒瀬は民家の台所に転がった。

腕も足も動かない。だが、痛みは感じない。衝撃で全身の骨が砕かれたかのようにだった。

土煙が消え、ぽつかりと空いた民家から五メートルはある巨大な大男が出てくる。彼の手には極太のチェーンが持たれており、鉄球を投げたのは彼だと分かる。

奴を黒瀬は知っていた。一年前の事件で黒瀬のステイプと共に行く手を阻んだものだ。その顔はタイラントシリーズに酷似している。奴もRーウィルスを投与され、身体能力が大幅に向上している。

「ふふ、この子の名前はフリウム。保険のためにこの子も連れてきてよかったわ」

フリウム、確か神話に出てくる巨人の名前。

フリウムは鉄球をぐるぐると回す。二メートルの鉄球は重さ五トンにも及ぶ。

「いらいら、これ以上やると死んじゃうわ」

彩はフリウムに攻撃を止めさせる。

「……俺を……殺すんじゃないのか……？」

黒瀬の身体は最早動かない。最後の力で傷は再生しているが、ステイプとフリウム

を相手にする力は残っていないかった。

「言っただでしょ？ 実験のために来たって」

彩は銃を取り出した。それは注射器を打ち出す特殊な銃だ。

「さあ、今回は生き残れるかしら？」

彩は注射器を黒瀬の首筋に打ち込んだ。

「く、くそ……」

また、殺せないのか。

注射器の中身の影響か、黒瀬は意識を失った。

91話 〃皆〃で

黒瀬は目を開ける。

頭痛が酷く、身体が鉛のように重い。最悪の目覚めだった。

黒瀬が寝ていたのは民家の和室で、そこに布団が敷かれていた。

黒瀬は隣に目をやると、どこにでもいそうな高校生ほどの男が寝ていた。

「起きたか、黒瀬」

小室が部屋に入ってきて、スプーの入ったコップを手渡した。

黒瀬はそれを受け取って一口、口に含んだ。

「あれからどうなった？ 彩は？」

「分からない。どこかに消えてしまったよ。周りは火事だし、黒瀬も倒れたから、追う暇なんかなかった」

「そうか……」

彩の目的はなんだったのか。黒瀬は考える。試作品がどうのと言っていたが。

黒瀬はふと窓を見ると、日は完全に上がっていた。腕時計を確認すると、とつくに昼の十二時を過ぎている。

(十二時間も寝てたのか……)

これほど寝たのは何か月振りだろうか。そもそも最近は睡眠自体していなかった。

「リヨウ、起きたのね！」

「リヨウくん、心配したのよ！」

部屋にクレアや静香、井上が入ってくる。

「すまない」

黒瀬は立ち上がろうとするが、よろめいて膝をつく。

「大丈夫か、黒瀬？」

「……ああ」

おかしい。身体が重いという以前に、いつもと感覚が違う。

「あれ？ 黒瀬……目が……」

「目？」

目がどうかしたのか。

静香が鞆から手鏡を取って黒瀬に渡す。

「……ええ？」

鏡で自分の目を見た黒瀬は驚く。

紅い瞳が、黒色になっていたからだ。

「なんでだ……?」

考えられる理由は一つしかない。彩から打たれた注射だった。

黒瀬は自分の手を強くつねる。小さい傷口から血が滲むも、治る気配はなかった。

「もしかして……」

そのもしかしてだった。黒瀬のR―ウィルスの能力は、彩に打たれた注射のせいで失われてしまっていた。

「ん……ふわぁ……」

アユムは目を覚まして大きな欠伸をかけた。

目をこすりながら隣を見ると、全員が険悪な表情をしている。

(どういう状況だ!?)

アユムは起きたばかりの脳をフル回転させて今の状況を整理する。

確かゾンビが現れて、逃げて、二人の女性に会って、また逃げてたら自衛隊と誰かが戦っていて、何か火事になって、そこから皆で逃げて、この家に入ったら寝ちゃったんだ!

アユムは大雑把に状況を振り返ったが、何故皆が険悪な表情になっているかは分からなかった。

(そもそも皆の名前自体知らないし、どこの誰!?)

アユムは彼らに名乗っていないし、彼らもアユムに名乗っていないかった。そんな余裕などなかったからだ。

「あら、起きたのね……」

クレアもアユムの名前を聞いていないことを思い出した。

「ええと、どういう状況です?」

アユムは今までの状況を整理して、静香から借りた携帯電話で両親に連絡をした。

しかし、両親も携帯電話をなくしたか、充電が切れているかで、電話を取ることはなかった。

「家族はきつと無事だよ」

井上は項垂れているアユムの肩をポンと叩く。

「ええ、オレもそう信じています。親父もお袋も妹のアカリも無事なはずです……」

そうは言っても何の根拠もない。両親とアカリがいたホテルもゾンビだらけのはず

だ。そんな中、彼らが無事である可能性は低い。だから、今は無事を祈るしかない。

幸い、今一緒にいるのは、バイオテロ専門の部隊BSAAとNGO団体のテラセイブだ。名前くらいしか知らなかったが、彼らがいるのは心強い。それと若い自衛隊の人。「井上さん、オレ、家族を早く助けに行きたいです……」

無茶を言っていることは分かっている。彼らも他にやることがあるはずだ。でも、彼らの力がないと一人で家族を助け出すことは不可能だ。

「うん、分かっている。でも少しだけ待ってくれ。黒瀬さんたちが二階で話し合ってるから」

「……はい」

R―ウイルス。黒瀬にとって憎むべき存在であるが、それと同時に感謝すべき存在でもあった。

R―ウイルスが存在しなければ黒瀬は生まれず、生まれたから救えた命も多くあった。これまでにどれほどこのウイルスに救われたか、数えきれない。

そんなウイルスが失われた今、黒瀬はただ項垂れるだけだった。

「リヨウ、話したいことは山ほどあるわ。でもいつまでそんな状態での？」
そうクレアは強めに言った。

「クレアちゃん。リヨウくんの気持ちも考えてあげてよ」

「ええ、考えて言っているわ。リヨウ、立ちなさい。あなたはBSAAでしょ？ そんなあなたがいつまでもここにいていいの？ 外では助けを求めている人だっているかもしれないのに」

「無理だ、クレア。俺が外に出ても何も出来ないよ。なんだってR—ウィルスの力が使えないからな……」

黒瀬の目に光は灯っていないかった。完全に諦めているかのような表情だ。

「さっきから聞いていれば……!」

痺れを切らした小室が黒瀬の襟首を掴み、壁に叩き付ける。

「ちよ……孝くん!」

静香は小室を止めようとするが、クレアに制される。

「お前は……今までの黒瀬はどこに行ったんだよ! 昔のお前はそんなんじゃないよ。昔のお前は例えそんな力がなくても誰かを助けようとしたはずだ、足掻こうとしたはずだ、諦めなかったはずだ! なのに、なんでこんな姿になっちゃったんだ!」

「ああ、そうだな。確かに昔の俺はそうだったかもしれない」

「じゃあ何で今言ってくれないんだよ！ はやく助けを求めてる人を助けに行こうって！ 力を失つても黒瀬は黒瀬だろ!？」

「違う!!」

黒瀬は小室の腕を振りほどいた。

「俺は……俺は『あの事件』までこの力があれば何でも出来ると思ってた。大事な人も救えるって思ってた！ でも違ったんだよ。ソフィアもリカさんも田島さんもリコさんも……俺は誰も救えなかった！ 救えなかったんだ！ 力があっても、誰も……。それなのに、力がない俺が外に出ても誰も助けられない。ただ失うだけだ」

「黒瀬……」

仲間を失うのは辛い。それはこの場にいる誰でも経験したことだ。それに死んだ四人は長い付き合いの、大事な仲間だった。それを目の前で喪った黒瀬の気持ちは、黒瀬だけにしか分からない。

「リヨウ、何で今まで私たちを避けていたの?」

「俺は……皆に顔向け出来なかったんだ。仲間を四人も喪つて、葬式で泣いている皆の姿を見て……。死んだ皆、きつと俺を恨んでるだろうなって。俺がいなければ……俺が生まれなければ、あの事件も起こらなかった!」

黒瀬が言い切った直後、彼の頬にピンタが飛んできた。黒瀬はよろめく。

黒瀬を叩いたのは、クレアでも小室でもなく、静香だった。

「せん……せ……い……」

静香の頬には涙が流れていた。

「これだけは言えるわ！ あの四人はあなたを恨んだりしてない。リカは……リカはね……いつもあなたのことを心配してた。弟のように思ってた。最初、リカが死んだってことを聞いたとき、夢だって思ったわ。ああ、なんて酷い夢なんだろう、親友が死ぬ夢なんて最低だなんて。でもそれは現実だった。あの夜はずっと泣いていたわ。でもね、あなたが生きてるって聞いたとき、嬉しかったの。他の皆もきつと泣いていたわ。誰のせいとか、なんであなたが、とか思わないわ。だって私たちは家族でしょう？ カントウ事件で……全てを失ったあの日から……」

「俺も……家族だって……思ってます。でも、皆……死ぬかもしれない……」

「ええ、そうね。それでもこの仕事を選んだのは、リヨウくん自身でしょ？ ウイルスで不幸になってる人を助けるために。この歪んだ世界をどうにかするために……」

彼女の言う通りだ。自分でこの仕事を選んだはずだ。ラクーン事件からアンブレラを恨み、ウイルスを悪用する者を憎んだ。そして見てるだけじゃなく、自ら戦う道を選んだ。その過程で仲間が死ぬことも分かっていたはずだった。

「私たちは外に出るわ。生存者を、アユムくんの家族を助けないといけない。リヨウく

んはどうするの？　ここにいるならそれでいいわ。全部終わったら、また迎えに来る」
いつもならほんわかしている静香も、かつこよく見えた。

「いや……行きます。ここで逃げたら……ウィルスの力がないからって逃げたら、俺に託してくれたリカさんたちの想いを断ち切ることになってしまう。それだけは絶対に嫌です……」

死んでいった仲間たちも、この世界をどうにかするために戦ってきたはずだ。その彼らの想いを引き継いで戦う責任がある。

「ありがとう、静香先生、クレア、小室。俺が今何をすべきか思い出すことが出来た。でも正直に言うとう、まだリカさんたちの死は乗り越えられてない」

「乗り越えなくてもいいんじゃないの？」

「え？」

「リヨウくんはね、色々と一人で背負いすぎなのよ。だからね、その背中にあるものを私たちにも分けてほしいの。仲間の死んだこと、も、リヨウくんの過去も……皆で背負いたいの」

「……ありがとうございます」

黒瀬の瞳から一滴の涙が出てくる。それで腕で拭い、決心する。

泣いている暇はない。

俺は戦わなければならないんだ。死んだ仲間のためにも……皆、で。

92話 思い出話

「すまなかつたな、小室。色々言っちゃまって」

心を落ち着かせた黒瀬は素直に小室に謝った。

「いや、僕の方こそ悪かった。黒瀬が背負ってるものの重さをよく知らないで偉そうな
こと言って……仲間なのに……」

「何はともあれ、リヨウがいつもの調子に戻ってよかったわ」

クレアは黒瀬の肩を叩く。

「色々整理したいこともあるだろうけど、それは後にしましよ。私もステイプやアヤ
が気になるけど今は、目の前のことに集中しなきゃ」

「ああ、そうだな」

黒瀬も彩の目的は分かっている。あの場で全員を殺すことも出来たのに、黒瀬の身
体に宿るR—ウイルスを消しただけ。色々考えたいこともあるが、彩がまた襲ってくる
可能性は低い。今は目の前の状況に集中しなければ。

「あのお、話終わりました？」

井上がドアから顔を覗かせていた。

「ああ、今終わったよ」

「良かったです。外に出る準備をしたので一階に降りてきてくれますか?」

全員で一階に降りると、キッチンでアユムが料理をパックに詰めていた。

食欲をそそられる料理の良い匂いが立ち込めている。

「これ、アユムが作ったの?」

クレアが聞いた。

「ええ、味見してみます?」

アユムが肉と野菜の炒めものをクレアに渡す。

クレアはそれをパクつと食べた。

「……うん! とても美味しいわ! 私やシズカよりも料理が上手かも」

「……あはは、両親が仕事で家を留守にすることが多いので、妹のためにいつも作ってあ

げてるんです」

「なるほどね、道理で美味しいわけだわ」

「クレアちゃんだけズルい。私もお腹ペコペコなのに」

静香もアユムにおねだりする。

「先生、それは後にしましょう。それで井上、準備つてのは?」

「ええ、こつちまで来てください」

井上は皆を別の部屋に案内する。部屋入ると、そこにはバットやボール、ナイフなど〈奴ら〉に使えそうな物が並べてあった。

「皆さんが話している最中に近くの民家からも集めてきました」

井上は自慢げに言った。

特殊部隊から奪った銃はあの戦いの後、火事から逃げ出すので精一杯で失ってしまつたが、対ゾンビ用ならここにある近接武器でも十分に戦える。

各々は自分に合う武器を手取る。

小室は金属バットを、クレアはナイフを取った。

「リヨウさんはこれを使つてください」

井上から木刀を渡される。

「へえ、いいね」

黒瀬は木刀を手取る。

(重い……)

今まで紙同然の重さだと感じていた木刀が、力を失つた黒瀬にはとても重く感じられた。

「アユム君は、出来るだけ戦わせないようにしたいけど、念のため」

アユムにはボールが渡された。井上もボールを持っている。

「私はなにを……?」

静香は困ったような顔をする。

「静香さんは医学に通じていると聞いたので……」

井上は静香に救急箱を渡した。

「わあ! ありがとう! 役に立てるか分からないけど……」

救急箱でも傷の手当てくらいは出来る。静香も重要な役割を担っている。

「さあ、必要な荷物を持って外に出るわよ。アユムの家族が待ってるわ」

アユムたちは外に出て、駐車場に停められている車に乗り込んだ。

車の鍵は運よく玄関に置かれており、この民家の家主には感謝しなければならない。

運転席に井上が乗り、すぐにエンジンを掛けて、車のナビでアユムの家族がいるであろうホテルまでのルートを検索する。

ホテルまでの車での時間は三十分。何もなければ三十分で家族の元まで行ける。

(待っていてくれ、父さん、母さん、アカリ……!)

アユムはただ祈るしかなかった。

「出ますー！」

井上は車を発進させ、住宅街を駆ける。

感染者たちが街を徘徊しているが、勿論それを避ける余裕などない。

井上は感染者を引きながら進んでいく。

「あんまりスピードを出してぶつかるとなよ、これはただの一般車両だからぶつかりすぎると動かなくなるぞ」

「……はいー！」

それでも住宅街の道は狭く、感染者を完全に避けることは出来ない。ぶつかっては、返り血が窓やフロントガラスに飛び散る。

感染者でも元は人。アユムにはその光景を見ることが出来ず、目を瞑る。

（この人たちはさつきまで生きていたんだ……）

そう思うと、吐き気がしてくる。

家族を助ける過程で、感染者との戦いは避けられないだろう。

（そうなれば、オレが殺さなければならぬかも……）

一度イーウィルスに感染し、あの状態になってしまえば、もう人間に戻ることは不可能だ。だが、それでも人は人。自ら手を下すには相応の覚悟が必要だろう。

「おい、起きろアユム」

小室に身体を揺らされてアユムは目を覚める。

「あ、あれ？ オレいつの間にか眠ってました？」

「ああ、二時間くらいな」

二時間？ それならとつくに目的地に着いてもおかしくないが。

いつの間にか車は停まっていたが、その理由はすぐに分かった。

目の前の道路が、渋滞になっていたのだ。

アユムと小室以外は外に出ており、辺りを警戒している。

「ここから先は徒歩で行くことになった。何回も迂回を試みたんだが、ここみたいに皆車を放置して避難しているから、車で通れる道がないんだ」

「ああ、そういうことですね」

家族がいるホテルは大通りにある。当然大通りはパンデミックが起る前後は車の通行量が多く、渋滞になって後ろから感染者が来ているなら、誰もが車を置いて逃げ出すだろう。

家族との再会の時間が遠くなり、アユムはがっかりするが、すぐに頭を切り替える。
(今大切なことははやく行動することだ)

アユムは荷物を持って早速車を降りた。

「あら、起きたのね、アユムくん！」

静香はいきなりアユムの手を握った。

アユムの目の前には静香のたわわな胸が揺れている。

「ええ!!? どうしたんです!?!」

アユムも流石に動揺が隠せず、声がどもってしまふ。

「アユムくんが作った料理、頬つぺたが落ちちやうほどとても美味しかったわ!」

静香にアユムの料理は好評だったようだ。

「あ、ありがとうございます……」

自分の料理をこれほど誉められたことは初めてだった。いつも食べているはずの妹でさえ、無反応だからだ。

「良かったじゃないか、アユム。僕も食べたけど美味しかったよ」

アユムは皆から誉められて素直に嬉しかった。

「そういえば、アユムは旅行で神岡市に来てるって言ってたけど、家はどこなんだ?」

「えつと……家は巡ヶ丘市ってところで……てわからないですよね」

アユムの言葉を聞いた黒瀬、小室、静香は固まった。

「えっ!? オレ変なこと言いました?」

「いや、なんとというか……」

「世間は狭いなってな」

黒瀬と小室が頷き合う。

「巡ヶ丘市は私たちが住んでいたところなの」

困っているアユムに静香が答えた。

「え、三人とも巡ヶ丘市出身なんですか!？」

「出身ではないけど……まあ色々あつて僕たちは高校の途中から大学を卒業するまでそ

こに暮らしていたんだ。今でも時々帰つてるけどね」

「カントウ事件のせいでですね!」

井上が口を挟む。

そういえば井上は佐藤リコの書いた記事を読んでいたのだった。きっとそこに黒瀬や小室のことが詳しくは書かれていたのだろう。

「カントウ事件って、10年前の?」

アユムはカントウ事件のが起きた時、まだ小さかったので詳しくは知らない。ただその被害者の多さで日本で起きた戦後最悪の事件として今も語り継がれているのは知っていた。事件のせいで被害の1番大きかったトウキョウは今も封鎖され、日本の首都も変わらざるを得ないこととなった。

「事件のせいで家に帰れなくなった僕たちは、巡ヶ丘市に別荘のある友達の親に世話になつていたんだ」

「そうだったんですか！」

「アユムは高校生だよな。もしかして高校は巡ヶ丘高校か？」

「はい！……て、まさか！」

「僕たちも事件後、その高校に通つてたんだ」

「ええ!？」

アユムは驚きの連続だった。まさか彼らが高校の先輩だったとは……。確かに世間は狭い。

「よし、皆行くぞ」

小室の先導で一行は街を進む。

不思議な光景だった。

渋滞が出来るほど車が停められているのに、人の気配は一切しない。大通りのはずな

のに。

「皆、どこにいつちやっただらう……」

「まあ、避難所でしょうね」

クレアが答えた。

「避難所……」

「学校や大型施設にいるはずよ。警察も自衛隊もそっちにいるだろうし」

（じゃあ、家族もそっちに避難してるかも……）

アユムの家族はいつまでも危険な場所に留まるような人間じゃない。もしかしたら、事件と同時に避難所に逃げた可能性もある。

「一応行ってみないと分からないからね。向こうから電話がない限りどうにも出来ない
そういうえば、とアユムは思い出した。

アユムは携帯電話を無くしており、静香の電話を借りて親にかけたが、誰も取ることはなかった。親から静香の携帯に電話が来れば、何か分かるかもしれないが。

「それにしても本当に静かだ……」

辺りには人の血らしきものが飛び散っていたりするのに、感染者も見当たらない。もしかしたら、奴らも避難所の方に行っているかもしれない。

（すぐには感染者と戦うことはなさそうだ……）

アユムがそう安心しきった直後、車の下から伸びてきた手に、足を掴まれた。「うわあ!」

あまりに突然すぎてアユムは大声を出してしまふ。

「アユム!」

先頭を行っていた黒瀬と小室が事態に気付き、走る。

アユムの足を掴んでいる感染者は車の下から顔を出す。

顔はズタボロで、肩に噛まれたような傷がある。そこから感染したのだろう。

「アユム!」

クレアは感染者の手を思いっきり踏みつけた。

手の骨が折れたのか感染者の手は離れる。

「うおおおおお!」

井上が叫びながら、感染者の頭にボールを降り下ろした。先端が頭に突き刺さり、動かなくなる。

「大丈夫か、アユム」

「怪我はないか?」

急いで駆け付けた黒瀬と小室が心配する。

「ええ、大丈夫です」

(まさか、映画みたいな登場の仕方をしてくるなんて思ってた……！)

突然の出来事に心臓のバクバクが止まらない。

「良かったわ、噛まれないで。噛まれたらいくら私でも治せないもの」

静香は心底安心しているかのような表情をしていた。

そうだ、噛まれたらアウトだ。

この中ではアユムと井上はサーウイルスに対する抗体がない。もし、噛まれたり、傷口に奴らの体液が入ったりすれば、感染は免れない。

「井上もよくやったよ」

小室は井上の肩を叩く。

「あ、ありがとうございます」

井上の顔は青ざめていた。仕方ない。いくら、自衛隊といっても実際に殺したことは初めてだ。それが感染者であったとしても。

「へ奴ら」はもう人間には戻れないんだ。あまり気に病まないようにしよう」

「は、はい」

「皆、物陰や車の下に注意して進もう。へ奴ら」はどこから出てくるかわからない」

皆再び気を引き締め進む。目的地のホテルはもう目の前だ。

93話 両親の死

一行は目的地のホテルへと着いた。

ホテルはかなり大きく、事件が起こる前なら道行く人をその綺麗な外観で人を魅了させていただろうが、今は入り口は荒れ果て、至る所で窓ガラスが割れ、高級ホテルとは言えないものとなっていた。

幸いにも入り口付近に感染者の姿はない。しかし、その荒れ果て具合からはここも被害にあったことが伺える。

日が暮れる前にホテルへと到着出来たのは幸運だ。夜は昼以上に感染者がどこに潜んでいるか分からない。そんな中、外で行動し続けるのは危険だからだ。

ホテルのエントランスへと入る。床や壁にはとどころ血痕がついており、椅子や机は乱雑に倒れている。しかし、これほど荒れた状態からだというのに感染者の姿はない。

小室と黒瀬は警戒しながら進むが、アユムにはそれが焦ったかった。

一刻もはやく家族に会いたい。家族の無事を確かめたい。
いてもたってもいられないアユムは走り出した。

(みんな無事なはずだ、無事なはずだ!!)

アユムは危険を顧みずに先頭を走る。

「待て、アユム! 〈奴ら〉が潜んでいるかもしれないんだぞ!」

小室はそう注意するがアユムは止まらない。

「家族が待っているんです! 妹がつ!」

エレベーターは止まっており、階段を駆け上がる。息切れしながらも七階まで上り、部屋へと向かう。

事件が起こる前、アユムは泊まる部屋番号を聞かされていたため、すぐに部屋の間所がわかった。

運良く感染者に遭遇せずに部屋へと辿り着き、アユムは飛び込むように扉を開けた。

「あ……」

部屋に入ったアユムの目に映り込んだのは、低い声で唸る40代の男女だった。

「なあ……冗談だろ……?」

アユムの声に男女が振り返る。

男女の肌は青ざめ、目は血走っている。腕を前に上げ、ゆらゆらと揺れながらアユムへと近づいてくる。

誰が見ても一目瞭然だ。アユムの両親は既に感染していた。

「アユム、近づいたらダメだ！」

二人に近づこうとしているアユムの腕を小室が掴んだ。

「もう君の両親は……」

「分かっていますよ！」

小室の言葉をアユムは遮る。

「でも……まだ何も聞いてないんですよ……父さんと母さんの声を……何も話さないまま死ぬなんて、そんなの……！」

アユムの気持ちは小室にも黒瀬にも痛いほど分かっていた。突如として日常が破壊され、今まで当たり前のように接してきた人が化物へと変わる。そんなことを繰り返させないためにも二人は戦っている。

「ごめん……僕たちがもつとはやく着いていれば……」

アユムの涙が頬を伝う。だが、それ以上の涙が出てこなかった。

彼も薄々気付いていたのだ。こんな状況で家族が無事なはずがないと。心では無事を願っていてもやはり現実は違った。

「アユム、すまない」

黒瀬が木刀を抜いて、アユムの前へと出た。

「な………に、を………？」

「感染したらもう……これしか方法がない」

黒瀬はゆつくりと近づいて来るアユムの両親へと木刀を構えた。

「あ——」

アユムが言葉を発する前に木刀が振り下ろされた。アユムの両親は糸が切れたようにぐらりと傾き、床に倒れる。

黒瀬とクレアは二人の遺体を抱えてベッドへと寝かせ、目を閉じさせた。

二人の寝た姿を見て、アユムには実感が湧いて来る。

(本当に……死んだんだ……)

その瞬間、家族と過ごした日々の思い出が彼の脳を駆け巡った。

小学生の時、駄々を捏ねて買ってもらったテレビゲーム機。父がゲームは良くないと一番反対していたが、いつの間にか父の方がゲームに熱中しており、格闘ゲームでよく対戦しては負かされていた。

中学生の時、初めて出来た彼女と上手くいかず、母に女心を教わって仲直りすることができた。今はもう別れてしまったが。

「アユム、我慢するな」

黒瀬がアユムの肩を押した。今まで多くの仲間を失ってきた黒瀬にはアユムの気持ち痛いほど分かっていた。

「う、うう……！」

アユムは両親への亡骸へと抱き付く。

——冷たい。

そこでやつと実感した。二人は死んだのだと。

「うう、うわあああああああ——」

溜め込んでいた声と涙が一気に溢れ出る。顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになり、嗚咽をしながらも冷たい亡骸をぎゅつと握り締め、彼は泣き続けた。

『アカリを頼んだぞ』

どれほど泣いただろうか。アユムの泣き声は枯れ果て、流れ落ちた涙で床のカーペットがびしょびしょになった時、何処かでそう聞こえ、はっ、と顔を上げた。だが、二人は横たわったままだ。

両親の最期の願いとでもいうのだろうか。それともただの幻聴か。分からないが、アユムは泣くのを止めた。

そうだ、泣いている暇はない。ここには妹であるアカリの姿がないのだ。行方知れずだが、彼にはまだ大切な家族がいることを思い出させてくれた。

最近は思春期に入ったのかろくに口も聞いてくれなくなったが、大切な家族であることに変わりはない。

アユムは父の亡骸のポケットを弄って、スマートフォンを出した。まだ充電が入っている。携帯には何度もアユムのスマートフォンに電話をかけた履歴が残っていた。どれほど心配していたのだろうか。二人はアユムの安否も知らないまま、逝ってしまった。

電話帳を開き、妹のアカリの電話番号を押す。アカリはまだ小学五年生だが、親が防犯と連絡用にとガラケーを渡していたのだ。

(頼む……アカリ……)

トゥルルルルルルル、トゥルルルルルルル。

発信音が何度も鳴り、早く出てくれと動悸が高鳴る。そして――

『――も、もしもし……?』

アカリの声だった。真正正銘アカリの声だ。

「アカリ、オレだ、アユムだ! 今どこにいる!？」

『ほ、本当にお兄ちゃん……なの?』

アカリの声は細々しく、わざと声を小さくしている様に思えた。

「ああ、オレだよ」

『よかった……お父さんとお母さんが何度電話を掛けてもダメだったからもう死んじやったのかと諦めていたの……』

意外とドライ……いや、そうでもないか？ 昔は仲が良かったのだが、今では顔を合わせれば悪口、嫌味のオンパレードであるアカリ。アユムはいつものアカリの心ない言葉を聞けて少し安心した。

「アカリ……実は親父とお袋は……」

なんて言えがいいのだろう。アカリはまだ小学生だ。両親が死んだと聞けば、そのシヨックはアユムよりも強いだろう。しかし、アカリは『……知ってる』と、予想だにしない答えが返ってきた。

『お父さんとお母さんは、騒ぎが起こった最初に嘔まれて……誰にも迷惑を掛けないよう私を追い出して部屋に籠ったの……』

アユムはその場にいなかったのだから分らないが、きつと三人の間で壮絶なやり取りがあったのだろう。それでも大体アユムには想像がたった。他人に危険を及ぼさない選択肢を取ったのも実にオレの親らしい。アユムはそう思った。

「そうか……アカリは今、どこにいるんだ？ アカリは嘔まれてないんだろ？」

『……ダメ、言えない』

「な……………どうして?」

『言ったら絶対お兄ちゃん助けにくるでしょ……………?』

「当たり前だろ?」

アユムにはアカリの言葉の意図が分からない。

『もう誰にも……………家族には死んでほしくないの……………お兄ちゃんはこの街から早く逃げて……………』

プツリ、とそこで電話は途切れた。

「アカリ……………どうして……………」

アユムはアカリを助けたい一心なのに、アカリはそれを拒んでいる。しかも場所を聞き出せないまま、電話を切られてしまったのでどうすることも出来ない。

「きつと妹さんは危険な場所にいるんじゃないかしら?」

電話の内容を聞いていた静香が言った。

「危険って、この街は充分危険じゃないですか」

「それはそうだけど……………妹さんの周りが〈奴ら〉でいっぱい、助けるには危険を犯さないといけないのかも……………」

「でも……………アカリはきつと今怖がつてる。口ではああ言ったけど、本当は助けに来てほしいはず。あいつは頭良いし、オレに無茶とかさせたくないでしょうけど……………」

「助けにいくんだな？」と小室。

「はい！ でも……オレだけじゃ何も出来ません。だから——」

黒瀬がアユムの言葉を遮った。

「助けに行こう」

9 4 話 ヒーロー

あれからアユムは何度もアカリの携帯に電話を掛けたが、電源を切っているのか電話を取ることはなかった。

(馬鹿なやつ……もつと心配するつての……)

アユムは逃げてと言われて、妹をほつといて逃げる人間ではない。アカリはアユムを心配して言ったが、それはアユムにとって逆効果だった。両親を失い、妹も失うことになれば、ここから助かったとしても一生悔やみながら生きることとなるだろう。

「着いたぞ、警備室だ」

小室が警備室のドアを開け、中を確かめる。感染者はいないようだ、そのまま三人は中に入る。

彼らが警備室に来た理由は、警備室の防犯カメラの映像を確認し、アカリの居場所を探るためだった。これほど広いホテルだ。むやみやたらに探してもキリがない。それに時間を掛ければ掛かるほど危険となる。

警備室に入り、三人の目に真っ先に入ったのは、ホワイトボードに乱雑に書かれている『避難場所 コンサートホール!!』という字だった。

「コンサートホール、そんな場所がこのホテルに？」

「た、確か親父が言ってたんですけど、夜はリラックスしたいからホテルに附属してるコンサートホールでピアノ演奏を聴くとかなんとか……」

「そこにアユムの妹がいる可能性は高いな」

他にも生存者がいるかもしれない。小室たちは複数設置されているモニターからコンサートホールを探し出す。

「もしかして……これじゃないですか？」

井上がモニターに指を指す。

そのモニターには観客席とステージの上に一つポツンと置いてあるグランドピアノ、そして――

「そんな……」

大量の感染者が映っていた。

「嘯まれた人も避難していったんでしようね……」

呟くように静香が言った。

黒瀬、小室、井上がいた避難場所である学校も、嘯まれた人間が大量に避難して隔離もせずに放っておいたせいで、壊滅することになった。このホテルも同じ結末になってしまった。嘯まれても他人に迷惑を掛けないように自室に閉じこもっていたアユムの

両親は賢明と言えるだろう。

「こんなところにアカリがいるわけありませんよね……他の場所の映像をしてみましよう」

「いや、可能性はある」

黒瀬が言った。

「舞台裏だ、もしいるとしたらそこだろう。」

舞台裏……考えもしなかったが、本当にいるのだとしたら、それはとても大変なことになる。

コンサートホールの舞台裏に行くには、正面出入口から真っ直ぐいけば済む。しかし、そこに行くまでに大量の感染者が行手を阻むだろう。

「もし、いなかったら……?」

「時間と体力を無駄にし。場合によっては仲間が死ぬかもしれない」

コンサートホールには五十を超える感染者がいる。この中を安全に突破し切れるはずもない。

「アカリを助けるために誰かが犠牲になるなんて……」

アカリはアユムにとって大事な家族だ。しかし、妹を助けたいから誰かを犠牲するなんてことは出来ない。

「大丈夫よ、アユム。ここにいるのはB S A Aにテラセイブ、自衛隊員。皆あなたたちを助けるためならなんだってするわ。死ぬのはできればごめんだけど」

クレアも、黒瀬も小室も静香も井上も同じ気持ちだ。所属が違っても、誰かを助けてそれぞれの仕事に就いている。

「さあ、行きましょう」

こうして、彼らは警備室を後にしたが、防犯カメラには裏口から侵入する自衛隊の部隊が映っていた。

コンサートホールの入り口前に到着する。小室はゆっくりと扉を少し開け、中を確かめる。

映像で見た通り、感染者は五十以上。この中を掻い潜って舞台裏に行くのは至難の業だろう。しかも、そこから戻ることを考慮しなければならない。

黒瀬が万全の状態で小室は満足いく武器を持っていれば、この程度の数は余裕の内に入るだろうが、今はそのどちらもない。黒瀬の身体能力は一般人ほどまで落ち、彼らの武器はバットやボールなどの近接武器。入って戻るまで短期決戦を仕掛けるしかない。

「……本当にやるんですか？ アカリはここにいる保証もないのに……」

「……ああ。でもいたとしたらこんな危険な場所にアカリちゃんを置いとくわけにはい

かないだろ?」

小室はにっこりと微笑む。アユムに心配するなと訴えていた。

「中に入るのは、僕とクレア、井上とアユムで行きます。黒瀬と静香先生はここで入口を死守してください」

「ああ」「はい」

小室は依然として持ち前のリーダーシップを発揮して皆をまとめあげる。

黒瀬と静香は懐かしさを感じていた。十年前のカントウ事件の時もこうやって小室がみんなをまとめたおかげで生き残ることが出来た。彼にはきつと天賦の才があるのだろう。

「前は僕とクレアが務める。アユムは真ん中で井上は後ろを守ってくれ」

「はい! 任せてください!」

井上が元気よく返事をした。彼は小室と黒瀬のファンなので、小室の指示に従えるのが光栄なのだろう。

「アユム、心の準備は出来た?」

クレアは緊張しているアユムの手を握る。

「怖いんですけど……大丈夫です。やるしかないんだから……」

これまで感染者との戦闘が極力避けてきたが、今からは違う。妹を助けるために立ち

向かわなければならぬ。昨日まで普通に生きていた人の頭を潰さなければならぬ。それに無事アカリを助け出せたとしても、この街から無事に脱出出来る保証もないし、脱出出来たとしても両親が死んでしまったアユムとアカリの人生は大きく変わってしまった。今まで通りの日常を送ることはもう出来ないかもしれない。

アユムは恐怖で脚がすくむがアカリのことを想い、余計な事を考えないようにした。(後のことなんかきつとどうにでもなる……オレは今、戦わなきゃいけないんだ！)

アユムの目に決意の眼差しが宿る。それを感じたクレアはそつと手を離れた。

「大丈夫そうね。妹ちゃんのために頑張りましょう」

「はいー」

全員の覚悟ができ、小室がドアを開く。

「行くぞー！」

小室、クレアが先頭を走り、その後アユム、井上と続く。

人間の存在に気付いた感染者たちはすぐに彼らの行手を阻む。しかし、小室とクレアはそれをものともせず、突き進む。

「はあああああー！」

小室はバットをフルスイングし、感染者の頭を吹き飛ばす。クレアは感染者の頭をナイフで切り、怯んだところに回し蹴りを喰らわせた。

二人ほど感染者の対処を簡単に行える人間はそうそういない。これまでの経験のおかげで、二人はどう動けばいいのか手に取るように分かる。

(凄い……小室さんもクレアさんも今までどんな経験をしてきたんだ……?)

アユムの目には感染者を次々に倒す2人が映っていた。二人は感染者の手をひらりと避けてカウンターを喰らわせる。いちいち倒している時間はない。感染者が怯んでいるうちにその横を駆け抜ける。

時間を掛ければ掛かるほどコンサートホールにいる感染者は彼らに気付き、襲い掛かってくる。そうなればこの狭いホールの中で逃げ場はない。

ステージへと到着し、階段を登る。

「クレアとアユムは先へ、ここは僕と井上で食い止める!」

全員で舞台裏に行けば、戻る時に感染者に囲まれてしまう。狭い舞台裏では思い通りに戦うことも出来ないだろう。誰かが食い止める必要があった。

「頼んだわよ、二人とも!」

アユムとクレアは急いで舞台裏へと入る。

舞台裏は様々な小道具が置かれており、奥には待機室と書かれた部屋があった。ピアノを演奏するアーティストが休む部屋だろう。もし、アカリがいるならそこしかない。

アユムはドアに飛び付くように手を掛け、ドアノブを回すも鍵が掛かっており、ドア

は開かない。しかし、鍵が掛かっているということは誰かが中に入っている可能性は高い。

「アカリ、そこにいるのか!? オレだ、アユムだ! 助けに来た!」

必死にドアを叩く。しかし、中からの返事はない。防犯用にスタツフが鍵を掛けていただけなのか。諦めようとしたそのとき、「お兄ちゃん……?」と弱々しい女の子の声が聞こえた。

間違いない。アカリの声だ。

「ああ、オレだ。開けてくれ、アカリ!」

カチャリと鍵を開ける音がしてドアが開く。そこには涙を浮かべた長い黒髪にピンクのヘアピンを付けた少女が立っていた。

「アカリ!」

アユムはアカリへと抱き付く。アカリは少し最弱している様子だったが、嘔まれたり、引つ搔かれたりしたような傷は見当たらない。妹の無事にアユムは涙を流した。

「なんで助けに来たの……? 危ないって言ったのに……!」

「……助けに来るのは当たり前だろ……家族なんだから……もうこれ以上失いたくないんだ……!」

二人は涙ながら強く抱き合う。その涙には再会と無事を確認出来た歓喜の涙と、両親

が死んだことによる無念の涙が混じっていた。

「良かったわね、アユム。でも時間がないわ、すぐに行きましょう」とクレア。

兄妹の再会に無粋な横やりは入れたくないが、ここに長くはいられない。小室と井上がステージで戦っているはずだが、いつまで持つか分からないからだ。

「そうですね、行きましょう!」

アユムは立ち上がり、アカリを横に抱えた。俗に言うお姫様抱っこだった。弱っているアカリを走らせるわけにはいかないし、感染者の群れの中を小学生の足で駆け抜けるのは難しいだろう。

「ちよっ、なにをするの!? 恥ずかしいから下ろして!」

アカリはアユムの頭をぼかぼかと叩く。

「痛っ! やめろって!」

クレアは仲がいいのか悪いのか分からない兄妹を微笑ましく見ていた。

ステージに戻ると、かなりの数の感染者を相手に小室と井上が戦っていた。その圧倒的な数に防戦一方だったが、アユムたちが戻ってきたことで状況が変わる。

「無事だったんだな!」

「良かった。見つけたんだね!」

「はい、二人ともありがとうございます！」

もうここには用はない。小室は感染者を掴み、集団へと放り投げてぶつける。バランス能力が落ちている感染者はばたばたと倒れた。

「はやく、今のうちだ！」

出入り口を守っていた黒瀬と静香の目にも無事妹を助けられたのが映っていた。

「良かったわね、アユム君……」

「ええ、本当に良かった、これ以上目の前で誰も失わないで……」

無事に全員が戻り、黒瀬はすぐにドアを閉めた。

「よくやったな、お前ら！」

黒瀬は手のひらをグーにして小室へと向ける。小室は微笑み、応えるようにグーでタッチした。

「井上も頑張ったな」

「自衛隊で学んだ格闘技を活かしてよかったです」

井上にとって自衛隊に入って誰かを救う経験は初めてのことだった。彼もまた、歓喜で胸がいっぱいだった。

「アカリちゃん、怪我はしてない？」

静香がアカリに駆け寄り、身体の様子を伺う。

「えっと、大丈夫です。ちよつと手足に力が入らないけど……」

アカリはアユムと一緒にいる人たちが知らない人ばかりで困惑したが、すぐに全員が良い人だと分かって安心していった。

「もしかして昨日から何も食べてないんじゃない？ それに極度の緊張状態だったせいで筋肉がこわばってるのね」

医療に長けている静香はそう分析し、「どこかで休ませなきゃ」と、進言した。

「最上階の部屋へ向かおう。ゾンビは階段を上るのは苦手だし、屋上に出ればヘリでの救出も見込める」

「そうね、そうしましょう。アカリちゃん、もう少しの辛抱よ」

静香はアカリの頭を撫でた。子供扱いされるのが嫌いなアカリだったが、流石に恩人たちに失礼なことはいえない。

「小室もクレアも疲れただろ、俺が先導するよ」

黒瀬はそう言って先に進み、通路の角を曲がろうとする。が、突如として武装した集団が現れた。

迷彩柄の戦闘服を着て目出し帽を付けている彼らのその手にはアサルトライフルが握られている。腰のホルスターにはハンドガンや手りゅう弾があり、どんな戦闘になっ

でも対応出来る完全武装だった。

彼らから殺気を感じ取った黒瀬は振り返る。

「みんな、逃げ——」

黒瀬の言葉を遮る様に轟音が響く。何の躊躇なく男たちは黒瀬へと引き金を引き、黒瀬の背中を蜂の巣にした。

彼らの正体は、昨日黒瀬たちを襲った自衛隊の特殊部隊の別働隊だった。この作戦の意味は知る由もないが、彼らの目的は黒瀬リヨウの殺害と、その近くにいる人間の殺害だった。たとえそれが女子供であったとしても。

隊員は次にアユムとアカリに狙いをつけて構える。それに気付いたアユムはアカリを覆う様にしてかばう。

またも轟音が鳴り、アユムは死を覚悟したが、痛みを感じることはない。井上が間に入り、全身で弾を受け止めていた。

ゆっくりと倒れそうになる井上をアユムが抱える。

「井上さん……なんで……」

全身から血が出ており、アユムにも彼はもう助からないと分かった。

「人を……助けるのが……自衛官の役目だから……」

井上の目が虚になっていく。

「……………い、のうえ……………」

虫の息である黒瀬は井上の勇姿を見ても何もできない。彩にR―ウィルスの抑制剤を打たれたせいで再生能力も機能しない。

彼らは銃を小室とクレアにも向ける。狭い通路の中、もう逃げ場はない。武器もない。また失うのか。

黒瀬は走馬灯の様に、一年前にアフリカで死んだソフィアのことを思い出していた。あの時も何も出来なかったせいでソフィアは死んだ。

あの時から何も変わってない。結局また仲間を失って、同じ事を繰り返すのか。

「そん、な……………」と……………させない……………」

黒瀬の身体にはもう力が入らないはずだった。だが、気合いで動かない手足を立たせようとする。

もう誰も失いたくないから。誰も悲しんで欲しくないから。

みるみると身体に力が入るのを感じた。抑制剤の効果が切れたのか、それとも抑制剤の効果を上回るほど黒瀬のR―ウィルスが強力だったのか。それは分からないが、彼は確かに身体が元に戻るのを感じた。

隊員はまだ立ち上がるとうとする黒瀬に驚愕した。何十発もその身体に鉛玉を撃ち込み、動けるはずがない。しかし、目の前の光景は現実だ。再び黒瀬にライフルを向ける

も、それよりはやく黒瀬が動いた。

木刀を瞬時に抜き、一人の頭をトマトのように潰す。呆気に取られている隊員の腹に重く鋭い蹴りを放った。バキバキと相手の骨が折れる音がし、後ろの隊員を巻き込みながら壁へと吹き飛んだ。

そこからは簡単だった。

ただありつたけの力で彼らを捻り潰した。利用されているだけとか、彼らにも家族がいるとか、そんなのはもう関係ない。今まで死んでいった仲間のためにも手加減はしない。この力を制御し、大事な仲間を守る為に。

「井上……すまない、俺が力を失っていなければ……もっとはやく力を取り戻せれば……！」

敵を全滅させた後、黒瀬はすぐに井上に駆け寄った。静香はもう助けられないと首を振る。

「あやまること……ない……です……黒瀬さんは……やっぱり……ヒーローでした……！」

話す度に井上の声はか細くなっていく。

「俺は……ヒーローなんかじゃ、ない。また仲間を……助けられなかった……！」

今まで何人の仲間を失ってきただろう。何度同じことを繰り返してきただろう。そんな俺にヒーローを名乗る資格なんてない。

「俺が……自衛隊に入ったのは……黒瀬さんにあこがれた……からです。記事で見たように……自分の人生を……使ってまで……人のために闘うあなたに……」

「違うんだよ、井上……俺はそんな出来た人間じゃない……」

「良いんです……ヒーローは完璧じゃない……迷って……悩んで……それでも前へ進もうとするのが……ヒー、ろー……ですか、ら……」

ゆつくりと井上の目から光が消える。もう彼が言葉を発することはなかった。

95話 復讐

アユムたちは、衰弱しているアカリを休ませるためにホテルの最上階にあるスイートルームへと足を運んだ。

ここまで感染者が階段を上つて来る可能性は少ないだろう。他の部屋よりも比較的安全なはずだ。

スイートルームの壁は一面ガラス貼りになっており、そこからは様々な場所で火事が起こっている様子やこの事件を起こしたテロリストたちが立て籠っている神岡タワーが見えた。

アユムたちはアカリを救出出来た嬉しさもあつたが、場の雰囲気は暗い。ここまで一緒に行動を共にしてきた自衛官の井上が死んだからだ。

井上は、なぜか襲い掛かってきた自衛隊の特殊部隊にアユムとアカリが殺されそうになるのを庇って死んでしまった。

自衛官として国民を救う使命を全うした井上。自衛官として任務を優先し、子供を殺そうとした特殊部隊。何でこんなことになってしまったのか、彼らには分からないこと

だらけだ。

「これ、お兄ちゃんが作ったんだよね？」

キングサイズのベッドに座って、民家で作った料理を食べるアカリ。

「ああ、そうだよ」

「やっぱりお兄ちゃんは料理が上手だね」

「……お袋には敵わないけどな」

いつも豪華な料理を振る舞ってくれた母も、仕事で疲れているはずなのに子供のために遊んだり、旅行の計画を立ててくれた父も死んでしまった。この地獄を無事に抜けれたとしても、この先の二人の人生は辛いものになるだろう。

「これからはオレが飯を作るよ。お袋みたいにはいかないけど……それでもいいなら」「うん。……私たちを助けてくれた人、井上さんっていうんだよね？」

アカリの表情が曇る。

「ああ、でもオレ、井上さんのこと何も知らないんだ。会ったばっかだし、ゴタゴタしてあんまり話せてもないし」

実際、井上のことを詳しく知っている人間はここにはいない。とても誠実な人間で、黒瀬と小室のファンということくらいしか情報がない。どこで育ったのか、趣味はなんなのか、何も知らずに彼は逝ってしまった。

「なのに自分の命を犠牲にしてまで私たちを助けるなんて……」

「凄いな。オレだったら足がすくんで出来ないと思う。でも助けられたからには井上さんの分まで……いや、それだけじゃない。お袋と親父の分まで立派に生きなきゃな」

「これからの人生、一体どうなるのか誰にも分からない。分からないが、助けられたこの命、無駄には出来ない。」

（井上さん、あなたの分まで立派に生きます。そして、アカリを自分一人の力でも守れるように強くなります。だから、ゆっくりと休んでください）

アカムは心の中で静かに誓った。

時刻は午前二時。一休みした黒瀬たちはベッドで熟睡しているアカリを除き、集まっていた。

「リョウ、これから私たちはどうするの？」

クレアの問いに黒瀬が静かに答える。

「この事件を起こしたテロリスト、感染者保護団体を潰しに行く」

tーウィルスに感染した人たちは殺処分されることに怒りを示した彼らは、その実態を知らしめるためにこの事件を起こしたようだが、明らかに狂っている。ただ被害者を

増やすだけのこの行動に賛同する者など、黒瀬には何一つ理解出来なかった。それはこの場にいる者全員がそうだろう。

神岡テーマパークの中にある神岡タワーを根城にしている彼らを警察のS A Tが制圧するという話だったが、先ほど見たニュースでは現場に突入したS A Tは壊滅したとのことだった。

「S A Tが壊滅するくらいだ。B O Wを投入しているのは明らかだろう」

優秀な部隊だとしてもB O Wを相手にするには骨が折れる。B O Wのほとんどは死を恐れず、突っ込んでくる。柔軟な対応が必要な相手だが、実践経験がほとんどないような日本の警察や自衛隊では厳しい相手だろう。

「俺や小室が助けられる人数にも限りがある。だから、俺たちが先にテロリストを倒し、そこに割いている警察や自衛隊の人員を救助活動に回せば多くの人が助かるはずだ」

黒瀬の言っていることは正しかった。実際、警察や自衛隊よりも黒瀬と小室の方が『人』とも『B O W』とも戦闘慣れしている。それに感染が広範囲に広まっている今、現場の指揮系統から外されている二人は、警察や自衛隊を自由に動かせる権限はない。最初の避難所にいたような武岡二尉のように除け者にされてしまいうだろう。ならば、二人にできることは警察と自衛隊の救出活動の障害となつているテロリストを排除し、双方が円滑に活動できるようにサポートすることだけだ。

「私たちはどうすればいいの？」

「ここなら他よりは安全なはずだし、すぐ上は屋上だからヘリでの救助も期待出来る」

「そうかもしれないわね……でもリョウ、本当に大丈夫なの？」

クレアは心配そうに聞いた。

「ああ、大丈夫だ。もう俺は一人じゃない。だろ、小室？」

黒瀬は小室の方を振り向く。

「！　そうだ、黒瀬は一人で戦っているわけじゃない。いつもみんなの心は一緒だ」

小室は小つ恥ずかしい気もしたが、何故か懐かしさを感じた。黒瀬は元々、空気が読めない奴で恥ずかしいセリフを言ったり言わせたりする鈍感野郎だった。戦いが続いていく内に多くの仲間が死に、彼はいつからか笑わなくなってしまった。だが、それきつと今日までだ。

「はっず！　お前、よくそんな恥ずかしいセリフ言えるな」

「黒瀬が言わせただろ！」

小室は腕で黒瀬の首を絞め、じゃれ合う。二人の笑顔を見て、クレアと静香も微笑んでいた。

「オレはどうすればいいですか？」

アユムが二人に問う。

黒瀬は微笑み、アユムの頭を撫でた。

「お前が復讐を望んでるなら来い。でも、今はそうじゃないだろ？」

黒瀬は寝ているアカリを見つめる。アユムもコクリと頷いた。

「アカリのそばにいます。妹を守るのはオレの役目だから……」

兄として、そしてアカリのたった一人の家族として、アユムはこの事件を起こし、両親を死へと追いやったテロリストへの復讐よりも妹を守ることを選んだ。

「安心してくれ、アユム。この事件をさっさと終わらせて二人を巡ヶ丘まで送り届ける。約束だ」

アユムの肩を叩く小室。アユムは涙目になりながら頷く。

「クレア、静香先生、二人を頼む」

「ええ、任せて。何があっても二人は守るから」

「リヨウくんも孝くんも無理しちゃダメよ？」

三人に見送られながら、黒瀬と小室はホテルをあとにした。

神岡テーマパークに着くのは簡単だった。

ホテルで倒した特殊部隊の武器を使わせてもらい、小室はショットガンとハンドガンを装備していた。黒瀬は木刀とナイフを数本。

力を取り戻した黒瀬と武器を手にした小室の前では、感染者など敵ではない。瞬く間に倒し、気づけば目的地に到着していた。

物陰に隠れながら偵察をする。正面入り口前にはBOWであるハンター、ケルベロスが彷徨っている。そして、その近くにはSATの隊員たちが倒れていた。やはり、SATではBOWには敵わなかったらしい。それもそのはず。ハンターやケルベロスは古いBOWながらも素早い動きと耐久性でBSAAの隊員でも手こずるほどだ。対BOWの訓練を受けていないSATなら尚更だろう。

「どうする黒瀬。かなり多いぞ」

目視で数えられる敵の数は二十体。二人で戦うには少し厳しい数だが……

「もちろん正面突破するしかないだろ。BOWをほっとくわけにもいかないし」

「黒瀬ならそう言うと思ったよ」

二人の付き合いは高校の不良時代の時からなので随分と長い。何を考えているのかなどすぐに分かるだろう。

「覚悟は決まったか？」

「もちろん。僕と黒瀬の最強タッグなら敵はいない。……そうだろう？」

「高校の時の話持ち出すなよ、恥ずかしい」

黒瀬と小室は高校の時、学校や街ではそこそこ有名な不良だったのでそう呼ばれた時
もあつたが、あれはいま思うと……

「……黒歴史だな」

「ひでえ、黒瀬はそう思ってたのかよ」

「ああ、あの時の俺はお調子者で負けず嫌いのナルシスト不良だった」

「今もそうだろう！」

小室は黒瀬の頭をペシンとはたいた。

小室のツツコミの声に反応してBOWたちが振り返る。二人の存在に気付き、襲い掛
かってきた。

「お前のせいでバレただろう！」

「いや、今のは黒瀬のせいだ！」

がやがや言いながら、二人は戦闘態勢に入る。一番近い敵を散弾で吹き飛ばし、その
後ろも黒瀬が投げたナイフを喰らって倒れる。

「援護頼んだ、孝！」

黒瀬は小室を下の名前で呼び、木刀を抜いて敵の群れに突っ込む。それを聞いた小室
は微笑んだ。

「オーケー、リョウ！」

小室は笑顔でショットガンを構えた。

その頃、神岡タワーの展望台には今回のテロを起こした『感染者保護団体』のメンバーが集まっていた。

全国から集まったメンバーは百六人。ほとんどが日本人で構成されているが彼らが顔を合わせるのは今回が初めてだった。メンバーのほとんどは二十代で大学生も多い。元々、感染者保護団体とはインターネットの一般人でも書き込める掲示板から発足したものだ。抗議という抗議もネット上だけだったため警察からもマークされておらず、今回の犯行も淡々と進めることが出来た。

「リーダー、奴らが来ました」

メンバーの一人が椅子に座っているフードを被っている人物に向かって言った。

リーダーと呼ばれた人物は立ち上がり、笑みを浮かべる。

「待ちかねたよ。これでやっと……お姉ちゃんの仇を討てる」

リーダーはフードを取り、その姿があらわになる。褐色肌で金髪のセミロングの女性。歳は二十歳いくかいかないくらいだろう。明らかに日本人ではないが、他のメンバーたちが彼女をリーダーに指名したのは、彼女が今回のテロに使ったトウウイルスやBOW、そして銃器を調達し、作戦まで考えたからだ。メンバーのほとんどは高学歴であるが、そういったものを手に入れるコネはない。実際、メンバー全員に銃が支給されたが、実銃を見るのも持つのもこれが初めてだった。彼女がどうやってこれほどのものを手に入れたのか気になるが、それよりも自分たちが世界を揺るがすほどの事件を起こせたことに彼らは喜悦していた。

「このタワーに向かっているのはB S A Aの黒瀬リヨウ、小室孝だ！ 二人は1999年に起きたカントウ事件の頃から感染者を大量に殺害している。到底許されることではない。彼らには聞こえないのだ、感染者の苦しんでいる声が！」

メンバーは「許せない！」「なんて奴らだ！」と二人を批判する。

「二人はB S A Aの設立メンバーだ。その二人を倒せばB S A Aは大打撃を受け、感染者の被害は少なくなる。だからなんとしてでも二人を殺すのだ！」

『うおおおおおおお!!』

場は熱く盛り上がるも、リーダーである女は冷静だった。彼女には感染者の保護などどうでもよかった。彼女とこのグループの目的は別にある。ただこのグループが簡単

に使えそうな手駒になると思ったから利用したまでだった。

(はやくこい、黒瀬リヨウ！)

彼女は復讐のために鬼になることを選んだ。黒瀬を殺すために大勢の人間を犠牲にしたとしても。

9 6 話 妹

神岡タワーのエントランスでは激しい銃撃戦が行われていた。二人に対し、敵は五十人前後。マシンガンの弾の嵐が続き、黒瀬と小室は中々反撃出来ずにいる。二人が隠れている支柱もボロボロになり、いつまでも身を隠すわけにもいかない。

「くそ、ここまで敵が多いとは思ってなかった」

「俺もだ。でも、敵一人一人の練度は低いようだな」

黒瀬の言う通り、敵はほとんどが日本人で銃を使ったのも今日が初めてなのか、正確な射撃ではなく、ばら撒くように撃っていた。銃の反動を抑えきれないのも何人かいるし、リロードに手こずっているものもある。だからこそ、その弱点を補うためのこの数だろう。敵が素人だとしても、この銃弾の嵐の中を突っ込める人間などいない。

「ここは俺が突っ込んで気を引くしかないな……」

「いくらリヨウでもそれは無茶だ！ この人数だぞ!？」

確かに黒瀬なら弾を数発喰らう程度なら問題はないが、五十人が一斉に黒瀬に銃を向けたら、流石にひとたまりもないだろう。

「わかっているよ、孝。俺一人なら無茶だろうな、でもそうじゃない。お前がいるだろ？」

「僕に期待し過ぎだ」

「なんだよ、さつき言つてた最強タッグは嘘か？」

「……つたく、そう言われちゃ敵わないな」

「よし、行くぞー！」

銃弾の嵐の中、黒瀬は飛び出すと同時にナイフを二本投げて、見事に敵に命中させて倒す。敵は一齐に黒瀬に狙いを付けて撃ち始めた。

黒瀬は壁や柱を巧みに使つてアクロバティックな動きで銃弾を交わしていく。敵が黒瀬に釘付けになっている隙に小室はショットガンを放つ。

「撃てー 撃てええー！」 「味方がやられた！」 「こつちもやばいぞ」

二人の反撃によつて敵は混乱し、指揮は落ちていく。小室は手榴弾を投げ、その爆発で数人を吹き飛ばした。敵の動きが一瞬で止まる。黒瀬はその隙を見逃さず、木刀を抜いて敵の懐へと入り込んだ。

「うおらあー！」

俊敏な動きで瞬く間に敵を倒していく。戦闘経験のない彼らは黒瀬に近づかれた反撃も出来ずに倒れていった。

小室は混乱に乗じ、身を隠していた柱を飛び出してハンドガンを撃ちながら前進し別の支柱へと飛び込む。

「敵はたった二人なのに……い」

驚愕している男の顔を黒瀬は殴り飛ばした。

「経験が違うんだよ、経験が」

これまで幾度となく戦ってきた二人は幾度となくピンチになったが、その困難を乗り越える度に強くなっていった。数がどれだけいようが、素人に負ける二人ではない。これまでの経験のおかげでどんな状況でも柔軟に対応する事が出来る。

連携が乱れた敵は数分も掛からず黒瀬と小室によって倒され、エントランスの制圧は完了した。

「ふう……なんとかかったな」

「ああ、援護ありがとな」

黒瀬は小室の前に拳を突き出す。答えるようにして小室は拳を突き合わせた。

エレベーターは使えなくなっていたので、二人は非常階段を使って展望台へと進む。階段の途中にも敵はいたが、数人で黒瀬と小室を防げるはずもなく、すぐに展望台への扉の前へと着いた。

扉を開けると同時に手榴弾を投げ込む。爆発した瞬間、二人は中へ飛び込んだ。

怯んでいる敵を黒瀬は木刀で吹き飛ばし、背後を狙う敵を小室が撃つ。

やはり、戦闘経験のない一般人の集まりのようで、一度態勢を崩せばそのまま崩壊していくしかない。次々と倒していき、残りは二十人ほどになっていた。

(案外、あつけないな……)

黒瀬は敵を倒しながら疑問を持っていた。

これほどの事件を起こした輩だ。隠し兵器として強力なBOWを用意していると思っただが……どうやら杞憂だったようだ。

黒瀬が気を緩めた瞬間、彼の肩を弾丸が貫いた。

「なっ!?!」

咄嗟に真横に飛ぶが、相手はそれを予想していたかのように彼の太ももを撃ち抜いた。

「リョウウー!」

小室は黒瀬を撃った人物に狙いを定めるが、残りの敵が小室に集中して攻撃を始める。これでは援護出来ない。

「クソ! いるじゃねえか、プロが……!」

悪態をつきながら黒瀬は体勢を立て直して一旦支柱に身を隠そうとするも、正確な射撃が襲い掛かる。

一発、二発と避けるが、三発目が脇腹を貫く。

黒瀬は痛みに「ぐうっ！」と唸る。この程度のダメージは今まで何度も経験してきたが、痛みに慣れたわけじゃない。痛いもんは痛いし、弾丸を身体に三発も喰らえば泣き叫びたいくらいだ。

「やっつと、やっつと殺せる……！」

黒瀬を撃つた人物が銃を構えながら姿を現す。その人物は被っていたフードを取り、素顔を見せた。

「なっ……！」

その顔を見て、黒瀬は驚愕の表情を浮かべる。

その人物……彼女は、一年前の事件で死んだソフィア・ライオンにそっくりだった。

小室も敵と応戦しながらも彼女の顔を見て驚いていた。だが、確かに彼女はソフィアにそっくりだが、よく見るとところどころ細かい違いがある。

「誰だ、お前は!? ソフィアは確かに死んだはずだ！」

黒瀬はソフィアの最期を思い出す。胸の中で静かに死んでいった彼女の顔と消えていく温もりを黒瀬は忘れたくてもはつきりと覚えていた。

「そう。お姉ちゃんは死んだ。あなたが殺したのよ、黒瀬リョウ!!」

彼女は激昂しながら、黒瀬の胸を撃ち抜く。黒瀬は動揺して避けることが出来なかった。

「お姉ちゃん……？ ソフィアに妹がいたのか……」

血反吐を吐いてよろめきながらも黒瀬は立ち上がる。

「ええ、わたしの名はラファイネ・ラライン。あなたが殺したソフィア・ララインの妹よ！」

ソフィアに妹がいるという話は黒瀬も小室も聞いたことがなかった。しかし、褐色の肌と金髪のロングヘア、ソフィアそっくりの顔立ちは、妹と決定づけるには十分だった。「ラファイネ、お前は勘違いをしてる！ ソフィアを殺したのはリヨウじやない。敵だ！」

小室が支柱に身を隠しながら叫ぶ。残る敵はあと僅かだが、抵抗が激しく小室一人では時間が掛かってしまう。長期戦になる前に彼女の誤解を解かなければ。

「だとしても、こいつのせいでお姉ちゃんが死んだことには変わりはない！」

ラファイネは黒瀬の両腕を撃つ。またしても黒瀬は避けられなかった。いや、避ける気がなかった。

「リヨウ!?!」

小室もその違和感を感じとる。いつもの黒瀬なら、あの程度の攻撃なんていとも簡単

に避けれるはずなのに、彼はそれをしなかった。

「その通りだ。ソフィアが死んだのは……俺のせいだ。俺がソフィアをBSAAに誘わなければ……死ぬことはなかった」

ソフィアは元々、南米で情報屋を営んでいた。黒瀬と小室とはその時に出会い、彼女の腕を買った黒瀬がBSAAにスカウトした。そして一年前の事件で黒瀬はソフィアを守れず、彼女は還らぬ人となってしまった。

もし、黒瀬がソフィアをBSAAに誘わなければ彼女は死ぬことなく、今も元気に情報屋を営んでいるはずだ。

「お姉ちゃんは、わたしのたった一人の家族だった！ 幼いわたしのために危険な情報屋をやってまで育ててくれた。両親に捨てられたことを恨みもせず！」

ラフィーネは黒瀬の太ももを撃ち抜き、黒瀬に近づく。

「わたしはお姉ちゃんに危険なこととはしてほしくなかった、隣にいて、一緒に暮らすだけで充分だった！ BSAAとかバイオテロとかどうでもいい、世界がどうなってもお姉ちゃんといればそれだけで良かったの！」

怒りを露わにしながらも彼女は銃のトリガーを引き続ける。黒瀬の四肢は撃たれ、肺に穴は開き、全身はポロポロになっていた。

「リョウ、死ぬ気か!？」

一切抵抗しない黒瀬に小室は焦りを感じる。黒瀬の力ならば、あの場を簡単に納めることは出来るはず。そうしないのは、ラファイーネに命を差し出し、死ぬほどつもりなのだろう。

「この子には俺を殺す権利がある。俺のせいでソフィアは……いや、ソフィアだけじゃない。リカさんも田島さんリコさんも……俺が、俺が…………！」

黒瀬の目から生気が消える。黒瀬の肉体は人間を越えているが、精神は普通の人間、いや、それよりも繊細なのかもしれない。一年前の事件で自分の生い立ちを知り、多くの仲間を失い、信じていた者にも裏切られた。心の傷は深く、クレアや静香の励ましでもまだ立ち直れていなかった。

「それは……みんなで背負うって決めたろ！　ここでお前が死んだら、今まで死んでいった仲間たちはなんだったんだ!?　死んだ仲間の意思を踏み躪るつもりか！」

なんとかしてラファイーネを止めたい小室だが、残りの敵が邪魔をする。

「死ねえー！　黒瀬リヨウ！」

ラファイーネは黒瀬の胸を蹴り倒し、額に銃口を突き付けた。

「リヨウ!!」

小室は最後の一人を倒し、ハンドガンをラファイーネに向ける。黒瀬を殺させないためには急所を狙うしかない。が、彼の脳裏にソフィアの顔が浮かぶ。黒瀬の命とラファイー

ネの命。天秤に掛けられた二つの命の重さを定めることは一瞬では出来なかった。

ラフィーネが引き金に指を置く。これで復讐が終わる。

「ごめんな……………」

黒瀬の一言でラフィーネは引き金を引く寸前で指を止めた。

「今さら何を！」

「寂しかったよな……………辛かったよな……………あの時……………ソフィアを助けられなかった俺のせいで……………ずっと一人で……………」

「寂しいのも辛いのも今日で終わりだ！ あなたを殺せば全部終わるんだ！」

「俺はずっと……………罰を受けるのを待ってた……………何も、誰も救えない俺を、誰かが責めてくれないかって……………」

黒瀬の顔は涙でぐしゃぐしゃになり、声の上擦る。

「一人にさせて……………こんなことまでさせて……………すまなかった……………」

「なんだよ、それ……………」

ラフィーネは昔の、ソフィアが生きていた頃の記憶を思い出す。

仕事から帰ってきた姉が楽しそうに話す、バカでアホで仲間想いの男の話。自分よりも他人を優先し、誰よりも人の気持ちがかかる自己犠牲の塊のようなやつを。

『お姉ちゃん、もしかしてその黒瀬リョウって人のこと……………好きなの？』

『はああつ!? そんなわけないでしょ! あんなバカを好きになる奴なんていないよ! いたしたらそいつもバカだね。バカはバカのこと好きになるからね、ちなみにアタシはバカじゃない』

『ええ、否定しすぎてなんか怪しいなあ……』

『じゃ、じゃあそんなに言うならラフィーネはアタシに彼氏が出来てもいいの!?』

『その人がお姉ちゃんを幸せにしてくれるなら大歓迎だよ!』

『だ、か、ら! リヨウじゃなーい!』

顔が真っ赤になっっているソフィアをからかうラフィーネ。そんな他愛もない話をラフィーネは思い出していた。

「……なんか、もういいや」

ラフィーネは黒瀬に突き付けていた銃を彼の身体から離す。

「……ラフィーネ?」

「あなたを殺してもお姉ちゃんが帰ってくるわけじゃないし、もつと虚しくなりそうな気がしたから、殺すのは辞めておく」

ラフィーネにどんな心境の変化があつたのか黒瀬と小室には分からないが、小室はひとまず安心して銃を下ろした。

「ねえ、一つだけ教えて。あなたはお姉ちゃんのこと好きだったの?」

「当たり前だろ……大事な仲間なんだから」

それを聞いてラファイネは吹き出して笑う。

「聞いてた通り、本当に女たらしなのね」

これまでとは一転、怒りに満ちていた彼女が浮かべる笑顔は、年相応のあどけなさが残っていた。

「大丈夫か、リョウ」

倒れている黒瀬に小室が駆け寄る。

「まあ、なんとか……」

全身を撃たれながらも、その傷は徐々に回復していた。あと三十分もしない内に傷は完全に塞がるだろう。

「わたしは自首する。こんな事件を、利用されてると分かっているにもかかわらず起こしてしまった責任がある」

「利用……?」

「ええ、トールウイルスやBOWの用意、そして今回の事件の作戦を立てたのはわたしじゃない。あなたたちの本当の敵は——」

次の瞬間、室内に一発の銃声が鳴り響く。ラファイネは膝を着き、胸から血を流していた。

「ラフイーネっ!!」

9 7 話 再起

「ラファイーネ!!」

胸を撃たれ、膝から崩れるラファイーネを黒瀬は咄嗟に抱き抱える。

彼女を撃つたのは、謎の黒スーツの男。外観的には日本人であるようだが、四、五十メートル離れている距離からラファイーネの胸を撃ち抜ける人物だ。先程まで戦っていたテログループとは違い、訓練を受けているのは明白だ。

戦いには参戦せずに今まで身を隠していたようだが、奴の目的は黒瀬と小室ではなく、ラファイーネが二人を殺し損ねた場合の口封じと考えられる。

黒服の男は銃を胸にしまい、非常口の方へ走り出した。

「リョウ！ ラファイーネを頼む！」

小室はハンドガンを抜き、男の逃げた方へ走り出す。万全の黒瀬に任せたら一瞬で追い付けるだろうが、今の彼は重傷だ。顔や声にはそれほど出さないが、意識を保っているのもやつとだろう。

(絶対に逃さない！)

もし、あの男がラファイーネやテログループを操っていた黒幕だとしたら逃すわけには

いかない。

展望台には黒瀬とラファイーネだけが取り残され、先程まで銃声が飛び交っていたとは思えないほど静かな空間が広がる。

「ラファイーネ、大丈夫だ……絶対に助かるから……」

黒瀬は布でラファイーネの傷口を抑えるも、溢れ出る血液は止まらない。

もう少し早く黒服の男に気付けたのならば、彼女を救えたはずだ。そう黒瀬は後悔するが、もう遅い。ラファイーネの命の終わりの時は刻一刻と近づいていた。

「自分を責めないで……これはわたしへの罰だから……」

ラファイーネは吐血するも、黒瀬の頬に触れる。

「復讐なんて意味ないって……気付いていたはずなのに……わたしのせいで多くの人が死んだ……」

「お前は利用されただけなんだろう？ ……ラファイーネが悪いんじゃない」

黒瀬は頬に触れているラファイーネの手を掴む。

「お姉ちゃんが死んで……何もかもどうでもよく考えてるときに……『そいつら』は現れた。わたしに武器やテーウィルス、BOWを渡してこの街でテロを起こすように言わ

れたの。……見返りにお姉ちゃんをB S A Aに誘い、最期の時も一緒にいた黒瀬リヨウを連れてくるって……」

「まさか……、そいつら、って……」

黒瀬にはだいたいの想像がついた。この街に黒瀬と小室を呼び出したのは、B S A Aのスポンサーである製薬企業連盟のランダル・コーポレーションと、日本政府。自衛隊の特殊部隊が襲いかかって来たのも、その二つが黒幕なら納得できる。

「国があなたを殺すためなら街一つを崩壊させるほどよ……気を付けて……」

「……ああ」

この話が事実だとしても政府やランダルは関与を否定するだろう。黒瀬たちと戦った特殊部隊の隊員たちも既に戸籍は消され、最初からいなかったことになっているはずだ。

「彼らにも悪いことをした……ゴホッゴホッ！」

ラフィーネは倒れているテロリストたちを見ながらさらに吐血する。もう長くは持たない。

「ラフィーネ！」

「わたしが利用されなければ……彼らもこんなことする必要はなかった……」

「もういい、喋るな……」

黒瀬の瞳から涙が零れ落ちる。

「ふふっ……会ったばかりなのに泣くなんて……」

「当たり前だろ……大切な仲間の妹なんだから……」

「何でお姉ちゃんがあなただを好きになったのか……今なら分かる気がする」

ラフィーネの目がどんどん虚になっていく。手首の脈動も止まり掛けていた。

「死ぬな！ ラフィーネ！」

「大丈夫……やつと……お姉ちゃんのところへ……いける——」

そう言つて、ラフィーネの鼓動は止まり、目から光が消える。

「ラフィーネ…………！」

動かなくなった彼女の頬に涙がポツリと落ちた。

「待て!!」

小室は逃げる男を追い掛ける。だが、相手はなかなかの逃げ足だ。このままだと追いつけず、どこかで撒かれてしまうかもしれない。

銃を構え、しっかりと狙いを定めて撃つ。男のふくらはぎを弾丸が貫き、逃げてる時

と同じ勢いで転倒した。

「ぐっ！」

男は右腕で懐から銃を取り出そうとするも、小室は躊躇なく腕を撃つ。

「ぐああ!!」

痛みで苦しむ男の胸を小室は踏み付け、銃口を頭に向けた。

「お前は何者だ! なぜラファイーネを撃つた? 答える!!」

小室はすぐにでも男の頭を吹き飛ばしたいほど血が上っていたが、この男の目的や正体を聞く前に殺すわけにはいかない。

ソフィアとは小室も長い付き合いだった。その妹であるラファイーネを殺した男を丁重に扱えるほど小室は優しくはない。

追い詰められた男は、くくつ、と不敵な笑みで笑う。

「何がおかしい!」

小室は胸を踏み付けている足にさらに体重を掛ける。

男は「ぐわあっ!」と苦しむもその笑みは崩さない。

「すべては……アンブレラ、様のために……」

そう言つて口内に隠し持っていた青酸カリの袋を噛みちぎり、飲み込んだ。

「いっつ!!」

男は少し苦しんだ後に口からぶくぶくと泡を出して動かなくなる。

「くそっ！」

小室はやりきれない思いをぶつけるように拳を壁に叩きつけた。

男が最期に言った『「アンブレラ、様」という言葉。男はアンブレラの関係者であったことは確かなのだろう。だが、小室は違和感を感じていた。アンブレラ様。それが組織や企業を指して言ったのではなく、まるで人物を指しているかのような――。』

その後、朝になり明るくなると、本格的な救助活動が始まった。

ホテルに籠城していた静香やクレア、アユムと妹のアカリは、自衛隊によって救助され、神岡市郊外にある避難所兼救助活動作戦本部に運ばれていた。黒瀬と小室も、テマパークに突入してきた自衛隊の対テロ部隊に状況を説明し、彼らのへりに乗せられて避難所に辿り着いた。

自衛隊と警察だけだと救助活動に時間が掛かると懸念した日本政府は、BSAAに本格的に救助要請をし、BSAAの極東支部は大量の部隊を派遣することになった。あと1、2時間ほどでBSAAの部隊は到着して、まだ取り残されている者の救助活動、そして感染者の排除が始まるだろう。

それまでは黒瀬と小室も避難所に待機となった。

「馬鹿げてるよな。僕たちは政府の自作自演の事件に付き合わされるなんて」

「まあな。今さらBSAAの部隊を派遣するように要請したのも、俺らを殺せなかったからだろうし」

黒瀬は小室だけにこの事件の黒幕のことを話しておいた。

あれから特殊部隊の刺客はなく、政府は二人の暗殺を諦めたと見るのが妥当だろう。

「なあ、このことみんなには……」

「黙っておこう。余計なことを考えさせなくていい」

「……そうだよな」

この事件の被害者であるアムやアカリに、『本当は日本政府とランダルの自作自演です』と伝えたところで、彼らは政府へ反感を募らせ、この日本で生きにくくするだけだ。

「多分、既に全部の証拠はもう消えてるはずだ。俺らが何を言おうが、知らん顔を決め込んでくるに違いない」

「ランダルも胡散臭くなってきたしな。BOWやトーウィルスを用意したのもそいつらかもしれないなんて……」

「製薬企業は悪いことしなくちゃいけない決まりでもあんのかね？」

アンブレラに始まり、ウィルフアーマ社やトライセル社、その次はランダル。この世界の製薬企業は狂っている。

「二応、上に掛け合ってランダルを調査させるが……何も出ないだろうな」

黒瀬はあ、とため息をついた。

今回の事件だが、根本的なことは何も分かっていない。表向きには、テロリストが起こした事件として処理されるだろうが、政府やランダルの‘本当’の目的、そして黒瀬たちに接触を図ってきた彩たちの存在も気掛かりだ。黒瀬を殺すだけならば、これほど大きな事件を起こさなくてもいいし、彩にされたRーウィルスの抑制という‘実験’、というのも、わざわざ黒瀬に試さなくてもいいはずだ。

それに、強化型Rーウィルスを投与しているステイブとフリユムは一年前に戦った時とは比べ物にならないほど強かった。スナイパーの男と、目にも止まらぬ速さで走る男も、あの時以上に強くなっているとしたら、黒瀬だけでは敵わないだろう。

(クソ……考えなきやいけないことがたくさんある……)

眉を顰める黒瀬の肩を小室は叩く。

「また一人で考え事してるだろ。僕たちにも背負わせてくれよ」

「……そうだったな。すまない」

黒瀬の体から力がすつと抜ける。今も昔も、頼れる仲間が大勢いる。それにちゃんと

気付けただけでもこの事件から得たものがあつたと言えるだろう。

そうこう話している内に、検査を終えたアユムが二人の前に現れた。

「アカリちゃんは大丈夫だったか？」

「はい、今は寝てますけど特に怪我もなく、感染もしてませんでした」

そう言うアユムの顔色はすぐれない。無事に避難できて安心もしているだろうが、彼
は両親を亡くしたばかりだ。これから先、将来のことが心配なのだろう。

「アユム、これを」

小室はポケットから紙切れを出してアユムに渡す。

その紙には高城沙耶の父である高城壮一郎の名前と、巡ヶ丘市にある家の住所、電話
番号が書いてあつた。

「これは……？」

アユムはポカンとした顔で紙を見つめる。

「これから色々大変だろうけど、この人たちを頼つてくれ。色々とサポートしてくれる
はずだから」

小室は高城沙耶と電話で話し、事件の被害者であり、両親を亡くしたアユムとアカリ
のために何か出来ることはないかと相談した結果がこれだった。

何の因果か、アユムとアカリの家も巡ヶ丘市にあり、高城家が直接支援してくれると

いう。

「しばらくはこの人たちの家で暮らすといい。二人でいるよりは安心して暮らさるだろう」

「まあ、俺たちの家でもあるんだがな。見たら驚くぞ。漫画みたいなのでつかい屋敷と庭だからな。金持ちだから何でもワガママ言っていていいぞ。俺らなんてその人の金で大学通ってたもんな」

「僕らの場合はワガママ言い過ぎてた気もするけどな……」

昔を懐かしむ二人にアユムは頭を下げた。

「本当に……ありがとうございます。オレ、これからのことが心配で心配で……。オレはどうでもいいけど、アカリだけはちゃんと高校まで通わせてやりたいなって……」

「いいんだよ、人助けは俺たちの仕事だから。落ち着いたら、ちゃんと高校行って卒業するんだぞ。お前はなんも気負わなくていい」

アユムはこくりと頷いて、覚悟を決めた顔で言った。

「オレも……オレも黒瀬さんや小室さん……井上さんみたいに誰かを助けられるような……ヒーローになりたいです」

「……そっか」

黒瀬と小室は微笑む。きつと彼の人生はこれから苦難の連続だろうが、この真っ直ぐな瞳と性格でどんな壁でも乗り越えられる確信があった。

BSAAのマークがついたヘリの編隊が神岡市へ向かっていく。

「あれは……?」

「俺たちの仲間だ」

BSAAの部隊が来たからには、この事件はすぐに終局に向かうだろう。

編隊から一機のヘリが離れ、黒瀬たちに近づいてくる。その中に乗っている人たちに黒瀬はすぐに気付いた。

「なあ、孝。俺はこれからもう、あんな状態'になることがたくさんあると思う」
「……そうかもな」

この仕事をしている限り、多くの仲間の死を見ていくことになるだろう。それが平気な人間なんていない。

「でも分かったんだ。俺を支えてくれている人たちのことを。俺は一人じゃないって」
「……みんなこの一年、ずっと心配してた。言わなきゃいけないことがあるだろう?」

ヘリが着陸すると同時に、中から男一人と女三人が飛び出るように出て来る。そして黒瀬たちの方へ駆け寄って来る。彼らの顔は涙ぐんでいるように見えた。

黒瀬にとって、大事な仲間であり、カントウ事件の時から苦楽をともにしてきた四人だった。

「ごめん……いや、違うか……」

彼らがほしいのは謝罪なんかじゃないはずだ。親友たちに向ける言葉はただ一つ。

「ありがとう」

すつと、自然な笑顔で黒瀬はそう言った。

13章

98話 イドニア共和国 前編

2012年。増加傾向にあったウイルスやBOWを用いたテロはさらに悪化の一途を辿り、世界はバイオテロによる恐怖と戦火で包まれていた。

新型のウイルスや強力なBOWの登場により、バイオテロ専門の国連組織BSAAも悪戦苦闘していたが、バイオテロ被害者や正義感の強い人物たちがBSAAに参加し、組織は巨大なものになっていた。

そして、今回もBSAAの大部隊による作戦が行われている。

場所は東欧イドニア共和国。政府軍と反政府軍で内戦が起こっている国だ。BSAAには内戦が起こっている理由など関係ない。この戦いに介入する理由は一つ。反政府軍が、新型のウイルスとBOWを使用しているという情報を得たからだ。

BSAAは即時に部隊を展開し、事態の鎮圧に動こうとしていた。

「うう、なんて寒さだ」

BSAAの隊員である黒瀬リヨウは、ヘリから降りると同時にあまりの寒さに口にした。

雪が降りしきるこの国の気温は0度を下回る。日本育ちの黒瀬には堪える寒さだが、カムチャツカ半島で寒中水泳した時と比べると幾分かマシだ。

「こんな日も戦わなきゃいけないとはな……」

今日の日付は12月24日。世間はクリスマスマスで浮ついているだろう。そんな大切な人と過ごす日でさえもBSAAには関係ない。悪いのは全てウイルスを悪用する者たちだ。もつとも、恋人のいない黒瀬にはどうでもいい日だが。

ヘリの中で聞いた説明によると、反政府軍は『ジュアヴォ』というBOWを使用して、変異も確認されている。この街にいるほとんどのゲリラや傭兵はジュアヴォに姿を変え、BSAAに猛威を奮っている。

街のあちこちで銃声や爆発音が聞こえる。既に作戦は開始しているようだ。黒瀬が今いる作戦本部も慌ただしく、黒瀬を相手にしている暇はないだろう。

ともかく、BSAAの目的はBOWの鎮圧だ。部隊を持たない黒瀬に出来ることはただひたすらに敵を倒すだけ。今戦っている部隊を援護しながら、なるべく広範囲で戦う方が被害も抑えられるはずだ。

話によれば、北米支部からクリス・レッドフィールドが率いる部隊も作戦に参加して

いるらしい。戦っていればそのうち会うこともあるだろう。

今はとにかく目に映る敵を倒していく他ない。

黒瀬は銃声の聞こえる方に走り出した。

「遅かったか……」

黒瀬が辿り着いた時には既にこの場で戦っているBSAA隊員は全員が倒れていた。

『ジュアヴォ』と思われるしき人間が、動かない隊員たちを殴りつけ、叩きつけ、ナイフで滅多刺しにしている。その光景を見て、黒瀬に怒りが湧いて来る。

「やめろ!!」

黒瀬は一番近くにいるジュアヴォの顔面を殴りつけた。

ほぼ全力で殴ったはずだが、ジュアヴォは平気で立ち上がる。

遠目で見たらほぼ人間だが、ジュアヴォの顔には複眼のようなものが表れていた。

(銃を扱えるほどの知能と凶暴性を併せ持ったBOW。これは手強いな……)

黒瀬は怒りに吞まれることなく、冷静に敵の特性を判断する。

周りのジュアヴォたちが黒瀬に気付き、一斉に銃を向けた。

「やべっ!」

黒瀬は近くの土嚢に飛び込んで銃撃を回避するも、状況は悪い。敵に囲まれ、援軍も

見込めない。

しかし、こんな状況に陥ることなんて黒瀬にとって日常茶飯事だ。

黒瀬は土囊から飛び出ると同時にダガーナイフを投擲する。ジュアヴォは少し苦しむも、刺さったナイフを引き抜いて放り捨てた。傷跡から煙を吹き出しながら再生している。

だが、中には腕を押さえつけ、苦しんでいる者もいた。みるみると腕の形が変化し、鎌のように変異したり、上半身を被えるような盾のような形に変異している。

「マジかよ……！」

黒瀬の驚きを畳み掛けるようにジュアヴォはこことぞなく、その力を見せつけた。

凶暴性と再生能力、そして体が武器のように変異する力。B S A Aが苦戦するのも納得だった。

一斉に襲いかかるジュアヴォたち。黒瀬は走りながらダガーナイフを投げるもすぐに底をつきた。なんせ、生物の弱点であるはずの心臓や頭に刺さろうとも傷が再生するからだ。

近くに身を隠す場所がなく、仕方なく黒瀬は腰の日本刀を抜いた。ジュアヴォの銃撃を刀でいなしながら、回転切りで首を両断する。流星のジュアヴォも再生することなく、塵となって消滅した。

仲間が死んでも怯むことなく、敵は襲い掛かってくる。黒瀬の俊敏な動きに弾丸は一発も当たらず、ジュアヴォたちの弾倉は空になった。ジュアヴォはリロードしている暇はないと判断したのか、ナイフやスタンバトンを抜いて黒瀬に向かってくる。

近接戦を仕掛けて来るなら、それは黒瀬にとって好都合だ。

鎌のような腕を振り回すジュアヴォの身体を切り伏せる。そして瞬く間に後ろの三人の頭を斬った。

バタバタと敵を倒す黒瀬の背後をジュアヴォはスナイパーライフルで狙う。だが、撃つよりもはやく黒瀬は殺気に気付き、手に持っている刀をぶん投げた。口を貫通し、後ろの壁に突き刺さる。

武器を手放した黒瀬に、ジュアヴォがナイフで切り付けようとする。黒瀬はその腕を掴み、鼻先に肘でカウンターを入れた。怯んだ敵に全力の右ストレートを喰らわせ、吹き飛ばす。そして最後に残った敵に右フック、左フックと、胸と脇腹を殴りつけて顎に回し蹴りを喰らわせた。

あらかたの敵は片付き、黒瀬は壁に刺さっている刀を引き抜いて血振りをして鞘に納めた。

倒れている隊員は全員既に息はなかった。

黒瀬はやりきれない気持ちになった。

今までこんなことは何回もあつた。仲間の死を見る度に、何度B S A Aを辞めようとしたことか。

だが、結果として黒瀬はB S A Aを辞めることはなかつた。

二年前、黒瀬は仲間の死を見るのが嫌で、意図的に仲間を避けていた時があつた。仲間である小室やクレアたちによる励ましで立ち直ることが出来たが、それがなければ今頃どうなっていたのか想像もつかない。

——お前たちの分も俺が戦う。

黒瀬は倒れている仲間に誓い、次の戦場へと走り出した。

何体の敵を倒しただろうか。いくら倒してもキリがないと思えるほど、ジュアヴォは次々に襲いかかつて来る。

それほど反政府軍の規模が大きかつたのだろう。彼らがどんな信念を持つて政府を打倒しようとしていたのか今になつては分からないが、B S A Aにとつては迷惑な話だ。B O Wさえ使わなければ、B S A Aはこの戦いに介入することはなかつたのに。

そう思つてももう始まつてしまったものは仕方ない。黒瀬は余計なことを考えないように街中を駆ける。

そして、巨大な人型BOWに坊主の男と金髪の女が追い掛けている様子が黒瀬の目に写った。

二人はB S A Aには見えなかったが、ジュアヴォにも見えない。それに女の方に黒瀬は見覚えがあった。

まさかと思ひ、後を追った。

倉庫のような場所に辿り着き、二人を見かけて思わず声をかけた。

「シエリー！」

黒瀬の声に反応し、声をかけられた女性は驚いた顔で駆け寄ってきた。

「リョウウ!？」

突然の再会に黒瀬とシエリーはハグをした。

彼女の名はシエリー・バーキン。黒瀬と同じラクーン事件の生き残りであり、事件後はアメリカ政府に軟禁されている状態だった。

「どうしてシエリーがここに？」

「えっと……任務で彼を保護しに来たの。彼はジェイク。保護した理由は言えないんだけど……」

シエリーはバツの悪そうな顔で言った。

「そうか……エージェントになったとは聞いていたが……」

黒瀬とシエリーは最近会ってはいなかったが、彼女とよく会うクレアからその話を聞いていた。クレアはラクーン事件の後、度々シエリーに会いに行っており、シエリーにとってクレアは姉のような存在だろう。

「おい、いいのか？ B S A Aとは関わらない方がいいんだろ？」

ジェイク、と紹介された男が言った。彼の上着の肩にはこの国の反政府軍のマークが着けられているのを見ると、彼も傭兵のようだが、ジュアヴォには変異していない。

「彼は別よ。私の兄のような存在なの」

「あ、兄っ!？」

黒瀬はシエリーの言葉に感動を覚える。昔はクレアに付き合わされてよくシエリーの遊び相手になっていたが、まさかそう思われているとは。

「このアジア人が？」

ジェイクは黒瀬を睨み付ける。どうやら黒瀬を気に入らないようだ。

「ところで、さつきB O Wに追われてたろ？ あいつはなんなんだ？」

「それが——」

シエリーが答えようとしたその時、天井を突き破って先ほどのB O Wが現れた。

「チツ、しつこい野郎だぜ！」

ジェイクとシエリーはハンドガンを構え、黒瀬は刀を抜いた。

ジエイクは黒瀬の刀を見て鼻で笑う。

「まさか、ジャパニーズサムライってやつか？」

「まあな。これが俺の戦闘スタイルだ」

「BSAAってのはおもしろ集団みたいだな」

「二人とも、おしゃべりはそこまで！ 来るわよ！」

BOWはタツクルで仕掛けてきた。三人は左右に避ける。

巨大な人型BOW——ウスタナクは、タイラントと同じくらいの身長だが、筋肉は肥大しており、右手には相手を拘束することの出来るアームを付けていた。奴の攻撃を喰らえばひとたまりもない。

二人がハンドガンを撃つも、ウスタナクにはまるで効いていない。黒瀬は背後に回り込んで背中を斬りつけるも、薄皮一つ剥けた程度だった。

ウスタナクは左腕を振り回して黒瀬を吹き飛ばす。黒瀬は壁に叩きつけられ、肺の中の空気を吐き出すようにして倒れた。

——油断した。

あの巨体だが、動きは中々に素早い。黒瀬は立ち上がり、刀を納める。あの皮膚には刃物や銃弾も効きにくい。それならやることは一つだ。

シエリーがガソリンの入ったドラム缶を撃ち、爆発が起こる。流石のウスタナクも少

しは怯み、黒瀬はその瞬間を見逃さなかった。

黒瀬は突進する勢いで膝蹴りと右ストレートを繰り出す。後ろによるめいたウスタナクにジェイクが掌底を喰らわせた。

「サムライスタイルはもうおしまいか？」

「サムライも臨機応変に対応しなきゃいけないんでな」

ウスタナクに黒瀬とジェイクのラツシユが襲い掛かる。黒瀬のパワーと、ジェイクの格闘術によるコンビネーションにウスタナクはなすすべがない。

「お前、なかなかやるな。ところで、どこかであつた？」

黒瀬はジェイクと初めて会った気はしなかった。こんな男、会っていたらしつかり覚えていたはずだが――。

「アジア人は見分けつかねえよ」

ジェイクは煽るも、当の本人は全く気にしていなかった。

仲が良いのか悪いのか、それとも同じような戦闘スタイルの二人だからか。息びつたり、同時にウスタナクにタツクルを喰らわせる。

後ろによるめいたウスタナクは柱に激突し、それによつて柱が崩壊する。崩壊した柱が床に落ち、足場が崩れ去った。

黒瀬は間一髪で避けたが、シエリーとジェイクは崩落に巻き込まれる。

「おい、二人とも大丈夫か!？」

黒瀬は穴を覗き込む。

「ええ、無事よ！」

かなり下まで落ちたジェイクとシエリーだったが、たいした怪我はないようだった。

「こつちから進めるみたい。心配しないで！」

シエリーが無事で一安心した黒瀬。ふと、先ほどまでウスタナクが膝をついていた所を見ると、既に姿は消えていた。

目的はジェイクのようであつたが、倒すまでには至らなくてもかなりのダメージは負わせただろう。しばらくは襲つてこないはずだ。

「市庁舎へ向かうんだ！ クリスがそこにいるはずだ。俺も後で向かう！」

クリスの率いるアルファチームは、市庁舎の制圧と調査を指示されている。彼になら二人を任せても安心出来る。

「クリスが？ オーケイ、そこへ向かうわ」

そう言つてシエリーとジェイクは走り出した。

黒瀬も倉庫から出て、市庁舎に向かい出す。

99話 イドニア共和国 後編

黒瀬はジュアヴォを倒しながら市庁舎へと向かう。

しかし、道中では敵の戦車が待ち構えていた。すぐに身を隠し、様子を窺う。

「クソ、これじゃ先に進めないな」

戦車の周りには、ジュアヴォが複数おり、銃を持っている者、手足が変異している者と、かなりの護衛がついていた。

周りの敵ならまだしも、黒瀬の武器では戦車相手にどうすることも出来ない。強いて言えば、二つ手榴弾があるが、こんな物じゃ大したダメージにもならないだろう。

どうにか手はないか。無視して別の道から進む方法もあるが、敵の兵器を放っておくとBSAAに更なる被害を及ぼす可能性もある。

黒瀬は「はあ…」とため息をつき、覚悟を決める。

多少の無理や無茶なら今まで何度もやってきた。戦車との戦いは初めてだが、これまで戦ってきたBOWよりかは楽な相手のはずだ。

「やるしかないか………」

黒瀬は手榴弾を一つ投げ、爆発と同時に飛び出す。黒瀬に気付いたジュアヴォたちが

一斉に銃を向けた。

「うおおおおお!!」

雄叫びと共に刀でジュアヴォの銃弾を弾きながら進んでいくも、全ての弾を防げるわけではない。

直撃こそはしないものの、黒瀬の腕や肩、太ももに擦り傷が増えていく。

敵戦車も黒瀬に気付き、砲身を向ける。

(流石にあれは無理だ!)

黒瀬は横に跳ねるように飛んだ。直後、轟音と爆風が襲う。黒瀬が先程まで立っていた地面は戦車から放たれた榴弾で抉れていた。もし避けていなかったら木っ端微塵になっていただろう。

すぐに立ち上がろうとするも、足に激痛が走る。先ほどの爆発で大きな破片が脛に刺さっていた。

「っ痛……!」

痛みを我慢しながら破片を抜き取ると、血がどくどくと溢れ出てくる。破片は骨にまで達していたようで、傷から下は動かそうとしてもぴくりとも動かない。

黒瀬が動けないと気付いた変異ジュアヴォが近づいて来る。そのジュアヴォの腕は長い触手のように変異しており、黒瀬にその腕を伸ばした。

顔を掴まれた黒瀬は宙高く飛ばされ、そのまま地面にたたきつけられる。

「ぐうっ！」

頭から流血し、視界が眩む。その隙にまたもやジュアヴオは触手で黒瀬の脚を掴んだ。

「そう何回もいくか！」

黒瀬は腰の短刀を抜き、触手を切った。そしてジュアヴオの頭に短刀を投げて倒す。

よろめきながら刀を構えて立ち上がる。足の傷はまだ再生仕切っていないが、それでも戦えないわけじゃない。

片足を引きずりながら前へと進む。ジュアヴオは手加減などするはずもなく、目一杯の弾丸を黒瀬に撃ち込んだ。それでも黒瀬を倒せず、彼の間合いに入ったジュアヴオは斬り裂かれていく。

再び戦車の砲身が黒瀬に向けられた。周りにはジュアヴオもいるが、奴らには味方意識などないだろう。すぐに砲弾を撃ち込んでくるはずだ。

黒瀬は近くのジュアヴオを砲身に向けて投げ付ける。その瞬間、砲弾が放たれて黒瀬の投げたジュアヴオに命中し、爆散した。

（あんな死に方はしたくねえな……）

自分でやったことにドン引きながらも、周りのジュアヴオを全滅させて戦車に向かっ

て走り出す。足の傷は走れるほどには回復をしていた。

次の弾が装填される前に戦車に張り付き、そのままよじ登る。そして戦車のハッチを開けて中に手榴弾を放り投げた。

戦車の操縦席で爆発が起き、車体が一瞬ぐらりと揺れて、戦車は動かなくなった。

「ジュアヴォ……かなり厄介だな」

黒瀬は戦車の上に座り込み、傷が完全に癒えるのを待つ。

高い耐久力や変異能力を持った敵は今までもいたが、その上再生能力があったり、なんといつても変異のレパートリーが多い。これが一体、二体ならまだしも集団で、しかも兵器まで使ってくる。今まで戦ってきたガナードやマジニよりも手強い相手だ。

年々作られるウィルスやBOWは進化している。マルハワ学園では人をゾンビにさせるガスを放つBOWや、ザインという孤島で使われた一定以上の恐怖を感じると化け物に変異するt-Phobos。

どちらとも強力なウィルスで、マルハワ学園の事件ではBSSAAの極東支部のエアースであるメラ・ビジが死亡し、学園の関係者も全て亡くなった。ザインで行われたアレックス・ウエスカーによる実験では、島民は全員死亡し、実験のために連れ去られたテラセイブのメンバーもクレアと静香、モイラとありす、ナタリアを除き、亡くなった。その後行われたBSSAAによる殲滅作戦にも多大な被害が出たと聞いている。

黒瀬を含め、BSAAの全員が世界のために戦っているが、それでもよくなる気配はない。それどころか酷くなっている。

(今こんなこと考えても仕方ないか……)

黒瀬が今こうして休んでいる間にも、多くの仲間が傷付き、倒れている。とにかく傷が癒えた今、彼に出来ることはただひたすら戦うことだった。

「おいおい、またやべーのが来たな……」

ジュアヴォを掃討しながら市庁舎を目指す黒瀬の前に、巨大な人型BOWが現れた。十メートルほどの巨体に、口は爛れ、背中からは心臓のようなものが露出している。その巨大なBOW——オグロマンは、近くにあつた車を軽く持ち上げ、黒瀬に投げ付けた。

「うおっ!?!」

黒瀬は間一髪で避けた。オグロマンは足下にいるジュアヴォを気にもせず、踏み潰しながら黒瀬に向かってくる。

あの巨体だからか走ることは出来ないようだが、その一步はとても大きく、一步步くたびに地面が震える。黒瀬は昔アフリカで戦った巨大BOW、ンデスのことを思い出し

ていた。しかし、奴とはサイズが違い過ぎる。黒瀬の持つている武器では太刀打ち出来そうにない。

建物からもジュアヴォオが顔を出し、スナイパーライフルで黒瀬を狙う。また、設置されたターレットを使い襲いかかって来た。

「クソッ！」

黒瀬は物陰に身を隠そうとするも、その先にもジュアヴォオの大群が。銃弾の嵐を掻い潜りながら建物の中に飛び込もうとするも、オグロマンがバスを投げ飛ばし、入り口を塞ぐ。

狙ってはいないだろうが、こちらとしては最悪の連携だ。

ジュアヴォオとオグロマンに囲まれ、袋の鼠。黒瀬は後退りしながら刀を構えた。

ジュアヴォオが一齐に銃を構え、黒瀬を撃ち抜こうとしたその時——

「撃てえ!!」

男の掛け声とともに、複数の銃声が響き、ジュアヴォオの大群を打ちのめしていく。

BSAAの隊員たちが展開し、黒瀬の周りのジュアヴォオを倒した。

「リヨウ、こっちだ！」

男は車に身を隠しながら、黒瀬を狙うジュアヴォオを倒す。黒瀬も走ってそこに身を隠した。

「助かったよ」

「お前はいつも無茶をするな」

男は笑いながら黒瀬の肩を叩く。黒瀬の窮地を救ったのは、黒瀬の友人であり大切な仲間のパーカー・ルチアーニと彼の部隊だった。

「なんでパーカーがここに？」

「おいおい、俺は欧州本部の人間だぞ。イドニアでの作戦に参加するのは当たり前のことだろ」

「そうだったな」

パーカー・ルチアーニは、BSAAが今のように国連直属の組織になる前、民間組織だった時から所属している古株のベテランだ。その優秀さから一部隊の隊長を任せられている。

「この前はクレアやありますが世話になったそうだな。礼を言うよ」

「トトーガ島での事件か……あの時は酷い目にあった。まだ傷も完全に癒えてないんだぞ」

パーカーは苦笑いで答えた。

『パーカー隊長！ 指示を！』

インカムに彼の部下から通信が入る。今もジュアヴォの掃討が続いているが、巨大B

O Wのオグロマンはただひたすら暴れ続けていた。

隊員たちの銃でもオグロマンにとつて豆鉄砲に過ぎない。あれを倒すには更に強力な武器が必要だ。

「巨大B O Wの相手は俺とリヨウです！ チームはジュアヴォの殲滅を続けろ！」
『了解！』

パーカーの部隊は相当精鋭揃いのようで、ジュアヴォを素早く倒していく。

「おいおいパーカー、あのデカブツを倒す手段があるのか？」

「ふつ、俺の背中にあるものが見えないのか？」

パーカーは黒瀬に見せつけるかように後ろを向いて、背負っている武器を親指で指す。それは対戦車兵器R P Gロケットランチャーだった。

「なんでそんな都合の良い武器を持っているんだ？」

「……お前、ここに来る途中戦車を倒しただろ」

パーカーはジト目で黒瀬を睨む。黒瀬はパーカーが何を言いたいのか気付いた。

「もしかして、あの戦車を倒すために……？」

「そうだ！ こっちには戦車を倒す武器がなかったから、一旦撤退して『こいつ』を取り行つてたのに……戻つてみたら既に無力化されてやがる！」

パーカーは怒りで、黒瀬に唾がかかる勢いで声を荒げた。黒瀬は「まあまあ」と落ち

着かせようとするが、収まることはなく、更に怒りがヒートアップしていく。

「もう少し組織の一員として自覚を持つて欲しいものだ。オリジナル・イレブンは自分勝手が多過ぎる」

まるでオリジナル・イレブンの代表として怒られているかのようだった。確かにパーカーはBSAAに所属して以来、黒瀬と同じオリジナル・イレブンであるクリスやジルにも振り回されてばかりだ。

「ごめんよ、パーカー。でも結果オーライじゃないか。それであいつを倒せるんなら」
「……反省してないな」

パーカーもこれ以上黒瀬を怒る気になれなかった。戦車を倒す作戦を無駄にされたとはいえ、黒瀬の言う通り被害もなく、ここまで来れた上に、デカブツを倒せる武器まである。

「反省はしてるよ。だから俺が引きつける。パーカーはそいつで奴の頭を吹っ飛ばしてくれ」

「待て、リョウ！」

黒瀬はパーカーの静止を聞かず、刀を抜いてオグロマンへ駆け出す。

「……まったくあいつは」

パーカーはやっぱり自分勝手な黒瀬に呆れたように頭を搔いた。

『隊長、後ろー!』

部下から通信が入る。

パーカーは後ろから忍び寄ってきていたジュアヴォを蹴り倒し、手斧で頭を潰した。

「ありがとう。お前らはそのままジュアヴォの掃討を続ける」

背負っているロケットランチャーを肩に担ぐ。

黒瀬は軽い身のこなしでオグロマンの攻撃を躲しながら、刀で脚を切り付けていた。だが、あの巨体には大したダメージはなく、やはり倒すにはロケットランチャーが必要だろう。

「リヨウ、そいつの顔をこっちに向けてくれ!」

「オーケー!」

黒瀬はオグロマンの気を引き、パーカーの方へ走る。オグロマンも釣られてズシンズシンと地響きを鳴らしながら、黒瀬を追いかける。

オグロマンの顔がパーカーの方を向いた。パーカーは奴の顔面に狙いを定める。

「吹き飛ばせ!」

RPGの引き金を引くと同時に後方爆風が起きて弾頭が発射される。そのままオグロマンの顔面に直撃し、爆発した。

「やったか!?!」

パーカーは用無しになった砲身を捨てる。倒せたとパーカーは安堵していた。

しかし、オグロマンは膝をつき、建物へと寄り掛かるだけで倒せてはいなかった。

「マジかよ……」

ロケットランチャーを使ってもなお倒せないオグロマンに、パーカーと彼の部下たちの頭に撤退の文字が過ぎる。だが、黒瀬はまだ諦めていなかった。

「まだだ！」

黒瀬は膝をついているオグロマンの背中に身軽に飛び移る。

狙うは背中から飛び出ている脈打つ臓器。これがデカブツの心臓のような役割を果たしているのだろうか。

黒瀬はその周りに生えている棘のようなものを目一杯の力で引き抜き、生命器官に突き刺した。

オグロマンは雄叫びを上げながら一瞬立ち上がった。黒瀬はそのタイミングで飛び降り、オグロマンの動きを見る。

再び膝について四つん這いになり、ドロドロと蒸気を上げながら溶け始めた。

「やったな、リョウ！」

「ああ！」

パーカーと黒瀬は互いの腕をクロスさせて喜び合う。

「お前はいつも無茶をするな」

「それはお互い様だろ？」

こうして、犠牲者を出すことなく周りのジュアヴォも掃討し、黒瀬の目的地である市庁舎へ向かう。

市庁舎の前に辿り着いた一同。しかし、そこにはクリスマスたちアルファチームもジェイク、シエリーの姿もなかった。

黒瀬が到着する前にジェイクとシエリーはクリスマスの案内の下、ヘリに乗って既に出発したようでクリスマス率いるアルファチームが市庁舎に突入していると、H Qから連絡が入った。

「分かった。これから俺たちもチームを率いて、市庁舎へ突入する。それでいいな、リョウ？」

「ああ」

黒瀬は静かに頷いた。シエリーと最後に話せなかったのは残念だが、今は任務に集中するしかない。

『現在アルファチームとの連絡が途絶している。中で新型のBOWも確認されている。気をつけてかかれ』

HQはそう言って連絡を切った。

黒瀬とパーカーは顔を見合わせる。

アルファチームはクリスをはじめ、コータと負けず劣らずの狙撃手ピアーズ・ニヴァンスなど、BSAAの中でも一際優秀な人材が揃っている。そんな彼らと連絡が取れないということは、中で何かあったのは明白だ。だが、クリスのことだ。その新型BOWにやられたということはないだろうが、気を引き締めてからなくてはならない。

「全員集合！ 準備が出来次第、市庁舎に突入し、アルファチームの搜索とBOWの殲滅を開始する！」

チームが集まり、突入前に各自武器の確認をする。

「新型BOWか……せめて何か特徴や特性を教えてくださいても良いものの……」

パーカーはふとHQに愚痴を漏らす。黒瀬も同感だった。

戦う隊員の命が掛かっているのに、作戦本部は必要な情報を与えずに作戦の遂行をしると言ってくる。隊員がどれだけの犠牲を払おうが、最終的に作戦が成功すればいいと考えているのだろう。

今のこの時代、バイオテロは世界中で起こっている。テロの被害者や犠牲者が多ければ多いほど、この狂った世界をどうにかしようとBSAAに志願する者は多い。どれだけ隊員が死んでも代わりの人間はいる。BSAAの上層部はそういう非情な考えの奴

ばっかりだ。

「オリジナルイレブンさんよ、どうにかできないのか？」

「どうにかしたいのは俺も同じだ。でも、組織が大きくなり過ぎたせいで俺個人の言葉じゃどうにも出来ない。立場的にもHQの方が上だしな」

「そりゃ残念だ」

パーカーは本当に残念そうにため息をついた。彼も思うところがあるのだろう。彼が昔所属していた組織『FBC』に体制が似てきている。人が増えた弊害だろう。

「そういえば知ってるか、リヨウ。カリフォルニアに出来たB S A Aの新しい研究所の話」

パーカーは突拍子もなく、話す。

「そういう噂があるのは知ってるよ」

そう……噂だけだ。カリフォルニア州に新設された研究所は、詳しい場所や何を研究しているのかわからない。

「元アンブレラの研究員が雇われているとか、人間に忠実なBOWを造る実験をしているっていう噂だけ」

「ただの噂をだろ？ それが本当だったら俺がB S A Aを潰してやるよ」

昔B S A AがF B Cをそうしたように、B S A Aが兵器開発を行っている噂が事実な

らば、断罪するのが正しいだろう。

「俺も信じたくはないがな。もう一つ噂があつてそこに配備されている隊員は——」

ダダダダダダアン！ と市庁舎の隣にある倉庫から銃声が轟き、会話は遮断される。

「隊長！」

「分かつている！ お前から休憩は終わりだ！」

一氣に場に一緊張感が走る。

倉庫から出てきたのは氣絶したクリスを引き摺るピアーズ・ニヴァンスと、強靱な外皮で全身を覆うBOW——『ナパドゥ』だった。

「ピアーズ！」

「リヨウ！ それにパーカーさんも！」

「隊員散開！ ピアーズを援護しろ！」

パーカーも隊員もナパドゥに銃を放つが、その硬い外皮に全て受け止められ、通用しない。そしてナパドゥが巨大な腕を振り上げる。

ピアーズもなんとか抵抗しようとマシンピストルを連射するも——

「クソ、弾が！」

銃が弾切れし、反抗する手段がなくなる。ナパドゥの腕が今にもピアーズの頭に振り

かかろうとしていた。

絶体絶命か、ピアーズは頭を守るように手を前に突き出し、目を瞑る。だが、彼に拳が振り下ろされることはなかった。

ピアーズは恐る恐る目を開けると、拳を刀で受け止めている黒瀬の姿があった。

「ピアーズ、無事か！ クリスは生きているんだろぅな!？」

「え、ええ！ ですが、他の隊員は全員そいつに変えられました……!」

「なに!？」

目の前にいるBOWがアルファチームの隊員だという事実を簡単には受け止めきれない。顔も身体も完全に化け物になっており、人間だった頃の面影は全くない。だが、ピアーズが言うのだから本当なのだろう。

「クソつたれ!」

悪態をつきながらも、黒瀬は刀をナパドゥに向ける。

こうなってしまう以上、黒瀬たちに来れることは、BOWとなってしまう彼等であの世に送ってやる事だ。

「ピアーズ、クリスを他の隊員に預けろ！ お前の武器が必要だ!」

「はい!」

黒瀬はナパドゥを斬りつけるも、やはり通用しない。こいつを倒すにはショットガン

か、ピアーズの対物ライフルがいる。

部隊の衛生兵にクリスを預けたピアーズはライフルをナパドゥに向ける。

「……すまない」

化け物に変えられた仲間の顔が浮かぶ。それでもこうする他ない。

放たれた十二・七ミリ弾が外皮を砕き、皮下組織が露わになる。黒瀬はその頭にナイ

フを突き刺した。

「俺が殻を砕きます！　そいつに一斉射撃をお願いします！」

ピアーズは反動が大きいその銃を一発も外さずに次々と外皮を砕いていく。そして、他の隊員たちは集中砲火で一体一体確実に倒していった。

頭に傷を負い、目が覚めないクリスはヘリで運ばれていく。ピアーズに聞くと、変異した隊員を撃つことが出来ず、何度も殴られて気を失ってしまったらしい。

黒瀬は膝をつき、化け物にされた隊員たちの死体を見ながら、苛立ちをぶつけるように地面を殴る。

「いったい誰がこんなことを……」

焦燥感に苛ませる黒瀬にピアーズが近づくと。

「エイダ……エイダ・ウオンと名乗る女に……仲間は……フィンは……！」

ピアーズが崩れるように膝をつく。彼の目は少し潤んでいた。

「エイダ……ウオン……？」

黒瀬は知っているその名前に驚きを隠せなかった。